

慈恩公国召喚

文月蛇

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

開戦前夜の宇宙世紀0079一月一日。突如として地球圏との通信が途絶える。そして、地球そのものが観測不可能となった。ジオン公国を含め、宇宙植民地政府は混乱の極みに達していたが、気づいたときには地球よりも巨大な惑星が存在していた……。

人気小説「日本国召喚」をジオン公国に置き換えた形で書いてみました。殆どチートです。悪の独裁者ギレンの元、非人道的攻撃はあり(……マセン)

※国の魔改造・捏造設定を非常に多く含んでいます

※作者は駄文・表現のミス等多く含みます。修正中ですので大目に見ていただければと思います

目次

第0章 ジオン独立戦争

第零話 開戦前夜【修正済】 | 1

第一話 ルウム会戦【修正済】 | 13

第二話 戦後【修正済】 | 33

第1章 ロデニウス大陸統一戦争

第三話 接触【修正済】 | 42

第四話 戦の足音【修正済】 | 48

第五話 遙か彼方の空【修正済】 | 54

第六話 開戦【修正済】 | 60

第七話 ギム後退戦【修正済】 | 69

第八話 ロデニウス沖海戦【修正済】 | 74

第九話 エジエイの戦い【修正済】 | 91

第十話 終結【修正済】 | 103

第十一話 戦後処理（加筆） | 112

第十二話 反撃の狼煙 | 138

第2章 フィルアデス大陸解放戦争

第十三話 閑話 各々の憂鬱 | 182

第十四話 怒れる皇国 | 214

第十五話 フェン軍祭事変 | 248

第十六話 続・フェン軍祭事変 | 266

第十七話 嵐の前の静けさ | 298

第十八話 設定資料（1） | 315

第十九話 ル・ブリアスの太陽 | 330

第二十話 アルタラス王国崩壊 | 359

第二十一話	暗躍する国々	382
第二十二話	アルタラス事変（上）	410
第二十三話	アルタラス事変（下）	434
第二十四話	設定話（という名の補足話）	477
第二十五話	戦争のはじまり	501
第二十六話	エストシラントの屈辱	545
第二十七話	フェン王国上陸戦（1）	557
第二十八話	戦争の狭間で	569
第二十九話	フェン王国上陸戦（2）	590

第0章 ジオン独立戦争 第零話 開戦前夜【修正済】

宇宙世紀0079年一月一日

世界は戦争へと突入しつつあった。

地球連邦政府成立以降、増えすぎた人口を宇宙に移民させることに半世紀。

地球連邦政府とスペースコロニー政府への重税や肥大化した官僚制。多くの鬱憤がたまり、地球人と宇宙人の対立は色濃くなっていた。

地球から最も離れたスペースコロニー・サイド3は「ジオン公国」と名乗り、地球連邦からの独立を宣言。緊張状態が続く中、ジオン公国は総動員体制へ移行し、全面戦争の準備を行っていた。

人類史上凄惨たる戦禍を人類生存圏の殆どに植え付け、憎悪と死を撒き散らすはずだった。

宇宙移民（スペースノイド）と地球人（アースノイド）を対立させたデラーズ・フリート戦役、グリプス戦役、ネオ・ジオン戦争、ラプラスの箱事件、コスモバビロニア建国戦争、ザンスカール戦争など数多くの戦乱によって地球が疲弊。高度化されたテクノロジーによって文明をすべて無に戻す、Vの時代に至る数百年にわたる破壊の時代の幕が開かれるはずだった。

だが、動かないはずだった『歯車』が動き出し、正史を変える。

「総統府に緊急速報！地球圏との連絡途絶！」

「なんでもいいから宇宙へ上げろ！アナログなデータでも構わん！写真に収めるんだ！」

突如として、宣戦布告するはずであった仮想敵国である地球との連絡途絶。アナログな無線からミノフスキー粒子などの妨害下でもあ

疑ったものだが……」

デギンの顔色はよくない。施政者であることへの重責と緊急事態への対処を憂慮しているに違はなく、目の前にいる息子、ギレン・ザビも同じく表情が強張っていた。

スペースコロニー群、サイド3国家「ジオン公国」の指導者であるギレンも話を聞いたとき、3か月先のエイプリルフルのネタか、管制センターの役員が酔って誤報をぶちかましたのではと疑ったほどである。IQが非常に高いギレンでさえも、その報告を聞いてどう処断してやろうかと考えあぐねていた所だったが、その他の民間通信社や連絡船の救難信号、連邦軍の不可解な軍事暗号を入手したことで状況が一変する。地球が目の前から消え、見たことのない惑星がその場所にあつたのだから驚きであつた。加えて、微弱ながら地震を検知し、何らかの磁気嵐もしくは次元の裂け目が出来、地球が飲み込まれたといったオカルトの類までが真剣に検討された。

だが、その状況を好機とみている男がいた。彼（ギレン）である。すぐさま、予定されていた予備役総動員令を発令し、戦闘準備態勢に移行。地球圏よりのサイドへ布告と同時に核攻撃を仕掛けようとしていた部隊を準備させた。サイド3の他にも、サイド1から7まで存在を確認でき、グラナダやフォン・ブラウンなどの月面都市のある月以外にも、もうひとつ衛星が存在した。50億人近くが中央政府を失い、半ば狂乱状態となっていた。非現実的な事実に対し、暴動が多発。連邦軍が駐屯していないコロニーにおいては無政府状態が続いていた。各サイドは非常事態宣言を布告し、多くの警察署では暴徒の鎮圧のため、実弾が使用されている。

サイド5のルウムは小康状態が保たれているが、外出禁止令が出され、重火器を付けた装甲車が市街地を練り歩いている。もはや戦時下の反政府ゲリラ狩りの様相を呈していた。一方、サイド3は総動員令を発令しているし、十年前から軍事教育がハイスクールまで行き届いている。下手な暴動やデモは滅多に起こらなかった。

「父上、今こそ行動の時でしょう。この事態を放置すれば、あのレベル

が何らかの形で動き出すはず」

連邦は愚鈍な組織であり、頭さえ落せば容易く死ぬ。……とジオン政府首脳部の大半は思っているが、民主主義の利点は頭の替えが聞くことである。ジオン公国など専制君主、独裁政権はトップを失うと屋台骨を折ったように、勝手に崩壊していく。

連邦の存在は愚鈍な腐敗の象徴としているが、ギレンからしてみれば度々頭をすげ替える多頭獣に近い。日本神話に例えれば、頭を何度も斬っても再生するヤマタノオロチに代表するような神獣の如き巨大な生物だろう。連邦政府首脳を壊滅させても、何処かの議員か内閣の人間、代理の大臣や国家公務員の高官が代理の職を担う。

だが、首都そのものと母なる星を失った地球連邦軍は一気に頭を奪われ、行動不能に陥っていた。ただ一つ残っているのは、レビル將軍一人だろう。

地球連邦宇宙軍総司令官として、サイド5に駐屯する部隊やルナIIを指揮し、地球連邦の中でも高潔な軍人の一人である。軍中枢のジャブローに籠る政府首脳や軍高官とは違い、戦場に出向く人間。それは暁の蜂起事件など、連邦とムンゾ自治共和国時代から付き合いがある。公王デギンからも一目置かれている存在だ。

彼であれば、他のサイド自治政府をまとめ上げて、反ジオン連合政府を作りかねない。そうでなくとも、彼主導の連合組織を作りかねず、その下地がそこにはあった。もとより、地球連邦宇宙軍はレビル寄りが多い。既に宇宙連邦の艦隊へは警戒態勢を敷いている。その数はジオンの艦隊決戦戦力以上の戦力であった。

「既に準備は整っています。あとは……公王次第です」

父ではなく、公王と呼ぶ。

手には宣戦布告文書の書式と総動員法の本格的な成立とギレンへの全権委任法だった。公国議会はあるが、ザビ家の傀儡であり、全権委任法は自身への権力集中するための、布石に過ぎない。既に彼の頭にはブリティッシュ作戦を含む地球への攻撃を除いた作戦計画が構築されていた。他のサイドへの核攻撃や生物化学兵器による粛清行

為もその作戦計画に含まれている。既に配下の部隊には指示を下しており、あとは公王の署名があれば遂行可能である。

「ギレンよ」

「はい」

「わしは戦争には賛成したが、虐殺行為に手を出せとは言っておらん」
その時、ギレンの表情は固まる。謀略を司り、歴史上の指導者よりも優れた知能を持っていると彼は自覚していた。それだけに父のセリフは思考を停止させるのに十分であった。

「知っておるぞ、ギレン。貴様はワシが見ていぬうちに何やら物を準備していることは」

ギレンは秀才である。故に致命的な失敗を冒す。それは人間故にある失敗。

肉親への狭窄的視野

もとい肉親が故に気づかない部分。性格的な、子を思う父あつての思いだろう。そして、ギレンの心のどこかで父を思つてのことだったのか。政敵ではあつたにしろ、父である手前。秀でた頭脳は父であるデギンの存在を過小評価していたのかもしれない。

「お前の政治的な野心、そして優生思想は困難な時代であつてこそ。だがな、わしは何時、お前に歴史の殺戮者となれと言つた？」

「時に殺戮も必要でしよう？」

「その殺戮に意味はあるのか？」

「その問いかけすら無意味でしよう？ 平和は剣によつてのみ守られるのですから」

真実を織り交ぜながらも、民衆に嘘と偽りを並べ、悪逆のかぎりを見くした旧世紀の指導者の格言を入れるギレン。平和を求める者はペンと剣を持たねばならず、いつの時代もそれは求められた。宇宙世紀になつても然り。

だが、敵対するほぼ全てを殺戮したとて何が残ろうか。国力30倍の敵が居なくなつたとて、植民地政府には未だに地球連邦のシンパは大勢いる。そのすべてを核等の大量破壊兵器で殺戮したとて、のちの子孫にどう言い訳できるのだろうか。

如何に情報統制をしたとて何れは漏れる。殺戮の証であるコロニーの残骸を核で粉々にしたとしても、そのすべてを葬ることは不可能だ。

―息子ながら恐ろしい

一抹の不安が現実となり、それを抑止できない自分が憎い。デギンは老齢で衰え、ダイクンの元で集った時の力はもうなかった。自身頃にはなかった残酷な性質が、彼の力を募らせた。今ではほぼ全てを手中に収め、かつての民主主義の悪夢である指導者の面影を残しつつ、更に酷い殺戮を行おうとする。

最早、老人に止める術はない。

「〃真実の追求は、誰かが以前に信じていた全ての〃真実〃の疑いから始まる。〃兄上は全てが終わってからどうするおつもりです?」

「ニーチェか?最後には気が狂つた思想家だろう。キシリアよ」

その会話を聞いていたかのように表れたのは妹である。内務省に影響力をもち、ギレンの次に権力を保有するキシリア・ザビ。彼女もギレンにも劣らぬ秀でた頭脳の持ち主だった。ニーチェを引用する彼女のセリフに対して反論するものの、ため息をつくキシリアだった。

「かつての大罪人の汚名をザビ家に塗ることはあつてはならぬ行為。かつてのユダヤ人虐殺行為のように、コロニーへのガス攻撃……コロニーをジャブローに落とすなど」

キシリアでさえ、コロニーを使用した大型質量弾は懐疑的だった。

地球連邦軍司令部ジャブローは熱核兵器の攻撃を想定して設計さ

れた巨大基地の一つである。岩盤の下に構築された巨大地下要塞はICBMの直撃でさえも耐えられ、複数の着弾でさえも堪えられる。巨大なコロニーによる攻撃は従来の核兵器よりも強力なものとなるが、その分環境破壊が凄まじいこととなる。

もし、コロニーによる巨大質量弾による攻撃を行えばどうなるか。地球環境は激変し、大気の激変から異常気象と共に様々な災害が大地を襲うだろう。既に収束しているウイルスや病原体の蔓延、竜巻や台風などの気象にも関わってくる。だが、スペースノイドであるザビ家にとってそれは直接的な問題ではなかった。

最もなものとして、独立を勝ち得る過程と求める物が違う。ギレンは自身の地位と権力、そして選民思想の政策を行うため、自身の支持母体を満足させるにたる政策を行わなくてはならない。独立のための戦争であり、選民思想のために地球や地球連邦を支持する者は粛清してしかるべきなのだ。

だが、ザビ家は違う。かねてより政財界に身を投じればわかることであつたが、コロニーの中で工業立国として栄えたサイド3が最も恐れたのは経済が落ち行くことである。地球連邦による関税強化法案は何事も避けていきたい問題であり、独立と関税の撤廃などはジオン公国にとって悲願である。スペースノイドによる独立戦争は、ザビ家や上流階級にとって『経済戦争』であり、独立戦争を求める民衆の意思と上流階級の思惑が合致したからこそその戦争だった。だが、ギレンは違う。

ザビ家の方針から外れ、選民思想を唱える彼の野望は相反していたのだ。

人殺しを厭わないキシリアであっても、選民のための大量虐殺は望んでいない。寧ろ、顧客である地球連邦や他のコロニーへの輸出など、需要を殺戮によって無にしてしまえば、人類そのものが危機に陥る。

「兄上は大義をお忘れか？」

「大義など民衆を導く方便だ」

「その方便を掲げるのが政治家でしょう。国益ためならまだしも、人を選別するために虐殺をするので?……兄上も墜ちましたね」

「何?」

ギレンは自身の名誉を傷つけたのか、不機嫌な顔をした。しかし、その表情は再び固まる。キシリアの手にはジオン公国公王府の紋章ではなく、総帥府発行の『ブリティッシュ作戦』と記された作戦計画書。

そこにはスペースコロニー「アイランド・イフィッシュ」への攻撃と占領、そして核パルスエンジンを用いた攻撃などを記したものである。

だが、そこにはG3ガスによる虐殺には一切触れておらず、キシリアの持っていたもう一つの方には記載がされていた。「最高機密」の印が押された機密文書の中でも最高機密文書であることは間違いな

い。キシリアはギレンに対して一瞬不敵な笑みを浮かべていた。ギレンは彼女に一足先を越されたと苦虫をかみ殺したような表情を浮かべる。「キシリア機関」という私設情報機関を有する彼女はあらゆるコネと情報を掴んでいた。ギレンにも国直属の情報機関を私有化していたが、キシリアが一手先を制していたのだ。キシリアの表情は、ギレンの行動に対しての怒りは籠っていた。すなわち、ブリティッシュ作戦を公王に教えたことも彼女の策略に違いなかった。宇宙攻撃軍を有する次男ドズル・ザビは軍人であり、国益のためなら手段を択ばぬところがあるため、ギレンが音頭を取れば渋々承諾していた。ガルマ・ザビの方は全くのノーマークであるが、家族で唯一汚れていない人間である。

キシリアにも家族という思いが強かった故の失敗だったのか。それとも、自身の知能が彼女を下回ったのか彼には分らなかった。キシリアに確かめずとも、暗黙の了解を得てブリティッシュ作戦を進めていたのである。

「ギレンよ、戦争するなどは言わん。だが、情報操作は何よりも得意だろう?」

公王の言葉は息子を叱るそれだった。既に40を越え、半世紀を生きようとするギレンだったが、息子として叱られるのは何時ぶりだっただろうか。かつてジオン・ダイクンへの援助に違法な形で援助をし、きつく激怒されてからか。それともダイクン暗殺への思惑を父に相談した時以来だったか。

―父に半ば隠居させるつもりで公王に即位させたのに叱られるとは……まだまだか

「分かりました、攻撃内容に対しては修正します」

「……………うむ……………」

「……………」

デギンは粘り強い性格のギレンが素直に非を認めたことに驚き、キシリアもまるで呆気にとられたような表情を一瞬見せる。公王府では顔を隠さないため、政治家として唯一の欠点であった「表情豊か」な所が垣間見え、ギレンは心なしか笑みを浮かべていた。

「地球の悪評とこれまで明るみにならなかつた経済的失策。マスコミにリークさせ、民衆の支持を集めさせないようにしましょう。さすれば、レビルも臨時政府樹立には難色も示すでしょう」

―既に手の者がいますから

と内通者をほのめかすように言い、キシリアと共に謁見の間を後にする。謁見の間を過ぎ、半ば行政機能がパンクしそうな仕事場に向かう二人であったが、行く道は同じであった。

「キシリアよ、よくもやってくれたな」

「兄上こそ親衛隊を過信しすぎでは?」

政治的にも、家族関係共にあまり良くない。ドズルにおいてギレンは同性であるために、それなりに仲はあるが、ドズルとキシリアも軍を二分させる程に軍略の方針が仲違いしている。とはいえ、謁見の間の廊下を歩く二人以上に仲が悪いというわけではない。唯一、殺して

しまう危うさをもっているのはこの二人である。

自身の利に敵わなければ、容赦なく暗殺を目論んでもおかしくない。冷酷なギレンであればそうするであろうし、政治の舞台に立ち、権謀術数の世界に入って同じく冷徹な思考を持ったキシリアもギレンが相手なら容赦はすまい。

近くの衛兵はひやひやつつ、その光景を見ていたが、ギレンの表情が和らぐと同時に、人間らしい表情が現れた。

「ふん、昔と比べたら随分と政治というものが分ってきたようだな、キシリア。それとも子飼いの情報機関が優秀だったのか……羨ましい限りだ」

「随分と機嫌がよろしいようで」

「お前こそ、その表情を表に出せば男も寄ってこよう」

「……なんですって?」

腰にはない小型レーザーガンは公王府の警備室に預けられていて、ここで暗殺されることはない。だが、廊下の壁に飾られている儀礼用のサーベルを手に取り斬りつけそうな怒気が感じられたのである。

「お前は私と違って表情が豊かだからな、権力に物を言わせて愛人を囲わなくても男が寄ってくるだろう?」

「……」冗談を、もう私の歳では行き遅れ……」

先程とは打って変わって落ち込むそぶりを見せるキシリアであり、マスクの上からでもその表情が読み取れる。ギレンはその思考力を使わなくても、勝気な男勝りなところがなければ、ザビ家という家柄さえなければ嫁の貰い手がいただろうにと溜息をついてしまう。

「兄上、体調でも悪いので?」

何時もなら独裁者の鉄仮面を被るギレンであるが、キシリアの嫁ぎ先を心配するなど、一体何があつたのかと心配するほど、人間味のある彼に驚いていた。

その言葉に足を止め、苦笑する。

「そうだな、国を守るため、家や自分を守るために政治家になった。民衆が求め、指導者として何れ来る戦争の準備をしながらな。だが、地球連邦はもういない。いるのは腰抜けの宇宙軍とレビル一人……敗軍の指導者となり、ニュルンベルクやトーキョー裁判で絞首刑台の階段を上らずに済むのだ。体調が悪いはずないだろう」

建国当初より、ムンゾからジオン共和国、ジオン公国になるまで政治の中心にいたザビ家は、ギレンが生まれてからというものの政争に身を投じてきた。いずれ、アースノイドとスペースノイドの対立は訪れ、独立戦争の名の元に指導者になることを予測していたのだろう。ギレンが独裁者として戦わずとも、いつの日にか宇宙移民の解放者と称して、情報欺瞞を掲げていく指導者が現れ、旧体制を非難して、憎悪が元で地球人を粛清する者が現れるだろう。

既に移民という行為によってそうした土壌は整いつつあった。あとはどうするのか？今ある資産を抱えてどこへ逃げる？逃げるころなどどこにもない。

ならばいつその事、自身が指導者となり、自身の思い描く世界を作ろう。

悪逆非道な指導者とは多くの場合、殆どが嘘偽りの人物像がある。たとえば、その人物が存在していても、様々な情報操作が行われ、都合のいいように作り変えられてしまう。歴史上の最悪の指導者と呼ばれるヒトラー以上に組織的殺戮を行ったのはソ連、後の歴史に残る物として中国の文化大革命などがある。人民救済を唱えるソ連の父レーニンにおいても、初めての国家的粛清行為を行った人物でもあった。

だが、そのほとんどが捻じ曲げられ伝えられている。なぜ、政治指導者となったのかなど、多くは純粹に国を思う心だったのか、それとも民を思う心だったのか。どちらにせよ、政争や戦争、その後の歴史次第で時の指導者は悪逆非道な独裁者か、善政を敷いた政治家として後世伝えられていく。

ギレン・ザビも正史であれば、冷酷であり、残虐非道な独裁者に映ることに違いない。だが、如何なる優れた頭脳を持つ彼も一人の人間

なのだ。

「……」

「なんだ、キシリア。急がぬと送れるぞ」

黙りこくるキシリアへせかそうとするギレン。二人とも今後の会議や部隊を動かすためにひつきりなしに動かねばならない。想像以上のことが起きたために、徹夜も覚悟の上で仕事に当らねばならないだろう。

「……久々に兄上の鉄仮面が剥がれたもので……」

「鉄仮面か……かぶって演説でもしてみるか」

—さすがにキャラ被るのでは？

政治指導者を目の前にして言えない衛兵だった。

そして、ジオン公国は残存する地球連邦軍に対して攻撃を加えていくことになるとは、この時ジオン指導部でさえ、地球連邦残存勢力でさえ知る由もなく。

また、その惑星に住む人々には、星が点滅し、流星や隕石のように宇宙戦艦が墜落してくることなど夢にも思わなかった。

第一話 ルウム会戦【修正済】

宇宙世紀 0079 一月三日 0900時 サイド5 ルウム
第15バンチ「ニューヨコスカ」

地球連邦宇宙軍E・F・S・F.(Earth Federation)の総司令部はサイド5のルウムに設置された。新規に建造された第15バンチとして建設され、半分近くが軍用として整備されたコロニー「ニューヨコスカ」はコロニードックの8割近くが軍艦を占め、他のコロニーと比べて防衛能力が高い。コロニー周辺では数隻のサラミス級巡洋艦数隻とマゼラン級戦艦一隻を含む巡視艦隊がパトロールし、常に数個戦隊が巡回する。

艦隊ごとの距離は非常に大きいですが、濃密な防衛戦が構築されている。幾重にも巡らされた監視ドローンや赤外線カメラなど監視機器がコロニーの周囲に設置され、不審飛行物体があれば直ぐに戦闘機がスクランブル発進して確認する。

宇宙世紀に入り、宇宙での戦闘は専らミサイルによる撃ち合いなどのアウトレンジ攻撃かメガ粒子砲による大艦巨砲主義的なもの。多くが電子戦初期に見られたイージスシステムやリンク兵器システムを接続した統合システムによって運用されている。すなわち、第二次世界大戦のような人が人を撃つ時代ではなく、完全なコンピュータ制御によって全てが迎撃され、巡航ミサイルを放ち、光学照準システムと軍艦全ての通信システムと連動して攻撃をする。

艦隊が一つの生き物のように動き、一斉にミサイルやメガ粒子を放つのは圧巻であった。人が狙うことはなく、レーダー観測による得られた情報をもとにボタンを押すだけである。すべてがコンピューターシステムによって簡素化され、前時代的戦闘を想定したものは皆無に近い。「妨害電波」「電子戦」などは総じて、初期の誘導システムに頼った兵器類を混乱させるためにある。地球連邦軍の兵器はほぼ

すべてがそうした電子戦にはほとんど完全な防御態勢にあり、幾らかジオンが先んじた技術を使ったとしても、圧倒的な戦力格差は変えられず、地球そのものが無くなったとしても、残存戦力はジオンのそれを上回っていた。巨神兵を連れてこない限り、不可能な話なのだ。

「……脆いものだな」

「はい？」

ニューヨコスカの司令部区画にある自身の執務室でレビル中将は、来客したルウム植民地政府の高官と話して、「怠惰」を滲ませる自軍の対応に本音を漏らしてしまった。

U・C・0078年まではジオンとの開戦を想定して、連邦政府は防衛準備態勢「デフコン4」を発令し、連邦軍全軍が準備態勢に入っていたが、多くは呑気なものであった。だが、地球の完全喪失によってコロニー全土が混乱。一部のコロニーでは無政府状態に陥つていくところすらあり、それを増長させたのが、そのコロニーに駐屯する連邦軍の防衛隊だったのだから、その報告を聞いたレビルは怒りを覚えていた。

ジオンは総力戦体制を敷いているため、他のサイド自治政府程混乱している様子は見られない。もし、戦争をするのなら、相手が混乱するその時であるため、レビルが手を出せる範囲で部隊をデフコン3に近い警戒態勢を引くよう命令を下したが、「ジャブロー総司令部の命令はあったのか？」と真顔で聞かれた日には、本気でエアロツクからソイツを葬るべきか悩む知将レビルの姿があつたほどだ。宇宙軍においても腐敗や汚職があり、ジャブローのモグラ將軍よりはましと唱える位、レビルはここ最近胃薬が絶えない。

如何に武闘派將軍、知将、エリート軍人と呼ばれる彼であっても、政治家まがいの仕事をしてコロニー政府をまとめ上げ、悲鳴を上げる植民地政府へ援軍を送るために仕事をこなさなければならぬ。異常事態ともいえる地球の喪失にレビルは頭を抱えるほかない。もし、ジ

オンだけが消えてくれれば尚よかったか。

しかし、彼の望みは叶うことはなかった。ジャブローに巣くう腐敗したモグラ共を見ることがないということとはあり難かったが、急に地球が消え去り、臨時連邦政府の暫定指導者として政治家のような振る舞いをしなければならぬ。運悪く宇宙に来ていた地球連邦議員からは何度もコロニー自治政府主体の連邦政府として、セツルメント国家議会の設立をレビル主体で行うよう、混乱の最中打診がきている。

「脆いと申したのは……地球を失った我々とコロニーを失った地球。果たしてどちらが混乱しているのでしょうか」

「なるほど、そういうことですか」

もしジオンがこの異常事態に乗じて攻撃をすることがあれば、連邦軍の戦備体制など脆く、艦隊決戦前までにはジオンの先制攻撃などで多くがやられるかもしれない。コロニー自治政府など、地球連邦がいなければ成り立たない。唯一成り立つのはジオンや企業体が強い月面都市ぐらいだろう。一方、取り残された地球も非常に不味い状況となる。食料自給率の低さやコロニー経済に深く食い込む状況。コロニーという巨大経済がいきなり消えれば、嘗ての世界恐慌に匹敵。もしかしたらそれ以上の経済破綻が起こりえる。もしかすると、ヨーロッパやその他の人口密集地で多くの餓死者が出る可能性もある。レビルは地球連邦軍将軍としてオブラートに包むか、本音を言うべきか迷う。口から出たのははぐらかすという選択肢だった。

「イヌカイ首相、そちらのコロニーはどうですか？暴動が発生しててんてこ舞いでは？」

「連邦よりの人間はお通夜モードです。一方ジオン独立を叫ぶやつらは夜を徹してお祭り騒ぎ。その双方がぶつかって喧嘩、今のところ小康状態が続いています。」

サイド5、ルウムの自治政府首相のイヌカイ氏は国内のジオン派と

連邦派の政治家や防衛隊将校を纏め、地球連邦側とジオン双方に便宜を図っている。レビルとて、その政治的決断は理解している。地球圏の喪失によって、連邦軍とジオンの戦力差はかなり狭まっている。戦力そのものはジオンの三倍以上ある。艦隊戦力はジオンに匹敵するが、歩兵やその他の兵站は圧倒的に連邦に軍配が挙がる。それに暴動や政治不安など内憂が存在する。その隙を突かれて敗北した国家は歴史には五万とあり、レビルは慢心しないよう気を配らなければ『窮鼠猫を噛む』という言葉もあるように、敗軍の将として歴史に名が残るかもしれない。

「ジオンの情報部の動きはどうでしょうか？」

「情報操作と報道機関への圧力。ジオンの資本が根強いサイド1は世論が傾きつつあります。ジオンに与する政党が政権を握るものと外務省は睨んでいます。あとはサイド6のラング政権はジオン寄りの論調ですが……あの狸は……」

イヌカイの表情は険しいものとなる。数億の人口を有するコロニー国家は地球連邦の軍事力の庇護下に置かれていることもあつてか、さほど強硬外交は行わない。しかし、工業化と軍事独裁を成立させたジオンを含め、宇宙軍司令部のあるルウムや建設途中のサイド7「ノア」は比較的連邦よりだった。どっちつかずなのが、月軌道上を周回しているサイド1（ザーン）とサイド4（ムーア）であり、政権を奪い取ろうとジオン寄り政党が世論を焚きつけていた。

正史における一年戦争の中立国だったサイド6（リニア）はジオンよりのラング首相率いる政権があり、ジオンの次に工業化を成立させている。ジオンとルウムの次に安定しているのは、ラング政権の政治手腕の賜物と言えよう。ラング首相の狸を思わせるような容貌と化かそうとしてくる巧みな政治手腕にはイヌカイやレビルも手を焼いている。

「ジオンがどう出てくるかでしような。既にルナIIとあの惑星の観測に差し向けた艦隊には、先んじて動いていたジオンの監視を命令しました。あとは……」

「モビルスーツ……ですか？」

イヌカイ首相の険しい顔で話し、神妙な面持ちで頷くレビル。既に新MS兵器である「ザク」と呼ばれる人型兵器の配備が行われ、諜報部の報告ではMSを中心とした部隊編成がなされ、中核戦力として位置付けているという。

だが、宇宙軍やジャブローの將軍たちの間では「ロボットアニメの見過ぎ」「ハリウッド映画のロボット」「カイジユウ映画に出てくるやつ」と苦笑していたと聞く。かつての兵器運用によって大局を左右した、ナチス・ドイツの対戦車戦を想定した戦車。航空機をメインとする空母機動部隊と真珠湾奇襲。過去の兵器運用の革新はいつ出来るか予測はできない。レビルは時代の流れを鑑み、ジオンのMSが兵器として実用段階にあり、ミノフスキー博士の核融合エンジンを用いた兵器は危険であると考えていたのだ。

「亡くなったミノフスキー博士の弟子を現在、MSの開発に充てているが……」

「アナハイムのMS開発部門の開発部長でしたね。今はサイド7に？」

レビルはイヌカイの質問にため息を吐きつつ「すべてお見通しか……」と呟いてしまう。

U.C.0076年からジオンはMS計画を進めていた。そして公国の配備計画を察知した連邦軍も技術革新の傾向から、「RX計画」を開始。アナハイム社は地球連邦設立当初からある軍産複合体企業であり、従来の兵器開発者を抽出し、MS開発計画に充てていた。また、ミノフスキー博士の愛弟子であるアナハイム社開発部主任のテム・レイも出向として技術大尉として任官した。既に、サイド7には

重力・無重力の使用を考えた試験が行われており、既存の技術から数モデルの兵器がロールアウトされていた。だが、MS開発競争に勝ったのはジオンだった。ジオンの研究と政府の行おうとする作戦に狂気を感じたミノフスキー博士は亡命。月面スミス海を渡って連邦に亡命しようとしたが、情報部にそのことが漏れ、月面への政治工作を並行して連邦のMS12機とジオンMS5機が衝突した。

結果は対MS戦闘をも視野に入れたジオンの圧勝であり、連邦のMSである試作型ガンキャノンは大敗。ミノフスキー博士もその戦闘に巻き込まれて死亡した。そのことから連邦の設計思想に問題があると感じ、MS開発計画であるRX計画は大幅に修正され、対MS戦闘を主軸とした計画へと移行した。現在はその試験運用データを元にしたMS製造が先行開発され、スミス海のガンキャノンよりも高性能である陸戦型ジムRGM-78(G)やRX78の余剰パーツ、試作品のスペックに満たないが、使用に耐えるGパーツが存在し、ルナIIやサイド7に多くのガンダムパーツが宛先がなくなってしまったために放置された。

月面での戦闘や連邦が考える新MS構想は既に政界に伝えられ、サイド5のイヌカイの耳にも入っている。それは不正規戦として闇に葬られていても、人の口に戸は立てられぬとあるように、有力者の耳にはしっかりと届くのだ。

「ガンキャノンは納品して地球へ。ただし、宇宙軍では配備できず。宇宙空間の能力は月面とは言え、完膚なきまで叩き潰されたのでね。試作品と余剰部品はルナIIとサイド7に……………」

「既にスミス海の戦闘の詳細がマスコミ各社に報道されている。他にもムンゾ自治時代の鎮圧映像や連邦政府の失策が各コロニーにて取り沙汰されているから、連邦への感情は悪くなる一方だ。しかも、宇宙軍の一部が暴徒化している。悪い夢かと思いましたよ」

「恥ずかしながら、我々も一枚岩ではないので……司令官としては公的に謝罪します」

イヌカイの苦言に謝罪の言葉を述べるが、公式会談ではないため、謝罪の体を為していない。

「ジオンとの戦争は避けられますか？」

「それは要請ですか？彼らも地球が無くなった現在、戦争は彼らにとつても得策ではないでしょう。」

「連邦宇宙軍としてはそうは見えていません。ジオンは今回の一件を独立戦争として定義している。連邦政府が消失したからと言って、振り上げた拳を振り下ろさないとはい限らない。それに軍の観測所によるとジオンの艦隊がサイド1へ向かっている。」

ジオン公国と地球連邦は年末まで必死の交渉を続けていたが、やはり長年搾取されてきたスペースノイドと支配者アースノイドの確執は止められないところまできている。それが、地球が消えたからと言ってすぐに立ち消えになるはずもないのだ。

「救援ほどの程度？」

「既にティアンム中将の艦隊を編成して、サイド1救援へ送り出している。あとはジオンが……」

とレビルが言いかけた瞬間、オフィスが地響きと共に大きく揺れた。

「地震!? いや、ドックか？」

コロニーは遠心力を利用した重力を形成している。しかし、莫大なエネルギーが遠心力を作り出す根幹部分を揺るがせば、人工地震としてコロニーを揺らすのだ。耐震強度など考えていないコロニー建造物の多くは揺さぶられ、大きな被害を受けることだろう。

「レビル司令！緊急電です！ドックに攻撃を受けました！」

「ジオンのMSか？」

サイド1へかなりの艦隊を送っているジオン。そうすれば、ルウム
のレビル艦隊へ攻撃を仕掛けるのは、少数の艦隊とMSによる攻撃しかない。オフィスの液晶スクリーンの映像には青い顔をした将校が

「こちらライトニング3、目標地点まで残り、ローテク光学機器計測で30km。」

（了解、ライトニング3。何か目視で異常があればすぐに伝えてくれ）
「あいよ、了解した！ニューヨーク」

観測偵察機カモノハシに載るリユウ・ホセイ軍曹は操縦桿を握り、アナログな光学機器と情報リンクのない地図で慎重に進んでいく。ノイズの多い無線通信は何時切れてしまうか、偵察機のパイロットであるリユウは不安の色を隠せなかった。ただでさえ、薄くなった防衛線。如何に防衛線を何十に張ろうとも、部隊をいくつかコロニーの暴徒鎮圧に回し、穴だらけの防衛線になっている。重厚な防衛線は過去の話。地球があれば、兵の動揺も幾ばくか抑えられていただろう。だが、なくなつたことで、軍拘留施設は荒れた軍人たちで満員。臨時の拘置施設を設け、宇宙軍艦隊航空隊のリユウも防衛線巡回のために、臨時巡回戦隊の一員として、サラミス級巡洋艦ニューヨークの艦載機パイロットとして巡回任務に就いていた。

「ぐ、軍曹く。これってもしかしてジオンの噂のジャミング兵器つてやつですかね」

「わからんよ、眼鏡！この宙域のデータリンクが切れて、監視所との音信不通。単に磁気の乱れだつたらいいさ。暗礁宙域から来た小惑星ならまだいい」

「幽霊船だったりして……」

「馬鹿いうな！だいたい、こちら辺にいますれば、老朽艦の標的艦だろう。本当なら警戒線に射撃場を作るなんて頭おかしいんだよ、上層部は……」

高々、巡回パトロール艦隊に着ける空母はいらないために、突貫工事でカタパルトデッキを溶接し、武装していない偵察機を艦隊に配備。問題のある宙域に向かわせていた。リユウからしてみれば、敵が来そうな警戒線に標的艦を置く神経が分らないと不満たらたらであり、レーダー観測班から引き抜かれた「眼鏡」の彼もリユウの不満を聞きながら周囲を見る。

「問題の監視所P／B1か……発光シグナルはない……」

偵察機が近づくにつれて明らかになる、その無残な監視施設にリュウとその眼鏡の彼は息を飲む。まるで、何者かが特大の斧でトーチカのような形の監視所を真つ二つに割り、逃げる監視員を執拗にハチの巣にした惨状はどう見ても、敵の破壊工作の一環に違いなかった。

「くそ……もう始まってやがる!!」

リュウは咄嗟の判断から、偵察機カモノハシの発光となる光をすべて止め、機器の液晶画面の光までもシャットアウトし、やや、翼が浮遊する小惑星にぶつかり、歪むがそんなことは気にしない。標的艦の後ろに隠れると、エンジンの出力も最低レベルに設定した。

「わ、嘘！まじかよ」

「ぐ、軍曹！静か……しなくてもいいが、落ち着け。宇宙空間では光を出せばバレるぞ！」

―何にばれるのか？

眼鏡の観測員の彼が言おうとしたとき、真上に緑色の船体が横切っていく。カモノハシの数十倍もしくは数百倍以上になる大きさの物体が真上を通り、発光信号も消し、エンジンを極小にして、ほぼ慣性航行によつて目標へと進路を取っていた。見れば、巡洋艦らしき船の横にはバルーンのような軍艦に偽装したものが見えることから、何をするのかわかりきっていた。

「奴ら、ヨコスカに奇襲攻撃するようだぞ」

「どうするんです？」

「ここまで強力なジャミングだと本隊となんて連絡付かない……何か手は……」

「クソ、この機体では蠅のように叩き落されちまうし……うん……」

たかが偵察機では巡洋艦相手に戦うことは不可能である。先行し

「なんでジオンの戦闘機を発見できなかった！」

「大尉！違います！数分前の巡回している『アルデンヌ』からは人型らしきものがランチャーを発射と報告しています。あれはMSです！」
「どうだっていい！迎撃戦闘機を順次出せ！MSがでくの坊であることを証明しろ！」

13バンチコロニーの戦時司令部。各基地の戦闘の情報を統合し、指揮を行うC I C指揮通信センターはお祭りのように騒がしい。まるで、何処かのオペラ座か映画館のような構造だった。巨大な液晶画面があり、コロニー外縁宙域の配置が表示され、また半分の液晶にはコロニーの損害報告が表示されている。

「レビル中将、入室！」

C I Cに入ったレビルは険しい表情を浮かべていた。周りは緊急事態であるにもかかわらず直立敬礼の状態であったために、怒鳴り声にも近い声を響かせた。

「敬礼はしなくていい!!状況は!!」

「はっ！ジオンのMSが核搭載ミサイルを3発発射し、二発は迎撃システムで撃ち落としました。一発はコロニー外壁を破壊。破損により、大気が流出しています。」

13バンチ、「ニューコスカ」は完全な軍のコロニーであったため、核防護壁は万全であり、破壊されたとは言え、そのためのリカバリ策も昂じてあった。既にコロニーの気象設備にあるバルーンが打ち上がり、亀裂の生じた場所にくっ付くと、破裂した。粘度の高いスライム上のそれが吸い込まれる物と絡まり合い、大気の流出は収まった。僅かながら空気が出ているが、許容範囲内である。

「近くの防空巡洋艦を有する艦隊を側面防御に向かわせろ！敵はミノフスキー粒子で電子機器の殆どをジャミングして、誘導兵器やコンピュータ制御は殆どできない。」

その命令に殆どが目を点にする。

ミノフスキー粒子、電子機器を主とする兵器類がそれによって全て無効化されてしまう。現在のミサイルやメガ粒子砲の照準装置、各艦

隊の兵器リンクシステム、通信機器など殆どがダウンする。核のEMPの方が未だマシともいえるだろう。連邦軍の装備にはある程度核兵器使用によつておこるEMPを想定した装備もあったのだが、今回起きていたのは高濃度のミノフスキー粒子の散布。それによつてほぼすべての電子機器が使用不能に陥っていた。

「これは我々がしたこともない戦いの幕開けだ。ハイテク機器や誘導装置、イージスなど役には立たん！すべて人の手で敵を撃て！」

「ティアンム艦隊を呼び戻しますか？」

「いや、いい！通信兵、コロニー周囲の艦隊に有視界戦闘を開始しろと伝えろ！通信回線は生きているか?!」

「いえ、データリンクシステムやレーダーが殆ど使い物になりません。

映像のノイズも酷く、発光信号ぐらいでしか……」

「構わん、モールズの平文でも発光信号でも、全艦隊に伝えろ！」

混乱の極みにあったCICであったが、レビルの檄によつて正気を取り戻した士官たちは急いで兵器システムの切り替えとベイに係留された軍艦の出航命令を矢継ぎ早に出していく。しかし、コロニー外壁に取り付けられたセンサーがジオンの動きをとらえていた。

「敵戦力は？」

「はっ、敵は三方向から攻撃を集中しております。敵の数はムサイ級が二十数隻ほど確認されています」

「ジオン軍艦艇の4分の1か、首を先に切り落としかかるか」

ジオンは80隻ほどの艦艇をそろえている。しかし、火力で言えば巡洋艦のサラミス級に劣る。所詮、輸送艦を改装した商船と連邦軍兵士は侮っていた。最初は100以上の大艦隊だと思ったが、アナログ式望遠カメラで覗けば、欺瞞用のバルーンを使用したものであることはわかっていた。実際の艦艇数は80以下になるかもしれない。戦場での偽装は古代から行われている戦術の一つである。第二次大戦中のアフリカにおいて、自軍の戦車を多く見せようと、張りぼてや写真を駆使して欺瞞部隊を作り上げていた。ムサイに似たバルーンが

陣形を組んで航行しており、その艦隊モドキはザクの牽引によって艦隊行動を行っていた。

「MSはどれほど展開している?」

「ベイ周辺宙域に不審な人型兵器らしき物体を目視で確認との情報あり。散発的な攻撃が相次いでいます!」

「敵は人型兵器に核を抱えている。これ以上核攻撃をさせてはならん。」

ジオン軍のMSは艦艇の多いドックやベイへ攻撃を集中させており、コロニー内部の部隊を封じ込める作戦に出ているようだった。ティアンム中将率いる艦隊よりヨコスカの有する艦艇の方が規模は少ないが、このコロニーにはレベルを含めた宇宙軍司令部が置かれている。多くの神話や歴史が物語っている。首都や司令部、頭脳さえ壊せば、その機能は停止する。ジオンは残存する連邦を消しに来ただ。

「空母『アカギ』より偵察機の映像が届きます。スクリーンに表示します!」

コロンプス級輸送艦を改造した空母「アカギ」。メガ粒子砲の撃ち合いと巡航ミサイルの撃ち合いと迎撃が宇宙の戦いだった時期において、空母の戦略的立ち位置は低下している。宇宙空間は従来の雷撃や対艦攻撃に用いられることは殆どなくなり、耐放射線や漂流物の防護のために分厚くなった宇宙軍艦を撃破するには火力不足であった。

航空機を運用する空母は表舞台から姿を消し、あるのは輸送艦とユニットを同じくする改装艦か強襲揚陸艦の類に限定されていた。それでも、宇宙軍に空母が存在する理由として、未だに宇宙における戦闘機や攻撃機が存在が重要視されている表れかもしれない。宇宙世紀における地球連邦軍の優位性や宇宙空間での戦闘が行われなかった歴史を踏まえると、すべての状況に対応できるようにと考えるレピルの知将故の判断だったはずだ。CICの巨大スクリーンに映される艦載機から録画され、転送される映像。ミノフスキー粒子によって、ジャミングの影響を受けつつも、比較的距離の短い通信設備を経

た。しかし、ミノフスキー粒子の影響のため、レーダー誘導はおろかミサイルの起爆すらままならないような状態となった。ミサイルは原始的なVT信管に切り替え、目視による有視界戦闘を切り替えたため、CICは旧世紀の第二次大戦中の如く、騒がしいものとなった。「弾着まで3秒!」

「艦橋及び有視界戦闘を行うものは目を覆え!!」

艦橋にいた航海長の号令と共にノーマルスーツを着ていた航海科の彼らは遮蔽シールドを下すか、片手で顔を覆う。その瞬間、強烈な光に包まれ、原子の炎によって第二の太陽が生まれた。

「やったか!」

その光景を見た航海長は眩き、何名かはその台詞を聞いてギョツとした。何故なら、物語やゲームでいう「フラグ」に他ならず、爆発と破片、そして爆風にちかい煙が周囲を覆い、CICや艦橋のセンサーに「高放射線警報」が鳴り響く。

そして煙から現れたのは破壊された残骸ではなく、原形をとどめるコロニーだった。

「あれ、テキサスコロニーじゃないか!」

軍用の核パルスエンジンが搭載された、ヤシマ工業の印も刻印された外壁に「Texas」の名が塗られており、軌道を外れたコロニーは互いに衝突するようにパルスエンジンを用いて修正が加えられていた。コロニー同士の衝突は植民当時に何度かあったが、現在では滅多なことがないかぎりありえない。ぶつかったとしても「コロニー落とし」程の破壊力はない。

しかし、コロニー同士がぶつかり合うことで、軌道からそれて他のコロニーや月へ、もしくは地球への落下軌道に入ることが予測される。宇宙軍司令部の置かれるニューヨコスカも無事ではすまない。急激な衝突によって、内部の気圧や重力は変動。度重なる核攻撃から、衝撃に耐えられずに圧力から瓦解する可能性もあるのだ。

「ジオンの野郎！ふざけやがって！」

(こちら『ブルックリン』！敵のMSが本艦をつ……うああ!!!)

通信士の悲痛な叫びと共に僚艦であったサラミス級巡洋艦のブルックリンは艦橋とエンジンに至近距離から核弾頭を受け、撃沈する。乗組員の離艦も間に合わず、その光景を目にしていた航海長は悲痛な表情を浮かべた。

「旗艦『ミヨウコウ』が中破、艦隊司令より撤退信号！」

「んな、バカな！目の前にコロニーがあるんだぞ！」

航海長の隣にいた水兵は艦隊司令の撤退命令に憤慨するが、パトリール艦隊の半数以上が大破または撃沈している時点で撤退もやむを得ない。しかし、艦の真正面から高速で向かってくる物体があった。

「前方、MS接近！」

「弾幕を張れ！フアランクスとメガ粒子砲もだ！」

「銃身が溶けています！第一、第二砲塔も使用不能！」

航空機用の自動機銃を手動で放ち、弾幕を張るものの、対艦装備のMS—06CザクⅡの敵ではなかった。頼みの綱であるメガ粒子砲の砲塔は度重なるジオンの艦砲射撃の応射から、砲身は焼けて、発射はもはや不可能であった。

「敵機呐喊！」

「全員、耐ショック防御！」

ザクから放たれるAPFSDS120mm弾が発射され、艦のバイタルパートを貫通し、重要区画をズタズタに切り裂いた。その弾の一発が艦橋に命中。戦車砲クラスの弾が艦橋を撃ち抜き、内部の空気が一

気に放出。乗り込んでいた多くが空に吸い出された。しかし、砲雷科が意地を見せたのか、甲板のVLSにあつた対艦ミサイルが発射され、ザクの胸に丁度命中し、コックピットを貫通・その推進力をもつて吹き飛ばした。破片と爆風が再び艦橋を襲うが、幸運なことに撃たれた弾が徹甲弾だったことで艦橋は窓を破壊されて貫通された以外、全くの無傷であった。

「各員、ダメコン損害報告！」

「航海科二人が戦死！第一、第二甲板の応答ありません！」

「CICとの連絡途絶！……艦長他戦闘班が全滅！エンジンも焼き付く寸前です」

ただ一人、士官として生き残った航海長はあまりの損害報告に呆気にと取られてしまう。爆発の前にノーマルスーツのフェイスガードを下ろしておいて正解だったと安堵しつつ、CICに放たれた砲弾が戦闘任務中にノーマルスーツを着る必要のないCICの要員を皆殺しにしてしまったことに怒りさえ沸かず、彼はその事実を受け止めきれなかった。だが、彼は軍人であった。すぐに、現在の状況を判断し、自分が最上級士官であることを思い出し、直ぐに命令を下した。

「総員、脱出ランチで離艦！この船はもう無理だ！全員離艦だ！」

「りよ、了解！」

ヘルメット越しの通信を行い、艦内放送と共に離艦命令を下す。既に兵器システムも不調であり、満足に戦うこともできない。航海長は破壊された艦橋と同僚らしき体の一部を見つつ、急いで生き残った乗員を脱出用ランチに誘導する。

「おい、其処の三等航海士！まだ、舵は効くか？」

「は、はい。機関もあと十分が活動限界ですが動きます」

航海長はまだひよっこである若い三等航海士を捕まえ、破壊された舵につないだ小さいウェアラブルデバイスを指さした。

「よし、お前がランチに載ったら、すぐさまランチを出発させろ。俺は残る」

「そんな、航海長！」

航海士は止めようとしますが、航海長はホルスターから銃を取り出し、航海士へと向ける。

「なくに、最後の意地を見せてやるのさ。うまくやればコロニーを破壊できる」

一種の賭けであったし、犬死の可能性もある。だが、そんな行為に部下を巻き込みたくはない。連邦宇宙軍といっても、海軍精神盛んな現場であるため、生き残った水兵は自らの意思で自分の犬死行為の犠牲になるに決まっている。

「待つてください、航海長！」

「行け！さもないと抗命罪で撃ち殺す……ほら、さっさと行け！」

航海士は悔しい様子で艦橋を後にする。出来ることなら彼も故郷の妻と子に会いたかったが、既に青い星地球はない。

「あー……ロスのジュリアとトーマスに会いたかったな」

軍服の胸ポケットにあるが、映画のように家族写真を眺めることはできない。出すにはノーマルスーツを脱がねばならないし、脱げば全身の血が抜けて死に至るのだ。

航海長は壊れた舵に装着されたデバイスを操作し、パルスエンジンの可変ノズルを操作してテキサスコロニーへと進路を向ける。

操舵する艦橋から見える脱出用ランチが離脱していく様子に敬礼をし、炎上する前甲板と艦橋下のCICを破壊した弾痕から出る空気と炎上する煙の向こう側には、砲塔をこちらに向けるムサイ巡洋艦の

姿があつた。しかし、砲撃をする前に他のサラミス級『ハンプトン』がメガ粒子を艦橋とエンジンにぶち当て、大破させる。航海長は全速力に速度を挙げ、コロニーの中で一番脆い部分。厚さ1メートルのポリマーと水によつて遮蔽された部分を貫き、コロニーの中心部にある柱に目掛けて進み、エンジンを臨界まで出力を上げた。

サラミス級巡洋艦『イオージマ』は損傷した核融合パルスエンジンが暴走し、人工の太陽が形成される。それは、実際の恒星に比べれば何億分の一位のエネルギーでしかなかったが、コロニーを破壊するのに十分な爆発であつた。

テキサスコロニーは中心から真つ二つに折れ、失速する。

しかし、核パルスエンジンによつて押されたコロニーの半分はそのまま、ニューヨコスカのコロニー中心部に到達。核攻撃でも貫くことが出来なかつた隔壁に穴をあけ、事実上地球連邦軍司令部は崩壊した。

第二話 戦後 【修正済】

【こちら、ズムシテイ公王府前です。宣戦布告して一日が経過しましたが、依然として公王府前には公国軍警戒治安維持部隊の装甲車とMSが立っており、緊張状態が続いています。反体制派のテロ攻撃の警戒をしているものとみられ、公国軍大本営は今日の午後6時より広報官の記者会見を行う予定です】

【現在、ルウム植民地政府はジオン公国に対して降伏の意を公王に伝え、明後日には総軍旗艦『グレート・デギン』にて降伏調印が行われる予定です。ルウム政府イヌカイ首相は先程、ルウム公営放送にて『誠に遺憾ながらルウムは敗北した。スペースノイドとして考えることを怠り、地球連邦側についてしまったこと、そしてこの戦いにおける死傷した国民に対し、深く謝罪いたします』とコメント。同政権は降伏調印直後に辞職を決定。新たな政権移行前までの間、イヌカイ政権がルウムの行政を担うということです】

【ジオン国营放送、ジオン公国ギレン・ザビ総帥の演説の模様を生中継でお届けします】

画面は移り変わり、演壇にたつギレンが映される。後ろにはジオンの国旗がクロスされており、近くには護衛の衛兵の姿を見ることが出来た。

「我が忠勇なるジオン軍兵士たち、そして戦禍によって遭われたスペースノイド達よ！今や地球連邦軍艦隊の半数以上が宇宙の塵と消えた。」

だが、この塵は戦士達の遺灰である！

彼らは地球無き今も、彼らに忠誠を誓った間違うことなき勇士。たとえ、彼らが偽りの命令と偽りの指揮官に惑わされたとして、彼らの戦いはポリスのスパルタと同じようなものだった。

我々は忘れてはならない。地球連邦が無き今も、勇士たちの気持ちを踏みにじり、寄生虫のような者どもは各地に潜伏している。彼らの上層部は降伏しなくてはならない！決定的打撃を受けた地球連邦軍残党に如何ほどの戦力が残っているようにも、それは既に形骸である。

コロニーをもつて大質量兵器として、司令部のあるニューヨコスカのコロニーにぶつけようとしていた。予測では衝突と同時にコロニーの脆い円筒部分の外壁を貫き、完全に破壊する作戦だった。これにより、宇宙軍の軍艦湾に係留する軍艦も衝撃によって出港不可能にさせ、敵戦力を釘付けにしてレビルの首をとろうと考えていたのである。元教導隊の黒い三連星はパトロール艦隊を全滅させると、スペースポートに駐留する軍艦を撃破。エース級の活躍をした。

だが、実際はそううまくはいかない。全滅に近いパトロール艦隊のうちサラミス級巡洋艦一隻が自爆前提で質量弾として使われるコロニーに呐喊し、中心につくとともにエンジンを臨界まで上げて、そのまま大爆発を起こし、コロニーは二つに折れたのだ。それでも、残った質量のコロニーの残骸はニューヨコスカのコロニー外壁を貫通した。しかし、そこまでの被害を与えることはできず、駐留していたマゼラン級戦艦5隻とサラミス級巡洋艦20隻、コロンブス級輸送艦3、強襲揚陸艦3はそのドタバタの隙を突いて脱出し、ルナIIへと進路を取ったときく。

その報告を聞いたギレンは「コロニー落しよりはマシだろう？キシリア」と彼女に皮肉を込めて言う。一方キシリアも鼻で笑い、ギレンの作戦指揮を執るはずであったドズルは酷く動揺していた。実はブリテイツシユ作戦の作戦指揮はドズルに任されており、コロニーへのガス攻撃によって皆殺しにする方法も黙認していた。戦争においては両手が血に染まっても完遂しなければならぬ任務があると考えていたドズルにおいて、アイランドイフィツシユの住人を皆殺しにすることは躊躇しつつも、仕事をしつかりとこなす。

だが、それでも高潔な軍人として虐殺行為は彼としても容認できるものではない。己を恥じていたのか、報告をつづけた。

「ルウム of 奴らは無条件降伏に等しい。既にラコツクの部隊が連邦軍駐屯地を抑えて、総督府の設置に向けて準備を進めている。ハツテヤムーアも同様だ。リーアは中立路線だが、今のところ連邦艦艇は数えるほどこしか停泊してない。」

「ふむ、サイド7の方に残存艦隊を集結させているか」

「連邦のMS計画と目される場所です。反攻作戦を練っているはずですが……彼らの資源や人員は我々よりも下回っています」

ルウム会戦によって司令部と支持するコロニー政府を失ったことで地球連邦軍の兵力はかなり落ちてしまった。ルナIIは地球連邦軍の中でも有数の宇宙軍拠点の一つであるが、先のニューコスカのコロニーと比べるとかなり劣る部類だ。ワッケイン他、宇宙軍艦艇がジオン軍の攻勢に対処すべく、艦艇を増員していたが、ルウムより撤退した艦艇を受け入れるのに今しばらく時間がかかる見通しだ。

また、ジオンもかなりの戦力を消耗しており、十数隻のムサイやパプア輸送艦の喪失は回復するまでに半年を擁する。加えて、失った人員は多大なコストを経て養成することで一人前になるために、船が出来ても人がいない状況であった。今までは職業軍人や志願兵が中心であったが、召集兵や民間からの宇宙飛行士を軍人として載せなければならず、練度は格段に落ちる。士気もさることながら、正史の「ジオンに兵なし」は的を得ていた。それでも当初の予定よりも、かなり損害は抑えられている。

そして、目下の課題として……

「兄上、あの惑星はどうします？ 予定通り地球降下作戦を行いますか？」
「コロンプスのように疫病をジオンに持ってきたくはない」

かつて、新大陸に上陸したコロンプス一行はその情報を持ち帰り、英雄として凱旋した。しかし、彼らには他にも持ち込んだものがあった。疫病である。

代表的なのが、梅毒。大航海時代において疾病対策の十分でない当時は未知の病原体を船乗りや貨物が疫病を広げる手段だった。すぐにそうした病気は広まり、ヨーロッパには多くの感染者が溢れかえった。宇宙世紀に入っても、ウイルスや菌に対しての耐性は付いたものの、ジオン軍が最悪のシナリオである「コロニー落とし失敗の場合、連邦政府が徹底抗戦を打ち出した場合における戦略転換」に際して、長期戦の資源確保のため、地球降下作戦を視野に置いていた。コロニーのような、人間の管理が行き届いた環境になれたスペースノイドにとって、地球という過酷な自然界はまさに悪夢のような場所である。

コロナーでは流行することのなかつた疫病に晒されることもある他、コロナー落しの影響下では様々な疫病が蔓延する占領地を得る場合もある。既にそうした複数のシナリオが考えられ、地球攻撃方面軍は綿密な調査が求められたのである。

そして、地球が無くなり、目の前に新たな惑星がある現在。かなり豊富な資源や未知の有益な鉱物が手に入る可能性が高い。しかし、一方で人体に悪影響を及ぼす可能性のあるウイルスや菌がある可能性も否定できず、慎重に行動しなければならぬのはギレンも含めその会議室のザビ家面々は理解していた。もしかすると、惑星には未知の生物が文明を築き上げている可能性もあり、H・G・ウェルズの「宇宙戦争」のように自分たちが侵略者になる可能性もある。また、侵略する宇宙人のように、微生物が人体を攻撃する可能性もあることから及び腰になっているのである。

「だが、セツルメントからの突き上げも激しい……なし崩しに占領した方が都合がよかつたんじゃないか？」

セツルメント国家連合

ギレンがコロナー自治政府をまとめ上げるために提案した国際連合である。軍は保有しておらず、未だに草案の段階であるが、前時代的な『国際連盟』や『国際連合』にちかい組織にするつもりであった。ただし、圧制者として君臨するつもりはギレンとしても不本意であり、かつて世界の警察として自他共に認められていたアメリカを模倣するつもりであった。だが、そうした姿勢はギレンが立ち上げた親衛隊や母体であるシオニスト政治団体、一部の右翼団体から非難を受けしており『地球連邦の再現』とまで言われていた。彼らからすれば、ジオンとその民は人類を指導すべき種であり、それ以外は隷属されてしかるべきという思想を持っていた。ギレンは戦争前にも同様の主張を展開していたが、現在ではすっかりなりを潜めていたためでもあった。

ギレン以外のキシリアやドズルは兄の様子に驚きを隠せなかつたが、かつてキシリアに気持ちを打ち明けた時を思えば、冷酷な政治指

導者をこれ以上続ける必要がなくなったとも言えるだろう。内心、戸惑っていた二人であったが、ギレンは多くの考えがあった。

「ジオンの産業は軍需に依存している。これでは旧世紀のナチスドイツの二の舞だ。今後の産業は他のコロニー輸出用に幾らか切り替えても大丈夫だろう。またあの経済不況になつては困る」

—紙幣がトレットペーパーよりも拭きやすいなんてことは無いようにしないとな。

とギレンは付け加えた。

かつてジオンは工業化に成功したものの、地球連邦の経済制裁に等しい関税の大幅な引き上げにより、急激なハイパーインフレが引き起こされ、ワイマール共和国のハイパーインフレと同様に、ムンゾマルクは紙切れ同然の扱いを受けた。失業者はあふれ、低所得者の多いコロニー「マハル」では無政府状態が数か月続いたほど、不安定な状態が続いたのだ。

独立戦争はそうした地球連邦の圧政から抜け出すための手段でもあった。戦時体制が続けていけば、軍需産業を潤すために各地の紛争地帯へ武器を売るアメリカのような事になるかもしれない。ギレンはそこまで考え、内務省を監督するキシリアや経済産業省へ連絡をいれ、内需の方向転換に乗り出した

「つまり、他のコロニーに商品売り付けけるわけですか」

「左様、国内産業のために血を流すなど……今後のジオンに禍根を残すだけよ」

「……………」

ギレンの言葉に固まる二人。あまりにも大きい方針の転換に驚いた表情を浮かべていたキシリアとドズルであったが、二人の様子に怪訝な表情を浮かべるギレンだった。

「なんだ、二人とも黙って」

「いや……………」

「うん……………」

まり表舞台にでない星占い協会の要請によつて高官級の有識者会議を開いたのは、そうした事情があつた。

だが、彼らは厳密には人類ではない。

二足歩行であり、衣服を身にまとつてゐるが、爬虫類のような皮膚を持つてゐる所謂、『竜人』と呼ばれる種族である。人類と比べると、その力や魔力は比べるべくもなく、その強靱な肉体は人類の屈強な戦士でも倒すことはおろか、十人がかりでも倒すことはできない。そして、彼らは優れた魔法技術や占いといった未来予知がある程度可能であり、国際社会においても一目おかれるのである。人口100万人と少なく、砂漠などの過酷な環境に身を置いてゐるが、彼らは高潔かつ高貴な種族と自称し、他の種族と隔絶し、差別意識を持つてゐる種族なのだ。

そんな彼らであつたが、同族でもやはり研究者と政治家。相容れることはない。

「第一、星がいきなり地球周回軌道上に現れ、しかもそこから現れた星々が落ちてくるなど信じられないだろう!!」

天文学上、地球周辺に新しい星が現れることなどありえないことである。しかも、その異変の後に現れた流星群。しかも、その大きさは巨大であり、伝承に伝わる隕石ではないかと言われたほどである。

「しかし、我々の他にも一般人が星々が増えたことや点滅する星すら見えたという。昨日はまさにすごい光景だつたぞ！お偉い王宮務めも見たはずだ！」

政府側はその質問の答えに窮する。なぜなら、その時別の占い師が他の報告を行つており、王宮内でもその予言に対して意見が割れていたので。よもや、一般民衆に近い彼らに真相を明かすわけにはいかず、政府も彼らの意見を頭ごなしに否定するほかない。

王宮お抱えの占い師は「遠き星々より「慈恩」なる王国が現れ、時代の流れを変える」と予言を伝えた。

彼らは巨人を従え、よもや世界を征服できる能力を持つてゐると伝えたのである。そんな古の魔法帝国を上回るような予言に対して王

宮も様々な憶測と意見が飛び交い紛糾していたのだ。

彼らエモール王国以外にも、人間や亜人と呼ばれる種族に天文学が明るく、その異常事態に際して警告を政府に出す者は多かった。しかし、いたずらに不安を煽るようなことは政府として避けなければならず、多くはその意見を封殺し、観測員の見間違いや機器の故障としたのちに都市伝説や不確かな伝承として語り継がれるのだろうかと高を括っていたのである。

しかし、エモール王国は建国以来。もしくは古の魔法帝国以来の激震が走ることになる。

「大変です!!ここから300kmの砂漠地帯に何らかの隕石が落下!」

「なんだと!」

会議は騒然となり、一時中断され、幾人かは夜空を眺める。その光景はあたかも神秘的であり、世界の終わりではないかと恐怖に包まれるほどであったという。

大気圏で燃え尽きなかった連邦宇宙軍の艦艇の残骸が、あまたの隕石となって大地へと降り注いだのだった。

クワ・トイネ公国軍第六飛龍隊

その日は年始めの警戒任務であった。ワイバーンと呼ばれる飛龍を操り、竜騎士であるマールパティマは北東地区の警戒任務のため、相棒にまたがり大空を飛翔していた。以前までは暇つぶし同然の哨戒任務であったが、近年の緊張状態からロウリア王国の奇襲攻撃を警戒してか、哨戒回数を増やしている。しかし、公国北東方向には、国は何もない。

東に行っても、海が広がるばかりであり、幾多の冒険者が東方向へ新天地を求めて進行していったが、今まで帰ってきた者はいない。伝承ではヤマト民族といった人種が住んでいるとあるが定かでない。

海流が乱れ、海洋航行技術が盛んでないクワ・トイネにおいて見つけるのは至難の業だった。逆にワイバーンによつて飛行したとしても、同様に陸地が無ければ自殺行為にしかならない。

マールパティマは哨戒の合間に夜空を見る。ワイバーン乗りにおいて方位を確認する術は必須であり、天文学の知識もある。だが、このところ夜空に異変が起きていた。酒場で聞くうわさ話によれば、多くの天文学者が異変を察知していた。新たに星々が増えたことや夜空に眩い閃光が確認された事。更には一週間前、流れ星が多数観測された。天文学とは系統が異なるが、星占いに影響を及ぼしているため、市井においては不安が渦巻いている。戦乱が起こりえるのでは？と不安視されているが、竜騎士のマールパティマにおいては命を懸けて戦おうと心に決めていた。

「何もなければいいんだがな……」

相棒にゆつくり進むよう指示を出し、雲の上を飛行する。生憎と海域は荒れており、ロウリアの上陸艇は木造であるため、荒れた波では僚艦に衝突し分解しかねず、上陸は困難だった。一方、空は雲を抜けると、満点の星空があり、何もなければ夜空を眺めながら、隠し持つ酒でも飲めば完璧だった。

「――！」

突然、ワイバーンが反応して速度を変え、彼はその異常な行動に驚

く。

「落ち着け！一体何が?!」

ワイバーンが異常な行動をした理由、北東に飛来する隕石とも見て取れない、明らかな人工物がいくつも飛来してくるではないか。

「なんだあれ……しかもフォーメーションを組んでいる?」

もし、彼が宇宙世紀の兵器に詳しくあったならば、あれが地球侵攻作戦に使われるはずだった「HLV」大気圏離脱機と呼ばれる、軌道上の部隊降下に使用されるポッドであった。また、旧世紀の宇宙進出の初期にはSSTO「単段式宇宙輸送機」とも呼べる代物でもある。だが、マールパティマにはそれが、人工物であることしか分らず、また竜騎士が分隊行動中に用いる陣^{フォーメーション}形にも似た形で降下しているため、何らかの部隊のように思えたのだ。

そして、HLVは適正高度になると、先端から何かを出す。それは彼も見ることが無い、パラシュートと呼ばれる降下速度減速装置であった。

近づこうとするも、ワイバーンが恐怖を感じてこれ以上高度は上がらず、更に北東の方角まで直進すれば、相棒のワイバーンも力尽き墜落するかもしれない。

ワイバーンは馬以上に賢く、どの程度まで行けば自分の限界なのか、折り返し地点なのか理解している。老練な軍用ワイバーンであれば、新兵訓練の教官としても役立つ存在である。だが、ワイバーンは最高時速は230km前後。大気圏軌道上から降下した存在は音速以上の速度を上げている。音速のため、ワイバーンは近づけず距離を引き離されてしまった。

「くっくっ!!:なんなんだ、あいつは!!」

その後、積乱雲に阻まれて追尾は中止。司令部に報告書を出すのが、相手にしてもらえないことはなかった。魔法や魔物、魑魅魍魎蔓延る世界であるため、そうした摩訶不思議な事態に遭遇することもあり、旧世界や宇宙世紀においてもX-ファイル（正体不明事件）として扱われる案件も少なくない。マールパティマの報告書もそうした「未解決報告」のファイルに収められ、彼はしばし休養を取ることになる。

首相のカナタは眉間を皺に寄せつつ発言した。

「皆のもの、この報告について、どう思う、どう解釈する」

軍の情報分析部が手を挙げ、発言した。

「情報分析部によれば、古の魔法帝国の兵器とは似て非なる物であることが予測されます。また、憶測ではありますが、現時点から察するに該当する科学技術を持つ国はないとされています」

「まさか。神聖ミリシアル……ムーもか？」

「はい、ムーの遙か西、第八帝国が第四文明圏に対して宣戦布告したとの情報が入ってきていますが、諜報員の報告だと、該当する科学技術は両国には存在しません」

会議は失笑に包まれるが、仕方がない。列強国の軍力は強力であり、それらに宣戦布告するなど文明圏外の帝国を自称する俄か国家が太刀打ちできるはずもない。自国が列強として世界に君臨する妄想はだれしもあるかもしれないが、それは妄想であって実際に出来ることではない。

「つまり、出処はわからないか……」

会議は振り返りに戻る、結局解らないのだ。ただでさえ、ロウリア王国との緊張状態が続く、もはや戦争は避けられない。パーパルティア皇国のバックアップを受けていると噂されるロウリアはかなりの軍備増強を行っていると言われている。

戦争が勃発すれば、クイラとクワ・トイネは連合してロウリアと熾烈な総力戦に臨むことになるだろう。国土は焼かれ、都市は壊滅。女子供が凌辱され、多くの若者が死にゆくこととなる。国力は二国合わせてロウリアと拮抗する。どちらかが出し惜しみして被害を拡大すれば、負け戦。国民は殆ど奴隷となり、選民思想と亜人撲滅のため、種の滅亡が組織的に行われる。

着々と戦争の準備が定まり、議題が変わろうとしていく中、外務省の若手職員が突如走りこんでくる。

「何事か!!」

外務郷が声を張り上げ、二言目には叱咤しようと顔を真っ赤にして

いた。

「報告します!!」

若手幹部が報告を始める。報告によると、北東の方角より未確認飛翔体を観測。全長260m、殆どが金属製であり、周囲に巨大な巨人の姿がある他、小型の飛翔体が複数確認できる。

更に海上には、グレーの塗装を施した船にはみえない、全長50mほどの航行物体を発見。

先行していた航行物体を海軍陸戦隊が臨検したところ、ジオン公国と名乗る特使が乗っており敵対の意思はなく、国交を求めることを言ってきたのである。また、ジオン公国は宇宙植民地であり、突如として転移してきた国家だという。加えて独立戦争を行い、惑星軌道上の地球連邦軍の艦艇が大気圏を突破している可能性がある。残骸には微量の放射線や毒物が含まれるために手を出さないようにいつてきたのである。

「冗談でしょ……」

唯一、女性官僚である賢者卿（所謂魔術師養成機関のトップ）が呆気にとられたように呟いた。

既に湾内と上空に停泊しており、あとはこちらの外務省の応対次第だという。

現実とも夢とも分らず、いつもの調子でやれば事態は収束する。凡その予想を斜め上に裏切った感じで国が急成長を遂げることになるのだが、首脳陣は知る由もない。

第四話 戦の足音 【修正済】

中央暦1639年3月22日

ジオン公国が出現してから二か月。

クワ・トイネ公国は、今までの歴史上最も変化した2ヶ月であった。もしくは『最も成長した二か月』『神も驚く二か月』『心臓発作で多くが倒れた二か月』とも言われ、クワ・トイネとクイラの歴史書やのちのテレビ番組では『この時歴史が動いた』なんて言われる日が来るだろうし、そう遅くもない未来かもしれない。

2ヶ月前、ジオン公国は、クワ・トイネ公国と、クイラ王国両方に同時に接触し、双方と国交を結んだ。

工業立国であったジオンはクイラ王国の鉱物資源の多さに驚愕した。その多さはジオンの学者が『地球の総資源の数倍』と言い、あまりの量に老官僚数人が緊急搬送されたとかしないとか。一方、クワ・トイネ公国も海洋天然資源や高級食材と言った物を輸出。加えて生物のDNA情報と言った亜人のDNAの提供を求められた。近世に近い文明を持っていても、血液を採って何が分るのか、と半信半疑であったが、ゲノム情報解読、遺伝子操作技術がかなりの進歩を遂げており、これらはクワ・トイネ公国の科学技術、生体医療に関して大きな躍進があった。一方、ジオンは産業と内需の転換を図るためにインフラを輸出してきた。クワ・トイネ公国当局が聞けば、ジオン公国は地球連邦という、国力50倍以上の敵と戦う準備をしていたという。そのため、多くの人材が軍事に注ぎ込まれていたため、軍需を潤すために戦争を行わねばならない経済の形になっていたと危惧していたと聞く。それを聞き、政府首脳は顔色を白くさせ、女性官僚は貧血で倒れたという。

もし、ザンジバル級巡洋艦が攻め込み、緑の巨人が街を蹂躪したとすれば。確実に二国は一週間のうちに……いや、三日間のうちに征服

されるだろう。クワ・トイネ公国当局は矛先が自分たちに向かないことを感謝した。

ジオンは多くの技術者や労働者などを輸出。セツルメント国家連合経由によつて他コロニーの企業も誘致され、二国の科学技術は大きく進んだ。大都市間を結ぶ、石畳の進化したような継ぎ目の無い道路は勿論のこと。鉄道といった大規模流通システムを構築。コロニーとの交易向けの宇宙港を建設している。各種技術交流も両国から要請されたが、ジオン本国や他のコロニー大学の一部の知識人から猛反対を受け、一部の技術のみに抑えられた。

近世の科学技術はそこまで発展してはおらず、あまりにも躍進しすぎた科学技術は倫理観の欠如や破壊兵器による民間人の殺戮も考えられる。というものの、転移さえなければギレンの指導の元に全人口の半分を死に至らしめていたであろうジオンがそれを言うのも、なんとも皮肉であった。だが、ジオンの知識人がそういうのも無理はない。つい先ほどまで弓と剣、槍で戦争をしていた人々が自動小銃と戦車乗り回し、MSまで戦場に暴れるようになるのだ。否応なく、敵をせん滅できるからとバカスカと戦略核弾頭を持ち出されては困る。

「すごいものだな、ジオンという国は……。明らかに3大文明圏を超えている。というか、一体どうやったらここまで進むんだ？」

—我が国だけなら、5世紀近くかかるのでは？

クワ・トイネ公国首相カナタは、秘書に語りかける。

「はっ。しかし、彼らが平和主義で助かりました」

「そんなことはない、君は内務担当秘書官だよな？ いい物をみせてやる」

カナタは机から「極秘」と書かれたファイルを出す。「口外するなよ」といい、秘書はファイルに目を通す。内容はジオンの国内情勢についてだった。ムンゾ自治共和国の建国、独立宣言からジオン・ズム・ダイクンの死とジオン公国の建国。連邦による経済制裁とハイパーインフレの発生。その後の地球連邦との独立戦争に挑む体制。総力戦体制とギレン総帥による親衛隊やそれにかかわる政治的粛清。そ

「2国を同時に敵に回して、勝てるか？」

34代ロウリア王、ハーク・ロウリア34世は將軍の他集まる御前会議の面々の顔ぶれをじっくり見ていった。ほぼすべての人間が自信に満ちた表情を浮かべており、全く不安を見せていない。家臣たちの優秀さに頬を綻ばせないようにしつつも、その会議で発する声は若干喜色が混じっていた。

「一国は、農奴。もう一国は野蛮な不毛の地に住まう者、どちらも亜人比率が多い国。数年以内に亜人共は撲滅いたします」

「宰相よ、1ヶ月ほど前に国交を結ぼうとしていたジオン公国という輩、それからどうだ？」

ジオン公国は亜人ではなく、多種多様な人種の国家であると、ジオン公国使節団の口から聞かされていたが、国交を結ぶ前にクイラとクワ・トイネの間に友好条約などが結ばれたため、国交は断絶した状況となる。宰相も自身の目で確かめてはいないものの、奇妙な成りをした肌の白い人々であったと記録にはあった。

「ロデニウス大陸のクワ・トイネ公国に公使館を設置しています。なぜか彼らは自らを『スペースノイド』と自称しており……失礼、流石の私もその報告に耳を疑いました」

宰相は記録を見て笑ってしまっていた。大道芸人の噺家でさえ、面白い冗談を思いつくが、自らを宇宙人と呼ぶのは新しい。王もその報告を聞き、笑みを浮かべていたが、王が聞きたいのは国力であって見栄を張った使節の嘘ではない。

「国力は語りませんが、明らかに誇張でしょう。北東の海域は伝承でもあまり人は住んでおらず、野蛮人の住む国です。ワイバーンですら見たことがないと驚いていましたので、軍事にも疎い田舎者でしょう」

ワイバーンの無い軍隊は、ワイバーンの火力支援が受けられない分、弱い。

それは世界の常識であり、空からの偵察で敵の位置や場所を特定する。戦争の常道としてワイバーンを用いた空戦によって、制空権を制したものが戦争の勝者である。如何なる軍事力を持っていても、補給

線や陣地編成などの情報を知られば、陸戦はたちまち崩壊する。

そのワイバーンを使用しないのは神聖ミリシアル帝国の飛行船かムーの飛行機械であろう。彼らは自走する鉄製荷車に乗ってきたと記されていたが、臆病者なのか鎧のような荷馬車でないと旅行が出来ないらしい。と報告書にはまるで嘲笑が聞こえてきそうなほど馬鹿にしたものであった。

「そうか……。しかし、ついにロデニウス大陸が統一され、わが王国の旗が翻り、亜人共がこの大地から消えるのはありがたいことだ」

国王は機嫌の良さそうなこえを出し、皆の士気も高まったのだが、不気味な笑い声が木霊する。

「大王様、統一の暁にはあの約束もお忘れ無く」

真つ黒なローブにかすれた声。まるで、絞殺した家畜の声のように気味の悪い声を出すのは、ロウリア王国の特別顧問である魔術師だった。後ろには別の国の軍服に身を包んだ将校達。彼らはロウリアの民ではなく、所謂お雇い外国人に近い。

「解つておるわ!!」

王は喜色から一変して、怒気のこもった声を発する。ただでさえ、不敬にも等しい振る舞いに近衛師団の衛士もピリピリし、家臣たちも嫌そうな表情を浮かべる。国策会議であるのにも関わらず国外の人間がいるのを不審がる。しかし、その男には手を出せない。何故なら、その男はロウリア王国の富国強兵政策についての一番の功労者であり、彼がいなければこのような大陸の覇者になれる作戦などできなかったであろう。

「將軍、今回の概要を説明せよ」

「はっ、統一作戦用総兵力は50万人、クワ・トイネ公国への兵力は40万、残りは本土防衛用兵力になるかと。クイラによる奇襲攻撃や防諜による破壊工作もあることから各都市へと配置、テロ攻撃を予防します。」

手始めにクワ・トイネの人口2万人都市、ギムを強襲制圧。兵站については、現地にて執り行い、最低限の補給のみにて行います。ギム制圧後、その東方250kmの位置にある首都クワ・トイネをワイ

バーンによる制空権の制圧後、陸軍が進軍。敵の各都市の防衛体制は脆弱。城壁は各行政政府のみで都市攻略には何の障害もありません。またクワ・トイネの航空戦力はわが軍のワイバーンのみで圧倒が可能。制空権確保には後れを取りません。それと平行して、海軍艦船4400隻のにて、北方向を迂回しつつ、敵艦隊を掃討。マイハーク北岸に上陸し、経済都市を制圧します。クイラの野蛮人はこのマイハークから食料を輸入しているため、干上がることでしょう。そのため、首都よりもこちらが重要となります。クイラは野蛮人でも、精強な兵です。マイハークは激戦地となることが予想されます。とは言っても、数の暴力はさすがに彼らも手が出せないでしょう」

御前会議は滞りなく終了する。大王もその結果に満足していたが、何かが引つ掛かる。宰相や外務卿の言っていた『ジオン公国』の存在。彼らの話が頭から離れなかったのである。

第五話 遙か彼方の空【修正済】

スペースコロニーとは人口増加に伴って建設された新たな植民地の形である。棄民政策とも見てとれるそれは、歯止めの効かない人口増加と地球環境の度重なる激変に対応できず、食糧不足に陥るための対応策だ。地球環境のような天候に左右されないコロニーの徹底管理された農園は、食糧生産能力を飛躍的に向上させたことで、人類の食糧問題は一気に解決された。懸念されていた建設資材のは、小惑星や暗礁宙域にある鉱物を使用したため、地球上から輸出する必要はなかった。

既に数百基以上のスペースコロニーが地球の周りを廻り、半世紀以上が経過していた。そこに住む人々は二世代以上にわたって住み、地球圏ではありえなかった文化や思想が発達した。

「地球連邦万歳！ ジオンの鬼畜は出ていけ！」

「圧政者に死を！ 裏切り者共は皆殺しだ！」

互いの意見が反目すれば、言葉ではなく暴力によつてことを為そうとするのは、宇宙世紀になつても変わらない。地球連邦支持者は徒党を組んでデモを展開し、カウンタートーデモのジオン支持派閥に取り囲まれ死闘を展開する。これはジオンやサイド7、サイド6を除いたジオン軍占領地によく見られる事だった。

地球連邦軍との軍事衝突。ルウム会戦以降、

テイアナム中將の艦隊をハツテのコロニーを餌に出し抜き、ルウムの本拠地にいるレベルの司令部を攻撃。艦艇の半数以上を撃破するに至る。残存連邦軍はサイド7やルナIIに退却。サイド7を除くコロニーはジオンの勢力下におかれた。コロニーのジオン感情は良くも悪くも、解放者として歓迎された。自治政府首脳陣は苦虫を噛み潰したような感じであつたが、それはこれまで連邦寄りだったことに帰来する。

コロニーと月面がこの世界に転移したことで、拠り所である地球を失い、完全に統制の取れなくなつた連邦軍の末端部隊は反乱若しくは暴徒紛いの戦鬪を各地で繰り広げたため、完全に連邦軍の株は落ちた

といえよう。一方でジオンは情報戦を展開し、各コロニーのマスコミを通して、プロパガンダを発信。中には連邦の経済制裁によってジオンから世界規模の不況に発展した経済不況や連邦の不祥事を連日報道したことによって、民衆はジオンに傾いたのである。

「テキサスは廃棄が決定したか？」

「はい、テキサスとニューヨコスカのコロニーは完全に破壊。放射能汚染も酷く、使用は無理です」

そこはサイド5ルウムの首相官邸であった。あたかも、嘗ての日本の総理大臣が住む首相官邸に似ており、石造りの建物になっていく。コロニーでは地震がないために、耐震強度を気にする必要はない。比較的最近になって建設されたルウムはまだ世代的にも地球生まれが多く、地球連邦支持者が多い。首相として行政を監督するイヌカイは窓から見えるジオンのザクⅡを見つつ、溜息を吐いた。

イヌカイは元々、地球連邦官僚の一人であり、サイド5に移住して植民地政府植民地政府首相に選挙で就任した。そして、対立を明確にしたザビ家率いるジオン公国へ経済制裁と称して、他のコロニーと共に地球連邦に与する形で協力した。

だが、スペースノイドとして生きる者として考えてみれば、圧政者に与することは裏切りに等しく、官邸の外ではデモ隊が即時退陣と政権を求め、議会のジオン寄り政党に政権を引き渡すよう求めていた。しかし、民主主義を守り、自身もそのシステムに身を投じたことで、それに反する動きであるジオンの国家社会主義に近い動きには反感を強めていた。ギレンやデギンを中心とする独裁に近いジオンの動きは民主主義を信じる彼にとって、ザビ家一党は旧時代の民族を消し去ろうとした指導者や政治的に対立する者の多くを粛清した指導者に似ており、イヌカイ自身はジオンのことを良く思っていない。

そして自身も彼らのように粛清されるのではと恐れたが、敗戦後も混乱を抑えるために内政を担い、罰もなく過ごしている。最悪の事態を想定していたイヌカイは呆気にとられていたのである。

「……はあ……最悪の結果にならなくて済んだが、禍根も残ったな……」

最悪の結果、というか開戦時に可能性が一番高い攻撃は核攻撃。選民思想を以前から主張していたギレンが、粛清の名のもとに核を使用したコロニーの一斉破壊するのではと予想していた。そして地球へ質量弾の投下、地球連邦の継戦能力を失わせるために核以上の破壊力を持つ兵器。スペースコロニーを使用した連邦軍総司令部「ジャブロー」への攻撃。コロニー落としによって人類の半数余りが死に絶えるのではと予測していた。だが、元地球連邦官僚という立場をもってしても、現ルウム首相として対策を講じることは出来なかった。何故なら如何に情報収集や分析能力の優れた機関を有していても、彼のいるコロニー自治政府はその名の通り、制限された自治権しか保有していない。独立国の権利を持っていないに等しい。地球連邦政府と連邦軍が身近にいる現状、首輪とリードを付けられた犬のように飼い主の命令がなければ、動くことも出来なかったのだ。

仮に自分自身にギレンのようなカリスマ性や政治的才覚があればルウムはどれほど変わっていただろうか？

無論、その思考自体は無意味に等しい。しかし、一波乱が過ぎた今だからこそ振り返ることが出来た。

地球連邦政府の消滅、ルウム会戦や残存連邦軍の壊滅によって、必要以上の殺戮をする必要がなくなった現在。各地で両陣営の支持者がデモや暴動を引き起こしてしまい、ジオンへ援軍要請を行うことになった。一番暴動が多いムーアでは、戒厳令が引かれ、ザクによる掃討作戦など、市街地戦が行われていた。

もし、ルウム会戦でテキサスコロニーにG3ガスを注入し、住民を皆殺しにしていたら？

もし、連邦政府寄りのコロニーに戦略核弾頭をもって粛清してい

ば？
イヌカイの脳裏に浮かぶ「IF」の可能性。ジオン軍はテキサスコロニーの住民を退去させ、他のコロニー制圧にはある程度出血を強いたものの、大きな抵抗は無かった。だが、体制が変わったことによる不満は必ずある。それがデモや暴動、テロ攻撃と言ったものに発展するかもしれない。火種は完全に消えておらず、そこら中に燻ってい

「重力の増埒に引き込まれるなよ、この老朽艦はすぐに燃え尽きるからな」

士官服を着て、パプア級輸送艦の艦長を務めるガデムは新米工兵の危なっかしい動きに叱咤の内容を考えつつも、周囲に展開するザクやムサイの護衛を見ながら、連邦軍の残党部隊について警戒していた。

第一線を引いて後方からの補給任務を行っているガデムであったが、その眼光は鋭く、老練の戦士の能力は衰えていない。

「特務隊より報告、ルナIIの方角から連邦軍艦艇を発見。急ぎ作業を完了されたしとの事！」

「でてきたか：第一種戦闘配備！護衛MSはパプアを守れ！工兵は急ぎ作業を終えて帰還しろ、ポッドの装甲は紙だぞ！急げ！」

(了解、こちらBug1すぐに帰還する)

「観測班より報告！方位103、上10度！距離20000！敵艦隊急速に近づく！」

「敵の艦種は？」

「マゼラン級1、サラミス3を認む……ちよつと待ってください！数体の人型を確認！」

「人型？」

ガデムは部下の報告にオウム返しに聞いてしまう。何故なら、連邦軍はMS開発が暗礁に乗り上げたという報告を受けていたからである。開戦前の月面スミス海の戦いにおいて、先行配備されたRX-77-1ガンキャノン試作型を投入。結果はMSもどきのガンキャノンは全滅し、連邦軍のMS開発の遅れが露呈した。開戦時には、先行配備されたガンキャノンは宇宙軍に大量配備されたわけではなく、ルナIIに保管されていたと噂される。ガデムは倉庫で埃をかぶるMSもどきを引っ張り出したのかと考えた。

「連邦の旧型か？」

ザクよりも後に開発された機体であるが、設計思想上「旧式」と呼んでも、問題はない。しかし、ガデムの予想は裏切られることになる。

「データベース照合中！……敵のMSは新型と思われます！」

「スクリーンにだせ！」

パプアの艦橋にあるスクリーンに写された観測カメラで撮影した接近中のMS。その姿はガデムの見たことがない新型MSであり、コピー品のザニーや鹵獲品でもない。スリムなボディにカーキ色をメインにした塗装。見たこともない機体にガデムは恐怖ではなく、戦士として手ごたえのある敵に出会ったことを喜びに感じていた。

「ほう、こいつは骨がありそうな機体だな」

「ファルメルより連絡！『これより敵を駆逐する！後方に下がられたし』とのこと」

「ふむ、こちらは輸送艦。仕方あるまい」

ガデムは悔しい表情を浮かべていたが、仕方がない。こちらは輸送艦であり、敵は戦艦や巡洋艦などである。戦闘には不資格なのだ。

『赤い彗星』の実力を特等席で見せてもらおうとしよう」

そして、ガデムの乗るパプアからそう遠くないドブル麾下の特務隊所属の巡洋艦『ファルメル』そして、そこから現れたのはエース級パイロットに配備されるカスタム機のMS―06SザクⅡS型。バーニアや機動性を向上させたそれは、真っ赤な塗装と共に伝説として語り継がれる男の乗機だった。

「見せてもらおうか、連邦軍のMSの性能とやらを！」

ハツテ救援に向かうティアンム中将の艦隊を撃滅させた特別機動大隊に属し、単機で戦艦を数隻沈めた「赤い彗星」と呼ばれるシヤア・アズナブル少佐。

未知の惑星軌道上の地球連邦軍残存兵力を殲滅すべく、赤い彗星は宇宙（そら）を舞った。

第六話 開戦【修正済】

「なぜ、知っているのですか?」

あまりにも信じられない相手のセリフにクワ・トイネ公国の外交官は驚きを隠せなかった。近くにいた秘書もジオン公国軍の将官の戦況分析はあまりにも正確であったために、目を白黒させていたのである。

クワ・トイネ外交官と会談するマ・クベ中將は友好の品として壺を送る。マ・クベはジオンでも異質な地球好きとして知られる。100年にも満たないジオンの歴史、マ・クベはそこに地球とジオンの差を感じていた。

成金国家と言われても否定はできず、思想は先進的であっても、ジオン文化はまだまだである。醸成された文化というものは愛国心以上の力を発揮するため、国家社会主義的なジオンは愛国心や文化の差を埋めるため、扇動的政治手法を持って統治していると言えよう。また、国家の特徴を表す軍服などは、多くが欧州圏の文化が多く取り入れられ、あたかもデザインは近世の衣服にも似ているのだ。

マ・クベはそこにスペースノイド独特のコンプレックスの現れなのだろうと感じていた。

転移されてからは、地球の文化を比較しつつも、政府主導の情報収集プロジェクトへ積極的に参画し、キシリアの推薦から「惑星探査派遣団」の司令官として上陸した。その後は地球の日本列島にも似たヤマトと自称する民族とも友好的な関係を結んで、クワ・トイネやクイラとの外交を担当した。

ロウリア王国にも使節を送ったが、あまりにも隔絶した科学技術であったために警戒され、クワ・トイネとの国交が成立して以降は「敵性国家」の烙印を押されて門前払いされたのである。

情勢に機敏な知識人や軍人を元に情報分析チームを設立。ロウリア王国が侵略戦争を仕掛ける準備をしている事から、消失していた監視衛星を展開。妨害する連邦軍の攻撃をはね返した。

国境に近づく軍隊やロウリア王国にある港に集まる軍用艦艇。高

精度偵察衛星を見れば、兵士達が何を食べているかも分る。ミノフスキー粒子を散布していない状態ならば、しっかりと観測が可能だった。

「これほどの情報をどうやって……」

「以前、申しましたが。我々は宇宙に住まう者、惑星軌道に監視衛星を固定しました。それとこれを……」

魔法帝国が実用化した人工衛星「僕の星」、それはロデニウス大陸だと神話レベルの話であったが、目の前の偵察衛星の写真を見る限り、それが事実とわかる。そして、マ・クベは公王府の印が入った高品質な羊皮紙と共に、コピー用紙に記された書類を用意する。

外交文書は相手の様子も考え、羊皮紙を使用した物を用意したが、それを見た外交官の顔色は驚愕の色から喜色へと変化する。

「ジオン公国総帥、ギレン・ザビ及び公王陛下デギン・ザビの署名の入った外交文書です。内容はクワ・トイネとの安全保障条約。そしてロウリア王国の宣戦布告後に発布される宣戦布告文書の写しです。クワ・トイネとクイラがロウリア王国と戦闘状態に入った場合、わがジオン公国はロウリア王国に宣戦布告……あの国を大陸から消し去ります」

中央暦1639年4月11日午前——ロウリア・クワトイネ国境
30 km 付近

ロウリア王国東方討伐軍は近世のレベルで言えば、練度が非常に高く、よく訓練された軍隊である。加えて、ワイバーンの大量投入や魔法通信などの情報通信は地球のそれとは比べ物にならない、システムティックな戦闘行動が可能となる。その効果的な戦闘能力はクワ・トイネやクイラと比べれば歴然としている。だがそれは神聖ミリシアル帝国やパーパルティア製の魔法具。自国生産のものではなく、列強からの輸入品によって成り立っていた。

すでに、外交ルートから即時撤退を要求する文書が多く送られ、魔

法通信のオープンチャンネルではクワ・トイネとクイラ両国の軍から再度解散要求がされるが、すべて無視。そして、軍用魔導通信は新しい暗号を使い、進軍の準備が進められている。

「明日、ギムを落とすぞ」

軍議のテントに響く將軍パンドールの声に他の騎士や指揮官は緊張した表情を浮かべていた。ギムに攻め込む先遣隊約3万が彼の指揮下にあり、その内訳は歩兵2万、重装歩兵5千、騎兵2千、遊撃兵1000、魔獣使い250、魔導師100、そして、竜騎兵150である。

その軍備にパンドールは内心、必ず勝てると思える。しかし、その思いが表情にでることはなかった。必勝である状況ではあるが、指揮官がそれを周囲に見られれば、戦いは非常に杜撰でもろいものとなる。

だが練度はクワ・トイネと比べて高く、これまでの情報を統合しても、クワ・トイネとクイラの弱兵はロウリアの10分の1以下に等しい戦闘力である。これほどの軍勢で攻撃を仕掛ければ城塞都市であるギムは陥落するであろう。

「ギムでの戦利品はいかがでしょうか？」

副将のアデムが話しかける。彼の冷酷な性格はパンドールも目に余るものであったが、軍略の才や荒ぶる兵士の抑え方も心得ている。なにより、そうした兵の人望もあつい。

「副将アデムよ、お前に任せる。」

「了解いたしました。」

進行すれば、国境の町ギムは後方拠点として使われることになる。中途半端に占領しても禍根を残すだけ。それなら、アデムのような冷酷な人物に任せ、恐怖によって街を支配する方が効果的である。

パンドールは凌辱と略奪の命令などしたくない。だが、アデムは最適な人材であり、さっさとパンドールは奥へ引っ込んでいく。

「ギムでは、略奪を咎めない、好きにしている。女は虜ってもいいが、使い終わったらすべて処分するように。一人も生きて町を出すな。全軍に知らせよ」

「不味い……」

ギム駐留のワイバーンの数は24騎。ロウリアはその約3倍。如何に精銳の騎士団所属のワイバーンであっても、その兵力の差は覆せない。物語のような竜騎士が一騎当千の活躍をするなど、現実ではありえない話なのだ。

戦いの定石はワイバーンの掃討から制空権の確保。そして、歩兵や騎兵による攻撃。城壁の突破が挙げられる。だが、戦場の定石とは覆すべきものである。イモジは他の通信魔導士の報告によって顔を青くする。

「敵およそ2万がこちらに接近中！兵種は歩兵に騎兵、攻城兵器を多数保有しています」

「くそーこのままでは」

ギム駐留の西部方面騎士団の総兵力は約4000。五倍の戦力を持つロウリアに太刀打ちできるはずもない。ギムはロウリアの雑兵に蹂躪され、女子供は陵辱されて殺される。男はそのまま根絶やしにされるだろう。多くの騎士団は町に家族がおり、死守するつもりで戦うだろう。既にイモジは民間人の脱出を優先していたが、機動力のある騎兵やワイバーンによる攻撃から避難がうまくいっていない。

包囲されてしまえば、確実に町は地獄となる。

歩兵と騎兵、そしてワイバーンによる電撃攻撃はまさに破竹の勢い。クワ・トイネの少数部隊では太刀打ちできず、満身に魔導通信器を持たない部隊は、情報伝達や統合的な部隊運用の出来ないために、蹂躪されていくのだ。

その光景を考えたイモジは絶望に飲み込まれそうになるが、通信魔導士の報告を聞き、顔色を変えた。

「近くに駐留中のジオン公国軍より通信！クワ・トイネとジオンとの間で結ばれた安保法の適用に伴い、救援に向かうとの事です！」

「数は?!」

「えーっと、もう一回言ってくれ！……了解、巨人の小隊を送るそうです。また歩兵部隊も複数援護に向かうとの事です」

イモジは神の御加護があったことを感謝し、涙腺が崩壊する。民間人を助けられることが分り、通信士に避難民の脱出路を確保するよう要請する。

ギムの長い一日は始まったばかりだった。

一方、クワ・トイネ首都には魔導封鎖やロウリアによる魔導通信施設の集中的な破壊工作によって、侵攻の第一報は昼頃まで連絡されず、緊急の政治部会が開かれたのは夕刻に入ってからだった。

情報収集を行い、崩壊した部隊の再編制。偵察隊を送り込み、状況の把握に努め、やつとのもので敵の動きを政治部会が把握するまでに相応の時間が掛かったのだ。

「現状を報告せよ」

その言葉に冷や汗をかいだ軍務卿が答えた。

「はっ！現在ギム以西は、ロウリア王国の勢力圏。ギムの攻撃には3万人の兵力を擁しており、現在ジオン軍の航空部隊によって一進一退の攻防戦を強いています。また、総作戦兵力は50万に達する模様。また、第三文明圏、フィリアデス大陸の列強国、パーパルディア皇国が、彼らに軍事支援をしていると分析しています。現に今回500騎のワイバーンを投入。また、4000隻以上の艦隊が港を出て沿岸部に上陸するかと……」

会議場は沈黙に包まれた。全官僚がその50万という兵力と自軍の兵力を比べる。クワ・トイネの兵力はその五分の一。単独では確実にクワ・トイネそのものが消え去ることになる。唯一の希望はジオン公国軍部隊が演習としてギムの近くに駐留していたことであろう。宇宙攻撃軍所属のランバ・ラルの特務隊がクワ・トイネ王国軍との合同演習中であつた。

本来であれば、キシリアなどの突撃機動軍の管轄であつたが、歩兵戦術といった技術や教導隊の教官経験を持つランバ・ラルを間借りし、MS数機と歩兵部隊、航空部隊やその他諸々を持ってきていた。中にはギャロップなどの陸上艇などもあり、既にギムの救援に向かつ

ていた。しかし、ランバ・ラルの特務教導隊は少数であり、それこそクワ・トイネ王国軍の特別教導隊に小火器訓練や現代歩兵の戦術を叩きこんでいる真つ最中。共同戦線を張れるものではない。

如何に優れた科学技術と兵器を持つていたとしても、武器弾薬や人員にも限りがあるため、ギムは奪われることを前提で行動していた。

「首相、よろしいでしょうか？」

「何だ？」

軍務卿の次に手を挙げたのは外交をメインとする外務卿であった。

「ジオン公国軍の申し出によって、今回のギム救援は特別教導隊も含めた部隊が投入されますが、まだ部隊の装備転換は進んでいません。ジオン公国軍はロウリア王国にたいして宣戦布告を決定。準備していた部隊の派兵を決定したとのことです」

会場がざわつく。

何故なら、既に派兵準備をしたというのだから。誰との戦を準備していたのかと、政治部会の面々は様々な憶測が飛び交った。ロデニウス大陸を征服するための部隊を既に準備していたのではないか。これまでのインフラ整備は侵略の下準備か。と政治部会の面々が騒ぐ中、首相が「静粛に！」と喝を言い、静かになる。

「ジオン軍は転移前に地球連邦軍との戦争を準備しており、一月の流星群はその戦いで撃沈した地球連邦やジオンの船だとの事です。彼らは常備軍を多く備えています、総力戦のためと聞いています」

「なんと、あの流星群は彼らがやったのか・・・!?」

ロデニウス大陸でも観測された1月初めに起きた流星群。天文学上ありえないことだったが、ジオンと連邦の戦争であったなら説明がつく。とは言え、彼らの脳内には宇宙という空間がどのようなものか、宇宙戦艦といったものがどのようなものかは想像できていなかった。

「だが、派兵するとして……その引き換えは？彼らとて無下に国民を

戦地に送ることは避けたいはず。彼らの望みはなんだ？」

首相は外務卿に尋ね、外務卿はマ・クベが外交官経由で渡された一つの要望書を読み始める。

ジオン公国はクワ・トイネ公国およびクイラ王国への軍事的援助及び、ロウリア王国の撃滅を約束する代わりに次の事を要請する。

- 1、・セツルメント国家連合への加入
- 2、・ジオン公国との軍事協定
- 3、・ロウリア王国降伏後はロウリアの全権をジオン公国に委ねる
- 4、・なお、ロウリアが行った損害についてはジオンが立て替える
- 5、・戦争終結後は安全保障上、大陸全土に安全保障において万全な状態にするため基地を建設する。

「一体なんだこれは！我が国を傀儡にする気か!？」

軍務卿は声を荒げる。明らかに国力も技術力も上であることは分っている。しかし、ここまで下に見られた条件はあまりにも酷い。とは言え、国家を廃して、ジオンの属国にするのではない。対等の関係としてセツルメント国家連合という国際組織に加盟するという、比較的に優しい要請でもある。

憤慨する軍務卿であったが、首相は「落ち着け」といい、場が静まると共に話し始めた。

「皆、これまで彼らのしてきたことは分っているはずだ。彼らの科学技術は我が国のそれを軽く凌駕している。それこそ、一週間で征服してもおかしくない。だが、彼らはそれをせず、三大文明圏の国々のような目下のような扱いをしなかった。」

「ですが………!？」

「そうだ、彼らは我々に尋ねている。死を選ぶか我と共に栄華を築くか………。これまで我が国は文明圏の列強とはそこまでかわらず、独立国を維持してきた。不当に搾取され、虐げられる苦しきは分っているはずだ」

大国ロウリアと対立そして大国のパワーゲームに巻き込まれる小国。歴史上、クワ・トイネやクイラもその腰を曲げて、大国に頭を垂

れてきた。ジオンも同じく、連邦政府に対して搾取され、中央政府に
対して意見を言えず腐敗する官僚政治がコロニーを搾取する体制が
出来上がっていた。

クワ・トイネとクイラの両国は情報収集のために留学生に紛れて諜
報部隊を派遣していた。彼らはジオンの実情とそれまでの苦難を知
り、政治部会に提出していた。

実はキシリア機関に感づかれているのだが、情報収集はどここの国で
も行われるものであり、国力を分らせるために、知ってて放置してい
たのである。

「ジオンは我々を無下にはしないだろう。私はこの要請を受け入れよ
うと思う。どうだろう、皆？私と共に生きてくれるか？」

政治部会は全会一致をもって、ジオン公国と密約を結ぶ。そして数
日後ジオン公国はギムの奪還とロウリア王国の制圧と解体を目指し
た『バステューユ作戦』を発動した。

第七話 ギム後退戦【修正済】

「逃げる！逃げる！一つ目の巨人が来るぞ！」

「なんであいつ、死なねえんだ！化け物かよ！」

「死にたくない！死にたくない！」

兵士達の狼狽えた叫び声が戦場に響き、狂乱する若い兵士の姿。古参兵も死にたくないと思われ、甲冑を脱ぎ捨て脱走する。兵士達は皆、口ウリア王国の兵士達だった。国境線の街、ギムは半日で落とせると思われていた。だが、どうだろう？二万の兵力を投入し、クワ・トイネ公国の西部方面騎士団のワイバーンをすべて撃墜、脱出しようとする避難民を追い詰めてから風向きが変わり始めた。

最初は変な音と共に現れたムーの飛行機械にも似た鉄の塊。3機と少なく、その20倍の数のワイバーンが手ぐすね引いて待っていた。だが、圧勝であるはずの遭遇戦はワイバーンがバーベキューになってしまった。ジオン公国のズム工廠で製造された大気圏内用戦闘機「ドップ」が横隊陣形のまま迫ると、ミサイルポッドに装填されたミサイルを発射。近接信管を用いたそれは密集するワイバーンを纏めて黒焦げにして、搭載された30mm機関砲をぶっ放す。ワイバーンの火炎弾を放つものの全く当らず、音速で飛行するそれに横切られたワイバーンは何故か吹き飛ばされ、地上に叩き落された。そしてすべてのワイバーンが蹂躪されると、次は避難民を脱出させないようにしていた騎兵隊や軽歩兵に対して攻撃を行った。ワイバーンが行う火炎弾以上の的確な攻撃が行われ、一時間近く蹂躪すると姿を消した。

だが、それで終わりではなかった。西の谷から緑色の巨人が出てくると、三大文明圏で使われる魔導砲クラスの砲撃が降り注ぎ、歩兵他、魔獣の肉片が飛散し、中世的な密集陣営は瞬く間に精肉工場と化した。発砲音が響き渡るたびに大地が抉れ、味方が空を舞う。ある兵士はがむしやらに突撃し、肉片となって帰ってくるか、またある者は百人隊長の命令のないまま撤退を行う。ギム包囲は瓦解し、ギムに残っていた民間人は急いで脱出を始めていた。

その時のギム包囲から亜人殲滅の任を受けたアテムはその凶悪な顔を歪め、撤退を進言する兵を斬り殺し、進軍を指示したという。その後、緑色の巨人の攻撃は砲撃からその巨体の足で踏みつぶす戦略がとられたものの、数時間で撤退した。しかし、ギムの市街戦は混沌としていた。民間人は未だに街の中におり、略奪を行おうとした部隊が街の中に進軍。しかし、金属製の荷車から攻撃を受け、バタバタと兵たちは死んでいく。また、歪な地竜のような金属製の変な動く荷車が接近し、発砲と同時に兵士たちが吹き飛ばされる。また破裂音と共に味方の兵が血を流して倒れていく。

圧倒的な兵力を持っていたギム攻略のため編成した部隊は壊滅。予備部隊の殆どが戦闘不能になっていた。3日間の戦闘の末にギムの街を占領した時には、本国で編成された本隊が支援し、ジオン軍は這う体で後退していったと末端の兵士に向けて布告が為された。しかし、噂話は想像以上に広まりを見せるもの。ギムを攻め落とせずに攻撃部隊が壊滅したという知らせはほとんどの兵が知ることになり、ロウリア王国軍部はそのことを徹底して隠そうとする。だが、失った兵員は隠すことは出来ず、行軍進路上にあり、要衝の一つだったためにその惨状は既に一般民衆にも広がっていることだろう。

「なんてことだ……まで被害がでるとは……」

將軍パンドールは副将アテムの報告に落胆する。ジオン公国という国は中々侮れないと考えていたが、鉄の巨人やムーの飛行機械、そしてパーパルディアの鉄砲にも似た武器。しかも、パーパルディアのそれより数段に高性能であった。

一体、何と戦っていたのかと疑問に思う。そして、この度の戦争に對して不安を覚えた。

彼の不安は一週間もしないうちに現実になるなど、思いもよらなかった。



「フフ、この風……この肌触りこそ、戦争よ！」

ジオン公国軍の野戦服に身を包み、ギムの前線にいるのは嘗てジオンの名家として知られるラル家の当主、ランバ・ラルだった。戦場の匂いを嗅ぎ、戦士の魂を呼び起こす。持っていたスマルツアMP―7
1 短機関銃の引き金を引き、迫りくるロウリア歩兵達をバタバタと薙ぎ倒す。

「大尉い！準備完了です！」

「よくやったクランプ！アコースとコズンのザクの弾薬補給は?!」

「持ってきた弾薬は全て使い切りました！流星に踏みつぶすのはもう無理ですよ」

軍人とは言え、理性を持った人間である。生身の人間をMSの足で踏みつぶす行為はあまり教本には載っていない。そもそも、非人道的行為であり、パイロットの精神的観点から勧められていない。それでも行つたのは、略奪と陵辱目的から街への侵入を目論む蛮族であったからだ。しかし、ザクを操縦するアコース、コズンの両名は民間人を守るために非道に墜ちようとした。ランバ・ラルとてその決断は難しく、二人を労わねばと考えていた。

「クランプ、民間人の誘導は?」

「クワ・トイネの教導隊が誘導してます！奴ら張り切ってます」

クランプは持っていたStG78 ライフルを腰だめ撃ちし、バリエードを壊して現れた重装歩兵をハチの巣にする。

教導隊やゲリラ戦のプロフェッショナルであるランバ・ラル率いる特務隊。彼らの任務はクワ・トイネで新たに結成された教導隊の指導である。宇宙世紀における標準的な兵士を育てるため、ギムの街のおよそ40kmの地点で演習を行っていた。しかし、まだ訓練はまだ始まったばかりであり、ランバ・ラルの背中を守らせるには心もとなく、今回は避難民誘導や伝令として軍務についていた。

「そうか。……よし、第二防衛線まで後退する。騎士団の奴らにも伝えろ！」

「了解！野郎ども！後退だ！」

クランプの合図と共にジオン軍兵士は後退し、あるものは手りゅう弾や榴弾発射機を使用して、後退を援護した。その後退に気づいた口ウリア兵は一矢報いるつもりで騎馬兵が束になって呐喊する。だが、それはランバ・ラルの常套手段であった。

「よし、クランプ！爆破しろ！」

「了解！エデン特製カクテルを食らえ！」

クランプは手元にある有線起爆装置を起動する。数百のボールベアリングが飛散し、突貫する騎士と軍馬は共々ミンチになり、クレイモア地雷の威力は騎馬を狂乱させ、歩兵部隊が躊躇するに十分だった。そして、クランプはもう一度他のスイッチを押す。

次の瞬間、通路に立ち止まる兵士に倒れるように、三階建ての家々が崩れていく。ギムは比較的小さい町であったが、城塞都市であるために建造物は比較的高い。細い道であったために敵兵が集中しているため、タイミングよく建物を破壊できれば瓦礫で敵を倒せるのだ。

「ルッゲンが偵察中。敵の歩兵部隊は迂回路を探すとの事！」

「そうか、避難はもう終わりそうか？」

「ちよつと待つてください……もう撤退しても大丈夫そうです。西部方面騎士団の残存兵力も撤退始めました」

――頃合いだな。

ランバ・ラルはクランプへ撤退命令の無線をするように言うと、腰のベルトに入れていた信号銃を空へと放つ。もともと、ミノフスキー粒子影響化での任務を想定して訓練してきた部隊である。無線が使えない状況では信号弾を撃つ決まりとなっている。

信号弾はザクの全長を軽く越し、赤い炎が空に滞空する。

その赤い信号弾の意味は撤退信号。

だが、これは負けではない。民間人をすべて脱出させ、敵をギムの城壁に釘付けにしていた。この撤退は勝戦。多大な犠牲を払ってロウリア王国はギムを制圧するが、あるのは廃墟と略奪予定だった食料の残骸、焼夷手榴弾によって燃えたごみかすになっている。休息を取ることもできず、亜人の女を慰み者にしようとしても、どこにもいやしない。

「この戦いは我々の勝ちだ」

「ギム包囲脱出戦」歴史書に語り継がれるランバ・ラルによる脱出劇。これはジオンやセツルメント国家連合のコロニーにおいても、悪逆非道のロウリア王国軍からクワ・トイネの民間人を救助するということで、英雄として深く評価されるに至った。

第八話 ロデニウス沖海戦【修正済】

ズムシテイにある一角。そこにはジオン公国の他、各サイドにある企業体の技術者や責任者が集められていた。ジオニツク社などのジオン軍需産業の面々がいたが、彼らは主役ではない。主役は連邦軍向けの軍需を展開する企業の面々だ。中には両者に武器を提供するアナイム社の存在もあり、その集まりの内容を知らなければ、ジオンの有識者会議か経団連を設立するのではと勘ぐってしまいそうだ。しかし、その会議はそんなに単純な話ではない。

「ジオン公国軍はあの惑星での軍事行動……防衛のための兵器を模索中だ。今後の調査や現地の友好国のために兵器などを製造してもらいたい」

今回の議長を務めるのは、政財界にも明るいギニアス・サハリン技術少将だった。サハリン家はムンゾ自治共和国時代からジオニツク社などの大企業と親しい間柄であり、ギニアスとアイナが両親と離別して以降は、ザビ家や他の両家からバックアップを受けていた。ギニアスは元々、メガ粒子砲や火器管制システムなどの研究者であるが、こうした良家のパイプがあるために、今回の会議の音頭を取ってもらっている。

ギニアスはサハリン家の復興を目論んでいるが、実のところ自身の病気に関する治療に光明を見出したからでもある。ギニアスは開発途上段階であった「アップサラス」を実用段階にして、連邦を打倒。その功績をもってサハリン家を復興する計画だった。しかし、転移後は、連邦が駆逐され、アップサラス計画も凍結された。

失意のどん底だったが、新たな惑星に魔法を用いた治療技術がある」と聞き、ギニアスはそれに飛びついた。ザビ家との取引の後に、地上兵器のノウハウを持つ連邦系企業との連携を行えば、優先的に治療技術を渡すということで、ギニアスはそれを引き受けたのである。放射線病を患い、幾ばくかの人生しか残されておらず、ただ一人の肉親

であるアイナを残していくことを危惧していた彼は持病を押して、この会議に参加していた。

「アナハイム社のスタークです。以前、連邦からミノフスキー粒子を利用した大気圏上でも使用できるミノフスキー・クラフト。所謂、熱核エンジンを使用せずとも、ミノフスキー粒子を利用した浮遊動力機関を開発しています。そちらをザンジバル級巡洋艦に搭載するのはいかがでしょうか？」

アナハイム・エレクトロニクス社は連邦など軍民の様々なものを手掛ける大企業の一つである。「スプーンから戦艦まで」製造するのがアナハイム社であり、ホワイトベースや強襲揚陸艦の設計、建設なども行っている企業である。

「ハービック、ルウム支社のタナカです。大気圏や重力は地球と同じであると資料にありましたが、それはお間違いはないでしょうか？でしたら、連邦系兵器をジオン公国軍に納入しますか？」

「新規設計も後々考えていますが、直ぐに投入できるのであればしていただきたいところですよ」

ハービックは地球連邦軍に多くの武器兵器を製造する企業であり、本社はワシントンD・C. に置かれている。しかし、本社との通信途絶。コロニーの支社や工場などは、ジオン支持派のデモにより被害を受けていた。今後は肩身が狭くなり、ジオン・ラインメタル社による買収や吸収合併もあり得る。そうなれば、ハービックそのものが無くなりかねず、彼らの家族は路頭に迷うことになるかもしれない。後ろ盾の欲しいハービックはジオン政府への協力を惜しまない方針だった。

「ヤシマ工業のヤシマです。一つお聞きしたい……ジオンが行うのは侵略戦争ですか？」

発言したのは、この中でも支社長といった役職ではなく、会社に名前を付けた会社の顔とされる人物。シュウ・ヤシマ会長であった。ヤシマ重工は一応、本社を東京に置いていたものの、製造拠点はコロニーなどに移転しており、既に本社機能の殆どがルウムに移転していた。ただ、戦争勃発前にはサイド7に移住していたが、ルウム会戦に

において連邦軍が敗退。サイド7やルナ2に残存兵力を移す時に戦禍を逃れて、再びルウムへと戻ってきていた。

彼は地球連邦の体制や腐敗に対してよく思わず、サイド7に移住したのだが、ジオンの提唱する選民思想やギレンの一人独裁においては断固とした態度を取っており、一切ジオンとの取引をしていない人物でもあった。

そんな人物が何故ここにいるのか。

ジオンの国内情勢が変わりつつあり、ギレン総帥は選民思想を掲げる団体をテロ準備組織として壊滅させ、自身も選民思想に対して一言も話さないようになってしまったからである。選民思想は民衆を纏める手段と割り切っていたのかもしれない。地球連邦政府や軍は『有り得ない』と高を括っていたが、多くがコロニー落としを予測していた。コロニーの殆どを核で焼き尽くさず、他の連邦系コロニーへ恭順の機会を与えたのがきっかけだった。

そんな彼を企業から出向した人々は息を飲み、ギニアスの答えを注視した。

「ギレン総帥は嘗ての人類が行った地球の環境汚染や温暖化を現地種族がするのではと危惧されておられる。聞いているかと思うが、友好国のクワ・トイネとクイラに対して攻撃を仕掛けたロウリア王国にジオンは宣戦布告を行った。非道な命令と種族の撲滅を目指す彼らに対して、鉄槌を下すのがジオンの意思である」

ギニアスの後ろのスクリーンには、ロデニウス大陸の地図が表示される。某社員は「オーストラリア大陸に似ているな」と呟き、ロウリア王国から出る矢印がクワ・トイネの領土を侵略している様子を表していた。

「ここにはかつて連邦政府を支持していた者もいると思う。そして、ジオンを疑う者もいよう。民間人への殺戮は……このサハリン家の名に懸けてありえないことを誓おう。」

ギニアスの言葉を聞き、多くの人々は顔を見合わせる。ムンゾからあるサイド3の名家、サハリンの当主が頭を下げることなど普通はない。そのギニアスの言葉を受けて、ヤシマ重工のシュウ・ヤシマは立

ち上がった。

「ギニアスさん、頭をお上げください。私やここに居る連邦に連なる企業はジオンの掲げる選民思想や独裁には反対です」

ヤシマはそこで言葉を区切り、メガネを拭く。

「私自身、アースノイドです。ですが、ギレン総帥が唱える地球連邦の腐敗については私も胸を痛めています。今後、ジオン公国は人類を率い、二度と選民思想や独裁に手を伸ばさないのであれば、協力は惜しみません」

「なんと……」

会議室は騒然となり、多くの企業の人間は耳打ちする。ヤシマを中心に対ジオン企業体を形成しようという企みを持っていた連邦よりの企業は、彼の発言に頭を抱えていた。

「この前、ギレン総帥が自分の後援団体をテロ準備組織として壊滅させたことは存じています。ただ、まだ私を含めてジオン公国が選民思想や独裁と言った旧世紀の指導者にならないか心配なのです。ギレン総帥が今後、ジオン公国の民主化と独裁について改善していくと約束していただき、言論の自由や三権分立の確立、不当逮捕や秘密警察の解散など『正常な国家運営』を実施。選民思想という悪しき独裁者の戯言を二度と言わないことを約束してください」

ヤシマ重工の賛同により、ジオン系企業も含め、ヴィックウエリントンやサムソニー、トヨタ、タキム、ノーフォークなどの企業が参入。後のセツルメント国家連合の経済団体連合会が発足した瞬間だった。

だが、セツルメント国家連合と経済団体連合会はジオン公国の独裁体制やギレン総帥の全権委任に基づく集権化に反対していた。選民思想はやめたギレンだったが、今後セツルメントという国家形態がどのようなにして、ジオンを阻んでいくのか、ギレンを含めたジオンの人間には予想できなかった。

「やはりジオンはレビルを締め上げる気だろう。我々はどうする?」

数であり、ある程度敵を押しとどめた後に、ゲリラ戦。戦力温存のためには十数隻程は他の無事な港へ退避させるつもりだった。

「……敵は4000隻を超える大艦隊………海岸の街は殆ど壊滅する」

側近に本音を漏らす。圧倒的な物量の前にどうしようもない気持ちさがこみ上げる。多くの部下は何としても守り抜く決意で作業していたが、敵艦隊と会戦しても一度撤退を余儀なくされる。その後は一撃離脱を繰り返すゲリラ戦を展開しなければならぬ。たとえ、本拠地であるマイハークが火の海に包まれていても、温存のために無謀な戦いは避けねばならないのだ。

だが、マイハークを抑えられれば、クイラへの食糧供給が出来なくなる。半年もしないうちにクイラは飢餓に襲われるだろう。既に海岸線の要所にはクワ・トイネの他、クイラ王国軍の部隊が多数配備されている。敵を撃退したとしても、マイハークなどの主要交易路の麻痺により、餓死者が出ることは避けられそうにない。

「提督、海軍本部から、魔伝が届いています」

側近であり、優秀な士官であるブルーアイは海軍本部より暗号魔伝の封を渡す。

「読め」

「はっ！本日夕刻、ジオン公国の………」

「どうした？続きを」

言いよどむブルーアイに驚く提督であったが、怪訝な表情を浮かべながら彼は文を読み上げる。

「はっ、軌道上より降下する宇宙攻撃軍所属、コンスコン少将指揮する4隻の降下部隊が到着する。我が軍より先にロウリア艦隊に攻撃を行うため、観戦武官1名を彼らの旗艦に搭乗させるように指令する」

「何!?! たったの4隻!?! 400隻か40隻の間違いでは?！」

「間違いではありません」

4000隻の敵艦隊に対して50隻のクワ・トイネ艦隊。そして、先制攻撃を加えるのはジオン公国軍の宇宙攻撃軍のコンスコン隊。艦隊とも呼べないたった四隻に何が出来るのかと、失望のあまり椅子に寄りかかってしまう。

「やる気はあるのか、わが国が存亡の危機に直面しているというのに！それになんだ宇宙攻撃軍って！馬鹿にしているのか！しかも観戦武官だと？4隻しか来ないなら、観戦武官に死ねと言っているようなものではないか!!」

いつも温厚であり、部下からも人気のある提督であったが、流石の提督にも怒り位はある。デスクに拳を叩き付け、怒り心頭であった。しかし、いくら命令書を読んでも、4隻の文字は変わることなく、宇宙攻撃軍とは一体何かと説明書きすら見当たらない。

「・・・私が行きます」

執務室に沈黙と失望が充満する中、ブルーアイが発言する。

「しかし・・・。」

「閣下、私ならば問題ありません。ジオン公国は我が国の数百年以上文明が進んでいます。彼らも無下に4隻の軍艦を死地に送り出しはしないでしょう」

「・・・すまない・・・。たのんだ」

「はっつっ！」

とは言っても、ブルーアイも4隻という数の少なさに驚いていた。もしかすれば悪い夢なのではと思うぐらいである。

そして、その日の夕刻。

マイハークにあるワイバーン飛行場に来たブルーアイは、目を疑っていた。何せ海軍の将校である彼はどう考えても、港に来るはずだと思っていたのに、飛行場に来るよう言われ、何が何だか分らなかつた。

その船は彼の常識からかけ離れていた。ジオンとの接触の時、海軍が海上を浮く黄色い金属製の箱を目撃し、外務省は空飛ぶ箱舟のようなものから人がおりてきたと言っていた。あまりにも現実味のないため、酒場で誇張して作り話をしたのではないかと思っていた。

しかし、どうだろう。今彼が見ている船は空を飛んでいる。全長250m近い鉄の箱舟が空を飛び、地上に着陸している一隻を除けば、3隻の巨体が宙に浮いているのだ。周囲を見ればブルーアイの他にも、ワイバーンを世話する作業員はポカンと宙を見上げており、竜騎士ですらその有様である。

すると、モスグリーン色の鉄の箱の一部が開かれ、15m弱の巨人が姿を現す。周囲にいた作業兵は悲鳴にも似た声を挙げ、ワイバーンですらその巨体に対し恐怖したように吠え出す。

ブルーアイには見えなかったが、MS-06J ZAKUⅡの文字が胸に刻まれている。そして、その胸が開くとともに、人間と思われる搭乗者が見えていた。

「きよ、巨人に人が?!」

「驚きましたかね?」

「!?」

ブルーアイが視線を近づいてきた人たちへ向ける。そこには見慣れない軍服を身にまとう老練の指揮官らしき姿と秘書らしき女性がいた。もう一人は軽装備であるものの、武装していることが分り、護衛なのだろう。先頭の人物が右手を差し出し、握手を求めた。

「ジオン公国宇宙攻撃軍所属、コンスコン機動特務隊　コンスコン少将です。ブルーアイ少佐でよろしかったかな?」

「はっ、そうであります! 出迎えしていただきありがとうございます!」

少将は少佐のブルーアイからしてみれば、殿上人である。少佐と言う階級もジオンの階級をモデルに作った階級であり、ブルーアイの以前の肩書は海軍男爵だ。そんなコンスコンが観戦武官を呼びに来るなど、彼からしてみれば驚愕であった。

「硬くならなくともよい! ワシもコイツに乗ってそこまで時間は経ってないが、なかなか楽しい乗り物だ。会戦まで客船のつもりで楽しんでくれ」

気さくなおじさんと言ってもいいだろう。威圧的な軍服な割には、

海が見えず、夜のために松明によって照らされたそれはまるで真昼間のようであった。密集した船舶はまさに海上都市と見間違えても不思議ではない。6年の歳月をかけて、パーパルディア皇国の軍事援助を経て、ようやく完成した大艦隊。

—これだけの大艦隊を防ぐ手立ては、ロデニウス大陸には無い。いや、もしかしたら、パーパルディア皇国でさえ制圧できそうな気がする。シャークンは野心的な考えを思い浮かべたが、直ぐにやめてしまった。もちろん、政府首脳陣は取引に何らかの譲歩をしたはず。そして、パーパルティアはそこまでお人好しではない。

だが、この光景を見れば、ロウリア人であれば歴史のページを飾る。見たことを子孫に語り継ぐことだろうと思う。そこまでその光景は記憶に残るものであった。

しかし、彼や艦隊の皆は気づいていなかった。彼らははるか上空を飛行する衛星によって捉えられ、監視されていることに。

そして、彼らの近くを鉄製の巨人が泳いでいることなど知る由もなかった。

「海将！北の方角から何かが接近してきます！」

「ワイバーンか？」

と言つても、まだ陸地まで距離がある。以前までは海岸線ぞいに進むことも考えていた。しかし、それでは時間も敵の準備も進んでしまう。海上の風によって迂回してマイハークへ上陸する方が効果的だと考えていた。クワ・トイネのワイバーンは航続距離が短く、ここまでは飛んでこれない。

「違います、大きさは……大きいです。全長250m?!距離は100000！」

「お前、酔っ払っているのか？」

流石のシャークンもそこまでの深酒を許可したわけではない。多少の宴は許可しているが、酔っ払った状態で監視任務についているなど、言語道断だった。シャークンは腰にあったサーベルの柄を掴むが、監視員は驚いた様子で弁解する。

「酔っ払ってはおりません！母に誓ってそのようなことは！ご確認を

！」

シャークンは監視員から単眼鏡を奪い取り、監視員の見ていたものを見る。そこにあつたのは三つの浮遊する何か。シャークンは一体何なのかと思うが、その物体はやがて大きくなり、その大きさは自身の知るジン・ハークの海軍司令部より大きいことを知る。

「な、なんなのだ！これはあ！！！！」

夜空を飛ぶ三つの黒い影。彼らは知る由もない。ジオン公国が建造したザンジバル級巡洋艦、木造船など紙のように吹き飛ばし、神々の怒りに触れたのかと船員は恐怖する。そして神々の雷が落された。黄色い光線が最もマイハークに近い船舶が攻撃を受けて撃沈する。周りの船も巻き込まれ、一瞬で数隻が跡形もなくなっていた。

（こちらはジオン公国軍である。貴官らは我が国の同盟国へ宣戦布告した。わが友邦を助けるため助太刀する。しかし、わが方に手加減はできない。もし、退却すれば追撃しないことを約束しよう）

「くそー馬鹿にしゃがって!!」

シャークンは自分たちが人と戦っていることを知り、憤慨する。神であれば納得できよう。だが、同じ人間である。ならば、己の剣も通じるはずであろうし、バリスタや攻撃魔法も当たれば倒せるはずと考えたのである。

「全軍、あの空飛ぶデカブツに攻撃を加えろ！」

「全艦隊攻撃を開始！目標、上空の巨大飛翔体！」

魔導通信という情報伝達がリアルタイムで出来ることで、すぐさま艦隊は戦闘が開始された。バリスタによる攻撃が行われ、脂を染み込ませた火矢を放つ。しかし、それらは運よく当たっても大したダメージは与えられず、逆に味方に当たってしまう。

「ぐえー！」

「ばか！味方を射つてどうする?!」

艦隊は混乱し、ザンジバル三隻は「警告はした」と放送すると同時に、ミサイルが放たれた。オーバーキルであろう多目的ミサイルの飽和攻撃。一瞬で前方数百隻が木端微塵に吹き飛び、木片の他、肉片が宙を舞う。まさに地獄と化し、既に前方船団は崩壊寸前であった。そ

して、二射三射とメガ粒子砲によって砲撃され、海水面は沸騰する。

「船はもうだめだ！うわ！熱い！」

「なんてことだ！海が熱湯になってるぞ！」

船が炎上してしまえば、海に飛び込むのが普通である。だが、海も灼熱となり、だれも逃げる場所無く遂に船団の殆どが混乱していった。

「なんとということだ……」

もはや、指揮する気力も消え失せ、愕然と膝をつく。しかし、まだ終わらない。艦隊の中央に位置する彼の乗船の隣の船に突然、爪が生えた。

船体の竜骨を突き破り、マストをぶち破ったそれはまるで船底から突き刺したようになっていた。それは一気に引き抜かれ、隣の船は海底へ没した。

「な、なんだいまのは!?!」

「海将、海中に何かが！」

「何かとはなんだ!?!」

シャークンは先程の若い監視員へ叫ぶが、既にその姿はない。彼がいたところには巨大な爪が刺さり、茶色く塗られた金属とピンク色に光る一つ目を目撃し意識を失ったのであった。

同時刻、コンスコン少将と共にザンジバル級巡洋艦『エムデン』に乗るクワ・トイネ公国の観戦武官ブルーアイは目の前で起こることが現実か分らなかつた。まるで神話における神々の戦いの様だった。神々の雷は海を割り、下々の者は海に飲み込まれる。そして、海から出てくるリヴァイアサンがその魂を海底に縛り付ける。それは今まさにブルーアイの目の前で起こっていた。

「ザンジバル級に搭載されるメガ粒子砲による一斉射撃は海面を沸騰させます。先程の放送の意味がお判りでしょう。これらは我が艦と同様の船へ攻撃するために作られたものなのです」

コンスコンの説明は若輩者であるブルーアイに分かりやすく、しかしそれでも分らない。理屈で理解できようとも、目の前の戦いは戦い

でなく、虐殺である。しかし、彼らは我々に弓を引き、クワ・トイネを蹂躪しようとしていたのだから、大義名分はこちらにある。しかし、だからといって、目の前の地獄を正当化できなかつた。

「……………むごいです」

「確かに……………ですが、それによつてマイハークは守られた」

コンスコンとて軍人である。そして、相手も軍人である。それなら容赦することは彼らの名誉を汚すことになる。

「あれは一体……………」

ブルーアイの指さす先には水陸両用MS、先行配備されたMSM-03ゴッグであつた。

「先行配備された水陸両用MSです。我々はゴッグと呼んでいます」

「ゴッグ…ですか」

「ええ、もし普通にやっていたれば六月にロールアウトでしたが、サイド6とサイド5の海洋コロニーで試験運用ができたため、助かりましたよ」

話は少しさかのぼる。ギニアス主導のセツルメント経済団体連合会を発足し、サイド7を除いてコロニーの経済や企業体はジオンを中心に動き始めた。

他のコロニーの水産プラントや海流プラントなどに入れて試験運用をおこない、完全に投入可能であることが分つたので、そのままザンジバル級の四番艦にそれらは搭載していたのである。そのため、水陸両用MS開発計画は数か月早く進むことになり、一足早くコンスコン少将の元に届けられたのだ。ゴッグが暴れる様子はまるで海神の怒りとも呼べるような有様であり、振り下ろされたゴッグのアイアンネイルは木造船を叩き潰していく。

「そうですか」

もし、ロウリア王国にジオン公国軍が着いたらどうだつただろうか。軍人として「もし」という事はあまり考えないようになっている。もし、命令をしなかつたら、部下の命を救えたのに、と自問自答をくりかえすことになる。それは次から次へと戦場を渡る軍人にとって鬼門である。

る。政治部会の各々の手元には、戦果の記載された印刷物が配布。そのほか、ジオン公国が提供した映像をスクリーンに出しており、部会構成員の多くは絶句し、啞然となっていた。

「では、なにか!? ジオンは4隻で、ロウリア艦隊4400隻に挑み、ほぼ全てを海の藻屑! 拳句の果てにこんな巨人を使って暴れた?! これらの技術は凄まじいが……これは作りものじゃないのか?」

「そんな御伽噺でも出来すぎた話、政治部会で、観戦武官の君がわざわざ嘘をつくとも思えないが、この映像見てもどうにも分らない」

誰もが同じ思いだった。観戦武官の彼でさえ、信じられない戦果。信じられない光景である。未だに事実であることが受け止めきれない。

「外務卿! 大体、彼らは温厚な国民であったと言っていたじゃないか?」

野次が飛ぶ。

彼らの表情は国難を脱した歓喜の表情ではない。まさに未知なる敵を相手にしている恐怖。ジオン公国に対する恐怖はザンジバルが使節をつれてやってきた時から潜在的にあった。だが、海戦の報告を聞いた政治部会は最初は疑いの目でブルーアイを見たが、ジオン軍に提供された戦闘映像は彼らを恐怖させる共に、ジオンに対して疑いの目を向け始めた。

「いずれにせよ、今回の海からの侵攻は防げた。まだ陸軍戦力が残っているが、これからはそちらの対処が必要となる。陸軍卿、状況説明を」

首相のカナタは話題を強引に変え、陸軍司令官の陸軍卿に問うた。

「現在ロウリア王国は、ギムの周辺陣地の構築を行っております。海からの進撃が失敗に終わったため、ギムの守りを固めてから再度進出してくるものと思われまます。」

軍務卿はギム周辺地図を机に広げ、敵の配置状況を詳細伝えている。

「敵部隊はギムの街を中心に陣地を形成しています。兵力は本国から1万増員され、総戦力は二万。ジオン教導隊の決死の防衛によって、敵陣は…塹壕と呼ばれる穴を掘って防衛陣地を作っています」ランバ・ラルやザクⅡの攻撃によって大被害を受けた征伐軍は戦術を転換せねばならず、ジオンの銃撃やザクマシンガンによる砲撃から身を守るために、遮蔽物のない場所には塹壕を掘り、その場に待機するようになった。

ともあれ、クワ・トイネからすれば、身動きのできない部隊は格好の標的であるとして、騎馬隊を主力とした戦力を投入した作戦を提案するが、外務卿が挙手する。

「ジオン公国が今回のギム奪回に対して、ギムの半径10キロに近づかないよう求めています」

「何だと！一体何のために……」

「ギムへの強襲奪還作戦を計画中です」

「まさか……いやいい」

もはや、怒る気にもなれず、ブルーアイの報告ではジオン公国の兵器は威力が大きく、非常に扱いにくいということが分っていた。既に近くに配備していた部隊へ待機するよう命じ、ジオン公国の戦いによってロウリア王国が斃れていく様を目のあたりにしていくのだった。

同時刻、ロウリア王国の王都ジン・ハーク。初代王の名前から取った首都と王位継承者に与えられる名前、そしてその名のついたハーク城。その34代と続く王家は紆余曲折しながらも、血筋は絶えずに生きながらえてきた。歴史書の多くは、没落した王族などにフォーカスが当てられもするが、大王、ハーク・ロウリア34世は、稀に見る先見の明があると自他共に認めていた。

ロデニウス大陸外の大国、三大文明圏のパーパルティアへ使節を派遣し、属国の扱いになるうとも、ロウリア王国を栄えさせようとしていたのだ。独立国に拘るあまり、国際社会から取り残されないように

と、王権を駆使してここまでやってきていたのである。ロウリア王国以外にもそうした国家は多々あり、其れこそ多くの国が三大文明圏国家に擦り寄り、その文化に影響されて成長している。

そう考えれば、現国王は開明的ともいえるだろう。

そんな国王は確実に勝てるはずの戦いに敗北した。ギムの前哨戦では、派遣した二万の兵力のうち、おおよそ半分が喪失。辛うじて占領したがギムの街はものけの殻。そして現地指揮官もジオンの攻撃を恐れて進軍できずにいたのだ。

そして、最大の目玉である海軍4000隻余りの上陸部隊をクワ・トイネの経済都市マイハークへ差し向けた。だが、その結果はジオンの空飛ぶ箱舟と巨大な鉄の蟹のような化け物が大艦隊を襲い、生き残った船舶はわずか400隻程度。

後世ではロデニウス沖大海戦と呼ぶだろうが、虐殺と呼ぶにふさわしい。確実に勝てるはずの戦いが負け、ロウリアに莫大な借金が嵩むこととなる。国王はヤケ酒を飲み、泥酔していた。

「パーパルティアから軍事的援助をもらい、半ば属国のような国家になっても、国民と王家を守るために何でもやっていた。それなのにこの有様。一体私が何をしたというのか！」

国王は荒れ狂い、再びアルコール度数の高い酒をがぶ飲みし、内臓が焼けるように感じていた。生きているという感覚、陸軍がギムからクワ・トイネの首都まで進軍すれば、勝機はあるだろう。だが、それまで予想以上の出費が予想される。もし、大陸の覇者になっても、子孫に借金が残り、自分はその栄光を垣間見ることは不可能だと国王は悟っていた。

「ワシは無理でも、これからの息子達がなんとか……大陸統一を……」

国王は意識を失い、そのままベッドへダイブする。国王の祈りは全く届かぬまま、ロウリア王国の夜は更けていった。

第九話 エジエイの戦い 【修正済】

ロデニウス沖海戦の大敗北は機密扱いとなった。だが、国威発揚のために出陣の際には大々的な発表をしていたからか、その後の4000隻の行方、マイハークの状況などを知らうとする者が続出した。戦争という行為そのものは消費行動であり、其処には多くの大金が渦巻いている。それ目当てに来る商人は多く、ロウリアやクワ・トイネは対外的に対立しつつも、商人と言った民間は取引をちゃっかりしていたりするのである。

そのため、ロウリア王国海軍の大艦隊壊滅の報は瞬く間に広がり、『人の口に戸は立てられぬ』という諺もあるように、口外を禁じようとも誰かが漏らしていた。ギムやその周囲の駐屯地にもその情報は伝わり、ロウリア王国東部諸侯団クワ・トイネ先遣隊では衝撃が走っており、士気の低下が目立つ。

さらに、ギム攻撃戦で現れたジオン公国所属の部隊とそれと一緒にいた緑の巨人。多くの兵が斃れていき、兵力の半分が死傷していた。そんなこともあって、兵の士気は低く、辛うじて兵士の脱走は防げているような有様だった。

そして、威力偵察に出たホーク騎士団第15騎馬隊の約100名が、ギムの東方約25km付近で消息を絶った。騎士団司令部は、何の連絡もなしに消えたことに混乱していた。威力偵察は敵がどの程度いるか、攻撃を仕掛けていき、出方をみる任務である。何かあれば状況報告をするのが当たり前だし、騎馬隊ならば一人ぐらい戻ってきてもいいはずだ。それが誰も戻ってきていないのはどう見ても変だった。東部諸侯団を取りまとめるジューンフィア伯爵はギム周辺地図を確認し、兵の配置状況や確認された情報を元に分析する。ギムの攻防戦において、消耗した兵力の穴埋めを行ったのはロウリアの封土を頂く貴族お抱えの部隊である。王国軍とは違い、私兵や州兵のような意味合いが強い諸侯団は高い練度と引き換えに、諸侯ごとの連携の取れない部隊。

ジューンフィアもそのことは痛感しており、これまでいたアテム

などの部隊とは連携しつつも、主力である騎兵を機動力に敵陣を包囲する戦術が有効と考えていた。そのためにはまず、威力偵察やワイバーンなどによる情報収集であったが、ワイバーンは数が少なく、諸侯が保有する竜騎士は出払っていた。

副官の魔術師ワツシューナに声を掛け、実質的参謀の彼に尋ねる。「何かおかしいとは思わないか？我々は、本当にクワトイネの亜人と戦っているのだろうか、導師ワツシューナよ、どう思う？意見を述べよ」

「魔力探知には、一切反応が無く、誰も気がつかなかったのも、ワイバーン等の高魔力生物の使用や、ワイバーンの導力火炎弾のような高威力魔法の使用は無かったものと思われます」

「では何だと思う？」

「まさかとは思うのですが…。最近、導師の間で…。導師魔信掲示板に記載されていたのですが、あまりにも現実離れしており、荒唐無稽な書き込みなので、信じてはいなかったのですが…。」

魔師魔信掲示板

ロデニウス大陸の魔導士がよく使う連絡用ツールの一つであり、研究成果の他、とりとめもない会話など、横のつながりが強い魔導士にとって、これほど有意義なものはない。たまに荒らしのような匿名魔導士が誹謗中傷をするときがあり、魔導士の制裁部隊がこれらを狩り出したりする。なので、比較的平和な掲示板であったりする。無論、ロウリア王国主体の事をさす、一部ではクワ・トイネ間と連絡を取り合う魔導士もあり、見つかった場合は反逆罪として火炙りにされてしまう。

団長もその掲示板の話は耳にしたことがあり、情報の精度はともかく、学問の使徒である魔導士の掲示板によからぬことは書いてないと踏んだ彼はその話を聞いてみた。

「マイハーク攻略部隊が壊滅。ギム攻防戦の際に目撃された鉄の巨人の仕業としていらしく、ジオンと名乗っていたそうです」

その場にいた団長他、司令部全員に衝撃が走る。

マイハークへ向かう船団が壊滅したという話に驚きを隠せず、もし本当であれば、国王がそれを隠匿していたという事になる。

諸侯は国王から信任を得て封土をもらい、その剣を捧げている。命を張って戦う以上、信頼は何よりも厚くしなければならぬ。軍議に嘘偽りはご法度である以上、王がそれを隠匿した事実はロウリア全土の諸侯を敵に回したに等しい。ジューンフィールアは国王が流石にそこまではしないと、あの4000近い大船団が壊滅したとは信じられなかった。

「いや、待って待って！今回の派遣船団はそれだけでクワトイネを征服出来るほどの大部隊だった。パーパルディアに攻め入ったとしても、彼らの艦隊包囲網を数でこじ開け、上陸させられるだけの量と戦力だ。それに、保有する兵員はギムより多い。あの場所を占領するのは容易いはずだ！」

「実は・・・、ギム攻防戦時に戦闘していた中に小国ジオンが善戦したとありましたよね。大船団に対してジオンが空浮かぶ箱舟を用いて艦隊の大部分を消し飛ばし、鉄の巨人で艦隊旗艦を爆砕したという話が出てました。今、掲示板で大荒れです」

まさに「ロデニウス沖の大船団、大炎上m9（ム）プギャー」とかありそうで無いものだが、多くの従軍魔導士の証言が重なり、掲示板は大炎上。それを管理するロウリアの魔導士協会はサブ管理掲示板の維持に追われているらしい。

一同は国の頭脳である魔導士が嘘を言うとは考えず、よくある戦場伝説に近い法螺話なのか、真実だとすれば突拍子も無い話だが、まさか本当かと参謀達は頭を悩ませている。

そして、ロウリア王国東部諸侯団の諸侯を悩ませる事態があと一つ。王国軍からの指令書、恐怖の副将アテムからであった。

指令書には、
「城塞都市エジエイの西側3km先まで兵を集めよ。そこで、本隊合流まで待て」

城塞都市エジエイは国境の町ギムなどの周辺の村々とは訳が違う。クワ・トイネ公国が国土防衛の戦略として防衛線として築き上げた要

塞である。都市機能は最低限に抑え、要衝として各街道を制する場所。ここさえ落せば首都はすぐそこだが、その守りは先のギムの比ではない。攻城兵器はかなり要するし、2万の兵では心もとない。

マイハークの経済都市さえ占領できれば、補給線の崩壊で簡単に攻め入ることが出来よう。だが、攻めるには手駒が足りない。あつてもかなりの激戦になることが予想され、諸侯団は先遣隊として出血を強いることが予想された。ここで諸侯団を残していても、王権を衰退させるだけであり、憂いのある諸侯団の兵力を潰せれば王権を強められるという意思が見え見えだ。

かと言って、拒否権はないに等しい。

ジューンフィルア伯爵の部隊が拒否しても、最悪の場合抗命罪として、王国軍から粛清されるだろう。一般的にそれをすれば、他の諸侯も黙ってはいまい。しかし、副将アデムの指令に逆らったら、自分が死ぬのはもちろんのこと、家族も恐らく惨たらしい死を遂げる事になるだろう。

アデムは言わば、ゲシユタポや人民委員会などと同様、反逆した諸侯や貴族を王権の名のもと処断する。それ故に王権が強化され、アデムの地位も昇って行ったのである。ロウリア王国東部諸侯団約2万名の兵は、西へ兵を進め始めることとなる。

そして、城塞都市エジェイには、クワトイネ公国軍西部方面師団約3万人が駐屯しており、クワトイネの主力が配備されていた。総兵力としてロウリアに劣っていたが、数の利は地の利などで簡単に覆すことができ、周囲が唯一の山岳地帯だからか、防衛も容易である。城塞の籠城を崩すには守りの三倍の兵力で攻撃を仕掛けねばならないことは戦の定石である。

航空戦力はワイバーン50騎、

他、騎兵3000人、弓兵7千人、歩兵2万人。

西部方面隊の精銳が集い、国境警備の騎士団とは規模も桁違い。エジェイはロウリアが侵攻してきた場合に備えて、堅牢な軍事拠点として建設されている。そう簡単には陥落しない。クワ・トイネ公国の計

算では、エジエイだけでも3か月は持ち堪えられるよう考えており、山岳地帯を横断するようにはできた街道を守るようであるエジエイは、両軍の兵站における重要拠点だった。ここを一か月で突破しなければ、延々と続く補給線によって進軍は停止。準備を整えた公国軍の反撃によって、後退を余儀なくされるだろう。

そのため、西部方面隊將軍ノウは今回のロウリアの進攻を跳ね返せると思っていた。高さ25メートルにも達する防壁はあらゆる敵の進攻を防ぎ、空からの攻撃に対しても、対空用に訓練された精鋭ワイバーンが50騎もいる。もし、ロウリアが山岳地帯を抜けて、二方面包囲をしてくるならば、騎馬による蹂躪を取るつもりで致し、兵糧はしつかりとある。まさに要塞。鉄壁の守りであるエジエイに対し、將軍は満足そうにしていた。

「ノウ將軍、ジオン公国の方々が来られました。」

政府から協力するよう言われているため協力しているが、戦馬鹿であるノウは公国指導部の及び腰に気に入らなかった。エルフの首相の悪口を堂々と言つてのける程。そして政治部会が許可したジオン公国という国家も気に入っていない。あまりにも荒唐無稽な噂が流れており、情報戦が巧みなようだと言き捨てるように罵詈雑言を並べていたのである。

彼は所謂ドワーフという鉄鋼業や鉱物資源に関しては優秀な学者でもあるが、一番は戦である。我の剣こそ正義であるという感じで、將軍のみでありながら、低程度の国境紛争では自らが先頭に立ってロウリア兵を一刀両断したほどである。それほどまでに自尊心が高い。クワ・トイネの将兵たちも將軍の命令とあらば、命を捨てようとするだろう。人望の厚い彼は知人よりもらったドワーフの最高級の強い酒を用意し、ジオン公国の將軍を待った。

そして、將軍の執務室がノックされ、將軍は口を開く。

「どうぞ」

將軍ノウは形式上国賓であるジオンの將軍を出迎えるよう立ち上がり、彼らを迎える。

「失礼します」

一礼し、室内に入る人間が3名

「ジオン公国突撃機動軍所属、地上機動師団のノイエ・ビッター大佐です」

百戦錬磨のノウにも分る指揮官として成熟した器の大きさを瞬時に見極めた彼は以前の態度とは一転して握手をする。

「儂はクワトイネ公国西部方面師団將軍ノウという。このたびは、援軍に来ていただき、感謝の限り」

まずは社交辞令から入った。

シンプルな軍服ではあるものの、精強な顔付きや威厳のある軍服を見る限り、ジオン公国侮れないというように感じ、指揮用のテーブルにあつた周辺地図を見つつ、幾らかの社交話を交えて本題に入った。「ビッター大佐殿、ロウリア軍はギムを落とす、補給が整い次第、ここエジエイへ向かって来るでしょう。しかし、見てお解かりと思うが、エジエイは鉄壁の城塞都市、これを抜く事はいかに大軍をもつてしても無理かと」

ノウは続け、周囲の地形に対して説明を行う。

「このエジエイはギムから公国中央へ続く街道が。彼らはここを突破しなければ到達は困難。両翼には山岳地帯があり、ここを奪取しなければ、騎兵隊による追撃を受け、山岳能力のない彼らは瓦解する」

「敵には山岳師団はいないので？」

「ロウリアの弱兵は平地の農耕兵……弱腰の弱兵共です。我らドワーフを小さいと馬鹿にしているが、わしらからすれば赤子のようなもの」

籠城の期間は説明しなかったが、あまり長引かせるわけにもいかなかったため、緒戦は打って出るようで、ワイバーンを基軸とする制空権の確保と騎馬による攪乱、そして歩兵の罅迫り合いが主な戦闘内容となる。

ビッター大佐は分ったような、分っていないような顔をし、近くの情報将校は訳が分からないといったような有様だ。彼らの目の前にあるのは中世の地図。近代的な測量による地図ではなく、『ここはこ

うだったつけ?』と記憶をたどって書いたようなもの。衛星写真から書き起こした軍用地図を後で渡そうと考えるが、ノウ將軍はジオンの配置場所を伝えた。

「城塞都市エジエイの東3km先に敵が陣を敷いて待ち構えておる。その方は観戦しておいてくれればよい」

あまりにもストレートな物言いにノウの副官は驚き、一方ビッター大佐の副官はプライドを傷つけられたとばかりに憤慨する。だが、意外にも反応が無かったのはビッター大佐だった。

「成程、本国からききましたが、ノウ將軍。話と同じで豪胆ですな」

「ほう、儂の話をきいておるか」

「ええ、頑固者の偏屈おやじだと」

次は別の意味で空気が凍る。ジオンの情報将校はあまりの言いように国際問題化するのではと恐れ、一方ノウの秘書官はけろっとした感じで「今更?」と言いたげな様子だ。

いくばくか沈黙が流れる中、その沈黙を破ったのは他ならぬノウだった。

「ガツハツハツハツハ！やはり面白いのお！あんな鉄の棺桶のようなものを飛ばすし、青二才のボンボンはすぐ怒り出すが、いやはやジオンの指揮官はみなこうなのか?」

青二才のボンボンと呼ばれた情報将校は怒りの表情を作るが、ビッター大佐はノウ將軍を偏屈な変わり者爺であったことを身に染みて理解した。そして、彼の乗ってきたザンジバル級巡洋艦の存在を知っていたことに若干驚いていた。

「ほかの指揮官はどうか知りませんが、粒ぞろいですよ」

「成程、あの船の名前は何かという?」

「ザンジバル級巡洋艦といっています……そうそう、酒豪とお聞きしましてね。どうぞ」

大佐の手元にはサイド3にあるコロニー「ハマル」の高級ワインがあり、それを見たノウは酒に目がないのか、喜色のえみを浮かべた。「ほう、準備がいいのう。それでジオンの部隊はどう展開する?」

高台に陣取る諸侯団司令部のテントからは総勢二万の軍勢が城塞都市エジェイから這い出るクワ・トイネ兵を見る。動きは流石に主力なのか、均等な装備としっかりとした練度の部隊である。伯爵と言う一人の貴族として生き残らねばならないが、同時に騎士だった若いころを思い出し、武者震いか、手が震えている。

二万と二万。亜人という存在は世間で侮るものとし、侮蔑の対象とされていたが、ジューンフィルア伯爵は逆に尊敬の念を抱いていた。農耕兵といった召集兵であろうクワ・トイネの兵はロウリア兵よりも洗練された動きをしており、国土を守るためなら死も厭わないようにも見えるのだ。

「亜人として殺すには惜しいな……」

「はい？」

従卒は突然伯爵がつぶやいたものの、あまり聞こえなかったのか聞き返してしまう。本当ならばひっぱたかれても仕方ないが、従卒もまだ若くて幼い。緊張のあまり聞いていなかったのだろう。ジューンフィルアは「なんでもない」といい、魔導士から拡声器を渡され、兵への訓示を行う。彼の声は魔導士の持つ魔導通信器に接続され、東部諸侯軍二万の兵にすべて伝わった。

「ロウリアの兵らよ、私は伯爵ジューンフィルア！君達のような勇士と戦えて光栄だ。我々の対する向こうにはクワ・トイネの主力が待っている。亜人と言って侮るな！彼らは君達と同じように訓練された強者共だ。個々に奮闘し、我らロウリアの名を大陸全土に響かせようではないか!!」

二万の兵の歓声が響き、東部諸侯団の士気は最大まで高まっていた。ある物は盾と剣を叩き合わせて音を出し、獣のように雄叫びを挙げて吠える。亜人を野蛮人というのは一部間違えている。亜人や人間は戦場においてすべてが野蛮である。そこには種族の線引きなどなく、生きるか死ぬかの戦い。

種族の絶滅を掲げるロウリアはクワ・トイネ公国以上に野蛮と言えるかもしれない。

「弓兵準備！」

敵の兵へ矢の雨を降らさんがため、数千の兵が弓を引き絞る。それが放たれば、たちまち数百のクワ・トイネの兵が負傷して死に絶える。しかし、放たれた矢はよく訓練された盾によって防御され、数十人の負傷者のみしか出ず、第二射や第三射もそこまでの被害は出なかった。

「歩兵隊用意！」

「隊列を乱すな！長槍隊構え」

歩兵に交じっていた長槍を装備した兵士達。木の盾であれば簡単に貫けるそれらは振り下ろせば、斧の形をした刃が兵士の頭蓋を勝ち割れる。長槍には凶悪な攻撃力を秘めていた。

「長槍隊突撃！」

大地を揺るがす雄たけびがエジエの荒野に木霊し、槍をクワ・トイネ兵に貫かんがばかりに呐喊する。そこからは血と血を洗う合戦になり、大地は血で泥濘、肉と肉がぶつかり合い、金属と金属が削りあい、そこら中が屍臭で溢れることになるだろう。

だが、その大地を揺るがしたのはそれだけではない。

まるで、何かが発火したように土が盛り上がり、ロウリアの戦列歩兵が一気に爆散したのである。

「な、なんだこれは!？」

ジューンフィルアの叫びを打ち消すように、発砲音とほぼ同時に120mmライフル砲弾が命中し、榴弾の破片が歩兵を切り刻む。中には105mmの旧式ライフル砲や連邦軍から鹵獲した空対地30mmバルカンが掃射される。それはまさに噴火。ロウリアの兵たちは知る由もないことだが、ジューンフィルアのような貴族階級なら他の大陸にある火を噴く山。それが爆発する詳細は知る由もないことだったが、彼が見たそれは噴火と形容するにふさわしい。

配下の兵や軍馬、攻城兵器が等しく破壊され、その荒野が兵たちの身体を加えて耕されているような光景である。

「こんなことが……こんなことがあつてたまるものか!!」

敵が強くて撤退ならまだわかる。自分たちよりも優れた兵、優れた將軍であれば尚の事。しかし、どうだろう。この光景は戦争ではなく、一方的な殺戮だった。

「な……な……なんと威力の爆裂魔法!魔力投射量はどれほど?!大魔導師6000人、いや一万人でもこれは!神龍でも味方についているのか!?!」

城塞都市エジエイから見物として出てきたクワ・トイネの民間人は啞然とした様子でその光景を見ていた。また、クワ・トイネの兵たちも例外ではない。槍袞と相對し、死を覚悟した矢先に目の前で死にゆくロウリア兵を見て、喜ぶという感情はないに等しい。人知を超えたものが作用しているのではと考えるのが普通だろう。

部隊の半数が消失し、啞然となる中、エジエイの両翼にある山岳には人よりも巨大な、一つ目の巨人が幾つも立ち上がり、ロウリア兵を睨んでいた。

「じ、ジオンの化け物共めええ!」

その言葉を最後にジューンフィルア伯爵は一瞬の内に絶命し、ロウリア征伐軍は完全に崩壊することになる。

クワ・トイネ公国將軍ノウは眼前の戦場が全く理解できていなかった。自分が百数十年積み上げてきた戦いの記憶。それらは一切合切叩き潰され、巨人の放つ爆発魔法らしきもので全てが踏みにじられていた。ビッター大佐の要望通り先制攻撃を行わせようとしたが、ノウの部下たちの反対に遭い、止む無く「支援攻撃」という形でのみ戦闘を認めた。しかし、結果はノウやクワ・トイネの出る幕はないに等し

い。

「これが・・・ジオン・・・」

同盟国のなまえを呟き、背筋に冷や汗が流れる。そしてビッター大佐から聞かされていた緑の一つ目巨人の名前を思い出した。

「・・・これが、ザクか・・・」

同じく戦場を部下と一緒に駆けるビッター大佐の乗るザクⅡF型。自分と彼の戦い方。ジオンとの途方な技術格差。本来喜ぶべきこの状況の中で、彼は1人敗北感と自身の老いを新たに感じていた。

だが、戦いは終わらない。

国境の街、ギムは未だに占領されたままであつたからだ。

第十話 終結【修正済】

クワ・トイネ国境沿いにある城塞都市ギム。そこはロウリア王国陸軍の兵站拠点が設けられ、アデムによる情報統制が行われていた。海軍の上陸部隊壊滅に伴って流される噂話は彼の耳にも届き、脱走を行おうとした兵を容赦なく処刑した。明らかに過剰な刑罰であるが、ねずみ算のように指揮系統から逸脱した兵が出ることを防ぐため、恐怖によって押さえつけていた。逃亡兵の多くは『逃亡兵』『敗北主義者』『売国奴』という書かれた札を首にかけられ、吊るされる。戦線防衛にかかわらないギムの外れにある森には、無数の逃亡兵の骸が吊るされた。

「諸侯団に連絡はとれないのか!？」

ロウリア王国陸軍クワトイネ征伐隊ギム前線基地司令部では、副将アデムが軍の通信隊を怒鳴りつける。本来であれば、諸侯団司令部から合図があつて、アデムの指揮する騎馬隊がクワ・トイネの雑兵の横つ腹を殴りつける。例え、海軍の上陸部隊が作戦を失敗しようとも、公国の防衛主力を壊滅させれば、戦況は落ち着くだろう。戦場は流動しやすく、簡単に変わりやすい。一方面の敵が急に二方面の戦いに切り替われれば、兵は混乱して瓦解する。ロウリア王国軍は基本的に正面攻撃を好み、騎士道精神といった物事は重要視される。ただ、アデムはこうしたものを一切重視しない。それが敵の陽動になるのなら、確実に言う。目の前で民間人を殺傷し、敵騎士団の注意を逸らす。叛意を少しでもあると判断すれば、部隊を丸ごと囷に使う。彼の行動規範は王国にとって邪道だが、天才的な戦術家だろう。陽動や欺瞞工作を巧みに扱う彼は、モラルさえあれば稀代の將軍にもなりえる。しかし、彼の暴虐で残忍な側面は諸侯たちに反感を抱かせる。しかし、失敗すれば一族徒党は皆殺しになる。もし彼が正史のように日本に出会わなかったら、ジオンと出会わなければ、ロウリアでも有数の政治家になっていたことだろう。

「導師から、魔通信を送っていますが、返信がありません」

だが、運命は彼に味方しない。

もし会戦が負け、司令部諸共敗走しようとも連絡するのが軍隊である。二万の兵が全く連絡をよこさないというのは、どう見てもありえない。

アデムは不安と勘が警告音を発しているが、今更それを感じるのは時すでに遅し。

「どうなっているのですかあ！」

アデムのヒステリックな叫び声に、いつ切り刻まれるのではと、恐れる部下たちは冷や汗を掻く。既に何騎も偵察に出しているにも関わらず、全く持つて返信がない。「巨人が……」や「鉄の鳥が……」と言ったきり、音信不通になっているのだ。

「現在調査中でして……」

「具体的にどのような方法で調査しているのか！たわけがあ！」

サーベルの柄を握りしめ、その報告をした従卒を袈裟斬りにし、ごみを捨てるようにその場に打ち捨てる。だが、あまりの所業に将軍も我慢できずに憤る。

「やめんか！わが軍の護衛はどうなっている？」

「ワイバーンが50騎常時直衛にありますが。また飼いならした魔獣もいますので。もちろん、命あれば、いつでも出撃いたします」

「50も？多くないか？」

「いえ、今までの軍の意味不明の消失、警戒しなければロウリアの未来に関わります。クワ・トイネ軍の反撃に備えなければ」

「そうか……」

軍を引かせ、国境線まで後退するかどうか考え始めていた。これまでギムの街や村々まで攻め込んだことはあるものの、要所であるエジエイで何度か撃退されている。今回は国王がパーパルディアから大幅な譲歩と引き換えに軍事的援助を得、海軍を大幅に改造したのだ。海軍が壊滅したとの報を受ければ、現在いる部隊を国境線まで退

却し、クワ・トイネの反抗作戦に対応しなければならぬだろう。

しかし、将軍パンドールの思考は強制的に一時中断させられた。

上空を乱舞していたワイバーンのうち、16騎が突如として煙に包まれ、爆散。さらに8騎！見えない何かによって、細切れにされたワイバーンを竜騎士の破片が司令部宿舎に降り注いだ。

「なっ何だ!?何が起こったあー！」

パンドールはもとより、先程からヒステリーを起こしていたアデムは訳も分からず、サーベルを抜いていた。すると、風を斬るような音と共に近くの衛兵が斃れ、アデムは悲鳴を上げる。

「敵の侵入！隠密だ！」

そう叫ぶ衛兵は瞬く間に頭と胸へダブルタップされた銃弾がめり込み、絶命する。司令部を守る精強な騎士であり、頑丈な鎧を着ていても、亜音速の宇宙世紀のライフルには紙に等しい。暗視ゴーグルと黒い音の出ない軍用グレードのステルススーツを身にまとい、防弾ベストと手りゅう弾をぶら下げた彼らはキシリア麾下の特殊部隊であつた。

瞬く間に衛兵は瞬殺され、あたりは静かになる。また司令部テント近くには他にも兵士が複数いるはずであつた。それをかき分けてきたことにパンドールは深く感心してしまう。衛兵をすべて倒し、降伏する通信魔導士と秘書官、そしてボロ雑巾のようになったアデムを取り押さえられたパンドールは、持っていたサーベルを地面へと捨てた。

「征伐軍司令のパンドール將軍だ。君たちの指揮官は？」

「私がこの部隊の指揮官です。赤鼻と呼ばれています」

パンドールはよく見ると、頭と自称した男の鼻は赤く、黒く顔を塗っていても目立つ。一見してみれば奇妙な姿だつた。

「成程、それで降伏勧告かね」

「その通りです、それと閣下。以前から監視していましたが、この男が近隣の村々の住民を虐殺していたので？」

赤鼻の質問にパンドールは頷いた。その光景を見たアデムは「この

裏切者！」と叫び、聞き取れないような汚らしい罵り言葉で將軍を罵倒する。

「いつから見ていたのだ？」

「私は直接見てませんが、あなた方が自国領内で最後の演習をしたあたりから監視しておりました」

その言葉にパンドールは驚きを隠せなかった。さもすれば、ここまで上手くいかないのにも納得がいくというものだ。

「わかった、降伏しよう。兵たちの身柄は保証してくれないか」

「保証しましょう。しかし、虐殺行為を働いた兵や指揮官は引き渡してもらいます」

「かまわん」

「このくそ……」

アデムは猿ぐつわで口をふさがれ、フガフガと言葉にならない叫び声をあげる。將軍もかれの残虐さに呆れ果てていたのだ。軍略は申し分ないが遊び半分で亜人を拷問し、訳もなく親の前で娘を陵辱させる命令を下していた。そんな光景は軍務であつても二度と見たくはなかった。

「彼らはどうする？」

「多くの犯罪者と同じです。謀反者や犯罪者の末路はどうか？
我々の知らない深く誰にも知ることのできない深い闇の底へと落ちていくのです」

赤鼻の所属は突撃機動軍所属であるが、同時にキシリア機関の実働部隊の一員である。ジオンの暗部を知り尽くす特殊諜報部隊の一員である彼にとって、そうした戦争犯罪人や反逆者の末路は知り尽くしていた。殆どが闇の中に墜ちて、誰にも知られることなく朽ちるのだ。

中央歴1639年5月4日

6年もの歳月をかけロウリア王国が列強であるパーパルディア皇国の支援を受けて強大な軍事力を身に着けた。服従と言っていないほどの屈辱的なまでの条件を飲み、ようやく実現したロデニウス大陸を統一するための軍隊。鍊度も列強式兵隊教育により過去最大の規模を誇っていた。数代ほど借金に塗れるが、いずれクワ・トイネとクイラを占領し、富を得るのだから返すことは可能である。それを考えれば、少し我慢すればかなりの収益になると予測していたのだ。瞬く間にクワ・トイネを滅ぼし、クイラ王国を締め上げる。圧倒的勝利で勝つはずだった。

だが、ジオン公国の参戦によって全てが変わってしまった。

ロウリアに訪れた外交官は何と、宇宙に住まう人と自称したため、相手にせず。そして、魔法を使わない人々であることを知り、門前払いをしてしまった。向こうはそれでも外交努力を続けたが、憎きクワ・トイネとクイラと国交を持ったことで、国外退去を命じてしまった。

「魔術やワイバーンを持たない未開の野蛮な国家だと思っていたのにワイバーンが全く必要の無いどころか、鉄の巨人を使役して戦わせるの超文明を持った国家ではないか！」

ジン・ハーク34世は打ちひしがれた。

膝をついた拍子に王冠が転がり、場内に響く地響きにも似た爆発音と破裂音にも似た銃声が響いている。王宮内の奥に王の間が存在するため、到着するのはまだ先だろうが、時間の問題だった。

「国のために、民のために尽力していた私が何をしたというのだ！」

ジン・ハークは咆吼し、瞳からは大粒の涙が零れ出る。自室であるため、召使いや護衛は既にいない。彼らもこの攻撃で命を落とすか、逃がっているのだろうか。

もう、どうしようもない……。

「先王達よ、お許しください！私はこの国を守れませんでした！」

ロウリアという34代も続く歴史のある国家が潰えた瞬間だった。ジオンの陸戦隊が王宮の国王の私室に入った時には、即効性の毒物を飲んだ、亡きロウリア王の亡骸が残っていた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

【ズムシテイ・チャンネルはこれより大本営から生中継で『ロデニウス戦争終結宣言』をお届けします！】

【現在、ロウリア王国首都、ジン・ハークでは第101空挺強襲師団が治安維持のため、街を巡回しており、比較的小規模ながら抵抗があったものの、ほぼすべてを手中に収めたようです】

【大本営は10日までにジン・ハークにおいて首相級会談を予定しており、クイラとクワ・トイネの両国首脳を含めた降伏調印がなされる模様です】

【7日の午前、一部抵抗が続けていたロウリア王国軍西部方面諸侯軍が全面降伏。すべての部隊は武装解除し、部隊を支えていた農耕兵といった召集兵の人々はわが軍に供給される軍用携帯食を貰い、満足そうな笑みを浮かべて帰宅の途に就きました。】

【本日15時に、ロウリア統治総督府からジン・ハーク王立裁判所において軍事裁判が開廷することが発表されました。主な罪状としては国家を侵略に導き、他の民族粛清と称して大量虐殺に加担したという、征伐軍副司令官アテム氏を訴えると共に、その他民族粛清に加担した軍属や資本家などに相当の判決を下すものと思われます。これに対して、セツルメント国家連合の連合議長のイヌカイ氏は『前時代におけるトーキョー裁判やニュルンベルク裁判に準じたものにするべきであるが、主導した国王が自ら崩御された今、裁くべきは戦争犯罪人のみである』と発言。政治犯として裁くのは人道に反するとして意見を発表しました】

多くの報道機関がロデニウス統一戦争やロデニウス戦争、第四次

(クワ・トイネ公国発表)大陸戦争といった見出しの新聞が公王府のスクリーンに表示され、説明するギレンは勝ち誇ってはいなかった。

「勝ちました」

「対して気持ちが入つとらん」

とデギンからつつこみが入り、ギレンは溜息を吐いてしまう。

「しかし、父上。どう気持ちをいれるのでしょうか？ここまで空しい戦争は他に前例はありません」

—どの口がいいのか

とはデギンの口からは出なかった。寸前で止めることができたものの、コロニー落としやハッテやリアの粛清作戦「ブリティッシュ作戦」を考案した男と考えると、先のロデニウス戦争を見て空しいといえる口が本当にそこにあるのか疑わしい。

もしかすれば、アダムとかいう虐殺を指揮した将校と話があうのではなからうか。デギンはふと思っていたが、この後のジオンの動きは戦争よりも大変である。

「ギレンよ、ここからが大変だぞ。占領政策やインフラの整備、思想改革……」

「既に用意してあります。こちらを」

総帥府発行の占領プログラムである。なぜか地球侵攻作戦と記されているのは見なかったことにしたデギンであったが、そこに含まれていた科学技術の推進などは、あとから足したものなのだろう。

「すでに国土地理院の方のデータがありますが、このロウリアの東部には港や造船所に適した土地が多くあり、山岳部を抜けていけば、クイラの鉱床に近い場所があります。ここに工業地帯を建設し、この惑星の橋頭堡を築かねばなりません」

「二つ聞ぐが、ギレン……お主はこの惑星で何を為すつもりだ？」

デギンの前から考えていた疑問。それはギレンがこの世界で何を為すか。未だにジオニズムに心酔し、スペースノイドが地球を統治すべきという考えを持っていれば、これまで以上の戦乱を引き起こすこ

とになろう。

ギレンはデギンの危機感を他所に語り始めていた。

「人類が増えすぎた人口を宇宙に移民させて半世紀、あの腐敗した地球連邦は崩壊しつつある地球環境を野放しにし、あまつさえ……………」

「30字以内にまとめんか！この馬鹿たれ」

「……………」

演説ぐせがついていたギレンであり、そんなことは分っているデギンである。長男がこんな有様で溜息をつくデギンであるが、そのまま短くしたバージョンで語りだす。

「この惑星の近くに来た以上、関わらないのは政治的にもあの惑星に住む彼らにとってもいい事ではありません。今後、あの星は文明が進むにつれて地球のように汚染されていきます」

「して、どうするつもりか」

「出来る限り、我々がコントロールすれば問題ありません」

「戦争か」

文明が進んでいれば、他を吸収し肥大化する。地球もこの星の歴史も同じことが繰り返されてきた。コントロールするということは血を流して、自分たちを同化するか、異なる物を撃滅しない限り肥大化しない。詰まる所、戦争しかないのだろう。

しかし、デギンの予想を良い形で裏切った。

「いえ、確かに戦争といえは戦争ですが、侵略ではなく経済や文化面でどうかしてもらいます」

いずれにしても、ジオンと同規模の科学技術を持つ国家は存在しない。そのため、戦争して一気に更地にするなど容易い。コロニーを落としたっていいのだ。だが、大規模な戦闘を行えば行うほど血が

多く流れ、その後に禍根を残すことになる。戦争に至るまでに様々な方法で同化が進めば、戦争という形でなくとも、国盗りは可能である。それが親ジオン政権の樹立や併合など、既にジオンと同規模かつ同じ文明であれば、セツルメント国家連合といったジオンびいきの国際機関を結成することもやぶさかではない。

決して地球連邦政府のような腐敗した組織にならぬよう、余計な脂肪や腐ったところは出さない。ギレンは大きく方針を転換して総帥としての任に当たっていたのである。

―そして、ジオンが関わったことで運命は大きく交差する。

廃案

「おまえは中世の………」

「なんですかな？」

「チャップリン」

「喜劇王か！」

第十一話 戦後処理（加筆）

「サハリン少将、ご苦労だった」

月面都市グラナダの機動突撃軍司令の執務室。そこには主であるキシリア・ザビがミノフスキー粒子散布下でも使用可能なレーザー通信機器を用いて、サイド3のギニアスとテレビ通話を行っていた。キシリアからすれば、連邦系列の企業などどうでもよかったが、「サハリン少将が企業纏めてくれると助かるなく」という感じで強面ゴリラのドズルに言われれば、重い腰を挙げなくてはならない。

しかし、キシリアの目の前には惑星への軍事作戦や占領軍の書類など山積みになっている。もし、ドズルならば人に任すかもしれないが、それでもできず。更にキシリア機関である民間諜報ネットワークを束ねる長として、公務以外の書類も処理しなければならず、殆ど働き詰めの毎日である。彼女の秘書は業務別に数十人規模で仕事をさせているが、既に数名は体調を崩し、リタイヤ。

人員の補充と育成も考えるキシリアであったが、猫の手も借りたい程の仕事量はジオンの人手不足を物語っていた。連日仕事に明け暮れる彼女だったが、そんな彼女の覆面からでも分る疲労の色より酷いのは、ギニアスの顔である。頬は痩せこけ、目の下にある隈が黒々と見え、化粧で誤魔化せそうなものだがそうはいかないだろう。早急に医療魔術の調査を進めなければならなかったが、まずはギニアスの報告を聞かねばならない。

「セツルメント国家連合の経済団体連合会の結成までこぎつけることが出来ました。会長をシュウ・ヤシマ氏にするとの意見が集まっています。彼はこちらに好意的ですので、なんとかなるかと」

「私ではなく、君にだろう。だが、私としてはヤシマ氏が会長になってくれるのは朗報だ」

キシリアは覆面の下でほくそ笑む。

シュウ・ヤシマ率いるヤシマ重工業はコロニーを又に掛ける多国籍企業の一つである。コロニー国家レベルの資産を持ち、コロニー建造も担う会社の一つである。ヤシマを冠する兵器開発企業もあるが、転

移を受けてヤシマ工業の傘下についている。その影響力は日系企業のトヨタを彷彿させるが、自動車会社のみならず情熱を注ぐ技術者集団の彼らと様々な業界に手を伸ばす複合巨大企業とは、全く異なっている。

その影響力は計り知れず、味方にして損はない。

一方、連邦系の企業体は百害あって一利なしの組織だが、その工業的ノウハウや蓄積された技術はジオニックスやMIP等のジオン系列企業とは一線を画す。何せ、宇宙世紀の始まり以前、地球連邦前からある老舗企業。

ジオンも系譜を辿れば、連邦の政治家や企業団体も関わってくるが、会社独自のノウハウや継承されてきた技術は門外不出とも言える。嘗ての合衆国がハイテク軍艦の根本技術をブラックスボックス化して、同盟国に解き明かせないようブロックしているのと同じである。解析不能なテクノロジーや会社独自のものは幾ら地上に降下して探したとしても、無理がある。それこそ一年だけでは、資源しか奪えないだろう。

しかし、連邦系企業体はレビルなどの連邦軍と太いパイプでつながっている。それも頑丈なほどに。それを考えれば、スパイを身内にするような行為は危ない。だが、地球と同じ環境のあの星では、地球連邦軍の武装が非常に適していた。地上での戦闘を考えていなかったジオン軍はかねてより地球侵攻も視野には入れていた。

コロニーで地上を想定した兵器開発。旧世紀の兵器思想や戦略思想。レーダーを根底とした戦略から有視界戦闘による物量戦。開発した兵器はそのまま上陸した部隊へと供給された。

結果、ランバ・ラルの特務隊がギムでの後退戦を行った際、銃の暴発によって負傷者が数名発生。加えて、不良装填や弾詰まりが発生した。また、MS-06Fが演習中にオーバーヒートを起こして炎上。関節部に砂利やほこりが入り、不調を来す等様々な問題が浮上した。

ドップがマッハ3まで飛ばすと、途中で耐え切れずに空中分解した。

宇宙往来機を改造したガウ攻撃空母はエンジンが二基しかなく、片方が壊れると姿勢制御が出来ない。

マゼラアタックは回転できず、固定砲塔の戦車。とは言うものの、歩兵支援車両の扱いであるため、扱いには苦労するし、物量戦の経験もなければ、低程度紛争しか経験していない宇宙世紀の軍隊が何を考えたのか。「砲塔が回らないなら、飛ばせばいいじゃない」そのため、意味の分からない砲塔のみ短期間浮遊するというトンデモびっくりメカが誕生する。

もつとも、浮遊すると元の車両へ着陸できない仕様となっているため、一旦飛ばせば整備しなくてはならず、既に砲塔旋回用キットと離着陸用キットが製造元から供給されている。

コロニー内で「これは絶対勝てる」とか思っても、地上で運用した場合……

「ばっかじゃねーの、誰だよこれ設計したの！」と前線の兵士から殴られかねない。

その報告は地上展開部隊の血涙の滲んだ陳情書して、キシリアの手にある。さすがに無視するわけにもいかない彼女は、連邦の技術を吸収する意味もかねてサハリン家を使ったのだ。

「私の指名する役員はいれたのか？」

「ええ、中将。ご指示通りにしました。アナハイムとヴァイツカースの役員を」

既に、役員にはキシリア機関の内通者が含まれている。そのため経済団体連合会の情報は筒抜けとなる。

「連邦軍のサポートに回る彼らを見つけられるよう、こちらから議題を出していく。サハリン家は形だけの役員としていてほしい。」

「それは助かります。私には腹芸などできませんので」

ギニアスは甘い笑みを浮かべるが、キシリアには通用しない。

「少将にはこれを頼みたい」

キシリアはパソコンのファイルをギニアスの元へ送る。そのデー

夕は人工衛星を軌道上に設置したときに連邦軍の部隊が展開。その時に撮影した映像とそれを元に見繕ったデータである。

「これは……」

戦闘詳報のデータの他、『赤い彗星』シャア・アズナブル少佐の戦闘データと共にモノアイから撮影した映像である。そこにはザクⅡの機体よりもスリムな外見を持つMSが映されていた。カーキ色の塗装と100mm徹甲弾を発射する対MSマシンガンを装備しており、その機動性や防御能力はジオンのMSよりも強固だと言えよう。

「そうだ、連邦が作ったのだ。しかも、赤いキャノンより強い」

シャアや黒い三連星、青い巨星が作った脅威査定では、赤いRX-77-1ガンキャノンは機動性に乏しく、対MS戦闘を考慮したザクシリーズの脅威になりにくいと判断されていた。ただし、密集陣形と火力は侮れない。「MSⅡ対歩兵支援兵器」と考えられていた連邦がジオンのMS設計思想に追い付くには時間がかかるだろうと踏んでいた。しかし、連邦は対MS戦闘を考慮に入れた、新MSの開発を終えていたのである。

「情報部の収集したデータとルウムの宇宙軍司令部の残存するデータを元にその機体の名前が分かっている。局地戦用に設計されたRG M-79（G）陸戦型ジムと言うらしい。既にドズル中将の指揮下でアズナブル少佐が件のRX計画を探っている。サハリン少将にはこれを」

「これは陸戦型？宇宙型にチューンしたタイプという事ですか？」

「元々は地球に送られるはずだったようだが、相当数が試作品と先行量産の状態でルナⅡに大量保管されていたようだ。だが、彼らは新たにMSを製造できるか……」

「このMSは貴官の望むものがあるだろう」

「……」

ジオンと連邦軍はかねてより、宇宙的兵器であるビーム兵器小型化の開発に着手していた。MS開発はジオンが先を行っていたが、総合的な面からみても、地球連邦の科学技術は二手三手先を行っていた。それはMSの構造にも見られ、ザクの装甲は強硬スチール合金による

ものである。一方、連邦の対抗馬であるジムは其れよりも固いチタン合金で出来ている。これはチタンを算出する鉱山が連邦にしか存在せず、国力の差を表していた。

一方、連邦MSの試作機であるガンダムタイプは非常に効果であるルナチタニウム合金が使われており、ガンダム他RXシリーズ、陸戦型ジムやガンダムには多くのルナチタニウムが使われている。

資源不足はあらゆる分野に影響を与えているのである。だが、それだけではない

「MSの解析と共に連邦のビーム兵器を確認してもらいたい。実物を送る。それに貴公の行う研究にも使えるのではないかな？」

「それは……」

ギニアスは腹芸ができるような人間ではない。名家として政治的な決断や駆け引きをする能力はあるが、キシリアのような女傑にできるようなレベルは持ち合わせていない。

先の質問や研究へ使えるというキシリアのセリフ。明らかにそれはギニアスに対して、「私はお前を見ているぞ」という脅しだろう。

—それとも、こちらの出方次第なのか

「キシリア閣下はどのようなことをお聞きになったので？」

「ああ、MIPやジオニック系の技術者を引き抜き、サハリン家御用達の技術者を集めて何かしているとしか。だが、もう一つ、君の妹君が試作型ザクで戦闘中に連邦のMSと戦闘。漂流したのちに、ハツテにいた連邦軍兵士に助けられたと聞いた」

—すべてお見通しか

ギニアスは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべそうになったが、ぎりぎりのところで堪える。ギニアスが計画、実行する「アップサラス計画」はサハリン家復興のための極秘一大事業である。魔法医療によって難病を治癒できる可能性があるとはいえ、今でも研究は続けられている。アップサラスは岩盤の固い地球連邦軍総司令部ジャブローを高

出力メガ粒子砲によって溶かし、一気に殲滅する決戦MA兵器として開発された。その威力は一閃で山が抉れ、その存在は蒸発してしまふ。ミノフスキークラフトによって航空力学を無視した質量を浮遊させ、超大型MAビッグザムよりも優れ、二個師団程度の敵戦力をせん滅する能力を秘める。しかし、南極条約や地球がない以上、存在理由である「南極条約下におけるジャブロー攻略」は無くなり、アプサラス計画は採用されぬままとなったのだ。

しかし、ギニアスはあきらめてはいない。

サハリン家の数少ない伝手を利用し、自身の研究に使える科学者を各業界から集め、残り少ない資産を切り崩して研究する日々。しかし、それでも間に合わずに、ジオンの開発費に少しばかり手を付けてしまっている。キシリアはそれに目を付けていたのだろう。

キシリアは暗い顔をするギニアスに対して鼻で笑い、姿勢を崩す。「そう怖い顔をするな。額もそれほどは……しかし、度し難い行為であることに変わりないが」

「更迭ですか？」

ギニアス是最悪の結末を想像するが、キシリアは首を振る。

「いや、私はお前の能力を買っている。私用資金だが、資金援助を行おう。それに、私の子飼いの部下が現地の医療機関で有望な医者を見つけた。研究所に送ろう」

地獄に仏とはまさにこれだった。

ギニアスはキシリアの配下に入ることになるが、突撃機動軍の所属であつて、これまでと変わらない。ただ、技術開発費の横領と言う弱点を握られた状態であり、服従に等しい。

「それと、ハツテに無人のダークコロニーがある。壊さない限り好きに使つて構わん。成果が出た暁には、サハリン家の復興を手助けしよう。期待しているぞ、少将」

キシリアはギニアスとの回線を切り、直ぐに秘書へと次の連絡をするように指示を下す

「ロウリアの官僚共を呼び出せ、大至急急がせろ」

といつてもそんな色目を使えば、MS用のどでかいスパナが飛んでくるためそんなことはできない。

「もおく、熱すぎるー！こんなところ嫌！」

格納庫は戦時下ではないので、閑散としており、整備兵も休憩中であるためその場所にはいない。とはいえ、男所帯の休憩所でティーンエイジャーは居心地悪い。その休憩所もエアコンのない部屋であるため、休憩所の整備兵はうだる暑さの中ぶっ倒れている。短くカットした半ズボンとへそ出しの私服を着れば多少涼しくなるが、MS整備中はそれらを着られない。白い技官の軍服もしかり。繋ぎを律儀にもしつかり着ているメイは上着の部分を腰に巻こうかと考えるが、中はタンクトップ。男性なら脱げるかもだが、14歳のうら若き乙女にとっては抵抗がある。

男勝りな女軍人ならやりそうだし、クイラに駐留する別の隊の女士官はタンクトップと野戦服のズボンという、女性の象徴的な二つの双丘が強調されている服装を思い出し、嫉妬にも似た気持ち再び心中を掻き乱す。軍隊にいれば、軍規や士気の関係上、肌の露出も抑えなければならず、彼女の知る同隊の女性隊員は規則に沿って規定通りの軍服を着用する。子供だからと甘く見られているが、一応軍属である手前、本人としては子供に見られたくないという意地もあって、周りの整備兵と同じような格好をしているのだ。

ただ、彼女を含め彼らにとつては地獄にも等しい環境。コロニーであれば、空調が効いている。コロニー全体が人工物であり、無茶な気候にはならない。雪も雨もできるが、茹だる暑さと日光は真似できない。

もやしつ子スペースノイドにクイラの砂漠地帯は毒だった。

「こうなったら、コムサイのエアコンぶっこぬいて格納庫に設置しようかな？」

「いやいや、やめてくれ。借りものなんだ…」

「隊長さん！やつと帰ってきた！」

メイがクイラ王国の砂漠にいる理由。

ダグラス・ローデン大佐率いるMS特務遊撃隊はキシリアの指示によって、クイラの演習場を借りて訓練を行っていた。FLV降下後にMS格納庫建設後、新型MSの試験運用と陸戦兵器の運用試験を行うのが任務である。

格納庫には基本的なジオン軍のMSであるMS-06FやMS-06J、加えてデザートタイプもあり、砂漠地帯での耐久テストを行っていた。他にも、グフやドムなども見られ、砂漠などの過酷な環境下での試験が行われている。

テストパイロットを務めるのは、外人部隊として知られるMS特務遊撃隊。ローデン大佐自らがリクルートを行い、集めてきた優秀な人材。もし、連邦との全面戦争とジオンによるコロニーへの核攻撃があったのならば、彼らの地位も違ってこよう。外人部隊のMS小隊指揮官のケン・ビーターシユタット少尉はメカニックとして頑張っているメイに差し入れを持ってきていた。

「ねえ、隊長さん！そろそろ休暇を取るころだと思わない？」

「来てそこまで経ってないだろう？あと一週間の辛抱だ」

「え〜！」

途端にぶー垂れるメイ。熱帯野戦服を着るビーターシユタット少尉は士官用のため、デザインが下士官や兵のそれと若干異なるが、メイの厚手の繋ぎと比べれば非常に涼しい服装だった。

不機嫌になるメイに溜息を吐きつつ、隠していたクーラーボックスを出す。

「独り占めしないように〜！」

「わーい、隊長愛してる〜！」

知らないような人が聞いたら驚くようなことを言うメイは少尉の

静止も聞かずに、休憩室の古参整備兵の元へと駆け出していた。

「まったく……戦場はここにないからいいか……」

クイラ王国から借りた広大な砂漠地帯。戦争など見えず、たまに行商人のラクダとそれに乗る爬虫類系の住人とあいさつを交わす程度。

呑気なメイの笑顔を思い出し、クーラーボックスを振り回していくようにして休憩室に入り、どんちゃん騒ぎしているのを見て笑ってしまっていた。

「隊長？」

「ああ、ユウキ伍長、どうした？」

戦術オペレーターとして、また音響分析による敵戦力の把握などが行える、部隊のサポートを行う日系人のユウキ・ナカザト伍長は派遣司令部から送られた命令書を渡す。真面目な彼女はつい最近まで顔色を変えずに部隊のオペレーションを行っていたが、先日熱中症によりダウン。そのため、腕捲りや首元を開けるような特例が、熱帯対応の軍服が届くまでのその場しのぎとして通達が下されたが、流石に首元のチャックは下すのに抵抗があったのか。腕捲りをするユウキ伍長の珍しい格好になっていた。

それでも、熱い状況に汗を流す彼女を労わるように、メイに渡す前にとっておいた清涼飲料水を渡す。

「あ、ありがとうございます！」

「部下を労わるのが上司の務めさ……それで要件は？」

「はい、試作MSの受領と仮想敵機を使用した本格的な対MS戦闘訓練をするようにとの事です」

「この兵と合同訓練が先……じゃないみたいだな。まさか、連邦の活動が？」

「この惑星ではまだですが、命令書の次のページを見てください」

ケンの見る写真はキシリアがサハリン家に見せた連邦MSの写真。それを見た彼の顔が怪訝な表情になり、戦闘中にとられたものもあれば、ムサイの格納庫で撮影したMSの部品らしき残骸。写真の一枚には、隅に赤い彗星の乗機が映っていたこともあり、撃破したのが誰であるかを教えてくれる。

問題なのは、そのMSのスペックが新型試作機の劣化版に過ぎず、ザクの装甲を上回り、核融合炉の出力も熱核ホバーを搭載するドムとほとんど変わらず、機体の大きさは一回り小さく、スリムな印象を抱く。

もし、試作機がそれ以上の性能で攻撃を仕掛けてくることがあれば、ザクを主力とする部隊は太刀打ちができないだろう。

「残骸だけでここまで分析できるものなんだな」

「はい、ですが上層部は未だにジオンの技術的優位はあると考えているみたいで……」

「成程、上は腐りやすいのはどこの世界も同じだな」

MS小隊指揮官のケン・ビーターシユタット少尉は元々コロニー公社で働く技術者だった。

コロニー公社と言えば、地球連邦のお膝元である。宇宙開発と植民事業を手掛けるコロニー公社であるが、天下りや腐敗があったことでも知られる。資源小惑星帯の公的資金の横領により、ありもしない「酸素税」が取られ、ムンゾからジオン共和国が建国されてから、連邦とコロニー公社の汚職が暴かれた。これにより、反連邦や独立運動の動機ともされ、これを受けてコロニー公社の殆どがスペースノイドに占められた。

ケンはその内のコロニー公社の重役や管理職の汚職によって、繰り上げで昇進し、技術責任者としてサイド3に一時的な住まいを手に入れ、コロニーの保全を行っていた。しかし、思わぬ所で軍当局に拘束される。

『ブリティッシュユ作戦』

ジャブローにコロニー落としを敢行するために拘束され、家族を人質にされることになった。しかし、結局その作戦はコロニー落としを省

はクイラの資源や奴隷の供給。その他の国宝などを売り渡し、借金を10年がかりで支払うという屈辱的な条件の元に交わされたものである。

マ・クベ以外は野蛮な条約と思うだろうが、彼は違っていた。

多くの文明圏や圏外国家は列強へ擦り寄り、同様の条約を締結している。敵対姿勢をすることによって増大する軍事費。一方で属国のような扱いを除けば経済的に豊かになることに加え、その文化の恩恵に預かれることを鑑みれば、ロウリア王国のような文明圏外国家が取る方策は少ない。

持たざる者の選択肢は少なく、ロウリア王の選択肢は間違っていると思えないマ・クベだった。

「閣下、汚職の貴族官僚の拘束を完了しました。これがリストになります」

副官のウラガンは慣れない統治作業に汗を流しながら仕事に励み、ロウリアに蔓延っていた汚職官僚や税金を着服する貴族のリストをマ・クベに手渡した。

「やや、やつれているな。統治専門の文官を寄越すよう本国に掛け合ってみるか」

「……恐れ入ります」

ウラガンの疲れ果てた様子を鑑みたマ・クベは書類の束に埋もれる本国へ送る要望書に統治や行政に長けた者を求めると記し、マ・クベ総督サインをしてウラガンに渡す。彼は将兵から計算高く、冷徹な判断を下す狡猾な性格であると噂されるが、それとは裏腹に信頼する部下への情は厚い。軍務について以降、ずっと補佐としてついていたウラガンであるが、未だにマ・クベの表情や感情は読み取れない。官僚や政治家としての才があるのか、もしくはウラガンの能力が劣っているかわからない。だがウラガンはマ・クベに使えないと判断され、転属されるのではないかと肝を冷やしていた。だが、ウラガンの予想は

外れ、部下を労わるように微笑んだ。

「そう恐々とするな。別に攻めている訳ではない。……私もこの国の実態に驚いたし、辟易している」

宇宙世紀の行政や統治機構は非常に優秀である。それこそ、巧妙な汚職はあっても、表立ったものはない。洗練された統治システムや秀でた官僚、汚職をしない文化水準の元、彼らは生活していた。

だが、ロウリア王国の文明レベルは近世に入る手前。それこそ、国境や国の権益、主権などが考えられた時代、宗教戦争が終結したウエストフアリア条約以降の文化水準である。未だに封建制国家であるため、ナポレオン戦争以降のナシヨナリズムは形成されていない。

国家という枠組みが統治者の間で考えられていても、国民が国家の一員であるという事は浸透していない。それは末端の官僚にも言えることであり、「統治者＝支配者」の意味合いが強かった。そして、マ・クベや他の将校が思っていた以上に、ロウリア王国や他の国家は汚職にあふれていたのだ。

官僚寄り、いや殆ど官僚や政治家の色が強いマ・クベである。戦略・戦術に秀た将軍と比べると劣るが、寧ろ占領軍司令官として政治的采配を担うことを考えれば適任。殆ど、本職に近いのだが、あまりにも雑務が多いために、若干疲れの色が見え始めていた。

「クワ・トイネ公国とクイラは公国官僚を招き入れて国家改革を行うとあります。本国でもロウリアを連邦制にして、ロデニウス大陸連邦国家に作り変えようと考える一派もいますから」

「セツルメント構成国だろう……ギレン閣下もこのままなし崩しに属国にも出来たが……キシリア閣下の突き上げもあったのだらうな」

ギレン総帥は所謂ジオン公国政府の行政府長として君臨し、政府の長として指導している。だが、完全な独裁政権と言えそうではなく、キシリアやドズルなどのザビ家を要所に配置した一党独裁、一家独裁政権を樹立する。

ザビ家も一枚岩でなく、キシリアのバックにはセツルメント経済団

体連合会がおり、ジオン企業の多くが彼女の後ろ盾になっている。もし、ジオン以外のコロニーを属国扱いにしてしまえば、経済が滞るのには目に見えている。デモや暴動、内戦状態になる可能性もあるため、キシリア派の将校や政府官僚はセツルメント国家連合の設立を推進していた。

占領統治に関して仕事が山になっているのにも関わらず、そうした突き上げや多くの政治家、官僚、軍人に至るまでマ・クベの所に陳情書を持ってきている有様だ。

仕事を全部放り出して、自分のコレクションを元に美術館でも建てようかと、ふと考えてしまうのは仕方が無い。

「それで、明日の予定を教えてくださいませんか？」

「はっ、明日の11時より、総督府にてギルド連合商業会との会議。内容は関税に関する制度の成立。正午は総督府設立の懇親会。午後15時にはロウリア旧王国軍の解体についての問い合わせでジューン・フィルア將軍との会談、午後18時にロウリア王国美術協会とのパーティーです」

「美術協会には我が方から幾つか寄付を。贋作ではあるが……あちらも指して問題ないだろう」

ロウリア総督となったマ・クベであるが、自身の目的であるジオンの文化を復興、地球文化とも劣らないものを構築したがっていた。そして、ロウリア王国占領後、多くの美術品がジオン公国に流れ込んだ。接収や略奪が一割ほどあったものの、多くが賠償やジオンの貨幣取得のための放出であり、マ・クベはコンサルタント料として幾らか貰い、ジオンの美術界にコネがあるため、多くの見返りがあった。

それは、ジオンの資源不足の問題を解決するだけでなく、マ・クベが思うジオンの文化的問題をも解決し、予定が過密であっても、彼の表情は非常に喜色に満ちていた。

「あと、パーパルティア皇国から外交文書が来ています」

「内容は『借金返せ』とかだろう。『既にロウリアはジオン公国であり、支払う義理も蛮族の庇護下になくとも生きていける。さっさと帰れ』とでも送れ」

だが、宇宙世紀^{U.C.}0079になって世界は一変した。
地球が突如として消失した。

そして現れたのは、未知の惑星。

七つのコロニー国家と月面国家、駐留する地球連邦軍は混乱の極みであつたが、これを好機とみた人物がいる。

ジオン公国総帥ギレン・ザビ。

彼は独立戦争と称して地球連邦残存軍に対して宣戦布告。加えて他の連邦寄りコロニー国家に対しても開戦し、事実上奇襲攻撃によってコロニー国家の殆どを手中に収めた。更に、軍需的要所である月も抑え、ジオンは覇権国家として頂点に立った。

だが、まだ問題は残っている。

残存する連邦宇宙軍は建設途中のサイド7とルナIIに立てこもり、徹底抗戦を続けている。ジオン大本営はこの二大拠点を陥落せしめるのに一年かかると発表しており、これまでの戦いより小規模になるだろうが、問題はそれだけではない。惑星の衛星軌道上に二個目の月が現れたのだ。

コロニーは綿密な軌道計算の元、各ラグランジュポイントにスペースコロニーを軌道上へ載せている。これまでにない衛星が増えたことにより、コロニー公社の管制室は混乱し、管制室長は胃潰瘍で入院。コロニー公社の代表は急性心筋梗塞で緊急搬送したほどである。幸運にも、二つ目の月の周回軌道はコロニーと接触することはなく、宇宙世紀最大の災害事故は回避された。

そして二つ目の月はムーンIIと呼称され、連邦軍拠点のルナIIとは違う呼び方が与えられた。ジオン軍は調査隊を編成し、連邦軍残党の攻撃も想定した重武装の艦隊を編成。ムーンIIへ向かう事となった。資源小惑星ルナIIは第二の月として呼び親しまれてきたが、惑星の衛星軌道にある二つ目の月の命名には、かなりの議論が発生した。単純に資源小惑星を含めれば、三つ月があることになるが、ルナIIは所謂人口の月であるため、転移後の増えた月とは違うものである。

ルナはオランダ語やラテン語で月を表すが、名称はそのままに、第二の衛星軌道上の道の月はムーンIIと呼称。区別することになった。「司令官入室！」

当直士官の号令に艦橋の士官の背筋が伸び、緊張した空気が流れる。ティベ級宇宙戦艦『グラーフ・ツェッペリン』の艦橋は連邦のサラミス級巡洋艦やマゼラン級戦艦とは違い、戦闘指揮所CICの能力を持ち、レーダー誘導によるミサイル戦を想定した連邦軍艦艇とは違い、有視界戦闘を考慮した設計思想の元建造されている。

ミノフスキー粒子によるレーダー妨害があるものの、二基の大型レーダーや各種センサーを使用した観測員、各部署への通信を行う通信兵、舵を取る航海士などが集まり、その中心には艦長用の座席と艦隊司令の席も設けられていた。

「ヘルシング准将、ツェッペリンのお食事は如何でしたか？」

艦長席から立ち上がる、旧ドイツ海軍のような黒いコートを着たユーリ・ハスラー艦長は盟友であり、艦隊司令であるフォン・ヘルシング准将へ敬礼する。

「中々だ、あのザウアーブラーテンは最高だ。故郷のニューアルザスを思い出す」

「司令はあのコロニーの出身でしたか、私の妻もアルザスの生まれですよ」

「ほお〜！ハスラー艦長の愛妻ですか、もしアルザスに里帰りなさるならいいお店を紹介しましょう！」

サイド3のコロニー群は様々な人々が集まる植民国家である。だが、入植早期の植民者のアイデンティティはすぐに変わるものでもなく、民族意識は直ぐにスペースノイドという共同体へ落ち着くことはない。かつてのアメリカ大陸の植民地がそうであったように、自分のすむコロニーにすんでいた町の名前を付けていた。

彼らの故郷サイド3のニューアルザスはコロニーの名前であり、フランス系やドイツ系移民が多くいる。彼らの中にはドイツ系のジオン軍人もおり、昔のドイツ軍の軍服をモチーフとするものもあった。

艦長と司令の他、艦橋に詰める士官たちもそれは見受けられ、略帽や軍服も若干異なっている。基本的に、ジオン軍の服装規定として士官クラス、しかも軍から許可を得ることによって軍服の改造を行うことができ、キシリア配下では宇宙攻撃軍の軍服規定と比べても、独自の規定によって軍服の仕様は各部隊に委ねられているようだ。

「ムーンⅡ、これより目視で確認できます」

談笑する高級将校の会話に入りにくかったが、意を決して報告する航海科の士官。心なしか冷や汗をかく彼に「すまない、話が興じてしまつてな」と謝罪を述べるあたり、ハスラー艦長は部下でも礼節を欠かない高潔な軍人であることを知ることができよう。

「月が二つとはなれませんな」

「全くですな、ハスラー艦長。連邦の艦隊が先に到着していなければいいが……」

連邦軍は残党と化したとはいえ、その規模はジオン軍のそれと劣らない。寧ろ、MSを介さない艦隊戦では連邦軍艦艇に軍配が上がる。艦隊戦闘能力はMSを差し引けば、サラミスの砲撃能力はティベ

U.C0079後期には重巡洋艦に変更

級 艦 戦 艦 に劣るが、ムサイならば二隻相手にしても勝てる

のが、サラミス級巡洋艦である。MSという存在がジオンの優勢を位置付けるが、連邦の新型MSの能力はドズル麾下の赤い彗星、シャア・アズナブル少佐の報告によって明らかになっている。ザクマシンガンが通用せず、その装甲は非常に強力であるため、先行量産型であるリック・ドムが数機配備されており、360mm実体弾を発射するジャイアント・バズを相当数積んでいる。他、主力であるMS-06ザクⅡを改良したMS-06R高機動型ザクⅡが配備され、ジャイアント・バズなどの反動の強い武器を使用可能なよう、腕周りの関節が強化されている。周囲には連邦の攻撃を想定して、ザクⅡを直掩機に回し、既に偵察に特化したMS-06E強行偵察型ザクが単独偵察を

行っている。旧ザクに近い腕周りであり、モノアイカメラも旧ザク使用のものであったが、各種センサーと遠距離通信用のレーザー通信装置が設けられ、敵との遭遇対策として、濃紺の塗装を行い、戦術的カモフラージュである小型のミノフスキー粒子散布装置が設けられていた。

基本的には非武装として、カメラガンを装備する予定であったが、ルウム会戦時に偵察機に乗った連邦軍兵士が拘束され「なんで偵察機に武装が無いんだ!？」とブチギレていた事から、「偵察機は非武装」の考えが改められ、ザクマシンガンを装備していた。偵察に出してからレーザーによるデータ通信もなく、未だに連絡も来ないため、グラーフ・ツエツペリンを旗艦とするムーンII偵察派遣艦隊は準備態勢のまま航行していた。

「月の影から姿を現します」

目視観測班の士官が報告し、艦橋から見える月の向こう側に見える第二の月。その様子にジオン将兵は目を奪われた。これまで見たことのある月よりも大きく、月よりもクレーターが少ない陸地。人工物が無いことから、未踏の大地であることは疑いようがない。また、連邦軍艦艇が見えないことから一番乗りであったことに艦橋にいる全員が頬を綻ばせた。

「レーダー感あり!方位320、中、距離40000!」

「センサー感知!パルス核エンジンの反応です!」

レーダー観測員とセンサーを確認する下士官が叫び、艦長はすぐさま艦内マイクを作動させる。

「連邦軍艦艇らしき物体を捉えた各員、第一種戦闘配置!対艦戦闘!」

「対艦戦闘!第一・第二砲塔開け!CIWS、各ミサイル発射管準備!対空警戒厳となせ!」

ハスラーの命令の元、副長が命令し、砲雷長が各部署へ指揮を飛ば

す。レーザー通信によるデータリンクシステムにより、各艦へと伝わり、僚艦ムサイ級巡洋艦『ニューヨーク』が先行する。

「MS隊順次発艦急げ！ブライト隊、ラムレス隊順次展開急げ！」

ティベ級の格納庫ハッチから順次発進する先行配備されたリック・ドム。胸部拡散メガ粒子砲は装備されていないが、ザク以上のジェネレーターと推進力を得ている推進力が強化された核ブースターはティベ級から離脱すると、両翼の防衛に付くべく展開する。

「ミノフスキー粒子戦闘濃度散布開始！」

「『アゴ2-1』！応答せよ！繰り返す……」

「偵察機の報告はないか……連邦め」

「連邦宇宙軍I F F 反応照合中！敵艦サラミス級『スミソニアン』単艦のみです」

ハスラーは強行偵察に出たザクが沈黙しているため、撃墜と判断。ドムの包囲攻撃によって攻撃を加えようと命令を下し、ミノフスキー粒子による電波妨害があるものの、I F Fの信号を読み取って情報を伝える。連邦軍残存艦艇を撃滅しようと、艦橋の皆は闘志に燃えるが、一人だけ冷静に状況を見つめる人物がいた。

「艦長、敵に投降を呼びかけろ。単艦のみで攻撃してくるとは考えられん」

「ヘルシング司令、敵の核攻撃を考慮すれば先制攻撃したほうがいいのでは？」

ティベ級の副長は意見具申のつもりで言うが、ヘルシングは眉間に皺を寄せながら、連邦軍艦艇の方向に目を向ける。

「だとしても、単艦で仕掛けてくるなんて正気とは思えん。奇襲するなら、もつと気の利いたことをするはず。艦長、悪いがMS部隊に敵艦に停船命令を行うように言ってくれまいか？」

宇宙世紀の艦隊戦闘では単艦で敵艦隊に攻撃を仕掛けることはない。MSの出現であってもそれは変わらず、一年戦争後期に出てくる

ホワイトベース

WBは例外中の例外であり、単艦で艦隊を相手にすることはあり得

ない。たとえば、敵艦が臨界までエンジン出力を挙げて突撃したとしても、撃沈せしめるのは容易き事。逆にカミカゼ攻撃のように援護艦艇を差し向ける方が勝てる確率は高い。とは言っても、それが戦術的に優れているかどうかは考えようによっては、愚将と称されるに違いないし、あまり褒められた戦いでもない。

とすれば、レーダーに映るサラミス級は何らかのトラブルによって航行している可能性もあった。

「わかりました、ブライト隊に臨検するように伝える。命令を受け入れない場合は作戦規定に則り、威嚇射撃の後、撃沈を許可する」

ハスラーは命令し、艦橋内は次第に募る緊張感が支配する。もし、直ぐに攻撃したとして、後々になって問題になる可能性があったが、敗残兵である連邦宇宙軍がどんな卑怯な手を使ってもおかしくはない。追い詰められた鼠が猫を噛むように、圧倒的不利な状況下でもって、果敢に攻撃してくることなど歴史が物語っている。

「ブライト隊、敵進路をふさいで現在臨検中！ブライト1状況を！」

「敵艦、距離20000！高精度カメラよりスクリーンに出します」

戦術担当士官がスクリーンを操作し、スクリーンにカメラを通してサラミス級が表示される。周囲には戦闘の名残か破片が浮いており、金属片がレーダーを阻害し、ミノフスキー粒子による妨害が映像を乱れさせた。

「なんだこれは……」

担当士官の眩きは艦長他、艦橋にいた全員が感じていた。

そこにあつたのは「サラミス級巡洋艦」の残骸

エンジンが自動で起動し、推進力を得ていたのかゆつくりと進んでいた。IFFや兵器システムはほとんど自動化され、最後の入力からずっとその動きを繰り返していた。もし人がいれば他の動作も出来ただろうが、その姿は宇宙世紀の「幽霊船」だろう。艦橋の窓が全て割れ、砲塔や甲板部分が真っ黒に焦げており、既存の兵器では考えられない損傷具合であつた。

「メガ粒子砲の攻撃で破壊されたにしては変だな。センサー員！生命反応は？」

「生命反応はありません。自動操縦のまま航行していたようです。ブライト隊が臨検するかどうか聞いていますが？」

「フライトレコーダーか航海日誌があるはずだ。それを回収するよう
に」

宇宙世紀の宇宙艦艇には自動記録装置と航行中に航海士が記録する航海日誌がある。大抵は幹部以上の航海日誌は軍事機密となっている。航空機と船舶の記録であり、双方相反するものであるが、宇宙という空にも似て大海原に航行する艦艇はどちらにも属するため、両方の物が積み込まれている。

「サラミス級エンジン停止！ブライト隊のクルツ少尉が臨検中です」

「臨検後は……暗礁地帯に押し出してくれ」

「Aye—aye 了解、艦長 captain」

ルウムから距離があり、月軌道上の連邦軍艦艇の殆どがキシリア麾下の月面打撃部隊によって制圧されている。その離脱艦艇が破壊され、幽霊船として漂っている可能性もあったものの、数カ月もの間エンジンを連続稼働状態にしているのは、推進材が底を尽いてしまうだろう。そう考えれば、目の前にいるサラミス級巡洋艦は地球連邦軍から離反したのかもしれない、もしかするとまだ敵艦隊が控えている可能性もあった。

「全艦隊、警戒を厳にせよ。ムーンIIの軌道上に進行。一周したら、観測機を放つ」

艦隊は進路をムーンIIに取り、警戒中のMSをそのままに軌道上へ移動を始める。

「艦長、微弱な無線信号を探知！」

「連邦か？」

「信号が妨害されているため、出どころは不明。もう少し待ってくださいー」

宇宙空間はレーダーを無効化するミノフスキー粒子の他、電磁場や磁気の影響によって度々、無線や情報統合システムにノイズが入る。ミノフスキー粒子に干渉されないレーザー通信などがあるが、相互に通信する意思と受信機が動いていなければ受け取ることができず、ザクを改造した強行偵察型タイプには小型のレーザー通信装置が取り付けられているが、その性能は低い。

(こ……い………目標………こう……)

「受信域を上げるんだ」

「アンテナ受信領域広げます！」

通信下士官が奮闘する中、担当士官は搭載されているアンテナを動かすよう指示する。

「ノイズを除去して……つと」

(こちらアーゴ2ー1！ツエツペリン応答されたし！)

まだノイズの混じる声であったが、撃墜されたと思われていた偵察に出たザクのパイロットからだった。

「こちら、グラーフ・ツエツペリン！状況を」

(連邦軍艦艇が不明機の攻撃を受けている。こちらにも攻撃を、MS部隊の応援求む！)

アーゴ2ー1の通信が艦橋に響いた瞬間、窓ガラスに閃光が差し込む。眩い光が窓を突き抜け、核弾頭が爆発した際に反応する自動防護装置が働いてシールドがあり、直ぐに閃光は遮られた。

「何があった!？」

「ホノルル大破！敵は高出力のレーザー兵器を所有！」

「連邦の新兵器か？」

「いえ、データベースにありません」

「敵艦の位置は!？」

「センサー類反応ありません！」

未確認の敵からの砲撃。一撃でムサイ級巡洋艦を大破に追い込む攻撃は連邦軍と考えたが、メガ粒子砲ではなく、レーザー兵器を使用するなどありえないことだった。しかも、敵艦の位置を掴めないのは気味が悪く、ヘルシング艦隊司令は命令を下した。

「各艦散開！対艦装備と核ランチャー装備のMSを順次発進！」

「連邦軍の交信を傍受！」

「流せ」

（奴ら、裏側から出てきやがった！なんであんなのが居るんだ！）

（宇宙人め！うあああ！）

（Juliet 2—2より、HQ！第2砲兵陣地が失陥！戦車隊の応援は！）

地球連邦宇宙軍の周波数であったが、どう聞いてもそれはジオンでない何かと交戦状態にあることが分かる。既に連邦軍はムーンIIへ上陸し、前線基地を建設していたに違いなかった。だが、その勢力は未確認勢力の攻撃を受けている。ジオンではない何者か。連邦とジオンと同等の科学技術を持つ第三勢力がいることにヘルシング司令は任務の困難さを再認識した。

「敵艦確認！方位020下05、距離5000！」

「5000?!観測員は寝てたのか!？」

副長が激昂する中、担当士官が近くのスクリーンに拡大映像を表示する。そこには見たこともない艦影が見え、小惑星に似せた偽装幕を使用していたらしく、レーダーに映らないようにしていたのだ。

「Sch.ei.e!!」

ヘルシング司令はドイツ語で悪態をつき、周囲にいるかもしれない敵艦を警戒しつつ、砲撃しようとする敵艦へ攻撃を行うよう命令を下す。

「MS隊は敵の攻撃能力を削げ！」

「センサーに感あり！敵艦4！艦隊を半包囲しています！」

艦隊の周囲に現れた第三勢力の宇宙艦艇。砲撃によって大破させる能力を持つ敵艦はMSに匹敵する兵器や核兵器を持っていないとも限らない。

「同レベルの文明との出会いが戦いとは……」

ムーンII遭遇海戦。

後世において同レベルの文明との出会いは、最悪の形で迎えることになる。後世の歴史家は彼ら偵察艦隊のことを批判するに違いない。戦争に行くような編成で臨んだことよって、彼らを刺激した。もしくは駐留する連邦軍に対しても批判することだろう。だが、ジオン艦隊が批判されることはナンセンスである。

月面において戦闘を行おうとする彼らがどのような意思で行ったか知れば、決して批判すべきでないとするだろう。

「放射線センサー感！敵は核攻撃を準備！」

「全艦、対空防衛！核の迎撃準備に移れ！MSは敵艦隊を攻撃！」

もし、連邦とジオンが攻撃力の高い核弾頭を制限するような条約南極条約があれば、話が変わっていただろう。もしあれば、艦隊の攻撃力は大きく半減している

無かったのが、不幸中の幸いであったが、それは同時にいつどこで核弾頭が放たれるか分ったものではない。

ムーンII遭遇海戦と呼ばれる長い一日は始まったばかりだった。

第十二話 反撃の狼煙

ロデニウス大陸から北東、一万キロ以上離れた遠方にその大国はあった。彼らの紡ぐ歴史を辿れば、七つの帝国の血が流れていた。その血には領土拡大と共に属国にした民族や様々な人種が取り込まれている。帝国が興る以前は王国や共和国、様々な国家や民族が興亡を繰り返す。彼らは自分達を「第八帝国」と自称し、祖国であるグラ・バルガス帝国を誇りとする。

その首都の一角に設置された情報局。各地に配置された諜報員から情報を受け取り、分析。帝国のために多くの兵士や諜報員がその諜報戦に身を投じていた。この世界では珍しい科学技術のみを使う彼らの通信機から電子音が連続して鳴り響く。各通信兵がそれを読み取り、その信号文を自動化された暗号解読機に駆けていく。

世界に散らばった諜報ネットワーク

市井の酒場の情報も馬鹿にならないこの世界では、ここまでのネットワークや暗号化された通信も珍しい。

その通信は優先度が高く、現地の諜報部隊が発信されたレポートが情報局の対外工作課へと回される。

「閣下、ロデニウス大陸の情報について、現地から報告が届きました」

アメリカの中央情報局（CIA）のような退役した軍人が情報分析官をやっていたり、ハイスクールを卒業してすぐに分析官になって、そのままテロの首謀者を見つけるなどあるが、彼らもCIAと殆どやってることは変わらない。

唯一、異なるのは彼らが軍属であり、警察に近い内務軍の将校であることだろう。

「概要は？」

「はっ！ロウリア王国のクワ・トイネ公国並びにクイラ王国への侵攻はジオン公国の参戦により失敗。王は自害し、ジオンの傀儡政権が誕生したとのこと！」

「何と」

ロデニウス大陸の情報分析チームを束ねる佐官の指揮官は、これまでの報告と異なった結果となり、驚いていた。

「我々の分析ではロウリア王国の圧勝。ロデニウス大陸を統一して、対外的にはパーパルティアの傀儡になるはずでは？」

「はい、パーパルティアの軍事援助を受けて、流通の要であるマイハークを占領。二方面作戦をもってクワ・トイネの首都を攻め込み、クイラを締め上げると分析しておりました。しかし、ジオン公国が参戦。大艦隊を無力化して、各占領地を奪還。首都を電撃侵攻しました。その後は一週間で国内を平定したようです」

「開戦から二週間ですか……レポートを見せてくれ」

指揮官は分析官からそのレポートを受け取り、説明する彼も自前のもう一枚のレポートを見ながら、説明する。

「現地諜報部隊によると、国境のギムという町で民間人救助のため後退戦を小部隊でやったようです。パーパルティアのフリントロックではなく、連続した射撃を行える自動小銃、固定砲塔の戦車もあったようです」

「なんてこった、局長級会議で話を出さないと。至急、現地指揮官に写真を送るよう連絡を入れてくれ」

「了解です、……閣下まだ続きが」

パーパルティアが支援したらしい4000隻の軍艦。しかし、木造船であれば一万隻ぐらいグラ・バルガスでも製造できる。各工場をフル稼働させれば一日か二日でも可能だ。そしてそれを壊滅せしめることは難しい事ではない。

文明圏外の田舎国家。火薬すら使っていない彼らに負けるはずも

なく、ロデニウス大陸情報分析チームはそこまでの心配をしていない。

だが、自動小銃に固定砲塔の戦車など、質の悪い冗談にしか聞こえない。だが、バカにするわけにもいかず、指揮官はレポートの次のページに移る。

「なお、ジオン公国がロウリアの首都、ジン・ハーク強襲の目撃情報を分析するに、1万トンクラスの空中重巡洋艦、我が国で試作段階である推進式エンジンを使用。あとこれを……」

「なんだこれは『全長300m程の空中浮遊する軍艦』『約20mの巨人』？首都陥落の時、塹壕に隠れてたのか？」

ギムの話は食いついたものの、首都攻撃の報告に書かれていたのは、冗談にしか思えない内容の報告であった。居眠りしてたか、酒を飲んでたか。もしくは戦闘が怖くて盛るに盛った報告を書いたのだろうか。

「首都の諜報部隊とギムのは同一の部隊だよな。どこの部隊だ？」

「国家監査省戦略作戦部隊です」

「監査省か……まったく、馬鹿にしてるのか」

同じ軍人だとしても、派閥や別の部局だと、縄張り意識やライバル意識を持っている。国家監査省と内務省、監査軍諜報組織は内務省直轄の内務軍情報局と対立している。

国防組織 陸軍と 警察組織 内務軍の対立。

例えるなら自衛隊と警察庁。自衛隊の情報隊と警察公安の対立。アメリカならば国防総省直轄の諜報部隊と中央情報局^C、国家安全保障局^N、国土安全保障省^Aなどの多くの派閥争いと同じようなものである。

重なる部分がある以上、争いが絶えない部署なのだ。

指揮官は監査軍の誤報として処理することにして、後日監査省へ照会することにした。

「そういうえば、レイフォル海軍の艦隊はどうなっている？」

一万キロもの遠い大陸よりも、一番注視していたのはレイフォルという、近隣の国家だった。指揮官や分析官の彼らはロデニウス大陸を管轄しているが、世間話として分析官に尋ねた。

「国家監査軍が、すでにレイフォル艦隊を補足しています。本日中に会戦予定ですが、提督は遊び心が過ぎるようで、戦艦1隻のみを差し向けるそうです」

「1隻か、戦場伝説を作るには丁度良いな」

同時刻、ムー大陸西方海上には、第二文明列強国として栄えるレイフォル海軍の艦隊、43隻が航行していた。

100門級戦列艦が十数隻を占め、補給艦や巡洋艦。そしてワイバーンを運用して、海上の船舶に空襲する航空母艦……。ではなく、飛竜母艦が数隻航行する。ロデニウス大陸の4000隻と比べると数は少ない。しかし、レイフォルは火炮を装備する撃ち合いを想定した戦列艦を所有する。あたかもそれは大英帝国のそれと酷似していたが、竜母のような航空戦力がある以上、近世の大英帝国のそれを凌駕する。

艦隊は西へ進み、保護国を侵略した第8帝国と名乗る新興国家「グラ・バルガス帝国」を懲罰せんと航行する。レイフォル皇帝は彼らを蛮族として侮っていたが、海軍の有する主力艦隊を差し向けた。

近隣諸国への政治パフォーマンスも兼ねている今回の出征は占領されたパガンダの沖合で敵艦隊を撃滅し、貧弱なグラ・バルガス兵を公開処刑にする。国威発揚と帝国の威信を世界に示すための行動は、弱肉強食であるこの世界の日常であった。

艦隊は帆を張り、風神の涙と呼ぶ人工的に推進力を引き出す魔道具を使用した艦隊は12ノットのスピードで航行する。スピードはムーや神聖ミリアル帝国などと比べれば遅いが、パーパルティアや他の魔導推進式と比べれば平均と言った速度だろう。

「閣下、偵察騎が敵艦隊を捕捉しました！」

レイフォル海軍主力艦隊旗艦、ホーリーの司令室。100門戦列艦と比べるとやや火力は衰えるが、それでも田舎の文明外国家と劣らない戦闘力を持つホーリーは魔導通信機器を多数搭載し、艦隊旗艦としての指揮通信能力を高めた艦だった。

偵察中の竜騎士から受け取った通信を艦隊司令に渡した士官は竜騎士の報告を説明する。

「敵は1隻のみ、ただ全長が300m。巨大な砲を搭載しているとの事」

提督バル蓄えた髭は海軍の軍人として威厳のある風貌だったが、腹部に蓄積された脂肪が全てを台無しにしていた。最も軍務に忠実であり、艦隊指揮能力ははずば抜けていた。

伊達に提督という地位にいる彼も無能とは無縁である。巨大な船体と巨大な砲に対して眉間に皺をよせ、直ぐに命令を下した。

「艦隊護衛の3騎を残し、残りの竜騎士を敵艦攻撃に向かわせろ！艦隊進路も敵艦にとれ！」

「はっ！」

波をかき分け、艦隊は進路を敵へ向ける。その一糸乱れぬその陣形は彼らの練度を物語っている。砲艦能力の低い竜母と呼ばれる船舶を他の巡洋艦で守りつつ、進路を変えて航行する様は電子制御でない操舵に神がかった技術を感じさせた。

魔法にて発光させた誘導灯を持って、竜騎士とワイバーンを誘導する甲板作業員。ワイバーンロードが羽ばたき、飛行甲板を進み、一気に発艦する。失敗すれば竜母に衝突する危険もあるため、高度な訓練を受けた竜騎士でなければ竜母から発艦することはできない。

そして辺境国とは違い、ワイバーンも一味違う。その強固な鱗と一回り大きいその身体。大空の覇者とも呼べるその巨体をもつワイバーンロードは爵位の意味を持つ竜とあって、その性能は折り紙つきだ。

発艦した竜騎士は編隊を組み、西の偵察騎が目撃した敵戦艦へ進路を取る。

一方、グラ・バルカス帝国国家監査軍所属の超弩級戦艦グレードアトラスターは単艦で東に向かっていった。全長300m、横幅も大きく、まさに帝国の象徴ともいえるべき存在。

46cm砲3連装を3箇所^に設置、計9門の主砲は誇らしげに水平線を向く。あたかもそれは、第二次大戦中に大艦巨砲主義と艦隊決戦思想を元に設計された超弩級戦艦大和に酷似する。中央部には城のような艦橋とレーダー装置が設けられ、その技術は旧日本海軍の索敵能力とは一線を画す。

空へと向けられた3連装高角砲群はハリネズミのように設置され、高角砲の弾はグラ・バルカス帝国で最近開発された、近接信管が使用されている。かつての大日本帝国海軍の弾頭は接触信管であり、対空防御能力は米海軍のレーダー波を用いた近接信管と比べて格段に低い。大日本帝国の超弩級戦艦大和と酷似するその戦艦は、大和以上の攻撃能力と対空能力を秘めている。

更に、レーダーと連動した対空防御能力と主砲に搭載された光学機器とレーダー照準器は大和にはなく、1945年の日米戦艦と比較しても、比較にならない程の命中精度を持っていた。

46cm三連装砲の最大飛距離は40km。46cm砲は山をも削る威力を持つ。もし、駆逐艦や巡洋艦が命中すれば、そのすべてを粉碎できる威力である。仮にジオン軍の宇宙艦艇の重要区画を撃ち抜けば、大破に追い込むことが出来よう。仮に連邦軍陸戦艦艇「ビッグトラー」と単艦一騎打ちをすれば、総合火力からグレードアトラスターに軍配が上がるかもしれない。

そして、機関室や司令部機能を持つ区画には同主砲の直撃弾に耐えられる装甲を持つ重要区画^{バイタルパート}が存在。本来ならば随伴艦の駆逐艦や巡洋艦を対水雷防御、対空戦闘防御の役割を担わせ、艦隊を編成する必要がある。

だが、随伴艦艇を持たずに単艦でレイフォル海軍の主力艦隊と対峙

するのは、よっぽどの自信を持っていたに違いない。

グラ・バルカス帝国国家監査軍所属の戦艦、グレードアトラスター艦長、ラクスタルは艦橋上部の見晴らしの良い場所から双眼鏡を覗き、近くの海上監視につく水兵を激励しつつ、周囲を見回していた。

「司令室よりこっちの方がいいな」

司令室はその名の通り、戦艦の頭脳にあたる箇所。装甲が張り巡らされ、窓も少なく、風通しも悪い。担当水兵が掃除を怠れば、カビのような匂いですぐに分るほど、湿気の籠りやすい部屋であるため、見晴らしのよく潮風の当る上部艦橋にラクスタルはよく来ていた。

嘗ての軍艦は戦闘指揮所を設けることなく、艦橋といった海戦がよく見渡せる場所から指揮をしていた。指揮官を守ることや、数十キロ先の敵と会敵して攻撃することが多くなった事から、指揮官は装甲の厚い指揮所にこもらなければならず、昔のような矢面に立つ機会はなくなってしまう。

—敵が見えない戦争か

と、ラクスタルは独り言ちる。

40 km先の敵へ向けて砲撃できる性能を持つグレードアトラスター。

駆逐艦や巡洋艦と比べて、目の前にいる戦いではなく、相手の射程外から撃ち込むアウトレンジ攻撃が戦艦の使いどころである。今後の海軍研究所は推進力を持った自立兵器によって攻撃する戦術を考えている。自立型の推進ロケット技術は未だに実用化されていない

が、戦艦同士の艦隊決戦はなくなり、空母を主力とする戦闘に置き換えられるのかもしれない。

ラクスタルは最強の地位を奪うであろう未来の兵器を想像しつつ、自分自身がロートルになっていると感じながら水平線を眺めていた。

「艦長！ここにいらっしやったのですか？」

「すまん、潮風に当たりたくてな」

本来ならば作戦海域に入っており、司令室にこもらねばならないのだが、敵との会敵が予想より大幅に遅くなってしまうため、司令室を抜け出して上部艦橋から外の眺めを見ていたのだ。

「レーダーに反応、艦長、レイフォル艦隊から多数の飛行物体がこちらへ向かって来ております。司令室にお戻りください」

伝令の水兵は報告し、階段から下に降りようとするも、艦長に止められた。

「こっちから行くぞ」

「よろしいのですか？」

艦長が指さす先は非常用のエレベーターである。負傷者や観測班、士官以上でなければ乗ることは許されない。無論、艦長を呼びに来た水兵も乗ることはできないが、艦長他二名程乗れるため、水兵をエレベーターに入れて司令室へと向かう。

「艦長、入室？」

当直士官が声を張り上げるが、何故か最後の言葉が半音高い。エレベーターには艦長のほか、水兵が乗り込んでいたためである。

「構わん、副長！状況知らせ！」

艦長の誤魔化したような命令に、副長は若干苦笑交じりに報告を行う。

「はっ、方位010、高度1000、距離40000より多数の飛翔体を捕捉。敵の航空戦力です。ワイバーンなんとかという……」

―ワイバーンロードとかいう竜だ。

艦長は副長のうろ覚えな箇所を訂正する。

先の戦闘にて、パガンダ王国近衛竜騎士団の保有するワイバーンがグラ・バルガス軍のアンタレス型艦上戦闘機部隊に手も足も出なかったことを戦闘詳報で読んでいたため、訂正した。

アンタレス型艦上戦闘機は先進的な低翼を採用し、信頼性の高い1000馬力級エンジン、ジュラルミン材質の軽量化した機体、ネジ一本に至るまで軽量化にこだわった結果、時速550kmという高速と高い旋廻能力と上昇力を手に入れた。一方で、急降下能力はあまり良くなく、軽量化と引き換えに軽装甲であるが、それを搭載した高威力の20mm機銃と、信頼性の高い7.7mm機銃によつて補っていた。

ワイバーンの巡航速度は時速230km前後であるため、アンタレスのそれと劣っており、攻撃も口から放つ火炎弾であった。しかも、機銃と比べても弾速は劣っているため、熟練したグラ・バルガス帝国軍のパイロットであれば、回避することは容易だった。

「失礼、ワイバーンロードの速度は時速350km、パガンダのそれとは大型化しているため、爵位^{ロード}を賜っているとか……」

「まもなく、目視圏内に入ります」

レーダー観測員の報告を聞き、ラクスタルはグレードアトラスター単艦で攻める事を提案したが、艦隊司令が許可してくれるとは思わず、ワイバーンロードの編隊をどう撃退するか考える。

「対空戦闘用意」

「対空——う！戦闘用意！」

艦長の号令を聞き、復唱。艦内にアラートが鳴り響き、対空銃座に人が配置される。レーダー管制による機銃や機関砲の自動照準ができるが、完璧ではないため引き金と確認は人の手によって行われる。乗組員が被弾時のダメコン・救護の準備に走り回る中、彼らの殆どは熟練した水兵である。何度も訓練を重ねた海の男たちだった。時計を見ながら、艦内の空気が張り詰めていくのを感じていた艦長へ副長が進言する。

「艦長、まずは46cm砲の対空弾を試してみてはいかがでしょう？」

対空主砲弾は、本来時限式信管を用いた46cm砲の射撃であったが、ワイバーンのような生物を駆逐するため、新型の近接信管の主砲も開発されており、今回試験的に弾薬庫にしまっている。

実戦での使用は初めてであったため、艦長は色々と不測の事態を予想するが、砲術科の古参兵にも仕事を与えねばと命令を下す。

「そうだな……主砲発射準備、第1、第2砲筒に、対空主砲弾を装備、一斉射撃を行う。主砲班は泣いて喜ぶだろう」

艦長は笑い、周囲の士官もつられて笑う。

前甲板の砲塔周囲では、対空見張りの水兵が避難場所へ移動し、砲術科の水兵達はレーダー照準と目視による観測から凡その敵位置を計算する。

「対空砲弾、積み込みよし！昇降機起動！」

弾薬庫管理の曹長がスイッチを押し、重さ約1500 kg近い砲弾が弾薬庫から砲塔内部に押し上げられ、砲塔装弾室へと送られる。

「砲身よし！」

「装填始め！」

砲術科の海兵が主砲の砲身を目視で確認後、直ぐに砲弾が砲身へと送られ、薬囊と呼ばれる炸薬が装弾される。そして、砲尾閉鎖器が閉じられ、砲術士官が司令室へ準備完了の報告を行う。

「発射準備完了」

敵との相対距離を計算し、レーダー照準とトレースし、主砲が空を向く。

「さて、巨大な花火を打ち上げよう。対空砲弾、撃ち方始め！」

「一番砲塔、第一砲筒発射用意……撃え!!」

前甲板の巨大な46 cm三連装砲の一砲が飛来する航空部隊へ向けられ、巡洋艦の主砲とは比較にならない爆音が響き、1.5トンの砲

弾が発射された。それは現代のミサイル駆逐艦のVLS発射にも似た爆発のように見えるが、規模は全く違う。通常の対艦ミサイルの炸薬量の十数倍もの火薬が一気に燃焼し、一トンもの質量が放物線を描いて飛来する。その衝撃は海面に波を作り、人ひとり飲み込むような波を作り上げた。

そして、音よりも先に飛来する対空砲弾が空中で炸裂した。

それを見た日本人や日系人スペースノイドならば、大日本帝国が作った三式弾を思い浮かべるだろう。しかし、三式弾は無数の焼夷弾子がばら撒かれ、航空機編隊を炎上させようと考えられた代物だ。発想は良かったものの、実際の戦果は今一つ。次第に通常弾や榴弾に置き換えられてしまった。

この対空主砲弾はどうだろうか。

対空用時限信管ではなく近接信管を使用し、焼夷弾子でなく、標的の手前で爆発すると同時に、直径一センチ弱のボールベアリングが飛翔する。銃弾と同じかそれ以上の速度で飛来した球体はワイバーンや竜騎士を引き裂いた。一瞬でワイバーン編隊が爆散した瞬間、グラ・バルガスのレーダー員は歓声を上げ、一方魔導レーダーと見ていたレイフォル兵の顔は蒼白に染まる。

レーダー観測員や帆の上に立つ監視員の報告を受けたレイフォル艦隊司令の担当士官は顔を青くして告げる。

「つ…通信途絶、レーダーと監視員の報告によると…攻撃に向かっ

た竜騎士隊は、全滅しました」

「な……何だとおおおお
!!!!!!」

敵はたかが一隻と思っていた將軍バルは狼狽え、ワイバーン編隊が全て撃墜されたことに怒り狂った。

「文明圏外の蛮族風情に……。しかも、たった1隻にか!? 敵の攻撃はどのような物か? ムーの飛行機械か?」

「いえ、編隊前方が爆発し、一気に編隊が攻撃を受けて墜落したとしか……」

「……なに……」

担当士官の細々とした報告にバルは頬を引きつらせた。その報告が確かならば、砲撃か超弩級魔導士による攻撃と見て間違いない。だが、ワイバーン編隊が一気に撃墜されるなど、御伽噺か都市伝説、若しくは兵士が酔っ払って嘘を付いたかのどちらかだろうと考えてしまう。

だが、最精鋭のレイフォル主力艦隊が粗忽者を在籍させることはない。会敵する前に酒盛りさせるなど、処刑されてもおかしくない。バルは傲慢で典型的なレイフォル人であるが、その傲慢さを裏付けしているのは、栄えある軍人としての誇りと国へ尽くした忠誠心、人生の大半を海軍で過ごした経験からなるものだ。他の列強以上に訓練を積み、列強外国家を蹂躪でき、かの魔帝軍団とも互角に戦えると自負する艦隊だった。それゆえ部下を疑わず、担当士官の報告に冷や汗を流す。

本当ならば狼狽してもおかしくない報告だが、バルはたるんだ腹の筋肉を引き締めると、艦隊へ指示を下す。

「竜母『エトラス』『ミランダ』を駆逐艦二隻で護衛。竜母艦長には『エルドラドが売り切れ可能性大、買い出し急げ』と魔信しろ。残りは単縦陣を持って敵を粉碎する」

「?……りよ、了解しました!」

通信士官は艦隊司令の命令を不思議に思ったが、暗号文らしいため急いで魔信を送る。

「バル閣下……やはり敵艦は?」

「パガンダに潜伏する外務卿の間者の報告……間違いないということか」

將軍バルとその副官は既にグラ・バルガスが自国の軍事力を凌駕していることを知っていた。パガンダ奪還の任についた時から、外務卿との接触があり、グラ・バルガスの軍事力について情報交換がなされたのだ。

バルは外務卿の情報を誤報としていた。それに不確かな情報を元に艦隊を派遣せず、外交によって解決するなど、軍人として判断はできない。それ以前に保護国であるパガンダを見捨てることは列強レイフォールの地位が大きく揺らぐことを意味する。

ただ、もしもの時のために艦隊決戦時に邪魔となる竜母を退避さ

せ、もしもの場合に備えておかねばならなかった。

バルは外務卿の『グラ・バルガスの軍事力は神聖ミリシアル帝国のそれを凌駕する』を言ったことに懐疑的であり、艦隊を指揮する身として征伐を停止することはできなかつた。外交以前の問題であり、レイフォルの派閥争いや軍に置ける將軍たちの動き。もし、彼が外務卿の忠告通りに征伐を辞めれば、敵前逃亡と見なされてバルの首は物理的にも飛び、よくて隠居が精々。

だとすると、バルの出来ることは一つ。敵が何であろうと倒すのみ。

副官は悔しそうな顔をするが、バルは副官の肩を思いっきり叩く。

「なんでそんな顔をしている！敵は目の前！わが艦隊は最上の敵を見つけたのだ！軍人なら本望だ。」

「……はい、敵は火薬を使用する実体弾。威力がかなりあると聞きますが、我々はレイフォルの主力。敵を打ち倒し、レイフォルの港に帰りましょう！」

傲慢で肥えた將軍バル。後世では「強大な敵に立ち向かう蛮勇の將軍」など卑下されることだろう。だが、後世の戦史書に彼らの気持ちは何故戦わねばならなかったのかは記載されていないだろう。

「おい、そのの。これを全艦艇すべてに聞こえるようにしろ」

「閣下！……了解しました。しばしお待ちを……どうぞ！」

通信士官から送信機のそれを口元に寄せ送信ボタンを押した。

「全艦隊に告げる、ワシは海軍將軍バルである。君達は1000年無敗の無敵艦隊の精鋭たちだ。我が艦隊はこれより突如として現れたグラ・バルガスの馬鹿どもをパガンダから引きずり下ろす！だが、彼らも強いと噂を聞いているものもいよう……」

演説は全ての艦に伝わり、全艦放送の出来る百列艦などは水兵の一人一人に至るまで將軍の声を聴く。彼らはグラ・バルガスが強力な軍隊であることを市井で聞いている。血気盛んな者や意気消沈したもののなど、士気はばらけていたのだ。

「敵はたしかに強い。ワシもそれは感じる。恐怖は感じるか？感じるだろう。だが、それより感じるのは歓喜だ。我々は1000年無敗の無敵艦隊の記録を更新し。最強の名前を歴史に残せるのだ。」

「我々はこれまで強大な敵とは戦えなかった。だがこの目の前に来ている。」

我々の歴史は始まったばかりだ。彼らを倒して港で凱旋しよう。我々が無敵艦隊を世に知らしめるのだ!!」

彼らは誇り高きレイフォル海軍主力艦隊。1000年無敗の無敵艦隊。彼らが望むのは最上の敵なのだから。

將軍バル配下のレイフォル艦隊は綺麗な単縦陣を組んで航行する。先頭に行く戦列艦は敵の砲火に晒されやすいものの、敵が有効射程距離内に入り次第、一気に左右に散っていくT字陣を組む腹積もりだ。

艦砲射撃は艦首から撃つよりも側面から撃った方が、火線は多い。

必然的に敵への砲撃が集中してしまう。これは日露戦争時に日本がロシアのバルチック艦隊を葬った戦法であり、連合艦隊司令長官の東郷平八郎の名を取って「トーゴーターン」と呼ばれている戦法である。

レイフォルが列強として君臨する理由が文明の差だけでなく、こうした稀有な戦術家がいたからこそ、無敵艦隊と自他ともに認められていたのであろう。戦列艦に追隨する輸送艦や快速航行を行う駆逐艦は単縦陣から離れ、比較的に火線の届かない場所へと移動する。

そして、將軍バルは双眼鏡を覗き、微かに見える船影を捉えた。

―報告よりも随分でかい……

バルはその光景に恐怖した。

見る限り、鋼鉄の材質が見え隠れし、あたかも其れは城のよう。

針鼠の如く、火炮が周囲に向けられ、まるでワイバーンを落とすかのように配置される。もし、ワイバーン編隊があればにやられたとすれば、その弾幕の量は戦列艦に相当する。

ワイバーンが戦争に投入されて以降、戦争の主役はワイバーンが担っている。情報を制したものが勝利するため、ワイバーンの情報収集能力や人馬よりも早い機動力は運用次第で、小国であっても大国を圧倒するものとされる。そのため、文明外国家はワイバーンを撃墜すべく、対空用の弓や投石器などを開発し、魔導砲による攻撃。連発式魔導銃などの開発に資金を投入していた。未だに高価であるために、司令塔である將軍バルの乗艦にしか配備されておらず、主力戦列艦には配備されていない。

もし、かの船が連発式対空魔導銃や高度に発達した対空兵器を保有していたならば、ワイバーンの全滅報告の筋は通る。

だが、約40のレイフォル艦隊の集中砲撃を浴びせられれば、如何なる艦とも無事では済まない。例え、神話にある古の魔導帝国の艦艇でも撃滅できる艦隊。バルはお守りである自身の勲章を触り、意を決して司令席から立ち上がる。

「敵艦との相対距離4kmの時点で、左右に回頭。包み込むようにして砲撃を加える！」

「了解……先鋒の戦列艦ガオフォースが距離4kmに入ります」

「直ちに面舵一杯！次艦トラントは取舵一杯！射線を味方艦に当てるな！各艦射程に入り次第自由射撃！」

バルは吠え、すぐさま先鋒のガオフォースが受信、艦長は通信士官から命令を聞くとすぐさま航海士に面舵を指示し、砲術長に砲撃を準備させる。

「弾種は徹甲弾！一斉射で仕留めるぞ！」

「了解！徹甲弾込めろ！」

砲術長の命令によって、戦列艦の砲列甲板は騒がしくなる。前装砲であるため、砲口に爆裂魔法とエネルギー体である魔法石を細かく砕いて作った葉囊を入れ、先に貫通魔法を付与した徹甲弾を装填する。他国の戦列艦より強力な砲撃を食らわせることのできるレイフォルの新兵器であった。

弾頭に破壊力を持つ魔法石と貫通術式の込めた魔術を封入し、強度の高いミスリルを使用しており、貫通力は従来の二倍を誇る。例え、ムーの金属製艦艇を撃破せしめるといふ触れ込みの元導入された砲弾は非常に高価であるが、非常に強い攻撃力を秘めている。

「砲甲板口開け！」

水兵が人力で押し出し、開かれた甲板口から出されたのは数十の砲口。砲術兵によって照準が合わせられ、巨大な戦艦、グレードアトラスターへと向けられていた。

「レイフォルの特性徹甲弾、とくと味わうがいい」

「敵艦の砲が旋回しています！」

「ほう……でかいな」

後方にいた司令艦に乗艦するバルは艦長の指摘から双眼鏡を覗き、敵の艦砲の大きさに驚いていた。

戦列艦の先込め式艦砲よりも数十、いや百倍ほどでかいその巨大な火砲は、何人もの兵を使つて動かしているのか定かでない。だが、明らかに人が飛び出しそうなほどの巨大な砲は、先鋒の戦列艦に照準を合わせていた。

「この近距離での巨大な砲を向けるとは……」

近距離での砲は命中率が悪い。発砲の衝撃によって歩兵が被害を受ける聞き及んでいたバルであったが、近接艦砲射撃はより、有効射程距離の短い砲が有利であり、一々弾種を変えなければならぬ。巨大な砲に装填することを考えれば、人力で10分以上を有するとバルは考えていた。

そして、航行中の砲撃はそうそう当らず、数百の砲撃によって当たるものであり、最終的にバルは至近距離による砲撃と海兵隊による乗艦攻撃を想定していた。そして、先鋒の戦列艦ガオフォースが砲撃を加えるさまを見ようと身を乗り出すようにして眺めていたが、突如地

響きのような音が周囲に響き渡った。

「何だあ!!？」

司令官と言う任についていながら、醜態を晒してしまうことを考えず、椅子から転げ落ちる。とはいえ、艦橋に詰める将軍の他幕僚や水兵も身を屈め、及び腰になっている者も少なくない。

まるで空気が引き裂かれ、間近で爆発がしたかのような音。以前、弾薬を満載した戦列艦が誘爆によって大爆発した以上の爆発音。一体、どこからかと目を向けると、其処には砲撃を行った敵戦艦の姿があった。

「なんとという衝撃！敵の火炮は化け物か。いや、この砲撃でやられた艦は?!」

「司令！ガオフォースが！」

「!？」

幕僚の一人が狼狽えたように声を張り上げ、指をさす。それはバルにとって信じられない光景だった。まるで、神獣や神話で出てくるような怪物が船体を真っ二つにしたように、レイフォルの誇る百門戦列艦ガオフォースの船体の上半分が綺麗になくなっており、まるで齧られたかのように無数の穴や破片が周囲の海面に散らばっていたのである。

「戦列艦ガオフォース、やられました！」

「.....」

バルはあまりの衝撃的光景に声も出なかったが、直ぐに自分が誇り

あるレイフォルの艦隊司令官であることを思い出し、胸に付けていた勲章を握りしめ、手袋から滲み出る血を気づかず、絶叫のような命令を下す。

「全艦あの艦へ砲撃しろお！ガオフォースの敵を討てえ！」

左右に展開した戦列艦は命令に従い、一気に砲撃を加えた。単縦陣で進みながらの一斉砲撃はあたかも一大海戦の一シーンとして、映画や写真、若しくは絵画として歴史に残る物になった光景だろう。

ほぼ一斉に放たれ、二射三射と断続的に放たれた砲弾はグレードドアトラスターの装甲に当たっては爆発し、黒煙がグレードドアトラスターを包み込む。一隻に対して過剰攻撃に思えるような数百発もの砲弾がグレードドアトラスターの装甲に命中して爆発。魔導接触信管が作動し、一気に魔石と反応して爆発。装甲を突き抜けんと衝撃がグレードドアトラスターの船体に伝わった。

「……………やったか？」

誰が言ったのか。

フラグという概念がない以上、誰もその言葉を言った彼を責めはし
まい。

だが、その台詞に答えたのは他ならぬ其れグレードドアトラスター
だった。

黒煙に包まれた鋼鉄の戦艦は周囲の戦列艦に照準を合わせ、一気に

砲撃を食らわせる。砲撃の瞬間に黒煙は空気が裂けたために、一気に発散し、表面がへこみ塗装が剥げ、木製甲板が炎上しているものの、船体に何らダメージが与えられていない様子はレイフォル将兵を恐怖に陥れた。

その砲撃は次に近づいていた戦列艦トラントに命中、46cm三連装砲に装填された対空主砲弾の一発が命中する寸前に爆発。飛散するボールベアリングが高速でトラントの船体に穴を開ける。まるで蜂の巣や穴あきチーズのように空いた無数の穴。ボールベアリングが搭載された弾薬を傷つけ、一気に爆発した。

「戦列艦トラント爆沈!!!」

「敵は化け物か!!」

木製らしい甲板は炎上しているものの、鋼鉄の装甲はへこみこそすれど無傷のまま。砲撃の影響からか、いくつかの副砲は破壊したが、針山のようにある無数の砲は無傷であった。そして、その無数の砲が一気に発砲して、先の砲撃とは違う連続的な砲撃音が響き渡った。

「戦列艦レイフォル被弾!!」

未だ高価とされる連発式魔導砲。それを可能にした敵の軍艦は蛮族なんてものではない。自分達よりも遥かに進んだ技術を持つ軍隊。

レイフォル無敵の象徴と謡い、100門級戦列艦と最新式の対魔弾鉄鋼式装甲を持って列強国を打ち破る世界最強と自称していた。だが、戦ってみてどうだ？まるで『井の中の蛙大海を知らず』『田舎者の見栄』とも劣らない有様である。寧ろ、蛙の方がマシかも知れない。

何故なら、大海に出る必要はなく、これほどまでに強大な一隻の戦艦に立ち向かわずに済むのだから。

そして、自分達の艦砲よりも小さい砲の集中砲火によってレイフォールは爆沈。海底へと沈む。戦艦の反撃によつて次々と沈められている光景は悪夢としか思えない。もし悪い夢なら冷めてくれとバルは思う。

だが、それは現実である。

離れば、どの道主砲の餌食となり。主砲の使えない近距離に接近しても、先の戦列艦レイフォールのように蜂の巣にされてしまう。打つ手がないことが分かり、バルは拳を振るわせていた。

「……………戦列艦『ボノファン』『ロスキー』はこれより戦域を最大船速で離脱。駆逐艦は僚艦援護に回れ」

「了解！直ちに！」

「將軍、我が艦は？」

ボノファンとロスキーは残された戦列艦の中でも強力な戦列艦の一つである。まだ、敵との交戦距離に入っていないことが幸いして、損害は全く出ていない。

副官は敵に近い艦を囿にして、残存艦艇を逃がす算段かと思い、將軍に尋ねるが、將軍は予想とは裏腹に司令席から立ち上がり、近くの水兵を遠ざける。

「これより、降伏の旗を掲げる。他の艦も後に続け。艦隊は降伏。ボノファンとロスキーは艦隊命令に反して独断離脱。航海日誌には徹底抗戦の命令を出すも、戦力差は歴然。乱心したワシは副官の降伏の意見にケチをつけ、その場で命を絶つとでも書いておけ」

「將軍！待ってください！」

バルは腰にあつた魔導先込め拳銃を引き抜き、こめかみに当てた。

「どうせレイフォルに帰れば、肅清の元ワシは処刑。撤退や降伏した將軍がどうなるか知っているだろう？」

負けは許されない。レイフォルの勝利は絶対であり、負けたとなれば王家や民衆は納得いかない。もし、將軍が戦力差は歴然であるにも関わらず、徹底抗戦を指示して乱心。その後、自害するようなことがあれば、無駄死を避けるために、指揮権を貰った副官が降伏宣言しても問題はない。

寧ろ、無駄死させようとした將軍一人に責任が回り、配下の兵たちは責め苦を追わずに済むのである。

「將軍！」

副官は止めようとするが、既に遅かった。將軍バルは初戦で勝利を収めた時に陛下からもらい、御守りとしていた勲章を握りしめて引き金を引いた。

「レイフォルに栄光あれえ!!」

指令戦列艦ホーリーの艦橋に銃声が響き渡る。

レイフォル沖海戦は、レイフォル主力艦隊の降伏によって幕を閉じた。

「降伏は司令の副官が。当の司令官は徹底抗戦を命令して拳銃自殺とは」

ラクスタルは降伏した戦列艦ホーリーに乗船した陸戦隊指揮官の報告を聞き、顎をさする。考える時のいつもの癖であるそれは副艦長を疑問にさせる。

「どうかされました？」

「自身を乱心した愚将にしたようだな。レイフォル艦隊の指揮官は非常に優秀なようだ。あの戦術をあ文化レベルで行うとは大したものの」

ラクスタルは嘗てグラ・バルガスが建国され、一大海戦の最中に名将軍が使った艦隊陣形を思い出し、バルが使った戦法と全く同じだったということに気づいていた。百年前の戦列艦が現役の時、その戦法はまだ確立されておらず。如何に艦隊司令のバル将軍が優れていたか、ラクスタルは自身の慢心に対して、改めなければと反省する。

もし、敵艦が一斉に呐喊し、海兵隊を乗り込ませていたらと考える。グレードアトラスターの武装は海戦主体で施しているが、陸戦隊の装備は必要最低限。乗組員は対歩兵戦闘に関しては門外漢であるため、殴り込み部隊との戦闘になれば勝ち目があっただろうか。

蛮族と侮っていたこともあり、白兵戦になれば多くの兵員が失われていたことだろう。そう考えれば、バルの判断によってレイフォル将兵が生き残り、ラクスタルの慢心から部下を危険にさらしかねない状況だったことに、反省しなければならなかった。

「そうですか？敵は蛮族……」

「敵の指揮官は姿はどうあれ優秀だったという事さ。母国ではどう判断するか分らないが」

ラクスタルが正しければ、將軍バルは栄光あるレイフォルの歴史に泥を塗った愚将として語り継がれることだろう。戦力差は歴然であつたのにも関わらず、徹底抗戦を呼びかけた狂人として。だが、ラクスタルの考えは違う。戦つた後のことも考えて、自分を犠牲にしてまで兵を守る姿勢には、尊敬に値すると考えていた。

「そうですか……、艦長。話は変わりますが、目的地の座標まで残り10分です」

「わかつた、砲雷長に指示を。作戦目標変わらず、主目標は敵陸軍基地及び敵軍港。ただし、司令部は極力狙うな。戦力差がわかる人員を残さねば、降伏しないからな」

「了解！直ちに」

レイフォル国首都、レイフォリアは、戦艦グレードアトラスターの砲撃によつて陥落した。軍の要所に砲撃がなされ、首都防御能力は麻痺。ワイバーンを主力とする航空戦力は軒並み破壊された。レイフォル沖海戦から生き残つた将兵の報告を元にレイフォル首脳部は降伏を受諾。皇帝はグラ・バルガス帝国によつて廃位、本国へ護送され、幽閉される。レイフォルはグラ・バルガス帝国の属州として統治されることになる。しかし、飛竜母艦二隻が健在であつた事や降伏後に帝国が戦列艦を賠償として欲しがらなかつたことも含め、レイフォ

ルは属州として取り込まれたにも関わらず、レイフォルという名と国土防衛能力は保持され続けた。

戦艦グレードアトラスターは、たった1艦でレイフォル艦隊を撃滅し、そのまま首都の防御能力をせん滅、降伏に追い込んだ世界最大最強の船として恐れられることとなる。

グラ・バルガス帝国の名前はレイフォルの降伏によって世界に響き渡り、世界秩序は大きく変わり始める。

一方、主力艦隊将軍バルは当初、敗軍の愚将として貶されたものの、グラ・バルガス帝国の国家監査軍、グレードアトラスター艦長のラクスタルは彼の取った行動はレイフォルのためであったと主張。

両国の有識者の認識がわかれることになり、後年の文化交流の際に旧レイフォル軍主力艦隊のバル将軍の評価は改められることとなる。



スペースコロニー 『サイド7』

サイド3から最も離れ、未だに地球連邦軍の勢力下に置かれる其処は急速な発展を遂げていた。開発途上であったサイド7の1バンチコロニー『グリーンノア』は急速に地球連邦派の市民が集まったことにより、開発が急加速。

開戦前の頃とは打って変わって大きくなり、既に完成間近となっていた。一方、2バンチコロニー『グリプス』の建造も進んでおり、其処は連邦の軍用コロニーとして半分以上の建設が終了している。既に、グリーンノア1のMS製造工場や試験場などが移転しており、新規入隊者を募り、補充兵のブートキャンプも用意されていた。

「アムロー……ご飯持ってきたわよー！」

グリーンノア1の中流階級向けの住宅団地に少女の声が木霊する。天真爛漫と表現できる活発な印象を万人に与えるであろう少女の名はフラウ・ボウ。近所の少年に母が手作りした料理を渡そうと家に戻ってきていた。

アムロの父、テム・レイから息子をよろしくと言われ、拡大解釈をした彼女は何時もの如く、アムロの世話を焼く。それはクラスの委員長としての仕事ではなく、異性として見ているからだろう。

父と息子の二人暮らしであるが、父は2バンチコロニーから帰ってくることはなく、実質広い一軒家で一人暮らしをしているような有様である。そして、少年一人の生活となると、家の惨状は想像できるだろう。脱いでほったらかしの衣類や食器、食べたお菓子の袋、そしてフラウが昨日渡したタッパなど、洗いもせずそのままになっているのである。

「もう……お父さんから綺麗にするよう怒られたばかりでしょー！」

フラウはため息をつきながらも、補充していたゴミ袋に放置されたペットボトルや菓子の紙袋やポテチの袋を拾っては棄てていく。

手慣れたもんだなー、なんて考えがフラウの脳裏に過ぎり、急速な

勢いで未来が想像されていく。エプロン姿の彼女、そしてキッチンでアムロを迎える。所謂、「ごはんにする？お風呂にする？それとも私？」的な妄想である。そんな思考から、顔を真っ赤にしている当たり、青春真つただ中の乙女である。

「フラウ、脳波レベル上昇！上昇！恋ナノカフラウ？」

「ちよつと、ハロ!?!そういう事言わない!?!」

まだフラウが小さいころに流行った、子供向けのロボット。子守も出来る万能ロボットであり、今では中古品店に見かけるような、倉庫で埃に埋もれるような物。言わば、玩具用ロボットである。会話もできるのだが、元々の製品に二足歩行や防水機能はない。

フラウはアムロのそんな電子工学の技術は凄いと思っていた。実はテム・レイの入れ知恵によって、教育型コンピュータのハードを無理やり入れており、集積されたアムロのデータや身体情報を元に判断を行うのである。また、フラウの脳波や生体情報も記録されているため、健康状態もわかる優れモノである。

元々の設計がよかったのか、そうした色々な魔改造によって全くの別物になっていた。かかった費用は市販のハロの20個分に相当し、型落ち軍用品グレードの集積回路を使っている当たり、非合法すれすれの部分があつたりする。

流石に四次元ポケットはないものの、凄いとンデモメカであることは間違いない。フラウが手伝うように言うと、器用にゴミ袋にペットボトルやごみをしつかりとやるあたり、フラウは一瞬、ハロに掃除をさせればどうだろうと考える。

「ねえ、ハロ。もしかして、掃除用モジュールとかってあるんじゃない?」

「アルヨ、アルヨ、デモ使エナイ」

「どうして？」

「テム・レイニスルナトロックサレテル」

聞けば、既にアムロが5回チャレンジしたものの、未だにロックは解けていない。よく考えてみれば、ハロに掃除をさせてしまえば、掃除のできないダメ男アムロの出来上がりである。ハロが居なくなれば、どうなるか想像できる。まるで旧世紀のゴミ屋敷のような事になりかねない。フラウは父、テム・レイの判断を称賛した。

とは言え、殆ど育児放棄の父親になっているが、こればかりは世界情勢的に難しい。

「ハロ、IDカード何処か知らない？」

「アムロ、IDハリビングニアル」

「アムロってば?!なんで玄関まで汚いの……」

アムロの部屋の扉を開いたフラウはアムロの様子に驚く。そこにいたアムロは連邦軍の軍服を着ている最中であった。

「フラウ、見惚レテル！」

「ハロ、黙ってってば！」

フラウはこれまでだらしない格好しかしていなかった幼馴染の少年アムロの格好は全く変わっていた。青を基調とした、訓練生の軍服である。

ジオンの軍服と比べると地味であり、若者からはダサイと酷評される。そんな軍服よりも、早く正規の軍人になりたいと願うために、卒業する率が上がるなど都市伝説的なものがある。フラウにとって恋

焦がれる幼馴染が軍服を着ている事実が何よりも際立たせる。かつこ悪いかどうかなんて二の次。何故なら、タンクトップにパンツの姿を見ているフラウにとつて、まさに生まれ変わったかのように見えたからだ。

ハロに言われたアムロはテーブルに置いてあった写真入りIDカードをIDカード入れに入れて、胸ポケットに引っ付ける。ホルスターをベルトに通し、連邦軍が採用するM71拳銃を入れる。

「アムロ、間違えたわね」

「そうかい？僕は今でも見間違いだつて思いたいけど」

—カイさんの皮肉が移ったのかな？

ふと、連邦軍の徴兵規定にギリギリだったハイスクールのダブリ同級生を思い浮かべる。アムロもコロニーと友達を守るために、連邦の半ば強引の召集令状を受け入れ、二か月間の基礎訓練を終え、適性のあったMS操縦訓練に入る。パイロットとして、MSコロニー！パイロットウイング章を取得すれば、下士官として任官することができる。

とはいえ、軍服のデザインを考えるならば、ジオン軍の士官服の方が好きであつたりする。

「そんなこと言つて……お父さんがMSパイロット試験に合格したら、テストパイロットとして推薦するつて言つてるじゃない」

「それじゃあ、身内びいきだつて思われるじゃないか！ただでさえ、テム・レイ開発部長の子供だつて、教官からも手加減されてるんだ。」

まだ15の少年である彼は反抗期まっさかり。父との会話など、数

回帰った時に話したつきりである。地球が無くなってからと言うものの、顔を出したのは入隊の前日だった。父親として育てられていた記憶は幼いころにしかなく、サンフランシスコ近郊の街から出てからは、月のアナハイム社の社宅に住み、授業参観や運動会へ顔を見せたことはない。記憶にあるのは、疲れ果てた父の顔とコーヒーを催促する父。

ただ、親としての顔が見られたのは、家族のイベントである週に一回の外食にて、周りの目を気にせず、電子工学やロボット工学の話ばかり。「あれでもテム・レイ技術部長の倅かなんて言われないうようにしろ」と言うのが口癖。

そんな父の背中を見ていたアムロであったが、不思議と国のために日々研究所に缶詰になりながらも、たった一人の息子であるアムロの事を不器用ながらも心配してくれる様は尊敬していた。だからこそ、自分も全力で期待に応えたかったのだ。

敵軍の将であるガルマ・ザビも親の七光りと思われるのが嫌であったために、戦場で手柄を立てることに執着していた。アムロも似たようなものを感じていたに違いなく、軍の高官だからと手加減されたくはなかったのだ。

とはいえ、アムロの潜在能力は高く、基礎訓練時における反射神経のテストやMS操縦に関する予備知識は相当なものであり、MSパイロットとして非常に適性があることから、父テム・レイの判断は間違っていない。それどころか、テム・レイの判断に懐疑的なMSパイロットでさえ、アムロのたたき出す成績に驚き、逆に推薦までしたのである、決して身内びいきという類のものではなかった。

「……そうね、でもアムロの実力があつたからこそでしょ。そうじゃなかったら、お父さんだって推薦なんかしないはずよ」

「そうらしいけど……なんか、嫌なんだよな」

「何が？」

アムロのぼかしたようなセリフにフラウは首を傾げる。

「何か、家族で戦争やってるみたいでさ。僕たちこんなことしてる場合じゃないんじゃないかって思う時があつてさ……」

アムロの直感的な台詞にフラウもなんて言えば良いか、返しに困る。アムロのそういった根拠のない唐突な気持ちの吐露はよくあり、アムロの世話をしている時間が長いフラウはアムロの繊細な一面を理解しているつもりだった。

「そう……あ、そうだ。アムロに言っていなかったけど、私も軍に入るようになったから」

「え、フラウ！君に軍人は……」

「医療ボランティアよ。一応、軍属だからってかわいい制服もらえるのよ」

軍人になるのかと勘違いしていたアムロであったが、医療ボランティアよりも制服目当てじゃなからうかと、邪推してしまうアムロ。フラウがナース服を着ている姿は想像できたが、しっかりと看護師のような仕事ができるのか、あまり想像できないアムロだった。だが、何度か会話をしたことがある、ルウムで家族を亡くして移住してきた診療所の助手として

勤務する、美人で評判の人を思い出す。

—そう、たしかセイラ・マスって人だ。

シルクのような滑らかな金髪に透き通った肌。青い瞳が見え、その整った美形にクラス男子が噂していた。フラウと共に買い物をしてきた時にデートと言われて、フラウが真っ赤になっていたのをアムロは思い出していた。

『彼を大事にしてね』

彼女のそんな何気ないセリフを思い出し、自分が何で軍を志望したのか思い出す。そう、世話焼きの彼女やコロニーを守るために軍人になったのだと。

「アムロ、セイラさんのこと思い出してた？」

「アムロ、脳波レベル上昇！コレハコイカ？」

ハロのセリフが決定的な一打となった。フラウの嫉妬から爆発した怒りの一撃はアムロの天然パーマへと降り注ぐが、そこはニュータイプ故か、回避行動を取る。それでも、フラウがクラスや下級生への熱血指導で培われた鉄拳は、アムロを追尾する。

「ま、待ちなさい！アムロ！幼馴染の良さを分らせてあげるんだから」

「フラウ、脳ノCPUガ暴走！」

レイ家のリビングは混沌とした戦場となる。ほったらかしの衣類やゴミが散乱し、瞬間に散らかっていく。これも二人とロボットにとっては日常。遠い宇宙そらの向こうで戦争が行われていても、未だに戦禍のないこの地は仮初の平和が維持されていていくのだった。

「閣下、間もなく放送が始まります」

「ルナII経由で月面ヘレーザー通信で流されます。ジオンの民生衛星通信も受信でき、全人類へ放送できます」

「あの惑星へのアナログ通信、ラジオなどもすべて順調です」

未だ作り立ての塗料や接着剤の匂いのするスタジオに、多くの連邦軍広報官が報告を行う。既にテレビカメラを構える技官の姿や原稿を見る佐官級の将校、アナハイム社の重役、各コロニー国家から来た外交官も顔を揃えていた。

その放送は地球連邦政府無き後、亡国の軍となった地球連邦宇宙軍の総決起スピーチが行われるという事で、多くの将兵たちはテレビ越しで放送を待っていた。

「將軍、制服をもう一度確認させてください」

「問題ないだろう。君のデザインした軍服なのだから」

その人物の制服を整えようと、メイクの人や軍服のデザイナーが彼の軍服の最終チェックに入っていた。

「新しい軍服であるのだから、気を使うのは分かるがな……」

スタジオの壇上に立ち、原稿と水の入ったコップがおかれる。それはまるでムンゾの独立宣言を行おうとした矢先に斃れたジオン・ズム・ダイクンのそれと似ており、その光景を直に見ていた総司令官のレベルはそれを思い出ししていた。

―あれから、十年余り。あの場所で始まったのか……

制服の直しが行われる中、レベルはムンゾ自治共和国の議事堂で起きた事件を思い出す。

独立宣言を行おうとした矢先、ダイクンは演壇の上で斃れた。ストレス性の心筋梗塞であると伝えられたが、レベルを含めた連邦高官はザビ家による謀殺と断定していた。

ともあれ、連邦側もそれを容認していた。ダイクンは思想家であったが、政治家ではない。ムンゾが自治を得て、最終的にコロニー国家が地球と対等な関係を経ることは、レベルのようになりべラル派の軍人や改革派の政治家、経済界などが望んでいた事。ムンゾが連邦と対等な関係を経ることはコロニーと結びつきの強い連邦政府官僚や軍人、財界など各界が求めていた。そのため、ダイクン率いるムンゾ政府を彼らは支援した。中央政府に知られないよう、ムンゾの工業化に力を貸し、多くの技術力を持ち、主権国家の基本である国防軍の創立まで行った。

だが、支援した連邦改革派の思惑は大きくそれていく。

国力の差を考えず、急激な軍備拡大をしようとするダイクンは連邦政府からマークされ、駐屯軍の警戒レベルは軒並み上がり、その上連邦からの独立宣言を行おうとした。既得権益を守ろうとする連邦の

腐敗した官僚にムンゾそのものをつぶされかねない。ダイクン家の次に影響力を持つザビ家やその他の財界はダイクンの存在を危惧していたに違いなく、国父と称される彼が国を滅ぼしかねない存在だと判断した彼らはダイクンの排除に動いたのだ。

そして、ダイクンの死とザビ家の台頭によって、運命の歯車は大きく回りだす。

外交努力を主としていたデギンは歳を重ねて影響力を弱め、長男ギレンが総帥としてジオン共和国を掌握するまで、誰一人として彼の意思を気づくことはなかった。

ギレンの著した『優性人類生存説』。

まるでジオン・ズム・ダイクンのニュータイプ説を都合よく折り曲げた、時代錯誤の選民思想は多くの知識人やアースノイド、スペースノイドから批判を浴びた。しかし、長年による地球連邦の搾取と重税により、ムンゾ国民の支持は多く、まるでダイクンの妄執にとらわれたように。

そこからは雄弁家、扇動能力にたけたギレンにより国を掌握。

戦争へと突き進んでいったのだ。

そして、地球の消失と言う説明できない事象によって、地球連邦軍は自身の存在意義を揺らがせ、巨大な組織である故に各コロニーへ混乱を撒き散らした。末端兵士による暴走や司令部そのものの混乱。臨時連邦政府の樹立のための外交努力など、ジオンと言う敵に対しての警戒を怠り、先のルウム会戦のような惨状を呈してしまった。

水面下で連邦を支持するコロニーもある他、アナハイム社やジオン

のダイクン派と呼ばれる反ザビ派もレビル率いる連邦軍へ支持を表明している所も少なくない。そして、地球連邦としてではなく、反ザビ運動を明確にする演説をレビルは行おうとしていた。

「放送まで10秒！」

「閣下、リハーサル通りをお願いします」

「わかっている、儂とてTVアナウンサーの如く、その場しのぎで話したりはせんよ」

レビルの傍を離れない副官へそういい、幾つも修正した原稿をちらりと見る。最初の草案原稿から度重なる修正と企業側からの要望。コロニー政府からの要請。反ギレンの意思表明を求めるダイクン派の方々。

レビルは自身が道化の操り人形になっているような気がしていたが、政治家と言う存在はそうした事がなくては生き残れず、リベラル派の将軍として、民主主義を掲げる地球連邦市民の一人として戦わねばならないと心に決める。

「放送開始まで、3・・・2・・・1……」

カメラが起動し、衛星やレーザー、アナログのラジオ放送など片っ端から情報送信技術を用いて行われた電波放送。それは反対側に位置するサイド3にも届き、戦禍を免れた通信中継衛星を経由して全世界に放送された。

「地球連邦宇宙軍司令及び臨時全軍司令官のヨハン・イブラヒム・レビルであります。未曾有の事態に際し、超法規的措置として地球連邦政府の暫定政府樹立のため、各コロニー政府と共に政権樹立に向けて準備を進めてまいりました。

しかし、結果は失敗に終わりました。ご存知の通りですが、ジオン公国による宣戦布告によって我が地球連邦宇宙軍司令部、『ニューヨコスカ』は破壊され、多くの連邦将兵と皆様の血税によって建設された艦艇を多く失いました。これは私の作戦や指揮、そして政治関係に疎い、私の至らなさが原因であります。

今こうして私が話しているのは、勇敢なる連邦将兵と皆様の絶え間ない支持があつてこそ。敗軍の将として叱責されるのであれば、私は軍事法廷に自ら出廷し、己の人生を銃殺隊へと委ねましょう。もし、私が再び、コロニーに住む皆様方の守護者として求められたならば、私は全身全霊を持ってこの雪辱を期すでありますよう。

今、サイド1, 2, 4, 5, 6の各自治政府と月面自治政府がジオンと条約を結び、セツルメント国家連合を設立したことは存じています。私は兼ねてより、地球連邦の腐敗した政治やコロニーへの搾取体制に対して、彼らを倒さねばならないと改めて感じておりました。絶対民主主義の名の下に隠れ、何一つ成しえない高官たちが既存権益を貪り食うことは許してはならない。反乱軍の将として死刑台に送られる覚悟で挙兵していた事でしょう。

こうしたコロニー政府の連合体。より良い人類の未来を築くための世界秩序は何よりも必要であると考えております。

しかし！

現時点での結成はなりません！

これは選民思想に則って行われる悪魔の契約であると断言できる！

ジオン公国国王デギン・ソド・ザビが、公国の実権を握った時に語った傲慢不遜な言葉を思い出してほしい！『ジオンの民は選ばれた民である』と。

地球連邦の民は、旧来の因習にとりつかれて、宇宙圏の人類の意識が拡大しつつあるのに気づかぬ、古き民である。ジオンの国民が古き悪習に捕らわれた民に従う謂われは無いと言う！

確かに、地球連邦の腐りきった官僚たちに人類の舵取りを差配するには無理がある。

しかし、デギン・ソド・ザビの語る一面の真理にのみ眼を奪われてはならない！

所詮ジオンの独裁を企むザビ家一統の独善である！

国家を束ねんと欲するならば、何故ギレン・ザビは『優性人類生存説』を書き上げたのか！！

百歩引き下がってザビ家のジオン独裁を認めたとしよう！
だが、何故地球連邦そのものまで！

そして、新たに友邦になった新たな惑星の民までもがザビ家の前に膝を折らなければならないのか！

地球連邦は個人の人権の確立の上に立った政府である。セツルメ

ントは後継の組織と思われるだろう。しかし、あれはザビ家の傀儡に過ぎず、ザビ家の輔弼する悪習そのものになり下がったのではないか？

これらは先のデギンの言っていた旧来の因習を復古させ、人類をザビ家の家来とするような悪習。正に地球連邦政府の軟弱とも酷似すべき特徴である！

あのギレン＝ザビは言う。討つは地球連邦の軟弱であると！

だが、地球が無くなった時、その軟弱はあったか？いや無かった。数万の連邦将兵を虐殺し、彼らの家族を葬り去った彼にその大義はあるか!?

ギレンは著書の中でこう言った『自然体系の中、人類のみが強大に増え続けるのは、自然の摂理に反する冒瀆である。それを今こそ管理して、自然体系の中の一つの種として生息しなければならぬ時、人類の削減は為さねばならぬ』

これが真理だろうか？

ギレンはこれを書き記した時、何を考えたのか？

彼の考えるものは狂気である！

人類を削減せよという、傲慢な思考に絶対心理はあろうか！市民を率いる指導者の器はあるのか！

嘗て、宇宙に進出する直前に我々人類は数千万の犠牲を出した世界大戦を行った。それを主導した独裁指導者ヒトラーは、『我ら民族が人類を、世界を統べるべき』と主張し、ユダヤの血を絶やさんがために数百万の命を組織的に弾圧したのだ。

そのような暴挙をギレンは行わないか？ 答えはおのずと明らかになるであろう！ ヒトラーは我が闘争にて記したように、彼もまた著書に選民思想を記し、暴虐に走った。我ら人類の宝であるコロニーを兵器化し、ニューヨコスカの大地を破壊したのだ！

母なる大地、第二の故郷を死屍累々へと変える暴挙に正統性はあるか！ 答えは否である！

我らは地球連邦という亡国の名を掲げ、亡国の軍隊となるつもりはない。

我らは第二の故郷に自由を齎さんがために戦い、大地の子らのように、民主主義のため、ファシズム国家体制の打破を誓い、この身を投ずることを宣言する次第である。

我々は第二の大地を守るティターンズとなつて、人々を守らねばならない！

数少ない同胞よ！ 共に立ち上がり、自由を勝ち取るのだ！

我らも苦しいが、ジオンも苦しい。彼らは強いが無限大ではない！ 人的・物的資源が限られたコロニー国家ジオンはより長い戦いを迫られ、困難な戦いを行う事となる。それゆえ、他のコロニーを吸収せんと譲歩してくるだろう。だが、油断してはならない。必ずや、ザビ家に忠誠を誓わされ、歯向かう者は容赦なく切り捨てられる。その思惑に乗らず、戦い続けるべきである！

ジオンに兵なし！

我々は必ずジオンの独裁に勝利し、自由の大地を手にする！」

第2章 ファイルアデス大陸解放戦争 第十三話 閑話 各々の憂鬱

「ふむく……」

其処はズムシテイの総帥府の総帥執務室。幾重にも張られたセキリテイはギレンの用心深さを物語り、周囲の壁に飾られていた絵画や飾られた公王の肖像画の他、マ・クベの寄贈した真正正銘の中国王朝の壺など、随所にわたって金が掛けられている。

そんな執務室において、主であるギレンは短いながらも溜息を溢す。

私生活において、防諜をしつかりと行い、愛人関係である秘書のセシリア・アイリオンや本妻との関係は良好である。歴史上、愛人関係や家族関係がボロボロな指導者は数知れず。だがギレンは後継者問題を視野に入れ、プライベートの情報は外に漏れたことがない。ジョン国内ではその熱狂的な支持とは別に、都市伝説とも言える『ギレンの息子』という話が出ている。公表されているのは、ドズル・ザビの娘であるミネバぐらいであり、政治指導者の子息の情報が全く出回っていないことを不審に思った民衆が都市伝説としているに過ぎない。

そうしたことを問題視しているわけではない。

ただ、ギレンが溜息をつくほどに面倒な事案が一つ。

反ジオン組織『テイターンズ』についてである。

レビルの宣言により、より一層ザビ家の独裁に反発した連邦系コロニー政府はジオンと袂を分つまではしなかったが、『抗えば滅ぼされる』というレビルのセリフに対して、事実確認の催促が既にコロニー

政府高官から駐在ジオン大使へ連絡が取られていたほどである。

既に、ジオン大本営や国家情報保安部、民間諜報機関「キシリア機関」など、正規や不正規に問わず連携を密にしており、以前とは違った派閥争いのない協力関係が出来ていた。

キシリア・ザビとギレン・ザビの表向きは共同歩調を取っていたが、キシリア自身がギレンに対して政敵として振る舞っていたために、ギレンの息が掛かった国の諜報機関とキシリア子飼いだであるキシリア機関は仲が悪く、戦争勃発までは水面下で対立していたのである。

だが、幸か不幸か地球がなくなったことによつて、キシリアの態度が軟化。これにより、対立していた双方が和解。両者のいざこざが幾分か抑えられるに至った。

ただし、これを良く思わないのが、ザビ家に対して敵対姿勢を強めるダイクン派である。戦争直前に反政府活動を行っていたダイクン派は表立った活動を控えて地下に潜伏。表向きダイクン派として目されたアンリ・シュレッツサー大佐は准将に昇格し、ズムシテイ首都防衛大隊と防衛師団司令部を総括する司令官へと異例の昇格を果たす。ダイクン派閥でも穏健な部類は彼の元に集まったが、ギレンにとつてみれば自由に動かれては監視しにくい政敵が、纏まっていた方が監視する事や消すことが容易くなる。

だが、レビルの演説によつて地下に潜伏していた過激ダイクン派が活動を開始し、既に検挙した者も多く、それらは連邦系企業の重役やジオン内部の政権に与していた閣僚であったりと、ギレンは内心頭を抱えていたのである。

「兄上、将棋や囲碁は続けているのですね」

「キシリアか、…頭の体操には丁度良いのだ。ネットで民衆とやるのも中々楽しい」

「最近は落ち着いていますからね」

キシリアはゲームソフトのラベルを確認して、ギレンの好みを知る。ブランドものが多いものの、復刻版や中小企業が手掛けたソフトも見られ、フラナガン機関に使えそうなソフトも見繕うことが出来た。そして何より：

―だ、脱衣麻雀だと…

明らかに二次元美少女系のゲームソフトである。企業はかの日系のソフトであり、そういう部類のジャンルでは最先鋒をいつている。キシリアが見たのは健全な水着少女の出てくる全年齢板であった。だが、そのパッケージの後ろに更に奥の方には「」のマークが垣間見、キシリアはそれを見ることなく棚にしまう。

「キシリア、クワ・トイネの貿易書類だがっ!？」

「っ!?!なんでしょっ!兄上!」

まさか、成人してから兄のエロゲーを見つけるとは思わず、キシリアは返事を噛み、ギレンもギレンで自分の秘蔵コレクションをカモフラージュしていた棚の中身が微妙にずれているのを見る。

―見つかった…

その心境は母親にエロ本を見つけた中学生に近い。いや、歳の離れた妹に知られる方が辛い。母親ならその知識はあろうが、妹にそれはない。あつたとしても、親よりも微妙な空気になるほかなく、成人に達し、政治家となった二人がその状況になったらどうだろう？

間違いなく、微妙な空気になるに違いない。

「……」

沈黙が執務室を満たし、ギレンとキシリアの微妙な空気が流れてい

る。ギレンは日系のアニメ（脱衣チェス系の全年齢向けアニメ）に出てくる妹系ツンデレキャラの反応とちがうことに驚きつつも、IQ180という超高速回転する頭脳によって分析を始める。

—あ、アニメの妹ツンデレキャラはもつとこう、『お兄ちゃんのエツチ！』なんていうが、こいつは違うじゃないか！……いや、そもそも現実には……

妻帯者の考える思考とは思えなかったが、誰も彼がこんな思考を抱くなど思わない。あんなボンキュツボンの秘書の愛人がいるのに……というやつかみすら衛兵の間で出ているにも関わらず、ギレンのもったいない天才的頭脳は現状を打破する方法を見つけられず、その空気は刻一刻と悪くなるばかり。

ギレンは『見たのか？』と口から出そうとしたその時、突如として巨大スクリーンの画面に弟の姿が映りこむ。

「兄貴いー……二人してどうしたんだ？」

頭を抱えるギレンとフェイスマスクを頭まで引つ張るキシリアの様子は、筋肉ゴリラのドズルからしてみれば、一体何事かと思う。ただ、以前までの仲の悪すぎる二人が仲の良い様子を見て、ドズルはその剛顔に似合わない微笑みを浮かべる。

ただ、その顔はどう見ても威嚇するゴリラの顔。妻のゼナならば、家族のことで笑っているだろうと理解できるはずだ。娘のミネバなら見て大泣きするだろう。

ドズルの表情や仕草は感情の起伏に疎い二人には威嚇にしか見えない。

「謀反か!？」

「まさか、ドズル！ソロモンの宇宙攻撃軍の兵を！」

「何を勘違いしている!?!そんなのではない！」

まさか威嚇微笑みを宣戦布告と受け取る兄弟。ザビ家はもうだめかもし

れない。そして、混沌とする場に来客が一人。

「失礼します、兄上。惑星派遣部隊の最終計画書を……」

歩けば花が咲き、乙女たちはその動きに目を奪われる。将兵たちは士気上昇して一騎当千の働きをする。正に美少年！神が選んだザビ家の次期当主のガルマ・ザビだった。そんな彼であったが、心もとないう時は前髪を弄る癖がある。ともあれ、それが乙女の母性をくすぐる原因となる。一部の男子はそんな彼に嫉妬するが、彼の高潔な精神と部下に対する姿勢から、直ぐに嫉妬から尊敬の念へと変わるのだ。

そして彼には夢がある。

ザビ家の皆が楽しく家族団欒することである。

一人はソロモンから画面を通じているものの、今は亡きサスロと養生中の父を除けば、ここにはザビ家のブレーンが集まっていた。

そんなわいわいがやがやしている場所を見たものだから、ガルマは思う。

「わくわく、お兄ちゃん!!!」

「おにいちゃんだとう!!」

その日、執務室で叫び声と雄たけび、そしてこどもの声が聞こえたという。それは統帥府の怪として語り継がれることになる。

「よし、仕切り直しだ。まずはドズルだ」

「おう兄貴」

一通り落ち着いたザビ家一同は何時も家族団欒の時に使うリビングに集まった。また、その騒動を聞いた公王デギンも来室した。加えて、総帥と議会の橋渡し存在であるダルシア・バハロは目の前で起こる内紛騒ぎから胃を抑えて顔面蒼白になっていたが、長い付き合いのあるデギンは笑っていたという。成人しても自身の子供。ニユータイプでなくとも、自身の子供の様子は読める。

「連邦……いやティターンズか？ 奴ら、威勢はよかったが、その割に戦線は普通。これと言つて目立った報告はない。それよりもムーンプの艦隊からの報告は例の磁気嵐によつて通信が不能になっている。詳しいことは分らんが、天体物理学の権威の話によると、以前の太陽系とは違う様子らしい。第四惑星のマーズⅡはヘリウム3が大量に眠っている。木星船団のようなことにはならず済みそうだ」

連邦軍残党改めティターンズとなった彼ら。レビルの演説によつてジオンと安保条約を結ぶコロニーから脱出した連邦支持者がサイド7に集結。加えて、ティアンム中將の艦隊など残存艦隊の生き残りもティターンズに合流した。資源に関しても、小惑星暗礁宙域などから岩石を持つてきてはサイド7周辺やルナⅡに配置しており、ジオンに対する備えを準備している段階なのだろう。ギレンとしては、ジオン公国建国時にダイクン派の勢力を纏めて粛清したこともあるが、今回ティターンズへ核弾頭を撃ちまくればいいというわけにもいかない。

中にはサイド7の民間人もいるはずであり、これから流入する移住者もあることから、これは独立のための戦争ではなく、民主主義的連邦国家体制か社会国家主義的なザビ家の専制政治かのイデオロギー戦争に切り替わっていた。

スペースノイドの独立を掲げたジオンに対して、連邦のティターンズはジオンの専制独裁政治の打倒とスペースノイドの民主主義を目

指して戦う。どちらも掲げているのは虚構であり、テイターンズの掲げる民主主義もジオンの独裁を客観的に見ているからに過ぎない。

旧世界において、自身の主張や宗教、経済が正義として戦っていた。それは宇宙世紀になっても同じであり、ジオンの独裁を否としてレビルは否定するが、当のジオン国民はそうではない。アースノイドは地球という安穩とした環境に身を置いている者を金持ち連中と蔑み、全く仲間とみなしていない。連邦寄りのコロニーは多少事情が違うとしても、比較的裕福であることに変わりなく、ひどい搾取をする連邦にすり寄っていた奴らとみなされている。どちらの言葉も両者に差別され搾取されていたと考えるジオン国民はほほ眉につばして聞くのが通常なのだ。

ジオンよりのスペースノイドやサイド3の人々にとってはコロニーの自治権確立のための戦いという大義は共通して抱いている。ジオンの独善的なやり方に不満や不安を抱く者も多いかもしれないが、その鬱憤や憎悪を解消するには、より強大で邪悪な物に頼らざるを得ない時がある。その憎悪の源は地球から遠く離れた宇宙都市への棄民政策同然の入植計画の強行。そして、自治権拡大の阻止のために行った経済制裁の恨み。それらによって自分たち自身が傷つかないうようにするためならば、共通の敵に怒りをぶつけて一時不満や不安を先送りしようという邪悪である。

コロニーは環境の整った空調の効くものであったが、壁を隔てた宇宙空間では生き残ることはできない。そして最下層の人間は在りもしない『空気税』を取り立てられ、食うや食わずの生活を行っていた暗礁宙域の採掘労働者や企業体の支持があつた。コロニーを建設し、私腹を肥やすコロニー公社の役人に搾取され、暗礁宙域から持ってきた資源小惑星からヘリウム3や鉱物を採取する労働者は私利私欲から架空の税金を課され、それが払えず餓死ではなく窒息死する人間も少なくない。ムンゾ自治共和国建国後にそうしたものは是正された

が、未だにサイド3や資源小惑星の人々からは忘れられない痛みとして記憶されている。

物語では簡潔にするために勧善懲悪の話は数知れず。だが、現実はそのような簡単ではない。物事は多角的であり、一面だけで物事を見ることはあってはならない。

「ムーンIIと交信できるようになるまでどの程度必要だ？」

「最短で5日。最長一か月程掛かるだろう。それに、太陽フレアも出てきている。合わさる可能性もあると観測部隊はいつていた」

ミノフスキー粒子下での通信技術を向上させたジオンはレーダー通信や各衛星や中継基地を通して連絡を取る。だが、それは磁気嵐や太陽風などの環境に影響しやすく、木星船団や火星植民地との通信は難しい。一年に数度しかできず、大規模な戦争一年戦争があれば、一年以上の歳月が費やされる。木星においては二年かかる場合もあるだろう。

「ふむ、ドズル。ソロモンと駐留部隊とア・バオア・クーの防衛艦隊を抽出して、ムーンIIの後詰めとして配置しろ。」

「了解した、あに……いや総帥閣下……」

「ドズル、兄貴でいい。お前がかたっ苦しく呼ぶとムず痒い」

次にマスクを脱いでいたキシリアは惑星派遣部隊の話をしていく。

「二先ず、ロデニウス大陸は平定しました。ロウリアはマ・クベが。クワ・トイネとクイラについては自国で発展してもらうように致しました。目下の問題であった技術供与の件については、文化人類学者や歴史学者などの有識者グループを結成し、適度な技術供与と文化や文明

の底上げをする予定です。現在の目標は西暦でいうと1940年代、クイラは中東の文化に似ていて、一方クワ・トイネはギリシャ風の文化様式です。両国と類似する文化を研究するチームを組織し、技術・文化両面から発展させる予定です」

「資源回収については？」

「持ち出せるものは……」

キシリアは途中で言葉が詰まる。

「どうした？」

「いえ、それが言った方が早いので、待たせている御仁が。」

キシリアは後ろにいた衛兵に合図を出し、扉が開かれると、デギンと同じぐらいの年齢の男性とガルマよりも年上でキシリアよりも年下位。無精ひげの男性が現れる。

「私はウォルター・ビショップです、いやはやザビ家の皆様にご会えと
は光栄です。私も若いころは政治家に憧れて……」

「落ち着け、ウォルター。すみません、父は長い間病院に入院して
いて、情緒不安定なんですよ」

そんな人物が役に立つのかと、皆の口から出かかると、キシリアは
彼らの経歴を知っており、半信半疑な周囲の気持ちを代弁するように
説明する。

「彼はムンゾ国立大で教鞭をとっていた。ハーバード大学大学院の博
士号を5つ取得している。専門は非主流科学、フリンジ・サイエンス連邦政府から命ぜられ
極秘研究に携わっていた。」

「フリンジってエセ科学じゃなかったですか？ 姉上、確か超科学的な
……」

「超能力や発火能力、現在の科学技術では解明できないものについて

の科学的追求に長けている。私が知っている科学者でこの分野に優れている科学者は彼以外にいない」

―確かに、少し変わっている老人にしか見えないがな

と言ってしまうあたり、キシリアもそう思っている。既にガルマに「チュツ○チャプス食べるかい？おいしいよ。実はこれはアメリカの……」「え、えええ……」と引かれているあたり、客観的に変人にしか見えない。

「キシリア閣下の言う通り。私は連邦で極秘研究を幾つも行っていた。もう10年も前だが……入院させられた理由はダイクン派と言われて……」

「ウォルター！それは言うなって……父はジンバ・ラル氏の依頼でダイクン氏の司法解剖を依頼された同時期に事故を起こして……」

「キシリアよ、この御仁は大丈夫か？」

それは現体制の転覆を目論むダイクン派に近しいビシヨップ博士がジオン首脳部の集まる会議にいていいのかという事とザビ家の暗殺をもくろんでいた場合、不用心ではないかという質問であった。ギレンは今回の会議に有識者として二人ほど呼んでいるとメールに書いていたが、仮にもダイクンを殺した謀反人たちを目の前にしてこの振る舞い。

ギレンは不快感を抱いていたのだ。だが、その本人により疑念は払しょくされることになる。

「総帥閣下、私は科学者です。ダイクン氏の死に関しまして、私は一切知りようがありません。それに息子が言ったように、助手を死なせた。そのため、私はマハル精神病院に入ったのです。ザビ家の皆々様を害するつもりはありません」

「父はダイクン氏の司法解剖をラル氏から依頼されたに過ぎません。入院した原因は先の事故が原因です。父はその……入院期間が長かったのでおかしく……」

「十年もあの病院にいておかしくならないわけがないだろう！……そ

れで説明してよろしいか？」

ギレンは天才である。故に狂ってしまった科学者マッドサイエンティストに対しては不快感を募らせていた。だが、科学の最先端をけん引する人材はこうした狂気が見え隠れする者も少なくない。フラナガン機関では孤児を使つて人体実験をしており、実験では父と思つていた人物に襲われ、その恐怖心を兵器に転用しようとした科学者もいるという。それは未遂に終わったが、政治家として許容すべき損害としてみていた冷酷な面もあるが、彼も人を愛する人間である。狂気の末に起こした顛末を聞いて、人としての感情は怒りを覚えていたのだ。

「構わん……続ける」

「いえいえ……このスクリーンを使つても？」

「兄貴、本当にこいつに任せていいのか？」

「ああ、お前も聞きたいだろうが、あとで資料を渡す。」

「わかった、こっちは配置につくよう準備する。」

ドズルの心配について理解するギレンは早々に説明を切り上げてもらおうと、指示をだす。キシリアの要請によってこの場を設けたのであり、国に利するものでなければ、グラナダの兵を地上に送ろうとギレンは考えていた。

「始めたまえ」

「ええ、まずは……」

スクリーンに映つたのは何かが墮ちたと思われるクレーターの写真。木が焼け焦げていることから、核攻撃ではないだろう。核攻撃なら衝撃波によつて脆弱な木々は炭になって粉々になるか、衝撃で折れてしまつて倒木になるであろう。だが、焼け焦げているが、衝撃でも木の形を保つそれは、核攻撃よりも威力の小さいものであると予測で

きよう。

「これは、西暦1908年6月30日頃、ロシア帝国領中央シベリア、ツングースカの隕石衝突現場。現場では地球では少ない微量のイリジウムが検出されたと公表された。地球連邦の公式見解はまあ、嘘偽りが多いものの、原因は現地のガス噴出地帯を直撃したためとされ、キノコ雲が現れた」

「これがどういった関係を？」

ガルマは多少の知識があるものの、隕石が落ちた話などTVのドキュメンタリー番組でも見たことがない。彼は首を傾げるものの、それを見たビショップ博士は「いい質問だ」と得意げに語りだす。

「確かに連邦政府の公式見解を照らし合わせればそうだ。しかし私はU・C・0057において、ベガスのエリア51に保管されていた隕石の分析を依頼された」

「アメリカのネバダ州にある極秘試験場の名前です。旧時代^{西暦}では宇宙人の標本とかUFOを保管していると都市伝説にあった……所謂ほら話」

「ホラ話なんかじゃない……あれは素晴らしいぞ！グレイ宇宙人は何と膀胱が三つ……」

「要件を話したまえ、博士！無駄話を聞いている場合じゃない。簡潔に頼む」

ギレンはしびれを切らして苛立ったように話す。博士は「失礼、これを」と脱線した説明を再開した。

「このツングースカ隕石の公式発表では、小型隕石のエアバースト。

衝撃による広範囲破壊と出ている。隕石は弾着と共に粉々になったと発表した。……だが、実際はロシア帝国によって秘匿され、ソ連崩壊後は合衆国に引き渡され、継承された地球連邦が管理していた。これがその隕石」

スクリーンに映されたのは、人為的に作られたと思しき素材とその形。言わば、核弾頭のような形の物体である。核弾頭は球体の核物質を爆薬による爆縮によって核分裂が起き、人工の太陽を作り出すような莫大なエネルギーを発生させる。

だが、それは何らかの鉱石と何らかの呪文が刻まれた鉱石を周囲に埋め込まれていた。損傷具合から、不発に終わった弾頭の一部と思われたが、ロシアやアメリカ、そして地球連邦の科学者でさえ、それが何なのか分らなかったようだ。

「当時、このような文字を記した文明は存在しなかった。何らかの数式か化学式の一部であることは推測できたが、何らかのエネルギー体としか判明できなかった。そして、何かが作用して錆びずに数百年もその存在は落ちてきたその日の状態を維持していた」

地球の鉱物で作られた金属や化合物などは風化する。原子の半減期が途方もない物質もあるとはいえ、多くの物質は酸化や風化と共に腐食していき、ボロボロになるのである。だが、写真を見た限り、そのような状態ではなく、ロシア帝国時代の黒写真やソ連の秘匿研究所のカラー写真、アメリカ合衆国のNASAと国土安全保障省の連合調査。そして地球連邦軍主導の秘密プロジェクト『コバルト計画』などの新時代の兵器システムの研究において、これらの未知の物体の調査が行われたが、その形状は落ちてきた当時と変わらない造形を保つ。

「そして現在だが、これらの文字列がある旧文明の遺跡から発掘された。クイラの鉱物資源採掘場において、似た文字列を含んだ工作機械を発見した。言わば、これは動力部分に使われた動力源の画像。見たまえ」

それはどうみても、二足歩行作業機械にしか見え、形状はまるで YMS-01 に近い形状。作業機械のモビルワーカーに近い形状をしているではないか。

「まさか、ロデニウスで出てきたものとはこれか？」

ギレンは目を丸くし、MSのと似た兵器思想をもつ国があることを知って唾然とする。その他の面々もロデニウス大陸の人々の文化レベルがそこまでのものとは見えなかったため、驚愕といった表情をしていた。

「ええ、他にも何らかの兵器。戦車にも似た形状の遺物が発掘できていますが、どれも錆び付いていて回収された物はどれも使えないものばかり。写真のこれはラボで分析したいのですが……」

「ああ、手配しよう。……総帥、彼らをガルマの部隊に加えても？」

ガルマ・ザビはこの後、マ・クベ中将指揮の元、惑星派遣部隊の実働指揮官としての任に突く。確実に今後、他の国家が戦争を開始するのは避けられないことは誰の目が見ても明らかだった。ザビ家やその他面々はガルマが戦場に行くことに対して反対していたが、ガルマ本人は寧ろ果敢に行こうとしていた。

—私はザビ家の男です。親の七光りなんて御免です！私が戦場で戦わずして誰が戦うのです？

ザビ家の殆どは成人し、要職に就いている。ガルマのみ、佐官クラスの将校である。安穩とした銃後に隠れているようでは士気に関わりかねない。また、ドズルと歳が近いために、その見た目に反して血気盛んである。

とはいえ、暁の蜂起事件以降のガルマの人気はギレンをも凌ぐ勢いである。ギレンとしては、ジオンの国威発揚の意味も込めて、末っ子を戦場に狩り出さねばならないと判断する。

そして、ビショップ博士主導の惑星技術調査チーム『フリンジチーム』はガルマの所属にした方が、社会勉強になるとギレンは踏んでい

た。また、惑星派遣部隊の多くはキシリアの子飼いの部下が占めており、総帥の息が掛かった親衛隊もある他、何かあった場合の火消しには困らなかつた。

「では、ガルマに技術調査チームを率いてもらおう。博士、調査場所として何処に行く?」

ギレンは今後の外交使節の第二陣に向けて準備している最中である。主要国への政治的パフォーマンスも含めた今回の出陣は旧ロウリアに建造された魔導アンテナ装置によつて全世界の魔導テレビ通信によつて、各軌道上の魔導装置を中継して放送される。機械文明の発達していない魔導文明の世界でも通じるようにしたそれらは、ギレンの情報政策の一環だつた。

それを知つてか知らずか、現行の科学技術の更に上に行く研究を行っているビショップ博士は他の研究チームとはまた違った角度から調査する。それは現行の魔法文明ではなく、この世界をかつて支配していたという、「古の魔法帝国」は現時点でジオンの仮想敵国である。それを継承したと思しき、神聖ミリシアル帝国などを警戒しているギレンは戦禍拡大を避けるため、情報収集を行おうとしていたのだ。

そのため、調査する場所は様々。

「そうですね、まずはクワ・トイネのリーン・ノウの森ですな。あの場所ではエルフ族によつて神聖化されている……、以前ムンゾのコミコン（コミケ）で美しいエルフのコス……」

「ウォルターー！他にもあるだろうー！」

何らかのわけがあるらしく、父親の名前を呼ぶ息子ピーターは書類を無理やり見せる。

「はあ〜……」

「どうかされました?」

クワ・トイネ公国の首都、クワ・トイネ。その歴史は長く、食糧自給率の高い国家であるため、農作物集積地や交易中継所として栄えた其処は様々な作物が取引されていた。現在は老朽化やマイハークなどの成長を遂げた交易都市に貿易機能を移設。古都としても知られる首都は、多くの連邦系企業の建設会社が高層ビルを建設し、旧作物市場の取引所や倉庫などは、今や建設ラッシュとなっていた。

そして、国家の舵取りを任される首相カナタの椅子や机もコロニー国家から輸入したマホガニー製の高級机である。机の上にはジオン公国から輸入したコンピューターや電子紙を使用した書類など、ちよつと前までは考えられない。

新たに作られた行政特区には、新首相官邸を建設中であり、現在使用される首相官邸は歴史博物館として利用される予定であった。あまりにも性急な変わりように首相カナタはエルフであるにも関わらず、白髪や皺がこの半年で増えたのではと思える。

現に液晶に移る自分の顔が前と比べても、老けて見えるようで溜息を吐いてしまったのだ。

「いや、なんだ……最近疲れたなど」

「……まあ、あの光景をみれば……」

女性秘書官は視線を泳がす。彼女は逆にジオンや他のコロニーの美容液や化粧によって見違える程綺麗になっている。前から容姿端麗で頭脳明晰な者が首相秘書官に任命されるが、彼女はコロニーへ視察に行ってから、首相と反比例して美しくなっている。

とはいえ、彼女もあの光景を見て、最初は寝込むレベルの驚きであった。

「あとは、友邦のクイラが我が方を圧倒するなんて誰も思わんよ……」

クワ・トイネ公国は農業生産が他国と比べても、段違いである。そのため、餓死者は全くなく、食に關しての心配はない。肥沃過ぎる大地を持っており、大地の神に祝福されたことから、飢饉などは発生したことはない。また、片田舎に行けば貨幣経済が浸透しておらず、悲しいことに物々交換を行っている所も少なくない。唯一、食品加工業が発達しており、緊張の続いたロウリア王国との冷戦期においては、一種の高級嗜好品として嗜まれていた。また、文明圏外に売り込む場合も「クワ・トイネ産エール」「クワ・トイネ産チーズ」「クワ・トイネ産加工食品」などが出回っている。外貨取得のために多くの交易ルートを持っているが、その肥沃な大地故にその他の産業が発達しないという欠点があった。

一方、隣国のクイラは荒野や砂漠が多く、日々の糧を得るのがやっとといった状況。精強なクイラ山岳兵やラクダを使用した騎兵など、経済資本が傭兵派遣という、中世のスイスの如き貧困国である。少しだけ、魔石が産出できるが、過酷な環境下では難しい。しかし、そんな中で救世主が現れることになる。

ジオン公国だった。

ジオン公国の技術者曰く「地球が無くともクイラがあればなんとかなる」「ジオンはあと10年……いや百……いや1000年王国も夢じゃない！」など言っており、その埋蔵量はジオンの創造の斜め上を行っていた。そのため、ジオンは鉱物資源の輸出を条件に技術開示や軍事援助などを行い、クワ・トイネ以上の発展を遂げた。コロニーの歴史好きの人からすれば、サウジアラビアなどの石油産出国のようと考えらるだろう。

とはいえ、クワ・トイネも発展したが、クイラの発展した様は目を見張るものがあった。相互協力関係によって友邦であるが、どちらか一方が裕福になると、手のひらを返したように、態度が一変する。

こちらは食糧、あちらは少量の鉱物資源と傭兵。仮想敵国であったロウリアを失ったことにより、『昨日の味方は今日の敵』とあるように、クワ・トイネとクイラは自然と距離を取った。小康状態が続いているのは、ジオンという強大な国力をもつものがいるからだ。公国軍も王国軍も対隣国の作戦計画を練っていると情報が来ているため、カナタは頭を抱えていた。軍の血気盛んな者達は新しい玩具を手にして、遊びたい子供のような状態になっている。内需を整え、軍備の中心を陸軍から海軍へとシフトする必要があるので、ロウリアと戦えなかった将兵は振り下ろせなかった拳を振り下ろしたくてうずうずしている状態だ。

それは軍人以外の民間人「隣の芝生は青く見える」状態の経済界や数年後に設置される国民議会の準備機関である『枢密院』の枢密院議員や政権内部にもクイラに対して、食糧を制限するようにすべき論調もあって、首相カナタの胃はジオン印の薬がないと、穴が空きそうなのである。

「豊かになりたいとは願ったが、仕事が多すぎる」

「首相の務めですよ」

「ミレイよ、私の代わりにやるか？」

「嫌です。出来れば枢密院の推薦が欲しいです」

首相秘書官としての野心があるのか、躊躇う様子もなく枢密院の推薦を求める彼女。もし、本当に首相を志すのであれば、ただなりたくと願うより、外堀を埋めるために枢密院へ手回しをする必要がある。そんな彼女にカナタは苦笑しながらも、目の前にある書類の山を片付けていく。

き込まれる国家が現れた。国家の他、物や人など、『神隠し』『人体消失』といった事象として、様々な事件が引き起こされたのである。そして、その事象はグラ・バルガス帝国が現れた頃から度々起きるようになっていく。

「魔物や害虫の大量発生にペストや出血熱の蔓延。……終いには天文学上あり得ない爆発と巨大な物体の計測……全く持ってわからない」

天文兵器準備室の室長ケイブラー教授は頭を抱える。天文学を研究して幾十年の彼だが、他国の書物をグラ・バルガス帝国で使われる公用語に翻訳された文書を読み取り、グラ・バルガス帝国が転移した時期と数百年前の詳細な歴史書を読み解いていくと、明らかに特異事件はここ数十年増加している。専門外であるケイブラーもその異常事態に気づいている。それこそ、歴史を紐解く研究員を擁する大国であれば、警告してしかるべき。彼もまた天文学的異常事態と『ジオン公国』の放送から、彼の国が宇宙的国家であることに疑いようはない。

既に、グラ・バルガス帝国領内にあるラジオ放送。それらの電波塔や各軍用無線など様々な周波数帯域に流されたジオン公国の公共放送。それらはあまりにも出力が大きすぎるために、公共の電波放送が一時中断され、急遽別の周波数帯域を確立させたほどである。それらの放送された内容はあまりにも荒唐無稽な内容であるため、帝国領内では聴くことはできない。聞けば、スパイ容疑が掛けられるなどの措置が取られるほどである。

しかし、高等教育を受けた知識人やケイブラーのような研究者からすれば、火消しに躍起になる帝国指導部の焦りは、自分達より強い国家が現れたと証明しているに等しい。

既に、ジオン公国と戦争状態にある地球連邦のレビル將軍の演説によって、市井に憶測が飛び交っていた。それは地球連邦という惑星国

家がかつてこの地に君臨しており、ジオンは宇宙に棄民した人類である。または帝国と同じく転移した国家であり、その規模は宇宙的なものであるとさえ言われている程だ。

どれも、ジオンと地球連邦双方の主張や発言を元に憶測が作られているが、ケイブラーの計測した天文学データはそれが事実であることを示している。既にグラ・バルガス帝国領土内からでも月より小さいが、星より大きいものが夜空を通っていることは分っているし、軌道から判断しても月の周囲や月軌道上にジオンや地球連邦の何かが居るのが分っている。すでに彼はその観測結果を報告しているが、思つた以上に政府の反応は弱かった。

そもそも、宇宙観測技術は昔から存在するものの、近年になって論文で発表された電子を用いた天文観測器の存在や大型の天文測定器具などが考案されたのは、百年以内に起きたことである。グラ・バルガス帝国は転移前の国際事情の悪化により、多くの兵器が作られていたが、天文学的研究に割かれた予算はあまりにも少ない。それこそ、平和であれば、何十年もの空白を埋められるであろう研究が国家の無関心により、進んでいないのが現状である。

やつとこのことで予算が割り当てられ「天文兵器準備室」なる物が作られたものの、その予算も少なく、研究者も少ないときている。明らかに上層部はジオンや連邦といった存在を過小評価しているとしたかと思えず、ケイブラーは机の引き出しに入っているブランデーを飲もうかと手を伸ばす。

「ケイブラー教授……つてまた酒ですか！いい加減、絶つてください！」

其処に現れたのは、グラ・バルガス帝国内務省軍情報局のナグアノ

であった。金髪蒼眼のゲルマン民族系の容姿であるが、多民族国家である帝国ではよく見られる容姿である。それでも、女性受けが良く、情報局でも一、二を争うほどの美男子と評判である。

だが、内務省人事部の評価は悪い。「優秀なれど、将来性の薄い技術や初期投資のかかる科学技術に執着するため、主流に追いつけず、時期を見誤っている。その理由として、彼の恩師に関係する」として評価は微妙だった。

グラ・バルガス帝国軍部において、大艦巨砲主義を中心とした艦隊決戦思想が根付いており、航空機による船舶の破壊は疎かになりがちになっている。しかし、空母打撃群による攻撃能力は上層部の一部からは認められており、これらの兵器が今後の主軸となると考えられている。

なので、ナグアノのような先進的な考えを持つ者は変わり者、悪く言えば異端と呼ばれている。ケイブラー教授との関係は軍大学時代の恩師であり、今回の天文兵器の試案が出来る唯一の人物だったため、準備室を設けてその室長に据えられている。ただ、予算や異端といった存在であるため、半ば倉庫のような空間なのは仕方がない。

「いいじゃないか、帝国指導部の連中が何言っているかわかってるだろう？『我が帝国が躍進するための戦争に貢献できない科学技術に何の価値もない』銃がただの金属の棒としか思っていないでくの坊に言われたかないわ！」

衛星軌道上にある敵の兵器の存在を示した、閑職として有名な第七研究準備室などの研究部署は弾道推進兵器の有用性を果敢に説いていたことで有名である。内務省や国家監査省、統合幕僚司令部、統合軍司令部などに掛け合ってみたものの、多くが帝国以上のテクノロジを有した存在はあり得ないの一点張りによって撥ね付けられてしまっている。

唯一、皇帝直属機関である皇室府などの機関がわずかながら資金を工面し、幾つかの研究資材と内務省への内偵を要請しているが、そこで何もなければそれまでである。彼らの存在は内務省情報局の一存にかかっており、彼らが空振りであれば、第七研究準備室や天文兵器準備室などのマイナー研究の部署は潰えることだろう。

「あゝ、内務省がアホならもうダメだ。また田舎の大学で馬鹿な学生相手に数学教えなければならん！クソツたれのアホ共め！」

口が悪いが、優秀。それがケイブラー教授の評価である。だが、この口の悪さが学会では汚点であり、鼻つまみ者にされている。教授という地位も学会の重鎮と親友であるから保たれているに他ならず、帝都大の天文学学会や宇宙開拓推進協議会などの先進的な学会からも除外されている彼の居場所は天文兵器準備室か田舎の大学講義室しか居場所がない。

内務省の報告もあまり良いものが無ければ酒も煽りたくなるというのが人情であった。

「はあ……………いい情報持ってきたのにな」

「どうせ、フェイクニュースに踊らされているだけさ……………見せてみる」

ナグアノの手元にある「内務省情報局」と「極秘」、「クラス5」の超機密文書の一つである、ケイブラーはそんなことを気にせず、雑な手つきでファイルを開けていく。そのファイルは勝手な持ち出しや破損、流出したならば、持ち出した将校の首は物理的に刎ねられるデリケートなものであるが、そんなことはどうでもよいばかりに読んでいく。

「何々、パーパルティアを經由した内務省情報局の内偵からの報告か」

「ええ、それにしても教授……なぜこちらの世界はここまで文明の差がくつきり分かれているのですか？」

「そりゃ、この惑星に月が二つあるからだろう」

地球には天然の衛星として月がある。それはグラ・バルガス帝国の母星も同じようなものである。しかし、彼らが転移したこの惑星には衛星が二つ。衛星が二つあるのは珍しい事ではない。

「衛星の引力によって引潮や満ち潮などの海の影響もある。月が二つあることによつて、引力や磁力の影響から海洋の動きが活発なんだ。ここら辺の話は海洋生物学や海洋水流系の話になるが、流れや海流の流れ。または気象の変化によつて、外界に行く手段……この場合は蒸気船や金属船舶……それか魔法で強化した船でしか外界を行き来することができないのが、文明の差に開きがある原因かもしれない」

ロデニウス大陸の文明は中世。それも、封建制国家であるために諸侯の権力が強く、逆に王家はそれらに対して中央集権しにくい国家形態を築いていた。クワ・トイネなどの民主国家の例外はあるが、中央集権を行っていないのが中世の特徴的なものと言える。

一方、パーパルティア皇国の文明圏では魔法文明やマスケット銃、帝国覇権主義思想が根強く、中央集権化などの動きから、近世さながらの文明レベルを誇る。そして、ムーは第一次大戦前後の文明レベルを誇り、グラ・バルガス帝国と神聖ミリシアル帝国の文明レベルはそれほど離れていない。むしろ、自力で開発したグラ・バルガス帝国と古代文明の解析から列強へのし上がったミリシアルでは、グラ・バルガスに文明の伸びしろがあるように思えるだろう。

ナグアノは教授の推測に頷き、彼がスパイの撮影した写真を見ていることに気づき、ファイルに手を伸ばす。ファイルの一番後ろに

あつた小封筒には「要分析」に斜線が引かれ、「捏造ナシ、兵器研究・解析ノ必要アリ」と朱字の手書きで記されていた。

「ロデニウス大陸に潜入したスパイが撮影した写真があります……これを」

封筒から出された写真にその教授は目を引ん？いていた。

「……………うそだろ！まさかこんな事は！」

「きよ、教授！」

若干、アルコールで赤くなっていた顔は見るうちに青くなり、急に立ち上がった衝撃で、わずかに残ったコーヒーマグカップが床に落下し、砕け散る。そんなことを露とも気にせず、ケイブラーは手を震わせていた。

「……………」

ナグアノは頭上にクエスチョンマークを浮かべるかのように、教授の持っていた写真を見る。そこには、縮尺がおかしいのか、米粒のように小さい人の姿と巨大な航空機の写真。そしてその航空機から出てきたのは、機械の巨体を持つMSだった。

彼らは知る由もない。

彼らが見たのはロデニウス大陸に建設されたジオン駐留軍ジーン・ハーク基地にある滑走路。演習準備中の機体である、ガウ攻撃空母と搬送途中のMS-07グフの写真であった。そして驚くべきことに、近くには大気圏往還機であるガルダ級と呼ばれた成層圏プラットフォームの地上と宇宙の渡し船がその場に駐機されていたのである。

だが、多くの知識と天文学そして推進兵器や今後の兵器システムを

「はい！まさか、タイラーの持っている株式が数十倍に値上がりするとは思ってなかったでしょうね。そう！まさに彼もヤシマ工業の株を多く買っていたんですよ。皆さん！私のこの話を聞いたら、直ぐにエクストラネットの株トレードを覗きましょう！今なら、中小の資源回収会社の株も高騰するでしょう。でも、もし値下がりしても苦情はこまりますよ」

「この一連の株式市場の大高騰は類を見ない程、大きな動きを見せています。既に昨日の終値はジオン公国建国時の最値を大きく上回り、資源や採掘などの各企業へ資金が流入しています」

「本日、アナハイムとヴィッカーズ、そしてジオニックの合同開発された成層圏プラットフォーム『ガルダ』がロウリア宇宙港に到着しました。マストライバーのない惑星と軌道上の橋渡しの存在として注目が集まっています。本機は今後、3隻目以降からはロウリア工業地帯ルールリアにて建造が始められる予定です」

「ギレン総帥閣下による予備役動員解除令によって労働人口の急激な増加によって、失業者が増加するかと予測されていましたが、経済産業省と総帥府の雇用拡大計画を推進させたことによって、現在の失業率は数パーセントとなっています。加えて、惑星への技術供与に関しては、多くの『お雇い外国人』として流入するかと思われれます」

「本日、外務省迎賓館にてロデニウス大陸国家連合の外交官が到着するため、迎賓館前には首都防衛大隊や親衛隊の共同警備が行われ、厳重な警備体制が敷かれています！その周囲には市民たちが歓迎の横幕を出し、歓声を上げています」

ジオン公国や公国の実効支配圏では、総帥府の許可されたテレビ局やラジオ放送によって様々な情報が伝えられていく。

「エクストラネットや街角の人々の話を聞きますと、惑星とコロニー経済編入について否定的な見方や賛同する見方があるようです」

「彼らは我々を野蛮人だと思っている。だが、あいつ等の方が未開で無知だ。我々と同等に扱うのはどうなんだ？ギレン総帥も優勢人類である我々と彼らとでは天と地の差があるだろう？」

「もし、連邦と同じような関税に重い税金を掛ければ、我々も連邦と同じような支配者になりかねない。彼らとて、我々がムンゾの時のように経済成長しているさなかに制裁を加えられたら、誰だって独立したくもなるし、戦争したくなるさ」

「今後、自由主義経済を推し進めていけば、工業化せず、資源を掘るだけの労働しかできない民が同盟国にあふれることになる。我々がすべきなのは、そうした植民地的搾取の経済ではなく、お互いに支え合いつつも、伸ばしていく経済体制だ。かつての旧アフリカ植民地は一次経済しか発展していなかった。それを考えれば、自由経済を推し進めて、優れていた産業を物量とテクノロジーで押しつぶすことはあつてはならない！」

だが、そうした報道機関が虚構であつたなら？

もしも、誰かの意思によって操作されていたならば？

情報を元に行動する社会的生物人間は操作されていることになる。

「はあ………」

ジオン公国国家公安局のオフィスに座る30代初めの男。着崩したスーツは軍人や表の仕事をしている警察官からすれば、あまり良いとは言い難い服装をする彼は長髪のゲルマン系白人、祖父譲りの細め

の眼光は獲物を探す狩人の如く、調査資料に眼を通していた。

「また溜息かレオ？……最近は反政府勢力も活発だからな」

同僚の肥満体型に近づきつつあるジャン・マリー・ソクラテスはレオと呼んだ彼のデスクに山のように置かれた資料を見て、自身の案件でなくて内心ほっとしていた。

「おいおい、ジャン！八時からダイナーがあるって言っただろ。頼むよ」

「耳に入れたそれ（イヤホン）聞く余裕あるなら楽勝だろ」

レオの片耳に入っているのは、アングラ放送。国の認可が下りていない報道機関、つまり海賊放送である。聞こえは非常に悪いものの、連邦とジオンの戦争のために、報道規制や情報操作が公然と行われている。

一応、報道の自由は公国民の権利として保障されている。しかしながら、それは建前に過ぎず、あからさまな反政府組織のリークや政府の不都合な情報は隠蔽される。表立ってギレンを批判する報道機関は存在するが、それはフェイクに過ぎない。所謂、ジオン国内でリベラルを標榜し、野党を支持するマスコミである。これらはギレンに対して否定的な友好的国民の受け皿として利用されるのだ。ジオン国内において、公国右翼や左翼、リベラル・共産・保守に至ってはギレン劇場の元、政治劇が展開されているに過ぎない。

民にはワインとパンさえあれば、政治などどうでもよく。不平不満をコントロールできるギレンによって、議会政治は国立劇場の舞台となった。

「FINEガンの嬢ちゃんだったか？あんな別嬪さんとダイナーとはな」

「ただの腐れ縁さ、それにただの女だったらどんなによかったか」

満更でもないものの、他の女性とは全く異なるアブナイ女である。非常に愛くるしく、容姿端麗、頭脳明晰の金髪美女、だが彼のような公安捜査官がしり込みしてしまう。

「レオ、いいじゃないか。総帥府だろ？ いろんな情報仕入れてこいよ」
「馬鹿言うな、エリートのおいつに汚点が残ったら大変だよ」

レオポルド・フィーゼラー捜査官のディナーの相手、エリース・アン・フィネガンは世渡り下手な兄貴分の彼に代わってエリート街道を突き進み、総帥府の総帥補佐官として仕事を行っている。元より、レオもエリースは名家の出であるために、そうした街道は比較的楽であるが、彼はエリート路線を嫌って、公国軍パイロットを志した。しかし、絶望的に身体能力が悪く、軍人としての適性は皆無であった。

志半ばの彼がどのような挫折を経てこうなったのは分らない。だが、確かな事は良くも悪くも窓際役職に就き、満足してしまっていることだ。

ただ、ジオニツク社創設者の孫という立場から、政財界に仕事柄としても、家族方面からも関わりがある。いつかは自分の使命を認識し、ジオニツク社の中核に立つのか、それとも政界へ進出するのかは本人でさえ知りようがない。

レオは海賊放送の案件に関して、情報屋として「放逐」という趣旨の報告書を上司のパソコンに送り、タブレット端末の時計をチラリと見てギョツとする。

「あ、そろそろ行かないと不味いな。総帥府の近くであいつを拾わないとー」

「あの通りは混むからな。課長には俺が言っておこう」

「助かるよ、ジャン！」

レオポルド・フィーゼラー

後に彼はジオンの暗部である『レギンレイヴ』という謎の人物と『ワルキューレ』という反ザビ組織の存在。そして、それを捜査していたデイヴィッド・シラー捜査官に行き着く。その捜査がジオンを揺るがす事件になるとは、露にも思わない。

しかし、それはまた『別の話』である。

第十四話 怒れる皇国

パーパルディア皇国

その名を聞けば、世界列強のうちのひとつと数えられる大国と恐れおののく。皇国民はその国力と文化を誇り、尊大なプライドは一度傷つけられれば、烈火の如く怒り、その相手の大地を不毛へと変えうるとさえ言われる。

皇国はその地理的条件や肥沃な大地によつて国力を培い、大陸全土へと版図を広げてきたのである。幸運にも、彼らは神聖ミリシアル帝国やムーと言った敵わない相手が近くにいないために、その強国を維持できていた。彼の歴史にも『敗北』の二文字がないために、尊大な国民性になっているのは仕方のないことだった。

そして、覇権主義を唱えた彼らは長年占領した上で圧政を敷く状態となり、それらの搾取体制は肥大化した官僚制を築き上げる。幾多に渡つて作られた官僚体制はあたかもジオンの憎む地球連邦と似通つた部分が見られた。

もし、ジオン外交官が来れば

「腐つた国家だなあ！こんな国家には5thルナがお似合いだぜえ！」と言つてネオ・ジオンの如く、隕石攻撃を仕掛けかねない程腐つていた。

そして、皇都エストシラントの宮殿の傍に設置された第三外務局の局長オフィスで怒鳴り声が響き渡つた。

「あの計画はどうなっている！」

それは傍の廊下にいる衛兵や書類を運ぶ文官がひっくり変える程の音量である。オフィスは近世に入ったヨーロッパに近い雰囲気、建築様式と文化水準であったが、魔法や魔石などのエネルギー体を介して、まるで20世紀前半のテクノロジを有している。

そのオフィスの奥に座った男、軍人然とした口髭を揃えた男は使えない部下を目の前に体を震わせていたのである。

「はい・・・間もなく皇国監査軍東洋艦隊22隻がフェン王国に懲罰のため出撃します」

冷や汗をかきながら部下が答える。その容貌はあまり優れない木端役人という風貌。冴えないと言っている彼は、軍人の振る舞いを辞めない男を目にして震えている様相であった。

パーパルディア皇国第3外務局局長カイオスは怒りのあまり壁に飾っていた金の装飾を施したマツチロツク銃をぶっ放したくなるがどうか抑え込む。

やや短気な気質故に皇国上層部から抜け出し、知り合いの文官の伝手で第三外務局局长になることが出来たが、第三外務局は外交業務の中では下の位置にある。

パーパルティアの外交機関は三つ存在し、皇宮直属機関として外務局が存在する。

第1外務局は、皇宮の内部に位置し、文明圏の5大列強国のみを相手として外交を行う。下手をすれば、全面戦争となり、総力戦体制は双方ともに疲弊を招くためである。パーパルティアで考えうる戦略の多くは攻勢であり、防御に弱い性質がある。数少ない防衛戦において劣勢になったからだ、その多くを攻勢によって補い、勝利へと導いていた。それ故に戦略思想や兵器思想などから苦戦を強いられる列強国との外交には高度な政治判断が求められる、官僚の多くは皇族や

皇国と共に歩んできた大貴族の官僚である。

第2外務局は、皇宮の外側に設置された機関である。列強とは違うものの、ランクの下がった保護国や強気な姿勢が可能な小国に対して外交を展開する。第一外務局より重要度は低いのが、構成される官僚もそれなりのエリートでなければ務まらず、皇国維持運営のために必要な部署である。

そして、第3外務局は文明圏以外の国、いわゆる蛮国相手の仕事とされる。

役人曰く、『いかに高圧的に出て、相手から絞りとれるかが試される』。蛮国は数が多いため、外務局人員の6割がここに属する。第二外務局より組織としては巨大であるが、その存在価値は皇国内では低い。また、皇国監査軍といった独自の軍を保有し、これらの多くは皇国内では蛮族への警察行動（・・・）の一環と捉えられる。

それ故に、皇国に逆らった蛮族には懲罰行動を行わせる権限を有している。力は正義であり、高度な文明を有する自分たちが略奪する権利を得る。それらはパーパルティア成立以前より弱肉強食の自然の理に沿った形で行われているが、理性と社会性を勝ち得た人はその行為を受け入れるはずはない。

属国や占領地域の維持・収奪は限界に近付きつつある。しかし、パーパルティアの歪な産業体制や腐敗した官僚体制。これまでの歴史から、敗戦を知らない愚者の国家『パーパルティア皇国』は崩壊の兆しが見え隠れしていた。

嘗てのローマ帝国やモンゴル帝国、ナポレオンやヒトラー。これらの隆興した国家の多くは何らかの致命的な欠陥を持っていたために、徐々に衰退していった。それを肌で感じていた第三外務局カイオスは現状を分っていない内地の腑抜けた官僚や監査軍の横暴な軍人に頭を悩ませていた。

既に、主要な資源供給源であるロウリア王国の資源獲得計画の裏工作は第三外務局から第二外務局へと渡り、最終的な盪回しの末に国家戦略局の杜撰な計画によって失敗した。そのロウリアへの投資には、多くの資金が回され、皇族の国庫も一部使われたとカイオスは聞いていた。彼の予想では、ロウリア王国への計画立案をした官僚は左遷させられ、何処かの田舎蛮族を相手にしているはず。

—ジオン公国という訳分らん国家………まるで御伽噺の神の国のようだな

使えない部下への怒りを抑えるために、別の話題を考えるカイオスである。監査軍の一部や国家戦略局のようなどころから観戦武官を送ったが、荒唐無稽な報告ばかりしており、数名は治療院へ入院となった。『魔獣を従えていた』『アイアンゴーレムだ！』など世迷い事を叫ぶ高級官僚や軍人の話を聞いたカイオスはその報告書を「解決済み」の棚へと押し込んだ。

「もう良い、下がれ！」

「し、失礼しますー！」

恐怖の色を隠せない文官は青い顔をしながら、カイオスのオフィスを後にする。深い溜息をついた彼は監査軍の測量部隊が作成した地図を取り出し、件のフェン王国の国土を確認する。

パーパルディア皇国から東に約200km行った先にある小国。国土面積約一万？。キプロスやプエルトリコに近い国土面積を持ち、勾玉の形の国がある。片方にガハラ神国があり、隣がフェン王国である。ガハラ神国はパーパルディア皇国建国当初から付き合いがあり、

皇族とも深い関係にあるために、不可侵条約を結んでいる。

一方、フエン王国の文化は基本的な文明レベルを下回る文明圏外国家であった。ガハラ神国が外界に疎いために、皇帝の国土拡大計画の一環としてフエン王国の南部、縦20 km、横20 kmの範囲をパーパルディア皇国に献上するよう求めた。

一方的な領土割譲はパーパルティア皇国からしてみれば、かなり要求を抑えている。本格的な侵略行為を行わず、何も無い森林地帯を割譲することによって、第三外務局の功績となり、見返りとして大使館や技術供与が出来るのである。皇国からして、「ここまでしてやっているのだから、お前らも何か寄越せ」と一方的な押し売りを展開していた。とはいえ、領土割譲や国土への軍の駐屯。保護国化に至る流れは二十世紀までに行われていた帝国主義の国家方針の政策としては普通。寧ろ、植民地化になるよりはまだまだましな部類である。

しかし、フエン王国はこの割譲を断り、第二案である租借案を出した。一方的な割譲は一般的に言っても侵略と同義である。それこそ、同レベルの国家であれば開戦も視野に入れなければならない。しかし、無茶な要求を行い、そのあと無難な選択肢を示すことでそれを選ばせるという心理学的戦略から、その要求を行った。

しかし、この租借案に対しフエン王国の剣王シハンは丁重に断った。

「列強国の顔をつぶされた」

外交において、顔や世間体は大事にしなければならない。列強の大国が一万キロにも満たない国土を持つ国家に舐められたのである。仮にパーパルティア皇国が全人類の半分を死に至らしめる一年戦争を経験していたら、他の案を用意したかもしれない。植民地や属国に

対して高圧的なふるまいをしていたパーパルティア皇国は小国に舐められれば終わりである。第一次・第二次産業を属国に依存する歪な体制を転換しない限り、属国が離反することは皇国の死に直結する。仮に欠点に気づいたとしても、産業の転換は出血無しには行うことができない。皇国指導部は産業転換ではなく、属国や植民地からの収奪で皇国の延命を図った。

第3外務局局长カイオスの命により、監査軍東洋艦隊の派遣が決定された。

「フエン王国よ、恨むなよ。弱者は強者に屠られるのが世の定め」

幾多の侵略戦争に明け暮れ、壮年の身体に刻まれた無数の傷跡がカイオスを武人であることを物語っている。皇国軍人として戦場に身を投じ、幾多の戦績を築いていた彼にとって、軍人は誉れある職業である。だが、彼が軍功を上げるに従って、彼の地位は上昇する。そして、皇国軍中枢に食い込む頃には、軍人ではなく政治家の道を歩むことになった。

だが、政治家の水は軍人一筋として生きてきたカイオスには合わなかった。味方であるはずのパーパルティア人が謀略を駆使し、友を蹴落としていく様は正に地獄といえた。カイオスは早々にリタイアし、第三外務局長のポストに自分の意思でやってきた。周囲には、皇国の暗部たる腐敗した官僚や役に立たない官僚ばかり。私利私欲のため、に属国から女子供を凌辱しては富を貪る有様である。

自分の意思でそのポストに就いたのは、私利私欲で小国を植民地化して奴隷を得るためではない。皇国の命運が第三外務局に掛かっていると感じてやってきたのだ。だが、その悪しき役人を一掃するには遅すぎた。雁字搦めにされた皇国の腐敗はカイオスのような軍人崩れの役人では食い止めることはできない。

それを是正する力を持たないカイオスは皇国の齒車として生きなければならなかった。

一方、第三外務局の窓口に現れたのは、文明圏でも異色のデザイン
の軍服とムーの外交官にも似ている服装の外交使節だった。

「ジオン公国外交団のヴァルター・ヘーヴルと申します。一週間前にご連絡したはずです。担当者に会わせていただく」

ジオン公国外務省は既にパーパルティア皇国との外交ルートを既に確保していた。件のロウリア王国の残した莫大な借金の請求先をジオンに求めた第三外務局はジオンのマ・クベ率いる総督府に請求書を送っていた。その時に、マ・クベはパーパルティア皇国の臨時領事館を設置。その領事館経由でパーパルティア皇国との外交ルートを
得ようと模索していた。

受付の職員は列強でも類を見ない異質な外交団とその護衛に驚きつつも、マニュアル通りに行動する。

「しばらくお待ち下さい。順番に手続きを行っておりますので……。しかし、貴方たちの要求内容を見ましたが、かなり高度な……。いわゆるハードルが高い事が記載されていますので……。」

「失礼だが、主権国家として正当な要求内容だ。貴国は我々の統治下にある旧ロウリア王国の借金返済を我が国に求めている。その拒否と改めて国交を考えているのだが、君のような木端役人では話にな

らない。カイオス局長殿はご滞在しているのだろうか？それとも、今すぐ外交団を追い出すつもりかね？」

パーパルティア皇国としてのプライドもあるが、スペースノイドとしてのプライドもジオンには存在する。外務省及び総帥から外交全権を委任されたヴァルター・ヘーヴル親衛隊名誉少将兼外交団長は前髪を少し出した短髪の壮年政治家であるが、その据わった眼光とムンゾ自治共和国時代から培ってきた外交手腕が見え隠れし、窓口職員は只者でないオーラを感じていた。

しかし、マニユアルでは文明圏外国家との外交は『対等な関係』などありえない。窓口での役所業務のように粛々と行われるべきなのである。つまり、国家間の普通の外交はできないのだ。

「いえ、その件に関しましては私が承ります。外交窓口の開設ですが、あちらの表を確認して、規定の書類にサインを。それと事前にそちらの書式で記された国交文書に関してはお返しいたします」

「な、なんだと？」

ヴァルターは入館してからの異様な光景に戸惑いながらも何とか窓口を見つけたものの、交渉相手が窓口の職員とは考えられなかった。連邦政府の腐った官僚でさえ、茶を出すのである。それなのに、まるでズム・シティー鉄道網の発券売り場のような様子と各国外交官達が窓口で話している光景に眼を疑ってしまっていた。そして、外交文書の返却という無礼にもほどがある対応にヴァルターは驚いていた。

「いや、これがこちらの外交儀礼か？慣例法的に適法なのか？」

連邦政府樹立からジオン独立戦争まで、独立国若しくはコロニー自治国家などへの待遇は前世紀の国際法や慣例に従って行う。外交という世界にも様々な作法や方法があるため、ジオンでは価値観の全く

異なる異文化のしきたりを吸収するため多くの情報機関を駆使して情報収集を行っていたが、ここまで無礼な対応まで知ることには叶わなかった。

「こちらの外交文書に目を通しましたが、……えー治外法権。我が皇国民がそちらの国家に滞在中、犯罪を犯した場合に関して我が領事館でなく、ジオン公国の法に基づいて裁かれる……」

「我が国にも貴国と同じく法律があります。外交官など政府要人を除いて、一般人まで特例を作るわけにはまいりません。それに貴国と我が国の法体制には殆ど差異がない……」

「差異がない？・・・我が国は列強ですよ？」

「……？それが？」

話を急に遮られたため、ヴァルターは不機嫌になりつつも、窓口職員の不遜な態度に疑問符を浮かべる。そして職員の口から出てきたのはとんでもない一言だった。

「あなたの国は、出来たばかりですか？文明圏以外の国とはいえ、国際常識を知らないにもほどがある。そもそもパーパルティア皇国がこうして下々の野蛮人に窓口を開き、特例で外交官特権を与えているのにも関わらず、我が皇国民を下々と同等とせよと？ふざけるのも大概にしてください」

「……は？」

ヴァルターは呆気にとられ、言葉を失う。

「いいですか、今、世界において、治外法権を認めないことを我々が了承している国は、4カ国のみです。つまり、列強国のみなのです。あ

なた方のような野蛮国家と対等な関係を結ぶことはあり得ない！まして文明圏にも属していない、国際常識すら理解していないあなた方の国が存在しているなどあってはならないこと！……この件は二週間後に課長対応に回します。貴国が今後、こうしたふざけた対応を行わないことを切に願います」

そして返されたのが、総帥府の印がされた正真正銘の外交文書とそれに付随したジオン公国の紹介やパーパルティア皇国の文字に置き換えて記されたジオンの説明を記した書物。丁寧に羊皮紙と皮を鞣して作られた表紙はジオンでも連邦でも、あまり行われない製本形式であり、金の細工や各種装丁も最高級なものばかり。

だが、こればかりはジオン公国外交使節にも非が存在する。何故なら、外交文書と一緒に渡した書物に「星間国家」「スペースノイド」「人口10億人」「セツルメント国家連合」など理解不能な文言がある。どのように読んでもそれが理解できる（……）とは思えない。寧ろ、ロデニウス大陸の近辺に突如転移してきましたと説明した方が未だ理解できるというもの。

仮に突然隣に越してきた隣人が宇宙人と名乗り、「家のペットが五月蠅くしなければいいんだけど」と恐竜のペットを連れていっていると言えば、信じられないと思う。明らかに嘘にしか読めない事実にどう判断すればよいのか。ジオンが惑星軌道上の宇宙コロニー国家であるかどうか理解できるのだろうか。

ヴァルター・ヘーベルは怒りの表情を浮かべるが、事前にパーパルティア皇国の不遜な態度は聞き及んでいたため全く問題はない。既にパーパルティア皇国が文明圏外国家として見下していた国家と交流しその事実を知っていたため、連絡先と借り受けた仮の領事館の場所を教えて帰途に付く。

イ」に似ていると思われるかもしれない。

だが、その国家形態や風習。そして地理的環境を鑑みればギリシャのポリス。100万の軍勢に300の兵で戦ったスパルタの兵を思い浮かべるだろう。各産業に従事する農民や鍛冶職人、商人に至るまで、徹底した思想はさながら薩摩兵子の戦闘民族に近い。

身分制度は王以外平民と言つてよく、過酷な環境化で生き残る上で精神力や戦闘能力にスペックを全振りした民族。現在の地球上にそうした民族は稀であろう。

首都、アマノキの王宮に近い川の近く。早朝の時間帯、一心不乱に剣を振るう戦士の姿があつた。

その戦士の筋肉はよく鍛えられ、数多の傷は彼が武辺一辺倒の猛者であることを物語っている。フェン王国では珍しい事ではなく、寧ろこうした戦士は数多い。だが、この戦士。十士長アインは他の戦士とは別格である。

王宮騎士団の十士長アインは王に認められた剣豪の一人であり、王国内には他十人いると言われている。しかし、アインを除く9人のうち、5人ほどは既に亡き人物。他の4人は老齡故に剣を交わすことなく、剣道場で後続を育成する師範となるか、山籠もりをするかの二択であつた。

アインは今代でも稀な技能を有しており、現状では王国内で負けることはないと言われる。さらに、頭脳もよく、武辺一辺倒の其処らの武人よりも気立てや性格もいい。まるで完璧超人と称されても不思議ではない。

王宮戦士団団長候補とも言われる彼であるが、自分の腕を試したく、外界への進出を考えている冒険心のある若者だつた。

「ふんっ……………」

空気を斬り、研ぎ澄まされた刀剣は落下中の石を一刀両断する。一寸のブレもない見事な剣捌きは剣豪に値する技であったが、石の表面や半分に両断された石を見て、不満げな様子であった。

「アイン、また『石斬り』か？子供が真似するぞ」

「戦士長！おはようございます」

その光景を見ていたのは、アインよりも一回り年上の戦士長マクレブであった。アインのような黒い髪に茶色い眼とは対照的に、金髪短髪のパーパルティア皇国系の血筋をもつマグレブはパールネウス共和国時代に起きた魔力のない民衆を追い出したことでフェン王国へ来た移民の末裔であった。

日本で言う『渡来人』のような立ち位置にあるマグレブは剣術以外にも文官としての才能もあることから、戦士団を束ねる指揮官になっている。そんな彼はアインのような剣豪が周りの子供が真似すると危ない訓練方法にくぎを刺すものの、首を傾げるアインだった。

「出来れば、木に括りつけた人形をだな……」

「移動する物体を正確にぶったぎるにはこれしかないのだ」

ここまで研磨された才能は磨き方にもコツがある。凡人にはできない磨き方であることを理解したマグレブは苦笑も交えながら、本題に入る。

「剣王シハンが呼びだ」

剣王シハン……………フェン王国の国王である。フェン王国の王制

は世襲制であるものの、ある一定の剣技が無ければ務まらない。フェン王国建国以前、島の中で群雄割拠し、戦争ばかりしていた頃。フェン王朝の初代国王が全ての諸侯を平定。民を虐げる身分制を廃止し、自身を王にし『我以外支配者になることは死罪に値する』と宣言した。その後、何代もの国王が生まれるが、未だに王国内では王族の敬意は失せることなく、剣王シハンに至ってはその剛腕を持って振るう一撃はアインでも防ぎようがない。まるで斬撃が交わされたら死んでも構わないような、猛突な攻撃はアインのような若者にとって恐怖に値した。

シハンの振るう斬撃は鋼鉄の刃でも防ぎようがなく、王族伝統の刀剣によってその斬撃は体を真つ二つにしかねない程の威力である。

ただ、最近になってパールパーティア皇国などの列強からの外交使節や国家の一大行事の準備に忙しく、剣王直々の稽古の予定もないアインは戸惑いを隠せなかった。

「え？私をですか？」

アインの位は剣豪であつても十士長。言わば下士官レベル。剣豪は言わば名誉勲章並みの名誉であるが、国のトップと会談することなど、今後ないと思つていたからだ。彼は今まで剣豪授賞式と剣王直々の稽古の二回しかあつたことなく、もしかすれば海外留学できるのではと期待する。

「いや、戦士団全員だ。十士長以上の者が対象らしい。どうやら国の一大事だ」

期待が外れたものの、国家の一大事と聞いたアインは急いで身支度を済ませ、マグレブと共に王宮を目指した。

王宮アmanoミヤは日本の建築様式を思わせるような、瓦屋根の白壁

作りの天守閣が設けられている。アマノミヤを中心とする各行政庁がフエン王国内を支え、有事の際には首都防衛の要として、戦士団の駐屯地として軍事拠点化するように建設されている。

そのうちの天守閣に近い、「老戦士の間」に招かれた十士長以上の戦士達は剣王シハンの言葉に耳を傾けた。

「パーパルディア皇国と紛争になるかもしれない」

その言葉によって、戦士達に緊張が走る。戦士達の中では多くの者が強敵に立ち向かえる事に歓喜していたが、心の半分以上は戦争状態となれば、亡国になることは避けられないと考えた。そして、残された家族。女子供は悉く奴隷にされて辱しめを受ける事になるだろう。武辺一辺倒の兵者共であっても、かれらは戦士というフエン王国でも、認められた役職に就く。騎士などの貴族がなるようなものではなく、国に奉ずる武士や男子のみにしかなれないスパルタのような強兵ぞろい。

戦争になれば誰が勝ち、誰が負けるのかは自ずと知ることが出来る。う。

フエン王国には魔法が無く、中世に近い文明レベル。更に貧しい小国であるため、国力の差は月と地竜と表現してもいい。また、魔法が使えないことで、魔導通信などの情報伝達手段がないことから、軍事行動のスピードは同国に追い付けない。仮に同量の兵力でも戦力差は凄まじい。

そして何より、空軍能力が皆無である。

その理由として、東の国にあるガハラ神国は風竜と呼ばれるワイバーンよりも強い竜種がいるためである。ガハラ神国は独自の技術からこれらの風竜を友として、パーパルティア皇国からも皇族との縁

があるために、一目置かれている存在である。

その風竜が居ることから、ワイバーン種の育成や輸入が出来なくなっている。

加えて、パールティア皇国には魔法石を使用した小銃兵（マツチロックガンナー）を有しているため、アウトレンジからの射撃など、他の兵を圧倒する戦力を保有する。フェン王国は魔法の取り扱えるものは限られ、剣と弓主体の貧しい国であるために、文明国との戦争は避けねばならなかった。

「現在、ガハラ神国にも救援を求めている。各々、戦の準備をしてくれ」

張り詰めた空気が流れ、緊張した面持ちの戦士達は帰途に着く。戦団長クラスや各行政長は隣の「師範の間」に移動し、対策会議を始めていく。

「剣王、ジオン公国という国が国交を開くために交渉したいと参っております。いかがでしたでしょうか？」

王の側近である剣豪モトムが話しかける。その風貌は白髪交じりの剣術師範というようにみえる。実際に王宮直属の教育部門の責任者として、第一線を退いた人物だが、かつて、剣王シハンと切り結んだとされ、最も信頼の厚き重臣である。ツトムの質問にシハンは臆気な記憶を頼りに、ジオン公国の文字が入国する外交官リストに含まれていたと思い出した。

「ああ、ガハラ神国の大使から情報のあったあれだな。ガハラ東側……新興国家。あの辺は小さな群島がたくさんあった。どうも、我が国以上に地理的にも、物理的にも数年前まで貧しいと記憶にあった

が、噂通りロデニウス大陸を吸収しちまったのか？」

剣王はジオン公国をロデニウス大陸の近くに存在する群島国家と想像する。

「いえ・・・それが・・・。ジオン公国が言うには星間国家・・・だとか・・・」

「星間国家？つまりはあれか？この前の魔導放送と機械放送にあったあれか？」

フエン王国とて国際関係に疎いわけではない。独立国として維持している理由が高い練度の戦士達と友好国との情報交換やお雇外国人などの各技術者・知識人などを各産業に配置している。その中で、情報収集のために王宮内には情報収集専門の機関を設けている。その中で魔導放送の設備と外国人技術者や機械放送受信設備を設け、ジオン公国や連邦の放送を剣王自身が聞いていた。

だが、剣王は全く信じていない。それを真に受けるのは、傾奇者の類だろう。剣王も開明的な人物だが、放送の内容をプロパガンダであろうと考えていた。

「ガハラ神国経由の情報でも同様の情報があります。また、ムーの天文方博士も月軌道上に何らかの人工物があると言っていました。彼らの国は列強をも超える超文明を実現していると・・・。」

「ほう・・・列強を超えるのは言い過ぎとしても、ガハラ神国がそのままで褒めるのであればそれなりの国家なのだろうな・・・。」

ガハラ神国は文化も似通っており、長年友好関係を維持している。

空軍能力のないフェン王国へ竜騎兵を貸し出す等、両国が列強など他国の干渉が入らないのは、そうした協力関係があつたからこそである。しかし、ガハラ神国はその統治体制は占いによる神託統治体制のため、もしかすればパーパルティア皇国との戦いは関知しない可能性もあつた。剣王シハンはガハラ神国に再度要請を求めつつも、彼らの求める資源や外交的譲歩を引き出そうと考える最中、ジオン公国の使節を謁見の間に呼び出すことにした。

「おお……日本の時代劇のようだな」

「ルウムのジャパンコロニーに似てますね。あの場所の江戸村にそっくりです」

国中が厳しく、厳格な雰囲気か漂っている。それはアトラクシオンでは味わえない緊張感だろう。武士の治める国……これが局員のイメージだつた。文化も日本に似通っている部分も見られ、その武器や衣服は武士の鎧にも似ているが、どこかが違う。すべての人間が戦士として訓練され、怠惰に生きる人間は一人もない。

生活レベルとしては低く、国民は貧しい。しかし、精神レベルは高く、誰もが礼儀正しい。まるで武士道の国、日本であるがどこかが違う。それは王制であつたり、国民皆兵というスパルタのような武人の国であつたりと、日系人であれば少し滞在すれば違和感を覚えるだろう。だが、ヨーロッパ系のジオン公国人には分らなかつた。

「剣王が入られます。今回は非公式ですので剣王が入室されましたら、起立して一礼していただければ十分です。」

宮廷文官が話し、衛兵の数人が部屋の隅に立ち、剣王が来ることを動作で知らせる。

「剣王陛下入室！」

衛兵の号令と共に、ジオン外交官と警護の者が起立する。

「そなた達が、ジオン公国の使者か」

剣王シハンの剣術は達人の域を大きく超えている。鍛え上げられた肉体はジオン公国の軍人には見られないような、白兵戦を想定した戦いを主軸に置く戦士の覇気が感じられ、外務省職員のハウフトマンは緊張しつつも、前もって考えられていた言葉を紡ぐ。

「はい・・・ジオン公国外交官ハウフトマンと申します。国交を開設したく思い、参りました。ご挨拶として、我が国の品をお持ちいたしました。何分、この世界の外交儀礼や国際常識が未だわかっておりません。このような場を頂き感謝いたします」

剣王の前には、様々な物品が並ぶ。その中には刀剣や培養真珠、電化製品などが並び、美術品も見られた。その中には西洋のサーベルと日本刀が置いてあったが、金の装飾が施された美術品のサーベルよりも実用重視の日本刀を剣王が選び、その刀身を見る。

「ほう・・・これは良い剣だ」

また剣王は復刻版であるモーゼル社のKarr98kを手に取ると、「一発おきに再装填の時間は？」と外交官の護衛兵に尋ねた。

「自分は撃つたことはございませんが、一秒未満で4発のうち一発を再装填できるように出来ます」

「ほう？ちよつと撃つてみてくれんか？」

「え!?!いやそれはちよつと！」

「構わん、構わん！あつちに射撃場がある。君が試しに撃つてみてくれ」

剣王シハンは歴代でも傾奇者（カブキモノ）として有名である。貧しい国ではあったが、国の近代化に向けて各国技術者を招聘し、各国技術力を吸収しようとしていた。それ故に強引に外交官と文官は移動し、射抜きの間には到着する。

そこはパーパルティア皇国の先込め式ライフルや魔導式ライフル、ムーの一発つつ弾込めして射撃する、Kar98kのご先祖に当たるGew71に近いだろう。だが、細部をよく見れば黄金を探し出すカマイ的な漫画に出てくる猟師が愛用した、村田式単発銃にそっくりだ。

Kar98kなどのボルトアクションは殆ど形状に大差ない。贈物の弾薬箱から5発の弾丸のクリップを取り出し、ボルトを開くとクリップの弾丸を押し込み、ボルトを締めると同時にクリップをはじく。

「装填よし、よろしいですか？」

直属の上司であるハウフトマンに聞くと、渋々ながら頷いた。

そして、兵士が安全装置を外すと、引き金を引いた。無煙火薬が燃焼し、7.92x57mmモーゼル弾が発射される。高速で発射された弾丸は標的であるフェン王国の古い鎧が吹き飛ばされる。それはあたかも未来のフェン王国の兵士達の姿に重なるはずで、周囲の衛兵は神妙な表情だった。だが、その表情は一気に青ざめたものとなる。

槓桿が引かれ、空薬莖が宙を舞い、再び槓桿が戻されると次弾が機構に戻される。その間、一秒も満たない動作はパーパルティアのマスケット銃とは全く異なり、ムーのそれらに近い射撃と5発すべてが標的の鎧に命中する。

まさにそれは突撃するフェン王国戦士が瞬く間にジオン兵にせん

滅される光景が彼らの脳裏に移りこむ。事実、フェン王国は他にもパーパルティア皇国やムーといった先進国から送られたライフルや武器をこの場で使わせ、相手の力量を凶っていた。多くの国はそれらの武器の多くを古い倉庫行の物ばかりであるが、相手国の軍事力の指針となるためである。

驚愕といった表情を浮かべていた家臣や衛兵の中で不敵な笑みを浮かべる者がいた。剣王シハンである。

「素晴らしい武器だな、ハウフトマン殿。してこれは貴国の軍使用していないものなのかね？」

「ええ、これより高性能の銃を取り揃えています。今度、お贈りいたしますが、整備はこちら持ちになるでしょう。こちらの武器は貴国が工業を発展させれば製造可能な品です。貴国次第になりますが、最短で五年から三年ででしょうか？」

「そんなにか?!」

シハンは驚きを隠せない。何故なら、殆どの国はこうした武具の製造法についてははぐらかしたり、機密として教えてはくれなかったためだ。例え、製造法について教えたとしても、ムーの科学技術では伝播して何年かかることだろうか？

火縄銃といった火器はそれこそ、日本に高度な鍛冶技術が存在したため複製に成功し、多くの資源と人材、そして買い手がいたからこそ、出来た技である。もし、当時戦国大名が名を挙げようと戦いをしていなければ、火縄銃は発達せず。ポルトガルやスペインに侵略された可能性もある。

ジオンが持ってきたライフルは二百年以上前に設計、製造されていたライフルである。フェン王国からしてみると、600年程のちに来るか出来ないかのレベルであり、明治維新後の日本でこうしたライフルが作られたのは、開国して十数年経ってからである。剣王シハンが知っていた知識と今後の技術発達の予想から、約20年かかるだろ

うと考えていた節があり、その期間はまるで夢のようである。

「ええ、ですが今のは私の予測に過ぎません。貴国の産業育成や法改正、他にも技術者の育成を考えれば、十年かかってやっと軍に配備できる生産能力を得るか」と

それでも、剣王シハンの予想の半分程度である。

シハンはパーパルティア皇国の軍備よりも高性能であると確信して、上機嫌な様子で先の会談場所へ移動し、非公式会談が始まった。正式なものでないため、地球連邦政府樹立以前から王族が非公式会談に出席する事は稀である。だが、剣王シハンが国政を差配する事を考えると何ら不思議なことではない。

国書にあった内容や修好通商条約に記された文章を読むうちに幾つかの問題に行き当たった。

「この治外法権についての文章ですが、出来れば貴国の法制度はどのようなものかお聞かせ願いたい」

そもそも外国人の治外法権を認め、自国の領事館によって法の裁きを行うという趣旨の条約。これらは日米修好通商条約など、よく日本史を習う上で欧米との不平等条約であると学ぶだろう。だが、江戸幕府は封建制など行っている以上、地方の藩では独自の法があるため、場所によって裁きの法や一定の身分の者が処断しても良い法が出来上がっている。そのため、中央集権国家でない封建制国家に国民を送る以上、国民を保護するためにそうした対策を考えておかねばならない。

一方的な弁護も付けられない前時代的な異国の裁きに応じたくはない。そのため、文明的にも高い水準である国家、若しくはそれに準じた法体制のある国家にのみ治外法権を認めないというような考え

がジオン公国内に定着していた。

既にロウリア王国に駐屯した兵士や企業関係者がロウリア王国の諸侯の法によって裁かれ、腕を切断されるなど、肉体的に厳しい刑罰が施行されたことを受けて、ジオン公国外務省のこうした動きは国内世論を抑えるための苦肉の策でもあった。

中にはジオン公国内から出ていったならず者も存在し、国際問題に発展しかけたことがある以上、ジオンも法制度や価値観に注意しなければならなかった。

「こちらの条約は貴国と我が国の法制度に互換性がない。つまり、両国との認識の差が両国民の間で問題となると考えたうえで判断です。こちらの修好条規にあるのは、今後修正されるべき事案と考えています。ただ、外交官特権は変わらずそのままにしてください」

「貴国の外交官が犯罪を犯した場合は如何する？」

「我が国で対処いたしますが、重罪が認められた場合は外交官特権をなく奪し、貴国へ引き渡す所存です。しかし、それが冤罪であった場合、政治的・外交的な損害は甚大なものになるでしょう」

「それは我が国が謀った場合……と考えるとよろしいか？」

室内の温度が急に下がったように感じられ、ハウフトマンは背中に冷や汗を流す。もし、この場で剣王シハンが剣を抜けば護衛隊員もろとも袈裟斬りにされるだろう。高い精神レベルを持ち、パーパルテイア皇国に向かった友人の話以上に、フェン王国の人々の対応はべつの意味で疲れる。もし彼らの意を害すようであれば、その場で腰の刀でぶった切られるのではと思えるほど恐怖を抱いていた。

「……………そんなに強張ることはない！我が国とて粗骨者が出ること

がある。貴国も政治的謀略によって被害を受けたことがあるのだろう。我が国もそれは理解できる。これは条約外のことだろうが、両国で交換留学生を送りたい。我が国は技術的な者、そちらは我が国より高度な技術を有しているだろうから……武術の秀でた若者や文化研究の者と交換するのは如何だろうか？勿論、永年のものではないから安心してほしい」

「そうでしたか、安心しました。我が国は多民族国家ですが、貴国に似た民族がございまして」

「ほう、それはまことか」

「ええ、陛下も我が国にお越しただければと」

「ふむ……」

剣王シハンは頷き、少し考えたあと口を開いた。

「失礼ながら、私はあなた方の国。ジオン公国を良く知らない」

話が続く。

「しかし、貴国からの提案、これはあなた方の言う事が本当ならば、さまざまな国力を持つ国と対等な関係が築けるし、夢としか思えない技術も手に入る。我が国としては、申し分ない」

「では……」

「しかし、国ごとの転移や巨人兵器に星間国家……とても信じられない気分だ」

「やはりそう思われても仕方がないです。でしたら時期を見計らって我が国や同盟国を見ていただけたらと」

「いや、近日中に我が目で見て確かめたい」

「近日中?」

「そうだ。我が国では五年に一度『軍祭』と呼ばれる各国軍を招いて開かれる祭りがある。そこで貴国にも力を振るってもらいたい。廃船となる数隻の船を破壊したり、歩兵の強さを演習で見せてもらいたい」

「!?」

ハウフトマンは剣王シハンの申し出に驚いた。まだ正式な国交のないジオン公国が軍事力を従えて来るという行為は前例のないことである。何か間違いがあれば国際問題になりかねず、パーパルティア皇国を警戒するジオン公国としては、近くに位置するフエン王国との関係悪化は避けねばならない。また、生半可な部隊を連れて来れば、列強や今後の国際関係に影響を与える。国際関係は言わば不良の罅迫り合いのようなもので、弱気になれば舐められる。適切な行動と適切な部隊量を持つて、最善な結果を出さねばならない。

本来であれば、国家中枢の首都に他国の部隊を派遣して演習を行うなど、安全保障の観点からしても、国防上の観点からも危険である。フエン王国を滅ぼすならば、この演習に乗じて軍事行動を起こすのが普通だろう。宣戦布告などの国書を送ることも必要だが、宣戦布告と同時に奇襲攻撃などもあり得る。信頼のない国家に対して「合同演習しようぜ!」「RIMPACしようぜ!」と磯野に野球を持ちかけるような友人でない限り、やってはいけない。

した古の帝国の後を引き継ぎ、第二の植民地を維持すべく動いていた。進んだ文明を自負する彼らにとって、その場所は最先端のテクノロジーに囲まれている。だが、安穩な指揮所であるはずのそこにはかつてないほどの緊張した雰囲気にもまれていた。

「第一防衛ライン、西セクターに敵の機甲部隊が集中！」

「東セクターより敵戦艦2砲撃中！対艦防御厳となせ！」

「敵未確認歩兵！違う、二足歩行兵器、十五メートルの巨大兵器だ！」

戦闘オペレーターと連携して宇宙空間の部隊の指揮にあたっているが、ほぼ空気のない環境下の戦闘では、これまでの経験は当てにならない。これまでの宇宙空間下での戦闘はしたことがない軍隊が苦戦することは明らかだった。

「南セクターに新たな敵、第2艦隊が向かった地区からです！」

「南より敵更に増加！センサーから先の敵とは艦種が異なります！」

「原子衝突弾反応！数3、南より接近！」

「迎撃急げ！自動迎撃！」

戦闘指揮所のアラームが鳴り響き、戦闘オペレーター達の指示の元、歩兵と機甲部隊へ退避を呼びかける。だが、敵前で遮蔽物に隠れることや隕石防衛用の防空壕に入ることは難しい。基地周囲に張り巡らされた防衛陣地には宇宙服を着た白兵戦部隊とそれを防衛する軽戦闘車両がいるが、敵が発射した噴進弾の弾頭は彼らを吹き飛ばすには十分すぎた。

「閣下、敵は強大です。部隊と民間人を避難させてください！」

「だめだ、技兵が転送装置停止の準備に入っている。その状態で避難すればどうなるかわかっているだろう！」

指揮所のある本国と戦闘中の植民地をつなぐ転送装置は既に停止

準備に入っている。もし、人を転送でもすれば真つ二つに転送されたり、もしくは混ざって出てくる。避難した民間人の生死は分っている。どうなるかは火を見るよりも明らか。

「弾着まで5秒！各防衛部隊耐ショック防御！」

戦闘指揮所のスクリーンに映された、原子衝突弾と呼ばれる大量破壊兵器。地球では核弾頭と呼ばれるそれらの三発は第一防衛線の近くに接近し、爆発した。

かつてないほどの爆発の地響きが彼らを襲い、意識があることに感謝した。もし、戦術級若しくは戦略級のそれが命中すれば、命中したことも気づく間もなく、祖先の元へ送られることになる。爆発の衝撃波で防衛線に設置された対空火器や戦車は吹き飛ばされ、歩兵部隊は瞬時に数千度の炎に包まれる。

辛うじて戦闘指揮センターの電磁波が周囲の魔導機器をショートさせ、戦闘指揮所に地響きと共にスクリーンやオペレーターが使う端末が真つ黒に染まる。照明も緊急用の赤いランプがともり、内部にいたオペレーターはセンサーとシステム復旧に全力を挙げた。

「予備電源を使え。今すぐ、部隊との通信回復を！」

破壊を免れたセンサーや通信設備も戦闘によって若干ずれていたことや動かなかったこともあり、各オペレーターや技術兵は復旧作業に入った。

「各センサー間回復急げ！パラボルアンテナ修正！」

「スクリーン回復、通信戻ります！」

スクリーンが戻り、照明が戻ると、周囲には地響きと揺れによって埃が舞っていた。放射線アームが響き渡り、赤いランプがクルクル回り、赤く照らされた戦闘指揮所は異様な空気に包まれていた。

「損害報告！」

「西・東セクターの防衛線……陥落！」

「各守備隊と連絡ありません！」

「西自動砲台……沈黙、各自動機銃も先の電磁波で全て落ちました！」

「なんてことだ！ 転送装置周囲に白兵戦用陣地を構築。味方も全て通すな！」

「うん？……閣下、先の敵の攻撃から西セクターの敵戦車隊が壊滅。敵戦艦も先程現れた敵戦艦の砲撃により瓦解、潰走中との報告が上がってきております」

「なんだと？」

戦闘指揮所の指揮官である『閣下』はその部下の報告に耳を疑った。未確認の知的生命体の遭遇が最悪な形になったと考えていたが、更に悪いことに、第三の勢力が攻撃を仕掛けてくるなど悪い冗談にしか思えない。展開する先の戦車隊の壊滅は朗報だが、新たに出てきた敵艦隊の攻撃が強力であることは、こちらに降りかかる火の粉も強力であることは明白だった。

「わが皇国植民地もこれまでか……」

数百年前にやつとのこと、失われた月面植民地を取り戻すことが出来た。諸問題が幾つも発生していたが、月面軌道に衛星ステーションを建設して、様々な生態研究や軍事革新など幾つも見つかっている。植民地民の健康被害や人的被害も多いが、それ以上の実りある成果もあった。だが、それをすべて覆すような敵性知的生命体の攻撃。幾つかの研究成果は本国に送れたが、それでも全体から見ても僅か。

男の台詞に周囲の戦闘オペレーターや分析担当官など、恐怖の色を隠せなかったり、その場の端末に蹲って泣く者も少なくない。

「諸君らはよくやってくれた……最後の一兵まで戦い抜く者……敵に投降して命を繋いでも構わない。以後、君達の軍役を解く。今までよく私の命令に従い、共に戦ってきてくれた。光栄に思う。」

司令官最後の言葉に多くの者が意気消沈するか、その場で悔し涙を流す。戦場で戦う将兵の報告や支援要請などの無線は先程とは打って変わってかなり少なくなる。敵歩兵部隊が侵入という警備兵の悲痛な叫びと共に、戦闘指揮所のダメージコントロール室に隣接する基地警備指揮所も騒がしく、慌ただしい空気に包まれる。もはや陥落も時間の問題であり、圧倒的な戦力に立ち向かう能力はない。

司令官の男は指揮所を出て、近くにあつたオフィスに着きカギを締める。すでに廊下では敵性生命体の重火器が聞こえ、友軍兵の叫び声やエネルギーライフルの銃声が聞こえる。敵部隊の銃声が魔石爆発型の燃焼ガス推進型ライフルであることが銃声で分ると、敵の文化レベルはそこまで高くないことを知る。意外にも、自分達が予想していた以上に文化レベルはそう変わらないことが分り、男も安心する。

「会ったこともないから分らないが……敗軍の将として処刑されるより、己を処する方がましか……」

生き残ったとしても、皇国に生きて帰れるとは思えず。また、生き恥曝して生きるつもりはない。

金属製機の引き出しから、魔石を弾倉としたエネルギー充填式拳銃を手に取り、皇国で行われる右手の拳を斜めに突き上げる敬礼を行う。

「ラヴァーナルに栄光あれ！」

一発の銃声が響き渡った。

(発進準備よし、航路クリア！サイクロプス隊発進せよ！)

「りょーかい！発進するぜ」

ムーンII派遣艦隊所属のムサイ級軽巡洋艦『スイクロプ』から発進したのは、MSM-04アツガイの宇宙戦改良型のMSM-04Zリツグ・アツガイだった。少数生産と月面や低重力下を想定した機体に加え、歩兵との共同作戦を考慮されたそれは、内部に歩兵収容空間を設けた『兵員輸送車』の要素が加えられている亜種とも言えるMSである。

「ミーシャ、月の重力に惑わされるなよ！」

「大丈夫でさ、大尉！」

「飲みすぎるなよ」

「ばれてたか」

ミーシャ改め、ミハイル・カミンスキー中尉は、ロシア系移民の作るマハル産ウオツカのスチール製ボトルから一口飲む。きついアルコールが喉を焼き、胃を焼く。程よい酔いが戦闘への恐れと士気の向上を促すのだ。熟練のパイロットでさえ、恐怖を感じる。彼のそれは景気づけであるが、いわゆるジnkクス。飲めば最良の結果を出すための願掛けである。

隊長の注意にあまり飲まないようにと、心がけながらも対空砲火に晒されつつも、アツガイの両腕に装備されたミサイルランチャーとメガ粒子砲を放ち、対空火器を始末する。後続のザクⅡやドムも同時に降下し、ムサイやザンジバルの援護砲撃が後に続いた。

ザクⅡの装備するMMP-78から放たれた90mm徹甲弾が迎撃として離陸した船型の攻撃機に命中して火の玉が出来上がる。撃墜される直前に対艦ミサイルが放たれるが、ザクⅡの左腕にある対物20mm機関砲によって撃ち落とされる。そして、280mm大口径ジャイアント・バズを構えたりツクドムが管制塔らしきタワー目掛けてバズを発射した。

大口径砲弾は管制塔のアンテナと有人部分に直撃すると、爆発。続いてムサイの黄色いメガ粒子砲が滑走路と格納庫を抉り、エアロツクを吹き飛ばした。

「よし、ミーシャ。エアロツク付近を掃討後、俺達を降下させろ。目標は敵に鹵獲された連邦のMSとわが軍のMSの確保。連邦のMSについてはワイズマン行けるな?」

「は、はい!大尉!行けます!」

ジオン国防軍の略帽をかぶるハーディ・シュタイナー大尉の指示を聞いた、隊の中で一番の新入りに声を掛ける。まだ、十代のバーナー・ワイズマン伍長は初戦で特務部隊というところでもない名譽に預かっていたが、軍の急激な人員削減によって急遽宛がわれた補充兵である。MS操縦技術や伸びしろは他のサイクロプス隊パイロットより抜きんでていた。

負傷したアンディー・ストロース少尉の補充兵として抜擢したワイズマン伍長改めバーニーは「嘘だと言ってよ」と言って、今回のサイクロプス隊に配属され、ここに来るまでに古参兵の扱き(とは言ってもMSシミュレーションや対人格闘)によってそこの新兵よりはま

しな動きをする。しかし、長年特殊任務をしていた古参兵からしてみれば、まだ殺しをしてない以上、新米と変わらない。

「おい伍長、緊張してもいいが、しすぎて固くなるな」

同じ下士官のガブリエル・ラミレス・ガルシア軍曹は何時もの赤いバンダナを額に巻いており、その上から対弾気密ヘルメットを被る。

「了解です、軍曹！」

「だから固くなりすぎなんだよ」

「ガルシア、あまりこいつをいじめるな」

リッグ・アツガイの内部で部下へ言うシユタイナーの目の前には、ミーシャと同じアツガイのモノアイに移る映像が送られていた。アツガイは既に月面への第一歩を踏み出しており、アームストロング並みの名誉を預かっていた。だが、気を緩めば、スミス海に散った連邦の初期型ガンキャノンの如く、月面海に没する鉄くずとなり果てるため、ここで死ぬわけにはいかない。

（こちら、キュプローパー！敵対空兵器及び対戦車兵器無力化！奴ら航空拠点の癖に防御が手薄すぎる。これじゃ遊びと変わらない！）
（ネルソン少尉、あんまり遊んでると死ぬぞ！）

ザクⅡが接近するホバー式戦車を蹴飛ばし、横転させるとMMP―78を掃射する。パイロットスーツを着込む兵士が戦車から這い出るところを撃たず、戦車を破壊するが、それを見ていたドムのパイロットが指摘する。既に敵の反抗は下火になっており、もはや敵の抵抗は軽微になっている。

この様子だと奪取したのちに緊急離脱する必要性が無いように感じられたシユタイナーは、司令部へ具申して倉庫区画の制圧のみに限定する。

「作戦は少し変更、基地の格納庫区画を抑える。歩兵部隊が多いかもしれん。注意しろ」

「タッチダウン！降下だ！」

「サイクロプス隊行くぞ！」

格納庫に到着したサイクロプス隊のリック・アツガイは破壊されたエアロツクに近づき、歩兵降下用ハッチを開く。シユタイナー大尉率いるサイクロプス隊は異種族との初めての宇宙白兵戦に突入した。

第十五話 フェン軍祭事変

中央暦1639年9月25日

フェン王国は全軍を挙げて、厳戒態勢が敷かれていた。それは戦争状態になった訳ではない。それは国を挙げての一大イベント「軍祭」があるためだ。

各要所の城には召集された歩兵と騎兵、及び軍祭に参加する儀仗兵などが配置された。

空にはフェンの制空権をカバーするために、ガハラ神国から派遣された風竜騎士団所属の風竜が飛行していた。ガハラ神国は古来より関係が深いものの、近年の剣王シハンの近代化政策への反発として、竜騎兵の貸し出しという名の親善飛行は最近まで行われていない。だが、今回の軍祭には長年の友好と関係修復のために三騎の風竜が上空を飛行する。何騎かは首都やニシノミヤコなどの比較的大都市に着陸し、見世物となる。多くの風竜は肉を好むため、多くの食事が出来る大都市を選ぶ。また、子供たちにも人気があり、何より子供が好きな風竜にとって今回の親善飛行は楽しみなのである。

「フェン王国内に到達。各騎は散開」

派遣された風竜の指揮官である、風竜騎士団のスサノウは残りの2騎を散開させる。

軍祭は、文明圏外の各国の武官も多数参加し、武技を競い、自慢の装備を見せる。各国の軍事力の高さを見せる事により、他国をけん制する意味合いもある。そのため、参加する部隊の指揮官は情報収集の秘密任務を与えられて情報収集を行う。良識ある列強諸国はこの国際行事に参加するものの、神聖ミリシアル帝国やパーパルティア皇国は参加せず、レイフォルはパーパルティアへの牽制として来たため出禁となり、唯一ムーは平和主義と国際協調を重んじているものの、距離があり関わりが少ないため領事館は置いていないが、いつも海軍と歩兵部隊を連れていき、小規模な演習を行う。また、近年になって剣

王シハンの近代化政策から技術的援助も考慮に入れている。そして何よりジオンの動向を気にしている。

スサノウは、上空から下を見た。

其処にはジオン公国突撃機動軍とロウリア駐屯海上部隊の旗が翻る。新造艦であり、ミノフスキー粒子による電子機器妨害も想定した初のミノフスキー粒子電子戦想定戦闘水上艦だった。従来の連邦軍海上主力艦をモデルにジオンの有視界戦闘を軸とした重巡洋艦に近い形状を持つ汎用巡洋艦である。大きさは重巡洋艦の様相であるが、MS運用を想定し、最大で三機搭載できる。巡洋艦二隻とMS小队を組んだ軽戦隊を編成する。

そして、地球連邦海軍が所有するヒマラヤ級汎用空母のコピー品アルプス級を就役させ、地上戦力を載せるイオージマ級強襲巡洋艦を配備した。今回は処女航海と練習航海を兼ねており、練度向上のために航行している。

- ・タワラ級巡洋艦『タワラ』
- ・同 級巡洋艦『キーロフ』
- ・アルプス級汎用空母『アカギ』
- ・イオージマ級強襲揚陸艦『イオージマ』

の四隻は喫水が深いために、首都の湾内に入ることなく停泊していたが、その存在感は周囲の戦列艦とは全く異なる。別の海域に居るムーの重巡洋艦は重厚な存在だが、ジオン艦艇のそれと比べるとやはり小さい。

それを見ていたスサノウは跨っている風竜が着陸できる程の大きさに驚きを隠せない。だが、飛行甲板にはそれ以上の大きさの人型の化け物が立った状態で待っている。

「まぶしいな」

スサノウが話したわけではない。相棒の風竜が話しかけているのだ。風竜は知能が高いが、魔導通信機器ではなく「神通力」と呼ばれる特殊な能力を用いて会話を行う。比較的高度の高い場所を飛行するため、普通に会話すると口の中が凍りつく。風竜ならば大丈夫だろ

うが、人であれば危険である。まるでテレパシーの如く会話する二人（人ではないが家畜ではないので匹ではない）だが、もしフラナガン機関であれば、喉から手が出る程欲しがらるだろう。

「確かに、今日は快晴だ」

「いや、違う。太陽ではない。あの下の灰色の船から、線状の光が様々な方向に高速で照射されているのだ」

「船から光？何も見えないが」

スサノウは海上の船舶を見つめる。その巨大な船は城のようで、驚きを隠せなかった。しかし、其れよりも印象的なのは飛行甲板に立つ巨人の姿。それは一つ目の化け物サイクロプスのようで、無骨な姿である。

「フツ……人間には見えまい。我々が遠くの同胞と会話をする際に使用する光、人間にとっては、不可視の光だ。何かが飛んでいるか、確認も出来る。その光に似ている」

「飛行竜が判るのか？どのくらい遠くまで？」

「個体差がある。ワシは120kmくらい先まで判る。あの船の出している光は、ワシのそれより遥かに強く、そして光が収束している」

—まさか……。
スサノウはその見えない光を自在に操るジオンに驚きを隠せなかった。

「まさか、あの船は、遠くの船と魔通信以外の方法で通信出来たり、見えない場所を飛んでいる竜を見ることが出来るのか？」

「分らんが、あの鉄の巨人にも同様のものが出ている。正直、あれには近づきたくない。」

「なんで？」

「なんとというか、あの巨人のエネルギーは人が使えるものではない！古の魔法帝国のぞ！今すぐ攻撃するぞ！」

「はーえー！ちよつとまってー！」

相棒の変貌ぶりに驚きを隠せなかったが、スツーカ急降下爆撃機のように高速で海上に向けて突き進む。

そして、ジオン軍タワラ級巡洋艦『キーロフ』が異常接近する機影を捉えた。

「方位220、距離30000！高度500の低空より予定コースを外れたワイバーンが接近中！」

「……さて、あれは友軍のワイバーンだ。レーダー照射するな……」

「んだこれ!?向こうの機影より、レーダー照射らしき行動を探知！」

それは生物がレーダー照射をするという予想外の事態。処女航海と練習航海を兼ねていた彼らは不慣れな事もあり、艦橋に大接近するという危機的状況に陥った。

結局のところ、跨るスサノウによる説得とキーロフの致命的な遅い判断によって誤射をすることなく、双方の指揮官の謝罪と後の派遣武官の交流にて両国のわだかまりは解消された。

ただし、派遣されたガルマ・ザビ大佐は巡洋艦キーロフの艦長を叱咤。ザビ家の叱責により、出世が危ぶまれるかと危惧されたが、その後は順当に戦績を残し、惑星派遣部隊でも『英雄』として高く評価されるに至る。

にも耐えられるアーパネットシステムが作られ、最終的にインターネットといったものが出来上がった。それらの多くのコンピューターは現在において人々の人口の大地「スペースコロニー」を建設し、生活の場としてコンピューターは欠かせないものとなっている。

「何度かパーパルディア皇国に行った事があります。ですが、これほどの大きさの船は見た事がありませんし、あの巨人は……」

彼らの目に映るのは、重巡洋艦クラスに近いジオン軍の新規に設計されたタワラ級巡洋艦「キーロフ」の後部甲板に腰掛ける鋼鉄の巨人。それは海上作戦と陸上作戦を同時に行えるよう、搭載されているのは『MS-06Mザクマリン』

作戦によつては地上戦闘を行えるため、半水陸両用MSとしてザクを改修した機体である。推進制御ユニットをランドセルと足に装備され、武器は地上戦用のザクマシンガンとシールドにマウントされたサブロケット弾を使用する。シールドはザクのシールドの先行量産ジムのシールドを三つ付けたような装備であり、これは連邦の先行量産ジムのシールドの運用を考慮したMS開発局がシールドを活用した武装を今回配備した。

他にも海上戦闘用にカスタムしたザクIIJ型やグフ先行量産型が巡洋艦や強襲揚陸艦に配備されている。

その異様な光景は既に他の観戦武官や派遣武官のめを釘付けにし、それらはフェン王国民も同じである。そのあまりにも大きいそれはフェンの大地を踏みしめると同時に、観衆の叫び声上がる。だが、その喧騒を割くように巨人に装備されたスピーカーが響く。

「フェンの皆さん！ご安心ください！これはジオン公国軍所属のMSです！巨人ではなく、人が操縦する船と同じくこれは乗り物なんです！怖がらなくて大丈夫です！」

スピーカーから響いたのはなんと、その巨人改めMSに乗っている

と思われるパイロットであった。演習場に近い浜辺に強襲揚陸艦は接舷し、搭載されたザクが恐れる観光民や臨戦態勢のフェン戦士へ警戒を解くように言っていた。そして強襲揚陸艦から出てきたのはマゼラアタック強襲戦車やキュイ揚兵戦車、偵察パトロール用として偵察部隊に配備されるワツパなどが登場した。

「今日の演武はなんだ？」

剣王シハンは近くにいた補佐官フジワラに尋ねた。

「午前中に陸の場。各国陸戦部隊の演習です。最後にムーの歩兵部隊の戦闘演習、ジオンの降下猟兵部隊の演習を行うとか。あと、ジオンはその際に怪我のないよう周囲の空域を開けておくように指示を出しています」

「ほう、なぜ？」

「えー、先のガハラ神国のようにワイバーンの誤射も考慮しなければならず、出来れば万全の状態で臨みたいと要望がありましたのでその通りに致しました」

「……その時に我々が知る由もないワイバーンがいれば防衛行動にはいるのだろうか？」

剣王シハンの言葉の意味を最初は分らなかつた補佐官。だが次第に理解し、まさかと思つて彼を見ると、不敵な笑みを浮かべていた。剣王シハンは近代化を進めるうえで保守派の戦士団の重鎮や何名かの戦士から非難を浴びていた。それらを説き伏せ、時には剣によつて叩き潰してきた政治家である。

あえて、ジオンにはパーパルティアの攻撃が来る可能性が高いことは予め教えているはずもなく、王として謀略を行ったに過ぎない。

彼は上機嫌のような様子で会場に赴くため、階段で降りていく。秘

書官は彼の冷徹な一面を感じ、並々ならぬ恐怖を感じていた。

「これより中央暦1639年第30回、フエン王国大軍祭を開催いたします！」

その声と共に市井から歓声が挙がり、喧騒に包まれた。まず一つがフエン王国儀仗兵による行進が始まった。

「甲戦士隊、前進！」

フエン王国軍の儀仗兵と常備戦士団から抽出された精鋭の甲戦士隊は一糸乱れぬ歩調によって前進する。日本人なら参勤交代にも思えたが、長く延々とやるものではなく、5〜7人の横隊が並んで街中を軍隊行進するようで、それはパレードに近い。軍祭は元々、諸侯の各軍を首都に巡邏させる事業であり、各地方の武辺者の演武を行う祭りであった。しかし、先代の剣王から諸侯の軍事力は王に集中。日本の参勤から軍事パレード、その後は各軍の交流場所とした国際行事として発展したのだ。

フエン王国兵はまるで近代歩兵の軍事パレードのように行進し、騎馬隊や弓兵、特別編成された少数の火縄銃兵が続く。

かれらの装備は戦国時代の日本の鎧、当世具足に近い。以前まではこれほどまでの装備ではなかったが、フエンの近代化政策の一環により、こうした海外の文化風潮、装備に至るまですべてではないが、フエン流にアレンジがされており、フエンと同じような文明を持つ国々の観戦武官はその様子に感心していた。

多くの国の部隊は別々に設けられた駐屯地から演習場に向かうまで、パレードのように行進を行う。多くはフエン王国の国威発揚もあつたが、他国の部隊もかれらに賛同して、首都凱旋を行っている。ジオンからすると異国の軍隊が行進することは「占領軍行進」とかつての連邦圧政を思い出す。フエンの王国民から石でも投げつけられるのではと恐れていたが、他の部隊も同様に行っても歓声が聞こえているため、ジオン将兵は胸を撫で下ろしていた。

文明圏外国家と侮られていた諸外国の将兵の行進であるが、彼らはここで自分達の自信をつけて帰っていく。また、様々な文化的交流や列強参加の場合は彼らとのパイプ作りに余念がない。数か国の行進と演習場での一線の後ジオン公国の行進する部隊が整列する。

彼らの装備はジオン軍陸戦部隊に見られる普通の軍服であったが、ところかしこに旧ドイツ軍装備に似たものが見えたが気のせいだろう。

彼らの徽章はキシリア率いる突撃機動軍海兵隊であり、かつてないほどの精強さを見せていた。

ジオン公国海兵隊

その名前はデラーズ・フリート時には悪名の付く部隊名であり、兵隊やくざや追剥の類のような意味合いがあった。海賊をメインとするシーマ・ガラハウ中佐指揮下のシーマ艦隊の悪名は地球圏に浸透しており、海兵隊Ⅱ悪とも言われるほどだ。そうなった理由として、シーマ艦隊の九割以上がサイド3マハルの住人で占められ、コロニーレーザーとして改造された故郷に帰るわけにもいかず、本来の指揮官アサクラ大佐の嘘の告発の元、終戦時のガラハウ指揮下の艦隊がアクシズ行きを願ったにも関わらず、拒否された経緯がある。

時代と悪意に翻弄され、生き残るために手段を選べなかった不幸の部隊がジオン軍海兵隊だった。

しかし、地球消失によって彼らの運命も大きく変化した。

コロニーへ神経ガスを注入する任務を受けたアサクラ大佐はギレンの命令によって指揮する手はずであったが、アサクラ自身は部下のシーマ少佐の独断によるものという策略を行っていた。ギレンもアサクラの二枚舌と証拠隠滅能力に着目していたが、公王と総帥、そしてキシリアとの一件から殺戮作戦は無くなることになった。

そこで問題になったのはアサクラ大佐の証拠隠滅である。何故か、シーマ少佐が催涙ガスを「アイランド・イフィッシュ」内部に打ち込み、無力化するという作戦が漏れた。それは現存するハツテ政府にも伝わり、事実確認と作戦についてジオンへの抗議を行い、様々な調査

を行って判明したのは、催涙ガスが神経ガスという事実であった。ハツテ指導部とジオン本国でも大きく取ざたされ、国際問題に発展。シーマ少佐も拘束される事態となる。だが、事態は大きく好転する。

シーマ少佐の告発により、アサクラ大佐の行動が暴露される。主張は催涙ガスと知らされていたという一貫したものだだったが、アサクラ大佐の主張と全く異なっていた。また、多くの功績が部下から奪い取ったものであり、その他にも汚職や違法行為を部下に擦り付けていた事実が露呈した。これに対して、キシリアも呆れた様子でアサクラ大佐を処刑。シーマを中佐に昇進させ、海兵隊の実働的指揮官へ正式に就任させた。

あの時^{デラース・フリート紛争}は兵隊やくぎの集いだったが、今は違う。ジオン軍海兵隊は誇り高い殴り込み部隊として精鋭化。「Semper Fidel」^{常に忠誠を}「一度海兵隊に入隊したなら、除隊しようとも一生『海兵隊員としての誇り』を失わず、ジオン軍人の模範たれ」というような標語を作った。正にジオン軍人の模範となる人間の育成であり、二度とヤクザモノとは言わせない。

ジオン海兵隊と聞けば、真っ先に戦場に派遣され、他の部隊よりも先に敵を撃滅する殴り込み部隊。こじやれた赤い軍服を身にまとう貴公子とは程遠い汚泥と硝煙に塗れた戦いをする彼らであるが、それこそ彼らが求める戦いである。ジオン国内で海兵隊と聞けば畏怖と尊敬の眼差しを向けられるだろう。

数年後には「精強な海兵隊」として知られるようになるのは未来の話。

荒くれ者のイメージが払拭されたジオン海兵隊は一糸乱れぬ行進を行い、その宇宙世紀の歩兵の姿を現した。演習場に入ったジオン海兵隊の行進を見ていた各国観戦武官達の詰める貴賓席には、多くの外交官や武官がそれを見ていた。

「ジオン公国とはすばらしい軍をお持ちだ」

「あれは、ムーの機械荷車か？」

「あ、あれは砲が乗っているのか？」

彼らが見るそこには公国軍の主力戦車HT-01Bマゼラアタックと八輪型兵員輸送車が一行となって動き、サムソントレーラーに積まれたMS-06Fが見えた時、人々は驚いたような声が響き渡った。

「すげえ！鋼鉄の巨人だ！」

「ねえ！母さんあれ動くんでしょ！」

一般民衆はそれを見て様々な反応を見せる。多くは興味津津な者ばかりであり、それは剣王シハンによる教育の均等化や本人自身も傾奇者カブキモノと称されることから、新たな知識や物を取り込む姿勢は国民に浸透しているのだった。

だが、サムソントレーラーが演習場に到達すると、ザクIIはゆつくりとその巨体を立たせた。

「すげえ……」

「た、立った……」

ザクの排気口から水蒸気を吐き、モノアイが動作確認するように左右に動き、強く発光する。それはどこかの国の神話に出てくる一つ目の怪物サイクロプスやデイダラボッチのような妖怪に見え、観衆は息を飲んだ。

「今日はこのような場を設けていただきありがとうございます！私はジオン公国突撃機動軍所属のフランシー少尉です。ジオン軍の陸上戦闘の開設は私が承ります！」

演習場の端、貴賓席や軍関係席の方々への説明と民衆の説明であったが、演習は直ぐに始まった。

パトロール偵察小隊に所属するワツパは周囲を警戒しながら前進する。

「今回の演習は未確認的勢力の排除といったものです。基本的なジオンの展開なので見ていただけだと思います。まずワツパによる偵察によって標的は馬車と武装する歩兵数名だと分かりました。……おっと、パトロール隊は敵の歩兵に発見されてしまいました」

アナウンスが響き渡った。とはいえ、標的の所にあるのはフェン王国の古い鎧を着た案山子である。すると、ワツパに乗っていた偵察兵が叫ぶ

「敵に見つかった！牽制射！てえ！」

後退行動の一環としてマズラMG74/S機関銃は標的の案山子へ一斉射する。銃弾はそのまま案山子へと集中する。

これ以降、この軍祭は観戦武官の忘れられない日になった。

一気に・1, 200—1, 500発/分もの銃弾が立て続けに発射され、案山子はハチの巣のようになってしまう。フェンの古い鎧などどこにも見当たらず。完全に接敵で敵の歩兵能力をすべて削いでしまった。

「こちらパトロール！敵の物資輸送隊を発見これより……いや、敵の本陣を発見。緊急即応部隊を寄越してくれ！」

「こちら戦闘HQ了解、これより攻撃部隊を送る待機されたし。」

「パトロール隊ワツパの役割は主に偵察とパトロールになります。彼

らは敵の輸送隊の位置を特定し、また敵の本陣をみつけることができませんでした。これはチャンス、突っ込むしかありません。本部は彼らの報告を受け取り、戦車隊を出していきます」

そして整列されているマゼラアタック3両は目標である三つのテントと申し訳なしに指している案山子を標的とした。

【第一戦車隊、前進！】

マゼラアタック一号車の車長はヘッドセットから叫びに近い号令を出し、その彼の元、マゼラアタックは到達地点に移動する。

【目標を目視で確認。これより敵への砲撃を開始。】

【弾種・演習榴弾！照準よし、撃え！】

砲手の号令と共に三両のマゼラアタック戦車は発砲。次の瞬間、仮想標的であるテントと案山子は吹き飛ばされた。炸薬を最低量にしたそれらの爆発は戦車榴弾などと比べれば見劣りするが、周囲の観衆の安全を配慮したものである。しかし、その破壊力は観客の度肝を抜き、観戦武官や外交官はそこまで驚くことはない。

だが、そこからが問題だった。

発射され、排莖された薬莖がはじき出され、新たに砲弾が自動装てんされる。その間わずか一秒から二秒。連射を目的として作られておらず、155mmという比較的砲弾は大きいため、速射に向かない。だが、自動装てん装置によって限りなく早い速度で連射が可能となっている。二射三射と放たれると、そのたびに観戦武官の顔色は青くなっていく。

野砲について補足する。そもそも、火薬が発明されて以降、その破壊力や敵への示威行為によって中世から使われている。大砲は投石器の延長線の兵器であり、攻城戦や野戦・海戦などに用いられる。そこで野砲は後方支援兵器として扱われ、如何にその火力をぶつけるか数百年以上研究が続けられている。砲弾は前装填式から後装填式、弾

着後に爆発する榴弾といったものは十九世紀末に開発されるが、今回使った演習用榴弾は爆発の範囲を減退したものであるため、先込め式の古い野砲でも同じような爆発をするだろう。

だが、毎分3〜40発も放つ野砲はムーであろうとも存在しない。立て続けに放たれる砲弾は観戦武官と外交官のプライドなどを全て打ち砕く。もはやジオン公国の彼らが張りぼての軍隊だと罵ることや中傷することはない。

そしてムーの外交官と観戦武官は最早立つていられない程の衝撃を受けた。もし、文明圏外国家であればその技術力や自身のテクノロジを比べる必要もなかっただろう。しかし、ムーは20世紀のテクノロジを保有する。既に航空力学の基礎を学び、機甲部隊や機関銃といった兵器も所有している。そんな彼らがジオン公国の能力を理解できない筈はない。

「なんて速射能力だ……」

「至急、本国に！」

だが、ムーの衝撃は終わらない。

【敵の拠点を破壊。しかし、敵部隊はさらに戦力を投入します。さー、ここで出てきたのは地上戦力でも最強と謳われる地竜です。……それっぽく作りました】

一般民衆の観客は笑いに包まれる。そこにあつたのは、ジオンのポランティアが頑張つて作った張りぼてである。なんとか、恐竜凶鑑のそれから頑張つて作ったらしく「海兵隊工兵一同」とサインが施されている。すでに指揮官のシーマ・ガラハウ中佐は叱咤の目線を工兵に向けているが、実物を見たことのない彼らにそれは無茶というもの。

フェン王国の人間とて、地竜は配備されていないが、軍祭に招かれ

た他国軍の配備されている地竜をみたことがあった。

【さて、それに対するはわが軍の主力兵器ザクⅡ！わが軍の勇士をとくどご覧あれ！】

「おおお！」

驚きの声が木霊する。

直立不動の緑の巨人が歩く。

それは人知を超えた化け物のようで、実際は人によって作られた鋼鉄の機械。中には神原の炎カが宿り、人の住めない漆黒の空間で真価を発揮する。その巨体は一步ずつ大地を踏みしめ、フェンの大地を揺らしていた。

【このザクⅡは宇宙空間、つまり星々の間を戦うために作られた……】
解説するフランシー少尉であるが、見ている観客にそんなことは耳に入らない。目の前で起きていることが事実なのか、信じられないような目線を送る彼らであったが、ザクは持っていたM-120A1ザクマシンガンを構えた。

標的は先の地竜。

先のマゼラアタック以上の発砲音と速射能力を上げたザクマシンガンは爆薬量を減らした演習弾を放った。

120mm弾が地竜の張りぼてを切り裂き、小さい爆発が起こる。小さいクレーターが形成され、連射された弾が無数の破壊を引き起こす。排出された殻薬莖は今回の演習用に作られた袋に落とされ、観衆に飛んでいかないようになったが、見た目が非常に悪くなっていた。だが、見ていた観衆にはそんなことなど関係ない。

地上最強戦力の地竜を吹き飛ばし、鋼鉄の足が大地をゆるする。

のジオン公国に仕えようとはしない。仮に仕えてもザビ家と刺し違えるつもりで働く謀反者である。

アダムス大佐は仇であるデギン・ザビに招聘され、説得される。再び、スペースノイドとして戦ってほしいと言われ、再び戦場に戻った彼であったが、宇宙に彼の居場所はなく、ジオンの海軍兵力育成のための数少ない教官としてタワラ級一番艦艦長に就任していた。

「で、ハウフトマン少将の話は本当なのか？」

「幾つかの外交筋からもパーパルティアが示威行為を行うという情報があります。それに……」

副長の若い少佐は持っていた電子紙の衛星からの映像をアダムス大佐に見せる。それにはフェン王国へ向かう22隻の艦隊が映されていた。

「我が艦隊の攻撃能力は想定されていた数値より少ない。それは誰の目から見ても明らかだ。あのガハラ神国の風竜だったか？あれの急接近を許すなどあつてはならないことなのだからな」

アダムス大佐は老人の口うるさいところが非常に多く表面化している軍人である。だが、彼の言っている事は一理ある。それは彼の話すガハラ神国の急接近はあつてはならないこと。あれは風竜の暴走であるとされて実害もなかったのだが、最新鋭のジオン軍艦は兵の練度不足であることが露呈した。

絶対防衛圏内というものが存在し、阻止限界圏ともいうそれは、被害を受ける範囲内を指し、其処に入れば必ず船に被害が出ることから呼ばれている。太平洋戦争中にアメリカ軍の神風特攻の恐怖から様々な教訓が取られ、未確認機がその圏内に入れば撃墜もやむなしという風潮が生まれた。

ジオンもそれらを受け継ぎ、仮に攻撃機であつたなら同じタワラ級巡洋艦である、汎用巡洋艦キーロフは轟沈していただろう。

キーロフの遅かった判断を戒めるような空気になった時、艦橋とICが一体化したそこにレーダー観測員の叫びが響く。

「艦長、西に約4000m先に不明機接近中！」

「ようやく来ましたね、IFFと衛星照合は？」

「IFF反応なし！衛星照合も取れません。赤外線映像から生物と見られます。」

アダムス大佐はフェン王国に参加する部隊がその空域にいるとは聞いていない。事前にもらっている資料にも書かれておらず、航空戦力はムーとガハラ他数か国のみ。そして、臨時管制塔からのデータ送信から、フェン王国周辺の空域の様子は全て掴んでいた。

それ故に、その未確認物体10機は赤文字で「UNKNOWN」と表示され、艦橋の天井に位置する巨大スクリーンは、タワラを中心に首都全ての空域をカバーするに足る範囲を確認していた。

「フェン王国へ照会を急がせろ。どの道、首都防空圏内に入ったら問答無用で撃墜する事を外交筋……いや、陸の担当官に教えておけ」

しかし、フェン王国が撃墜するよう要請するわけにもいかない。それがパーパーティアだと分かったとして頼むわけにもいかず、自国への懲罰攻撃とは口が裂けても言えるわけもなく、「知らない」と答えるしかない。

そして、第三文明圏を崩壊させる序章の始まりだった。

「対空戦闘用意！」

第十六話 続・フェン軍祭事変

国家を震撼させ、影響を与えるにはどうするべきだろう。

それは効果的に国家中枢に攻撃を加えるのが良い。

パーパルティア皇国第三外務局の国家監査軍所属の東洋艦隊所属、空母「アンティラ」から発進し、ワイバーンの上位種であるワイバーンロード二十騎がフェン王国へ懲罰攻撃を行うために編隊飛行していた。綺麗な編隊飛行は教本通りとも言え、パーパルティアの練度が高いことが伺える。

だが、ワイバーンロードよりも巨体の風竜が一騎首都西側を飛行しており、ただならぬ雰囲気を出していた。ワイバーンロードの顔色は優れず、風竜に攻撃を受ければ騎士のいう事を聞かずに暴走するだろう。人間が哺乳類だからと豚やネズミを同族と考えないのと同じで風竜のような知能ある生命体なら、同じ爬虫類でもワイバーンとは天と地の差が存在する。彼らからすれば、ワイバーンロードやワイバーンの類を家畜や近い種としか考えていない。圧倒的な力を持つ風竜の睨みはワイバーンを怖がらせていた。

「ガハラの民には構うな。目標は王城と敵駐屯地！敵民間人への攻撃は禁ずる」

飛行隊長の命令に対して、何名かの竜騎士は戸惑いの声を上げる。何故なら今回の懲罰攻撃はパーパルティアの威信と小国が付けあがることのないようにするためであり、民間人を殺した方が効率的であるというのが、彼らの一般的認識だった。しかし、飛行隊長は魔導通信の感度を若干上げて答えた。

「ダメだ。フェンの国王は国民の犠牲を深く憂慮される。それこそ占領や割譲を受諾せず、徹底抗戦する可能性がある。民間人への攻撃は

極力避ける。敵の戦意を挫く……あれはなんだ？」

言いかけた彼が見たのは、首都の王立演習場だった。他の部隊は解散しているはずの時刻であったのに、そこにあるのは鉄製の馬車や寸法を間違えたように見える金属製の巨人が横たわっていた。

「計画通りに行動する。第一小隊は洋上の目立つ艦艇を襲え、ムーはやるなよ！フエンとその他の小国艦で構わない。」

飛行小隊の隊旗が上下し、攻撃の合図と飛行隊長に続けと合図が下る。魔導通信が開発されていなかった時の名残として、また故障していた時に備えて行う其れは二手に分かれて降下を始める。飛行隊長の一番大きいワイバーンロードを含めた十一騎が王城と各要所に打撃を与えるため、急降下する。

「お母さん！大きな鳥さん！」

それに気づいたのは一人の小さな少女だった。親の手を掴んだ少女が見たのは火を貯めるワイバーンロード。軍祭も終盤、飛行演武もないために誰も気を向けていなかった。気づく頃は既にワイバーンの口には魔術陣が空中に移り、他国の軍人や魔術師が叫ぶ。

だが、避難は遅すぎた。火炎が放たれると狂乱する市民だったが、ワイバーンロードの火炎攻撃は一ブロックの街を覆うような攻撃を行う。ただ一人築いた子供は母親の手に抱かれてその時を覚悟する間もなく、火炎が彼らを焼き尽くすその時だった

鋼鉄の腕が伸びてくると、ワイバーンロードの首を掴む。火炎攻撃は宙を舞い、無人の演習地域に粘液がばら撒かれ炎上する。もう一方の手腕が伸びると、その拳はワイバーンロードの頭蓋掴んで握りつぶした。

ワイバーンを現代兵器に例えるならば、戦闘ヘリである。銃弾を弾き、歩兵の死神として両翼を広げ、死を撒き散らす。そんなワイバー

ンの首根つこを捕まえて頭を叩き潰す等、化け物にしか見えない。

「お母さん、緑の巨人が助けてくれたの」

少女の声に反応したのか、手を振るそれ。ザクは周囲の飛ぶワイバーンロードを睨み、ヒートホークとザクマシンガンを構えた。

1対10

航空最強生物ワイバーンと巨大人型兵器MS-06FザクIIの戦いは始まった。

一方、

「方位130よりアンノウンが分れました。これより、未確認群アルファ、ブラボーと呼称！ブラボーは当艦に接近中！」

「未確認群ブラボーの距離500000、高度30000から急速に降下中！」

「敵はこちらに迫るか……」

アダムス艦長の呟きは艦橋に響かなかったが、艦橋の全員の総意だった。

「敵、接近してきます。無線及び魔伝にも応答なし。艦長、対空攻撃のご指示を」

「観測班の報告は？」

艦長は一番気になる問題があった。それは彼らが何者であるか。ワイバーンには敵味方識別装置IFFなどなく、殆どは未確認として魔導レーダーやレーダーといったものに表示されている。識別できるのは、ワイバー

ンロードが持つ部隊旗だろう。

「確認、データ照合によるとパーパルティア東洋艦隊所属と思われる。
す。」

「未確認群ブラボーを敵と認識、対空ミサイル発射用意」

スクリーンの未確認が敵と表示され、砲雷科の指示の元、レー
ダー照射が行われ、VLSにミサイルが充填される。

「目標群ブラボーへの攻撃、発射弾数3つ同時発射、座標……」

砲雷長の指示の元、目標への座標を言い、入力後発射準備を行った。

「攻撃開始！」

「敵群ブラボーへ攻撃開始！発射！」

タワラのVLSから発射された汎用型対空ミサイル「アンカー」は
それぞれ、交互に三発放たれ目標群に向けて動き出す。まるで光の槍
にも見えるそれはまっすぐ飛来し、ワイバーンロードの寸前に爆発。
一気にワイバーンが火の玉に包まれていった。

環境のスクリーンに映るレーダーが更新され、数騎を残して海の藻
屑と消えていく。

「汚い花火だ……」

「ミサイルは有効だが、あまりコストに悪いな。各艦主砲にて攻撃は
じめ」

「残りの敵群ブラボーに攻撃開始、砲術スタンバイ」

タワラの主砲、150mm単装速射砲が残りのワイバーンへ照準す
る。砲塔が回転し、機関部に砲弾が自動装てんされる。

「砲撃開始！」

一分もかからず、毎分45発という高速発射から忽ちワイバーンは
ミンチに等しく撃滅される。レーダーには一気に消え、「SIGNA
L LOST」が表示された。

魔導通信から先輩騎士の乗るワイバーンが首を切断され、枯れ葉のように舞いながら先輩騎士は地面に落ちていく。その断末魔はレクマイアの鼓膜を震わせ、高度を高くとった。

(あいつ、空飛んでるぞ)

(やつを持つてる斧に注意しろ！奴は…)

最後まで彼の警告を聞くことはなかった。

レクマイアの目の前にいた彼のワイバーンが突如爆発し、降下していくのをめの辺りにする。

「くそ、なんであいつらムーみたいな対空砲を持っている！」

ムーは列強の航空戦力と対抗するため、空中起爆を行う対空砲を配備している。パーパルティアはムーと戦争したことがない。だが、有効な対空兵器として近年注目されている代物だった。それを使っているということは…

「ムーの奴等め、我が皇国と事を為すつもりか!？」

レクマイアは進路をアマノキ湾内にとる。もし、撃墜されても海中であれば幾ばくかの望みがある。大地に激突して赤い花を咲かせるより良い方策であると考えていた。

「緊急退避する！生き残った騎は一緒にこい」

残り数騎となった飛行隊に残された選択肢は一つ。湾内から海岸線にでて東洋艦隊に合流する他ない。旗手も撃墜されてしまったが、東洋艦隊の直掩騎が見間違うことはない。しかし、猛スピードで横切る物体を彼は捉えていた。

「さ、散開!？」

魔導通信が味方に届いたか定かではない。しかし、通りすぎた物体衝撃で落竜し、地面に激突したことを目の辺りにしたレクマイアは目を疑った。

横切っただけで精鋭の竜騎士が落ちる。風竜でさえそんなことはないため。目を疑う。あまりにも早く、轟音をだすそれはあたかも古の魔法帝国の言い伝えにあるような、音速の壁を貫くそれ。必死に旋回しようとするが、目映い光と共に彼は吹き飛ばされ意識を失う。彼が最後に見たのは八つ裂きにされる愛騎と迫る海面だった。

一方、その光景を見ていた剣王シハンは豪腕によつて手摺を破壊していた。驚きと興奮により、おもいつきり手摺を砕いていた。

「これは…」

秘書官のフジワラは声を震わせ、恐怖を感じていた。しかし、剣王は彼以上の反応を見せている。

「これは…欲しい…こんなもの神々でさえ手にしたことはないわ！この世界を手にするも同然の圧倒的力！フジワラよ、我が求めていたのはこれよ！」

その顔には狂気も混じった笑みを浮かべていた。フエンは武勲を誇る国家である。数百年は安穩としたものだが、それは民からしてみれば。

支配者である王の目の前には多くの列強や中小国がやってくる。その中には悪意を持った侵略者も混じっている。そんな彼奴が今までどうなっていたかと言うと、剣王シハンの配下の隠者によつて始末されている。外交使節を始末するというのも問題行為であるが、パーパーティアとフエン王国の距離は魔導通信拠点からは離れている。その隙を狙つて、海上で海賊に扮した隠者が襲撃し、外交官と入れ替わったり、バレれば別の海賊に擦り付けるなどにも及んだ。

フエンが独立国である理由は精鋭兵を擁しているだけでなく、剣王シハンの配下に忍者がいたことによつて、多くの外交的優位に立つことが出来ている。他にも任務部隊を各国に派遣して情報収集し、それを売る行為。小国が勝ち残るためにはこうした非正規の作戦実施は多くあった。すでにジオンやロウリア王国への情報収集任務に就いた隠密は、ジオンの強大な国力の情報がシハんに伝わっていた。

「あの『キシリア機関』とやら、最初は奇妙だったが、こいつは中々だ。あの憎きパーパーティアを捻りつぶせるわ！」

剣王シハンを長きに渡って秘書を務めるフジワラは剣王の裏顔を知っていた。国民や有効な外交使節には豪胆な性格と精強な戦士の王。達人級の腕を持つ彼は外交にも秀でている。だが、それは彼の表の顔に過ぎない。

フェンはパーパルティアより、嫌がらせ行為を長年受けていた。それこそ、シハンが生まれる前から、共和国時代からの付き合いであり、まさに宿敵とも言える。魔法に適性がないからと蔑まれ、外交的にも下に見られ続けてきた。先の領土割譲は言わば、侵略の第一段階。文化的侵略に始まり、国内にシンパを形成。そして国を篡奪しに掛かる。

何も剣王シハンも妥協点を見出そうとした。だが、シハンの妥協はパーパルティアのそれとは相容れず、今回のような武力衝突になった。

シハンとしてもジオンに全幅の信頼を寄せている訳ではないが、ムーのように一貫して敵対する者以外は友人として受け入れている。ジオンにしてみれば、生産する物を買ってくれればそれだけで良い。明らかに敵対している者に優しくするなんて馬鹿な事はしない。

長年のフェン王国の怒りを貯めたシハンはパーパルティアの使節が来た時、怒りのあまり手を震わせていた。フジワラはその光景を思い出すたびにパーパルティアの攻撃が数か月早まるのではと恐れていた。

「パーパルティアを滅ぼせるなら、フェンをジオンに売ってでも成し遂げたいと考えているのでは？」

狂気に駆られた王族として歴史に残り、末代まで語られる王の秘書官として名前が残るのかとフジワラは剣王の顔を見る。そのフジワラの恐れを感じたのか、シハンの目は彼へと移る。

「フジワラよ、お主はフェン王国に仕える身。剣王のワシではなく、国

家に奉ずる者だろうか？」

王あつて国がある。それは象徴として機能する一種の政治システムに過ぎない。有力な力を持つ国民から支持を受けて権力の依り代として機能する王という統治者は、中世以前、各諸侯のパワーバランスを拮抗させる役割を担う。中世においては中央集権化、絶対王政から王が支配する国家システムが作られた。

シハンを中心とするフェン王国は後者の絶対王政的システムを採用する国家だ。だが、フジワラのような補佐官は各地の有力者や将軍の意向も考慮しつつ、事に当たる。書記官によつては国王ではなく、国のために奉ずる者か。もしくは他の者の利権を得るために、王の意思と異なることを行う者も存在する。

フジワラは長年剣王に付き従っているが、彼も王の意思に全て従っている訳ではない。

「もし、ワシがフェン王国に仇為すと思つたら……斬れ」

「なっ……！」

フジワラはその言葉に啞然とするが、シハンは壊れた手摺の繋ぎを外し、押ししてしまえば落ちてしまいそんな位置に自分を持っていく。

「パーパルティアが仕掛けてきたのはワシの失策故……ジオンへ擦り寄るのはフェンのためにならぬと思えば、城下に兵を集めてワシを斬れ。その位の覚悟はある」

シハン自らをスケープゴートにして、フェン王国の存命を図る。フジワラはそれに気づいて膝をつき、最上礼を行う

「慕う民が居ります……シハン大王陛下が居なくなるのは国の崩壊を招くというもの！何卒お考え直しを！」

「いや、フジワラよ……王という存在は民のためでなくてはならぬ。支配者として君臨し、民の意思を疎かになつては困るのだ」

「陛下は民の意思を汲んでおりまする！」

「いやーワシが君臨している限り、民の国にはならぬよ。ワシの隠密がジオンの政治体制を知つておつてな」

その言葉にフジワラはハツとする。その表情は凶星と言つた様相であり、知つていたと彼の顔に書いてあつた。剣王の隠密は最精鋭かつ最強の軍団だが、それ以外にも情報収集機関は諸侯や秘書官が非公式に擁している。独自の情報網を持ち、そこから話を聞いていたのだ。

ジオンは公国制である。公王を元首とした立憲君主制に基づいている。専制国家と同じく実質独裁の状態である。だが、真実を外国人に話すほど、ジオン軍人として馬鹿でなく、企業人も元公国軍人か国防軍出身、総帥府のチエックを受けている。基本的な「法律上、国民が主権を持つ」と発言するほかない。

彼らは間違つた知識を元に民主化を志すが、専制政治するフェン王国はこれを機に変わろうとしていた。

「国王は居ても、決めるのは民。ワシも決めた。ジオンがパーパルティアを倒せば、国民に告げよう。もう王の時代は終わったのだよ」

「陛下……」

それから二人は口を開くことなく、侍女が来るまで沈黙がその空間を満たしていた。

な」

既にパーパルティアへ戦争することは決定事項である。戦争のやり方には色々あるが、出来ればパーパルティアという愚国には一度きりいさつぱり滅んでもらわねばならないだろう。

そして、その序章であるパーパルティア皇国の第三外務局の国家監査軍所属の東洋艦隊には完全敗北してもらわねばならない。ハウフトマンは軍の指揮権を持っていないが、パーパルティアが顔を覆いたくなる様な勝ち方をしてほしいと要望したところ、派遣部隊指揮官ユーリ・ケラーネは「任せろ！」と言っていた。将官とは思えない服装だが、部下からは大変慕われている。唯一の欠点はファッシュンセンスの悪さと口の悪さ、女癖の悪さだろう。

軍祭が終わり、人工の光が多くないフェン王国は静粛が包まれる。アマノキ城は例外であり、各国外交官とのパーティーが開かれていた。しかし、会場には剣王シハンやフジワラの姿はない。これからジオン公国と会議を行うためにパーティー会場にはいない。パーティー開催の時に顔を出していたが、火急の用件として直ぐに会場を後にする。本来ならば、パーパルティアとの一戦から中止になるだろうが、フェンが国家の危機的状況を安易に話せるはずもなく、少ししてハウフトマンは群がる他国の外交使節を押しつけ、フェン王国の侍女の後について非常に警備の厳しい「密会の間」に参じた。

密会というネーミングセンスにハウフトマンは命名について色々な予測をするも、侍女からやましいことはありませんときつぱり言われたため、面白い話が聞けるかと思っていたが、間違いだったようだ。

―ジオンの貴族連中につくメイドはペラペラ喋るんだがな

ジオンは公国制になってから貴族制が復活している。メイドや執事といった職業はジオンに新しく始めたものであったが、彼らのモラルや防諜意識は薄く、多くの情報機関がネタを得ようとひっきりなしにあのてこのてを使う。ハウフトマンも情報畑出身だったからか、

メイドに粉掛けることは怠らない。

フェン王国の侍女は隠密の所属するくノ一だが、ハウフトマンは知らなかった

ハウフトマンは重要な会談を行う「密会の間」につき、勧められた椅子に腰かける。既にフェン王国の文官が準備している。しかし、主役である剣王シハンは現れず、フェン王国戦士長マグレブが現れた。

「ジオン公国のみなさま、今回フェン王国を不意打ちしてきた者たちを、真に見事な武技で退治していただいたことに、まずは謝意を申し上げます」

騎士長は深々と頭を下げる。がハウフトマンは表立って苛立ったように話し出す。

「いえ、貴国のあまりにも無礼な態度に我が総帥も懸念している。すでにパーパルティアとは戦争状態であろう？この期に及んで軍祭を開催するとは……危機管理能力は疎か外交方法に問題があるようですな」

「我が方もパーパルティアがあのような行動をするとは……」

「貴国は二枚舌なようですな……それは政治家ならほめるべきですが、外交官ならそれは致命的だ。我が国の情報機関ではパーパルティアがそちらに最後通牒を送っているのは知っている。戦争……とは言わないが、あなた方の本音を聞かなければ、先の修好通商条約も完全保障も棚上げにしなければなりません」

「待つていただきたい！」

「私達は貴国に踊らされた道化師……我が方の被害は全くなし。貴国も被害は軽微。なので我々は本国に今回の案件を持ち帰ります。あ

と、パーパルティアはここから100kmの海域に22隻の艦隊が居ます。形状からして歩兵を満載した輸送艦もいるでしょう。確実に強襲上陸の類を行うはず。彼らも手ぶらで帰るわけにはいかないでしょうし……貴国の幸運を祈ります」

それはフェンに死ぬと言っているに等しい。

「いやいや、もう少しお話を！」

「貴国が戦争状態前に我が外交団はロウリア統治領へ戻ります。兵も被害を出すわけには参りませんので」

文官も立ち上がり、見守っていた衛兵も扉をふさぐ。しかし、それはあまりにも愚策。マグレブは慌てるが、直ぐに件の人物が現れる。

「剣王シハン陛下のお成り！」

慌ただしい空気は一転して緊張した空気が張り詰める。

そこに登場したのは先程とは変わって、正式な正装なのか、甲冑を装着した彼は臨戦状態。今敵がいれば叩ききるといったような様子である。その横には秘書官フジワラが控えていたが伏目がちな彼の様子を見ていたハウフトマンは二人の間に何かあったと勘ぐる。

国王が席に着くと思われたが、ハウフトマンの前に立つと頭を下げる。

「申し訳なかった」

剣王シハンは隠すことなく告げた。今回の軍祭でジオンの力を借りようと要請したこと。パーパルティアが苟もワイバーンによる首都空襲を予想していたこと。ジオンによって完全勝利が出来ると思われた上での軍祭の実行。

パーパルティアとフェンの戦争に引き込むつもりでいたことを一

気に話してしまい、周囲の文官も赤い顔から青い顔へと変わり、剣王シハンの発言を予期できなかったようだ。

「重ねて言いますが、今回の一件から貴国との信頼関係は築けないと思っただけです。」

ハウフトマンの話にフェンの面々は不満げな表情をしていたが、こればかりは仕方がない。剣王シハンに心酔する支持者であれば、どちらが悪者に見えるかはわかるだろう。

秘書官フジワラは目の前にある緑茶を飲み、暗い顔をしながら口を開いた。

「解りました。……ただ一つ、これだけは知っていただきたい。あなた方が蹂躪した彼らは列強パーパルディア皇国です。我が国は、長年彼の国から恫喝紛いの要求を受けてきました。割譲を要求し、我が国を侵略せんとする連中です。我が国がこうした恫喝を受ける以前にも、他の国がパーパルディアに侵略された国がありました。」

何れも彼の国と友好関係を築こうとした平和主義の国です。彼らは侵略され、反抗的な国民を親の代まで殺し、奴隷化。王族や軍人などは王城や要塞で裸にされ、凌辱のかぎりを尽くされました。パーパルティアは第三文明圏国家と言いますが、中身はプライドの高い蛮族です。それをお忘れなきよう……彼らは自分達の顔に泥を塗った国には容赦いたしません」

フジワラの声は密会の中に響き渡る。既にフェンの閣僚は諦めたような表情であったが、ジオン軍人の一人がハウフトマンに耳打ちする。

「派遣艦隊司令より連絡が入りました。艦隊へ攻撃を開始するとのこ

「勝てるさ……我々は死兵ではない！」

フェン防衛艦隊の司令、フェンでは艦隊長と呼ばれるが、彼は不安がる参謀に語り掛ける。

「ムーより購入したこの兵器を使えば、パーパルティアの略奪者共は我々に恐怖するだろう。奴らの魔導装甲はムーなどの機械文明の兵器では紙に等しい。簡単とまではいかないが、半分まで損害を与えれば逃げるだろうさ」

とはいえ、パーパルティアの艦隊は22隻、フェン水軍は13隻。数も劣勢であるし、パーパルティアの軍艦はレイフォル艦隊主力の百列艦や皇都防衛艦隊の戦艦とは劣るものの、国家監査軍の軍艦はフェンのムー国製火器を考慮に入れても、依然パーパルティアに軍配がある。

艦隊長は不安がる参謀にそう言うものの、自分自身も不安がつている。自身に対して語り掛けるように話している。フェンの長所である「白兵戦」を前面に押し出せば、敵も引くと考え、帆の上の監視台に付く水兵の報告を今か今かと待ち構えていた。

とは言っても、それは敵が「弱兵」と仮定しての話。そんな簡単にはいかない。パーパルティアの国家監査軍は徹底的な攻撃を行うことで有名であり、パーパルティアの兵士は精鋭ぞろい。武辺一辺倒の戦士を多く有すると、数千・数万の火打銃の戦列歩兵による攻撃には対処できないし、それは水軍も然り。申し訳程度に搭載されたムーの後装式榴弾砲は各艦一問づつしか装備できなかった。

明らかに火力不足であり、そのことを知る艦隊長は何度も頭の中で戦闘を思い描き、そして失敗しては、新たな戦術を考えて、そしてまたそれを打ち消す

—どうすれば、奴らに勝てる……？

「艦影確認！国旗と艦隊旗からパーパルティアの国家監査軍東洋艦隊かと思われます！」

「敵の数は！」

「敵艦隊、並列陣にて接近！数22！」

マストの上で見張りをしていた見張り員が大声で報告する。

水平線に艦影が見え、武者震いが彼の身体に走る。望遠鏡と通して見える軍艦はフェン王国の船とは違い、大航海時代の戦列艦を思わせるような巨体であり、フェン王国の軍艦はその半分以下の大きさ。

パーパルティアはデザインと機能性を兼ね備えたマストに風魔法を付与した動力機関から風を受け、推進力を得ていたのだ。

そして、船体両側には百門近くの魔導砲が口を開いて、獲物を探す魚のような彫像があるなど、パーパルティアの造船技術とそうした船の遊びが垣間見え、艦隊長は苦虫を噛み潰したような表情をする。

「総員、戦闘配備!!!」

「ムーの榴弾砲を準備しろ！砲兵！急げ！」

ムーの派遣された技官とムー王国軍教官から学んだ彼らフェン王国軍兵は急いで、砲弾を装填し、照準をつける。船体の進む方向に火砲を向け、すれ違い様に敵に一射を与える準備、そして選りすぐり水兵による突入によってパーパルティアの軍艦は血の風呂になるだろう。

「艦隊！並列陣になれ！敵の間をすり抜けていく。砲撃はこちらの命令によって行う！」

フェン水軍の水兵が監視塔に上って赤白の手旗信号で送っていく。

【発艦隊長・全艦隊並列陣・艦隊長の指示マデ発砲スルナ】

意思が伝わり、荒来る並みを跳ね除けながら、フェン王国軍艦艇は彼らのすれ違いざまに攻撃を加えるつもりでいた。

本来であれば、戦列艦の間を通り抜けるなど、自殺行為もいろいろだ。しかし、あえてそうするには訳がある。

「全艦隊、推進装置起動！一気に敵の間に迫るぞ！」

【水神起動！全艦呐喊！】

二つ目の切り札であるムーから輸入したガソリン式動力機関。スクリューを4つ搭載したものであり、自動車部品を流用したエンジンである。その能力はムーの駆逐艦と比べれば遅いが、パーパルティアの軍艦よりもかなり早い。一隻のみ、エンジン不調であったが轟音と共にパーパルティアの軍艦目掛けて突き進んだ。

「艦影確認、あの旗は・・・フェン王国水軍です！」

一方、パーパルティアも彼らの船を捉えていた。横一列に並ぶパーパルティアの軍艦は練度の高さを物語っており、最精鋭の皇都防衛艦隊と比べている者もその光景を見れば考え直すだろう。懲罰攻撃という文明社会では考えられないような攻撃を行おうとしている皇国監査軍東洋艦隊の提督、ポクトアールはにやにやと厭らしい笑みを浮かべていた。

「フェン王国か…、ワイバーンが戻らんが、どうせ略奪と殺しを楽しんでいるのだろうか」

地上をせん滅する彼ら竜騎士達。プライド意識も高くて叩き上げの提督からすれば、扱いにくい。肥大した自尊心と国家監査軍所属であるため、ほぼ確実に格下の相手しかしないからか、残虐性に秀でている者しか採用されない。普通の騎士も中にはいるだろうが、ポクトアールにはコストが嵩張り、飛竜母艦の独特の匂いや水兵に威張り散らす様を目のあたりにしている彼は、フェンへの懲罰攻撃が竜騎士達のお残しになりそうなのだと考え、悔しく思っていた。

ポクトアールは各艦へ魔導通信で交信する。

「敵は蛮族だ。しかし、奴らは武辺狂いの戦闘狂だ。油断すれば斬られるぞ！各艦最大限注意を厳となせ」

各艦に搭載された風魔法を行い、帆に風を送り込む推進機関を起動させ、帆船からすると非常に速いスピードでフェン水軍艦艇へと突き進む。

「敵艦さらに速度が上がっています！黒煙を確認！」

「黒煙？」

ポクトアールは航海士の望遠鏡を取り上げ、迫っているフェン水軍艦艇を見る。其処には機械文明によく見られる燃烧機関の煙に近く、その光景に対してムーに居るスパイの情報から、風の涙といったエネルギー―鉱石を使わない効率的な動力機関を使用することを知っていた。

「不味い！全艦隊取舵一杯！砲撃準備！」

「提督！どうかされ……！」

「敵は呐喊するぞ、白兵戦を仕掛ける気だ！」

急激に速度を上げたフェン水軍は取舵をしようとする艦隊の間に

すり抜けると、甲板上にある筒状の金属兵器を目撃する。

ムー王国兵器工廠製 75? 榴弾砲。その形状はWW1(第一次世界大戦)のベストセラー速射榴弾砲M1897 75mm野砲に類似する。一門しかない火砲だが、放たれた榴弾は魔導反応が無い故に魔導装甲をいとも容易く撃ち抜き、弾薬庫に被弾。ポクトアールの乗艦百列魔導砲艦ベルサティアの隣にいた砲艦サヌヴィアは爆発した。

「各艦状況知らせ！」

「砲艦サヌヴィア、デリンジャー、エンデンス轟沈！エンバウアー、ユーチラスは航行不能！」

「各艦被害甚大……チイルクアがエンバウアーに激突！」

ポクトアールは左翼に展開する砲列艦の二隻が航行不能に陥っていることを確認した。砲列艦チイルクアは戦闘能力に支障は無かったが、既に前甲板が抉れており、その破壊力を物語っていた。そして隣にいた砲列艦エンバウアーの後部甲板にある操舵場所はえぐり取られるように消失していた。

急遽取舵を指示したポクトアールの命令に従えなかったチイルクアは遅れて操舵したものの、エンバウアーは消失する前に取舵をしておらず、チイルクアはそのままエンバウアーに激突した。木片が散り、乗組員が海上に転落する。

「ムーの機械砲かと！」

「ムーの奴らめ！」

文明圏国家として第二列強国と君臨するムー。パーパルティアとも国交があるが、友邦国ではない。水面下では日夜対立と諜報の毎日である。パーパルティアの勢力拡大を良く思う訳もなく、フェン王国に対して軍事的援助を行ったのだ。

そして、横切るフェン王国艦艇へ攻撃を仕掛けるべく砲術士官に命

令を出そうとした矢先、信じられないものをみる。パーパルティアの水兵同士が斬り合っているのを目撃したのだ。

しかしそれは見間違いに終わる。軽装のフェン鎧を着た海兵隊の戦士が刀を振りかざし、避けることのできなかつた水兵が袈裟斬りになる。隣の砲艦サンパロールに乗り込むフェン戦士を見た水兵は火打銃で撃とうとするが、ポクトアールはそのライフルを奪い取る。

「撃つな！味方に当たる！」

だが、サンパロールの甲板では皇国兵とフェン戦士の死闘が繰り広げられている。どう見ても劣勢に他ならず、援護したくなる気持ちもわからなくはない。だが、乱戦の最中に発砲した水兵の銃撃は味方の水兵に命中した。フェン戦士は援護することを予期して肉壁代わりに水兵を用いたのである。

「フェン王国のために！」

「剣王万歳！」

呐喊するフェン戦士は嘗ての大日本帝国兵のような呐喊を行うが、制圧射撃もろくにできず、接近戦の訓練をろくに受けていないパーパルティアの水兵は圧倒された。パーパルティアの兵は食詰めの下層階級の市民や属州からの召集兵。専門的知識と技能を与えられ、能力は陸戦隊以外はそれぞれの科に特化されている。しかし、フェンの海兵隊は違う。すべての国民が戦士として訓練され、男女老若関係なしに剣を振るう0距離の鬼となる。

既に水兵はその呐喊から逃れようと海上に身を投げる者も少なくない。

既に2割の艦艇が撃沈または航行不能に陥っている。

パーパルティア皇国指導部や外務局、国家監査軍情報局もムーの軍事力を過小評価している訳ではない。だが、ここまで文明圏外国家の軍事力を底上げする能力があるとは思っていなかった

そして、フェン水軍の砲撃が提督の近くに命中し、ポクトアールは一瞬意識を失った。

「……………」

頭に甲高い音が響き渡り、反響する音が脳を震わせる。周囲の水兵が木片が皮膚に刺さり、血だらけで横たわる。他にも片腕を探して甲板を彷徨う航海士や腹部から内臓が飛び出す砲術士官など目も当てられない現状にポクトアールは急速に覚醒する。

「提督！しつかり！」

叫んでいたのは参謀であり、半裸のフェン戦士を持っていた拳銃で倒した参謀は彼のほほを叩いた。

「……………状況は！」

「船底からフェン戦士が侵入！竜骨が損傷！先の砲撃で主帆が破壊されました！至急、戦列艦ディアトリスへ行ってください！」

「構わん！ここで敵を倒さねば本国には帰れぬ！戦闘能力のある艦を以てフェン水軍艦を撃退しろ。この船に侵入した蛮族を排除する！」

「閣下！」

ポクトアールは立ち上がると共に腰に入れた将官用のサーベルを抜き取った。そして水兵の魔導通信機器を借り受け、全艦隊放送で叫ぶ。

「敵は近接戦に長けた猛者共だ。必ず二人一組で倒せ！ここで食い止めよ！」

特務隊であろう半裸のフェン戦士を切り伏せ、持っていたフロントフック拳銃で斬りかかるフェン戦士を撃ち殺す。兵力差で言えば、東

洋艦隊は全フェン水軍を凌駕する。ここで苦戦を強いられても、まだ戦闘継続可能な船舶はまだ半数以上残っており、フェンの貴重な軍艦を何隻か仕留めていた。ここで引けば皇国軍人の恥。

今までと違う懲罰攻撃であり、心の片隅には死への恐怖があったが、それ以上に蛮族ではない武辺を誇る気高き戦士と戦えることに喜びを感じていた。

「フェンの戦士共の血でこの海域を赤く染め上げよ！皇国のために！」

魔導通信の送信機から声は各艦のスピーカーから流れ、東洋艦隊の戦意は高揚する。雄叫びがその海域に響き渡り、勢いの衰えたパーパルティア水兵が戦意を回復する。火打銃の銃剣格闘でフェン戦士を串刺しにし、監視塔からロープ伝いに来た監視する水兵は持っていた作業用のハンマー片手に死闘を繰り広げる。

其処には培った科学技術でなく、己の力で戦う血沸き肉躍る死闘。宇宙世紀ではあり得ない血生臭い戦いが繰り広げられた。

だが、その戦いは突如として終わりを告げる。

無傷のままフェン水軍の艦艇を砲撃していた戦列艦の一隻が爆発する。フェン水軍の砲撃かと考えたが、それはあまりにも現実味がなさ過ぎた。まるで海底から伸びる光の矢が突き刺さったかのように見えるその光景。そして、人よりも巨大な人型の何かが海中から現れた。

「な、なんだこれは?！」

それは参謀の叫び声であった。隣にいた戦列艦ディアトリスの横に現れた鋼鉄製の巨体。それは青を基本とする塗装が施され、人が建造したであろう文字やリベット痕が見え、文字が読めたなら「MSM
| 07 Z'GOK」「ZEON ROWLIA OCCUPATI
ON FORCE」(ジオン・ロウリア駐屯軍)の文字が読めたである

う。

モノアイが赤く光り、振り下ろされた鋼鉄の爪はまっすぐ戦列艦の横っ腹を突き刺した。辛うじて弾薬庫は爆発しなかったものの、竜骨が折れて船体が真っ二つに引き裂かれる。その光景は海神が悪しき船舶を静める神々の戦いに出てきそうな一幕だった。

更に海中から浮上したミサイルが飛翔する。そしてミサイルは上空に飛翔して一気にミサイルが分裂。クラスター爆弾のように無数のミサイル群が東洋艦隊の艦艇に命中した。爆音と共に木片や水兵が爆風で吹き飛ばされ飛散する。その攻撃で艦隊の半数を失い、戦闘は自然とおさまった。

「おおおー神よー！」

パーパルティアやフェンなどの宗教は多神教であり、各地の土着宗教や様々な自然事象に対する信仰がある。フェンは島国国家であり、パーパルティアの東洋艦隊も基本的に海岸に近い住民や海を生業とする地方の出身達に占められる。多くは膝をつき、神々の逆鱗に触れたのかと恐怖する。

戦闘が中断し、神々への祈りをささげる中、それを何らかの兵器と考えたパーパルティアの将校達は祈りをする水兵に戦わせるよう叫び、ポクトアールも同様に戦うよう檄を飛ばそうと魔導通信を開く。が、次の瞬間には送信機を血の海にある甲板に落としてしまう。

それは破壊された木片の浮かぶ海域に突如として現れた黒い影。それは鯨か死体を食いにやってきた巨大イカかタコかと思う。だが、その巨体は300m近いもので一気に海上に頭を出す。

『ユーコン級MS運用型潜水艦 U-21』

地球連邦海軍が使用する攻撃型潜水艦V I I I型のコピーであるが、随所に渡つて改良が加えられている。水中発射用V L S発射管や弾道ミサイルシステム、ジェット推進方式を持つ。

その巨体にあるMS格納口が開き、中からMS-06Mザクマリンタイプが姿を現し、ヒートホークを振りかざす。

「フェン水軍及びパーパルティア皇国国家監査軍東洋艦隊全部隊に告げる。我々はジオン公国軍である！ 双方戦闘を中止されたし！」

あまりにも大きい声量の声が海域に響き渡る。誰もそれが現実だとは受け止めきれないでいる。

「もし、抵抗した場合は両軍をこの世から跡形も残さない！ 速やかに降伏せよ！」

300m近い潜水する船に18m近い巨体の化け物。光る矢や何らかの爆弾が海から空へと昇り、的確に艦隊へと押し寄せる攻撃。だが彼らを止められるのか。

ポクトアールは目の前の事に対して信じられなかったが、拒否すれば本当に自分たちが消えてなくなるかもしれない。そのことが分つた彼は部下へ静かに話す。

「降伏の旗を掲げる……我が艦隊はジオン公国に対して降伏する」

東洋艦隊は残存艦艇10隻を残し、降伏する。文明圏国家が圏外国家に敗北する戦い。

『フェン沖海戦』

パーパルティアとムーの技術格差を明確にすると共に、ジオン公国が如何に強大であるか示す事件となる。

そして、それを見ていたのはアマノキ城の「密会の間」で会議する公国外交使節とフェン王国閣僚と剣王シハン。ホログラムを元に表示された海戦はフェン王国指導部に衝撃を与え、既に老年であった閣

僚二人が現在ジオン公国医療関係者の手当てを受けている。

「現在、わが軍の潜水艦が投降したパーパルティア軍将兵を回収中。また、巡洋艦で曳航させ、アマノキ湾に越させていただきたい。それと今回の突発的戦闘に関わる貴国と我が国の関係をしっかりと明瞭化していただかないと。捕虜や今回の戦闘に関しても、中途半端にやると後に響きますから」

ハウフトマンはブリーフケースを取り出し、フェン王国がよく使う和紙に近い形質の書類を近くの侍女に渡し、閣僚に配るよう指示した。それを見た瞬間、フェンの閣僚は目を見開き、同時に顔を真っ赤にする。

「こ、これではパーパルティアと同じではないか！」

「なんだこの要求は！奴らよりも多いではないか！」

其処に記されたのはギレン総帥が認可したフェン王国とジオン公国の安全保障条約である。実はその条約草案には「軍総指揮権を戦時中はジオン公国軍の駐屯軍司令に渡すこと」「西側の森林地帯にジオン公国軍駐屯地を建設」「駐屯地内は治外法権」といった内容である。パーパルティアの初期の要求では領土割譲または租借という話である。だが、フェン全てを狙う意図があれば、確実に他の要求もしてくるだろう。

それを理解していても、パーパルティア以上の要求に怒りを露わにしていた。戦士である彼らは自分の剣に誓い、剣王へ忠誠を誓う。王の命令ではなく、他国の命令に従うという軍権をジオンに譲渡するとう屈辱的な内容には怒りを覚えるのは当然だろう。ただ、剣王シハンだけは表情を変えなかった。閣僚の多くは吠えるが、ハウフトマンは全く動じないまま、急に席を立つ。

「では何でしょう？我が国は他数か国の外交官や観戦武官の安全を守るために、今回の戦いは貴国によって引き起こされたと言っておきましようか。我が国は平和を重んじますから、戦争に巻き込まないようにする

貴国の思惑を話した方がいいですね」

「!?」

「言っておきますが、これを脅しと思われては困ります。これは警告です。貴国は保身に回りすぎる。パーパルティアは蛮族であるが、あなた方は狡猾だ。この戦いで亡くなった貴国の戦士には哀悼の意を称しますが、我が国の兵士も危険に晒された。前もって情報を頂ければ貴国の戦士を一人も犠牲にすることなく終わらせたでしょうに」

「それは違う」

ハウフトマンの話を遮るように、剣王シハンは声を上げる。ホログラムの映像を見てから沈黙し続ける剣王に対して彼も警戒していたが、急に話したことに驚いていた。

「何が違うのでしょうか？貴国が我が国を戦争に巻き込もうとしていたことですか？それとも、パーパルティアが弱いことを諸外国に伝えるためのデモンストレーションだったのですか？」

「それもそうだが、ひとつ説明させてくれんか。すまん、フジワラよ、ワシはこちら側に座らせていただく」

剣王の座っていた位置は所謂上座という場所。長机を二つ用意し、向かい合うようにして両国外交官と閣僚が座り、両者が話す光景を見るのが普通のスタイルであった。だが、剣王シハンも閣僚と同じ席に座ろうして、フェン王国側の閣僚は慌てていた。

「何か雰囲気変わったな」

「ですね」

ハウフトマンは隣の補佐官と耳打ちする。玉座に座り、宰相や他の閣僚と距離があったように思えた彼らであったが、彼らの目の前にあるフェン王国の座席に剣王は腰掛けた。

「貴国が参加不参加に関わらず、軍祭は挙行されていた。先の海戦でムーの技術を見たであろう。貴国に及ばずともムーの科学技術も相応なものじゃ。ムーの対空機関砲とやらも各所に配置していた。王城の至る所にな。だが、かれらの攻撃目標は先に演習場だった。生き残った数人の竜騎士の証言じゃと、貴国の巨人を見てとの事らしい。」

「しかし、貴国が戦争に引き込まうとしたことに代わりありません」

「現時点ではそういう見方もできよう。しかし……ジオン公国とパーパルティアはいずれにしても戦争するとは思うがの？」

「……断言できかねます」

ハウフトマンの使命はフェンとの国交樹立とパーパルティアとムーの介入状態の解明、パーパルティア拡大の楔を打ち込むことに他ならない。戦争とは外交手段の延長線に過ぎないが、彼にしてみれば戦争と言う一手段は最終手段であり、外交によって解決できるものも数多くあるのだ。

現時点にしてみれば、フェンと皇国の武力衝突は低程度紛争に分類され、ジオンと連邦が想定した総力戦にまでは至っていない。まだ、戦争を止めることはできると判断したハウフトマンは言葉を濁した。

「あと、貴国がまた知りえていないこともある。パーパルティアの積年に渡る拡大政策は様々な国や組織を敵に回している。今回の一件は私の意思によるものではない」

「はい？」

まさかの台詞にハウフトマンは呆気にとられる。

国家元首である剣王シハンの意図とするものではない。それだけでも、驚きであったがハウフトマンが口を開いても言葉が出ず、剣王シハンは話し出した。

「国家の頂点に位置する者の意図ではない……驚きだろうが事実だ。今回の軍祭はパーパルティアへの抵抗を見せるためのデモンストラーション……それは正しい。が主役は貴国でなく本来であればムーの機械兵器がパーパルティアを蹴散らしていくはずだった」

「ですが実際にはわが軍が介入せざるを得ない状況になりましたが」

「それは単純にワシが見たかっただけじゃ。まさか、金属製の巨人を持ってくるなど思わんよ」

—えー！この爺、ここでそれを言うのかよ。

ハウフトマンはその強靱な戦士の風貌の剣王がとぼけたような振る舞いをすることにイラつくが、それよりも軍祭での異質なムー国製の兵器の仕様やフェンの動きが性急すぎる点。それを踏まえると、第三者が介入していることが疑わしく、フェンへの制裁よりもそちらが気になる。

「して陛下……、その組織？でしたかな？彼らは何と呼ばれているのです？」

ハウフトマンは苛立ちを抑えつつ、好奇心に駆られた彼は剣王が出す本題に王手を掛けた。

「彼らはマンダと呼ばれる秘密組織。ワシもその組織の裏に何がいるのか分らん」

パーパルティアの拡大に伴い、秘密組織「マンダ」の暗躍。

この会談で明らかになったその組織の名前はここで初めて明らかになることになった。

そして、フェン沖海域にはジオン公国艦艇とフェン水軍の木造、降伏したパーパルティア東洋艦隊所属艦艇等々、様々な軍艦がひしめいていたが、その中でも唯一公表されていない艦艇が潜望鏡深度まで上

昇し、海上であつた戦いを全て記録していた。

「艦長！ ジオン軍艦艇が遠ざかっています。速度は30ノット！とんでもないスピードです」

「ソナー員、しっかりと記録しておけ。後日、本国のデータベースに記録されることになる」

そこにいたのはムー王国海軍フェン派遣艦隊に所属するIV型潜水艦である。形状は地球の歴史でも類を見ない大きさであり、形状もまるで石棺を思わせるような形状であり、その素材はムーにのみ生産される高密度の鋼材を使用している。それは静粛性に優れ、ソナーをも掻い潜れる最先端のものだった。

彼らが聞いていたのは、様々なノイズと共に聞こえるジオン軍潜水艦の音である。ジオンは海中での行動に関しては五月蠅く、まるで粛々とするべきはずの劇場で大音量のロックミュージックを流しているような、場違いなほど五月蠅い。

潜水艦の運用に関して未だ発展途上であると、潜水艦の艦長は感じていた。

「ジオンは凄いな……全く凄すぎる」

「まるで星戦争のようです」

『星戦争』それはムー王国で流行っているSF小説に出てくる異なる星の惑星から来た蛙のような異星人。彼らは自分たちよりも優れた科学技術を持ち、侵略すると言った内容である。そこにあつたのは四足歩行の巨大メカが地上のムー国軍の兵器や部隊を蹂躪し、国土を燃やしていくというSF大作である。既に映画化も検討されており、そのうち慰安の目的でフィルムが軍から送られてくるだろう。

そんな現実から離れた光景を見ていた艦長や副艦長、航海士は表情を曇らせる。

「この情報は『マンダ』から来ていたが、現物を見て確信したよ。情報局も驚くだろう」

「ですね……艦長、お時間です」

副長はゼンマイ式の時計を見て、偵察作戦の終了時間であることを知らせる。艦長は潜水艦艦長の軍帽を被り直し、命令を告げる。

「潜望鏡下げ！最大深度まで降下。このまま中継基地まで帰るぞ！」

「ベント開け！最大深度！」

「ベント開け！最大」

副長と航海士の復唱後に潜水艦は再び海中へと沈んでいく。

「特務機関」「対パーパルティア隠密部隊」「第3世界工作部」など様々な呼び名がある組織。多くはそれをムーの神獣「マンダ」と呼び、正式名称「第3諜報局」と呼ばれるパーパルティアを崩壊させようとするムーの情報機関だった。

第十七話 嵐の前の静けさ

パーパルディア王国の首都行政区に位置する第三外務局は非常に気まずい空気に包まれていた。

パーパルティアの国家監査軍は首都防衛部隊や皇国陸軍と比べると練度が劣っているという話であるが、それは全くの筋違い。皇国はフィルアデス大陸の覇権を有するため陸軍主体の大国である。主に力を入れるのは陸軍であるため、海軍への投資は申し訳程度。しかし、その装備や兵力は他の追従を許さないほど兵力や装備も充実している。植民地統治機構と共同で扱う装備もあるが、基本的には旧列強のレイフォルと比べても、その兵力は断然上である。

ただ、そんな彼らであっても、パーパルティア皇国の誇りに掛けて負けるわけにはいかない。懲罰攻撃は負けることがない作戦であるため、多くの局員や監査軍将校は意気揚々と狩りか買物に行くような感覚で出発していった。

中継地点の属領や艦隊基地から何度も状況や東洋艦隊の様子知らされていたが、作戦実行日になって突然連絡が途絶えたのだ。

本来であれば、艦隊参謀と事務辺りが巡洋艦を中継基地に乗り入れて、魔導通信によってこの成果を報告する。魔導通信など、画期的な情報伝達技術が存在し、その速度は1970年代の電話網に近い。ラジオやテレビに似た情報発信技術もあるが、如何せんその範囲は限定され、中継基地においても魔導妨害と言った手段を取られれば本国との通信は途絶する。

第三外務局は情報を掻き集め、やつのことで東洋艦隊の動向を知ることができた。

『東洋艦隊の壊滅』

『フェン王国とジオン公国によって武装解除』

その他

『フェン・ジオンとの間で友好条約並びに相互国土防衛条約を締結』
『東洋艦隊の将兵の引き渡しを皇国へ求めている』

どれも間違いかと、そのソース元であるフェン王国軍祭に参加した文明圏外国家の外交官に確認を取った。彼らが本国経由でもたらされた報告書の写しや証言によつてそれが真実だと明らかになる。

そして、少しだけフェンについて話さなくなる。それは問題を先延ばしにして役所の常套手段である。問題を棚上げにして先送りにする。

しかしそれが局長カイオスの怒りに触れた。もし、ガセネタと思つていても東洋艦隊壊滅との報を出していればそこまで怒らずに済んだのだろう。脳の血管が切れるのではないかと思われるほど激怒していた。

フェン王国が皇国の領土献上案を拒否した事からはじまり、498年間の租借案という「慈悲」案も拒絶。それにより、文明圏外国家の蛮族に舐められた態度は許容できるものではなく、懲罰攻撃を行うようになった。他の国々の恐怖の楔が外れては困る。外れれば皇国の維持はできない。皇国経済は崩壊し飢餓と暴動によつて皇国は崩壊してしまうだろう。

だが結果は惨敗。

その事を伝えなかつた課の管理職は左遷。棚上げを意図的に指示した者は依頼退職した。

どの道、国家監査軍東洋艦隊の全てを失つたことは耳に入るし、すでに皇国内部でも噂されている。『海神に崇られた』『鋼鉄の巨人に蹂躪された』などの訳の分からないものが来ており、カイオスは頭を抱えている。

戦闘の詳細は知ることが出来ないが、列強による攻撃であることは

疑いようもない。

そして皇帝の耳に入り、次の皇宮会議では議題に上るであろう。確実に精銳艦隊から抽出した部隊を向かわせる。そしてフェンは巨大な地獄へと変貌するだろう。

先の失態を挽回するために、オフィスから出たあとカイオスは叫んだ。

「全職員に通達する。先の戦いの情報を速やかに集めよ！些細な噂や盗んだ公文書でも何でも構わん。全てここへ持って来い!!!」

騒がしくオフィスの扉を雑に閉める。そして失態を返上すべく正体不明のジオン公国の情報を集め始めるのである。

そんな最中、窓口の人が現れる。

「申し訳ありませんが、今日課長と会う事は出来ません。」

いつも通り、国際関係や第三外務局のシステムを存じていない蛮族の外交官に対して再三出された会談願いは却下される。いつもの光景があった。ジオン外務省の職員は、約束したパールディア皇国外務局の課長と会議のためやってきたが、窓口で再度足止めをくらう。外交団の中でも下っ端が行う再三の頼みであり、既に受付の職員の顔も覚え、向こうも「またあんたか」と声には出さないが、その振る舞いからしてバイトが嫌な客を見るような対応に「おれは何時ファストフード店にきてたのか」と職員の一人は頭を抱える。

何度目かの来局の時にアポを取り次ぎ、新たな事案について早急なお話が必要であると念を押しているのにも関わらず、急に会うことが出来ないという受付に職員は憤慨した。

「何故ですか？約束したではないですか!!」

「ちよつと込み入った事情が発生いたしましたして……。申し訳ありませんが、文明圏外の新興国と会議をしている状況ではないのです。」

「どっかの中小企業でもそんなことはしないよ……」

「すいませんが！お引き取りを！」

最早、パーパルティア王国のフェン王国懲罰失敗は全世界に広まっていた。それに加えてジオン公国の軍事力も伝わっており、天文学的に色々変化していたことも含めて様々な裏付けがあることから、ジオン公国は列強以上のテクノロジーを保有することがマスコミ各社などで報じられた。

列強の報道機関は基本的に魔導通信の映像放送である。魔導士結社が民営放送の体を取っている。とは言っても、国が『NO!』と言えば放送できなくなるのだが、列強諸国の魔導士結社は閉鎖的であり、法制度もそこまで規制が行われている訳ではない。世界第一位の列強として君臨する、神聖ミリシアル帝国は民間の報道に対して、国営放送で反論しつつも、裏で官僚が民間に圧力をかけた事が露呈。社会問題になるなど、報道機関の発達によって様々な問題が噴出していた。

そんな第一文明圏の帝国領の港町カルトアルパスは貿易都市として栄えていた。

国際貿易の中心地であり、帝国領の流通拠点として栄え、多くの商社が軒を連ねている。人口100万を越え、殆どが貿易関係の仕事に就いている。そして、商人の中には各国の諜報員が活動している。購入する食品の量や購入する物品などの正確な量により様々な予測が可能となる。

例えば、石油燃料から国で消費する量が分る。もし、大量購入していれば、戦争の準備段階であることが分る。その他、硝石や魔法石・奴隸など様々な物が行き来する。その数が例年より多ければ何かがあり、少なければ何かがある。それを調べるために商人に扮した諜報員が動き、またパートタイムのスパイも存在する。諜報機関が金を出し、一般業務の合間に商人が情報を提供する。

こうした国家間の暗躍を金蔓と考えた犯罪者組織は数知れず。一時期はニューヨークやシカゴ並みの犯罪都市になりかけたが、治安維持部隊の投入と犯罪者への厳罰化によって沈静化。地下深くに潜っ

た犯罪者シンジケートは各国のスパイと裏取引をしながら生き延びてきた。

国際都市にありがちなスラムなどは出来ていなかったが、犯罪発生率の高い地区が生まれる。が、カルトアルパス治安維持部隊の重装備警邏隊がこれらの犯罪組織に対処していたため、総合的に見て治安のよい町になっていた。

その町並みは高層ビルがないものの、飛行船やジェット推進エンジンを搭載した垂直離着陸機が周囲を行き来し、馬車ではなく魔導式エンジンを利用した自家用車が走るなど、非常に文明的な都市であることは明らかだ。

とある酒場では、酔っ払った商人達は自分たちの情報を交換していた。こうした現場では些細な情報でも商売にする商魂たくましい彼らであったが、彼らの母国も情報に興味があり、内容次第では買い取ってもらえる。主に彼らの交遊費はそこから出ていたりする。

ビア樽のような体をして白い髭を生やした男は意外にも話を聞いたり、話したりする。酒場の常連である男は豪快に何時ものメンツや新参者に酒をおごったりするなど、バックには列強がいるにちがいない。

「最近の衝撃的なニュースといえば列強レイフォルが、新興国の第八帝国とやらの敗れたニュースだよな！誰か、第八帝国について知っている者いないか？」

「第八帝国は通称であり、本当はグラ・バルカス帝国というらしいな。俺は開戦時にレイフォリアで香辛料の商売をしていたが、あの恐ろしい日は今でも忘れないよ。突然首都近辺の警備が厳しくなって、逃げようとしても軍警察に止められ、魔導砲とか砲兵がわんさか。それに予備役が緊急呼集されて嫌でもやばいのがわかったよ。で樽で主力

艦隊がたった一隻にやられて冗談だと思ったね。だけど、違った。機械文明の飛行機械がわんさか来て夜間飛行で爆撃していった。首都近郊の駐屯地と海軍基地の殆どが壊滅的被害を受けたって聞いてな。一部の地区じゃその影響で暴動が起きてた。んで、夜が明けたらレイフォルは降伏。あの時、レイフォル主力艦隊の一部が戻ってきて、クーデター起こさなかったら、その日のうちに首都が陥落して俺もここにはいなかった」

「え？クーデター起きてたのか?!」

その商人の台詞に驚いた数名は目を見開いていた。それを見る限り、動じていない表情を動かさない奴らはどこかのスパイか、それとも元軍人崩れの商人のようにも見えたが、そのレイフォル帰りの商人はその反応に嬉しくなって再び語りだす。

「そうなんだ。今のグラ・バルガスの占領下だと情報統制が図られているから多分その時の様子は俺ぐらいしか語ることないから言っとくよ」

レイフォル帰りの彼が何を見たのか。徹底抗戦と蛮族への復讐に燃える王国指導部は首都近辺の消耗した部隊や首都で無事だった兵力を再編。国民に旧式の魔導銃を配り、国民突撃隊を編成しようとした矢先、将軍バルを信奉する海軍将校および陸戦隊が蜂起。

王国指導部は敗北した海軍を冷遇し、バルの敗北を気に海軍を解体し、海軍兵の全ての給料を停止するという蛮行を行った。本来はあり得ないような行政決定だが、成功を重んじ、失敗を否定する国の方針に憤慨した海軍首脳部は、蜂起した海軍将校と結託して首都を占領。加えて抵抗する陸軍を半ば壊滅させ、臨時政府が設立された。その後はグラ・バルガス帝国が占領することになったが、クーデターを指揮した参謀や危惧する海軍司令部などが傀儡政府中枢を担い、着々とグラ・バルガス帝国に編入されていく。

レイフォル帰りの商人については、彼がミリシアル人だったことも

含め、今後の国際関係に配慮して国内情勢が落ち着くまでは国外に追放するというものだった。半年以上がたったが、レイフォルの残存部隊がどうなったのか。反乱勢力はどうなったかは情報統制されて知る由もない。

「あの国は間違いなく、列強を上回る。わが帝国もかなり危ういかもしれん」

「さてさて、レイフォルに勝つとは確かに強いが、魔導超文明を持つ帝国に勝てる訳が無いだろう。格が違いすぎる。」

「ムーも、ミリシアル帝国に順ずる強さがある。ムーにも勝てないだろう。なんだかんだ言っても、文明圏外の蛮国にムーは負けんよ」

「その蛮国にレイフォルは負けたんだよ」

「レイフォルなんて、列強といっても……言っちゃ悪いが、最弱の列強だろう？一般国に比べれば遥かに強いが、他の列強にくらべると、実力は遥かに弱い……。」

その話を聞くと「レイフォルは我ら四天王の中では最弱」「左様、ムーやミリシアル、パーパルティアと比べれば格下の存在」などと言っているのではと考えてしまうが、彼らは軍事面では素人。とはいえ、彼らの商人としての勘や開戦までの期間を考えれば、国力を推し量ることは出来よう。表立って帝国領で帝国の批判を言っても、ファシズム国家のように処罰されることはない。ただし、情報代に色は付けてもらえることはなくなるだろう。

「お前らはグラ・バルカス帝国の恐ろしさを知らないから、そんなことが言えるんだ」

商人に浸透する列強国としての誇り。例え、不特定多数からそうした情報を得ていても信じるはずもない。そして、商人の他愛もない話

は続いていく。

「そういえば、ロウリア王国ってあっただろ？」

「東の蛮国か？あの、人口だけは超列強な国だろう？」

「ああ、俺が交易にいった時期に、隣のクワ・トイネ公国に喧嘩を売ったんだよ。亜人の殲滅を訴えてな」

「亜人の殲滅？無理に決まってるだろう。さすが蛮族の国！」

ロウリア王国の噂はよく聞いていた。人口だけは非常に多く、それ故に纏まらずに内戦が他国よりも多い国家。纏まるために亜人という種族を敵性民族に認定し、怒りのはけ口を彼らに求めただの。国を纏めるために多民族を排撃する。ロウリアは国を一つにするため、亜人を槍玉にあげ、徹底的な差別政策を行った。王国の混乱は彼らの陰謀として宣伝。ばらばらであったロウリアをまとめ上げ、政治的にも中央集権化が進み、パーパルティアも何とか軍事援助を踏み切るところまで成長したが、国を纏めるために使った亜人差別は大陸の亜人を根絶やしにしようという民族浄化も辞さないものになっていた。

列強の生存域にはエルフやドワーフなどの種族も人間に紛れて、一緒に暮らしている。排斥すべきどころか、ドワーフは金属加工や鉱山などの技術者として適正な技術と天性の勘があり、エルフは魔導に非常な適性があることから魔導研究において重要視される。列強の指導部からしてみれば亜人の存在は「ちよつと特異な人」「特定技術に秀でた民族」としか思っていない。

差別意識や自分と違うというレイシスト的意見などはどの世界に関係なく起こっている。ロウリアは正に典型とも言える人間中心の国家である。そうしたロウリアであったが、パーパルティアの支援も虚しく、ジオン公国に降伏。ジオン公国ロウリア領として君臨することになった。

またロウリアのジン・ハークから300 km離れた地帯は地をならせば非常に巨大な港町が建造可能であり、ジオンの力で多くの機材や建築重機が運び込まれていた。既に工事は終了し巨大な軍港と商業港が生まれ、その横には巨大な工業地帯が生まれていたが、彼らはまだそれを知らなかった。

「いまじゃ、ロウリアはジオン統治領つてことになってる。もと国民は殆ど同化しているから見分けも付かん」

「ふええ〜！そういえば、ジオンつて帝国並みの科学力だつて本当か？」

「いやいや……死傷者なしで4400隻が退けられたとか、鋼鉄の巨人が暴れ回るとか、情報操作だろ！第一、あの放送はどう見てもプロパガンダ^{欺瞞情報}だろう」

既に地球連邦^{ティターンズ}の放送やジオン統治下のジン・ハークに建設されたロウリアン・タワーからは電波や魔導通信の技術によって、様々な放送が行われている。全世界までとはいかないものの、何処かの中継地の民間放送局と契約し、ほぼ世界にジオンの放送が流れている現状。商人からしてみれば、その報道に対する資金の当て具合から、国力も相応なものであると言えるだろう。

嘘偽りを伝えるからと言って、国家そのものが欺瞞に満ちた小国『嘘つき国家』と評価するのは間違いである。そうした情報への評価によって小国であろうとも、大国並みの力や権力が手に入る。多くの民衆は情報の選別がうまく出来ていない。インターネットの普及によって様々などうでもいいデマ・欺瞞情報が混在する今日において情報への理解は一世紀前とは格段に進歩している。

それは誰しもが、膨大な情報を得られるためであり、様々な選択肢が提示できるからだ。だが、インターネット以前の事を考えるとそれらの情報への理解は民衆全体からみて非常に低く、政治指導者からしてみれば、操りやすかったに違いない。第二次大戦中はこれらの情報理解が及ばなかったために、ドイツではヒトラーの宣伝省が猛威を振るい、ヨーロッパ全土を支配した。日本においては古来の民族主義・集団意識が根底からあるために余計に拍車がかかる。新聞などの媒体によって悪意ある情報があっても、判別できない者も多く、マスクミの無責任な扇動から戦争へ暴走していった。

こうしたことから商人もジオンについての報道に耳を傾け、ある程度の情報への理解があるのか、冗談半分に聞き流す。そして、信用できる情報筋から『ジオンは只者ではない』と認識するに至る者も多かった。

「ジオンって一体何者なんだろうな。おれは会ったことないし何とも言えないが……」

「星間国家とか、宇宙人ってことかな。さながらムー『星戦争』だな」
「まあ、グラ・バルカスやジオンがいくら強かろうと、わが神帝国とは格が違う！絶対に勝てないよ。結局、中央世界はいつまでたつても安泰さ！古の魔帝が復活でもしない限りはね」

「その通り！」

「皇帝陛下万歳！」

「ミリシアルに栄光を！」

エールやビールを掲げ、楽しく笑いある酔っ払いたち。日々の疲れを飛ばすべく、アルコールを飲み騒ぐ彼ら。だが、数千年に一度とも言われる災厄は刻一刻と迫っていた。

一方、第2文明圏最強の国であり、列強国ムーの軍事情報局はこれらの情報を元に様々な分析を行っていた。国防省隷下の情報局は所謂CIAにも似た組織であり、スイツ・軍服組双方が手を取り合って働く場所である。

だが、軍と官僚との軋轢もあるため、一筋縄ではいかないのが欠点であるが、フィルアデス大陸で噂される某秘密組織『マANDA』も彼らに属しており、平和主義を掲げる政府内にいるタカ派官僚と結託し、フィルアデス大陸への軍事的介入は軍服組が取り仕切っていた。

とは言っても、スイツ組の目線から見ると分析や軍事知識と経験を元に判断する軍人達双方の長短は分っており、お互いに補っていることは両者ともに理解していた。そのうちの軍服組の一人、技術士官のマイラスはレイフォリア襲撃の際に魔導写真機によって撮影されたグラ・バルガス帝国の兵器や部隊の装備を見比べ冷や汗を流していた。

ムーのテクノロジーは基本的に機械文明が発達している。魔導文明は嘗て侵略してきた民族の文化が若干残っているが、基本的には機械文明が浸透している。ムーは嘗てこの世界に転移してきた大陸国家である。ムー王朝は混乱し、内戦が勃発。その混乱に乗じて周辺諸国が侵略した。

転移直後の国土は一割減り、当時の国宝や多くの命が失われた。しかし、内紛を鎮圧して残る国土を平定し、侵略する異民族や魔導文明の国々へ反撃を開始。現在に至るまでムーは列強として君臨する基盤を築き上げた。しかし、ムーの有していた科学技術は継承できず、多くのテクノロジーが失われ、転移前の最盛期から今のムーと比べると300年程遅れた文明になってしまった。

嘗てのムーは1000年ほど前に転移した国家であり、嘗ての世界で猛威を振るったアトランティス帝国と冷戦状態であったと遺された文書で記されていた。その当時の記録から推察するに、米ソのような核抑止の中で起きた冷戦と同じような対立状態であり、光線兵器や

外殻骨格を有する機械化歩兵、数百年生きる人を実現していたと記され、現在のムーはこれらのテクノロジーを求めて研究しているが、未だに300年の開きがある。

現在のムーのテクノロジーは地球文明基準で言えば、西暦1930年代に近い。他国のワイバーンの航空機と戦うため、複葉機を主とした空軍を編成。陸軍海軍は第一次大戦中か戦後の科学技術を有する。ムー単体での技術発展は非常に時間がかかったが、これでもまだ発展途上の段階だった。

閑話休題

マイラスはグラ・バルガス帝国担当の士官だが、帝国の兵器について頭を抱えていた。

「まずいな……。」

彼が見る限り、確実に帝国の技術力はムーを凌駕している。ムーも単身で技術力を底上げし、嘗てのテクノロジーに追い付こうとしたが、競い合う方が成長する。話では転移前に帝国と対立する国家があつたことから、グラ・バルガス帝国は軍備を増強し、国家予算のほとんどをそれに充てたという。

その脅威に対して警戒するだろうが、多くの人間は「ありえない」と口をそろえるだろう。既に神聖ミリシアル帝国の魔導技術力は現在のムーの科学技術を越えている。軍人組は良く思わないが、技術士官のマイラスはそのことを良く分かっている。魔導文明は魔法と言うエネルギー加工技術を使うテクノロジーであり、魔法を使用する技術体系を持つ。機械文明とは根本の所から全く異なっており、以前の研究部署では魔導文明と機械文明の相違について様々な大学の研究者とコンタクトを取り、どう軍事的優位をとるか考えていた。

現在、神聖ミリシアル帝国と友好的なのは互いに尊重し合い、戦争することは双方被害が甚大になりかねないという事が理由だった。

嘗てのムーに存在したオーバーテクノロジーとも呼べる多くが、国立博物館や兵器研究所の大倉庫に保管されている。その技術体系は魔導とは全く異なるが、機械文明の行き着く先であることは理解できた。日夜、科学者がそれを分析しているが、オリジナルに及ぶことはない。ムーの基礎研究分野はグラ・バルガス帝国よりも劣っている。加えて、同程度の文明との戦争経験がないことも一因だった。

ムーは近隣の魔導文明との戦争に備えた軍備であるため、対機械文明との戦いへの準備が劣っている。そのため兵器開発思想も異なっている。

「これは……装甲車？」

「いや、榴弾砲を搭載している……強いて言うなれば……戦車？」

チャリオット

「なんか水槽タンクみたいだな」

写真に写っていたのは、グラ・バルガス帝国陸軍の戦車だった。その装甲は強固であり、レイフォルの攻撃は全く受け付けなかったと聞く。もし、第二次世界大戦を良く知ってる人が居れば、大日本帝国陸軍の九七式中戦車に酷似しているが、よく見てみれば、二回りほど大きく、その装甲は傾斜装甲、厚さ40mm。主砲75mmを搭載する。単純に見ればM4シャーマン中戦車にも見えるはずだ。

そして帝国兵の装備もよく見れば、ボルトアクション式小銃ではなく、セミオート小銃や短機関銃、30口径の汎用機関銃など歩兵装備が充実していることがわかる。

そして、グラ・バルガス帝国の最新鋭艦『グレードアトラスター』の装備に目を向ける。

「なんだこの主砲の大きさ……」

「まるで城だな。あんなのが浮いてるなんて」

ムーの戦艦「ラ・カサミ」の形状は大日本帝国海軍戦艦「三笠」と酷似する。グレードアトラスターと比べれば、およそ30年近くの開きがあることは窺い知れよう。ムーは機械文明と言われるが、近年になって魔導レーダーなどを応用した、レーダー索敵の実用を始めて行い始めたばかりである。

単純に火力で押し負けることは明らかであり、砲の命中精度はレーダーによる運用を最悪想定しても、勝ち目はない。

ふと、技官や大学の研究者、その他の研究機関との話も終わり、他の課の人間が忘れていった写真をふと目にする。そこにはロデニウス大陸を調査する課の持ってきた資料であったが、ロウリアに駐屯するジオン公国占領軍の行進や兵器の写真である。

ロウリアなどロデニウス大陸は文明圏外国家して見なされているため、大した重要度ではない。だが、警備体制が厳重だったのか、少しピンボケした写真であった。

「うーん・・・全く解らん」

彼が見たのはオタワ級汎用巡洋艦だった。他にも建造中のイオージマ級強襲揚陸艦などの艦艇。マイラスはジオンが大規模な艦艇建造を行い、海洋進出を狙っていると考える。しかし、次の写真で見るのは、ガルダ級成層圏往還機。その大きさは両翼の端から端までの大きさを考えると、非常に大きいものであると確認できる。寸法が狂いすぎており、飛行機の隣にある人影は豆粒の人とその人型はどちらが人間の寸法だとしても、どちらもおかしい大きさである。

「何だこれ・・・おい、リア！なんだこれ。ロウリアの造船所とんでもないことになっているぞ」

会議室に戻ってきていたロデニウス担当のリアは「ごめんね」と言っマイラスから書類を受けとる。

もう一人の技術士官リアはマイラスの一個上の階級、技術中尉の階

級である。容姿は金髪の髪を後ろで束ね、すらりとしたスタイルの良さは軍情報局随一と言つてもいい。言い寄ってくる男は大勢いるが、彼女の頭脳明晰な所や歯に衣着せぬ物腰から「高嶺の花」扱いされることも少なくない。だが、マイラスから見れば、外側は優秀でいいが、中身はポンコツだという評価である。

「ああ、私もそれ見てフェイクじゃないかと思つてたわ」

彼女曰く、ロウリア王国の製鉄技術や造船技術はそこまで発達しておらず、この前まで木造船が主流となつていた。しかし、この数か月の間に金属製の装甲を持つ船舶が着工しており、既に訓練航行の段階らしい。

「だが、この航空機と人影はどうみても寸法が……」

「後ろの写真見てみて」

彼女に促され、次の写真をみる。其処には、何らかの格納庫らしき建物と軍属らしき人影とそれらの人々よりも大きい鋼鉄の巨人が鎮座していた。その大きさはマイラスの概算で17m近い。もしかしたら、もつと大きいかもしれない。

「つて、ことはあの大型航空機はそれ以上でかいという事なのか!」

「そうらしいわよ。このまえのジオン公国のレコード聞いたでしょ?」

「ああ、でもあれは星戦争の予告だったんじゃないかと思うぐらいだぞ」

マイラスは以前、仕事関係でリアからレコードを貰った。それにはジオン公国の宣伝放送と共に音楽やニュース、ジオン国内の話と地球連邦軍との戦いやロウリアへの経済状況など、様々な情報が放送されていたらしい。それを聞いていたマイラスは偽ニュースか、それこそ近年話題の『星戦争』と呼ばれるSF小説の映画の広告ではと疑っていた。

「この前、外務省がジオン公国と接触したそうよ。私も外交使節と共に同行することになったわ。あなたも推薦しておいた」

「待て待て、俺は第4文明の分析チームだぞ。」

「グラ・バルガス帝国の動向は機械文明だからそこまで人員を割かなくていいの。それにこれは局長命令でもあるしね」

リアは口添えと言っても、既にマイラスの外交使節と共にジオンと接触するのは決まっていたらしく、あとから聞けば推薦しなくても抜擢されていたという。リアは魔導文明に対して否定的であったが、逆にマイラスは魔導文明を肯定しつつ、機械文明へどう発展させるか分析や研究を行っていた。

ムーの科学技術は頭打ちになっており、外から情報を収集し、新しい糸口を見つけないければならない。

マイラスは次の日、軍情報局から辞令を受け取り、外交使節と共にジオン公国と接触することになった。

第十八話 設定資料 (1)

Z E O N I C I N D U S T R I E S U N I F I D O P E R
A T I N G S Y S T E M
C O P Y R I G H T 0 0 9 4 | 0 0 9 6 Z E O N I C I N
D U S T R I E S
| S e r v e r 4 8 |

ズムシテイ公立図書館公共データベースによるこそ
ここでは様々な情報をご覧いただけます。

検索

こちらから検索してデータベースにアクセスしてください。

∨・MS-06Mザクマリン

【諸元】

ザク・マリンタイプ

Z A K U M a r i n e T y p e

型式番号 ・ MS-06M

所属 ・ ジオン公国軍

製造 ・ ジオニックス社

生産形態 ・ 少量産機

全高 ・ 18.2 m

頭頂高 ・ 17.5 m

本体重量 ・ 43.3 t

全備重量 ・ 60.8 t

出力 ・ 951 kW

推力 ・ 66,000 kg (ハイドロジェット)

センサー

有効半径 ・ 3,200 m

最高速度 ・ 45 kt (水中)

武装 ・ 60 mm機関砲×2

M6—G型4連装240mmサブロックガン

ブラウニーM8型4連装180mmロケットポッド×2

ザクマシンガン

【詳細】

本機は海上戦闘及び潜水作戦行動を前提として開発された試験機としてMS—06シリーズを改造した。元より宇宙空間を想定して設計されたザクであるため、低深度の海中であれば、水の抵抗を受けて機動力が損なわれるが、海岸から陸上への奇襲攻撃や海中下での奇襲攻撃を考えて設計された。

試作一号機にMS—05の機体を使用し、二号機にMS—06C後にF型を使用した。F型の工場ラインを流用して、其処から耐海水装甲を付与し、水圧に耐えられるような加工を施した。しかし、MIP社製の水中特化型のMSと比べても攻撃力や機動性、潜水能力が劣っているのは明白であり、U・C・0089の9月時点で開発は中止。少数生産機は湾港内の水中工事や陸戦戦闘能力が幾らか水陸両用より分があつた。

水陸両用MSに搭載されるジェネレータのオーバーヒートを海水により低下させる水陸両用MSは陸上での作戦時間は本機と比べて短い。そのため、キシリア麾下のシーマ・ガラハウ中佐指揮のジオン海兵隊では本機が少数採用され、連邦側のMS戦略思想に則ってシールド防御も考えられた装備が考案されている。

∨・MS—06MZマリンザク

【諸元】

マリンザク (MZ型)

Marine Zaku

型式番号 ・ MS—06MZ

頭頂高 ・ 17.5m

本体重量 ・ 56.2t

全備重量 ・ 74.5t

出力 ・ 976kW

推力 ・ 24, 500 kg×3 (背部)

3, 000 kg×2 (脚部後側)

(総推力) 79, 500 kg

ハイドロジェットに換装可能

センサー

有効半径 ・ 3, 200 m

武装 ・ ヒート・ホーク

MM P―80マシンガン

M8―G型240mmサブロックライフル

ハンドグレネード×3

シユツルム・ファウスト

【詳細】

マ・クベ中将提言の元、計器や装備の統一化を目指した「統合整備計画」を元にFZ型を元に再設計された本機は「海兵隊仕様 (marine)」として地上戦と上陸戦を想定して設計されている。

MS―06MはF型に大規模チューンを加えたが、MZは基本設計を見直し、ズゴックやゴッグでも同じような深度でも活動できるように再設計された。MIP社や各水陸両用MS開発データの交流を経て、開発された本機は対ビームに対する防御塗料を掛けているため、旧型機よりも防御性能が増加。また現地改修が容易なように、装甲面が平らになっており、追加装甲が可能となる。モジュラー式装甲になっており、数世代前のロボットの外観を持つ。

主に海兵隊の現地改修が容易なように設計されており、武装も陸戦武器を収納できるランドセルを使用。これは先の連邦軍MSがランドセルタイプのコンテナを使用していたため、武装の多様化と長期戦闘を考慮に入れた設計である。

ビームライフルを使用する前提のジェネレータは保有していないが、高出力・低燃費ジェネレータを使用。過酷な地上戦を想定して、強固なMS。

技術者や兵士は口をそろえて

「あと10年、長くて20年は現役」

先のMS-06のバリエーション機の中でも不格好ではあるが、一番愛されてきた機体に違いない。以下、MZシリーズはジオン海兵隊の顔になるが、MS-07グフの改修機にMZシリーズの装備が付与された現地改修タイプも存在。MZは全環境適応機として名高い名機である。

首都防衛大隊や親衛隊が好んで使用するFZタイプとは対極をなし、戦いになれた古参兵はMZを使用することが多い。

▽・ガルダ級大型成層圏往還機

【諸元】

ガルダ級大型成層圏往還機

型式番号 ・ MF-89-01

全長 417 m

全幅 324 m

最大積載量 15,800トン

最高速度：1,529.56 km/h（衝撃によって空中分解する可能性大）

推進機関 ミノフスキー核融合炉と熱ジェット／スクラム

ジェットエンジン

武装 ・ 30 mm対空機関砲×10

VLSセル×60

対空燃料帰化弾ミサイル

対MSミサイル

80 mm機関砲

対ミサイル防衛火器

MS搭載最大 9機及びド・ダイ18機搭載可能

【詳細】

既にHLVと言った成層圏往還機がジオンにて生産されていたが、

コストパフォーマンスは低く、地球の大気圏で移動する能力は無いに等しい。そのため、突撃機動軍は宇宙攻撃軍と共同で成層圏を交互に往還し、効果的な物資輸送を考案した。本来は大規模空輸が可能なものとして設計されようとしていたが、ガルマ・ザビ大佐やキシリア・ザビ少将の意見から、宇宙と大気圏の間で安定した物資供給が出来るようなものへ生まれ変わった。

また、キシリア・ザビ少将と企業連合の提案によって、民間機体へと生まれ変わらせる計画もあり、払い下げから、民間運輸会社にも導入することを明らかにしている。U・C・0099までにロウリアへ三番機『アウドムラ』が払い下げの予定であり、ロウリア自治領から独立国へのプレゼントとして考えられている。？

参照：3番機「アウドムラ」

設計思想を考えると、退役して民間航空へ払い下げられたガウ攻撃空母は兄弟と言える。ムーや神聖ミリシアル帝国（現在はミリシアル共和国）などからは過剰装備であり、侵略戦争を行うのではと、マスコミ各位から騒がれたが、現在に至るまで、ガルダ級が戦闘行動を行った記録はない。

▽・タワラ級巡洋艦『タワラ』

【諸元】

艦種	・汎用巡洋艦
艦名	・軍司令より任命（委任された指揮官も可）
建造期間	・U・C・0079 ～ U・C・0090
就役期間	・U・C・0079 ～ 就役中
前級	・無し
次級	・未定
排水量	・軽荷：7000 ～ 8000 t
満載	：10000 ～ 10200 t
全長	・200 m
全幅	・17 m

吃水 ・ 8. 26 m (最大 10. 53 m)

MIP 製 ガスタービンエンジン (20, 000 hp) ・ 4 基

可変ピッチ・プロペラ ・ 4 軸

速力 ・ 最大 40 ノット以上

航続距離 ・ 10, 000 海里 (20 kt 巡航時)

乗員 ・ 358 名

150 mm 連想砲 1 基

25 mm 単装機銃 ・ 2 基

20 mm CIWS ・ 2 基

マズラ MG742 連装機銃 ・ 4 基

〈以下・モジュール兵装〉

VLS ミサイル連装発射機 20 × 120 基

・ SM-01 “シーアンカー” 対空ミサイル

・ RUR-79 “アスロック” 対潜ミサイル

・ RGM/UGM-344 “トマホーク” 巡航ミサイル

・ RGM-79 “ハープーン” 対艦ミサイル

弾庫容量： 50 発

・ MS 駐機スペース × 2

(一機のみであると、船体が傾く恐れがあるため二機格納しなければならぬ)

・ VTOL 航空機格納庫

(回転翼機)

【詳細】

キシリア・ザビ少将指揮下の突撃機動軍は予測される地球降下作戦に対して、軌道上からの質量弾攻撃による海上艦艇の攻撃とミノフスキークラフト使用による大気圏内でも航行可能なザンジバル級やガウ攻撃空母による上空からの攻撃を模索。しかし、地球消失によってその体制は白紙になった。

セツルメント国家連合の設立によって、ジオン軍需業界に参入した旧連邦系企業は海上艦艇の有効性を突撃機動軍へ訴えた。設計データやノウハウを持つ連邦系企業の申し入れは突撃機動軍にとって非

常に助かり、即座にロウリア駐屯軍へ配備が決まった。

造船業はコロニー向けの船舶を生産するヤシマ工業なども加わり、セツルメント国家連合との節慈拡大制限条約（後述）によって大規模破壊兵器及び侵略・虐殺を行わない趣旨の条文から配備された。

タワラ級巡洋艦はムサイ級宙間航行巡洋艦などの設計者や技官を結集し、連邦系企業の技術者合同の研究チームが設立。双方の設計思想の違いや元々、陣営が違う事も含め何度も暗礁に乗り上げ、乱闘騒ぎにも発展している。（TV番組「慈恩の夜明け 第32話 タワラ級誕生秘話」を参照）

タワラ級は『汎用巡洋艦』として、基本的な防護能力及び攻撃能力を付与。誘導兵器や航空機、MS駐機スペースなどは作戦内容に合わせて簡単に取り外すことが可能となっている。これによって、作戦の幅が広がり、宇宙艦艇の建設のノウハウやコロニー建設のノウハウが生かされた。正にこれまでのコロニー工業の模範ともいえるだろう。

UC00799月において、一番艦タワラ級は初代艦長アダムス大佐の教導艦隊として防空巡洋艦としてフェン大軍祭事件にてパーパルティア航空部隊を全て倒している。しかし、戦闘前に巡回していたガハラ神国の風竜が緊急接近。同艦隊のアカギに駐機されたMSに呐喊した。味方であったために友軍機のニアミスとして処理された。

だが、この事件を発端に『ジオン海兵の練度不足』が露呈。旧兵器として侮られていた他国海軍水兵のノウハウは吸収しなければならぬとギレン総帥は突撃機動軍に指示を下す。これにより、フェン王国の大軍祭は国民への国威発揚のパレードと国民及びマスコミ向け劇場型演習とフェン沖で行うフェン合同演習（Fen Sea of the Military Exercise）として、科学技術云々だけでなく、兵の練度向上のためにフェン主催の合同演習はUC0090までに列強国すべてが参加するに至る。

▽・アルプス級汎用空母『アカギ』

【諸元】

基準排水量・15,000 t
 満載排水量・18,850 t
 全長・250.2 m
 最大幅・40.4 m
 水線幅・40 m
 飛行甲板・200 m
 吃水・7.0 m
 機関・COGAG方式
 主機・LM2500ガスタービンエンジン 4基
 推進・スクリュプロペラ 4軸
 出力・82,000 hp/61,000 kW
 最大速力・40ノット
 乗員・操艦要員300人
 航空要員200人(MS要員100人)
 司令部要員30人
 兵装・240mm連装砲3基
 ・近接防衛火器 3基
 ・VLS 20基
 内 対空ミサイル
 搭載機・

機

3機

・ドップ 大気圏内戦闘機 最大12機
 ・ドダイYS MSサブフライトシステム 最大4
 ・ファットアングル 多目的VTOL双翼機 最大
 ・ルッゲン 大気圏内偵察機
 ・MS 3機

【詳細】

地球連邦軍の兵器は殆ど西側諸国、旧アメリカ合衆国主体の兵器で占められた。しかし、ソ連などの東側諸国の軍事複合体なども影響があり、アルプス級空母などの設計思想は東側諸国の系譜を持つ。

地球消失後、セツルメント国家連合に属するセツルメント企業連合は節慈拡大制限条約の元、技術提供を開始。MS搭載能力と航空部隊を載せたそれらは連邦設立当初に起きていた反連邦紛争の際、シーレーン防衛のためベストセラーとなった対潜装備を充実させた対潜空母「アルプス級」をベースにジオン系の兵器を装備させ、MS搭載用に大型化。対潜能力を前時代のように巡洋艦や駆逐艦、艦載哨戒機が担うようになる。

当初の案として、核動力とする案やミノフスキークラフトを装備させ、浮遊空母にすべきとの意見もあったが、石油資源がクイラ王国に大量にあり、現在のヤシマ石油が地球汚染を理由にこれに反対。加えて、セツルメントの構成コロニー議員が空中空母運用を非難。これはとある米系コミックの影響かと騒がれたが、『ジオンがヒュドラのような世界征服を望むのであれば断固阻止するが、今回物申すのはあの惑星との外交問題や威圧的存在として空母が問題視されるから』とルウムのイヌカイ元首相は語っている。

▽・イオージマ級強襲揚陸艦『イオージマ』

【諸元】

排水量	・	基準：30, 233t
満載：		43, 650—45, 335t
全長	・	300.3m
全幅		50.7m
吃水	・	10.0m
機関	・	ZLHD—28
蒸気タービン方式、2軸推進		(70, 000hp； 52MW)
ボイラー+タービン×2組		
CODLOG方式、2軸推進		
高速航行時	LM2500	ガスタービンエンジン×2基(高
速航行時：70, 000hp)		

低速航行時：ディーゼル発電機×6基、

速力 ・最大32ノット

乗員 ・士官：104名

曹士：1004名

海兵隊員：2000名

兵装 ・Mk. 38 25mm単装機銃 ・3基

C I W S ・3基

マズラ近接火器 ・4―

8連装ミサイル発射機

艦載機 ・

・ L C A Cエアクッション揚陸艇 ・6隻

・ ドダイYS MSサブフライトシステム 最大8機

・ ファットアングル 多目的VTOL双翼機 最大6機

・ M S 12機

【詳細】

海岸から上陸戦を行うために建造。連邦軍の使用するツシマ級強襲揚陸艦をモデルに建造された本艦はMS搭載能力を上げ、一時的な修理が可能なものである。最大4個小隊分のMSを輸送可能であり、欠点として全長が長いために扱いしづらい点であろう。

従来であれば、300m以下、200m程の艦艇であったが、4個MS小隊を輸送し、ファットアングルなどの空挺降下やドダイによる緊急展開も考慮に居れている。海上艦隊ではなく、ザンジバル級巡洋艦などを多く配備すべきという意見もあったものの、総帥府の外交省はジオン公国と惑星内のテクノロジー格差や文化の違いから過剰な兵器を知らしめ、相手を委縮させかねない。

また、威圧的外交政策は19世紀後半に東アジアの日本や中国の攘夷があつたことを理由に、ジオンなどの科学技術や文化が排されてしまふのではないかと総帥府は危惧。しかし、フェン軍祭事件やパーパルティア皇国の敵対行為に関して、これらの方針を転換。ガルマ・ザビ大佐麾下の即応対応艦隊としてザンジバル級巡洋艦を配備。これらを推し進めたことによつて、イオージマ級強襲揚陸艦は3番艦まで

しか建造されなかった。

〈・セツルメント国家連合

U・C・0079一月三日にジオン公国は連邦政府に対して宣戦布告文書を発布した。電撃攻撃によって地球連邦軍の7割を喪失させたルウム会戦後、サイド1、2、4、5、6の自治政府首脳の緊急会合が開かれた。元々、地球連邦政府の後継としてセツルメント評議会を結成すべきとして、レビル將軍を中心に構想が練られていたが、そのままジオン指導部がその草案を使用した形となる。

セツルメントの主な役割として、前世紀のEUやNATOの役割に近い。しかし、その中核となるのはジオン公国指導部であり、軍事的優位を持つジオンに対して他のセツルメント構成政府は対抗馬として連邦系企業の持つ製造ノウハウや技術者のみ。

残存連邦軍の活動が下火になる以上、ティターンズへの援助を表沙汰にはできない彼らは、一部の技術者を亡命としてサイド7に送るなどして、援助を続けていた。U・C・0079、9月にアナハイム社が連邦への援助を行っていた事に対して謝罪と賠償を行っていた。

(別ページへ移動⇒アナハイム動乱)

セツルメントの軍事力はなく、各自治政府の保有する防衛艦隊と守備隊。個別自衛のみしか認められていない。防衛能力は限られているため、不足する兵力は宇宙攻撃軍の艦隊によって穴埋めがなされている。

これに関して、各自治政府は自前の軍を保有しようと考えているが、U・C・0084に至るティターンズの壊滅宣言まで保留とされた。

〈・セツルメント憲章

【序文】

われらスペースノイドの人民は、地球連邦政府の度重なる暴虐非道な統治から解放され、二度と基本的人権と人間の尊厳及び価値と男女及び大小各国の同権を失わせないことを誓い、自治独立の意思をあら

ためて確認し、正義と条約その他の国際法の源泉から生ずる義務の尊重とを維持することができると確立し、一層大きな自由の中で社会的進歩と生活水準の向上とを促進すること

並びに、このために、寛容を実行し、且つ、善良な隣人として互いに平和に生活し、

生存権を維持するためにわれらの力を合わせ、共同の利益の場合を除く外は武力を用いないことを原則の受諾と方法の設定によって確保し、加えて敵対的な勢力においては断固たる決意からこれを排除する。

これまで地球連邦の行っていた圧政や他の権利を虐げる真似は行つてはならない。それは、如何なる理由であろうとも、人としての尊厳を失わせてはならない。セツルメント国家連合の一員としてここに決意する。

【第一章 目的】

セツルメント国家連合の目的は、次のとおりである。

第一条

コロニー構成国家の平和及び安全を維持すること。そのために、平和に対する脅威の防止及び除去と侵略行為その他の平和の破壊の鎮圧とのため有効な集団的措置をとること並びに平和を破壊するに至る虞のある国際的の紛争又は事態の調整または解決を平和的手段によつて且つ正義及び国際法の原則に従つて実現すること。

人民の同権及び自決の原則の尊重に基礎をおく諸国間の友好関係を発展させること並びに世界平和を強化するために他の適当な措置をとること。

経済的、社会的、文化的または人道的性質を有する国際問題を解決することについて、並びに人種、性、言語または宗教による差別なくすべての者のために人権及び基本的自由を尊重するように助長奨励することについて、国際協力を達成すること。

これらの共通の目的の達成に当たつて諸国の行動を調和するための中心となること。

構成国家の一員若しくはそれに準ずる資格のある、若しくは人類と同等の知能を持つ者に限っては構成外国家であっても、構成国同様の扱いとし、虐げられた構成国若しくはその友邦国に関してはセツルメント国家全体の危機として対処すること。

第2条

この機構及びその加盟国は、第1条に掲げる目的を達成するに当っては、次の原則に従って行動しなければならない。

この機構は、そのすべての構成国の主権平等の原則に基礎をおいている。すべての構成国は、地位から生ずる権利及び利益を国のすべてに保障するために、この憲章に従って負っている義務を誠実に履行しなければならない。

すべての構成国は、その国際紛争を平和的手段によって国際の平和及び安全並びに正義を危うくしないように解決しなければならない。

すべての構成国は、その国際関係において、武力による威嚇又は武力の行使を、いかなる国の領土保全又は政治的独立に対するものも、また、セツルメントの目的と両立しない他のいかなる方法によるものも慎まなければならない。

すべての構成国は、憲章に従ってとるいかなる行動についてもセツルメントにあらゆる援助を与え、且つ、防止行動又は強制行動の対象となっているいかなる国に対しても援助の供与を慎まなければならない。

▽・府慈相互国土防衛条約

データベース「ジオン外交史」より……ジオン公国外務省発行
国際関係データベース

〔文書名〕 府慈互防衛条約（フェン王国とジオン公国との間の相互防衛条約）

〔場所〕 アマノキ城

〔年月日〕 U・C・0079 9月28日作成，10月3日発効

〔出典〕 ジオン公国外務省主要文書・年表(1), 578—580頁。
主要条約集, 1667—1670頁。

〔全文〕

この条約の締結国は、

すべての国民及びすべての政府とともに平和のうちに生きようとする願望を再確認し、及び第三文明圏外国家と見なされた国とその周囲における平和機構を強化することを希望し、

いかなる潜在的侵略者も、いずれか一方の締約国が孤立しているという錯覚を起すことがないようにするため、外部からの武力攻撃に対して自らを防衛しようとする共同の決意を公然と且つ正式に宣言することを希望し、また、

地域的安全保障の一層包括的且つ有効な制度が発達するまでの間、平和及び安全を維持するための集団的防衛についての両国の努力を強化することを希望して、

次のとおり協定した。

第一条

締約国は、それぞれが関係することのある国際紛争を平和的手段によつて、国際の平和及び安全並びに正義を危うくしないように解決し、並びにそれぞれの国際関係において、武力による威嚇又は武力の行使を、セツルメント国家議会の目的又は締約国に対して負っている義務と両立しないいかなる方法によるものも慎むことを約束する。

第二条

締約国は、いずれか一方の締約国の政治的独立又は安全が外部からの武力攻撃によつて脅かされているといずれか一方の締約国が認めるときはいつでも協議する。締約国は、この条約を実施しその目的を達成するため、単独に及び共同して、自助及び相互援助により、武力攻撃を阻止するための適当な手段を維持し発展させ、並びに協議と合意とによる適当な措置を執るものとする。

第三条

各締約国は、現在それぞれの行政的管理の下にある領域又はいずれか一方の締約国が他方の締約国の行政的管理の下に適法に置かれる

ことになつたものと今後認める領域における、いずれかの締約国に対する海域における武力攻撃が自国の平和及び安全を危うくするものであることを認め、自国の憲法上の手続に従つて共通の危険に対処するように行動することを宣言する。

第四条

ジオン公国ロウリア駐屯軍及び突撃機動軍、相互の合意により定めるところに従つて、フェン王国の領域内及びその附近に配備する権利をフェン王国は許与し、フェン王国は、これを受諾する。

第五条

この条約は、ジオン公国とフェン王国により各自の法の手続に従つて批准されなければならない。この条約は、両国で批准書を交換した時に効力を生ずる。

第六条

この条約は、無期限に効力を有する。いずれに一方の締約国も、他方の締約国に通告を行つてから一年後にこの条約を終了させることができる。

以上の証拠として、下名の全権委員は、この条約に署名した。

ジオン公国

代筆、クルツ・ハウフトマン親衛隊名誉少将 外交団長

フェン王国

剣王 シハン

第十九話 ル・ブリアスの太陽

ファイルアデス大陸の西側。そこはパーパルティアに属さない小国が無数にある地域。文明圏外国家が幾つもある中、その文化は東欧州にも似ている。その中でもアルタラス王国は文明圏外国家の中でも大国に位置する国家であった。

多くの国民を擁し、豊富な鉱物資源を有する。そして、古の魔法帝国の遺跡が多く存在し、様々な海外の研究機関を呼び寄せ、大きな収益を得ていた。経済も好調であり、王都ル・ブリアスの活気は列強の地方都市を凌ぐ。今なお、交通機関は馬車でもあったが、首都の道路には魔導車が多く走っており、明治か大正の日本を思わせるようだ。馬車と自動車混ざっている光景はその国の近代化が着々と進んでいるように見える。その光景を誇らしく思うだろう国王ターラー14世は、苦渋に満ちた表情をしていた。

「これは・・・正気か？」

目を通す外交文書にはとんでもない事が書かれている。パーパルディア皇国からの要請文、毎年皇国から送られてくる要請文であるが、「要請」とは名ばかりであり、事実は命令書である。

「ありえないな・・・。」

ターラー王は頭を抱える。

パーパルディア皇国は前皇帝が崩御した後、現皇帝ルディアスが即位した。皇帝ルディアスは国土の拡大、国力増強を掲げ、各国に領土の献上を迫っていると聞く。しかし、そこは無難な場所であったり、双方に利がある場合が多い。拡大政策によって国民の支持を得て、一方で産業の転換と育成を図ろうという魂胆なのだろう。

だが、産業の急激な発達から第三次産業の肥大化。第一次産業や二次産業を担う属州や近隣諸国への圧力が強くなっていた。すでに属州では強引な搾取体制によって餓死者や暴動に発展。その都度国家監査軍の部隊や統治機構に任命された傭兵部隊が虐殺行為を行い鎮めている状態。一応、文明圏外国家として繁栄するアルタラス王国には直接的行動に出ていないが、どう見ても送られてきた外交文書には文明圏外国家と一戦交えようと考えているのではと思うぐらいの内容である。

その内容は、王国有数の魔石鉱山シルウトラスの譲渡及び、古代遺跡であるシルウトラス古代都市の管理を全て割譲。アルタラス王国王女ルミエスを奴隷としてパーパルディア皇国へ譲渡。農作物などの食糧数十万トンの譲渡。

「出来れば武力を使用したくないものだ」

その最後の一言が余計だった。

横暴の何物でもない外交文書を破いて燃やしたくなるターラ王は、必死に玉座の手摺を握る。既に怒りのあまり、爪が折れて血が滲み出ており、メイドが狼狽える程に憤慨していた。

魔石鉱山シルウトラスはアルタラス王国最大の魔石鉱山であり、国の経済を支える中核であり、世界でも5本の指に入るほどの大鉱山である。そしてその近くにある古の魔法帝国の古代都市の遺跡が存在する。それは各国研究者が侵略してでも欲しいとねだる程であり、近隣のシルウトラスは各国研究者の落す金によって経済が回っている状況である。それを渡せというのは、様々な国家から技術援助や招致している技術者が帰る可能性もあることから、国力は格段に落ちる。

さらに、王女の奴隷化。これはパーパルディア皇国に全く利の無いものであり、明らかにアルタラス王国を怒らせるためだけにある。そもそも、実の娘を奴隷にして売れという暴虐非道な外交文書に対し、それでも文明圏かと叫びたくなる国王だった。

—まさか、侵略戦争を起こす気では？

冗談なのではと思えるほど、国王も馬鹿ではない。近年のパーパルティアの蛮行は目を覆いたくなる。高圧的で非常識な外交官ではあるが、フィルアデス大陸すべての国家が敵対して、嘗ての大陸戦争を再現させようとは思わないはず。補佐官に連絡し、外交文書について王宮に来てもらうよう要請することを決め、王宮警護官や宮長へと連絡する。そして、ある人物に会談の内容を見てもらうことになり、パーパルティアの外交官が来たのはその日の夕刻だった。

「蛮族の分際で呼び出すとは何たる事か。この田舎町に我が皇国の出張所があるからと、我々を呼び出して何様のつもりだ！」

パーパルディア皇国第3外務局アルタラス担当大使ブリガスは椅子に座り、足を組んだまま1国の王を呼びつけた。一応、その席は外交官用の席ではなく、ターラ王の玉座であるのはブリガスも知っていた。明らかに外交的に失礼な振る舞いに王は言葉を失う。

—これほどまでに列強になると、無礼な態度をとるのか……

国力が劣るからと他国の王に対して失礼を行う外交官は世界広しと言えどもパーパルティアだけだろう。ムーや神聖ミリシアル帝国の外交官でさえ、礼儀は弁えている。所有する古代文明の遺跡の調査するために場所を借りたいと、列強外交官が自ら頭を下げてきた。若かりし頃にミリシアル帝国に短期留学し、ムーに息子を留学させたこともあるターラ王は近隣国の振る舞いに改めて辟易していた。

「本題の前に列強と言えども、礼は弁えてもらいましょう。あなたの席はそちらにてご用意しています……そして我が国の宮廷女官は娼婦ではございません。先程警護官から連絡がありました」

礼を逸しているだけでなく、他国の宮廷女官に陵辱しようとしただけでも外交問題に発展する。それは未遂に終わったが、その仕返しに

王族の椅子に座る男に対して、「てめえ、それでも列強か」と怒鳴りたい気持ちを抑えて、冷静な口調で話す。

「悪いか？ 蛮族の女の味見位いいだろう？」

警護官の手がホルスターに伸びかけ、近くの宮廷女官の護身用ナイフが光る。だが、そこまで言われて怒らない人間はいない。流石に身の危険を感じたブリガスはそのまま不遜な態度をし続け「本題に入ってもらおう」と言うさまは流石と言える。

「魔石鉱山シルウトラスは我が国最大の鉱山です。他の条件も飲むわけには参りませんな」

「他に鉱山はあるだろう。それとも何か？ え？ 皇帝ルディアス様の意思に逆らうというのか？」

「皇国とは友好関係を築いてきたではないですか！？ これは流石に常識外れもいいところだ！」

「我が皇国の成長、敷いてはフィリアデス大陸の栄光のために貴国に助力を要請しているに過ぎん！」

「先の通商条約でも貴国には関税を抑えております。これでも足りぬと？」

「足りぬとも！ 我が皇国が貴国を属領にしないだけあり難いと思え」

暖簾に腕押し、まるで話が通じない。パーパルティアの産業の偏りは属州に波及し、近隣諸国へも影響が及んでいる。既に自前の軍事力を背景に通商条約を結ばさせ、アルタラス王国の鉱物資源や農作物を格安で購入していた。更なる譲歩はこちらに利があるものでなければ納得はしない。

「先のお外交文書に関して我が国のメリットは？」

「貴国は我が国の近隣国であろう？それで十分ではないか？」

—コイツとは世界が違う

ターラ王は話を変えることにした。

「では、我が娘、王女の事ですが、何故このような事を？冗談は外交文書に書かないのが通例でしょう。今後は困ります」

「ああ、あれか。王女ルミエスはなかなかの上玉だろう？俺が味見をするためだ」

「は？」

再びターラ王は言葉を失う。一体この男は何を言っているのか、『目が点になる』というのはこういう事を言うのだろうか。ターラ王はあまりにも信じられない台詞に固まった。

「俺が味を見てやろうというのだ。まあ飽きたら、淫所に売り払うがな」

「……それも、ルディアス様の御意思なのですか？」

アルタラス王国とパーパルティアの歴史は長い。それこそ、先々帝の起こした大陸統一戦争では敵同士であったが、宥和政策と優れた魔導技術の輸出と鉱山資源の輸出から経済的には友好関係を築いていた。先代とはそれこそ付き合いが長く、現皇帝のルディアスとの関係は悪くない。鉱物資源の輸出に関しては便宜を図ってもらえるよう確約を得ていたのだから。

目の前の外交官ブリガスは蓄えた脂肪を震わせ、憤慨する。

「ああ！その反抗的な態度は一体!?皇国の大使である俺の意思はルディアス様の御意思であろう！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「んだ？言ってみろよ愚王！今なら俺の足を舐めれば許してやろう！」

ターラ王はぼそぼそと呟くが、ブリガスの耳には理解できない。そもそも、ブリガスは第三外務局の左遷された官僚の一人。第三外務局は属領や小国への搾取を任とする。そこまでの仕事ではなく、重要視されていない。ブリガスは能力不足と人格破綻者も相まって来た一人。だが、彼に与えられた外交官の任は彼の自尊心を肥大化させ、汚職塗れの汚い豚へとなり下がった。

「ほら、早くしろ！それともめえの娘の穴を・・・・・・・・・・・・・・・・」

ブリガスが続けようと口を開くものの、眩い光と破裂音に言葉を詰まらせる。そこにあつたのは硝煙と自身の弾けた足の指であつた。

「あああああ！クソ！痛っいいいい！！」

突然の激痛と指の消失したことで彼の頭は混乱する。たかが野蛮な王へ脅しつつ、譲歩を持ち込もうと考えていたが、あまりの出来事に頭がついていかず、ブリガスは姿勢をくずして椅子から転げ落ちる。

そして、視線を向けると、金属製の何かを構えるターラ王の姿。その金属製の何かとは、ジオン製の複製されたワルサー社P-38が握られ、発砲したため硝煙が立ち上っていた。

「お前、お前！何をやったか……」

「儂には汚い肥え太った豚が喚き散らしているようにしか見えませんな」

涙と鼻水を垂れ流す彼の顔は正に家畜と言った有様であり、ターラ

王は微笑みながら、その拳銃を眺めている。

「さすがはジオン公国の拳銃だ。まだそこまで撃っていないが、狙った場所にしっかりと当たる。パーパルティアのプリントブックより扱いやすいですな」

「皇国にたてつくつもりか!」

「……正直申しますと、もう少し友好的態度であれば妥協案をすり合わせて考えました。ですが、貴方はどうしようもない薄汚れた豚野郎だ。不遜な態度とあなたの家畜のような酷い匂いはあまりにも鼻につく。我が王宮に入らないでいただきたい。」

「皇国は貴様らを滅ぼす!今に見ておれ!お前の妻と子を泣き喚いても、陵辱の……」

「黙れ」

夫としてのターラ王、父親としての彼が引き金に指をかける。その銃口の先にあるブリガスは汚物を垂れ流すという恥ずかしい行動をしたが、ターラ王はそのまま発砲し、もう片方の爪先を吹き飛ばす。「つううう!!!」

声にもならない声が響き渡り、ターラ王は近くの警護官に「領事館に捨ててこい」と命令してその場を後にする。目指すのは隣の間。今だにブリガスの叫び声と「覚えていろ!」という負け犬の遠吠えにも似た叫び声が反響する。そんなピリピリと張りつめた空気を振り払いながら、一緒に歩む補佐官に命じた。

「あの家畜外交官をパーパルディア皇国へ送り返せ。国交断絶の趣旨の書類を外務卿に命令。それと、皇国の資産を全て凍結。皇国民は全て国外追放にする」

更に王国軍の連絡担当官にも命令を送る。

「現時点を持ってパーパルティアを仮想敵国とする。全部隊に厳戒態勢に移行。速やかに国境封鎖を行え。」

「はっ!」

ターラ王は待たせている客人の元へと歩いていき、扉を開く。其処は言わば王族のみが入ることを許される間であるが、パーパルティアの礼儀を欠いた者を入れることはなく、もつとも信頼の厚い外交官のみ入室を許される。外部の諜報機関からシャットアウトされ、諜報用魔導道具も妨害され、電波妨害も可能なそこは王宮の機密性の高いエリアである。

誰が居るのかすら、外部から見ることにはできない。声だけは微かに聞き取ることが出来た。

「お待たせして申し訳ない。パーパルティアとは国交断絶を行いました」

「……」

「いえ、これも予定された行動です。既にマンダの機関が破壊工作を行っています。貴国もその企てに賛同していただき、非常に感謝いたします」

「……」

「シルウトラス鉾山の近くにある古代遺跡でしょう。あの場所ならば古代のテクノロジーが秘められた場所がありますので。ええ、こちらは管理権のみ保有してますから、あなた方の研究資料を我が国の研究機関にも共有と言う形で……いやそれはいいです。中々その色で菓子とは凄いですね」

「……」

「……」

「既にムーの兵器類やミリシアル製兵器も導入済みです。しかし、戦時下には何らかの混乱が考えられます。我が国としては……ええ、それは総帥閣下によりしくお伝えください大佐殿」



この惑星の国々を特徴づけるとすれば何だろうか。神聖ミリシアル帝国は最先端技術を持つ大国。そのすべてのテクノロジーは未知数のものであり、あまりにも次元の違う国家であることから、その存在感は凄まじい。

次にムーの機械文明は、言わば効率性を高めた国家であり、ミリシアルの次に大国である。その機械技術は魔導文明につく精巧さであり、魔導文明への対策も怠らない。その国力はミリシアルに次ぎ、仮に戦争状態になっても膠着状態にまで持ち込むことが可能である。

そして次のパーパルティアは何かと考える。それは温暖な環境を土台とした、優雅な文明だろう。魔導文明や国力はミリシアルに次ぎ、人口はムーよりも多く、経済規模はムーよりも多い。現時点でムーよりも上でないのはテクノロジーへの到達具合がムーを超えていないからだろう。

その事から文明圏国家の自尊心が肥大化しているのではないだろうか。劣等感から来るプライドは歪な官僚制と経済体制から肥大化。文化面にも如実に反映され、皇都エストシラントの主要施設の一つ一つが芸術品になっていた。

皇都の行政区。皇宮はパーパルティアの威光を示すために、パーパルティアの著名な美術家を雇い、柱の一本一本まで繊細な彫刻で作られており、その光景は嘗てのギリシャ文明やローマ帝国の様式にも似ている。所々、金銀に彩られ、魔導鉱石による照明によって明るく照

らされている。

宮殿の内装はまるで、この世の富を集めたかのような。この皇宮を訪れた各国の大使や国王は思うだろう。

ここは神の国かと。あたかもそれらはフィルアデス大陸の神の国を模したかのようなもので訪問した客はそれに圧倒する。美を追求した庭やそれを維持する能力はパーパルティアが大国であるからこそ。

何と凄まじい規模の都市かと。何と国民が豊かなのだろうか。何と美しい町なのだろうか。第三文明で最も優れた民族と優れた貴族が統治し、最も優れた皇帝が続べる。

その謁見する間の中でも官僚との会議に使われる、フェンの『密会の間』に近い机の配置とその閣僚会議を見下ろすように設置された玉座からは皇帝ルディアスが座り、その皇帝に跪いている男が一人いた。

「おもてをあげよ」

第3外務局局长カイオスは、冷汗をかきながら顔をあげる。嘗て皇国大陸軍の將軍達の末席にいた彼。叩き上げの大将として兵や指揮官の支持は今でも熱い。カイオスはまるで某ハリウッド映画に出てくるような將軍である。あたかも、都落ちして奴隷となり、最終的に怨敵と一騎打ちで倒すグラディエーターのようだ。そんな彼が強張った表情と冷や汗をかいていることを考えると、難題が持ち上がったのだと推測できる。そしてその彼の跪く先にはかなり若い皇帝が座っていた。

その先には27歳といった若さからは想像も出来ないほどの威厳を保つ、若き皇帝ルディアスの姿があった。その容貌は美青年と言っても差し支えない程。歩けば花が咲き、息をすればマイナスイオンは発生させるのではと考える程だ。

だが、そんな彼の威厳は長年君臨していた先帝と同じくらいであり、更にその判断力と政治家としての能力は桁外れと言っている。皇帝ルディアスは玉座から立ち上がると、拳を振るわせながら口を開い

た。

「フェン王国への懲罰の監査軍の派遣、予への報告はなぜここまで遅れたのだ!？」

「真偽が分らないような状況と部下の監督不行き届きで……」

「たわけ!!」

皇帝の叱咤が飛び、カイオスは委縮する。

「予へ派遣の報告を行わなかった事はどうでも良い。それは予が認められた第3外務局の権限だからだ。一々蛮国への侵攻報告など受けてしまえば時間の無駄。お前には最大限の権限を与え、国家監査軍の指揮権を与えていたのだ。なぜ、東洋艦隊が壊滅したかだ!」

カイオスの顔から滝のように汗が吹き出る。現政権下で失敗した軍人の首を刎ねることはしない。しかし、局長解任もあり得るこの事態。仕事こそわが命と言えるカイオスが解任を皇帝から命ぜられれば、自刃も選択肢に入れていた彼は齒を食いしばって皇帝の問いに答えるべく顔を上げ続けた。

「何処にやられた?まさかフェン王国か?」

「目下全力で対象国の割り出しを行っております。情報が錯綜しており、正確な情報が得られておりませぬ。ただ、ムーの軍事援助と思しき情報とロデニウス大陸のジオン公国が矢面に立ったとの情報もございます」

「またもやあのジオンか。我が皇国に滅ぼしてほしいようだな……」

皇帝の顔が怒に満ちる。

「野蛮人国家が皇国に牙を剥くという事はどういう事か教えてやれ！
国家監査軍ではなく、皇国海軍の主力を向かわせ、文明とは何なのか
分らせてやろう。」

「ははっ!!」

カイオスは、さらに深く頭を下げる。

「我が国の経済は歪になっている。小国に舐められれば、属領や保護
国、搾取する彼奴等に舐められ、一時的な経済後退や国家を傾きかね
ん。フエン王国を草も生えぬ焦土にしてもかまわん。そのジオン公
国とやらも属領に入れるべく、再度情報を集めよ」

「はっ………皇帝陛下、もう一つ報告したいことがございます」

「何だ!!!」

再び悪い報告かと、あまり良い顔をしない皇帝であったが、カイオ
スの発言と書類に目を通す。

そこには、アルタラス王国の報告書。第三外務局の外交官に現国王
ターラが発砲し、外交官の両爪先を吹き飛ばし、彼と共に外交文書と
条約文書の返還。更に資産の没収、皇国民の国外追放が記されてい
た。そして外交官がターラに渡した外交文書の写しにルディアスは
苦笑を漏らす。

「カイオスよ、この者は如何した？」

「職権濫用と数件の汚職容疑で病院内に監禁中です。現在、法務局に
問い合わせています」

「ふむ………この者は明日中に処刑し、第三外務局各員に知らせろ。今
後、このようなことがあれば厳罰に処すとな」

皇帝ルディアスの顔に笑みが零れる。そもそも、文明圏外国家にま
ともな外交官は置いたりしない。何らかの外交問題に発展し、泥を塗
られたとして侵略することもできる。

「アルタラス王国は、監査軍ではなく、本国の軍で叩き潰す。皇軍の準備は出来ているな?」

其処には皇国大陸軍の他、皇都防衛艦隊司令などが隣席しており、既に皇都近郊にある軍港を拠点とする皇国海軍総督が起立する。

「皇帝の命があれば、いつでも出撃できる準備は整っております。陛下の御言葉一つですぐにでも出陣して一か月足らずで、蛮族を平定しましょう。すべての魔石鉱山を皇帝陛下に献上し、古代都市の魔導技術をお持ちいたします」

「そうか・・・では任せた。アルタラス王国人の取り扱いについては、好きにいたせ」

「ははっ!!!」

列強パールディア皇国はアルタラス王国に対し、宣戦布告。

皇国海軍所属の精鋭第二艦隊『パールネウス』が出港。竜母4隻、戦艦4隻他揚陸艦や随伴艦含め、100隻の艦隊がアルタラス王国に向けて出発した。

一方、アルタラス王国の主要鉱山の一つであり、古の魔法帝国の都市遺跡があるシルウトラスの入口に立つ人物がいた。

「おお！これは素晴らしい！異世界！うむ、やはりエルフやドアーフの女性と愛を語り合いた……」

「ウォルター！仕事が先だ！あとで好物のビスケット買うから！」

其処にいるのはジオン技術者の白い軍服のウォルター・ビショップ

エルフや上流階級の面々が集まり、町は二分化されているに等しい。シルウトラス市庁舎の迎賓館では、煌びやかな音楽が響き、多くの来賓がダンスや談笑を楽しんでいた。

「いやはや、これがジオンで作られたお菓子ですか！非常に美味ですな」

「テイラミスですか。この何とも言えない甘みがいい！」

「閣下の配下の方々も中々の面構えですな」

その人ばかりの人々はその中心にいる人物へ称賛の雨を降らせている。パーティーはジオン公国が来たことを祝うものだったが、パーティー会場のいくつかはジオンの銘菓から取り寄せた一流パテシエエのものがあり、テイラミスなどは元々日本のシェフが作ったもの。それを知っていたガルマ・ザビ大佐は愛想よく受け答えしていた。

ザビ家の末子として様々な業界の重鎮との会食を幾度となくしてきたため、自然体で受け答えをしている。既にジオンと言う名は世界中に知れ渡っており、列強も凌ぐのではと声があるほどだ。既に超えている部分もある他、既に情報分析に重きをおく国の情報アナリストはジオンに対して正確な情報を振り分け、国家指導部へ情報を送っている。それを確認した各国外交官はジオンへのパイプ作りとして、公王の息子であるガルマへと擦り寄っていたのだ。

それを横目で見ていたシャア・アズナブル少佐は果実酒を傾け、カウンター席で飲んでいた。

「人気があるようだな」

「そうですねー。あちらも負けてはいませんが……」

副官のドレン中尉は反対側で人垣を作る人物を見ていた。其処は先のガルマの元に来る外交官達とは違い、研究職にある魔導士結社に所属する研究者たち。格好は上等な礼服であるが、雰囲気から研究職だと窺い知れる。連日の研究で目が血走っており、幽鬼のような彼ら。そんな彼らは新たな知識を求めようとある人物の話を聞いていた。

「いやはや、エルフの生態は実に興味深い。長寿不老であり、それは遺伝子情報をみれば明らかだ。遺伝子配列を見ても、その素晴らしさがわかるだろう。エルフの遺伝子は人間とほとんど変わらない。だが、遺伝子の劣化、言わば活版印刷の版が使い物にならなくなるまでのペースは実に長い。人間の細胞は数年おきに代わっている。4・5年経てば数年前とは異なる体になる。しかし、なんども複製を繰り返した関係で我々人間は老化していき、やがては死ぬ。だが、エルフの細胞の入れ替わりは全く違う。それこそ数十年単位で変わるから、その容姿に変化がないのだ。人間が行き着く先が彼らなのかもしれないが、その遺伝子の劣化が遅いのと比べ、彼らの生殖能力は人と比べると低い」

ビショップ博士の講義を聞きこむ研究者の目は猛獣に近い。自分よりも知識や学識をもつ彼は研究者にとって神に等しい。彼の紡ぐ言葉は彼らの耳に入り、かみ砕かれてそれまでの知識から一新される。

それでも、それを否定する人物も存在するが、元大学教授の彼はその内容についてわかりやすく解説し、疑問や疑念を投げかける研究者は次第にビショップ博士を信奉するようになる。

「さて、エルフの彼女を見てもらおう。一番特筆すべきはこの耳だ」
ボランティエ
人身御供として研究者の傍付きのメイドが博士の傍に座り、メイドの耳が露わになる。人にじつと見られたメイドの耳は真つ赤になっており、真つ白い肌のエルフメイドは顔も真つ赤になっている。

「人や動物の耳は非常に敏感だ。聴覚を司る部分は殆どの場合敏感になっている。外敵の接近から身を守る術の一つだが、既に身を守る術を持つ生命体は意外にも聴覚は鈍い。大抵、耳朶の大きい生物はかなり敏感だ。ほれ」

「ひゃん！」

「ある動物は耳を甲殻類の触角のように扱うのも多い。君、性行為の

時は耳を良く愛撫されたりするのかね？」

「え、せせ、こうい?!……私まだ……ない……」

「……失礼したお嬢さん、多くの生物は外敵から身を守るため、耳に関しては触らせてもらえないことが多いが、一部の社会的生物……つまり人類と言った生物は相手へ愛情を与えるために相互に触る場合……」

「あれってセクハラですよね」

「……」

少女らしきメイドに何聞いてんだあのおっさんは……。と妻子の居るドレンは眉間に皺を寄せていたが、ロリコンなのかと言っていたドレンを横に一瞬褐色の少女を思い浮かべる。もし、ドレンに知られれば陰口でロリコン呼ばわりされかねない。大事な女性である手前、ロリコン呼ばわりされたシヤアを庇うために幼気な少女はドレンにキツくあたるかもしれん。

反面教師にして自身もララアとの関係を考えないと、とシヤアは思うのだが、実はメイドが120歳を超えたロリババアであり、シヤアも唾然としたのは別の話。

「ドレン、あの博士について調べてくれたか？」

「ええ、今は助平おやじですが……あの人物は中々です」

ドレンは長年軍にいた伝手を使って、多くの情報を仕入れてきた。収集した情報元は情報部や総帥府、文科省などの情報網を駆使していた。シヤアからすれば、どこでそんな人脈を得ていたのか気になっていたが、意外にもシヤアに対して妬みやつかみもなく、寧ろシヤアのコネを得たい彼の求めに応じ、シヤアが必要な時に提供してくれる頼もしい部下だった。

「かのビショップ博士はもとMITの教授。そこで連邦軍の研究所にも顔を出していたようです。その跡は月面研究所で5年以上研究後、

サイド3のムンゾ国立大非主流科学の分野で研究していたようですが、僅か2年で閉鎖したようです」

「二年か……それは急だな」

「ええ、閉鎖する数か月前にジンバ・ラル氏からジオン・ズム・ダイクン氏の司法解剖を依頼していたという話も」

「……何……」

シャア・アズナブルの本名はキャスバル・レム・ダイクン。ザビ家の謀殺によって家族がバラバラになったダイクンの息子。瞳の色以外瓜二つのシャア・アズナブルを身代わりにして生き残った彼はジオンの英雄として祭り上げられていた。ドレンはそれを知ってか知らずか、かなりの情報を渡してくるが、決定的なことはない。

そして、ビショップ博士が司法解剖したとすれば、父ジオン・ダイクンの謀殺に加担したのではないかと、一瞬であったが殺気立っていた。

「それで司法解剖はしたのか？」

「いえ、その時は地球のネヴァダである実験をしていたとか。医師免許はないものの、生化学の権威だったことで超法規的な実験を行っていたようですな」

「……ふむ、そうか……」

ドレンは「何をやっていたかわかりませんがね」と付け加え、蒸留酒を傾ける。主役であるジオン軍人ではあるが、ガルマと比べれば脇役。シャアはビショップ博士に視線を向けつつ、衛兵が準備をしている事に気づいて席を立つ。

「ルミエス様の御成り！」

王室専用の入り口から出てきたのは純白のドレスに身を包み、赤いカーテンから現れた国王ターラ14世の娘、王女ルミエスだった。息子は既に王位を捨てており、時期女王として国王の補佐を行っている

と噂されている。

彼女の姿は民族衣装ではなく、ジオンのデザイナーによって卸された特注品。それだけでもジオンの影響が出ているのは見ての通りだった。黒髪と白いドレスの組み合わせは非常に美しく、外交官や来賓の女性ですら見惚れてしまうようだった。

「ルミエス殿下、本日も美しい」

「おお、アルタラス一の美女ですな」

ルミエスの容姿は煌びやかな令嬢と言うよりも、窓辺に佇んで読書をする深淵の令嬢のような佇まい。既に神聖ミリシアル帝国とムーから依頼した外国人学者から教えを請い、留学の末に学位を幾つか保有している。

頭脳明晰な彼女が最初に会話をしたのは、取り巻きの人々ではなく、今回のパーティーの主役、ガルマ・ザビだった。

「ガルマ様、ご機嫌麗しゅう」

「ルミエス殿下、今日もお綺麗ですな」

シヤアは既に彼らの世界が出来ていることに気づいていた。ドレインの「若いですな」と聞こえたとき、「全くだ」と相槌を打つ。

昨日到着してから、次官級会談としてガルマ・ザビ大佐とシヤア・アズナブル少佐などが臨席した会談では、国王の代理として、王女ルミエスが現れた。本来であれば、しっかりと外交官として任命された官僚組が来ればいいものの、パーパルティアという仮想敵国の近くで活動する関係上、なにより科学調査の名目でやってきたガルマ。まさか、総統府から外交文書と臨時の外交官任命書が送られてくるとは思っていなかった。

艦隊司令兼臨時外交官として王位継承権を持つルミエスと話すにつれて意気投合。年齢も近いこともあって、周りの外野をほっぽらかしにしていき、会場の中心にあったダンス広場へと移動する。

「若いな」

「危機的状况なのに、ここでダンスなんていいんでしょかね」

「現実を忘れたい時もあるさ。こんな状態だとな」

既にターラ王がパーパルティアの外交官の両爪先を銃で吹き飛ばしたのは、全外交官に知られている。既にパーパルティアと外交ルートのもつ国々では外交官の退去が行われており、シルウトラス市にも、外交官退去の報が来ていた。ここにいるのは、隣国への退避準備が完了している外交官や既にパーパルティアへの賄賂が完了している商人だ。

ジオンとアルタラス王国が密約を結んでいる事などは知らず、パーパルティアも苦し紛れのパーティーであると考えているに違いない。

シャアはバーテンダーに注がれた果実酒を傾ける。

「これはどこの酒だ？」

「パーパルティアのアルーニ94年です。お客様はチーズをお召し上がりですので、こちらを」

「非常に旨い。中々の味わいだ」

——この味が無くなるのは惜しいな

地球の消失によって、食文化の消失からシャアの気に入っていた酒も今では、アタツシケース一杯の金塊が無ければ買うことは出来ない。マハル産高級ワインの他、各コロニーの酒造によってコピーや大衆向けの安酒が売られている。だが、高級品と言ったものは、独自に高級性を確立していない商品ではないものに限っては、地球原産に限られている。

主に連邦政府の独善的な貿易政策から、地球製高級酒はさらに関税が掛けられている。加えてコロニー酒造も大衆向け以外は多くの税が取られ、必然的に地球産にシェアを奪われていた。そんな連邦の文化的圧政が影響し、高級志向の酒はあまり出回っていない。

シャアとしても、戦争によって多くの食文化など、民族特有の文化が失われることを予感し、口の中でゆっくりとそれを味わう。

彼はいずれ無くなるだろうその味を名残惜しいように飲んでいた。



「動くな！」

格納庫に女性の声が響き渡る。既に格納庫から大気の流出が始まっており、低重力であるため、散乱した書類や携帯食料、埃が浮かび、大気の流出源であるエアロックに吸い込まれていく。核攻撃によって嚴重にロックされたエアロックが歪み、隙間から大気が流出しているのだ。既にアラートが鳴り響き、警告灯がクルクルと周り、あたりを黄色く照らしていく。バーナード・ワイズマン伍長、[〃]バーニー[〃]は主武装のStG78ライフルを拾ったかったが、動けば声の主が持っているライフルらしき物体で彼を撃ち殺すだろう。

ホルスターに収まるヴァルタ P08—M 拳銃を抜きたかったが、それよりも先に彼女の中指が引き金を引きかねない。ジオン製拳銃は伝統的な人差し指の操作によって発砲するよう出来ているが、彼女の持つ武器は三本の指で操作できるように改良されていた。

「異星人め、顔を見せろ！殺す前に顔を見てやる！」

（ワイズマン！聞こえるか！敵の機動兵器が通路を破壊した。少し時

間がかかる！援護は出来そうにない！聞こえるか!？」

ハーデイ・シユタイナー大尉の応答にこたえたいが、変な動きをすれば撃たれかねない。慎重にバーニーはヘルメットの二重チャックを外し始める。

—ああ、もう次から次へと！

格納庫に侵入後、格納庫付近に隠れていた敵の人型機動兵器の攻撃を受け、ちりじりになったサイクロプス隊。唯一、先行していたシユタイナーとバーニーは敵の攻撃によって分断された。大尉の命令によって先に格納庫に行った先、敵の兵士に遭遇。訓練通り引き金を引こうとしたが、その人物の様子を見て投降を呼びかけたにも関わらず、自分自身が硬直してしまう。

その隙に乱闘になってライフルを落してしまい、形勢が逆転した。彼女の姿はジオンと同じように、ノーマルスーツのような加圧服を着ているように見える。体の線が見えるような、まだ少年の域を出たばかりのバーニーにとってその光景は目に毒。手の指は三本あり、人と比べると少なく感じる。そして背中には翼が見え、ジオンにはない新素材で作られた防護布に覆われている。そして彼女の容姿は赤色の髪にやや尖った耳。エルフにも見えるが、翼の付いた種族など見たことがない。

ヘルメットを外そうとするが、大気の流出が早いことに気づいた。

「おい、空気が漏れている。早く被らないと死ぬぞ」

「うるさい！お前を撃った後に被るさ！」

彼女のヘルメットは先の乱闘で床に転がっている。既にパイロットスーツの腕時計にある環境測定器には危険レベルとなっており、直ぐにヘルメットを被らなければ、命に関わるだろう。低酸素血症から脳症に発展し、記憶欠落や人格欠損、知能が著しく低下する。

銃を向けられ、いつ殺されてもおかしくないのにも関わらず、相手の心配をしてしまうというのも可笑しな話だったが、バーニーはサイクロプス隊のメンバーが低酸素欠乏症に掛かった人間がどのような

末路を辿ったか、新兵の彼はその生々しい光景に気持ち悪くなった。だが、大尉が駆け付けけるまでの時間稼ぎをしなければならなかった。

「君の種族はどうだか分からないけど、酸素欠乏症は哺乳類にとって致命的だ。足元のそれを被った方がいい」

爆撃の地響きと警報が相まって、彼女の表情は強張っていた。いつ、ジオンの攻撃によって格納庫に穴が開いて、気圧の変化から血を吹き出して死ぬのではと恐れたのか、ライフルを片手に持ち、もう片手でヘルメットを被ろうと手を伸ばす。

被る前にバーニーを撃つことも出来たが、突然の攻撃によって正常な判断もできなかった。そして、徐々に空気が薄くなっていくことも考えれば、正気ではいられまい。

ヘルメットを頭にかぶったその時だった。

格納庫が爆撃され、大きな揺れと共に鉄骨が軋む。急激な大気流出を引き起こし、一瞬だけ彼女の注意が爆発音のする方向へ向く。

「うおー！」

短い雄叫びにも似た声がバーニーの口から漏れ出る。地面から飛び上がるようにして床を蹴り、彼女の持つライフルを弾き飛ばす。片手で保持していたそれは脆くも吹き飛ばされ、バーニーはホルスターのヴァルタ拳銃を引き抜き、被りかけの彼女に馬乗りになるようにして、銃を突きつけた。

「降伏しろ。どの道負けは確実なんだ。こんなところで死ぬきか？」

「う、五月蠅い！ 攻撃してきたのはそっちだろう!？」

「……まあ、そうなんだけどさ」

一石二鳥、漁夫の利とも言えるジオンの攻撃によって基地能力の半分以上を喪失した彼ら。連邦軍も突然のジオン襲来に対応できず、既に連邦軍基地部隊は降伏している。どちらが先に攻撃したのかは、双方の戦闘記録を突き合せなければならぬが、それは後の歴史家が考へることになる。

実際に戦っていた彼らからすればどちらにしても変わらない。

つである。

アルタラス王国は既にジオン軍事顧問派遣団を招き入れ、既にムー製兵器やジオンの復刻兵器工廠で製造されたボルトアクシヨンライフルや軽機関銃が配備されている。また、ロウリア総督府が義勇軍として募集したところ、元ロウリア軍兵士や一般人が参加。数か月の訓練の末、戦列歩兵程度であれば倒せる練度の義勇軍がアルタラス王国軍と共に警備を行っている。

陸つなぎのフィリアデス大陸であるが、数か国の文明圏外国家を通るために進軍速度が遅くなる。精鋭大陸軍の軍勢を差し向けず、内海から進む皇国海軍の部隊が近づきつつあった。

「国王陛下、如何でしようか？」

玉座に座らず、ル・ブリアスを一望するところに立ち、国王ターラは外を眺めていた。彼に声を掛けたのは、海軍長のボルド。まるで髭の生やしたナポレオンと言うような、少し背の低い髭を蓄えた将軍。海軍長の地位に就いた歴戦練磨の軍人である。

「敵の第二艦隊『パールネウス』は我が領海のギリギリのところまで停泊。上陸の意図がなく、何かの合図を待っているのかと」

テーブルにおいてある海図には本土防衛艦隊としてル・ブリアスから40km沖合にあると赤い船の模型が数隻置かれ、その100km離れたところに皇国第二艦隊と殴り書きした青い模型が置かれている。一気に攻撃を仕掛けないところを見るに何か裏があると思えない配置だった。

「面倒だな、ジオン軍やロウリア義勇軍はどうだ？」

「顧問団は内陸のサン・ブリュンの練兵所で訓練を行っています。ロウリア義勇軍はリュクサン駐屯地と各警備所に配置しております。わが軍とも共同歩調の取れそうな指揮官もいますので、なんとかかなり

ます」

「疎開は出来ているか？」

「問題ありませんが、避難の混乱によって一部暴動が確認されました。既に鎮圧済みです」

ル・ブリアスの人口は多い。文明圏外国家と言え、国力は列強と比べると劣るが、凄まじく格下という訳ではない。先に出ていったのは耳の早い商人達。次に命令を受けた外交官。そして、裕福な富裕層である。そして次が一般市民。王都には疎開する一般市民や火事場泥棒を働こうとする者、徹底抗戦のため、兵と共に戦おうとする者等、統制が取れなくなっていた。

「ジオンは我々よりも格段に技術の上を行っている。この戦争は勝てるだろう……ようは勝ち方だ。簡単に我々が連合軍を率いて奴らの首都に進軍できるか？したとして、全土を支配できるか？いや……むりだ……ジオンも簡単にそこまでできるとは思えない」

アルタラス王国が単独で戦うことは難しい。しかし、ムーの特務機関「マンダ」の軍事物資提供、また反皇国同盟として約百年前に結成された大陸同盟が役に立つだろう。しかし、加盟国の半分近くがパーパルティア皇国に吸収されている。

そんな彼らがパーパルティア皇国を打倒して、占領することは出来ないだろう。根絶やしにしなければ、皇国の残存勢力が再び火種を残す。ジオンが国を亡ぼすことはできるやもしれない。だが、その兵力を展開させて、多くの血を流すだけの価値が我々にあるだろうか。

敵の攻撃を退け、膠着状態にして休戦条約を結んでも、後世の人間がそれを良しとするはずもない。戦いは繰り返されることだろう。

国王ターラは考え、ル・ブリアスの街並みを背にして部下たちの顔ぶれを見る。

「奴らをここから追い出せば、相手へ休戦条約を持ち込める。そうすればこの国は娘に託すか」

既に政治の主演は王ではなく、娘のルミエスになっている。もう一人息子が居るが、彼は王位を捨てて、ムーに留学している。先進的な法体制を学んで帰ってくるだろう。

「陛下、まだルミエス王女は二十歳になって間もないですが、陛下もまだまだご健在でしょう」

「今回の戦いは我が国の存亡を掛ける……この事態の幕引きに丁度いい。シルウトラス郊外の避暑地でも籠って面倒な外交官と酒を飲むさ」

「ル・ブリアスの断罪」はかなりのインパクトと国民の多大な支持がもたらされた。だが、貴族や商人など、王国への影響力の強いものは王家へ嫌味や侵攻が始まり次第、皇国に付くとさえ明言する者もいる。今回の戦いによって王家は株を上げたが、王国内部の反王家勢力は王家への反抗を強めている。彼らを静めるには国家そのものを亡き者にするか、王のすげ替えが必要だろう。

今後の戦いで確実に少なからず犠牲が出るだろう。そうすれば、必ず国民はターラに対して退陣を求めるだろう。支持も下がるだろうし、混乱が収まれば、確実に王権に対して制限を求めるだろう。

ターラは再び窓へ向かい、ル・ブリアスの街の光景を焼き付けようと視線を向ける。

その街の喧騒はやがて狂騒と戦乱によって荒廃してかもしれず、歴代の王達によって繁栄していた。それが崩れ去るのだろうかとおもうと涙が込み上げる。ふと王は空を飛行する飛行機らしきものを捉えた。

「空軍長、今は灯火管制と飛行禁止令が出されていたな。あの騎影が何かわかるか？」

飛竜と飛行機械の両方を運営している空軍の将軍はそれを見て頭を傾げる。

「いえ、どこの機体かまで分りませぬ。王都防空部隊からの連絡も……」

その機影は非常に高く空を舞い、高高度を飛んでいる。その機体の大きさもアルタラスの物ではない。そしてムーやミリシアルの物とはことなっていた。

「パーパルティアの奴らか。迎撃できるか？」

「あの高度まで高いと迎撃は無理です。もしかして、高高度偵察用の

ワイバーンをつくったのでは？」

だが、ああまで高い場所に陣取って何をするつもりなのか。その場にいた彼らは上空遙か彼方のそれを注視する。

もし、彼らが高性能な望遠鏡や高性能なカメラを持っていれば、その物体下部のハッチが開き、何かを落とすのを目にしただろう。それはもしかすれば落竜した竜騎士かも知れなかったが、筒状の物が落下し、急に閃光がル・ブリアス全体に降り注いだ。

その閃光は数千度の熱量として放射され、目標とされた町の中心のル・ブリアス公園は瞬く間に熱線によって消滅し、数多の避難民が即死する。数千度の熱線は種族の隔てなく一瞬のうちに死に絶え、チリも残さず消し去った。そして熱線は町の中心部を消失させる。

眩い光はまるで太陽がル・ブリアスに出てきたかのように明るい光。熱線として降り注ぎ、すべてのものを焼き切った。音速に近い突風が崩れやすい建物を破壊していき、外にいた人々は熱線と飛び交う瓦礫によって即死する。

それは王宮も等しく、熱線と音速に近い突風が王宮に直撃して建物ごと崩れ落ちた。

ル・ブリアスの大部分は爆風に包まれ、爆炎が立ち上っていく。

街の上空には『キノコ雲』が立ち上っていた。

【臨時ニュースをお伝えします。昨日、24日未明にアルタラス王国

首都ル・ブリアスにて核爆発が観測されました。現在、総帥府では現状確認が行われていますが、アルタラス王国派遣部隊との交信が途絶えているとの事……繰り返してお伝えいたします……」

「アルタラス王国首脳部との交信途絶して二日。未だに電磁場の影響もあつて無線通信及び魔導通信は一切出来ておりません。王都の被害は今のところ分かっていませんが、約20万近い犠牲が出たとの情報があります」

「派遣された部隊の内、核攻撃によって被害を受けたのはサン・ブリュン練兵所に訓練していた軍事顧問の将校十数人、ロウリア義勇軍指導教官5名が重軽傷を負った模様です」

「今回のアルタラス王国核爆発の剣に関しまして、パーパルティア皇国外務省広報官がアルタラス王国へ「我が国へ泥を塗った代償」として「蹂躪宣言」を行いました。これは皇国戦争法に定められたもので、国民を全て奴隷化し、属州化するという人道に反する法律です。ジオン及びセツルメント国家連合は非難決議及びアルタラス王国残存軍に対して必要な支援を準備すると声明を発表」

「現在、アルタラス王国にいるガルマ・ザビ大佐率いるアルタラス第21特務隊はシルウトラス市防衛のため任に就いていますが、負傷者救護と臨時政府存続のため死守する構えを見せています」

第二十話 アルタラス王国崩壊

シルウトラスはその地域一帯が魔導エネルギー体の鉱山として栄えていた。嘗て古の魔法帝国ラヴアーナル帝国がこれらのエネルギーを抽出して利用するため、シルウトラスには古代都市や多くの遺跡が残っていた。

帝国が無くなってからは幾つかの王国が成り、アルタラス王国がこれらの鉱山を保有。五大鉱山として栄え、交易都市も兼ねた王都に供給される整備された街道が輸送路となっている。

既に鉄道と輸送馬車、魔導車によって王都、そして港町から各都市へと運ばれる。その資源は神聖ミリシアル帝国やパールティア皇国、レイフォルなど文明圏内外問わず輸出された。日本で言う石見銀山レベルで世界規模の流通がなされ、魔導機器の殆どの動力源にアルタラス王国の印があふれている。

時と状況、そして運が味方すれば大陸の大部分はパールティアの旗ではなく、アルタラス王国の御旗が大陸に翻っていたことだろう。しかし、そうはならなかった。街道には遺棄された郵便馬車や魔導車、家庭用馬車などが遺棄され、すでに持ち主はシルウトラス市に入っている。そこにいたのは、街の医者や魔導士に助けてもらおうと向かう被爆者の列だった。

「水……水はどこだ……！」

「母さん、痛いよ痛いよ」

「うう……目が……」

その列は郊外に疎開していたため、核爆発から離れていたから助かった避難民の列だった。辛うじて爆発の陰になって助かった者もいれば、熱線によって火傷を負いながらも歩く負傷者。既に亡骸となった子供を抱えて歩く母親や六人程の失明した人の手を引く男、未だ避難できぬ街道沿いの村々はその光景に恐怖する。これがこの世の光景か。その街道はシルウトラスの死の街道として人々の記憶に

残ることになる。そして、街道沿い、シルウトラス市まで20Km地点の宿場駅において、ジオン軍部隊の臨時救護所が設営されていた。「重篤被爆者と軽傷被爆者を分けろ！急いで除染水を持ってこい。普通の水でも構わん」

「第10救護隊は南街の空き倉庫に救護所を設置！急がせろ。シルウトラス市兵は救護所の警備を」

王都郊外から街道を下り、シルウトラス市に入ろうとして来た人々は安堵し、ある者はそのまま気を緩ませ命すら手放す者も多い。使えない魔導車や馬車は隅に追いやられ、大きな野戦病院と化した宿場は呻き声のする修羅場と化した。

「心室細動だ！電気ショック！」

「息子が！魔導士様、どうか息子を！」

「奥さん離れて！」

衛生兵は顔が半分焼けただれた母親を抑え、全身火傷を負って心臓が止まりそうになる子供を軍医が急いで心臓マッサージを行い、心臓へ電気を送るためにパッドを貼る。

「チャージ、離れて！」

電流が流れ、子供の細い体が跳ねる。しかし、バイタルは細かに動き、やがて心臓は停止する。

「エピネフリンを」

「もう一度チャージ、生き返れ！戻ってこい！」

再び跳ねるが、子供の心拍サインは停止する。バイタルが停止したサイン音が響き渡り、軍医が懸命に心臓マッサージするが、やはり反応はなかった。

「おい、生き返れ！こんなところで死ぬんじゃない！」

軍医の叫びは救護テント内に響き渡る。その子供以外にも治療を待つ幾多の患者が待っている。そして、負傷者や避難する人間の数はさらに膨れ上がっていた。

「まさか、パーパルティアに核兵器開発能力があるとはな……」

シルウトラス市のジオン軍高官に貸し出された豪邸は臨時司令部として機能しており、その主が使っていたと思しき執務室にガルマ・ザビは腰掛けていた。

「大佐殿、確かにパーパルティアに独自で開発することはできません。基礎研究の分野でも彼の国は近世初め。それこそ我がジオン公国には太刀打ち出来ないでしょう。」

「ならなぜ彼らが？」

「可能性として考えられるのが、彼らにもアルタラス王国と同じく古代遺跡があるのでしよう」

古の魔法帝国のテクノロジーは一部分においてジオンすら凌ぐと考えていた。ウォルター・ビショップ博士はこれまでのデータや遺跡からそれを確信し、プルトニウムやヘリウム3に準ずる核融合や核分裂のテクノロジーを保有すると考えていた。既にアルタラス王国に点在する研究所を視察したとき、残された異物に彼は目を奪われた。ジオンのテクノロジーはそれこそ、この惑星の全てを相手にしても勝てる。そもそも、地球連邦という数十倍もの国力を相手に戦おうとしていた。そのために蓄えられた国力によって惑星を全て掌握できるだろう。

だが、一定分野においては惑星の技術に負けている部分、全く未知の領域が存在する。魔導エネルギーなどの魔導文化に付随する技術体系はジオンのそれと全く異なる。魔導エネルギーをもってプラズマやレーザー、炎を発射し対象を焼き殺す。その他、バイオテクノロジーや生物の改造、その体系によって惑星離脱から衛星に基地を作るなど、まさに未知のテクノロジーである。

連邦にとって未知に近いMSやミノフスキー粒子下による有視界戦闘と艦隊戦術。これらによって国力の差を覆したジオンは、自分達も同様に未知の力によってやられる側になるのではと恐怖していた。

パーパルティアは核兵器となるものを発掘、使用したと考えられ

る。核兵器製造能力はウランやプルトニウムの精製、濃縮技術をもつてして可能となる。その程度の工業能力がないと考えれば、遺物をそのまま使用したに違いない。

「多分、彼らは他にも装備しているでしょう。ガルマ大佐。これは先の古代都市から発掘されたライフルです」

ビショップ博士はガルマにそれを見せる。それはライフルに近い形状を持つ。金属製であるが、同時に見たことない質感と手触り。引き金とカバールの部分が大きく、まるで指が三本しかないような設計になっているそれは連邦のブルパップライフルのように、後ろから装填するエネルギーライフルであることが分っていた。

「このライフル、年代測定に掛けると、一万二千年前に製造されたものであると確認できた」

「そんなに昔か!？」

ガルマは驚いていたが、博士は一冊の本を出す。その題名は「ムーの歴史と古の魔法帝国」というもの。その内容はそれこそオカルトじみた内容であり、とある日本のオカルト雑誌レベルのもの。本来なら失笑すべきもののだが、それを捕捉するのが、屈指の頭脳を持つ元天才科学者。信憑性は非常に高くなった。

「この本は露天商から買ったんだが、非常に面白いことが書かれています。ガルマ大佐も好きになるかもしれない。この地底世界の……」

「博士、要点を話してくれ。君のその酔狂じみた話は僕……いいや私としても大いに面白いし場が和む。だが、今はやめてくれ」

友好国になりつつある国が核攻撃に遭ったのにも関わらず、狂った科学者マッドサイエンティストの狂言を楽しむ余裕はない。博士は少し落ち込むそぶりを見せるが、説明を続けていく。

「この本はムーの科学者と歴史学者が共同で執筆した所謂空想小説のようなもの。科学的には推測の類だが、事実この書かれている内容は真実だ」

ページをめくり、見せてきたのは「古の魔法帝国消失とムー王朝の成立」。

「これは古の魔法帝国の消失とムーの転移についての因果関係を示したものだ。これを例えにしてみよう」

と取り出したのは、「ニュートンのゆりかご」と呼ばれる運動量保存則と力学的エネルギー保存の法則の実演するための装置だった。ガルマも子供の頃に見たことがあったが、それが何の役に立つのかと頭を傾げた。

「これは子供の頃に使ったことがあるだろう、ニュートンのゆりかご。これを例えで使おう。」

この鉄球を古の魔法帝国としよう。彼らは伝承によると、隕石による崩壊から逃げるため、転移したと記録されている。その時のエネルギーをこうする」

球体を持ち上げて離す。そして、球体にある力量が伝わり、端の玉が弾かれていく。

「すなわち、その魔法帝国が転移した場合、他でも同様の異変が起こると?」

「そうだ。ガルマ大佐、これは魔帝が移動した場合、別の地点にその国家が現れる。それこそムーのような国はな……」

「では、我が国やグラ・バルガスといった転移国家も?」

「もちろん、魔帝が転移実験の失敗、若しくは段階的な試験によって我がジオン公国やグラ・バルガス帝国がこの星に転移したと説明がつく。」

魔帝は隕石衝突による国家の崩壊を食い止めるために転移魔法によって大陸ごと移動。しかし、その反動によってムーがこの世界に来てしまう。また、その後の惑星の重力異常や異常気象が度々起こっている。その事実を照らし合わせれば、魔帝による転移魔法の影響はかなりのものであったと考えられた。

そして、ジオン公国などコロニー国家の移動。そしてグラ・バルガス帝国の転移。それを踏まえれば、魔帝による実験によるものだと推測できる。ともあれ、現在進行形で異常気象や環境問題が噴出する現在、ジオンとしても今後やってくるであろう魔帝に対しての対抗策を考えねばならない。

「彼らは我々よりも優れているという事か……」

ガルマは眉間に皺を寄せるが、博士は首を横に振る。

「それは現時点では分りません。彼らのテクノロジーは遺跡でしか……また、ムーの潜在能力も考慮に入れるべきかと」

「ムーもか……博士の推測が本当だったとして、彼らも地球から来た国家だと？」

既にビショップ博士はムーが転移国家だと推測して、一つの仮説を立てた。ムーという転移国家は古の魔法帝国の転移魔法に巻き込まれた国家であり、一万二千年前に消失した国家の一つであるということだ。非公式諜報員やキシリア機関の手繰り寄せた情報によると、ムーの科学技術は嘗てのムー帝国の尋常なまでに発展した遺失したテクノロジーを元に行っているということ。単独ではなし得ない機械文明の成り立ちに疑問を覚えたビショップ博士はテクノロジーを分析しつつ、現在の地位に上り詰めたと持論を述べていた。

「二万年前の国家だぞ。我々のテクノロジーに……」

「地球が誕生して四十六億年……人間以外にも同等の文明を持っていた生命体が居てもおかしくない。それ以上の文明を持っていても何ら不思議ではない」

「そのテクノロジーをパーパルティアという外道国家が入手した訳ですか。我が国、アルタラスは滅亡の節目にあるわけですね」

何時、入ってきたのか。焦燥しきった顔をしたルミエス王女が入ってきていた。

ル・ブリアスへの帰還を行おうとしていたが、ジオン関係者に止められ半狂乱になっていた。今は落ち着いているがかなり憔悴しきった表情をしていた。

「ルミエス殿下……」

ガルマは声を掛けようと近づくが、ルミエスは執務室に無断で入った事を思い出したらしく、頭を下げる。

「失礼しました。お客様の部屋に無断で入るのはいけないのに……」

「いえ、ルミエス殿下。ガルマ大佐も激務が重なってお疲れでしょう。お二人で少し休憩したら如何でしょう。」

ガルマに気を使ったのか、それともルミエスに気を使ったのかは分らない。博士の気の効かせたその台詞によりルミエスの傍にいた侍女が案内し、二人は執務室へと去っていく。例え、ルミエスがボロボロに消耗しきっていても、そこを突いていくガルマではない。一言も喋らず、博士とガルマの話聞いていたシヤアはジオン本国とロウリア総督府から何とかして通信を受けた王都の偵察報告書をチラリとみる。そこにあるのは衛星写真とドローンから撮影された高精度カメラの画像である。

「ビショップ博士、パーパルティアは発射可能な核弾頭を所持し、生産可能状態だと思いませんか？」

シヤアの問いかけに対して、白衣からBaby Ruthを取り出し、チョコレートとキャラメルヌガーを頬張る老人はもごもご言いながら答え始めた。

「ちよっほ待つてほしい……ごっく……今回の攻撃が一発だけとは限らない。核分裂に関しては我々の知らない方法があるのかもしれない。生産可能、即時発射の可能性は捨てきれない。」

ジオンは開戦前からすべての国は核戦力を保持していないと調べていた。衛星からの放射線センサーを駆使した弾道ミサイル基地や原子力発電所の搜索はある一つを除いて見つからなかった。その除いた一つがアルタラス王国内にあるシルウトラスの古代遺跡だった。

全くのノーマーク状態のパーパルティアの核攻撃はジオン指導部も混乱している。ジオン本国とグラナダに駐留するキシリア麾下の予備戦力を投入すれば、片が付くだろう。しかし、本格的な戦線投入とパーパルティア殲滅には一か月を有する。惑星基準からすれば、驚

シルウトラス市が混乱の中、王都壊滅の報を聞いたアルタラス王国海軍主力艦隊は混乱していた。消息不明となった海軍長ボルドの側近であるシルラ大佐は艦隊の数隻を王都救援に派遣したが、救援に向かった戦列艦の通信から「正体不明の疫病が発生」の報告の後音信不通になっていた。

各艦長や将校の反乱はないものの、士気はどん底まで落ちている。首都を死守しようとするシルラに対して、川を上っていくか、艦隊を自沈させて兵員共々、シルウトラスに移動すべきと言う意見もあった。死守すべき王家はルミス殿下のみ。ル・ブリアスの廃墟とクレーターを守る必要性はなかった。

「哨戒騎よりパーパルティア皇国海軍部隊を発見の報あり！」

通信担当士官の報告からシルラ大佐は息を吸い、肺に思いつきり空気を送り、そして吐き出した。

「はあく……、よし！全艦、戦闘態勢！旗を掲げよ！」

アルタラス王国の国旗と共に「戦闘開始」の意味のある竜の旗を揚げる。そして、ジオン公国から技術援助を受けたことによって、機械文明の高性能通信機器からモールス信号が各艦へ送られる。

【敵ヲ発見！戦闘態勢！】

アルタラスの戦列艦は戦闘態勢に移り、輸入した対空砲、携帯型対空ハンドミサイルを装備していた。その戦闘力はジオンから見れば、アフリカ東海岸に出るような携行兵器で武装した海賊に近い。

パーパルティア皇国の装甲艦と比べると防御能力が乏しいが、攻撃能力は桁違いであるとジオン技術士官は太鼓を押した。演習でも勝率は高く、現状戦力でも敵を撃退できるとされた。

その代わり、自軍のワイバーンは間違えて攻撃する可能性があったために、今回の戦いでは使用できないと哨戒騎を除き、航空戦力は王国陸軍へ部隊ごと異動した。主な航空部隊はジオン派遣部隊がドックを派遣。性能上、マツハ4を超える超音速戦闘機であるが、其れだとパイロットがミンチになりかねない。

そのため、地球圏では性能を抑えており、それでも大抵の爬虫類飛

行隊を圧倒する。ジオンとの条約から復刻版のメツサーシユミット Bf109を輸入するつもりであったが、今回の攻撃で立ち消えになるだろう。

「ハンドミサイルは有効射程に入ったらぶつ放せ。自由射撃を許可する！」

シルラは魔通信用器具を手にとり、艦隊に指示を出す。他の通信担当士官はジオン製無線を使い、モールズを送り、魔導妨害対策としてそちらからも指示を出した。

迫りくるワイバーンロードを確認後、水兵の持つハンドミサイルが放たれた。西側の代表的な携帯型対空ミサイル兵器『ステインガー』をモデルに、携行性を高めたそれは射程3kmと短い、操作性と炸薬量から対歩兵用重火器として重宝されるそれは、砲術士官の命令と共に発射された。打ちっ放し能力を持つ赤外線追尾のミサイルはマツハ1.5のスピードで飛翔し、ワイバーンロードに命中した。

「よし！いいぞ！」

「パーパルティア王国のトカゲどもが逃げてくぞ！」

一度に十数騎墮とされたために、一度態勢を立て直そうと一度編隊を組みなおしていくのを目撃したシルラは再び指示を下した。

「88cm高射角砲で八つ裂きにしろ！」

戦列艦としての外見を残しながらも両舷に各4門の88mm砲が装備されている。パーパルティア王国の装甲艦に対してはかなりオーバーキルに近い破壊力を持つ。8.8cm Flak 36は高射砲から戦車砲に転身し、ティガー戦車として知られる重戦車の主砲としても知られる。木造戦艦や魔導砲などのエネルギー弾を弾く特製の装甲をやすやすと貫くそれはアルタラスに試験的配備がされていた。

ワイバーンロードに向けて発砲された88mmは炸裂し、更に数騎が

墜落していく。まだ、実戦配備から日が浅いアルタラス王国軍の砲術兵は自身がワイバーンロード殺しをしたと驚き、そして誇らしげに思っていた。

「敵艦隊との距離あと10km」

「性能上、本来なら20km先の目標を狙えるが、我が艦隊にはそれほできん。全艦隊に通達。全艦取舵一杯！このまま、敵に砲撃を加えるぞ！」

「は！」

「取舵一杯！」

「全艦取舵一杯！取舵一杯！」

【全艦取舵一杯】

パーパルティア王国の魔導砲の射程距離は2km前後。これらはジオンの情報やムーの諜報機関「マンダ」の情報に基づくものだ。この射程距離外からの砲撃によってパーパルティア王国海軍を迎撃するやり方は既に何度も考えられた方法だ。

「全艦合図の後、一斉射！この攻撃の効力を確かめる！」

「射撃指示送ります」

88mmの砲手が照準を上空から海上の敵艦に向けて発射準備に入る。射程内は着々と縮んでいる。砲撃の合図はシルラの合図次第だった。

「放て！」

「全艦攻撃開始！」

【全艦発砲開始！】

シルラの命令から放たれたそれは前方のパーパルティア皇国海軍第二艦隊「パールネウス」の先方に位置する装甲艦に直撃した。

対空用ではなく、徹甲弾を込めたそれは装甲艦を貫き、一気に弾薬庫を貫き爆散する。数発外れたものの、効果は絶大且つ途轍もなく、シルラは子供のように体を跳ねさせ、叫び声を上げる。

「どうだ！見たか！ハゲタカ共め！全艦、このまま全速で進み、敵を撃滅せよ！」

「全艦自由射撃！先行艦ル・マンドに続け！」

【先方、ル・マンド。各艦続イテ自由攻撃】

それまで抑えられていた砲撃が全力のものへと変わりだす。88mm砲は立て続けに放たれ、パーパルティアの艦艇は次々と火の手が上がった。正に紙装甲のように破壊される艦艇にアルタラス王国兵の士気は最高に達していた。

壊滅した王都の敵、亡き家族の敵として砲弾を込めて発射し、敵を八つ裂きにしていく。例え、砲術士官が射撃中止を命令しようとも止まることはないだろう。砲撃予測と観測を行っていた監視台の水兵はパーパルティアのワイバーンロードがさらにむかつてきている事を察知した。

「ワイバーン第二波接近！高度7000」

「対空砲準備しろ！対空砲手準備！」

船尾にある復刻版2cm Flak 38がワイバーンロードに向く。しかし、ワイバーンロードの数は4騎程の小隊。列強レベルのアルタラス王国海軍の艦隊に対して攻撃を仕掛けるには、やや劣勢。更にジオン製の兵器で強化されたそれらには明らかに不利。

高度を落として船舶に攻撃を仕掛けるだろうと思っていたアルタラス王国兵達であったが、高度は7000前後を維持したまま、攻撃を仕掛けてこない。しびれを切らした砲兵が先の2cm機関砲を発砲し、砲術士官にどやされる。射程は88mmとは違い近距離の迎撃兵器である。7000m先のワイバーンには届かない。

「ワイバーンは射程外です」

「やつら何しようとしているんだ……」

シルラは艦隊を密集陣形から少し、間を開けていくよう指示を下す。すると、ワイバーンロードから何かが落下するのが見えた。監視していた水兵はその事を報告し、シルラは持っていた双眼鏡でそれを確認する。

「上空のワイバーンから飛翔物体！」

「飛翔物体が分裂！艦隊右翼に落下します」

シルラは事前にジオンの派遣軍事顧問の講義にて、今後の戦争から技術発展や戦術の変化などを聞いていた。確実にワイバーンなどの航空戦力に爆弾を搭載した空爆や、高高度からの爆撃など、その攻撃に対応する術はレーダーと言った電波によって敵の位置を把握することに掛かっている。

飛翔物体のそのの形はまるで、嘗てアメリカ軍のB-29が日本本土に焼夷弾を落としていくのと同じように、拡散して落とされたそれは海面に墜ちた瞬間、何らかの化学薬品が反応して、激しく燃焼し、水蒸気にもいたガス状の物が散布されていく。

「なんだ、煙幕とでもいうつもりか。小賢しい。右翼戦隊を引き上げて煙幕を抜けるぞ。！」

シルラは命令を下そうとするが通信担当士官はその話を聞かずに通信を行っていた。

「戦列艦シディ応答せよ！繰り返す！そちらはどうなっている！」

【右翼戦隊、状況ヲ知ラセ】

魔導通信とモールスによって右翼戦隊との連絡を取るが、一向にも連絡を寄越さない。それどころか、戦隊から離脱しかけていると聞き、シルラはどういう状況かとその場にいる艦長に問いかけた。

「右翼戦隊の状況は？」

「右翼戦隊、敵の煙幕によって視界不良。攻撃中止との電文があつた

直後、魔導通信でも連絡が来なくなりました。」

中央の艦隊の主軸戦力とも言える戦列艦数隻と艦隊司令艦を主翼戦隊。左右に司令艦と先の戦列艦を含めた右翼戦隊、左翼戦隊の計3つの戦隊を保有し、乱戦の時には各戦隊司令艦をコマンダーとして指揮する独特の指揮系統がアルタラス王国には存在する。

煙幕攻撃によって前後不覚に陥った右翼隊は徐々に離脱し始めていたが、ふと、それを見た主翼戦隊の戦列艦の水兵が右翼艦の甲板を見る事が出来た。

「な、なにが起こっているんだ!」

彼が目にしたのは、目を抑えで蹲る水兵や呼吸困難によって首を抑えている兵士など。中には苦しきのあまり海に飛び込んで浮かんではこないなど、地獄絵図が広がっていた。シルラはその光景に対して、ジオンが提供する情報の中にあつた興味深い兵器を思い出していた。それは『化学兵器』。視認可能であるが、皮膚に接触することや吸い込むことによって効力を発揮する。銃で撃つことや砲撃、斬りつけなどの殺し方は王国に奉じてから幾度となくしてきたし、命令もしてきた。

しかし、それらはシルラのこれまでの経験を覆すものだった。

化学兵器は第一次世界大戦中に使用され、戦場の多くでそれらが使用された。一度吸えば、肺を焼き、肌を爛れさせて失明させる。使われる種類によって、症状も様々。ジオンの軍事顧問はもし、これらの兵器が使用されれば、戦争は変わることになると語っていた。

右翼戦隊の艦艇はコントロールを失い、何隻かは衝突しており、戦闘能力を失ってしまった。そして最悪のタイミングで風向きが変わり始める。帆船ではないため、風の影響は受けない。以前までは風魔法の魔石を使用した動力機関であつたが、ジオンの技術供与によって石油資源を用いたスクリュウ推進へと変わっている。

その風向きはシルラの乗る司令艦が風上に来ており、化学兵器のガスがこちらに向かってきていた。

「回避運動を！急げ！」

「面舵！面舵！」

「ベシアルにぶつかるぞー！」

シルラの乗船する司令艦ルブランは緊急回避しようとするが、データーリンクや連携を密にしていなかったため、近くにいた戦列艦ベシアルに衝突する。

「機関停止！操舵不能！」

「死の霧！皆、逃げるんだ！」

王都は壊滅しているためか、接敵前の士気に戻り、更に士気は降下する。航海中に霧に突っ込んだ船が二度と帰らない水兵の噂としてある『死の霧』。入れば二度と生きては帰れず、出てきた船の乗員は死んでいるか、病に侵されているかのどちらか。その霧が目の前で人を殺していれば尚の事。水兵はその光景を見て混乱し、海に飛び込む始末だった。

「おい！待て逃げるな！」

「持ち場に……ゴホッ！……」

シルラは喉に痛みを感じ、咳をする。肺の奥底から出たそれは真っ赤な血。とめどなく気管内から溢れるそれは呼吸を阻害し、シルラは窒息する苦しみを味わった。彼以外にも持ち場に留まろうとした士官や水兵も同様に、その白い軍服を血で汚し、ある者は喉を押さえ、最終的には死の霧から逃れようと海面へダイブする。

シルラは窒息する恐怖と意識が削られていく中、絶望に飲まれていく。それはアルタラス王国艦隊の崩壊を意味していた。それに追い打ちをかけるように更にワイバーンが上空に飛来、魔導化学兵器を搭載したワイバーンは再びその兵器を投下していき、瞬く間に艦隊全体

に広がっていく。

【ガードタートル、こちらホークー！応答せよ】

【ホークリーダー、ダメだ。風向きが変わって艦隊全部がやられている。回避行動を行っているのは数隻しかない】

上空の航空支援として、ドップのホーク分隊が艦隊に張り付く手筈だった。ホーク分隊の前にいた、グラーク分隊が燃料切れと機器の故障によって、急遽ザンジバル級へ帰還。ホーク分隊は航空戦力が皆無になったために急いでアルタラス王国艦隊の元へ急いだが、彼らが目にしたのは白い霧に覆われ、壊滅的打撃を受けたアルタラス王国艦隊の姿だった。

【クソ、下は地獄絵図じゃないか】

【パーパルティアの蛮族共め、なんてひどい真似を】

数隻はガスに飲み込まれずに回避行動を取っている。何とか後方にいた中央戦隊の数隻はシルウトラス市に近い漁村へと進路を取っている。何とか交信出来ているが、ジオン軍との密約は果たせそうもない。

【パープルバロンからホークリーダー、状況を知らせよ】

司令部にて指揮を執る艦隊司令「パープルバロン」、指揮官としては有能されど甘さが見られるとして、パイロット連中からは非道が出来るかどうか測りかねている人物だ。

【スパルタは斃れたり、数名の戦士はポリスに帰還す。彼らの敗因は生物兵器か化学兵器の可能性がある、指示をこう】

【了解した……火葬にしろ】

既に作戦が失敗した場合の行動についても彼らは理解していた。もし、ほぼ無傷な状態で彼らに提供した武器や兵器が鹵獲された場合、かなりの被害が出ることは必須である。ハンドミサイルはほぼ確実にワイバーンを撃ち落とせる。更に言えば、ドップも撃ち落とせるかもしれない。ザクなどは流石に無理があるが、88mmを集中的に砲

撃されてしまえば、撃破される危険性もあった。

仮にしくなくとも、化学兵器の量によっては汚染することにもなり、生物兵器であれば、感染拡大を阻止するために焼却消毒する必要があった。

幸いにもアルタラス王国艦隊の船舶は木造船だった。

ドップの持つ燃料帰化弾頭や機関砲によって破壊することはそう難しくなく、金属製兵器の殆どが海中に没すれば、パーパルティア皇国がジオン製のそれを鹵獲することは困難だ。

「まだ生きている奴もいるかもしれない。だが、仕方ないか」

ホークリーダーとして、分隊を指揮する中尉はキャノピー越しに見る幽霊船と化した多くのアルタラス王国の艦艇を見る。みれば、まだ動く人影もいるが、航行能力は皆無。拿捕されて弔り殺しになるよりは、こちらが一気に楽にしてあげたほうがいい。彼らも敗残兵として晒し者にされて嘲笑われるよりか幾分かましだろう。

「ホーク全機、F A E投下後に機銃掃射及び誘導弾で航行不能な艦艇を一掃する。俺とホーク1、2は右翼戦隊、3と4は左翼艦隊に攻撃を集中せよ。散開^{break}」

各機は散開し、中尉は発射火器を機関砲から^{燃料気化弾}F A Eへ切り替えた。

「投下用意、高度は現高度を維持。ホーク1、2準備良いか？」

「ホーク1、準備よし」

「ホーク2、合図を」

「よし、全機投下はじめー」

ドップのウエポンベイに装備された、真っ白い弾頭は切り離され、真っ直ぐに投下された。パラシュートが開かれ、ゆっくりと降下して弾頭内では少量のRDXが起爆した。内部の液体燃料である酸化エチレンや酸化プロピレンが加圧沸騰され、沸点を超えても加圧された容器であるため、気体にはならなかったそれは、圧力限界に達して、外

点のレブラン防衛線に後退。絶対防衛線として死守する構えです」

「ル・ブリアス周辺はまだ瘴気が残っていて、幾つかの船舶と歩兵に被害が出ています。病気のようにうつることはありませんが、兵末端に閑しては動揺が広がっています」

パーパルティアは今回の蹂躪戦（国家間戦争とは国内法上定義されていない）に関して、異例の大陸

軍という、フィリアアレス大陸の統一戦争時代から存在する陸軍が主体となって進軍している。

本来であれば、海軍戦力の豊富な国家監査軍を使用すべきであるし、文明圏外国家として国威発揚を考えれば、異例のことである。今回の大陸軍出兵には何らかの意味合いが存在し、第三外務局隷下の国家監査軍への対抗心もある。この蹂躪戦が大陸統一への橋頭堡にあたるのだろうと、司令部にいる高級将校は既に気づいていた。

「ル・ブリアスへの新型爆弾への布告を全軍に徹底させよ。毒散弾についてもな」

今回の爆弾投下は『皇国の軍事力を見せつける』。言わば、デモンストレーションの一種である。ジオンと言う科学技術が卓越した国家やグラ・バルガスなどの新興国向けの対外政策であり、新技術のお披露目と抑止力として利用できるようにしたかった。

今回の戦いの矢面に立つのはパーパルティア皇国であるが、新型爆弾や化学兵器の提供は神聖ミリシアル帝国によるものである。元々、古の魔法帝国が開発していたものであり、基本原理や製造は全く変わっていない。今回の軍事協力にはシルウトラス市にある古代遺跡を二国間で分割しようと企んでいた。

だが、両国間共に魔導核魔法に関しての基礎知識や運用ノウハウを持っておらず、毒散弾と呼ばれるものも、ミリシアル帝国内にある古の魔法帝国の軍需保管庫にあったものをそのまま使用したに過ぎない。ジオンが人型機動兵器「ザク」を使用していた事実は両国間の危機意識を煽り、魔法帝国の遺された技術を使用させたのである。

「作戦参謀……シルウトラス市攻略作戦について話せ」

バフラムは若い皇族の作戦参謀に指示を下す。皇族という貴族よりも階級の高い身分の軍人ではあるが、バフラムの指揮下では特別視しているわけではない。大陸軍の伝統として、軍の階級以上に特別視されないため、ほぼ実力でのし上がらなければならない。そのため、司令部の中には平民でここまで成り上がった軍人も要る他、軍には身分云々を厭わない実力主義が根付いていた。

「はっ、わが軍はシルウトラス市行政地区を目標として、敵の防衛線にあるレブランに兵力を集中。第二竜甲大隊によって撃滅後、進軍します。なお、レブランの南20 kmにあるル・マカレーについてはパールネウス艦隊の航空隊及び陸戦隊が攻撃作戦を準備中。レブラン攻撃の後衛にあたるのは第二近衛大隊、ル・マカレーからの攻撃に対処していたできます。その後はレブランで一度部隊を再編、休息後にシルウトラス市行政街奪取に掛かります。」

シルウトラス市の鉱物資源を輸出するルートは二通り。一つがシルウトラス街道と近年建設された鉄道を用いる。しかし、ル・ブリアスは壊滅しており、その道中には放射能などがあるため、進軍や迂回、背後を突く攻撃は難しい。

そして二つ目は海路。レブランという交易都市を経由した港町があり、アルタラス海軍残存部隊と王国陸軍の残存部隊が集結している防衛線が残されていた。

アルタラスの兵力は一万強。首都防衛のために一万弱を配備していたが、核攻撃により壊滅。そのため、残された一万はシルウトラス市と北部の都市を守ろうと部隊を補強。ジオンと言う後ろ盾を持った彼らは強固な防衛線を敷いている。

「レブランの敵軍については？」

「敵軽歩兵2000弱、及び騎兵2000、わが軍と同じ銃兵4000、他航空隊50に2000のジオン軍歩兵部隊を各拠点に点在しているようです」

「ジオン軍だが、巨人のようなゴーレムの対処はどうするのだ？ 携帯型魔導砲では正面から撃ち合うのは困難であるという。これはどう

するのだ？」

近衛大隊指揮官は怪訝な表情で意見する。

パーパルティア陸戦部隊は様々な兵科で混成される混成部隊。機甲師団に相当する地竜を配備した竜甲師団から抽出した大隊と皇帝のお膝元の部隊である近衛大隊、騎兵を有する軽騎兵大隊、その他工兵や衛生大隊、輸送部隊などが混ざり合った部隊だった。それ故に、組織間の融通が難しいが、魔導通信設備によって高度な連携作戦が可能となっている。

それ故に、近世レベルの文明と軍事技術だったとしても、近代並みの展開能力を持ち、数的劣勢であっても、培われた戦術で圧倒する。「既に皇帝陛下より賜った隠密によって破壊工作が行われている。既にシルウトラス市内は混乱に包まれているだろう。ジオンにしても便衣兵が混ざっていれば発砲は出来まい」

「敵のザクと言うゴーレムへの対処策は？ 砲兵が対峙した場合はどうするのだ？」

砲兵隊指揮官の貴族出身の大佐は元々、砲兵隊小隊長と言う現場叩き上げ指揮官であり、現場での対応しきれない敵がいる場合どうするか疑問を感じていた。既にジオンの兵器「ザク」について、対策を練らねばならない。

「現時点ではゴーレムやジャイアントオークの対策として航空部隊による陽動と足への攻撃。移動の制限。加えて、関節部分への攻撃によって行動不能を目指します。」

まだ、ジオンのザク対策は確立されていない。未だに撃破数は0に等しく、関節への集中的な攻撃によって行動不能に追い込むことは出来たという話があったが、真実であるかは分らない。それでも類似する巨体の対処法は殆ど同じである。嘗て大陸に存在し、数を減らした巨人族やジャイアントオーク討伐に際して、魔導砲などで足を奪い、敵の脳髓を破壊するのが倒す方法の一つとして確立されていた。今回のザクに対しても同様の攻撃を取ると考えているに違いない。

「密偵の報告では配備されている数は少ないため、何とかわが軍の進

軍は可能です。」

「そのジオンが攻撃を仕掛けた場合はどうする？」

「外務局では彼らが攻撃してくる可能性は低いかと」

「どうせ、第三だ！碌な仕事をしない。今回も嘘だろうに」

アルタラス王国への外交失策とこの度の戦争についても、国内では同情があるなど、いつもとは違った空気が皇国内に蔓延していた。大手を振っての国土の拡大については国民の同意を得られたが、今回の戦いは第三外務局の外交官が私利私欲から無礼な態度や外交文書の改ざんによつて引き起こされたとして、第三外務局への風当たりが強く、更にはそれに対しての出兵とその軍に対しても批判の声が上がっていた。

国家監査軍とは異なる指揮系統と大陸軍という別格である存在の彼らは、出向している第三外務局の役人に対しての罵倒がひどく、司令部にいる将校たちの冷たい視線と罵る声が響く。その報告をした第三外務局出向の役人と国家監査軍の将校は一回り小さくなったように見えた。

それを見ていた総司令官のバフラムは鎮めるように右手を小さく上げ、他の将校は口を噤んだ。

「確かに第三外務局の弛み具合は皆の知るところ。だが、元大陸軍准将カイオスの指揮によつて改革が進んでいる。ここにいる局員や監査軍の彼らは自ら志願してきたのだ。それも、他人の不始末を清算するため。……今後彼らに嫌がらせや不必要な罵詈雑言を放つた場合は私に言っているとさえ」

司令部の空気は沈黙に包まれる。

「諸君は戦いに来た。蛮族を殲り殺しにするのではない。我々は皇国の繁栄のため、彼らを滅ぼすのだ。我々は彼らのシルウトラスに眠る古の魔法帝国の技術を手に入れる。」

シルウトラスのテクノロジーはパーパルティア皇国を数十年若し

くは数百年躍進できる。神聖ミリシアル帝国をも凌ぐともされるそのテクノロジーは密約によって、かの国と分割する約束になっているが、シルウトラスを手中に収めることで、帝国との交渉に有利な条件を突きつけられるかもしれない。

「では、諸君。皇国軍人として民族の誇りになる戦をしようじゃないか」

戦太鼓が鳴り響き、号令ラツパと兵士の掛け声が大地を揺るがす。地竜は吠え、空にはワイバーンロード。空気を揺さぶる魔導砲とマツチロツク銃の硝煙が空気を汚し、無数の死体が積み上がる。

『シルウトラスの戦い』の幕が上がった。

第二十一話 暗躍する国々

「ギレン、ワシが言ったことを覚えているか？」

「ええ、ガルマがセツルメント国家連合の軍事顧問になった際に言いましたね『あの恩知らず共に戦争を教えてこい！』って」

「違う。それもそうだが、他のだ！」

「ガルマもドズルも父上のように腹芸を習えと……確か、宴会芸で」

「ちがう、それは政治家のような忍耐と腹芸を身につけろという意味だ！」

父と息子の会話ではあるが、冗談の掛け合いである。行政最高執行官であるギレンと国家元首デギンの会話とは思えない。だが、彼らの真の姿はこうなのかもしれない。

そもそも、国の指導者と言う者はその時代や施政者、その後の主義思想によって変遷する。日本で言えば、織田信長の冷酷無比な指導者ぶりは後の豊臣秀吉や徳川家康のイメージ戦略の一環として現実の織田信長とは違う存在へと変化した。一方、江戸幕府については明治政府の戦略として、幕府の無能ぶりを知らしめるべく、多くのプロパガンダを発信し続けた。

また、他国の指導者では冷徹なイメージを持たせるべく、わざと冷酷さを示すような情報操作を行い、逆に人気を勝ち得ている場合もある。ギレンやザビ家などは正にその通りであり、寡黙であるがカリスマ性に長けたギレンやキシリアと対照的に、人望の厚いドズルやアイドルの人気のあるガルマなどの家族構成は正に国民が求めるべき家族像であったりする。

「して、父上。本題に入ってください」

「む、そうか……ガルマの事だ。今すぐに引き上げさせろ」

年老いてから子供を持たない方が良いと言っていた。それは年老いてから子供の面倒を対処する能力が衰えたからだと言うが、子供の無茶には肝を冷やすからだという。しかし、ガルマの場合、現場指揮官としての立場もあり、加えて親しい兄がドズルと言う点において脳みそが脳筋化していた。

「核攻撃を地上で簡単に行う神経が理解できぬ」

「父上、彼らの文明と我々とは大分異なります。それこそ、価値観が全く異なるのです。我々はスペースノイドという選ばれた民の意識があります。彼らはそもそも惑星が球体であると認識しているかすら疑わしい。放射線の知識など持ち合わせているはずありません」

スペースノイドにとって放射線とはまるで欧米人が鼠を嫌い、ペストを恐れているのと同じようなものである。放射線との戦いは言わば宇宙移民者にとって歴史そのものであった。それこそ、宇宙移民の子供たちが理科の授業で学ぶ項目に『放射線』があるほど。

コロニーの隔壁や宇宙船の船体から飛び出せば、数多の放射線に晒される。それゆえ宇宙空間での戦闘には核兵器という存在は放射線が数多ある状況下において火薬と同じような意味合いの兵器と化した。

ミノフスキー粒子の軍事利用以前に考えられた戦術はレーザー誘導のミサイルによる攻撃と、コンピューター制御の迎撃システム、そしてメガ粒子砲や実体弾、光学レーザーによる艦砲射撃があった。核ミサイルの立ち位置は戦略級のMIRVタイプの物や対艦核ミサイル兵器なども考案され、宇宙世紀における核兵器の開発は1960年代の米ソ冷戦を思い起こさせる。

核動力戦車や歩兵携帯型核兵器、迫撃砲で発射可能な小型核砲弾などの兵器は宇宙世紀に入って再び開発された。多くは宇宙空間を想定していたため、佐官以上の艦長が核弾頭の発射ボタンを持ち、ルナツーやルウム、サイド7には未だに無数の核が眠っている。

ルウム会戦でも、コロニーに被害が出ない宙域では核攻撃を行い、戦術核によって一個戦隊が全滅することも少なくない。偶発的な核の応酬も視野に入れれば、コロニーを盾にした戦いも考慮に入れているという。ジオン軍司令部は外交面から戦時条約も必要であると外務省や総帥府に問い合わせていた。

「ギレン、まさか国民の声に耳を傾け、核を発射して大陸を焼き尽くすつもりではあるまいな」

「父上、確かに選択肢としてありますが、大量破壊兵器の使用にはセツルメントや中間層の国民から反対を受けますから迂闊な事は出来ません」

ギレンはおもむろに取り出したテレビのリモコンで電源をつける。

「ムンゾ4ニュースリポーター、ノグチがお届けします。現在、行政地区に多数の反核論者や非戦派市民がデモ行進をしており、治安部隊と睨みあっています」

「数日前に起こったアルタラス王国の首都、ル・ブリアスの核攻撃の被害に対して、アルタラス王国の仮設領事館には献花台が設置され、市民の多くが祈りを捧げています。」

「総帥府報道官のコメント『核の報復攻撃も選択肢に』を発表したことで、セツルメント各自治政府は遺憾の意を表明。加えて、公国議会の野党『立憲党』や『民主党』がギレン総帥に対して『正気の沙汰ではない』と強い反発を……」

「世論調査では核攻撃に否定的なのは80%近くに上り、一方でパールティア皇国に対する外交努力を求める声が三割近く増えています。これはサイド7にて成立した反セツルメント組織であるティターンズが大きく関わっていると……」

巨大なスクリーンに映されたのは、数々のニュース番組。一部にはズムシテイにあるアイドルグループ『ZC48』のコンサートで、心なしか二人の視線が向く。扉の近くにいる衛兵が、二人の私室にその

グループのグッズが幾つか見たことがあるため、口をへの字にして吹き出すのをこらえていた。

「軍事費の削減と予備役の民間復帰……マスコミの自由報道は転移の処置としては適切だが、思わぬ悪影響が出たな」

転移後、ジオンでは対連邦の軍事費拡大と情報統制については是非が問われた。これに対してギレンは予備役軍人を民間に戻し、戦時経済から平時経済の転換を素早く行った。ギレンはAIQ180の天才であり、経済の些細な出来事で数億ドルの資産が動くことを予期した。ギレンはザビ家の資産やジオンの国力を武器に、経済の修正を行った。それと同時に転移した惑星の状態を知りたい国民の要求や野党の突き上げに応え、マスコミへの情報統制を若干緩めた。

これは転移と言う混乱に乗じた反ギレン勢力を押しさえつけ、中道派閥をこちらに引き込むための手段の一つだった。ただでさえ、政治家達の動揺もあることから、初期の段階で引き入れることを視野に入れた政策。加えて貧民層や中間層も含めたもの。

しかし、これに呼応して肥大化したのが国民の声に対して機敏な反応を示す野党だった。惑星への情報公開から資源確保のための植民地化や帝国主義的な主張をする政治団体も発生し、秘密警察やキシリア機関がそれらの締め上げを行った。

だが、国民の声に敏感なマスコミはこれらの動きを声高々に伝え、次第にその主張に感化された市民が民間企業を通じて惑星への植民地化を画策。スペースノイドという鉱物資源の少ない国民であるため、ギレンですら逆らうことなく、民間企業の流入と各地で起きるスペースノイドの帝国主義的な側面が露わになる。列強の言う「劣等民族」「蛮族」と言った言葉を使い、惑星圏の人間の不信を買う。その動きに歯止めを掛けようと動き、ガルマの政治手腕により抑えられたが、野党やマスコミを中心に反ギレン派が集中しつつあった。

とは言え、転移後の混乱とそれに乗じた反乱を予防したのは大きい。ただ、戦争遂行のため、一つに纏まる必要がなくなったことで必要以上に社会主義に傾倒する必要は無くなった。連邦の脅威が弱

まった現在は声高々に侵略を唱えても何も処罰されないことで、ジオン国内では言論の規制が緩和された。

「内戦までとはいかないが、このままではジオンは二分されるぞ、ギレン……」

「核の使用は想定外でしたが、こちらも軌道上から核を投下して敵を……」

「馬鹿者、あの惑星の全てを敵に回す気か？」

スペースノイドにとって核兵器は戦術として、戦略として優れた兵器であることは間違いない。宇宙空間ではさほど被害は出ないが、大気圏内で炸裂した場合、基本的に放射線防護のない地上の軍や人々はその莫大な放射線と熱量によって死に至らしめることだろう。

そして、その威力は『第二の太陽』『神の炎』と揶揄されるように、ル・ブリアスの核爆発は列強国の興味を引いた。古の魔法帝国の遺物への考古学研究が進み、核開発競争になる。更にジオンが仮に皇国へ核攻撃すればどうなるか。パーパルティアへの核攻撃は一時的に親ジオン国の間では称賛されるだろう。だが、一方でムーや神聖ミリシアル帝国などの列強からすれば、今後の仮想敵国と定められる可能性もある。

グラ・バルガス帝国の存在もことから、ここで『世界の警官』のように各国に部隊を派遣していくことになるかもしれない。逆に反ジオン同盟を作り、対立されれば厄介なこととなる。グラ・バルガス帝国や未だテクノロジーの理解の及ばぬ神聖ミリシアル帝国などについては、少数の選抜された外交官しか送っていない。

内憂外患と言うほど深刻ではないにしろ、難しい立場にあるのがギレンだった。

「核は撃ちませんが、舐められたらやり返さねば」

「それは構わんが、ガルマを救え。これは何としてもだ」

もし、ガルマが死ねばジオンは砂上の城と化す。国民の人気を集め、ザビ家の行く末を左右する若者が居なくなれば、国民の支持母体

を失いかねない。ギレンやキシリアを支持する国民は年齢層を見てみると親世代や祖父世代。しかし、若者の支持はガルマに集中している。彼が死ねばザビ家の権力基盤は失われるだろう。

自分の息子が死ぬのを黙って見ているつもりはない。もし、ギレンやキシリア・ドズルが動かなければ、自身の乗艦『デギン・ザ・グレート』を大気圏突入させ、息子を救いかねない。

「議会で皇国への宣戦布告を議題に出さねばなりません」

「儂の派閥に声を掛けよう。野党の方はまだ難しい。しっかりとやれギレン」

定時の話し合いが終わり、デギンは公王府へ。ギレンは総帥府から公用車に乗り継いで公国議会へと向かった。

総帥府から公国議会までの道のりはそこまでではないものの、親衛隊の装甲車や重火器で武装する武装近衛兵、首都防衛大隊から抽出されたザク3機が周囲の警備についていた。ギレンが現れたことによって、道に立っていた民衆は支持の声を上げるが、その中には「核反対」「戦争の即時停止」を訴える市民団体。その他、戦傷軍人会がメインとする政治団体は「惑星へ侵攻」「復活帝国主義」という文字の横断幕が掲げられ、ギレンは溜息をつきながらも公国議会入り口に降り立った。

すでにマスコミ関係者が詰めかける中、公国議会の入り口に入る。

【ギレン総帥閣下が今、議会正門に到着しました】

【今回、アルタラス王国で起こった核攻撃に対し、ダルシア・ハバロ首相が緊急集会を要請。軍務や緊急の用件以外の議員は既に集まっております、閣僚も軒並み足を揃えています】

【一方、セツルメント国家連合議会は公国に対して過剰な戦争遂行によって多大な犠牲が出ることを良しとしないと発表。今回の攻撃に対する犠牲には哀悼の意を挙げていますが、セツルメント内に連邦の影響が強いとみていいでしょう】

様々なニュース番組の報道カメラ、新聞やネットニュース向けの動画撮影。親衛隊警備兵が悲鳴を上げる程のマスコミの量に忙殺されながら、なんとかこらえている警備兵のうしろをフラッシュの眩い世界を通ってギレンは議会の中へと入った。控室で議会用の秘書と話し合い、原稿を受け取り、素早く頭に叩き込み、誤字脱字や咄嗟の芝居に関してメモを行う。

「ギレン・ザビ総帥閣下の入室です」

ギレンの入室と共に一斉に起立する議員と観席のマスコミと見学する企業関係者。本来であれば、旧時代の議会と同じく拍手で迎えるだろう空間には、沈黙が満たされていた。異例の自粛ムードが議会を満たしており、ザビ家の末席にいるガルマが爆心地にほど近い場所に居ることも含めて、多くの議員はザビ家へ同情の視線を送っていた。

「国歌斉唱」

議会司会者が号令し、後ろの親衛隊音楽隊が一番のみを演奏する。

我らのジオンよ、地上の者の楔から

この世の鎖を断ち切つて 自由に行かば

家族を護るにあたりて

兄弟のような団結があるならば

銀河のすべての人類よ

団結せよ！ 団結せよ！

艱難の時にこそ 冠たるスペースノイド

今こそ立ち上がれ

革命と独立の時代に生まれた国歌を元に作られたそれらはジオンの国民を束ねるのに相応しく、ギレンの意向を汲んだ歌詞はまさにジオンにふさわしい。しかし、彼の面持ちは良くなることはなく、緊急集会における話し合いが始まり、ギレンの側近の連絡や議事進行の司会が定例と同じように事を進めていく。

しくは民族としての意思がそれらの戦争に深く作用する。戦争を行う当事国だけでなく、周辺諸国も関わるため、中立を表明する国家や大陸の反対側にいる戦禍のせの字すらない国家も戦争と言う消費行動には注目せざるを得ない。

列強においてはまるでブロック経済のように自分の勢力圏内での流通が出来るような経済状態が続くために、文明圏外国家は言わば冷戦時代の第三世界に近い様相だった。

そんな第三世界の国家が一同に集まって会議を行う国際会議「大東洋諸国会議」がある。国連と言ったすべての国家が加盟できるような国際組織ではなく、基本的に互いを国家と認め信任する国家しか入ることはできない。

とは言え、二つ返事。国書を渡して国交を樹立し、相互に独立国であることを認め合うというもので、大東洋諸国会議に参加する条件は「対等の相手とみなせるかどうか」であったりする。

元々会議の提唱国が文明圏外の国であったため、列強のパーパルディア皇国や第3文明圏の国々は「会議は必要が無く、無意味」として不参加。そのため、第三文明圏外諸国の集まりのみならず、その他の国家も集まる寄り合い所帯となっている。また、対等な関係を築こうとする国家間において比較的に本音を言い合うかなりオープンな愚痴に近い話し合いもあったりする。そのほとんどがパーパルティアへの非難や各国家の情報交換など。横のつながりを大切にしようという組織である。とは言っても、この会議の情報は様々な諜報組織に流れるため、明確な列強への敵対行動の通知は行っていない。

こうした国際組織は嘗て起きたパーパルティア皇国の行おうとした大陸統一事業「ファイルアデス大陸統一戦争」の時に諸外国が同盟の時に存在した。数百年もの歳月を経ているため、同盟関係は歴史上の物になって久しいが、同盟や慣例法といった国際法はこうした大東洋諸国会議に引き継がれていた。

「これより大東洋諸国会議を開催します」

会議の議長を務めるエルフは魔導拡声器を使い、会場の外交官に開

会を宣言する。各国の代表の手には魔導印刷機や機械式印刷機によって、植物紙に刻印されたジオン公国の詳細とアルタラス王国に対して行われた大量破壊兵器についての報告が記されていた。

「まず先に述べるのは、アルタラス王国についてだ」

議長が提案し、最初に手を挙げたのはアルタラス王国と深い関係にある中国に似た文化様式を持つマオ王国の外交官と武官だった。

「マオ王国軍情報担当のビラン上将です。アルタラスの国家指導部はシルウトラス市に移動していますが、行政は停止。軍も再編していませんが、組織的な反撃能力はありません。パーパルティア皇国大陸軍の部隊に対しては遅延戦術しか選べない状況が続いています。ジオンの援助が無ければ、あと5日で陥落するでしょう」

「皇国の使用したものについてはご存知でしょうか？」

「いえ、我が方でも確かな事は申せません」

マオ王国の武官が言いよどみ、二個離れた席にいたマール王国の外交官が挙手する。各国外交官の中でも文明圏内に位置するが、パーパルティア皇国との関係悪化と今回の攻撃に関して様々な方面から調査を進めている彼らである。既に列強ではおおよその検討は付いているだろう情報を提供するのには、列席者からの情報を求めているからだった。

「マール王国外務省アルドルフです。現在、列強や魔導強国の情報からあれらの技術形態は古の魔法帝国のものであることが判明しています」

列席者の面々に衝撃が走る。

数か国は列強にも隠密を忍ばせているだろう。驚いた様子は見せていない者も何名かいたが、殆どがその事実をこの場で知ったようだ。

「破壊力はご存知の通り、街を一つ消し去る程。シルウトラス市などに流れる負傷者は近隣に住む人々。ル・ブリアス中心部にいた人々は

跡形もないと」

「そんな……嘘だろうに」

「まさか、パーパルティア皇国と言えどもあのような魔導兵器を」

パーパルティア皇国は第三文明圏の中心的国家。その国力や魔導技術、培ってきた文明に関しては他国の追随を許さない。

しかし、その上。神聖ミリシアル帝国以上のテクノロジーを持っていた古の魔法帝国が持つ魔導兵器「コア魔導兵器」と呼ばれる一連の大量破壊兵器を持っているのは推定でも神聖ミリシアル帝国だけだろう。

今後のことを考えればパーパルティア皇国が神聖ミリシアル帝国と二強の状態となる。そうすると、パーパルティア皇国は更なる国力増強のために領土拡大と大陸統一の侵略政策を推し進めることになる。

「シオス王国外務卿補佐シムランです。懇意の商人から、アルタラスとジオン公国が協定を結んでいたと聞きます。我が国はジオン公国の行動に関しては支持を表明します」

「何だと！」

「正気か？」

この会議で行われるのは情報交換だけ。それは会議とは名ばかりの情報交換会。話し合いというよりも各国の情報目当ての外交官が殆どだ。自分達が列強に喧嘩を売ると宣言する行為は列強に伝わるのは避けられない。

シオス王国の宣言はパーパルティア皇国に糞を投げつけるようなもの。アルタラスの二の舞になるのは明らかだった。

「本日中に我がシオス王国はジオン公国との間で共同防衛条約を発行。我が国はジオンと運命を共にするつもりだ」

各国外交官はジオンの詳細を記録した書類に目を通す。そこに書

いてあるのは星間国家、人型機動兵器、神聖ミリシアル帝国を上回る国力。眉唾物であつてほしいと思うような書類だが、シオス王国の台詞が決定的になった。

「トールパ王国外交副卿のデンランです。我々はジオンを危険とは思っていない。彼らは決して自分からは襲つてこない。しかも、我が国や同じ文明度の国が大金を出して列強から買う技術が……ジオンの出版物で買える。しかも、格安でこれが買えた。ジオンが列強以上の大国であることは明らかだ」

彼の手にあつたのはジオンの学生が使うような参考書。ジオン軍幼年学校受験のための本であつた。内容は中等部向けの受験勉強の内容だつたが、戦時教育のために射撃方法や歩兵戦術、レーダーの基本原理と言つた内容である。MSの操縦方法は流石にないものの、戦時教育のための教育カリキュラムであつた。文明圏外国家はこうした技術を求めて学生を送つて技術を吸収、ある時はスパイ紛いの事もやつてのける。

しかし、その本の内容はスパイマスターが情報局の上司に殴り込みに行くぐらいの衝撃だつた。

「フェン軍祭事件で列強のワイバーンロードをあつさり叩き落とす……もし攻めてきたら、はつきり言つて無理。彼らが足を舐めろと言えば、そうするよ」

「クワ・トイネ公国外務省のルツソです。一言よろしいでしょうか？」
ひと際、会議で目立っていたのがクワ・トイネ公国外交官のルツソだつた。見るからに異質。列強の文化様式の衣服でもなければ、クワ・トイネ公国の民族衣装とも異なる作り。ジオンのスーツブランドに身を包み、ジオン政府関係者にも似た格好はあまりにも会議に合わない。

それでも、彼の存在はひと際目立っていた。

「我が国はロウリア王国の度重なる衝突に耐え、先の戦争に至りまし

ドバイスをする立場。命令があればスパイとして活動もできるが、二人とも技術士官としてのキャリアがあるため、スパイとしての技術も経験もない。

「アイナंक国際空港は空軍基地と併設しており、緊急発進時は軍務が優先される。とは言っても、民間航空会社も設立から間もなく、神聖ミリシアル帝国の空中船舶会社と比べるとシェアもそこまで高くない。二人はムーの軍服を纏い、アイナंक国際空港に向かう鉄道を乗り継ぎ、外務省の計らいで公用車に乗り込み、文明圏外国家のような舗装のない凸凹道でない、アスファルト舗装された幹線道路を進んでいく。」

「軍の人間を外務省が公用車に載せて移動させるとは……」

「スーツ組なのに気前がいいよね」

たかが技術将校のために未だ台数の少ない自動車を使うなど、普通ならばありえない。マイラスとリア両名は自分たちの任務が明らかに異常であることを感じ取っていた。古代遺跡の調査であれば考古学研究者が行い、秘密裏に鹵獲した魔導兵器の分析ならば本土の奥地にある秘密研究所に運ばれる。民間企業や魔導文明の外交官の目が届くそこで分析を行わない。

技術顧問は本来、軍事関係者として民間企業についていくことや外務省関係者と共に武官待遇で諸外国に赴いて諜報員と共に分析を行う。本来なら、もう少し準備期間があるはずだが、急遽正装の状態ですぐ空港に行けというのはどう見ても妙だ。

空港に到着し、来賓棟の一室に待機して20分後。

軍服を着た者と、外交用礼服を着た者2名が部屋に入ってくる。

「二人が技術士官のマイラス君とリア君です」

軍服を着た者、所属はムー軍司令部における第三文明圏を主とする情報局第三課の人間らしく、鼻につく情報畑の匂いが二人の危機意識を刺激する。外交用の礼服を着た者は軍服にも似たムーの民族衣装の礼服を纏う外務省職員に紹介する。

「マイラス少尉はこの若さにして第1種総合技将の資格を持っていません。こっちのリア中尉は魔導文明についての対抗兵器の研究を行っています。双方、兵器開発・分析のスペシャリストです」

「技術少尉のマイラスです」

「同じく中尉のリアです」

自己紹介を行い、会合のための席に全員座り、任務に就いての説明が始まった。

「何と説明しようか……」

「今回君を呼び出したのは、正体不明の国の技術レベルを探ってほしいのだよ」

「グラ・バルカス帝国の事ですか？」

マイラスはチラリとリアの方を見て目配せする。

しかし、思わぬ答えが返ってきた。

「いや、違う。本日0400時頃、ノーチラス海岸沖50kmの海上にある船が3隻現れた。海軍が臨検すると、ジオン公国という国の特使がおり、我が国と新たに国交を開きたいと言ってきたのだ。君達も既に聞いたことがあるだろう。あの国だ。これを見てもらおう。」

外務省職員は『機密』と書かれた封筒から写真を数枚取り出すと、テابلルへと広げる。

「まさか……」

其処にあったのは、以前会議で見たことがあるジオンの船舶だった。高精度の偵察カメラで撮影されたそれは、ぼやけていたジオンのイメージのパズルのピースが埋まる。これまでぼやけた写真や微妙な情報しか得られなかったが、これではつきりした。

「そして魔力感知器にも反応が無いので、魔導船でもない。機械による動力船であると思われる。」

「やはり、そうですか……」

彼らの放送を裏付ける情報として、臨検する時に発した無線信号が

あまりにも強力だったことや船舶の大きさが尋常ではない程。そして、人型兵器の存在があったなど、ジオンの放送と裏付けできている。「フエン防衛の戦力やアルタラスでの戦いにだけでなく、こちらにも戦争を仕掛けるのではと危惧している。現に第三文明圏外近くの国家と次々条約を結んでいる。君達には放送の真偽とジオン軍の兵器を分析してほしい」

「既に君達技術局がジオンに対して分析していることは知っている。今後は直に彼らを見て分析をお願いしたい」

既に駐在する大使や外交官を通じてコンタクトを取っていたが、今回のような船に乗ってくると言った直接的行動を行ったのはかなり性急に動いているように感じられ、外務省の職員の表情は硬く、顔に脂汗を滲ませていた。既に、空軍機や海軍の艦隊は警戒態勢を取っており、部隊が暴発して戦争状態になるのではと危惧する政治家もいるくらいだ。

「本来なら船舶で来ているから湾港都市にでも招くつもりだったんだが、港湾警察についていた職員が勝手に空港を指定してね。航空機を持たない蛮族と高を括っていたんだろう。結局、彼らは幾つか滑走路について質問した後、この空港にやってくることになった」

「ジオン軍の航空機について何かご存知でしょうか？」

リアは神妙な顔で職員に質問した。

「先導している空軍機によれば、相手は時速160km程度の飛行速度であり、遅すぎて速度を合わせるのが大変だったと報告を受けている。それでも、彼らの科学技術に対して判断が分かっている。出来れば、分析に長けた君達に直接見てもらわんとな」

「外務省の要請としては、ジオンが第3文明圏フィリアデス大陸のさらに東に位置する文明圏外国家であるか否か判断してもらいたい。彼らが世界中に流している情報の真偽を見極めてほしい。一週間後には政府と会談を行う予定だ。外交団には軍人もいる。技術者とし

て軍人として接触し、情報収集を行ってくれ」

「解りました」

二人は外務省職員から今後の予定と資料を渡され、数時間後にジオンの外交官と話をすることになる。その前にマイラスとリアは外交官と共に格納庫にあるジオンの航空機を見ることになった。

マイラスは、久々に技術者魂の震えを感じていた。

ジオンの飛行機械とはいかなるものだろうか？

ムーの航空機はやつとワイバーンロードなどと互角に戦えるようになり、神聖ミリアルシアル帝国の航空艇ともほぼ互角に戦える性能を持つ。しかし、もしジオンが宣伝している通りの文明を持っていれば、自分達の航空機は紙飛行機に等しく、簡単に撃墜されてしまうだろう。

マイラスとリアは格納庫に移動したジオン公国の飛行機械を眺め、啞然としていた。

それは軍用として開発されたV-22オスプレイを彷彿させるシルエツトを持つティルトローター航空機だった。MS運用を想定して設計されたファットアングル輸送機とは異なり、航空機のシルエツトをもつそれは第一次大戦中の航空機を開発しているムーと比べれば如何に先進的な機体であるか、窺い知ることができよう。

コロニー内では航続距離がそこまで必要ではなく、逆に遠心力による疑似重力を形成するため、一定の高度まで上昇せず、無重力と風圧で操縦不能にならないような特殊な技術が求められていた。

航続距離の問題や惑星内での運用を想定した航空機のノウハウしかないジオン技術局はセツルメント国家連合経由でもたらされた連邦系企業の軍用機データから設計。配備された『TVJ-30ユニカー』は他のムーの航空機よりも二回り大きいため、周囲にいたジオン軍整備士と警備兵を除き、ムーの整備士は啞然としていた。

その機体に浮力を持たせ、機体を持ち上げるエンジンはムーに存在せず、また複雑なシステムが必要になる。ティルトローター式エンジン、所謂垂直離着陸機が誕生するのはムーのテクノロジからすれば、あと30年必要になるだろう。

「なんとという技術!!!」

マイラスは我を忘れて叫んでしまう。とは言え、周りの見物人も似たような反応をしていたため、彼の存在はそこまで奇抜ではない。

何時も凜としていた年上のリアでさえ、ヘナヘナと座り込んで尻餅をついていたのだから。その後の二人の足取りは重く、事前に用意された資料やデータを読み込んでも、ジオンの国力がムーを凌駕していることを再認識させられ、二人はまるで幽鬼の如く、面談の時刻になってジオン外交官のいる応接室へむかった。

「蛇が出るか、それとも獅子が出るか」

「この場合は獅子でしょう」

ムーの昔話にある「ほら穴の怪物の恐ろしさ」は所謂、知らない不確定要素のある怪物についての恐ろしさを伝える話である。農民が洞穴にいる動物を怖がり、その存在について見たこともなければ、人伝にしか聞いたことしかない。そのため、話は誇張され、ネズミから蛇へ。蛇から狐へと姿を変え、拳句の果てに獅子になってしまった。結局、洞穴にいたのは母親とはぐれた子犬であった。

だが、その知らない恐怖と言うのは、あり得ぬ虚像を想像し、それが元で争いが生まれるのだという一種の説教じみた話である。ともあれ、「扉の向こうにいる人々は間違いなく子犬ではない。獅子より怖い生物だろう。」

マイラスは部屋の扉をノックした。
「どうぞぞ」

扉をゆつくりと開ける。中には、2名の男がソファアに座っていた。

「失礼します。ムー陸軍マイラス技術少尉と申します。隣はリア中尉です。お時間をいただきありがとうございます。」

「いえいえ、とんでもない。ジオン公国外務省シユベルグです。こっちは補佐のティルマンです。ティルマンは外務省職員ではありませんが、突撃機動軍から出向している将校の一人です……」

「よろしくお願いします、マイラス少尉殿。私はジオン公国突撃機動軍所属のティルマン・ヘクター大尉です。」

社交辞令と挨拶を済ませ、全員ソファーに腰を下ろすと、マイラスはバッグの中から今後の予定の記された書類を渡す。

「では、具体的にご案内するのは、明日からとします。長旅でお疲れでしょうから、今日はこの空港のご案内の後はアイナंक市のホテルへのご案内します。一週間後の会談までの間は外務省職員と我々が同行いたします。」

「分かりました。予定では海軍基地と陸軍基地にも見ることが出来るとお聞きしたのですが？」

「はい、こちらの資料をご覧ください」

外務省職員の管轄ではあるものの、軍人による説明と快く思う彼らに対してマイラスとリアは、滞りなく伝達事項を伝えていく。その後は外交官を引き連れ、まずは空軍基地訪問となり、空港格納庫内に連れて行く。

格納庫に入ると、複葉機が姿を現した。その胴体は全て金属製。識別のため青いラインが塗装され、機銃が両翼に配置され、訪問のために整備士が新品同様に磨き上げていたのだろう。光沢の見えるそれはジオンの外交官をうならせた。

マイラスは咳ばらいをした後、説明を始めた。

「この鉄龍は、我が国では航空機と呼んでいる飛行機械です。最新鋭戦闘機『マリン』最大速度は、ワイバーンロードよりも速い380 km

／h、前部に機銃・・・ええと、火薬の爆発力で金属を飛ばす武器です。ね。操縦士は1人。メリットとしては、ワイバーンロードみたいに、ストレスで飛べなくなる事も無く、大量の糞の処理や未稼働時に食料をとらせ続ける必要もありません。空戦能力もワイバーンロードよりも上です。」

—どうだ!

マイラスは僅かに思うムーの優位性を持って説明する。放送をまだ真実だと受け止めていない部分があり、最新鋭戦闘機がジオンにとって骨董品レベルとは思いたくない。一種の現実逃避じみた説明と心境だった。

そんなマイラスの説明にジオンの突撃機動軍から出向したテイルマン・ヘクター大尉は頷き、非常に良い笑みを浮かべていた。

「こちらは水冷式?それとも空冷式?」

「……えつと空冷式です」

「なるほど、機体装甲はアルミ?それともスチール?」

「アルミとスチールの複合です。」

「なるほど、シュベルグ大使。マリンのスペックはWW2初期のグロスターのグラディエーターに近いですね」

「ああ、たしかムーアの航空ショーで見ましたことありますね。成程な」

空冷式や水冷式は理解できる。だが、グロスター?グラディエーター?ムーアとは一体何だ?いったいどういう意味で言ってるんだ?
?

マイラスは先程見た航空機について尋ねてみた。

「ジオンの航空機はどのくらい速度が出るのですか?」

航空機は速度が重要だ。無論、機動性や旋回能力、兵器の能力も鑑みることが必要だろう。しかし、スピードについては空中戦の時に鈍足では接近戦で有利である。敵軍より高速で移動できれば、あらゆる点で戦術的有利に進み、戦略上有利でもあるのだ。ふと、ヘクター大尉とシュベルグは目配せし、「よろしいので?」「構わない」と二言三言告げると、ヘクターは説明する。

「大気圏内戦闘機であれば、ドップの最高速度マッハ4.0くらいでしようか。ただ、スペック上の事ですし、実際にその速度を出して作戦を行ったことはありません。マッハというのは音速の4倍程度です。ただ、大気圏運用兵器は運用実績が少ないのが玉に瑕ですが」

「えっ!？」

マイラスは啞然とする。その数値は未だに有人機では到達できない速度であり、神聖ミリシアル帝国でさえ、非公式では未だ有人機による音速到達には至っていない。まさか、この場で言うとは思いません、マイラスは驚いてしまう。

「いやいや、シユベルグ殿。ラジオや魔導通信で多くの情報を公開しています、それはあまりにも……」

「マイラス少尉、ちよつと待って。シユベルグ殿、ヘクター大尉殿……我が国は数年前から航空戦力を導入したばかりなのです。ジオン公国はかなりの航空立国なのでしょね」

狼狽する彼を落ち着かせたりアは話を切り替えるべく、マイラスを制して話し始める。他の文化面。女子が好きなお菓子の話や料理について話します。これには文化面だけでなく、食用植物について興味を持ったシユベルグと会話が弾み、スムーズにムーの大衆化が進む自動車へ乗り込んだ。ムーは数十年のうちに石油資源を使用した自動車を国民向けにすべく、工業能力の向上に努めていた。未だに魔導文明に対する国防費、文化面の侵略に対しても防御しなくてはならず、民族摩擦を考えて対策を練らねばならないため、本格的な工業能力の向上は十年ぐらいの計画を必要としていた。マイラスは憔悴しきった顔をしつつも、喉からひねり出すように声を出した。

「ジオンにも、車は存在するのですか？」

「ええ、世帯によってもまちまちです、市街地ですと鉄道やリニアレールの方が使用されやすいですが、一家庭に一台と考えるもいいでしょうね」

「リニアレールとは？」

「我が国は星間コロニー……何というか、宇宙空間では限られたスペースを活用するために、隔壁の外に鉄道を走らせる……今度動画で見せますが、電磁石を利用してます。原理については技官があとで説明しますが、空気の汚染も考えなければなりません」

シユベルグは「説明が下手ですいません」と謙虚な姿勢を見せる。スペースノイドにとって大気を汚染する重工業は発展しにくい。画期的な空気を過システムや真空状態でも金属加工ができるシステム、空気を汚染しない製造法を確立させたジオン公国はコロニーの工業立国として繁栄した。その隆興は連邦との対立を生むのだが、数多くの工業製品がジオン製へと置き換えられていた。

もし、リニアレールやコロニーの外で運用する鉄道網について説明するとしたら、コロニーの存在を知らなければできないだろう。スペースノイドとすれば当然と思うことが分らないとなると、シユベルグのような百戦錬磨の外交官であっても戸惑ってしまう。

一方、マイラスの心は揺れ動いていた。ジオンの未知の技術について知りたいと思う反面、ジオンとムーの技術力かなりのひらきがある事をまざまざと見せつけられ、マイラスはムーがどれほど凄いかと、威嚇するような戦術は使えない事を知って委縮していた。

ジオンの外交官達をホテルのスイートルームに招き、明日の予定を教えた後、マイラスとリアは驚きの連続に疲れ、満身創痍の状態でベッドに倒れこんだ。明日の案内でも相当疲れるであろう、祖国の誇る技術がジオンより下であることを知るのだろうかと思うと二人の気持ちは落ちるばかりだった。

そして、翌日。二人はジオンの外交官をアイナंक市にある国立歴史博物館へ招待した。幾つかのマスコミが取材としてカメラを向け、それを警察官やムー憲兵隊によって押し引いたりする警備が続く。マスコミの中には列強の諜報員もいるはずで、警備担当の憲兵や警察は緊張の時間を過ごしていた。

マイラスとリアは博物館の案内をしていた。本来なら博物館の職員の仕事であったが、外交的に触れてはいけない部分もあるため、二

人のような軍人が担当する。そして、外交官一同はムー古代史のセクションにたどり着いた。

「では、我々の歴史について簡単に説明いたします。まず、各国にはなかなか信じてもらえませんが、我々のご先祖様は、この星の住人ではありません」

「ほう」

「時は1万2千年前、大陸大転移と呼ばれる現象が起こりました。これにより、ムー大陸のほとんどはこの世界へ転移してしまいました。これは、当時王政だったムーの正式な記録によって残されています。これが前世世界の惑星になります」

「当時のムー王国は周辺大陸よりも革新的な科学技術を保有していました。転移直後の混乱や風化によって大半の技術は損なわれましたが、今でもテクノロジーの復興を行っているのです。」

マイラスはムーの言語で記された壁一面に掛かれた世界地図を見せる。復元と現代風のデザインに直されたそれはマイラスが知る嘗ての旧世界の地図だったが、それを見たジオン外交官達の表情が強張っていた。

「おい、これは……」

「やはり、ビショップ博士の言っていたことは間違いないようだ」

「総帥府に報告をします」

騒がしくなった外交官に驚いたマイラスだったが、彼の表情に気づいたヘクター大尉は説明した。

「既に我が国の科学者が貴国は転移国家だということは調べがついていた。古の魔法帝国の転移時期と貴国の時期が重なっていますからね。それと、我が国と貴国のルーツは同じと言うことです」

「ルーツが同じ？一体どういうことです？」

その話を聞いていたリアの表情が曇る。

「我が国が地球連邦政府に対して独立戦争を仕掛けていたのはご存知でしょうか？ラジオや魔導通信装置で情報公開をしていますので。地

球の人口増加を懸念して、地球連邦政府は増えすぎた人口を宇宙に移
民させた……これが世界地図です……」

ヘクター大尉の持つ外務省発行の説明書類から世界地図を取り出
した。其処にはムーの旧世界の世界地図とほぼ同じ大陸が記されて
いた。

「我々の元いた世界にも、1万2千年前に、突如として海に沈んだ大陸
があると、言い伝え程度ですが残っています。貴国が転移した後に地
球は氷河期や地殻変動によってこのアトランティスと書かれている
地域は永久凍土と呼ばれる大陸へと変貌しました。私の推測ですが、
古の魔法帝国の転移魔法？でしょうか。あれによって貴国はこの惑
星に転移。その余波によって地球の環境が激変したと推測できま
す。」

やや、U^宇 C^宙 0079の世界地図とは異なるが、転移魔法によつ
て地殻変動によつて変動したと考えれば説明がつく。

「ははは……まさかの歴史的発見ですね……」

すでにマイラスの思考能力は限界になっていた。マイラスのよう
なムーの技術者、しかも高等教育を受けた物であれば、これがどんな
SFの代物であるか理解できるはずだ。想像以上の情報によつて脳
が一時的にシャットダウンする彼と同じような情報を受けたりアも
同じく、コンピューターがフリーズし、エラーを吐き出したかのよう
な顔をする。その様子を見かねたヘクター大尉だったが、外交官であ
る以前に軍人としての彼は、固まる二人を励ました。

「私もその事実を聞いたとき、同じ気持ちでしたよ。勿論、心の整理が
必要ですし、我が国は貴国と同じ星の生まれ。生体研究をすれば同じ
遺伝子が酷似するものが出ると考えています。国家の垣根を越えて
友人になれると思いますよ」

外交官やムーの外務省職員のドタバタした一幕は相互の政府中枢
への連絡が終わり次第収束し、一通り説明した後にムーの古代史や中
世、そして現代にいたる歴史を説明していく。

一万二千年前に転移したムー。

もし、地球と同じであればムーの旗が地球連邦の国旗ポールに掲げられ、彼らに対してジオンが独立戦争を仕掛けていたかもしれない。転移さえしなければ、地球の覇者は現在の人類でなく、ムーの人々だったことだろう。

だが、転移したことによってムーは自然の猛威に晒された。

転移したことによって、地熱エネルギーを利用する発電所の大半が機能を停止し、一時的な内乱状態に発展した。一万二千年前のムーはジオンと同レベルの科学技術を持ち、繁栄していたのだろう。だが、転移後に電力供給源の喪失に伴って政府中枢も混乱。数百年に渡る内乱状態に発展したのだ。残された資料によれば、ムー王国は大陸の覇者であったものの、少数民族を支配しており、電力源消失に伴って武装蜂起したのである。

また、転移は惑星の生態や環境、微小の微生物や細菌、ウイルスなどと出会った。鳥や魚、その他野生生物や周辺国家との接触により、これまでにない病原体が持ち込まれ、多くのムー王国民が犠牲となった。

「黒死病」「コレラ」「インフルエンザ」「出血熱」

地球における大航海時代は病原体を拡散させるきっかけであり、南米の民族が病原体に晒され滅亡したように、ムーは惑星内のウイルスや病原菌によって多くの人命が失われた。そして、競合して対立する国家が居なくなったことによってムーの成長は滞った。

転移前のムーは現在の南極大陸にあったとされるアトランティスと冷戦状態だったという。仮想敵国として対立していた国ではあったが、互いに競い合うことで成長していたのも事実。同レベルの国家が存在しなかったことも含め、ムーのテクノロジー発展は滞り、先の内乱状態と環境激変にともなう疫病の発生によって国力は大幅に削られたのだ。

ムーは荒廃しつつも、残された技術力をもって国の維持に努めたが、技術体系の違う魔導文明の国家に侵略を受け、ムーの大陸は浸食されていく。民族自体が他の流民と混ざり合いながらも、失われたテクノロジーを保持、探究しながらも何とか王制を何度も変え、ムーそ

のものを失いそうになりながらも、何とか文化と民族を保ち続けていたムー。

ムーと比べれば、ジオンの歴史はそれこそ100年にも満たず、一万二千年前の歴史的遺物を管理し、後世に語り継いでいることにジオンの政府関係者は驚きを隠せなかった。

グロッキー状態のマイラスだったが、そこにいたシュベルグ外交官は彼の肩を叩く。

「マイラスさん、大丈夫……ではなさそうですね」

彼の様子はまるで捨てられた子犬のようだった。もし、雨水で濡れていれば保護したくなるような様相であるが、彼はムー国軍人の一人である。外交官のシュベルグが気に掛けてくれたことに謝罪してリアと合流しようとするが、彼に止められる。

「マイラスさん、少し休憩された方がいいようだ。」

「いえいえ、休憩するわけにはまいりません。シュベルグ殿、私や我が国はもつと頑張らなければ」

「いえ、それは違いますよマイラスさん……」

マイラスは彼の言っている意味が分かっていなかった。国力は勿論の事、テクノロジーはムーを圧倒し、勝者として勝ち誇っていいようなものなのに、その本人は敗者を労わっている。マイラスにはそれが苦痛でたまらなかった。嫉妬に近いその黒い部分はマイラスの表情を変え、怒りの表情を作り出す。

「マイラスさん、我が国の歴史は100年も経っておりません。アイデンティティ、ジオン公国人という気概など、形成されたのはつい最近。私は未だに祖国はジオンではなく、嘗て住んでいたベルリンを思い浮かべます。それでも前の祖国は貴国の歴史と比べても格段に最近です。」

シュベルグはスマートフォンのような携帯端末を取り出して、画像データを画面に映す。マイラスはまたも見せびらかすのではないかと思うが、その画面に出てきたのは若干荒い画像である。其処には嘗てドイツが東と西に分かれていた写真なのか、ドイツ民主共和国の国旗とシュベルグと思しき人物が映っていた。

「これは父がマイラスさんと同じぐらいの歳の頃です。この時の祖国は大国の影響で二分されていて、民族と言葉は同じなのに掲げる主義と思想は違うだけでお互いに銃を向け合い、壁を作って対立する。酷いものでしたよ」

「そうでしたか」

「我が国は数百年、長くて千年足らずの民族の歴史を統合しています。貴国の歴史は私の知りうる中でも最長の歴史を誇ります。一万二千年前からある国家はまずいけません。あつたとしても、存在したか分りません。それを貴方は誇りにすべきですし、我々はその熟成したアイデンティティや歴史を羨ましく思います」

一万二千年前からの歴史を持つムー。それは過酷な惑星の環境と苦難に立ち向かいながらも国と文化、民族を守ってきた国として認識しなければならぬ。テクノロジーの発展がジオンの方が上だとしても、ムーの歴史や文化の熟成度は遙かに上。テクノロジーが国家の優劣を左右するものではなく、マイラスは多少救われたのか、表情を取り戻す。

テクノロジーや軍事力がすべてではない。誇れるものなら他に色々存在する。

他にも海軍基地の視察や陸軍基地の視察、工場・学校の視察を行った。反応はやはり想像していたように、あまり芳しくないものだったが、マイラスの中には誇らしいものが一つできていた。

「ではシュベルグ殿、要請されていた情報局高官との会合はこちらになります」

「マイラス殿ありがとう」

最後にジオン側が要請したのはムーの情報局の高官との会合である。そして、場所としてもジオン側が改修してスパイ防止用の設備が盛り込まれたホテルの一室だった。マイラスはただの技術士官であるため、彼は一緒に会談に参加できない。

ホテルに着いたジオンの外交官ではなく、キシリア機関の諜報員の一人がホテルのフロア全体に自動小銃とアーマーで武装し、不測の事

態に備えた。そして国家保安部の諜報員が機械を使用して隠しマイクやカメラ、魔導動力のそれらを見つけようとして幾つか取り除かれる。

「ミリシアル帝国製かな？サンプルとして頂いとけ」

「ミリシアル帝国製が多いですね。ただ、刻印が削られたり帝国語でない文字もあるから他の国の人間かもな」

すべての隠しマイクとカメラを外し切り、ムーの外交官と情報局の人間を招き入れた。

「我が国へようこそ、シユベルグ殿。私はムー陸軍情報局のマイヤーです」

「私は情報局第三課のアトランです」

その顔ぶれは何を話すのかは既に察しは付いていた。双方同じ獲物について虎視眈々と様子をうかがっていた事もあって、顔を知らなくても何故か仲間意識が湧いてしまう。自然とジオンの諜報員が完全武装していたとしても、その鋒が自分達に向けられていないことを既に知っているのか、陸軍情報局のマイヤーと名乗る将校と情報局第三課と表向き存在しない組織の人間がスーツ姿で列席することに互いに信用されている証拠だろう。

「さて、あの馬鹿どもをどう調理するか話し合いましたよ」

第二十二話 アルタラス事変（上）

「指定座標に到着、撮影開始。ナビゲーター頼んだぞ」

「了解、偵察カメラ撮影開始！パーパルティアの皆さん手を振って〜」
大気圏内戦闘機ドップを改良し、旋回能力と航続距離の改善、兵装の充実化を図ったドップⅡは作戦遂行能力と作戦適応能力の向上のため、コックピットをモジュラー化しており、簡単に複座に出来る利点があった。初期のドップと比べてコックピットが細長くなっているが、その分ドップの翼は大きくなっており、ジェットエンジンも三次元ノズルを採用した機動性の高いものとなっていた。大空を舞うドップⅡの兵装は偵察用カメラが設置されており、目標座標に到着した彼らはカメラを起動して撮影を始める。

「ナビィ、状況は？」

「俺は緑の少年の妖精かよ。せめてマスターソードを持つてこい」

「連邦のセイバー^聖フィッシュ^剣でいいか」

「勘弁してくれよ。んで状況を頼む」

機内の二人は戦場での偵察任務であるにも関わらず、間の抜けた会話をしていた。それもそうだろう。自分達を撃墜できる戦力はこの空域には、いやこの惑星には存在しないのだから。交戦を想定されているパーパルティアのワイバーンロードは現在の偵察機の高度に達することは出来ない。竜騎士が酸素アセンブリや防寒着を着用し、尚且つ暖房魔道具や魔法を使用しなければならず、長時間の軍事行動は出来ないため、ワイバーンロードがドップⅡを撃ち落とすために迎撃することは現実的ではない。それに、性能上ドップⅡの方が圧倒的に有利であった。

「地上にアルタラス王国の部隊とパーパルティアの糞共が戦ってるよ」

「そりや見りやわかる。どんな調子だよ」

「知るか、俺が大学の爺に見えるか？そうだな、骨董品の銃と復刻品^{パーパルティア}の銃でドンパチ。単純戦力じゃアルタラス王国の有利。だが、パーパ^{アルタラス}

ルティアの將軍もやるな。ありや名将だね」

「ほお、いつから將軍に？」

「お前が売春宿行ってる時にだよ間抜け」

売り言葉に買い言葉。だが、二人はルウム会戦ではMSでなく、性的に連邦軍の戦闘機セイバーフィッツユに負けると言われた宇宙戦闘機ガトルで生き延びた猛者だった。仲も喧嘩する程よいと表現でき、命を預けてもいいと思える二人だ。

彼らの1000m下ではパーパルティア大陸軍の歩兵部隊と騎馬兵が突撃をしており、それをアルタラス王国軍の部隊が防衛している。アルタラス王国がジオンの援助によって第二次大戦レベルの歩兵器を提供したおかげで、パーパルティア大陸軍の火打銃部隊を機関銃でハチの巣にする光景が見られた。だが、パーパルティア大陸軍の指揮官も馬鹿ではない。まるでソ連のT34の如く、地竜に歩兵部隊を載せたり、後ろから随伴させることによって弾避けの役割を果たし、防衛線にじりじりと近づいていた。

「化学兵器部隊や放射線センサーにも反応はない。やはり司令部の危険は外れたようだ」

パーパルティアが行う軍事行動の一つとして挙がっていたのは、残りのアルタラス王国を排除するためにNC兵器核・化学の使用だった。だが、その場合進軍するパーパルティア大陸軍も被害に出ることは必須であり、占領統治にもかなり悪影響が出るだろう。すでにル・ブリアスを核攻撃し、その地点を不毛の地にした時点で最もうま味のあるのがシルウトラス市の魔導石の鉱山とその隣にある古代都市遺跡。

もつとも価値のあるものを傷物にしたくない彼らは、通常兵器のみでの攻略を計画した。事前にそう易々と使用しないことを予期していたジオンは、アルタラス王国軍の司令部にそのことを伝え、まだ戦争状態でないジオンは後方で支援することを約束した。とは言え、大規模な兵力投入は行わない。行うのは偵察やアルタラスが不利になった場合に駆け付ける航空支援だろう。

アルタラス王国臨時政府はシルウトラス市に設置され、急ごしらえで行政能力を整えている。順調にパーパルティアを駆逐すれば、生き

残ったアルタラス王国国民は臨時政府を支持し、讓位した女王に忠誠を誓うだろう。

「さて、そろそろ帰るか……」

仕事も終わり、さっさとザンジバル級巡洋艦に帰って食堂の糧食班の女性下士官を口説きたい。パイロット二人は同じ思考で、さっさと帰還しようと旋回した。

ビーー！ビーー！ビーー！

それは鳴ってはいけない計器類の一つ。レーダーロック、所謂ロツクオン、レーダー照射を受けているのだ。

「付けられたあ！旋回！」

ドツプは一気に旋回し大空を舞う。パイロットの急旋回によって急速にGが彼らの身体を締め付け、血流を滞らせる。重力が思いのほか重い事を感じつつ、レーダーを見るが若干ノイズの入るそれが目に入った。

「方位340、高度3000に所属不明機！」

「嘘だろ！ムーのプロペラか？」

「いや、速度は700km/h？」

パーパルティアのワイバーンロードがそんな早い生物を使役している情報はない。逆にアルタラス王国のワイバーンの可能性もあったが、ドツプIIの護衛としては邪魔であつたし、そもそも高度3000m程まで来る必要はなく、高度300m前後が限界。地上戦力にブレスを行い、火炎放射をしているのだ。こんな高度で飛ばしてくる者等がいるはずもない。

ーだがいるとすればそれは……。

「IFF反応なし！回避しろ！急げ！」

ナビゲーターの叫びと共にパイロットは操縦桿を思いっきり引き倒し、急激なGも物ともせず急旋回を行った。

HUDに移る急旋回によるGの警告と体内の血流が遮られ、全身が

圧迫されている感覚が全身に伝わった。すると、レーダー照射の警告音がさらに変化し、言語を伴った警告へと変わる。

【Warning!ミサイル接近!】

「嘘だろお!」

「回避い!方位330より飛翔体!」

ナビゲーターの叫びと共に飛来するのは、ロケット推進力とレーダー誘導らしき飛翔物体。もし、しっかりと見ることが出来ればそれは空対空ミサイルの形状をする何かだと気づくことだろう。文明的にもミサイルを発射する兵器があると思わなかった二人は動揺し、急いでミサイル攪乱用の兵器を使用する。

「ミノフスキー攪乱開始、投下!投下!」

「レーダージャミング!」

機体下部に装備されたレーダージャミング兵器として、小型のミノフスキー粒子拡散装置があった。熱源追尾ミサイルにも対応できるそれらの電子機器を混乱させる兵器はこうした戦闘機には必須の代物。熱追尾するミサイルにフレアと言った疑似熱弾のようなものも装備していたが、連邦やジオンの兵器を鹵獲したと思っていた彼らはすぐさまそれを使用した。

「ナビ、ミサイルは?」

「だめだ、尻に張り付いている!」

「くそお!」

「右だ!右!右旋回、最大航速で振り切れ!」

レーダーの効かない状況では、後ろの視界をみるのは、ナビゲーターの役目。ミノフスキー粒子散布でも動じないミサイルはドップIIに接近しており、もし何らかの影響で機体が遅くなれば捕捉されて撃墜されてしまうだろう。

【Warning!ミサイル接近】

「クソ!なんでミサイルの癖に妨害できない!」

「フレア投下！投下！」

熱赤外線追尾や機体エンジンの発熱を追尾するのであれば、フレアは効果的だった。機体下部に放たれたフレアは数百度以上の火球を形成し、ミサイルらしき飛翔体に直撃する。

「インターセプト^{着弾阻止}！」

「方位220距離7000に不明機……どうする？」

「写真を撮って司令部に送れ。ミノフスキージャミングの効かないミサイルだぞ。機関砲以外武装のないこれにどうやって落とせというんだ」

遠距離タイプの巡航ミサイルであつたらこの距離でも攻撃が可能だ。だが、攻撃の素振りを見せず、むしろこちらの機動力を見ていたように思えるそれは、明らかにこの惑星において異質な存在だった。「連邦の戦闘機？いや、それならもつと食いついてくるはずだ」

パイロットは機首を傾け、急ぎザンジバル級へと帰還する。撮影された映像の大半はパーパルティアの戦術配置と兵力分布についての撮影画像だったが、最後の数枚はミサイルを発射したと思われる所属不明機の姿。ムーの機体でもないその姿はジオン公国に『惑星文明における特異点』として知られることになる。

「インフォール1よりドランド、目標は射程外。敵は誘導噴進弾に命中せず」

「ドランドよりインフォール1、了解した。敵の性能はそちらの魔導記録機にて確認する。インフォール分隊はそのまま空中警戒を厳と為せ」

アルタラス王国領空内を我が物顔で動くのは、パーパルティアの航空部隊だけではない。世界第一位の大国『神聖ミリシアル帝国』の聖鳥旗が記された魔導金属装甲に覆われたそれ。見た目はMiGに近い形状を持つそれは魔光呪発式空気圧縮放射エンジンから推力を得ていた。その名前はエルペジオ4アルフォアルフォ^{試作先行型}（試作先行型）。

推進力とその攻撃力を挙げたそれはまるでソ連の戦闘機 Mig 25 を思い起こさせる。

彼らはパーパルティアとの軍事協力として本体より抽出された派遣部隊。ジオンの航空部隊の調査とあわよくば、自軍との性能比がどれほどかを見極めるために派遣されたのだ。リパースエンジニアリング逆行工学だけで惑星第一位の大国に上り詰めたミリシアルであるが、オリジナルの古の魔法帝国のテクノロジーはまだまだ先に行く。それこそ、今の最新鋭主力機であるエルペジオ3は元の機体と比べれば、子供だましに思える程に。エルペジオ4アルフォは試作先行型として一部の精鋭部隊や実験部隊に配備され、今回において外部の協力機関からの強い要望から派遣が実現した。インフォールと部隊コードを使用するパイロットは訓練でしか使用したことのない新型誘導噴進弾の性能を見て、魔導通信の台詞とは打って変わって驚愕の表情を浮かべていた。

—これはまるで古の魔法帝国の言い伝えにある『誘導魔光弾』と同じじゃないか?!

嘗て神聖ミリシアル帝国がミリシアル神国として大陸の小国であった頃。偶然にも初代神王が古の魔法帝国の巨大兵器庫を発見したことでミリシアルは拡大した。音速で飛行する天の浮舟や誘導光弾、アイアンゴーレムよりも固く筋力を増強する鎧、大口径連発魔導銃を持って歩兵を薙ぎ倒す。更には魔導人形による自動攻撃など、まさに神話の戦いを思わせる。彼の代では稼働数も少なく、逆行工学のために残され、消耗品として壊れるのに忍びない帝国は保管へと動いている。ただ、彼の所属は空軍であるため、対魔帝対策省の行う極秘の実験や秘密兵器などは知る由もない。

彼は若干震える手を押さえながらも、操縦桿を握り、旋回する。

【こちらデルーシャーよりインフォール1、応答せよ】

【こちらインフォール1どうぞ】

【方位220よりこちらにつく。魔導リーダーがアルタラスにジャミングされている。目視で確認できるか?】

南西の方角にパイロットは目を向ける。

パーパルティア大陸軍を支援するために派遣されたジグランド1と呼ばれる旧式の戦闘爆撃機の編隊があった。旧式とは言え、次世代機のジグランド2以上の爆装能力があり、空中戦には向かないが、その対地攻撃能力と機体の対空能力は高く評価されている。ただし、欠点として鈍足であることと機動性に劣っている点においては、魔導通信によって情報伝達が早く行われている惑星の戦場において、際立つ欠点であった。

「目視で確認、ジオンの戦闘機は尻尾まいて逃げてったぞ」

【だろうな、話によるとジオン軍は徹底した軍隊らしい。義理で戦おうとはしないんだとさ】

神聖ミリシアル帝国が世界第一位の大国として君臨する理由の一つが「同盟国を見捨てない」ことだった。世界規模の戦争を経験していないからかもしれないが、国民性として義理堅い一面が存在する。植民地化や保護国、同盟を組んだ如何なる国であっても、大軍を率いて馳せ参じ、徹底したテクノロジーをもって滅するのである。

列強第三位のパーパルティア皇国とは表向き対立姿勢であるが、今回の戦いでは利害の一致から航空支援を行っている。そんな彼らだからか、実質同盟関係となったアルタラス王国に対して、軍を出さないジオンに対して「腰抜け」という論調が派遣部隊の中で広がっていた。

「まあ、出せば代理戦争に発展するだろうからな」

神聖ミリシアル帝国ではムーと技術体系が似ている事を理由にムーと同盟関係を結んでいるのでは、と憶測が飛び交っていた。それが事実だとすれば、このアルタラス王国侵攻は列強の代理戦争に発展しかねない。以前にも、こうした代理戦争が幾多と行われている中で、再び行われるとなると、列強同士の大戦争に発展する可能性も生まれてくる。だとすると、ジオンが消極的姿勢になっているのも頷ける話だった。

パイロットは作戦規定と燃料の関係から洋上の空母へと引き換え

ない。部屋で泣く讓位したルミエス女王のためではない。国際法上の違法行為を阻止するための軍事行動である。一部の人道的軍事介入を求めた部隊指揮官の求めに応じ、威圧的偵察行動や民間人への医療支援、治安維持部隊への支援を認めた。既に部隊の移動準備を終えており、総帥府の命令があればアルタラス王国からの離脱も視野に入れている。

「独自に行動してアルタラスを守る」か「離脱すべきか」。

MSを使えばパーパルティアの軍勢を一蹴できる。だが、軍指揮官としての立場や自分の命も危うい。そして、ジオンでのザビ家の立場も危うくなるかもしれないのだ。だが、アルタラス王国から撤退したとしても、自分にはアルタラスで失われた数万の民間人の怨嗟がのしかかる。自身が行動を起こさなかったために、救えたはずだろう命が犠牲になるのだ。一方、アルタラスを守ったとしても、幾人かのジオン将兵が亡くなるのかもしれない。軍指揮官として、一人の男として決断しなければならなかった。

「ガルマ……ここにいたのか」

「シヤアか、軍服はどうした？」

そこにいたのは、いつもの色の主張の激しい赤い軍服ではなかった。着ていたのは、所謂野戦服と思しき服装である。テレビ版の如く地球連邦総司令部に真っ赤な軍服で赤鼻と共に潜入する滑稽なことはしないシヤアだが、今着ていたのは将校用の野戦服だった。

「既に前線が40kmを切っている。地上戦で目立ったら不味いだらう」

「……」

ルウム会戦では『赤い彗星』とジオンと連邦双方から呼ばれ、二階級特進とジオン十字勲章を手にした彼だが、その自己主張の激しい「赤い色」を封印したその恰好はかなり異質である。何時もの仮面はサングラスに変更されており、嘗ての映画に出てきそうな米軍の教官のような貫禄が出ていた。

「いや……ある人が慣れない地上で赤を纏うなど言っただよ。その子は勘が鋭いから従ったままでだよ」

「……ほう、そうか。僕はひよつとして女子に言われて変な癖を直したのかと思っただよ」

「……何？」

「いやあ、君もやるものだね。あまりお目に掛かれないインド系美女……いや美少女……まさか君がね」

「それならばガルマ、おまえもだぞ。ルミエス嬢とはどこまですすんだのだ？」

「わ。わたしはなにもやってにやい！」

「噛んでるぞ、ガルマ」

狼狽えるガルマの様子を見ていたシヤアはその様子に笑ってしまふ。シヤアは自分自身にザビ家としてのガルマ・ザビではなく、親しい友人としての情が芽生えていた。怨敵ザビ家の一員をそこまで親しむ自分に嫌気が出ると同時に、そう思う自分自身が鬼と化していることを自覚する。

「僕っ子だったガルマが私とは」

「そう言うなシヤア。」

いつの間にかザビ家のお坊ちゃんが軍指揮官として成長している。お坊ちゃんであれば、「謀殺」することに躊躇いを覚えないだろう。

「シヤア、伝達事項があるのではないか？」

「そうだった。先のル・マカレーとレブランの偵察画像を渡すところだった。これだ」

シルウトラス市とル・ブリアスを結ぶ交易都市レブランが映されていた。歴史上アルタラス王国と対立していた諸侯団が建設した城塞都市であり、防衛するアルタラス王国軍は一進一退の防衛戦を行っていた。その偵察写真と共にあったのは、神聖ミリシアル帝国の新型機と思われる航空機の写真だった。渡された音声データを再生し、接敵したドップⅡのパイロットの声が執務室に響く。

「ミリシアル帝国が関わっているか……」

「ああ、それに偵察機が帰還後、ル・マカレー防衛拠点が爆撃を受けた。

アルタラス王国軍部隊は壊滅、その爆撃は神聖ミリシアル帝国の爆撃機だったと」

「ふむ、やはりか」

核攻撃の能力を持つ国家は神聖ミリシアル帝国かジオン公国、そして連邦軍残党と第二の月に存在していたらしい異種族武装勢力位だろう。パーパルティアのテクノロジーや基礎科学についてはまだまだ運用に至るまでの技術力や知識は持っていない。パーパルティアの軍事行動は背後に神聖ミリシアル帝国があつたことは疑いようもない。

「レブランが突破されれば、アルタラス臨時政府は崩壊する。司令部は何と言っている?」

「『現状兵力にて対処せよ』とね。含みのある言い方だ。ギレン兄らしい……シヤア、君ならばどうする?」

「それは愚問だ。私は特務指揮官じゃない」

「そうだろうが、頼む。教えてくれ」

ガルマはやんわりと断ろうとするシヤアに食いつき、答えを求めていた。それほどまでに熟慮を重ねている彼を断る気にはなれず、シヤアは溜息を吐くと述べた。

「もう、決まっているはずだろう? ガルマ、私に聞く必要もない」

そう、ガルマの腹は決まっていた。だが、その踏ん切りがつかない。所謂、まだあるザビ家のお坊ちやまの部分が彼にブレーキを掛けているのだろう。

「さあ、ガルマ。男を見せろ。泣く姫君を助けるために立つんだらう? さあ、その名に恥じぬ事をしよう」

シヤアの励ましによって腹を決めたガルマ。

もう彼には迷いなどなかった。

「命令を伝える……」

それは暁の蜂起にいた若い士官候補生。ザビ家の御曹司として花よ花よと育てられたお坊ちやまにも見える表情。だが、それは間違いだ。シヤアの目に映るのは、部下の命を守ることを念頭に置きつつも、軍人としてなさねばならないと考える良き指揮官。ザビ家の策略

トエンジンに衝突した液体燃料に引火。大爆発を起こし、破片が周囲に飛び散った。無数のミサイル推進煙が軌跡を作り、機関砲の曳光弾が交差する。戦闘機がルブランの城塞上空を乱舞し、一つまた一つと爆散する。そこにはドップⅡが爆散する様子はないが、赤外線誘導らしきエルペジオ4のミサイルがドップの片翼に命中した。

「イーグル1ー、イジエクトウ!!」

ジオン公国突撃機動軍惑星派遣団第21特務隊に所属する、イーグル1ーと呼ばれるパイロットは日光を陰に攻撃を始めたエルペジオ4アルフォによって被弾。片翼が吹き飛び形で墜落した。幸運にも墜ちた場所がアルタラス軍勢力圏だったことが幸いした。

「イーグル5がやられた!全チーム、フレア残弾気をつけろ!」

「パープルバロンより全イーグルに次ぐ、南セクターに新たな爆撃機編隊が出現。地上からも敵機甲部隊の……いや、地竜が相当数接近中。増援が来るまで5分」

「無理だろー!そんな!」

レブラン城塞都市へパーパルティア大陸軍が大攻勢を行い、二万近い大軍と神聖ミリシアル帝国の義勇軍が押し寄せた。そして、特務隊指揮官ガルマ・ザビ大佐の命令からドップⅡ12機からなる航空隊を派遣。MS6機の地上部隊を後衛に回すことを決定した。陸上歩行によって到着に時間のかかるMSの損害は全く出ていないが、ドップⅡの損害が既に二機出ている。

エルペジオ4は速力がドップⅡよりも遅めだが、機動力や旋回性はドップⅡを上回る。ドップⅡは従来のドップと比べて大気圏内用に再設計されている。パイロットの生命を度外視するような性能や歪な機体設計を見直したドップⅡは様々な作戦に合わせた調整と複座式コックピットの採用に伴って、旋回性とスピードが低下。連邦が惑星軌道上でミノフスキー粒子を使用した状態を考え、有視界戦闘を重視した結果、機動性の乏しいドップⅡは旧世代機に近いエルペジオ4に後れを取っていた。

誘導兵器などが優秀なジオン軍の優勢ではあるが、如何せんエルペジオ4の量が多い。加えてジグラント1が爆装状態で近づいている。加えて、地竜の大部隊が接近中とあって、ドップⅡの部隊長、イーグル1のパイロットは苦虫を噛み潰したような表情をヘルメット越しにして、追尾するエルペジオ4に機関砲を浴びせた。

20mm機関砲の砲身が回転し、毎分4000発の大火力を持ってエルペジオ4の右翼がハチの巣になった。左翼を穴だらけになったエルペジオ4は錐揉みになりながら、黒煙を吐き出し、地面へと突進する。そして1000ft以下になった瞬間、アルタラス高射砲隊の砲撃が集中し、空中にて爆散した。

「イーグル1より、パープルバロンへ！爆撃機編隊はこちらで何とかする。しかし、地竜の部隊に関しては攻撃不可能。弾薬が持たない！増援を求む」

「地竜に関してはドダイでレッドバロンを向かわせる。航空戦力の撃滅はそちらで対処されたし」

ーレッドバロン……アズナブル少佐か

イーグル1はパープルバロンの同期の戦友、ジオン十字勲章の英雄を思い出す。自己主張の激しい赤い塗装に赤い軍服。エリート且つ英雄の姿は正に个性的で、イーグル1の彼は一目見た瞬間、危険な人物であると思っていた。

「イーグル1！助けてくれ！青い機体に追われている！」

それは僚機のイーグル7の悲痛な叫び声だった。

「イーグル7了解した。待ってる！」

操縦桿を捻り、スロットルを挙げて急旋回する。体が縛られるような感覚に襲われるが、友人が死んで葬式をする方が一番嫌だった。吐き気を伴うGを感じながら、追尾されるイーグル7の方向に機首を傾ける。

「イーグル7、ブレイク！^{回避}ブレイク！」

ドップⅡの後ろに回り込んでいた青い塗装のエルペジオ4。その

自己主張の激しいそれは一見して目立つと思いきや、青い空や海の上ではこの上ない偽装効果があった。Mig25にも似たエルペジオ4は回避行動を取り続けるイーグル7を執拗に追い続ける。そして、エルペジオ4の魔光弾が発射される。ミリシアル帝国のミサイルは誘導装置など未だ未発達のため、命中することは先ずない。イーグル11は何時もの如く帰還するだろうが、普通は当たりっこないミサイルなのだ。

だが、魔光弾全く違う。

その性能はまるで戦艦クラスのメガ粒子砲。エルペジオ4の一部には試作装備として採用された大型魔光弾が装備されており、従来の連発式魔導銃や魔導機関砲とは違い、メガ粒子砲並みの高熱を放つプラズマ弾だった。

イーグル7のエンジンに直撃した瞬間、燃料に引火。まるで砲弾のようにコックピット周辺を吹き飛ばし、機体後部は爆散する。そして、イーグル7の絶叫がイーグル1のヘルメットに反響する。

「クソっ！ やりががったな！」

頭に血が上り、彼の人差し指が強く発射ボタンを押す。20mmバルカンが発射され、10発に一発の曳光弾が発射された。だが、水平飛行になっていた青色のエルペジオは180度ロールすると、一気に地面に機首を向けて突き進み、一気にUターンを行う。他の機体にはない回避運動を見たイーグル1は、青いそれが「スプリットS」と呼ばれる戦闘機動を行ったと知る。

「イーグル1、援護する！」

「いや、他の敵機を迎撃しろ！」

上空ではドツプの数よりもミリシアル帝国空軍の戦闘機が多く、数の有効性はジオンが良く知っていた。シャンドルと呼ばれる旋回によつて青いエルペジオを追い、ミサイルモードを起動。レーザー照射を行い、青い機体をロックする。レーザー照射の機械音が響き、ロックがかかる。マークした敵へミサイルを発射しようと発射ボタンを押すが、反応がない。

Warning! Targeting System Error

r!」

「holly shit!」

整備不良か、不良品かはわからない。せつかくの獲物を仕留めるチャンスを失い、システムのモードを変更しようとするが、機体に突如として衝撃が伝わる。

「他の奴か……」

敵の数はジオンの航空隊よりも多い。数機落としていたが、それでも、数が多すぎた。エルペジオ3と呼ばれる機体も集めてトップの二倍に近い部隊が展開しており、後ろに回り込んだ機体が攻撃を仕掛けていた。

「イーグル1被弾!」

エンジン出力が落ちており、魔光弾ならば燃料に引火しかねない。だが、放たれたのは銃弾と同じく弾丸を魔導石で撃ちだすタイプの実弾だったことが幸いした。バツクミラーから見える黒煙を見たイーグル1は自己診断プログラムを起動させる。

「イーグル1、黒煙が出てるぞ!」

【指揮を受け継ぎます!イーグル1は退避を!】

僚機は既に多くの敵と対峙しているにも関わらず、他の仲間にも気を配れることを知り、イーグル1は唇を噛む。自分自身は歳のせいかわいらしい状態を維持できていない。ごく些細な事を見抜けなくなっているロットルであることをこの時自覚する。

スロットルを出来る限り上げ、エルペジオ4に追い付かれないよう、空域を離脱する進路を取る。機体が制御不能になる前に脱出することも考えなければならぬため、残存するアルタラス友軍部隊に行けるような進路を進む。

「イーグル2に指揮権を委ねる!ツァイス!あとは頼んだぞ」

ベイルアウト

機体は消耗品。命以上の価値はない。脱出するか悩んだが、バツクミラーに移りこんだ機体を見て背筋が凍った。計器を見れば、エルペジオ4が追い付けない速度を出していると思っていたが、計器の故障であつたらしく、外の景色と比べると遅く感じる。計器には900

km/hと表示されているが、実際はエルペジオ4が追い付ける鈍足にまで落ち込んでいたに違いない。

エルペジオ4の機体下部にある歪な形をした魔光砲を見たイーグル1は死を覚悟し、その瞬間を耐えた。

だが、その瞬間は訪れなかった。音速に近い速度で真つ赤な何かは横切ると同時に青いエルペジオ4の機体が巨大な足に踏まれたかのように真つ二つになり、魔導エネルギーの暴走によって爆発したからだ。そして、その赤い何かはジオン軍に採用されたMSサブフライトシステムとして使用されるドダイYSに乗り、左手に持っていたザクマシンガンを連射し、エルペジオ4数機を撃ち落としていく。

「イーグル1、ゲビル少佐か？こちらレッドバロン。地上目標掃討のつもりだったが、助太刀する」

青を駆逐した赤。

シャアの乗る機体はまるで宇宙空間にいるのではと錯覚するように、大空でMSを自在に動かしてはエルペジオ4を撃ち落とし、爆装状態だったジグラント1へ近くにいたエルペジオ4を鷲掴み、投げつけるという神懸った攻撃を繰り返した。片翼に命中したジグラント1は操縦不能に陥って、密集編隊だった故に隣の有軍機に衝突。そのまま大地へ真つ逆さまに落ちていく。パラシユートなど脱出する機能を持たせていないのか、そもそも脱出装置の存在がないのかわからない。

イーグル1改め、第21特務隊イーグル航空隊隊長ゲビル少佐は大空で乱舞する赤い巨人を見る。あたかも其れは神々の戦いとも思え、機体が耐えられなくなったことを確認した彼は直ぐに脱出装置を起動させ、射出する。体を引き裂くのではと思うような強烈な衝撃と共に射出された彼の身体とコックピット座席は自動でパラシユートが開き、ゆつくりと降下する。

突如として現れた巨人が空中戦を行うという光景に目を疑っているミリシアル帝国パイロットは、パラシユートで脱出する敵兵など見向きもしない。

て国家監査軍と交代。歴史的建造物やそれらを破壊して回り、その後は貧民入植が始まり、属領として管轄されることになる。そのため、大陸軍の将兵は出来るだけ、貧民や国家監査軍の下人に富が渡らないよう、徹底的に奪いつくし、殺し尽くす。

それは焦土作戦、敵軍に利用されないように徹底的に資源と人財を滅却する。その敵軍は末代になって復讐してくるであろう未来のアルタラス。根絶やしにしなければ、後世のパーパルティアの子供たちに牙を剥こうと襲い掛かってくるだろう。

【目標群 α ^{アルファ} の座標 N394E342S2、支援砲撃を要請！】

【レブ川を渡航してくるぞ！機関銃部隊もつと弾幕はれ！】

【第七機銃陣地が砲撃を受けている！】

【ユタに乗るぞ！】

大空の戦場に加えて、南セクターと呼ばれるレブラン南側の兵力は避難民の誘導と治安維持に回され、混乱した状況が続いていた。ただでさえ、練度不足と士気の低下も相まってアルタラス王国残存部隊の攻撃力は予想した以上に低下していた。救護が必要な民間人の収容の混乱に乗じて、パーパルティアに恩を売ろうとする者も多い。そのうえで地上から来る大陸軍を迎撃し、空から来るワイバーンロードを撃ち落とさねばならない。

このような大混戦の中で、ジオン軍の支援が得られなければ組織的抵抗が出来ず、簡単にレブラン城塞都市内部に侵入されたのかもしれない。通信システムの構築がうまくいき、すべての戦闘通信はデジタル軍用無線に統一され、アルタラス王国側の無線周波数ではかなりの頻度で通信がされる。

砲兵陣地にある 10.5cm 1eFH 18 が進軍する地竜に向けて放たれた。榴弾は竜に命中し、行軍が一時停止する。だが敵の進軍は止まらない。レブラン南セクターの端に位置する川岸に歩兵や騎兵を載せた上陸船が接近する。一度上陸されれば進軍を止められない。木造のボートに乗り込み、魔導銃でオールのように漕ぎ、アルタラス王国軍から放たれる機関銃掃射によってボートごと切り刻

まれていく。

まるでノルマンディー海岸のような様相を呈していたが、強力な航空戦力によって歩兵の被害を最小限に抑えていく。

「ワイバーンロードだ！機関砲をー」

機関銃陣地にいた指揮官の騎士は叫び、ワイバーンが飛来する。車輪のついた2 cm Flak 38を向け、近接対空射撃を行おうとするが、ワイバーンの急降下に間に合わない機関砲を動かす及び腰の兵士はうまく照準を付けられず、恐怖で訓練通りに照準を合わせる事が出来ていない。迫りくる不敗のパールティア大陸軍。そして自分達を焼き殺さんとばかりのワイバーンロード。ここから逃げ出さねば、自分はパールティアによって殺されてしまう。

そんなことを思う末端の兵士は逃亡を図ろうと持ち場から逃げ出した。

「おい！逃げるな！戦えー！」

高射砲の兵士達は攻撃態勢にあるワイバーンに恐れをなし、攻撃もせず我先にと陣地を逃げ出した。機関銃陣地にいる兵士も逃げ出し、指揮官は怒鳴り声を上げるが、恐怖が広がった其処にいる者はそう多くない。

逃亡する兵士達の直ぐ後に放たれる火炎弾。火炎放射器と言うよりも、可燃性の粘着物、大量のゲル状の液体が陣地に降り注ぐ。ロードの口にある火打石に近い器官が火花を散らし引火させる。一気に燃焼し、爆炎が陣地を覆う。残された者はおらず、アルタラス王国軍の練度不足が露呈した。また一つ、また一つと機関銃陣地が潰されていき、ユタ川岸へと兵力が集中する。

「上陸したら、急いでボートを対岸へ送れ」

「川岸では相応の抵抗が予想される。急いで川岸から出るんだ。」

「奴らに皇国魂を見せてやれ！」

数少ない魔導式動力を持つ上陸艇は機関銃を弾く装甲が取り付けられ、大口径砲台でなければ排除は不可能。木造船を囿にして、既に転覆した兵士の亡骸が川岸や川にながれ、血の川が形成された。そして上陸艇が岸边にたどり着くと、上陸艇ハッチを開き、歩兵が上陸す

る。上陸艇から出てきたのは、パーパルティア大陸軍の最精鋭部隊。一番槍として突撃する火打ち銃兵達は漂着する友軍の亡骸や先の王都核爆発の死骸を掻き分け、川岸を脱しようと突撃を試みる。

「ここを突破しろ！急げ！」

「左側！左側に敵銃座！」

「撃て！撃ち続け……」

「従騎士がやられたあ！衛生え！」

ジオンが支援として鉄条網を施設したことによって、パーパルティア大陸軍の兵士達は無理に進むことが出来なかった。無理に進めば、鉄条網のハリや返しの付いた釣り針が体に刺さり、引き裂いてしまう。躊躇している間に、復刻銃として輸入したMG42を持つアルタラス王国軍の兵士が大陸軍兵士へ攻撃を仕掛けていた。無数の銃弾に倒れる皇国兵。その機銃掃射へ反撃しようと、先込め式ライフルで機銃を潰そうと銃撃を加えるが、銃座に付く兵士でなく、そこにいる指揮官に命中する。

まるでそこは血のオマハ。Bloody Omaha。嘗てのフランス、ノルマンデー海岸の激戦地もかくやと言わんばかりの骸と血の海が広がり、パーパルティア大陸軍の兵士達はその骸を踏み越えて前進する。

「魔導砲もつと前え！」

「射角20に調整、弾頭は白燐！装薬1」

「照準よし！」

「放てえ！」

上陸艇に載せられてきたのは歩兵だけではない。人力で押し、機銃掃射によって何名かを犠牲にした魔導砲は機銃陣地に向けられ、一発の砲弾が機銃銃座に直撃する。ものすごい勢いで火花よりも高温な火が命中した砲弾から溢れだし、弾薬と兵士に降りかかる。

「熱い！熱い！」

絶叫が響き、銃座についていたと思しき兵士が火だるまになりながら鉄条網へ突進する。一番の水源である敵の上陸する川へと行こう

としたらしいが、すぐさま大陸軍の兵士に銃剣で串刺しになっていく。

「銃座を破壊した。このまま、その鉄の茨を吹き飛ばせ」

「榴弾装填、目標は鉄の茨だ！やれ」

鉄条網を吹き飛ばし、進入路を確保したパルティア大陸軍の兵士達は我先にと進入路に群がり、止めようとするアルタラス王国軍の兵士達を蹂躪していく。如何に高性能な重火器を装備していても逃げ腰の兵士が効果的な反撃などできるはずもない。二列横隊で整列したパルティア大陸軍の兵士は銃を構え、指揮官の命令を待つ。

「狙え！……撃て！」

小隊士官の命令によって放たれた弾丸は逃走するアルタラス王国軍に命中する。未だ戦列歩兵を行うが、長年の訓練と経験から戦うパルティア大陸軍。それに対して、優れた近代歩兵戦術と旧ドイツ系装備を身にまとうアルタラス王国軍。以前の訓練だけしか行わず、転換訓練もろくに受けていない。見せかけだけの兵士達は組織的な反攻をすることはできず、やがてオマハと称された地域一帯がパーパルティア大陸軍の御旗に染まる。

「デニムとスレンダーは両翼に展開。敵の侵攻を食い止める」

「少佐はどうされますか？」

「私はあのオマハで敵を迎え撃とう。」

「大佐、MS一機だけであの軍勢です。私も……」

「問題ない。あの地域では対歩兵戦闘もありうる。部下の手を血で汚すわけにはいかん。それに……」

—私は返り血がついても、目立たないだろう？

指揮官の台詞はデニムとスレンダーの両名を震わせるに十分すぎた。

シヤアの乗るザクⅡS型は地上戦用装備を駆使して、オマハのパーパルティア軍勢に攻撃を仕掛けていく。歩兵部隊には容赦なくザクマシンガンを腰だめ撃ちで掃射し、対歩兵用指向性兵器であるSマインを発射し、ボールベアリング球を周囲にばら撒いた。

「きよ、赤い巨人だ！」

「アルタラスは悪魔と契約しやがったのか!？」

一つ目の赤い巨人。ジャイアントオーガーとも劣らないその大きさはパーパルティア大陸軍将兵を怖がらせるのに十分だった。それでも、血気盛んな砲兵部隊は照準をシヤアの乗るMSに向けるが、砲撃をひらりと交わし、ザクマシンガンを乱射する。120mm多目的榴弾が命中し、小さいクレーターが形成される。それも、逃げる瞬間すら与えずに。生き延びていた周囲の随伴兵は恐怖のあまり発狂し、子供のように泣き喚く。其処には軍隊としての誉れは存在しない。

ただ絶対的な死。

パーパルティア大陸軍の優勢は一転して、劣勢に追い込まれ、オマハエリアを含め、レブラン全戦域の戦況が回復する。

シヤアは戦士としての、修羅に近い鬼の部分の心情が喜んでいることを知る。大宇宙の天翔ける戦士としての生きがい、戦いへの渴望を満たす戦いではあるが、何処か喜んでいるというよりも、ライバルのいないもどかしさを感じる。今いる地上には居ないので？戦士としての彼の表情に陰りを見せ、スクリーンに映される。オマハの破壊された野戦陣地と骸となったパーパルティア大陸軍の兵士達を見て、ここではないと直感的に感じていた。

任務のためならといざ命を犠牲にする軍人を演じてはいるが、自分に合っているのか考えてしまう。もし望めるのなら、宇宙空間に戻りたい。

シヤアはそう感じ、自分の直属の上司である野生の獣の顔をする男を思い出し、その弟へ連絡する。

「レッドバロンよりパープルバロン、応答を」

無線は二度三度繰り返されるが、シヤアは驚きのあまり声を張り上げてしまう。

「何だ?!？」

シヤアの表情は驚愕といった感じで、その事実を知り驚きを隠せない。シヤアは二人の部下と予備で残っていたゾーンにここを任せ、急

いでガルマのいるシルウトラス市へと駆けていった。

第二十三話 アルタラス事変（下）

アルタラス王国は歴史上、順風満帆なものであったというのは間違いである。近年の度重なるパーパルティア皇国の圧力から、無関税や犯罪奴隷の好意的輸出などを行い、皇国貴族による鉱山の私有化についても目を瞑ってきた。だが、皇国建国以前のパールネウス共和国時代、所謂皇国建国時に行われたフィルアデス大陸戦争の前にはアルタラス王国が帝国主義的政策を行っていたのだ。

アルタラス王国は当時武断政治と拡大政策を行っていた。反抗する諸侯を滅ぼし、周辺小国を吸収。大陸統一を目指すのではと危惧されていた。当時急成長の国家の一つであり、パールネウス共和国没落期に多くの資産がアルタラス王国に流入し、肥沃化した経済は軍備に傾けられ、必然的にシルウトラス鉱山地帯へ拡大することになる。そして、シルウトラスに住む古の魔法帝国を崇拜する民族の敵視から侵略は始まった。最初は些細な文化摩擦だったが、双方の利害の不一致とアルタラス王国内の資産家の意向もあって、軍事衝突。レブラン戦争という20年という長きに渡る戦争の幕が上がった。当初はレブラン諸侯団や古の魔法帝国を崇拜する教団側の勢力が強く、王国側は15年ぐらいは劣勢だった。

しかし、ここで形勢が逆転する。開戦前からアルタラス王国とパイプのある諸侯団がアルタラス王国側に寝返った。教団は全て皆殺しにされ、信者は全て奴隷か貧民になってしまった。戦勝者はシルウトラスに商業街と研究施設を建設し、貧民や奴隷を鉱山労働に押しやった。過酷な鉱山労働はその見返りにキャツシユバックを貰うからこそ我慢が出来るというもの。だが、彼ら貧民の賃金は搾取され続けた。

現在のアルタラス王国の代になって多少は改善されたが、信仰の自由を奪い奴隷や貧民に貶められた彼らの恨みは決して癒えるものではない。同化教育や懐柔という手段を十分に取らず、「可哀想」という理屈で手を緩めてきたがゆえに火種と金蔓の両方を維持してきた王家。貧民や奴隷と言った身分の者は、自分たちの物であった土地に王

都から逃げてきた王家を迎え入れる気は毛頭なかった。

「今なら王族をやれるぞ」

「パーパルティアの糞共は信用できるのか？」

「俺らを貴族にしてやるとさ」

「そんなの嘘に決まっている。俺達も殺す気じゃないか？」

「そんなことはない。俺らにとびつきりの傭兵部隊をつけるって言うてたぞ」

「傭兵部隊？」

其処はシルウトラス地下組織「デイファイアン」は長年資源を貯め、武器を作って一揆を準備していた過激派組織。犯罪組織を隠れ蓑として、パーパルティアや各列強の諜報機関とのつながりがあった。多くはこの地を先祖代々受け継いできた者もいれば、パーパルティアから流れてきた奴隷やアルタラス王国の政治犯も含まれており、非常に大所帯である。思想や行動原理に偏りがあるものの、アルタラスを倒すためならば、魔帝とでも手を組む。

デイファイアンの頭目、ロイドは幹部の連中が疑問に思う「傭兵」について魔導写真をテーブルに広げる。

「なに、いつもの列強連中の回し者さ。多少は便宜を図っておけばいい。」

魔導写真にあったのは、シルウトラス市行政地区の一角にある富裕層向けに作られた豪邸を司令部とする、ジオン軍の建物である。避難した商人から購入した豪邸は煌びやかであるが、その周囲をジオン軍兵士が警戒し、MSや装甲車両が警戒している。その写真のうちの一枚にはガルマが警備状況の視察で司令部周囲を巡回している様子が捉えられていた。

「お前たちの目的はこのジオンの親玉をかつさらうことだ。勿論、傭兵達が主にそれを行うが、ギルデロイとヒューアは傭兵達を案内しろ。」

「へい、ロイドの頭はどうするんで？」

「他の皆と共に臨時政府だか腑抜けた阿呆共にカチコミをかけにくいのさ」

「あの王都の糞共め。目にももの見せてやる」

彼らの目には長年積りに積もった憎悪があり、それは彼らが奴隷や貧民として、この鉾山街に押し込められてから積年の恨みが集中していた。それは時と共に癒えるという、生易しいことはない。民族を否定され、歴史そのものを否定する。自分の歴史を顧みないことは良くあるが、他者によって剥奪されることは復讐心を生み出す。すべてを失った復讐鬼が何をするのか。答えは決まっている。恨みを晴らすまで相手に同じ苦しみを遭わせるのだ。

デイファイアンだけにとどまらない。鉾山街の人間はほぼ全て臨時政府に対して悪感情を持っている。今すぐにも滅ぼしてやりたいと考えるだろう。もし、何かの切っ掛けさえあれば、決壊水の如く怒涛のように臨時政府庁舎へ押し寄せ、革命が成就するよう動く。長年蜂起に向けて各国諜報機関からの援助によって形となった革命軍の部隊。綿密な計画の元準備されたそれは着実に、ナイフのように臨時政府の首元へ迫っていた。

数刻の後、シルウトラス市の中心地である行政区画。行政区画を警備する騎士団と共同で展開する第21特務隊に属する、第七歩兵師団から切り離された第二憲兵大隊は「MP」の腕章の他、大陸共通語の「警備」の文字を記したヘルメットを着用し、治安維持を行っていた。その中心にあるマーケットは臨時政府の非常事態宣言によって電波妨害封鎖され、代わりにジオン軍憲兵大隊本部が設置された。市内のジオン軍治安維持部隊の指揮を行うテントでは大隊指揮官の少佐の他、部下、通信兵が詰めており、各警備所や検問、パトロール車両から来る報告を元に、シルウトラスの状況を把握していた。

「シルウトラスの状況はどうか？」

「はっ、現在のところ鉾山街との連絡は途絶。旧市街エリアと研究所周辺は各国駐在武官と警備と連携しているため、非常に落ち着いています。」

「現在、艦隊駐機場所とは連絡が付きません。センサーにはミノフスキー粒子による電波障害が掛けられています。レブランへ派遣した

部隊とは衛星を通じて何とか連絡で来ているようですが、レーザー通信以外は殆ど使用不能です」

憲兵大隊指揮官の表情は固い。

シルウトラス市は三つに分けられ、貧民層が多い鉾山街と古代遺跡のある旧市街、そして行政区画や大使館、研究施設が多い新市街。先程まで全警備部隊との連絡が出来ていたが、鉾山街を警備する騎士団や地元民兵との連絡が途絶していた。ジオン軍憲兵部隊や軽歩兵部隊は鉾山街について知らないため、現地騎士団から来ないよう言われていた。鉾山街は貧民層や解放奴隷、現奴隷が多い。アルタラス王国は奴隷の保有や売買は認めていないが、列強保有に関しては列強民として認識し、無干渉である。元々、シルウトラス市周辺は別民族の支配下にあつたこともあり、現在の鉾山街貧民層はその別民族の古の魔法帝国を崇拜する民族であつたことから、治安維持を行う王国騎士団からすると手に余る存在だつた。

そのため、ジオンの憲兵部隊や歩兵部隊と一緒に警備しようとしても、内情の分からない彼らが行つた所で足手纏いにしかならない。そのため、少数の通信兵と小隊をつけた。だが、彼らとの連絡は途絶し、ミノフスキー粒子の存在によって戦術ネットワークや市内の部隊は平時時と比べて、うまく連絡が出来ていなかった。ジオンは兼ねてよりミノフスキー粒子散布下での、情報通信の限られた中での戦闘を想定して、レーザー通信システムや個々の部隊が自由にできる裁量を与えるなど、粒子散布の中でも戦闘が行えるような訓練を行つていた。

しかし、惑星下での実戦データはどれも、ジオンと対等に戦えず、ミノフスキー粒子散布を必要としない程の弱兵だつた。それゆえ、今回の電波妨害では部隊間で混乱が生じていた。

艦隊駐機場所へは伝令を送れ。空中警戒のためにザンジバルをシルウトラス上空に移動させた方がいいかもしれない。一応大佐に要請をしておけ」

「はっ」

「行政地区の騎士団付き通信より入電。正体不明の集団を認むと報告が挙がっています」

「正体不明？どこかの難民か夜逃げの類か？」

「詳細は分かりませんが、複数の集団が移動しているとの事。騎士団も現在、その集団の所属を調べているところですよ」

その報告に大隊指揮官は怪訝な表情を浮かべる。だが、その集団の発見とミノフスキー粒子の散布に何らかの因果関係があるとすれば、その集団が関係していると考えられる。指揮官はすぐさま憲兵大隊に敵軍襲来の報を艦隊司令部と全軍に伝えようと命令を出す。

だがその瞬間彼の意識は一気に消え去る。

トリメチレントリニトロアミンと呼ばれる有毒な化学物質は無線式起爆信管によって化学変化し、一気に炸裂する。PE4・C4と呼ばれるプラスチック爆薬は一瞬にして大隊本部のテントを一気に吹き飛ばし、中にいた全員を容赦なく衝撃波で即死させる。計30kg近い過剰ともいえる爆薬が起爆し、一瞬にしてシルウトラス全体が揺さぶられる

「憲兵大隊本部沈黙！」

「各部隊が襲撃を受けています！」

「正体不明の敵集団より攻撃！」

「行政地区に敵集団侵入との報告アリ！艦隊司令部への防御を厳と為せ」

行政地区の端に位置するアルタラス王国派遣艦隊、第21特務隊の司令部は混乱していた。指揮所の大部分の位置から見える巨大スクリーンには、行政地区とシルウトラス市全域の地図が表示され、行政地区のマーケットに設置された憲兵大隊本部の位置には大きくバツ印が付いた。その他憲兵大隊が指揮する治安維持部隊のおおよその位置が「不明」の表示に代わる。その領域は赤いラインで表示され、警戒区域になる。アルタラス王国派遣艦隊の司令部指揮所はその正体不明の敵集団の攻撃に対して、現状を掴めずにいた。ここまでの能力を持つ隠密の報告は今まで上がってきておらず、パーパルディアの隠密もそうした特殊作戦に従事できる部隊を配備していない。破壊工

作を行う攻撃から呆気にとられた艦隊司令部は急遽、休息していたガルマを呼び出した。

「何が起こっている?」

目の下に隈の出来たガルマ。秘書から再三休むよう言われ、レブロン防衛戦があるからとふらふらの状態で執務室から出てこなかったため、秘書官はたたき出すように隣の寝室へ押し込んだ。

ミノフスキー粒子や電波妨害でレブロンや艦隊駐機場所への連絡がしにくくなっているため、不測の事態に備えて起きていた方がよかった。だが、ガルマの疲労を考えた秘書官や周囲の指揮官達は指揮権を一時委譲していた。裏目に出ていた訳ではなかったが、ガルマにしてみれば起きて早々正体不明の攻撃に晒されている事に驚愕するのは仕方がなかった。

「はっ！憲兵大隊本部が謎の攻撃を受け、壊滅。憲兵大隊のパトロール隊とは現在通信が途絶しています。他の商業地区から正体不明の敵集団を認むとの一報あり、現在MS小隊を軸にした部隊を派遣しています」

「艦隊駐機場所からザンジバルを呼び出せ。あまりしたくないが、上空に巡洋艦が居れば士気も衰えるだろう。鉾山街に行った騎士団はどうか?」

「現在も通信途絶。技術士官曰く、現在のミノフスキー粒子の電波障害は自然的なものでなく、人為的な軍仕様の妨害散布と思われる」

ミノフスキー粒子が自然環境で漂い、電波障害が発生することは不思議なことではない。ルウム会戦や惑星軌道上で多くの地球連邦軍艦艇を撃滅したことによって、ミノフスキー粒子を大量に帯びた艦艇が大気圏内に散布。広範囲に散布されたそれらは自然界の電磁場による電波障害も相まって、惑星で活動するジオン軍やその他機械文明の電子障害となって苦しめた。

アルタラス王国に来てからと言うもの、鉱物由来の電波障害や旧市街のシルウトラス遺跡からの妨害もあって、安定した通信状態でなかったジオン軍は電波障害が人為的なものであったと簡単に気づく

ことができなかつたのだ。

「ならば、この攻撃は……」

「敵集団の所屬が判明。装備からして、連邦軍特殊部隊かと！」

ガルマは苦虫を噛み潰したような顔をする。既に窓から見える黒煙と住民の叫び声を聞き、自分達が来たことよって被害が出ている事を知り、目の前の空になったマグカップを衝動的に投げたくなるが、我慢して被害状況を確認すべく、命令を伝える。

「レーザー通信に切り替えて戦術情報システムからパトロール隊を呼び戻し、攻撃する連邦軍部隊を撃退する。」

MSは質量保存の法則が作用する宇宙空間での戦闘に向いている。その他、地上戦では主力戦車以上の大きさから、射程外からの攻撃も可能となる。加えて機動力はその他の兵器より上回る。作戦行動範囲は既存の兵器よりも大きく、それが地球の半分以上を制圧する要因だっただろう。

しかし、万能なMSでも欠点が存在する。

戦車などの兵器も同様に、都市に展開すると死角が発生し、対戦車兵器による攻撃など受けやすくなる。そのため、対峙する部隊は対戦車兵器を用いて小規模の部隊で攪乱戦術を行う。民兵など国際法上、軍人として一定の保護を受けられない者らをゲリラと呼称し、数的劣勢を強いられる彼らの戦術としてゲリラ戦術と呼ばれるが、少数の部隊を運用して攪乱戦術を行う行為は彼らだけでなく、正規軍部隊や特殊部隊でも行われる戦術運用の一つである。

「装甲擲弾猟兵を投入して敵部隊を仕留めろ。MSの支援は逆に攻撃を受けやすい。戦闘へりを支援に回せ」

「連邦軍部隊をスツタリー通り西で補足。現在、Z^{スーリー}4-2が攻撃中」

「スツタリー通りの敵をA^{アルファ}群と呼称します」

「ギルド商業連合迎賓館付近で連邦軍部隊を捕捉。B^{ブラボー}群と呼称」

司令部指揮所では態勢を立て直し、特殊部隊の位置を特定する。

「衛星からの赤外線映像をスクリーンに表示」

シルウトラス市の全体地図が消え、そこに現れたのは衛星から撮影されたシルウトラス市の映像だった。若干ノイズが入るが、超望遠レ

ンズと赤外線感知能力のあるカメラは、地上のミノフスキー粒子に干渉しない。低空のUAV偵察機よりも、軌道上の衛星映像の方が妨害は受けない。戦闘はシルウトラス市全域に起きており、既に鉦山街では放火によって騎士団詰め所が焼き討ちにあっている様子や旧市街で冒険者と傭兵がギルド前で防衛線を引き、暴動らしき民衆を騎士団や脱出したジオン軍部隊と共に一進一退の防衛戦をしている。

無線通信よりも惑星軌道上の人工衛星の目の方が分る。生物であれば、必ず赤外線を放ち、軍用レベルの赤外線遮断生地を使用した戦闘服であっても、服の間から見える肌や微かな反射なども衛星で感知できる。指揮所の戦闘管制官が敵特殊部隊の位置をアルファとブラボーに区分していたが、ガルマが見たのは建物に突入態勢で準備している姿だった。

「この集団は？わが軍の部隊は赤外線ストロボを起動している筈だが？この建物は？」

「センサーが該当地点を精査中。粒子が漂っているため時間が……」
「御託はいい。突入地点はどこなんだ？」

ガルマの苛立ちは声に出ており、担当官は焦りを募らせる。衛星からのレーザ通信と各地理情報、集積した戦闘情報システムを読み取るが、ミノフスキー粒子の影響から情報収集速度と分析から遅くなっている。赤外線カメラを通して見える特殊部隊がハンドサインを送り、突入用の爆薬が壁に設置される。突入が秒読みに近づいている瞬間、分析官が驚愕の表情を浮かべてガルマを見る。

その様子にガルマも理解してしまう。

「まさか……」
「……」

分析官の顔色が蒼白となり、画面には突入する地点の情報とその近辺に配備される部隊の情報と、友軍の位置情報が表示される。

「伏せろおー！」

ガルマの叫び声は指揮所に響き渡るが遅かった。

テープ状に形成されたブリーチング爆薬、C4プラスティック爆薬

が信管によって起爆し、薄い壁が爆砕される。衝撃波と共に指揮所が震え、詰めていた分析官や通信兵、そしてガルマは昏倒する。

「連邦軍だ！」

「アラームを……があー！」

減速された亜音速の弾丸が警備兵に突き刺さり、言葉を最後まで言うことなく倒れこむ。減音器で発砲音が限りなく抑えられても、破裂音は指揮所に響く。舞い上がる爆煙に差すフラッシュライトが周囲を照らし、近距離無線のスピーカーや兵士のヘッドセットのイヤホンから声が響く。

【こちらエコー2―1！^{バツケージ} 目標目標を確保！繰り返す、目標を確保！】

【第二目標達成、撤収する！】

【30秒！】

ポイントマンの兵士が周囲を警戒し、少人数で編成されたチームの指揮官は制限時間を叫ぶ。それは司令部を攻撃してから脱出するまでの猶予時間。目標が奪還されなかったために、人質奪取対策のためにクレイモア地雷やC4爆薬をこれ見よがしに仕掛けていく。チームの死角が出ないよう、360度くまなく、サイレンサーとレーザーポインターが装着されたM―72A1ブルパップ小銃を構え、警戒しながら穴の開く指揮所を後にする。

【艦隊司令部が襲撃を受けた！】

【本部！敵の攻撃を受けている】

【住民の蜂起が激しい！射撃許可を！奴ら工業用の溶剤まで投げてきてるぞー！】

【王国臨時政府庁舎が炎上中！直ぐに航空機で消火活動しないと延焼するー！】

通信が錯綜し、頭の失った蛇のようにジオン軍指揮系統は滅茶苦茶となる。その通信はミノフスキー粒子の干渉が及ばないレーザー通信技術によって隔離されたものだったが、嘗て連邦軍特殊部隊「第21特殊作戦グループ」に所属していたティターンズ特殊作戦群チーム

「レッドグウェイ」の実働部隊指揮官、ダグザ・マツクール中尉とその部下はその通信を聞いていた。

「よし、欺瞞情報^{デコイ}を流せ」

「こちら、ライトニング3―2。臨時庁舎の支援に移る。北東から進入、攻撃に気を付けられたし」

「西セクター、南に特殊任務装備の不審な集団発見。わが軍の将校を人質にしている。繰り返す、将校を人質にしている！」

「グロウ通りを西へ移動！不味い、このままだと群衆に紛れて逃げる！至急増援求む」

通信機器の本来の持ち主である憲兵大隊所属の兵士達は、レッドグウェイと呼ばれるティターンズ特殊部隊員の兵士達によって息の根を止められている。欺瞞情報を送る兵士達は予め決められていた言葉を読み終えると、マツクール中尉の命令によって、レーザー通信機器を焼却して証拠を隠滅する。

「ライトニングに急ぎ乗って帰還する」

彼等の衣装は連邦軍の軍服とは違い、最近正式採用された灰色から特殊任務に従事する関係で黒を採用したレッドグウェイの野戦服である。ティターンズでは同様に黒を基調とする軍服が順次配備される予定だった。

その黒は何より宇宙の片隅に追い出された保護色というだけでなく、地球市民と言うエリート意識の塊を表現しているようで、マツクールは好きになれなかった。軍人として使命を果たし、軍務を忠実に果たしてきたつもりであり、自身が「連邦を動かす歯車」であることを考え、特殊任務に挑んできた。それがどんな任務であれ、泥をかぶった汚れ仕事でも完遂し、連邦と人類のためであると言いついて聞かせてきた。

だが、現時点で行う其れは連邦と言う組織そのものを生きながらえさせるために要人略取というマフィア紛いの仕事に手を染めている。軍人と言う歯車である以前に善良な人間であったマツクルールの表情は優れない。

黒煙と怒号、罪なき人々の悲鳴が脳裏に刻まれる中、彼は本心を眩

軍服を着ない兵士達の多くは、ジオンの知る「ハーグ陸戦規定」や血塗られた不正規戦を知ることはない。だが、彼らの行動は世界の数多ある正規軍が警笛を鳴らし、その存在を警戒させるに十分な脅威だった。

【艦隊司令部が襲撃を受けた！】

【本部！敵の攻撃を受けている】

【西セクター、シルレウ丘にて所属不明MS出現！増援を……】

【所属不明機の型番分らず、連邦系MSの可能性あり！MS部隊は直ちに対処にあたれ】

シルウトラス市防衛のために各所に設置されたレーザー通信中継施設から、レーザー通信によって様々な部隊の通信が挙がってきており、シヤアは唇を噛みしめていた。

「司令部を喪失し、指揮系統が寸断されるとは。灯台下暗しとはまさにこのことだな」

シヤアの言動は落ち着いたものだったが、血のにじむ唇が彼の心情を物語っていた。ザビ家のガルマとしてではなく、友人として見ている彼はガルマの身を案じている。それだけでなく、ダイクン家を滅ぼした一派を復讐するため、ジオン中枢に混ざらなければならぬ。だが、ガルマにもしもの事があれば、出席街道を転落する。ザビ家の独裁下では銃殺刑や懲役も覚悟しなければならない。

シヤアは画面に映る歩兵支援を行おうとするザクIIに接近する。

「状況はどうなっている？」

「シヤア少佐……行政地区の艦隊司令部が攻撃を受けました。錯綜した情報によると、ガルマ司令が人質になっているという話です。西セクターに連邦製MSが出ているという情報があります。恐らく西セクターで人員を回収すると思われます」

MS小隊の指揮官らしきザクII指揮官機に乗るパイロットは飛び交う無線を辿りに、分析していたのだろう。司令部が攻撃を受け、まともな指揮系統が存在せず、情報を統合する司令部や有能な分析官は

存在しない。ザクⅡの接触回線で会話するが、パイロットの顔色はあまり優れない。

「貴様の小隊はどうした？」

「連邦の対MS特技兵の分隊に奇襲を受け、私以外は後方に。敵歩兵は後退しましたが、敵MSが……」

パイロットが言い終える前に、シヤアは遙か向こうにいる敵の殺気に気が付き、咄嗟の判断で操縦桿を動かし、接触回線を切る。MSが動き、射線から逃れ、飛来する砲弾を避けた。濃厚なミノフスキー粒子によってロックオン機能や敵のレーザー照射がセンサーに拾わなかったこともあって、機械より先にシヤアの第六感が働いた。

大口径徹甲弾がザクⅡ指揮官機の片腕を挽ぎ取り、シールドを持った腕が宙に舞う。避難が完了していた農場であったため、人的被害は全くないが、外れた砲弾は山中に命中し、爆煙が立ち上る。

「狙撃手か?！」

シヤアは瞬時に狙撃ポジションが放棄された農村の藁の山に隠れている事を確認した。敵の位置を確認し、やることは一つしかない。急接近して潰すのみ。

スラスターを全開にして機体を地面から急上昇し、宇宙用バックパックのノズルが真っ赤に照らされる。続いてポジションを転換しなかった敵MSが第二射を放ち、シヤアのいた空中に放たれた。しかし、シヤアは狙っていたように宇宙用の立体軌道を駆使して、重力圏内でスラスターを使う。一瞬で重力圏操作からマニュアルで宇宙空間用の操作を行うシヤアの操作は神業のように素早く、そして素早い操作から強いGがシヤアの身体に襲い掛かる。

急上昇と急旋回。

ただでさえ、回避行動を行う戦闘機のパイロットはその運動から強いGに苦しむ。それこそ、急激なGによって血流の変化で失神し、そのまま墜落するパイロットも少なくない。だが、シヤアが乗るのは戦闘機でなくMS。その高機動は宇宙空間だから成し得、ミノフスキー粒子の有視界戦闘では、視界の広い兵器は常に先手を取れる。しかし、それを犠牲にMSの移動では戦闘機以上のGがかかり、体を酷使

するのだ。

シャアの行ったのは、普通のMSパイロットであれば失神する代物。だが、シャアの身体はそのGを耐える。スペースノイドとして進化した人類「ニュータイプ」を提唱したジオン・ズム・ダイクンの息子。その彼がGの耐性があり、並みのパイロット以上の身体能力を持っているのだろう。

シャアの運動性能を見たティターンズ所属のパイロットはグローブ越しの操縦桿が滑るのを感じた。使い古されたグローブ越しに大量の汗が滲み、掠れたグローブから汗が滲みだす。パイロットの彼は気づかずに額から流れる汗が目を刺激する。長年砲手として訓練を受け、敵戦車や対戦車兵が自分に照準をつける前に、二発APDF弾を撃ち込むことが出来る。長年乗ってきた61式戦車とは違い、足が二本ついていて、手が二本生えている巨人だが、持っている180mmキャノンは一撃でザクを葬る攻撃能力を持つ。

RGM-79(G)は先行量産型として生産された、ガンダムの実戦データをフィードバックして作られた兵器でないため、パイロットの技量に大きく依存する。MSの仕様書と説明書、自身の考える最適なモード選択と適切な設定を試行錯誤している段階で、今回のような特殊任務に抜擢されたのだ。いつも以上の緊張が彼を襲い、MSの運用の短い彼が選ぶのは狙撃による攻撃だった。それが外れて敵が近づくと今となっては、後退して仲間と共に敵を墮とす選択肢は最早選べない。

赤く塗装されたザクIIに再度照準をつけようと、スコープを後部座席から引き出し、精密射撃を行おうとした。だが、急接近するザクを狙い撃とうという行為が愚かである事は運用経験の少ない彼は知る由もない。迫りくるシャアのザクを撃破しようとして第三射を放つが、やはり全て回避され、一気に距離が縮んでいく。そしてコックピットの画面が真っ黒に染まりパイロットの意識は一気に途絶えてしまう。

全速力でザクのアクチュエーターから放たれた猛烈な蹴りがジムの胸部に直撃し、ルナチタニウム合金の装甲が揺さぶられる。MSの

基礎骨格が歪み、コックピットの画面はブラックアウトした後、一気に碎け散る。10G以上の急激な衝撃はパイロットを失神させ、脳溢血の可能性もある衝撃によって生死の境を彷徨った。

パイロットが次に気づくのは、現場検証するジオン軍兵士達に銃を向けられ起こされる瞬間。彼は地上戦における最初の連邦軍所属の捕虜となった。

〔CAUTION！右脚部アクチュエーター異常！過度な作動は重大な欠陥を招きます〕

一方、画面下部の表示を見たシヤアは初のMS格闘戦をガンダムではなく、先行量産機であるジムで達成したことを知らず、やや薄い達成感を覚えていた。

ルウムの時よりかは危険性を感じなかった戦場であったが、如何せん連邦のMSの性能はどれほどのものか期待していた半面、拍子抜けと言った感じだった。ほとんど無傷とは言わないが、コックピットに目掛けて蹴りを放ち、その衝撃で動力部分とコックピット損傷で行動不能に陥った陸戦型ジム。鹵獲すればジオンに対して多大な貢献をすることになる。ある程度の情報が得られれば、ガルマを奪われたという失態を相殺できるかと思っていたが、仮にそうだったとしても直属の上司であるドズルが烈火の如く激怒するのは避けられそうにない。

「少佐、敵MS部隊の機影を捉えました！そちらにレーザー通信で送りします」

腕を破壊されたものの、ザクマシンガンは健在であり、攻撃能力は未だ健在であったザクII指揮官機のパイロットは監視任務に徹し、ザクの通信機器のレーザー通信を使用し、画像を送信する。送られてきたのはシヤアが鹵獲したMSと同じ機体。武装は違えどもザクを屠ってきた機関砲が連射したことで銃口が赤くなっていた。既に警備任務中のMSを撃破しているらしく、急速にその機体は離脱しつつある。

「敵部隊は急速に活動を辞めて後退中です。」

「敵の航空機かまたは、歩兵人員輸送のトラック……装甲車らしき車両はあったか？」

「いえ、あの地域一帯は密林です。自由な移動は難しいはず。現地の部隊から得た地図情報では、あの場所一帯は魔物などの生物が生息する未開地域だとのこと」

シヤアはそんな状態の場所で要人略取と人員撤退のルートを選ぶとは考えにくい。例え、連邦が無知だと言っても、その密林に住む生物の恐ろしさは情報収集の時点で知っているはず。其処は古の魔法帝国の開発した生物兵器がうようよ居る未開地域。その密林の中に放棄された生物研究所があるのだろう。放棄されて以来、生物が野生化。ゴブリンやオーク、ウルフや危険な巨大昆虫、非常に感染力の高い疫病もある他、シルウトラスが有数な鉱山地帯と同時に世界有数の危険地帯になっている。

だが、生物の習性や遺伝子改良の結果、生物が密林から出ることはなく、病原体も兵器として扱いやすいよう、調整された殺傷力がある。暴走した生物が大陸各地に散ることがないように、魔法によって調整され、病原体も二次感染や三次感染以降の感染力や殺傷力は低く、保菌動物に接触した者やその近親者のみに影響が出る程度。生物は知能が高くないため、密林から出ることもないので、未開の地として遮られ、統治者は入れないよう壁を築く。MSなどであればこれらの障害はものともしないが、シヤアはそんな地域に要人略取任務で避難路を設定した指揮官の神経が分らない。

飛行するヘリやVOTL機の存在もないことから、シヤアは知る限りの情報から決断を下す。

「困だ。嵌められた……」

「えっ……」

本来であれば、MS部隊を護衛にして逃げるだろう。スミス海の戦いでもミノフスキー博士を亡命させるために、鉄騎兵大隊と名付けたMS12機を送り込み、万全の状態で護衛しようとした。連邦は量的優勢、物量作戦を好む。それこそ、圧倒的国力を背景に戦争を行う嘗

ての大国を継承しただけに、行動パターンの変化はない。だが、その自身のパターンを逆手にとって、搦め手のような作戦を取ったとしたら？

「我々は正反対の場所に連れてこられた。MS部隊は陽動だろう……ガルマを略取した特殊部隊は反対側、鉦山街方面に逃げたのだ。行政地区から鉦山街に行った機体はあるか？」

「確か艦隊駐機場所から発進した、消火剤装備のファットアングルが行政地区から無許可離脱したと……」

シヤアの疑念は確信へと変わる。

機体を鉦山街へ向けようとした瞬間、再び指揮官機のパイロットから来るコックピット映像にノイズが走る。

「無事か？」

「はい……敵も少佐の位置を把握したようです。少佐殿は鉦山街の方へ、スラスターの燃料剤は途中の補給所にあります。私はここで彼らを食い止めます。」

マイク越しから伝わるザクマシンガンの音と爆音、ザクのアクチュエーターの不気味な機械音が響き、彼の機が損傷を受けている事はシヤアの耳にも届いていた。

「……わかった。まだスラスターは問題ない。貴官も退避出来たらすぐに移動しろ」

「了解です……出来る限り退避します。少佐……お気をつけて」

ノイズの走る向こうのパイロットは敬礼し、その表情は死を覚悟する男のものだった。シヤアは名もなき戦士に敬礼し、レーザー通信を切って鉦山街へと駆けだした。

「貴様の死は無駄ではない……ガルマを助ける」

それはキャスバル・レム・ダイクンという復讐鬼ではなく、シヤア・アズナブルとしての本心だった。命を懸けてまで上司に仕えようと思える部下を持ったガルマは嘗てのザビ家のおぼっちゃんではない。一人の尊敬すべき友人としてシヤアの胸に刻まれた。

シヤアの意図に気づいたのか、ミノフスキー粒子の干渉が激しい

レーダーに不明瞭な点が映りこむ。

「また新しいMSか……!?!」

それはシャアの宿敵の余剰パーツで構成されたRX-79[G]陸戦型ガンダムだった。先程の陸戦型ジムや惑星軌道上で遭遇した宇宙戦用に改良された先行量産型とは違い、人間と同じく表情に近いそれは、まさしく一騎当千の猛者を思わせる顔付きをしていた。だが、そのMSに構っている余裕はない。ザクマシンガンに向け、一斉射を食らわせ、ガンダムは黒煙に包まれる。だが、そこに現れたのは先のジムが持っていないMSの大部分を覆う赤い盾が銃撃を防いでいた。「マシンガンの攻撃に耐えられるか、ならばこれなら!」

シャアに対してヤシマ工業製100mmマシンガンを撃ち込み、シャアが近づかないよう発砲する。だが、最小限のスラスターと立ち回りで回避し、藁の山を蹴り上げ、視界を悪くし、小麦が保管されている倉庫を破壊すると、麦の山をガンダムに投げつける。有視界戦闘を行おうと言っても、彼らの目に映るのは頭部カメラで撮影された映像。ピントを合わせていく機械であるため、ピントは藁や麦の破片に合わせられ、周囲の状況が不明瞭になる。

ガンダムはその光景に対応すべく、一度スラスターを点火して後退しようとしたが、再び蹴りがガンダムへと襲う。それは先程のジムにやった蹴りとは違い、シールドを弾き飛ばすよう、回し蹴りの要領で左回し蹴りが行われ、赤い大楯は弾かれる。そしてシャアのザクの左手にあったシュツルムファウストと呼ばれる対MSロケットランチャーが放たれる。第二次大戦中のナチスが配備した、パンツァーファウストと酷似するそれは、MSが片手でバズーカ並みの破壊力と先のジムの装甲を貫通する能力を持つ。先の惑星軌道上の戦いでザクマシンガンがジムの装甲を弾いたことが問題となり、バズーカによつて撃破が可能であったことを踏まえ、急遽副武装として攻撃能力の高いそれが配備されたのだ。

近距離で放たれたそれはガンダムの胸に直撃し、先程とは違った爆炎がガンダムを包む。スラスターの出力を上げて一気に後方へと離脱する。密林での核爆発は周囲に影響は出ないだろうが、爆発に巻き

込まれる程、シャアも切羽詰まっている訳ではない。発射と同時に後方へと飛んだシャアが見たのは、爆炎の中でも動くその姿だった。「連邦のMSは化け物か」

ザクマシンガンの弾頭は所謂、多目的対戦車榴弾(HEAT-MP: High-Explosive Anti-Tank Multi-Purpose)と呼ばれる代物を装填している。連射する120mmライフル弾はその威力から徹甲弾よりも安く、ザクから見て軟目標であれば簡単に撃破可能である。だが、それでも撃破できないのが連邦のMSであった。ザクの主武装に対抗するために作られたと思しき盾や装甲を貫くため、ジオンは新たにAPFSDSやAPDSという弾頭を装備したシュトルムファウストを採用した。理論上であれば、ザクや最近の重モビルスーツを撃破可能であり、宇宙で戦ったGMを一撃で撃破が可能であるとされたのだ。

だが目の前にいるのは、貫通力に定評のある其れを傷がありながらも、戦闘には支障のないレベルの傷で済ませているMSがいる。シャアとしても、その性能は羨ましいと思えた。

腰のマウントにあるのは予備のザクマシンガンのマガジンとヒートホークを取り出す。シャアとしても、MS格闘戦は続いて二機目。エースパイロットとはいえ、MS格闘戦は教導大隊以来のことであるため、先のファウストの損傷が見られないMSに時間を費やすことはしたくない。

だが、この目の前にいるMSは行かせないとばかりにシャアの行く手を阻む。

「MSの性能で生きているようだが、パイロットとしてはまだまだだ！」

ヒートホークの一閃は目にもとまらぬ速さで動き、シールドを両断する。シールドにあった予備弾倉が高熱のホークの刃に当たり、爆発と共に両者は距離を取る。ガンダム胸部装甲には爆発によって真黒く焦げており、辛うじて、爆発した弾が装甲を貫いていなかった。そんな被弾状況であっても、闘志を失わないガンダムは脹脛の格納スペースから小さな棒のようなものを取り出し、エネルギー供給を開始

する。それはジオン軍が未だ研究中の段階であるそのピンク色のビームサーベルはシャアのザクを斬ろうとする勢いで駆けた。

「ビーム兵器か？」

メガ粒子砲と言ったビーム形成兵器は両軍共に使用しており、艦砲射撃では宇宙空間で必ず使われる。だが、これらビーム兵器の小型化は未だ実験段階とされ、実戦配備はまだ先と言われる。だが、目の前にいるのは剣状の兵器を構え、攻撃しようとしているのだ。

ヒートホークの温度は高いが、プラズマと同じ高温度を実現しているビームサーベルとは切り結ぶことは出来ない。

「当たらなければどうということはない！」

相手はジオンのMS戦術を学ぼうと必死になっているが、相手が悪かった。ビームサーベルを大振りで振りかざすが、シャアはそれを颯爽と避けると、死角に回り込み、脇へヒートホークを打ち付ける。ルナチタニウム合金で構成される複合装甲はヒートホークの高温によって継続的に解け、あと十数センチで核融合炉に直撃するかという勢いで突き刺さるが、ガンダムは回避行動を取り、胸部に搭載された20mm機関砲が放たれる。

サイドステップの要領で回避すると共に、腰だめで放たれたザクの120mm榴弾がガンダムの頭部を破壊し、メインカメラを破壊する。MSの動きが一瞬止まった瞬間、シャアはスラスターを使い、呐喊。振りかぶったヒートホークが陸戦型ガンダムのコックピットに直撃した。ルナチタニウム合金の強固な装甲であっても、そのコックピットの強度は核融合炉と違って頑丈ではなかった。そして、装甲を貫いたヒートホークはパイロットを即死させ、シャアは一息つく。

せり上がった胸部装甲と前時代的な戦闘機のコックピットのデザインをするMS。ジオンのような人的資源も乏しいとあっては、その装甲や長時間作戦能力を考えると耐放射線能力も高いザクは総合的に生存能力が陸戦型MSと比べて高い。ジオンと連邦の設計が違ったことで止めを刺せた。シャアは再び鉞山街へ機体向け、スラスターの燃料配分を最大にし、急いで向かおうとするが、回復しつつある無線通信に連絡が入った。

でからは、自然とそれらは解消されていたのである。だが、シャアが予備役に編入され、ガルマの軍参謀時代や101空挺師団大隊長、セツルメント国家連合の自治政府国防部隊顧問などを歴任してからは、ガルマのザビ家の一員という肩書に寄ってきた者たちがいたのだ。

シャアと一緒にいたガルマはそうした輩を嫌うようになった。当然だろう。シャアという、ガルマ自身を見て接する友人とザビ家の御曹司という色眼鏡を使い、ガルマそのものを見ない輩など好きにならない。だが、シャアと行動しなくなつてからは、擦り寄る輩は直属の上司から部下に至るまで、非常に多かつた。

小説や物語のように、ガルマをしつかりと見据えるシャアのような部外者は居るはずもない。集結した面々は「首を斜めに振らない」ような骨太の連中……と聞こえはいいが、その実はそもそも出世に無縁な議会のはぐれ者、一匹狼、変わり者、オタク、問題児、鼻つまみ者、厄介者、学会の異端児と言った人間など早々集まるはずはない。

というか、そんなメンバーを仮に集めたとしても、キシリアやギレン、ドズルが黙っている筈もなかった。そのため、ある程度ガルマの要望に応えられたのは、慣れない間だけ宇宙攻撃軍にいるシャアを短期間借りることや戦場に近い現場指揮官の地位である。だが、それに引き換えとして、ギレンやキシリア配下の派閥指揮官が配属され、正にジオンの政治を現した様相だつた。

そして、そんな歪な政治体制が表面化したガルマ指揮下の第21特務隊は足の引っ張り合いをする。それは旧ナチス・ドイツの国防軍の旧貴族派閥とヒトラー支持派、前ワイマール共和国の民主主義に奉ずる軍人など混沌とした時代を彷彿とさせる。そんな内憂を抱えた組織が機能するはずもなく、張り子の虎と化していた。司令部の移設の際にも揉めに揉め、外交的視野から、パーパルディアへの外交圧力として王都ル・ブリアスに置く案も出ていた。だが、軍人が出しゃばることなど、政治闘争のし過ぎで外交と軍事をごっちゃにしているのはと、ドレンは今も亡き担当官を撃ち殺したくなつていた。

破壊された指揮所には司令部警備部隊の指揮官や通信将校、各部門

の責任者は戦死か重傷。指揮系統はズタズタであり、士官学校上がりの新米が熟練の下士官にどやされ、命令される修羅場が展開された。現時点で最高指揮官なのはドレンという、佐官が全ていないという異常事態。経験豊富なドレンでさえも動揺を隠しきれていない。

移された前線指揮所は建物の奥にあるワインセラーに設置され、通信システムの復旧と戦術ネットワークの回復に全力を注いでいた。

「コード：E Y 00を発動！」
エコーヤンキー

「中尉殿！それは！」

「うるさい！このままで居られるか!?後々更迭されるぞ！」

ガルマの誘拐と司令部への被害。それを考えれば、更迭どころか懲役刑も考えられるほど、現在の状態はまずい。これを内々に済ませ、後々司令部に打電したとなればドレンの責任問題に発展するだろう。

まずは司令部ジオン本国かロウリア総督府へ緊急事態の宣言と即応部隊の応援を要請する。ドレンの判断は至極真つ当なものだ。保身に走りやすいジオンの士官を放っておき、戦況把握に乗り出した。

「鉱山街の様子は？」

「依然、現状不明！アルタラス反乱勢力が占拠している模様」

「研究地区は？」

「旧市街とギルド街の冒険者と傭兵の協力部隊が防衛しています。逃げ遅れた避難民と各国研究者も生存、小康状態が続いています」

「次ここに、行政街だ………情報を知らせろ！」

シルウトラス市全域の衛星マッピングによる地図には手書きの地名が殴り書きで示され、敵反乱勢力が占領する地区には赤いペンによって斜線が掛かれ、その地区はシルウトラス行政地区の半分を占め、ジオン・王国軍と小競り合いの続くエリアは黒と赤の斜線エリア。実効統治が出来るが、未だ危険なエリアとなっているのが黒の斜線。そして、完全な安全地帯、アルタラス臨時政府の指揮する王国軍とジオン軍の治安部隊と救護班のボランティアのいる連合任務部隊が編成され、迫りくる暴徒の恐怖を一身に受けつつも、黙々と先の指令を忠実に守っていた。

「現在臨時政府庁舎は完全に敵の手に墜ちています」

「臨時議会の多くは戦死または行方不明。」

「臨時首相のチャルメイ氏は旧市街にいましたので無事です。ルミエス王女殿下も同様に第七歩兵大隊が警護に当たっています」

「西セクターは現在、正体不明のMS部隊が出現。現在、ギルモア大尉の小隊が対応中。臨時政府庁舎の延焼を食い止めるため、消火剤を持ったファットアングルが無許可離脱。現在、消息が掴めていません。」

「鉱山街側の東には多数の暴徒によって占領。非戦闘員との区別がつかないため、鎮圧にあたる王国軍とわが軍とでは歩調が取りづらい様子で……」

「ガルマ司令の消息は？」

「攻撃時の足取りを最後に行方が掴めていません。佐官服の人質を連れていたと連絡がありました、それしか……」

地図を見るドレンだったが、その目撃情報と敵の配置。二点の攻撃からして、要人略取と破壊工作が連邦軍部隊の目的だと判断する。そして敵の退避経路だったが、主に三つ。一つは絶大な火力を有するMSの支援を受ける西セクターからの退避。次に東セクターから暴徒の支援を受けて退避。そして最後は先の無断離隊したファットアングルに乗って逃げる。この三つが敵の取れる選択肢。

「どれがジョーカーか……」

ドレンの趣味はトランプ遊びである。それはプレイヤーとの心理戦や運などの要素を使うものであり、ドレン自身戦場で必要な要素であり、訓練しなければならぬものであると認識している。どれを取れば相手から金ガルマを雀り取れるか。

「指揮所より緊急入電です！」

「今は忙しい！どこの指揮所だ？憲兵大隊か艦隊駐機の指揮所か?!」

どの指揮所Hか、下士官の要領を得ない台詞に業を煮やしたドレンは怒鳴り声をあげ、下士官は委縮する。ただでさえ、混乱しているのに訳の分からないことを言われれば、温和な人物でさえ激昂する。ドレンが怒鳴った人物が自分と同じような歳の叩き上げだったことに気

が付き、その下士官の表情が只事でないことが分った。

受話器を手に取ると、スピーカーを耳につける。

【私だ！ドレン中尉か?!】

その声はドレンが最も媚を売りたい相手。

それは絶対シヤアではない。人が媚を売り、恩を売ろうとしても眉一つ動かさないのが彼という生き物である。そもそも、仮面越しで分らない。媚を売って鼻で笑われたことがあるドレンは、シヤアを良き上司とは思っていても、いい人物とは思っていない。もしその時が来れば、肉壁として利用されるに決まっている。ただでさえ、腹の肉が多い。防弾性能はそこらの兵士よりは高いつもりだった。

なので、ドレンが部隊内で最も媚を売る必要がある人物。ジオンで最も権力のある一族。

ザビ家の御曹司であるガルマ・ザビの声だった。

「大佐殿!?!ご無事でしたか?」

【頭を打って気を失っていたらしい。おかげで救護所でも間違われる有様だ】

手を入れられた御曹司の紫色の髪。紫外線が当たらず、脱色したような紫色の髪はジオン内部では、ガルマのチャームポイントとして知られる。そんな彼の髪は頭を打った衝撃で出血し、すぐに司令だと認識できなかつたのだ。そして、彼の着る軍服も間違える要素を含んでいた。

シヤアの格好を見たガルマは、嘗てのベトナム戦争が「大尉の墓場」と呼ばれたように、自分自身が司令官だと示すような恰好を自重した。佐官服から野戦服に切り替え、名誉を重んじる高級将校からは反発があつたが、一度決めたらやり遂げる頑固さも兼ね備えていたからか、一命を取り止めたようだ。

「攫われたのかと思っておりました」

【私もそう思っていた。彼らの狙いは私だつたと思つたが、どうやら違ふらしい。シヤアとは連絡が取れたか?】

「いえ、やっとミノフスキー粒子の中和剤が撒かれたようで。通信が途切れ途切れです。レーザー通信で攻撃を受けた事だけ伝えました。間もなく、アズナブル少佐も西セクターのMSの対応をする手筈に……」

中和剤と呼ばれているが、実際はミノフスキー粒子のもたらす電磁障害を消すわけではない。薬剤や磁力のある金属粉を散布し、ミノフスキー粒子を付着させる。それによって、大気中の濃度を低下させるのだ。だが、低下させるのであって、粒子を全て無くすわけではない。【衛星通信を使用してシャアと連絡しろ。レブラン防衛線に配置する部隊を戻されては面倒だ。シャアはその判断をしないだろうが、他の者がそうとは限らない……】

「了解です」

ドレンは通信兵に受話器を渡すが、それと同時に衛星経由のレーザー通信によって通信が出来た。データリンク連邦軍の存在もある事から、暗号通信にせねばならず、複雑な暗号なために、音声通信ではなかった。様々な符号や言い回しも独特になるのが暗号の特徴だが、ドレンの手にあった紙には驚愕の事実が記されていた。

【レブラン城塞ノ皇軍 戦闘ヲ中止セリ 講和ヲ持チ掛ケタリ】

「は……あ……う？」

ドレンは啞然とした様子でその紙を見つめる。軍人として長い間、所属の違う軍服を三回も身に着け、様々な戦場を見てきた。その中でも最大の戦いであるルウムに参加し、軍歴を残してきたドレンである。今回の攻撃の動揺などは何度も経験している。だが、この失敗を突くように攻撃をすれば、精強なジオン軍でさえ瓦解する。如何に鋼鉄の巨人が闊歩する戦場でも、兵站や指揮、人という欠陥の生物が乗る以上、MSは万能で完全無欠な兵器ではない。

だが、敵側から戦闘を停止し、弱点を突かずに講和するというのも驚きだった。もっと攻撃し、レブラン城塞だけでなく、シルウトラス市を完全占領してからでも遅くはない。ガルマのことにしても、しっかりと仕留めればいいのでは？

既にスレンダー伍長の乗るザクⅡF型は関節部に魔導砲や古の魔法帝国のテクノロジを流用したプラズマ放射式大砲「魔光砲」により、アクチュエーターが破壊。行動不能に陥った。ガルマの居る艦隊司令部が攻撃を受け、指揮系統が寸断。この情報を受けたバフラムは先の海戦で使用した古の魔法帝国の兵器を使用していく作戦だった。だが、寸前のところで例の組織から作戦停止を命令された。

そう命令である。偉大なパーパルディア大陸軍に対して命令とも取れる言動で中将のバフラムを名指しで勧告してきたのだ。

【即刻停戦合意を交渉し、侵略を即刻停止せよ。さもなければ、貴軍に対して攻撃を行う】

以前のバフラムであれば、その通告をした人間の頭を挽ぎ取り、槍で持ち上げ、「皇国を愚弄した輩」として文字通り槍上げにするだろう。だが、実質的脅迫の見返りとして得られたのはエルペジオ4アルファの実質的設計図と毒散弾の基本的構造。どのような化学物質かわかるデータも送られ、それは戦闘を停止できる十分な理由となる。

例えば、皇帝陛下が停戦に対して激怒しても、このエルペジオ4アルファの設計図や基本理念などがあれば、神聖ミリシアル帝国とのミリタリーバランスを一変させかねない。更に毒散弾の具体的な製造方法や化学物質の詳細についても、大量生産や配備が出来れば、周辺諸国に対しての軍事的なカードを得られることになる。

バフラムは戦争をするために来たのだが、いざ蓋を開けてみれば、訳の分からない輩の言いなりになる。それも、こちらが文句の言えない餌で言いなりにする、言わば道化に飼いならされた畜生のような気分である。

軍人としてこれほど屈辱的なものはない。

「ジオン公国軍指揮官が参られます。」

「うむ、あちらの警備部隊とも連絡がとれたのか？」

「こちらの総大將が行くとくれば、それなりの準備をしなければなりません。それ相応の情報は収集できました」

バフラムの参謀は様々な情報を収集していた。それこそ、ジオンの

内部事情も含めてである。第三外務局のみならず、第一でさえ過多になりつつあるジオンの情報に対して食あたりを起こしつつある。現在、いや宇宙世紀の情報リテラシーは産業革命に近い状態の文明にとっては未知のものである。ラジオやテレビ、そしてインターネットと言った情報の大量伝達に慣れたスペースノイドと比べて、情報の取り扱いに長けてない彼らは諜報という世界に身を投じていても、どれが真実か分らなかった。

はつきりしない外務局を見ず、軍閥を形成しつつある大陸軍は独自の情報ネットワークと諜報組織の設立に動き出していた。バブラムはその牽引する將軍だった。

「それで？今回の相手はどうか？」

「ええ、今回の王国駐屯のジオン軍司令官はガルマ・ザビ大佐。ジオン公国を牛耳る一族だそうで。今回の攻撃も彼を標的にしたものだから、しないとか……」

「あの『地球連邦軍』とか言う奴らが狙ってたのか……それでも仕留めきれないとは無様だな」

拍子抜けといった気持だったが、参謀は首を横に振る。

「どうもしつくり来ていないらしいです。相手は相当凄腕だったらしく、我々が情報源に金塊を与えて様子見ていますが、なんとも彼らもわかっていません。」

「敢えて生かしておいたのか……それとも目的は別か？その情報源とは？」

「なんでも、ドレンという士官で、なんでもルウムという海の大戦で英雄となった指揮官の副官とか」

「ふん、ジオンも所詮は人の集団。落ちぶれておる」

暴虐非道と云われるパーパルディア大陸軍でも、英雄の側近が情報漏洩するなどありえない。本来であれば、国の面汚し。皇国情報部としても、そんな人物の情報を使いたくはないが、外務局の情報と照らし合わせることができたのは良い事だった。

そのうちに、ジオン警備兵と思しき武装をする人物が入室し、ジオ

ン軍事関係者並びにアルタラス臨時政府執行官が現れる。

「お待たせして申し訳ない。少々、こちらも貴軍の要請に驚きを隠せなくて、周りの反対に遭いましたよ」

「貴官のその怪我は……？」

バブラムは現れた人物の様子に驚いていた。例の組織がジオン軍の司令部を攻撃したと聞いており、その人物の頭に巻かれた血の滲む包帯を見て、驚いていた。將軍の副官らしき、気品のある顔立ちと振る舞いから、どこぞの貴族の息子だと思っていた。パーパルディアでさえ、將軍や皇族の官僚であれば嫁の家系や親類、家来の次男や三男を参謀や副官、従者に据える。または男色の愛人や男装の麗人という線も捨てきれない。男女の性別から来る兵種の制限はない皇族では、性別の区別なく配属される。歩兵などの泥臭いものは当人から嫌厭されるが、士官や航空管制、魔導レーダー監視員など、更には参謀付き士官から将官へ上り詰める者も少なくない。

「これは貴軍と親しい者達にやられましてね。問題ありません。私が居ないと仕事になりませんので」

指揮官の若年化や中堅士官の情報漏洩、テクノロジーとしては優れていても、指揮官の質がそこまで高くないことを感じ取っていたバブラムは若干気持ちの余裕を取り戻していた。

「それはそれは、貴軍と紛争状態でなければ司令官宛てにお送りしましたのに。して、司令のご趣味はどのような？ 果実酒や発泡酒がわが軍の高級将校向けの兵站にあったはずです。それとも奴隷がお好みかな？」

「バブラム中将閣下、そこまで気を使わなくても構いません。それに我が国では奴隷制はありませんので、もし送られてしまえば私が困ります」

バブラムは表立って不快に思わなかったが、敵対する軍隊の最高司令官に物怖じしない従者も凄いと思いつつ、流石に謙った言動は出来ないのかと彼の教養を疑った。そして、バブラム以上に不快に思い、同時に怒りを抱いた参謀はやや怒りの表情をして声を出す。

「貴軍は、従卒や従者待遇の者が司令官相手にこのような言動をするのか？」

それはパーパルディアの総意とも言えるだろう。参謀の顔は怒りの表情であり、それに驚く者や戸惑う者はいない。いるとすれば、こういう場所が初めてな若い十代半ばの従卒ぐらいだった。その光景に呆気にとられたジオン軍一同は顔を見合わせるが、その事を言われたガルマは包帯を触り、いつもの前髪が無いことを感じながら、微笑む。

「失礼したバフラム中将閣下並びに皇軍将校の皆様。私の名前はガルマ・ザビ、当地のジオン軍の指揮官を務めております。今後お見知りおきを」

そのガルマの台詞にパーパルディアの一面は驚く。皇軍の全てが、ガルマ・ザビというジオンの司令官は年相応の人物であると。よもや、20代前半の若者であるとは思っても見なかっただろう。ジオンでは、ザビ家のガルマと言えば国民的アイドル。歳もインターネット上やテレビでも放送されるが、ロウリアンタワーなど、各電波塔や衛星中継によって流されるガルマの年代については、殆ど大まかな情報しか流さない。「若い」「弱冠」と言った表現であり、20代であると舐められる可能性から具体的な数値は書かれていない。例え、今回知られても問題なかった。

既に、外交圧力として相手の動揺を狙えるほど軍指揮官として成熟し、ザビ家の人間として頭角を露わにしていたのだから。

「これは失礼した、今後は皇族の扱いをした方がよろしいですか？殿下？」

「いえ、ザビ家の者と言うだけであって、そちらの皇族扱いは遠慮してほしい。私は一軍事指揮官です。貴軍が他国の一貴族の軍指揮官に対応するものと思っただいて構わない」

パーパルディアの皇族対応、所謂神聖ミリシアル帝国やムーの旧王族関係は「皇族対応」という、かなり重厚な儀式をしなければならぬ。戦時中の困窮且つ、泥だらけの戦場でさえ、皇族対応しない国家は即「殲滅戦」と行われるほどだ。テクノロジーを凌駕するザビ家率

いるジオンへ無礼を働き、ザビ家中枢にそれが知られば、戦術で勝つても国家戦略では敗北してしまう。

バフラムは頬を引きつらせながらも落ち着きを取り戻し、非公式ながらも停戦合意を含めて、前段階の交渉に入る。ここでしくじれば、連邦との交渉も反故になり、ジオンの攻撃が再開する。指揮系統が回復したジオンと善戦できるはずもないパーパルディアは悲惨な撤退戦をしなければならぬだろう。神聖ミリシアル帝国も義勇軍を駆使して善戦するかもしれないが、バフラムの目からしても、指揮系統を回復したジオンに勝つ術はない。

そのことにジオンが気づけば、大陸軍設立以来の危機的状況に立たされることになる。現在いる部隊が全てではない。だが、バフラムの首が危ういのは確かだった。

「我が国が主張するのはこれだ」

ジオン側に送られた停戦合意案は、

甲・両軍の速やかな戦闘停止及び通信手段の確立

乙・アルタラス王国の即時引き渡し

丙・ジオン軍の即時撤退

丁・丙案が拒否または遅延した場合は代替え案

壺・代替えとして、一部領土の割譲（ただし鉦山街や研究街・旧市街はこの限りではない）

と言ったもの。流星に賠償金云々は書けなかった。そもそも、今回弓を引いたのは、パーパルディア。こちらの優勢で終結した戦いだが、戦という水物は直ぐに変わる。それこそ、バフラムの得た情報が古く、敵に先手を打たれた場合は、それまでの予想とは違う結果になるからだ。敵が未知数のテクノロジを持っていて以上、それを考えなければならぬ。

ジオン軍の反応は様々な物だったが、ガルマと他軍人が会話して以下の草案が送られる。

甲・両軍の速やかな戦闘停止

乙・ジオン・パーパルディア本国での強固な国交の設立

丙・パーパルディア皇国軍のアルタラス王国領土からの完全なる撤

退。なお、徴発した物資や金品などはアルタラス臨時政府へ返還する。

丁・アルタラス臨時政府の承認（以下臨時政府をアルタラス王国連邦と呼称す）

戊・丁案と丙案の同意が得られない場合は以下の案を提示する。なお、上記の要求と重複

壺・アルタラス王国内の即時撤退

式・金品・資源の即時返還。丁案が得られない場合は代理人であるジオン公国軍に全てを提供する。

己・アルタラス攻撃の際に使用された核弾頭の即時データの提供、及び海戦で使用された化学兵器についても同様である。また、この請求案については、化学的知識及び環境に考慮した対策が急務であるため、国益だけでなく今後の両国関係及び人類の繁栄のためにこれらの兵器使用のデータを要求するものである。

双方主張を譲れず、また国の全権大使としての権限を担っていないため、交渉は難航する。職業軍人として戦闘を停止する権限を持つが、外交官としての役割を得ているのは、ガルマやバブラムしかおらず、本職の外務省職員と比べると発言力が弱く、一歩も譲らない状態が続いていた。

とは言え、ジオンは国民の血税で無駄に銃をぶっ放すわけにはいかないし、金品強奪に動く末端の兵士を押さえなければならぬ。パーパルディアの事情もある事から、決裂とまではいかないまでも火花を散らしつつも進む会議。「踊る会議、されど進まず」ではなく「罵声の会議、されど終わらず」。「火花散る会議、されど戦わず」

僅かに生き残りつつも、政治的役割に固執するギレン・キシリア・ドズルの派閥将校とガルマ派を立ち上げようとする若手将校の意向から外交の手腕をガルマに身につけさせたい意思とパーパルディアの参謀や中将のジオンを極力刺激させず、皇国としてのプライドや本国の資源獲得のための過度な要求を抑える微妙なバランスの元、会議は進む。

そして結ばれたパールディアとジオンの戦時条約、南極条約に匹敵する国家間戦争の「ルール」の基礎となる『シルウトラス条約』が締結される。アルタラス王国の行く末は棚上げされたが、核物質を使用する核爆弾やコア魔法兵器などの大量破壊兵器の使用を禁止し、生物化学兵器の使用禁止。更に民間人の殺傷や民族浄化などの虐殺行為の禁止、捕虜の取り扱いや便衣兵の権利剥奪。レジスタンスなどの民兵組織の権利保障。

この世界のハーグ陸戦条約に匹敵する国際条約が制定された。

神聖ミリシアル帝国やムー、そしてジオン公国、セツルメント国家連合を軸とした新世界の形成に向けて、新たな一步を踏み出した。た。

一方、その同時刻。

惑星のとある部屋の一室では只ならぬ空気が漂っていた。連邦軍やジオン軍が使用するような、金属製の壁ではなく、煉瓦による壁と連邦軍の使用する非常用の組み立て式照明のあるアンバランスな組み合わせ。更には有線式監視カメラや野戦で使用される軍用の支給机など、想像するなら連邦軍に接收された民家を尋問室として利用しているようだった。

その部屋の尋問される人物の両側には、連邦軍の軍装で警戒する警備兵がその人物を睨んでいる。その人物は凄腕の殺し屋や過激な宗教の聖戦士などでは決してない。神々に忠誠を誓い、自身の命を犠牲にしても勝利を手にする輩も相手にしてきた連邦軍特殊部隊。正規軍の灰色やカーキ色の軍服を身にまとうのではなく、比較的動きやすい野戦服と防弾プレートアーマーを着、身分がバレないように覆面をし、カスタムされた小銃でその人物を監視する。

その人物とは誰か？

「なあ、その君。キットカットないかね？甘いチョコがないと、頭が働かなくてね」

その容貌は老人ホームで余生を過ごす、若干変人に見えるただの老

年の男にしか見えない。唯一異なるのが、先の戦闘の影響で一部焦げ、煤で汚れた白衣を身にまとい、緊張のため手が震えている。だが、それは常々服用しているLSD精神幻覚剤の副作用である。または、精神病院から出て情緒不安定なため、自家製服用薬によって処方する薬を飲んでいる副作用もある。

どちらにしても、その姿はあらゆる科学に精通する人類有数の科学者だったとは到底思えない。両端にいる特殊部隊員の覆面に隠された表情は戸惑いを隠せない。数多の戦場で敵兵を殺してきた兵士とは思えないほどに、ついにはポケットからお菓子を出すまでに至る。

「おお、ありがとう……えっと、ブロイルズ大佐でしたね」
「そうです、博士。私の質問に答えてください」

尋問する連邦軍将校。濃紺に仕立てられた連邦軍の軍装に身を包み、地球連邦臨時政府に設置された転移事象への対策に関わっている宇宙軍のブロイルズ大佐はその彫りの深いアフリカ系の顔に怪訝な表情をし、机に置かれた書類に目を通してしている。

「わ、私がこの件に関わったのはU・C・0064……丁度、ジオン・ズム・ダイクンが演壇上で急死した時、私は当時M・I・T。（マサチューセッツ工科大学）の物理学教授の傍ら、宇宙軍省や連邦安全保障会議、連邦高等研究計画局Aからも依頼があつて研究していた時期だ。^U」
宇宙世紀0064、それは地球連邦にとって重要な年だった。ジオン・ズム・ダイクンの独立宣言や宇宙移民による反政府運動が激化していた頃であり、地球連邦政府はより一層の締め付けと植民地支配に乗り出していた。その当時のコロニー国家への税の徴収は地球市民と比べて負担が大きく、農産物の多くを地球が依存している有様であった。

それに対して、元地球連邦議員のジオン・ズム・ダイクンは自治権拡大と独立をサイド3「ムンゾ」で行い、官民多くのバックアップを受けて政治家として歩んでいた。しかし、突然の心臓発作と壇上での突然の死。これらは暗殺疑惑を発生させ、宇宙移民の抑圧として様々

な暴動やテロ活動に波及した。これを受けて、最悪のシナリオである「宇宙移民の独立戦争」を鑑み、極秘裏に兵器実験が進められた。当時、ミノフスキー博士が見つけたミノフスキー粒子の作用やメガ粒子砲といったエネルギー兵器、サラミス級巡洋艦などの近代改修計画が策定され、U・C・0079『一年戦争』に向かつていったのだ。

「その頃、宇宙軍省開発局から要請が下り、ルナIIに出向した。当時の基地司令エルラン少将が私に『口外すれば懲役刑』と言っていた。私が思うに、あのエルラン少将はなかなかの策士。食えない男だったよ」

「そうでしょうね、博士。」

転移時にエルラン少将改め、総軍参謀のエルラン中將はジャブローの魔窟の一員。あの当時は未だ、地球連邦の母体であったアメリカ合衆国の力も強く、地球連邦の派閥や権力がようやく定着し始めた。

地球連邦の全身である国際連合へ諸国家の機関が統合されるにはやはり時間が多くかかった。

「そしてあなたは宇宙軍省開発局と当時エルラン中將がルナII司令だった頃にN6408BVと呼ばれる物体の調査に参加した」

「大佐、それは機密事項だぞ！地球連邦首相の署名と参謀本部の許可なくしては開示やファイルの閲覧は出来ない筈！」

「地球連邦臨時政府の許可証とレベル將軍の許可でもですか？」

「エルランの鼠男だけじゃない！当時の首相の署名の入った命令書を持っていた！私は協力させられた！協力を強制させられたんだ！」

博士は唾を飛ばすような勢いで叫び、警備兵が押さえつけるように椅子に座らせる。荒ぶる博士を押さええながら、机の手錠を引つ掛ける所を博士の手かせに引つ掛け、簡単に立ち上がらないようにすると、ブロイルズ大佐はファイルから数枚の写真を取り出し、机の上に広げる。

「あの嫌ったらしい笑いと細く鋭い眼光、魔界の軍団長のような口振り、息子で盾に脅してきたのだ！」

「西暦1908年6月30日頃、ロシア帝国領中央シベリア、ツングー

スカの隕石衝突現場。そしてこれが発見された砲弾の形状を持つ未知の物質……ここに記される文字は嘗てこの惑星で覇権を唱えていた古の魔法帝国……「ラヴァーナル帝国」の文字と当時の帝国軍のマークと型式が記されたものでした。ですが、この他にも、同じ文体で記された物体を貴方は分析したはずですよ」

そこにあつたのは、N6408BVという名称で登録された物体の写真。所謂、隕石や小惑星に名付ける名前の一つ。だが、その番号は公式には欠番し、存在しない宇宙外飛翔物として処理された。その写真に写つたのは、人工衛星に近い大きさの物体だった。先のツングースカにあつたそれと違い、大きさはまるで人の大きさに近い金属製の砲弾の形をしているのである。だが、大きく異なるのが、それが武器ではなく、何らかの発信機と云う点だ。

その物体はとある小惑星帯の連邦資源探査チームによつて発見された代物であり、小惑星帯の座標と管理番号、船の名前のイニシャルから名前が振られていた。

「あなたは宇宙世紀0064、11月4日。この謎の飛翔物に関して設立した研究チーム『バビロン計画』に参加。計画内容は地球外生命体を作り出したと思われN6408BVの調査?」

「そうだ……あれは私が入院する二か月前……」

更に机に出されたのは、「バビロン計画」と銘打たれた【機密】【CLEARANCE-A4】【関係者以外の閲覧を禁ず】の赤判子を押しつけてある機密ファイル。その他、旧合衆国政府の国土安全保障省の古いファイルもあり、その物体の系譜は恐ろしく古い。

「あなたの所見を読ませていただく……【N6408BVの形状は砲弾とそっくりであるが、その物質の目的は敵を殺傷する兵器ではなく、所謂センサーの役割を持ち、常に内部にエネルギーを持ち、振動するその物体は地球所のあらゆるテクノロジに該当しない。ある種の別次元に信号を送る物体であり……】」

「……【異文明の発信機と考えられる。】……それは定かでないが、当時の私の所見は当たっているはずだ」

ツングースカに墜ちた物質とは違い、それは攻撃兵器ではなく、発信機という機能を持つ存在だった。その推察は天才の科学者だから下せる推論だろう。平凡な科学者では説明のつかない事象に対処できるのはこの博士しかない。

「では博士、『スターウォーズ作戦』に聞き覚えは？若しくはスターウォーズ計画は？」

「それは西暦1985年のか？当時のアメリカ合衆国レーガン大統領の立ち上げたSDI構想のことか？」

「いえ、U.C. 0070から今に至るまでにあつた極秘計画です。ご存知ですか？」

知らないものが居れば、それはスピルバーグの宇宙戦争映画と考えるだろう。だが、博士が言ったのは、西暦1980年代。米合衆国大統領ロナルド・レーガンが提唱した戦略防衛構想^{S₁D₁}であり、戦略ミサイル交渉と防衛の一環として監視衛星や早期警戒機、軌道上の衛星兵器にまで言及したそれは、当時の映画からスターウォーズ計画と表現され、ソ連などの仮想敵国の核脅威に対抗し、各都市が破壊される前に迎撃し、核以上の戦略兵器の開発を行おうとした。それはMDIミサイル防衛構想、イージス艦やイージスアショアと言った弾道ミサイル迎撃システムなどに継承された。

だが、それとは違う宇宙世紀の極秘計画。ブロイルズ大佐は他の計画について話しだし、一番新しいファイルを開いた。

「博士が知らないのも無理ありません。博士が事件を起こしてムンゾ精神病院にいた時に、バビロン計画の人員が配置されましたので。本当にご存じありませんか？」

「知らん……そもそも、あのバビロンは非常に危険だと言って、エリア51の倉庫ではなく、更にクリアランスレベルの高い場所へ移動されたはずだ！」

再び怒鳴り散らす博士であつたが、ブロイルズ大佐は飛ぶ唾をファイルで遮り、落ち着いた所で説明する。

「ええ、貴方が仰ったように嘗ての旧ソ連、シベリアの永久凍土の倉庫に封印されました。ですが、貴方が強制入院した後に、新たに幾つも

の遺物が見つかりまして」

「何!?そんな馬鹿な?あれは宇宙に漂流していたとして処理されたはず。また流れ着いたか」

「いえ、赤道近くの東南アジアで見つかりました」

ブロイルズ大佐が出した写真や複製不可の文字に斜線され、若干黒塗りの情報機関の書類なのか、関係者と関連機関の記載が消されているが、それでも取られた写真や大佐の持ってきたタブレットに写された発掘映像からすると、間違いなくそれはN6408BVと称された砲弾型の物体に他ならない。

「先の物体とは違い、既に機能は停止。低周波の振動も発せられず、エネルギーが尽きた状態で発見されました。合計で五つ、その全てが第二次世界大戦中に大日本帝国海軍と連合国との間で激戦地になっていた場所です。詳しい情報は分りませんが、当時の大日本帝国海軍の部隊が居なくなっていた魔の一带と噂されていました」

連邦海軍省と連邦省庁の一つである海洋保全庁の書類、そして日本国防衛省の刻印のある書類、これらすべてを調べた連邦の捜査能力に驚くべき所だったが、博士はまるで特大の肉を見た犬のようにファイルに食いついた。

「発掘地点は五つ。しかも、全て……ふむ。これらが見つかった地点を繋げると、地形がくりぬかれたようになっていて。これはここからの地形がまるでラザニアを切り取ったように別のものになっている。」

「では、この真ん中にある発掘された物は何ですか?」

「たぶんこれは……高度だ。切り抜く場所にはX軸とY軸が必要だが、立体にするとなればその高さも必要になる。五つ目を上空にあげておけば、延長線上を繋げればピラミッド型に切り抜かれたと推測できる。」

「……」

博士の答えにブロイルズは黙り込む。博士の話した通り、発掘した四点を繋げれば、明らかに不自然な形で地形が抉れているように見え

る。それは精巧な地形を記した地図でなければわからないだろう。限られた情報を元に解析したとあれば、かなりの収穫だった。そうなれば、N6408BVという物体は何らかの転移装置とも見て取れた。

「この物体と地球圏の移転事象。因果関係を見れば……人為的であることは説明がつく。」

ブロイルズは博士の結論に頷き、博士もその推測が正しいことに満足する。だが、ブロイルズはそれに満足せず、口を開いた。

『レインボー計画』……それについて知りたい」
「……!?!」

その計画を耳にした瞬間、博士の身体は小刻みに震え、目が泳ぐ。その名称は第二次大戦中のマンハッタン計画の欺瞞計画、都市伝説として知られるその名前。だが、都市伝説だけで震える子供ではない。だが、子供に例えるならば、悪戯がバレそうになる子供にそっくりだろう。

「いったい……どこまで」

ブロイルズは溜息をつき、黒塗りの書類を机に投げ出した。其処にあったのは、関係者や関係機関の文字をほぼすべて塗りつぶし、全貌が見えないようにされた書類。だが、そこにはN6408BVという文字と「再生」という文字、機能改善の文字が記されていた。

『オーパーツ再生計画』秘匿名は「Plus Ultra」……
更なる前進
われわれはそのためにいるのです。博士は我々があなたを尋問する理由を勘違いしておられる。我々はジオンに与するジオニズムの科学者に連邦への背信を問うているわけではありません。」

ブロイルズの表情は暗く、その眼は長きに渡る軍務によって狂気を垣間見せている。もはや、彼が嘗てどれほどの高潔な軍人であったとは想像も出来ない。震える博士は立ち上がり、逃げ出そうとするが、両端に立つ兵士が彼の肩を掴み、逃がさないようにと椅子に強引に座らせる。

「これは作戦時における捕虜への尋問か、否！それとも反逆者への裁判？いいえ、これはただの……」

ブロイルズは顔を博士に近づけ、口を開く。
「償いです」

その直後、ブロイルズは博士の頭を机に押さえつけ、目の前に軍用のコンバットナイフを机に突き刺した。

「協力を強要された？馬鹿馬鹿しいですな！あなたは強要されたのではなく、喜々して協力した。未知のテクノロジーを弄繰り回し、世界をラザニアのように切り取り、我々をこの世界に置き去りにした！」

ブロイルズは声を荒げて机にあったナイフを取って、ばらけていた作戦指示書突き刺す。その光景は彼も錯乱しているようにも見えていたが、博士を取り押さええる兵士やそれを遠隔カメラで見る連邦軍関係者は彼を止めようとはしない。

「あんたはあのエルランの鼠野郎の口車に載せられたんじゃない。いっしょに酒を飲み、連邦軍があのかつた反抗的移民者反抗的移民者を殺すための破壊兵器の研究をしていた。そして、あのテクノロジーを解析して自分のものにしようとしたんだろう？」

自らの知への欲求を満たし、知識を高めるために更なる研究を行う博士。彼にあったのはどこの組織に、何処の思想に準拠した研究をするのではなく、彼自身の知の欲求を満たすのが誰か、そして最大限活躍できるのは誰かと探った。彼は最終的には事件を起こし、ズムシテイの精神病院に送られることとなる。

ブロイルズの目に宿る宇宙移民者への侮蔑の視線を博士は見逃さなかった。明らかに宇宙移民の博士や他の人間を蔑み、地球の人間こそがエリートであると執着する人間であると感じ取った。

「私がやったのは、N6408BVと壊れたらしい7つの同じ大きさの砲弾……確か、『ビーコン』の修理とエネルギー供給についてだ。私が携わったのはエネルギー供給についてだが、こればかりは分らなかった。私は！その研究途中で他の研究に関わり、そつちで事件を起こしたのだ。その後は知らないんだあ！」

博士の年を考えない大泣きに両脇の兵士は戸惑い、手を緩める。その光景を見ていたブロイルズは憐れみを込めながら、その部屋を後にする。幾つか使えるところがあるが、今はまだ彼の薬物が抜け、落ち

着いたころにまた来た方がいいだろう。まさか、人類の中で唯一、古の魔法帝国のテクノロジを理解し、「バビロン計画」と称してN6408BVという小惑星帯に漂流していたこのオーパーツを分析。そして、「レインボー計画」において、東南アジアで発掘されたN6408BVと同様の物体を復旧させていたとはブロイルズ自身思っても見なかった。

書類で記された事を目の前で見ると認めることが出来ていなかったが、この世には天才が居て、その天才は平凡とは違う。まさか、レインボー計画における100年前に稼働して、停止していた遺跡を復活させるなんて普通出来ない。そして、その事を忘れているなど思いもしない。それは数十年にもわたる入院生活によるものか、LSDによる精神干渉薬物、抗不安薬による記憶喪失によるものかは彼には分からなかった。

ブロイルズは報告書を見つつ、司令部へ連絡しようとしたが、視界に何者かが入る。暗い廊下を歩む大佐の元へ走ってきたのは、テイターズズの刻印と軍服を身にまとったジャマイカン・ダニンガン大尉だった。彼は本来ルナII勤務であったが、ブロイルズ大佐の命令によって今回の特殊任務に従軍している。

「あの博士……ウオルター・ビショップ博士は大丈夫でしょうか？」
「博士か？ 問題あるまい。ザビ家の坊主が殺されかけた。他に居なくなったのは訳の分からない老人のみ……だから誰も見向きもしない」

『レインボー計画』それは、物体N6408BVや他の物体を本の姿に戻し、更にリバースエンジニアリングによって製造法を究明する。これらの研究はビショップ博士が居なくなつた後も、連邦軍科学者によって探究されていた。ビショップ博士の基礎研究からこれらのビーコンを修復出来た。それは思いもよらぬ結末を起こす。宇宙世紀0088、12月31日22時頃にある異変が起きる。完全に保管されていたN6408BVの他8つのビーコンは突如、収まっていた木箱や金属製の密封ケースを突き破り、さらに倉庫の屋根を破壊して、地球から姿を消したのだ。そして、そのものすごい衛星でも

追跡できないそれらのビーコンは地球圏全体に、地球を除くすべてのコロニー全域に配置され、何者かがそのスイッチを押しした。

これによって地球圏全体に地場が歪み、時空がゆがめられる、ある意味ワープに近いそれは地球圏のコロニーを包み込み、別次元の世界へと送り込んだ。東南アジアにあったのは五つのビーコンによるピラミッド型の転移装置。今回はビーコン8つは立方体を形成し、その空間内の全てを転移させた。もし、ビショップ博士が「ビーコン」の修理とエネルギー供給を完了していなくても、他の誰かが修繕していただろう。だが、そうならなかったのかもしれないし、「もし」の話を今考えても仕方がない。

ブロイルズ大佐他、地球連邦軍とレビルの演説を経て正式に発足した特殊任務部隊「テイターンズ」、ジャミトフ・ハイマン中將を指揮官とした統合任務部隊は地球出身とそれに準ずる思想を持った軍人達で構成される政党にも似た軍事組織となった。彼らの目的は母なる星『地球』への帰還。スペースノイドのコロニーなど借り住いであり、地球に戻りたいと願う地球連邦將兵や彼らのビジョンに共感したスペースノイドはサイド7に集まり、地球連邦臨時政府を立ち上げた。

そしてテイターンズはこれら転移事象を究明し、地球の帰還を目指す。だが、その帰還の一席にジオンや彼ら独立する輩の席はない。

「ジオンの劣等種は精々、野蛮人共の相手をすればいい。我々はこれを作った者と話さねばならん」

ブロイルズは部下のジャマイカン・ダニンガン大尉を引き連れて外を出る。其処には数多の保護国の国旗と帝国近衛師団の師団旗が翻り、地球連邦とは全く異なる兵装、神聖ミリシアル帝国装備の甲冑兵がAKにも似た連発式魔導銃を構えて行進する。

神聖ミリシアル帝国、フィルアデス大陸北端の直轄領であり、パンドーラ大魔法公国から租借したパンドール公爵領。

国賓が入国した場合、掲げられる国旗ポールには地球連邦政府の旗が昇っていた。

第二十四話 設定話（という名の補足話）

「うくん、だめ……まったく分からん」

そこは宇宙攻撃軍が建造した宇宙要塞ソロモン

東南アジアにあるソロモン諸島の旧日本軍の要塞群をモデルとして、様々な小惑星帯を周辺に配置し、大規模な要塞計画を立ち上げたものの、資源不足や軍資金不足、司令官のドズル・ザビの想像する難攻不落の要塞のイメージ不足も相まって、中途半端な出来栄となった。

とは言っても、宇宙攻撃軍の擁する艦隊の司令部であり、その防衛能力は非常に高い。地球連邦軍の拠点であるルナIIを凌駕する戦力を有するが、転移後のルナIIの戦力は分っていないため、分析するのは困難だった。

だが、困惑の言葉を紡ぐ彼にとって艦隊やMSの有する兵力を鑑み、判断を下す立場にない。彼が出来ることと言えば、MSの兵器を点検・管理して、未だ発展途上のMS開発に一石を投じることだ。

一応技術少尉という位についているが、彼にとってはどうでもいい。自身の携わっている『ジオング計画』はマ・クベ中將によるMS統合整備計画の最終計画に位置し、全軍がサイコフレームによる脳波兵器の採用とニュータイプ兵士によるサイコミュのMS装備計画を進めるにあたって、高性能メガ粒子砲や敵対兵器の対抗手段を考えていた。

所謂、彼が職人気質・研究者気質という精神を持っているからなのだろう。

自身の研究する兵器のためならば、『足がある』ことを理由に、上司やその上の司令に直談判することも厭わない。

何とも損をしている性格だった。

『足なんて飾りです！偉い人にはそれが分からんのです』

そんな事をシャア・アズナブルに言ってしまう程の豪胆さを持っている彼、ジオング整備士の名で親しまれるリオ・マリーニ技術少尉は今後敵対するであろう兵器の写真と映像を見ていた。

「全く分かんない」

そんな技術者魂の塊である彼でもこうである。実際に遭遇したパイロットや兵士からしてみたら、確実に驚くだろう。

彼が見ていたのはタブレット端末に映っていた映像、アルペジオ4アルファと呼称されるジェット戦闘機に搭載された魔光砲である。

ビーム兵器の大半はミノフスキー粒子をIフィールドによって圧縮。これが「メガ粒子」であり、運動エネルギーに変換され、それをIフィールドによって収束させ打ち出す。プラズマと同じような高温によって装甲を溶かし、目標を破壊する。だが、この圧縮工程を行う機関の小型化は難しい。だが、宇宙世紀00079九月の時点で連邦はメガ粒子砲に準じた破壊力を持つビームライフルの開発に成功している。

このビームライフルはメガ粒子になる直前のミノフスキー粒子がある一定の容器に入れる「エネルギーCAP」と呼ばれる技術であり、この容器の製造には未だにジオンのテクノロジーでは解明されていない。先んじて、Dr. ミノフスキーの弟子であるテム・レイ博士や連邦科学者が高出力ミノフスキー融合炉と併用して作り上げた最新兵器にのみ、エネルギーCAPを放出する動力やその他の兵器を利用でき、未だジオンはこの技術を習得してはいない。

だが、高出力プラズマに近いエネルギー兵器を神聖ミリシアル帝国のエルペジオ4アルファが搭載し、ジオン軍のドップⅡへ攻撃したという。

ジオン公国のテクノロジーは惑星の全てを凌駕する。それがジオン国民や政府の共通する見解であり、常識である。外交政策や兵器開発においても、それが前提で行われており、もしそれが覆されれば、大きな波紋が起ることとなる。そもそも、ドップⅡと呼ばれるジオン軍大気圏内戦闘機の次世代機と対等の接近戦ドックファイトを斬り結ぶ時点で問題であり、高出力プラズマ兵器を戦闘機に載せている時点で、彼の国のテクノロジーを見誤っているとと言える。

「やはり、数万年前のこの惑星のテクノロジーがこれを可能にしてい

るのか？信じられない……」

古の魔法帝国ラヴァアーナル帝国が数万年前に存在して、惑星の全ての科学技術を凌駕し、更にはジオン公国がたどり着けていないエネルギーCAP技術を実用化している事に驚きを隠せなかった。

「あのビショップ博士の『文明既出論』は眉唾物のオカルト都市伝説かと思っただが

あながち間違っではないのか？」

かなりの機密情報として制限されている情報だが、横繋がりの強いジオン公国技術者集団にとっては何の足かせにもならなかった。地球が誕生して46億年の歳月を経ているが、それまでの文明が現行の文明よりも進んでいるという仮説はSFとして語られる。その存在はオーパーツ（製造工程不明物体）として証拠が挙げられていても、立証にたるものではない。だが、逆にそれを否定する証拠も挙がっておらず、オツカムの剃刀に代表するように、『同様のデータを説明する仮説が二つある場合、より単純な方の仮説を選択せよ』と唱えたカール・セーガンの言葉を借りれば、十分に可能性のある仮説である。

既に古の魔法帝国という存在がある以上、地球にも彼の国のようなテクノロジーがあってもおかしくない。そして、古の魔法帝国がジオン以上のテクノロジーを秘めていてもおかしくないのだ。

「魔導弾やら魔光弾……もう訳わかんない。文明ごとに魔導砲やら魔導弾、魔法式光熱誘導弾、神聖ミリシアル帝国にしても、自社製造とラヴァアーナル製でも名称違うし……ああ！もう」

古の魔法帝国のテクノロジーは各国が様々な研究や模倣を繰り返して、実体弾に誘導能力を付けたミサイルのような魔導誘導弾やプラズマ集合体を発射し、任意の座標に飛来させる高度な魔光弾。様々な兵器が試行錯誤で生み出され、神聖ミリシアル帝国の兵器は成功と失敗の数々の兵器で彩られる、まるで兵器開発の見本市を見ているよう。

既に神聖ミリシアル帝国の対空火器はプラズマ放射弾としてイク

く異なる。

「飲んで！飲んで！……ちよつとー！」

そう『イツキ！』でなく『ちよつと』である。それはジオンが嘗ての悪しき日本の風習を受け継いでいない事を意味する。しかし、その理由には歴史のミッシングリンク(分岐点)が異なることに由来する。嘗て宇宙開発で最先端であった旧ソ連^{C.C.P.}の技術力は地球連邦の宇宙開発に引き継がれている。この系譜は脈々と連邦からジオンへ、連邦から宇宙移民者へと受け継がれた。真つ赤なソヴェエト連邦の精神は資本主義という地球連邦の精神と混ざり合い、現在のジオンや宇宙移民者へと受け継がれる。嘗てアメリカという大国を種として育ってきた地球連邦という大樹がジオンというソヴェエトやナチス・ドイツのような国家社会主義・共産主義の価値観を持つ枝木を作ってしまうとは何とも皮肉である。

そんなジオンは旧ソ連の宇宙ステーション『CaJIЮT ДBa』(サリユート II)で起きた事件を覚えていた。当時の宇宙ステーションに滞在していた宇宙飛行士サケエノミイ・イツキノスキイ少佐率いる生物研究チームは実験成功を祝うため、ウオツカの飲みまくった。そう、ウオツカである。ソ連人またはロシア人は寒さを凌ぐために、国民的にも酒が好きなためか補給物資として大量の酒類が地上から宇宙ステーションに送られた。

だが、それがまずかった。大量の酒類に興奮した研究チームは大はしやぎ。無重力空間で大量の酒に溺れた宇宙飛行士達は大宴会を行い、ほぼすべてのメンバーが急性アルコール中毒によつて地獄と化した。

宇宙空間という特殊な状況下で行われた大宴会は一気飲みという悪習とともに、大気圏に焼かれるという人類史上類を見ない大事件となった。すべてが酒飲みのためとは言わないが、タイミングよく隕石が衝突したというソ連の公式発表と、当時ソ連による生物兵器開発を警戒したCIAの宇宙妨害工作部隊が展開した謎の情報リークから、一大スキャンダルとなった21世紀の重大事件。『サリユート飲み』と

いう名前まで定着し、ジオンや宇宙移民者は一気飲みという飲み方を忌み嫌い、この掛け声は日系ジオン公国民が広めたのかもしれない。「このマハル産ワインどこで手に入れたんです?」

「ああ、海兵隊の姐さん（シーマ・ガラハウ）にもらったんですよ。」
「こつちの酒もいいけど、やっぱり故郷の酒が一番だな!」

アルコールが脳を刺激し、酔いという現実を忘れさせるような作用と気持ちの良い脳内麻薬が駆け巡って人種や性別、階級や出自などという垣根を越えて、友情が芽生えていく。一方で、やんちゃしすぎて後に後悔と人間関係に不和を生じさせることになるかもしれないが、今の彼らには知る由もない。

とは言え、そんな宴会で盛り上がったのは、やはり自分達が電磁カタパルトで発射する機体の事であった。整備をする整備兵と無我夢中で発射する誘導員。誘導の都合上、MSも誘導する彼らやMS、戦闘機を整備する彼らは今の欠陥機を愚痴ってしまう。

「ひっくー……やっぱさ偉い人には分かんないよね。整備してる俺達の苦勞がさ」

「わかる!わかるよ!俺はコックピット回りについて言いたい!なんでO6F型とMZ型のコックピット回りが違うのさ。設計したド間抜けにはそこんとこ教えてほしい」

「MSは発展途上の兵器だし仕方ないんじや。昔でいうゼロ戦やbf109なんじゃない?職人気質だったのよ」

「MZの装甲や整備に関しては俺達の意見は良く取り入れてるし、名機だとは思ふよ。だけど、僕としてはね!もっとデザインにこだわってほしいよ」

「いやいや、兵器にデザイン云々言うってどうよ。」

「洒落が分んないの?そもそも一つ目はどうかと思うよ!もつとこう、機体の識別ができるようにさ」

整備士達にも愛がある。開発した技術者への愚痴も少なからずあるが、それでも機体をパイロット以上に愛してやまない。愛するが故の愚痴であった。MSは未だに第一世代。全周囲モニターもなければ

ば、音声認識システムもないご時世。Iフィールドビーム駆動なんて未来の技術で何それ美味しいの？と聞いちやうくらい発展途上。06F型やC型に至ってはミノフスキー粒子における電子機器の干渉や核攻撃による電磁パルスの対策として、通信機器の異常なまでのバリアとシステムの単純化。これまでなかった新鋭システムによる統制……所謂「整備泣かせ」なものがある。

とは言っても、海兵隊ザクMZ型や統合整備計画を反映した06F2型ザク、ドムトローペンやリックドムなどの部品や操縦系統の統一化は正に整備士泣かせを削減した計画であったと言える。MSの進化を阻害するという某パイロットや研究者の意見もあるように、進化の過程で生まれたMS構想を潰すような整備計画であることは間違いなく、整備士達の愚痴話でポロポロと話されていく。

「だからさ、やっぱりわかりやすく赤とか青、白色とか混ぜこぜにすればいい」

「あとカメラはデウアルアイにして、サブカメラの計3つにすればええのよ」

「馬鹿野郎！一つ目はジオニック社のモビルワーカー時代の伝統！それを連邦の模造品みたくするのはやめい！」

「モビルスーツじゃなくて、レイバーでもいいじゃん」

「ああ、それ！ちよつと小さいけど、その位が整備しやすいよね」

「レイバー、それは産業用に開発されたロボットの総称である。」

建設、土木の分野に広く普及したが、レイバーによる犯罪も急増、

警視庁は、特科車両二課パトロールレイバー中隊を新設、これに対抗した。

通称、パトレイバーの誕生である。」

「落ち着け！それこれをぐびつと！」

最早宴会は、混沌としたものへと変化する。そもその話はガンダムなどの連邦製MSが目立つ特徴のある頭部から、識別しやすい白を基調とするデザインの採用。通信用ブレードアンテナを鎧武者の顔とばかりのデザインはどうも、土木建築や軍用の無骨なザクをぶつた

切る白き騎士と思わせぶりなデザインから、ジオニック社系統の整備士は怒りのあまり焼酎をがぶ飲み（イツキ飲みではない）しており、周りの面々は怒りのあまり飲みすぎないようにと抑えさせる。

そのうち、MSよりもレイバーがいいと言ってしまうMS整備士もいることから、なんでこんなところに来たのよと周りから口撃に晒される。とはいっても、ジャパンアニメーションを知る整備士、ロボット系アニメを知っていれば嫌でもそれは分るだろう。

そして、プチモビや現行MSよりも5m程小さいジュニアMSなどもあることから、そのジュニアMSを『レイバー』と別名で呼ばれるまでさして時間もかからなかった。

そのうち、航空機整備長らしき、整備員のトップが声を出す。

「まったく、ドップで大ポカやらかして、ちゃんとした航空機を作ったと思つたらあだだよ。パイロットを何だと思つてるのか……」

航空整備士の面々は頷き、焼酎やウイスキーをぐびつと飲み、再び機体の愚痴に突入する。

「だいたいよ、シミュレーションだけで飛べると思わないでほしいよな。ただでさえ俺達は宇宙移民者だよ。いきなり大気圏で格闘戦も爆撃もこなせるマルチロール機を整備しろって……ぶっちゃけ連邦軍兵器のデッドコピーの方がマシだよな」

「まじでそれ！向こうは作戦内容によつて使い分けているのに、こっちは飛べるものなら何でもできると思いこんでる！しかもそれはジオン上層部だけじゃなく、パイロットまでもこれだから……」

整備士の一人は頭を指さし、その人差し指から手のひらをひらひらさせる。近くには同じドップⅡのパイロットもいるが、自覚や他の航空パイロットの中にそんなのがあるかい、苦笑で誤魔化していた。

ジオン上層部やパイロットに至るまで、こうしたズレた考えが多い。対艦攻撃や宇宙での戦いでは基本的にMSが居ればなんとかな「MS万能論」が根付いている。これらは戦場が歩兵ではなく戦車や戦闘機が生まれて、その役割がこんがらがった時代に似ている。宇宙戦闘機ガトルなんてものは元々、哨戒機や飛来する隕石を迎撃するほぼ民生に近い航空機であり、そもそもドックファイトなんて期待さ

れてない。掃海機の意味合いも強いのだった。

そんな戦闘機の云々やノウハウを理解していたとしても、「MS最強！」っていう概念によって縛られてしまえば、「大気圏内戦闘機？ザクじやダメなの？」とまるで子供のような精神年齢になる。言わば、最強スペックを手に入れた主人公があらゆる作戦をすべて無視して呐喊しか選ばないようなもの。

初期の戦術の栄光に固執するあまり、戦争後半戦になって負けまくる某国にそっくりだったり、調子乗りすぎてかなりの方面に喧嘩吹っ掛けた某国を見れば、如何に初っ端勝ちまくるとその後の戦術や戦略は盲目になると言える。

宴会は混沌が広がり始め、その頭ともいえる年配の整備長の音頭が入る。

「二先ずき、わが軍の大気圏内戦闘機の第一世代機『ドップ』について語ろうじゃないか」

そして語られだすのは罵詈雑言ともとれる酷評だった。

「あのドップを設計した奴は頭おかしい」

「シユミレーションしか見なかつたど阿呆」

「マツハ4でドックファイトしたらパイロットが死ぬことを理解していない」

「設計運用をUAVでしか考えてない基地外」

もはや、ドップ設計者に対してリスペクトなどありはしない。駄目っ作機に当時の時代の整備士が敬意を表するだろうか。答えは否である。

後世の人間は何らかのリスペクトを。兵器開発の系譜をたどり、開発の失敗に対して、エジソンの哲学を前提に話を進めていく。失敗は成功の元という思考で。

だが、それは命を懸けて戦う彼らに求めるのは場違いだ。

ただでさえ、慣れない大気圏内での戦闘。その機体設計は有視界戦闘を重視しすぎて、コックピットはせり上がり、ジェットエンジンの推進力で浮力を得ているような設計は明らかに異常の一言に尽きる。そして、低高度でもマツハ4を記録できるトンデモ性能。数値的には

非常に高性能だと思われるが、ドップのようなマルチロール機に必要な能力ではない。

そもそも、ドップの最大航行速度と同じ速度を出す、前世紀の最速戦闘機『SR-71』はソ連の対空ミサイルを避け、超高高度の偵察を行う。この能力はドップに必要なかと問われれば、その超音速によって敵を振り切ればいいと単純志向で考えただろう。だが、明らかにそれは地上の味方部隊を救おうとは考えてないし、低空での地上軍支援を全く考えない「宇宙移民者的思考」があった。

そもそも、宇宙空間に空気はまったく存在しない。音の伝達がない以上、パイロットが聞こえるのは、機体のエンジン音や微かに聞こえる爆発音。それしか経験しない彼らが地上支援を行う航空支援をしつかりと認識できなかったのも仕方ないのかもしれない。

地上支援で来るドップの最高航行速度はマッハ4。普通はそんな速度で支援爆撃などしないが、ドップの機動力は皆無。スピードで他の追従を許さない設計思想の元作られているため、支援爆撃などはコアファイターや連邦軍傑作戦闘機フライマンタとまともに戦えば勝ち目がない。そのため、地上に味方が居れば、地上に考慮して減速し、居なくとも格闘戦に持ち込まずに一撃離脱戦法ヒット&ラン;アウェイが主となる。

そうなると、部品消耗が激しくジオンは、ドップを運用するために部品を一ダース準備しなければならぬ。宇宙運用しか考えていない愚鈍な技術者が開発したドップ。大気圏内戦闘機として大気を燃焼する関係上、宇宙空間以上に部品の摩耗が早い。それこそ、作戦ごとにジェットエンジンのオーバーホールが何度も必要なほどに。これほどまでに技術者泣かせな物はない。

そして、こうしたドップの欠点を確認したドップ開発者達は原点回歸をして新たな戦闘機開発に着手した。それがドップIIである。

「不運な名機」

「やっぱり俺達に航空機は無理」

「時代は俺達に何を望んでいるんだ？」

「そんなに僕たちの力が見たいのか」

「アスロックが出ているぞ！散れ！」

「おい、米倉あー！厨房行ってつまみ持ってこい」

ドップの有視界戦闘を重視しすぎたせり上がったコックピットは無くなり、機首の若干短いコックピットに仕上がり、複座式のために若干細長い形状をしている。一方、翼も肥大化している代わりに、ガウ攻撃空母やザンジバル級巡洋艦に搭載できるよう、艦載機能力として折り畳みが可能になっている。20mm機関砲と対空ミサイルや対戦車ミサイル、無誘導弾やJDAMなどの爆弾も搭載が可能となっている。

一応、ミノフスキー粒子対応の電子戦防護能力やレーザー通信による指揮戦闘通信システム、各兵器統制システムとの連携も重視しており、ミノフスキー粒子散布下でもこれまでと同じく、連携した作戦行動が可能となる。

それはまさしく、整備士や航空機パイロットとして正に望んでいたドップのスペックであり、ドップIなんてなかったのだと現実逃避する整備士もいたとか。前時代的な設計思想に基づくのではと前開発者がほざいたが、現場の圧倒的な支持の元封殺された。とは言え、これまでのドップの唯一の長所であるスピードは全く生かさないものになり、最高巡航速度はマッハ2前後。これまでのスピードを半分にしたことで、機動力や旋回性の向上。三次元ノズルジェットエンジンによつて変態飛行が可能となった。

正に第五世代・第六世代戦闘機にも似た性能を發揮するが、大気圏内戦闘機の開発がほとんど止まった連邦軍とも互角に戦える兵器、連邦軍戦闘機フライマンタに僅差で負けるとシミュレーションでは出ていたが、この惑星で遭遇することは先ずない。ドップの独断場になると予想され、いや断定されていたのだ。

だが、意外な形でドップIIの性能が明らかになる。

「なんであんな第三世代っぽい機体にやられてしまうんだ」

「嘘だと言ってよバーニー……」

「バーニーって誰だよ」

何処かに転生技術者がいるのではと視線を凝らしてみるが、誰もいない。空耳だったのだろう。ともかく、エルペジオ4アルファと呼ば

れるMiG25に近い形状を持つジェット戦闘機に負けてしまったのは確かであり、戦場に送り出した巡洋艦『モガミ』の整備士達や飛行甲板誘導員達、そして亡き戦友を思うパイロット達は機体の性能よりも、まず自分たちの力量が不足している事を痛感した。

大気圏や重力戦線に慣れていないからと御託を並べたて、言い訳を述べるのは報道官や偉い人たちの仕事である。自分達はこの経験を元に敵に負けないように技を磨くのみ。だが、負けることはないどころかで思っていた自分達の傲慢な心が仲間を殺し、傷つけたことを考え、彼らは酒を煽る。

本来、そこにいる戦友たちの姿に思いを馳せ、悲しみをアルコールで洗い流す。

彼らの供養となるのは、敵をどう倒すか。この一点に限られる。

「今回苦戦したエルペジオ4アルファと言う機体、公国司令部では『フォックスバット』って名付けられるらしいが、どうみてもやばいな」

「魔法や魔導兵器、そして現存のミノフスキー融合炉で不可能な魔導小型機関の出力……さらには誘導兵器にビーム兵器……どう見たって魔導文明恐るべしって感じだ」

彼らはドップⅡのパイロットが記録した記録映像や撃墜した機体の残骸から凡そのスペックは判明していた。魔導機器の多くは魔石や類似するエネルギー集合体を動力源とし、ジェットエンジンや電気を使用するような家電製品に至るまで使用される非常にエネルギー効率の高い物質である。

宇宙世紀に入って、石油資源の消費量は電気自動車や水素電池、ミノフスキー融合炉・融合炉パルスエンジンに使用されるヘリウム3など、未だ天然鉱物資源を使用する。魔石と言った物質がどのように作られているのか、未だ分かっておらず。そして、そのエネルギー効率の良さはジオンが代替えエネルギーとして使用できるか考えてしまっただけなのだ。

そして、惑星における文化発達は、文化人類学を齧っているジオン公国土官や科学者なら、この文明分布に頭を傾げる。現在の友邦国であるクワ・トイネやクイラ。占領して属国となった旧ロウリア領の文明は中世から近世の間。パーパルディアに至っても科学技術が近年躍進しているが、総合的に見れば近世に入ってから間もない。神聖ミリシアル帝国やムーは第一次世界大戦時のテクノロジと文化形態と推測できるが、エルペジオ4アルファのように冷戦中の旧ソ連軍航空機に似たものもあることから、この惑星の文化分布は異常の一言に尽きる。

海流の流れや海洋生物の存在は多くの文明の海洋進出、それに伴う大航海時代と言った侵略の歴史は大陸間や地続きによって引き起こされ、地域の文明レベルの差異が大きくなった原因として挙げられる。

神聖ミリシアル帝国などが侵略戦争を展開すれば、一時代の世界征服が可能だろう。だが、それをしないのは、元の技術下である古の魔法帝国が再来する可能性もあるからだろうか。

「それでもドップとアルペジオ4のキルレシオはこちらが圧倒的。そうそう負けないだろ」

と客観的な意見も出る。ドップⅡがエルペジオ4アルファに遭遇した場合、戦闘技術や蓄積された全盛期の格闘戦知識を使用すればドップが勝つだろう。というか、先の戦闘で落とされたのは3機のみ。一方、エルペジオ4アルファは10機以上落とされている。

「そういうことじゃない」

「あれが誘導兵器とマツハを出すことが問題」

「ビーム兵器とか、何処の魔王だつてんだよ」

確かにドップⅡとアルペジオ4のキルレシオや戦闘の勝ち負けを考えれば『勝利』である。だが、貴重なジオン将兵が4人死亡し、2人は負傷するという事態になっている。自分達のテクノロジに驕り、死傷者を出したということを考えれば、今回の人的被害を考えるとは何とも辛い勝利である。そもそも、ジオンの兵力はそこまで多くない。連邦との戦いを考え、志願制という名の徴兵によって頭数を揃え

てきたが、経済を回すために職業軍人以外を全て民生に返し、人手不足にちかい様相をしているのがジオンだ。

そして、更に問題なのがエルペジオ4アルファが何故あそこまでの技術を結集しているかについてだった。

「やっぱり連邦?」

「もしかすると、奴らが囓んでるんじゃない?」

「あの場所にビーム兵器を搭載するとか……やっぱりルーデルっぽくね」

「それだ!」

テクノロジーに関しては、赤外線誘導の誘導弾は明らかに今まで対峙してきた敵とは異なる。今後、一番戦うであろうパーパルディアが持っていないことは唯一の救いだ。が、神聖ミリシアル帝国が今回の能力を持っている事はムーやパーパルディアを押しつけて、仮想敵国になる危険性があり、今回の戦闘にしても『義勇軍』と言ってもミリシアル帝国と戦闘になったことに変わらない。

そしてエルペジオ4アルファの機体下部に搭載された魔光砲。口径が小さいと魔光銃や魔導機銃などと呼ばれるものもあるが、整備兵からしてみれば、あれはビーム兵器と変わらなかった。

「あの機体下部にあるビーム兵器はさ、絶対重いぜ」

「あの魔王に近い変態操縦者……仕留められて助かったな。明日は我が身だぜ」

ジオンが戦争に突入する前、ギレンがマスコミや媒体に命令して、歴史に注目を集めようとしていた。自分だけでなく、国民一人一人に歴史を見させていき、歴史によって間違わさせない鉄血宰相ビスマルクの思考をもって行われたそれ。一番整備士達が考えるのが、第二次大戦東部戦線で活躍した旧ドイツ空軍の『魔王』ハンスⅡウルリッヒ・ルーデル大佐である。

彼はJ u 87 シュトゥウーカなど、急降下爆撃機を以てソ連軍車両や対地目標を数千破壊した地上攻撃の魔王である。ソ連から渾名は『ソ連人民最大の敵・シュトゥウーカ大佐・ルーデル閣下・東部戦線の鷲』とされ、彼の乗ったJU87Gは普通のパイロットであれば操

縦できずに墜落する非常に難しい機体であった。

両翼に37mm砲を搭載する、当時の航空機では操縦が非常に難しい。そして、ジェット戦闘機においても同様の事がいえる。制空戦闘機に試作特殊兵器を装備し、試験配備して戦わせることは無謀にも等しい。そんな命知らずは、頭のおかしいパイロットがやつぱり頭のおかしいパイロット位だろう。

だが、その操縦センスは神懸りだ。何せ機体を特殊塗装にして自己を誇示するような、名パイロット。その操縦センスはドツプⅡを追い詰める程であり、他の機体と同様の操縦をするレベルなのだから、そのビーム兵器を搭載していなければ、もっと被害が大きかったはず。

あれを載せようと決断した敵方の指揮官や整備士には感謝しなければならぬだろう。

「だが、神聖ミリシアル帝国に毒ガスや核兵器を開発することはできるのかな？」

「ジェット戦闘機を作れたわけだし」

「いや、これはオリジナルがあつたはずだ。それをモデルにしていればどうだ？」

「この前、あの変人……ビショップ博士が言つてた古の魔法帝国のだろうな」

「馬鹿いえ、あれは一万年前の埃まみれのゴミだぞ。毒ガスは酸化して使い物にならないし、核兵器は漏れだして調べる前にガンマ線でインテリ共は死ぬだろうさ」

「こういう時こそ魔法の時！」

「十分に発達した科学技術は、魔法と見分けがつかない。」

ぼそつと、一人で焼酎を傾ける飲兵衛な整備兵はぼそりとSF作家アーサー・C・クラークを引用し、暴走した整備兵の持つてきたつまみのイカを齧り、再び升に入った焼酎を煽る。

「ウインガーディウム・レビオサー」

「違う違う！レヴィオサー！あなたのはレビオサー」

「そんなに言うなら自分は出来るのか？あ？」

「おいここにホグワーツがおるぞ、ふぎけた事言つてないで酒追加か

「調査報告は届いた……だが、大日本帝国は西暦1945年にポツダム宣言を受諾したと記憶しているが?」

そこはジオン公国総帥府の総帥執務室。いつもなら整然とした執務室だったはずだが、その時だけは異なっていた。アルタラス王国が核攻撃を受けた直後、ガルマ率いる特務隊が連邦軍と交戦。そしてパーパルディアだけでなく神聖ミリシアル帝国の義勇軍まで参加する今回の戦いはギレンも予想外の出来事に焦っていた。

そして、政務やガルマについての処遇も考えあぐねている所に、クワ・トイネ公国へ派遣した文化調査チームが驚くべき報告をしてきたのだ。

「ええ、我々の歴史ではそうです」

彼の目の前にいるのは、惑星の文明調査を行う調査団の団長を務める男。ジョン・シバ教授という、ズム帝国大学の文化人類学の頭的人物だった。ミノフスキー博士やフラナガン博士とは違う文系的な知識の宝庫である彼は何故か頭皮がまだまだ丈夫らしく、白髪が豊かであった。

それはともかくとして、シバ博士も混乱した様子で話し始めるそれはギレンの理解を遥か彼方に追いやっていた。

「仮に現在行方不明になっている、ウォルター・ビショップ博士の仰っている次元転移論や並行世界・異次元の扉と言った……まあ、オカルトじみた仮説を鵜呑みにすれば、明らかにあの戦闘機は我々の知る大日本帝国とは異なります」

既にガルマ率いる部隊の被害状況が伝えられ、その中には誘拐されたと思われる調査団の一人であるウォルター・ビショップ博士の存在は何故か、シバ博士などジオン公国の頭脳明晰な科学者たちに知られることとなった。

そもそも、ビショップ博士の存在はジオン公国の科学者や著名な学識者の間では、非常に面白おかしく伝えられていた。曰く「Xファイナルを鵜呑みにした男」「次元転移装置のドクよりも危険な博士」「精神

錯乱した危険な人物」と評価され、転移以前の彼の存在はまるでゴミのような扱いを受けていた。

それもそのはず。彼は非常に秘匿性の高い機密プロジェクトに關わっており、かの有名なXファイルを解き明かすべく作られた連邦の科学者集団の一人だった。彼はその中でも異質であり、SFのような事象をまるで簡単に出来るような知性と暴走性（狂った）を兼ね備えていた、言わば天才の部類に入る。彼の言動は的を外しているようでいて、学識者が聞けば気を疑いつつも、それが事実とわかるような信憑性の高いことを言うのだ。そのため、彼を雇った連邦は彼のそうした評価を拡大して正に狂気に駆られた科学者として広めたのだ。

勿論、その評価は後の事件の後に真実になってしまふのだが、機密性の高いプロジェクト故にそうした情報統制は不可欠であった。そんな彼が唱えたのが、『文明既出論』である。まるでSFのような主張であるが、その根拠となる証拠が複数あり、更に古の魔法帝国（エウアーナル帝国）の存在もある事から、相互証明するような論文が書かれた。

彼の『文明既出論』を要約すると、

【彼の惑星には、古の魔法帝国の存在がある事から、没落した文明が自己の文明よりも優れていると証明できる。また、それに伴い、我々の地球連邦から我がジオン公国に至るその道のりも、嘗て地上に存在した文明も同じ状況にあった可能性もある。地球が生まれて46億年、人類の歴史の分厚い歴史書は地球にとってみれば一ページにも満たない。嘗て、アトランティスという国家とムー大陸の国家が対立したという、我々の想像をはるかに超えるテクノロジーの存在があった。それらはSFや都市伝説として扱われてきたが、我々の目の前にはムーと言う国家の存在がある。我々は地球の真の歴史を知るべきだ……】

この主張はジオンのインターネットに掲載され、直ぐに消されたが多くの民衆がこの論文を閲覧した。ジオンの手の届かないところでは、彼の顔写真と共に流布され、世論が沸き立った。

ビショップ博士の評判を吟味して、狂った科学者の世迷い事として論されることを期待していたが、あまり情報統制が後手に回っているギレンは博士の名前から眉をひそめた。

「つまり、彼の言っていた並行世界。歴史の分岐点において別の選択をした大日本帝国の部隊がクワ・トイネ公国近辺で活動していたと思っているのか？」

「ええ、総帥閣下の仰る通りです。クワ・トイネ公国に伝わる伝説がそれを裏付けていますし、日系の研究団体の協力も得て、残された記録をたどりました。この写真と注釈もご覧になつてわかると思います。ですが、大日本帝国が大戦中にジェット戦闘機を使った記録はありません。別の世界の彼らが何らかの形で世界に影響を及ぼしたとして間違いないでしょう」

先の整備士達の話にもあるように、Me262の設計や技術供与からキ201火竜の存在が海軍機と共にある事時点でおかしく、そもそも実戦配備された事もない。そもそも、現物すら終戦と共に機密情報として焼却されたのだろう。そもそもデータが無いことを見ても、明らかにジオンの知る大日本帝国とは異なる。

「シバ博士、貴方もビショップ博士の調査データはご覧に？」

「ええ、総帥府のクリアランスレベルを上げていただき、閲覧することが可能となりましたが……いやはや、あの御仁があのような計画に加担していたとは」

宇宙空間に漂っていた物体の調査「バビロン計画」そして、酷似する物体が東南アジアから見つかり、それらの復刻し、リバースエンジニアリングを行おうとする「レインボー計画」。そして、その計画によってジオンや宇宙移民者たちはこの世界に転移してきた。その事実が漏れなければ、ギレンの政治力と外交力があればビショップ博士の処遇について連邦と外交決着が可能となる。だが、ビショップ博士が行った両計画についてのデータが公になれば、ジオンやセツルメント国家連合に属する植民地政府植民地政府、そして連邦政府の信用は地に墜ちたと言えよう。

これらを発端に反乱や暴動、何らかの社会不安が発生されるのは誰

の目から見ても明らか。

ギレンもこうした計画を見聞きしたのは初めてであり、アナハイム社と連邦の薄暗い関係やラプラス首相官邸の爆破事件以来の因縁も関わってくる。ギレンがもつと早く知っていればもつと楽な形で独立が成せただろうと思いい、博士の話を続けていく。

「私もあの話は聞いて驚いたよ。で、どうなのだ？君のような、長年人類の文化を比較し、分析していた者としてはビショップ博士の論文は？」

「最初……あの男の首根っこを引っ掴んで殴りたくなりましたよ」「ほう」

シバ博士の意外な言葉にギレンはやや驚くが、その反応は幾つかの予想の反応に幾つか当てはまる。

「彼の論文はあまりにも荒唐無稽で妄想的、明らかに正気ではない。そもそもあの妄言ぶりは閣下も知っているでしょう。まるで自分を神になったつもりで人の命をもてあそぶ」

彼の機密レベルで知ることが出来たビショップ博士の記録。そこには地球連邦軍の命令によって生体実験や人体実験など、公表されれば連邦高官の多くが職を失うものであった。宇宙移民者と地球在住者のウイルスや菌類の耐性について調べ、それは撲滅したウイルスや細菌を用いた悪魔の実験だった。

それを知るギレンは大義のためとあれば致し方無いと判断を下せる政治的人間である。人は施政者となれば冷徹な判断をしなければならぬ。だが、シバ博士はギレンよりはリベラルな、人権を重んじる人間だった。彼はそれにこだわっているのか分からないが、表情は暗い。しかし、博士の紡ぐ言葉はその評価とは打って変わって異なっていた。

「しかし彼の言っている事は正しい。彼の事は勿論嫌いですが、学問を重んじる人間として軽蔑する。だが、彼の語る言葉には裏付けが取れます。この論文は隠せずとも広がるでしょう。世界はこの真実を認めざるを得ません」

シバ博士による一連の識者説明が終わり、ギレンは情報統制を行う

政府の要人にアポを取り、急ぎ、ビショップ博士の出す論文に対してマスコミに拡散、そしてそれを押さえてしまったということでは宣伝省の役人が頭を下げ、当役人はその不始末に泥をかぶったので、ポーナスが出された。今頃、宣伝省の担当官は泥をかぶりながらも、給与明細に0が3つ程増えていたことは後で知ることだろう。

「兄上……お時間はどうですか？」

「キシリアか、もうこんな時間か。」

つい最近になって仲が良くなり始めた兄妹。政治的利害が衝突する二人は連邦との戦争が勃発する前にも多くぶつかっていた。だが、ガルマの部隊が襲撃を受け、ガルマが負傷して以来は定期的にミーティングを行う程仲が良くなっている。

とは言っても、これまでの確執や利害の不一致もあるが、唯一彼らが仲を改善したのは、「ガルマ・ザビ」の事である。彼の対応に共通見解を持ったのがこの兄妹である。

ドズルやデギンと言った家族の危機に血が上りやすい二人は即座に艦隊を軌道上去くよう命令を出し、戦略核や遊星質量弾などの戦術兵器を持ってパーパルディア皇国を撃滅しようと考えた。だが、それに待ったをかけたのがギレンとキシリアであった。

二人は例え100人の子供を犠牲に一億人のジオン国民が助かるのであれば、前者を迷いなく犠牲にする。そういう冷徹な判断ができるのが政治家であり、ガルマの仇討を考える事は国益に反すると分かっていた。

仮にパーパルディアに全力攻撃してもいいかもしれない。だが、それをすることでジオン本国の防衛戦力が減り、連邦軍や特殊部隊のテイターズによる破壊工作が行われるだろう。仮に政府が私情を持ち込み、閣議決定もなしに武力行使を行えば、政府システムの不審や公国の信用に関わる。

「兄上、ガルマのことはどうします？」

キシリアの危惧する事。それはガルマの進退、更迭や謹慎とした処罰に関してだろう。今回の被害は事前に対処が出来るものであると結論付けられた。攻撃が予期できぬものであり、もしもガルマが適度

な休養を行い、ミノフスキー粒子による妨害行動に気づき、各部隊に電子戦防護を命令することも出来ただろう。最高指揮官のガルマが適切な指揮をしていなかった、現地の士官数人もミノフスキー粒子をみつけた時点で警戒態勢に移行すべきであったと始末書や報告書、航海日誌に記載している。

今回の事や鬼の首をとったと雄たけびを上げる反ザビ派の将校や利害を考えて賛同する中道、一般市民の意見もガルマへの責任問題について挙げられ、既にネットでも書き込みやマイナーニューズジャーナルなどで緩和された情報統制に漏れたそれらは徐々に世間で騒がれることになっていた。

「出来ればあいつには汚れてほしくない。だが、ガルマには父上やドズルのような熱狂的ファンが多いからな」
「ファンとして活動している親子との発言とは思えませんね」

某アイドルグループの来賓席からコンサートに参加し、二人して一般客に紛れて握手会を行うのはキシリアから見て失笑の対象である。この親子がアイドルに現を抜かすという状態に笑うのではなく、彼女も誰にも知られず、DMM系列のレイピアが乱舞して美男子が戦うゲームが好きすぎて、財力を駆使して本物を購入したマジの審神者となっているから、

この家族にしてこの娘と言ったような感じ。

ではなぜ、この二人が失笑の対象なのか。

『握手は30秒……いい、いいいえ一分でも二分でも』

『構わん三分でよい。私はただの一観衆の一人！特権階級の如くルールを無視するのは、ジオン国民の長として恥ずかしい』

『は、ははあー！』

スタッフを平伏させ、アナウンスをしたスタッフ以外の反応も酷く、其れこそ「この紋所が目に入らぬか」「ジークハイル！」状態に平伏して頭を下げる有様。

『きよ、今日はコンサートに来てくれてありがとう！おきや……いえ
総帥閣下♪』

『君のことはムンゾ地下ホール時代から好きでな。実はお忍びで来ていたことがある』

なんというカミングアウト。という事は18歳と偽っていることがばれ、永久の18歳から28だということがばれてしまったことを意味している。しかし、彼女もアイドルのプロ。心の中では「てめえ……！何様のつもりだ！」と叫びたいが我慢して、ニコやかに且つかわいく挨拶する。

『いつも、いえ長らくファンでいてくれてありがとニヤン』

プロの意地だった。

そして、次に来たのは公王の礼服を着ているデギン・ドゾ・ザビその人である。総帥よりも更にグレードが高い。首相の次は国王が突然現れてアイドルを訪問する。これがどれほど異常なことか、日本と遇わせてみていたらどれだけやばい事なのが分るだろう。

『おお、ミキティ！萌え！』

そう、国家元首であり、あのムンゾ自治共和国と言う連邦からの自治独立を成し遂げた第一世代の宇宙移民者。ダイクンの死後にムンゾをまとめ上げた老人の姿は衰えていても、その心はアイドルによって生き返り、若返っていた。

それを見て皆の表情は驚愕を通り越して、「ここは現実なのか？」と自問自答し、思考が停止する。それはアイドルも同様であり、握手をしようとした手を宙ぶらりんにしながら、表情も呼吸も止まった、まるでカメラのページのようになり、空気が硬直した。

そしてそれは「伝説」となり、一部国民層からは真の意味で「総統閣下」と呼ばれ、デギンに至っては「萌え殿下万歳！」と諸手を挙げて忠誠を誓ったという。

「………審神者がなにを言う?!」

「提督閣下はまだ艦娘を全てカンストしていないので？私の刀剣はカンスト極み済み」

「何だと………!?!」

もはやそこにいるのは国家元首と情報組織の長の台詞とは到底思えない。

「話を戻そう。ガルマにはこの後、ルミエス王女を我が国に招き、セツルメント国家連合の副構成国家として認めよう。国名は王国連邦としよう。」

「話が逸れています」

「まあ最後まで聞け。ガルマにはエスコートさせる。両者ともに仲が良いから、何も不自由はない。ガルマは今後実戦は必要ないものだ。今後は裏方で頑張ってもらおう。」

「するとお咎めは」

キシリアの問いにギレンは不敵な笑みを浮かべて、口を開く。

「上等な羊より……喰らわれても良い生贄を選べばいい」

第二十五話 戦争のはじまり

ジオン公国の科学技術は世界中に知れ渡ることになった。それはジオン公国の広報活動の一環としてラジオ・テレビ・魔伝放送によって知られていた事も含めて、フェン王国での戦闘やアルタラス王国での戦いでもジオンの科学技術は惑星全てに知れ渡り、そして認められ始めていた。

パーパルディアという軍事大国の最精鋭「大陸軍」にジオン軍が攻撃を行ったことは、非常に驚かされるものだった。仮にも文明圏外国家のような弱国が大国に対して牙を向く事は。だがそれ以上に驚かされたのは、『パミ相互防衛条約』という新世界秩序体制が立ち上がった事だ。これはパーパルディアと神聖ミリシアル帝国が共同で双方どちらかの国土が攻撃を受けた場合に同盟国として援助・開戦して戦うというもの。第一次大戦前のフランスとイギリスなどが結んだ条約のような有様である。

そしてアルタラス王国で使われた魔導コア兵器、魔力を極限まで集中させ、そこで放射^{ブルトニウム}物質を核分裂させ、巨大な物質エネルギーを形成する。これらは神聖ミリシアル帝国が保有したことでミリタリーバランスが一気に傾いた。既にムーも神聖ミリシアル帝国と比べて国力が劣っている事実を認識してはいた。ただ、一般民衆には知られずに、対等な関係であると工作していたにすぎない。だが全て御破算。既にムーの国債は売られ始め、薄く広く世界経済に陰りを見せ始めていた。

そして、海上で使用された化学兵器「毒散弾」との名称のそれはマスターカードガスのような効果があり、化学防護装備のない部隊は壊滅する。これらは既にパーパルディアに供与され、既に植民地暴動の際に使用され、文字通り屍の山を築き上げた。属州の反乱に属州統治軍は毒散弾を使用し、虐殺の限りを尽くす。あとに残ったのは老若男女問わず口減らしで殺されるのを目のあたりにした、恐怖に震える屈服した植民地人達。連日報道されたそれらは属州の徴収する税が減ることを懸念する声しかなく、だれもジオン恐るべしとの声はない。

それは皇国の臣民統治機構が属州の富を搾り取るだけでなく、潜在的に敵対するであろう従順でない国民を監視するため、監視体制を敷いていたからだ。ムーや神聖ミリシアル帝国程技術力が進んでいないかの国は新聞を検閲し、数少ない魔導通信を監視。国民を闇で操り、世論誘導や共通の敵を作り上げている。

旧ナチスドイツの宣伝省にも似た情報統制システムは議会すらもコントロールし、形骸化。全ては皇帝の思いのままだった。そのため見せられない情報はひた隠しにしていた。加えて、皇帝の意に反する情報もまたこれらの組織の粛清を恐れて、自発的に証拠隠滅される。

唯一、皇帝にジオンの正確な情報を伝えていたのは、第一外務局長エルトただ一人であり、再三にわたって皇帝陛下に直訴していた。

「陛下、先のジオンの報告は読まれましたか？」

「くどいぞ、エルト！」

本来なら嫌がっている皇帝に書類を見ろと催促などはしない。だが、まだ二十数年しか生きていない皇帝陛下がしっかりとした判断を下せるためには、しっかりとした情報と知識、国内情勢と周辺諸国の情勢を知らなければならぬ。

ある意味、皇都で一番苦勞が絶えないのは、外務局長だろう。言わば、外務大臣をやりながら社会科の教員もやっている状態。そこまで悪く言わなくてもいいが、実際やっている事はそれと大差ない。

エルトは非常に有力外交官のひとり。パーパルディアと神聖ミリシアル帝国との相互防衛条約を結んだ皇国の立役者だった。実質、外交官の束ね役であるが、諸外国へのパイプは健在。外交機関では一番皇帝に近い立場にいる人物だ。

「申し訳ありません。ああでもしなければジオン軍に蹂躪され、我が方には甚大な被害が」

「それでこの外交草案とやらを書き上げ、この朕に渡してきてた……中將そこに立て」

大陸軍中将バフラムを絶たせると、腰にあつた魔導拳銃の銃口が彼に向けられた。

「陛下！おやめください！バフラムは失敗したと言え、大陸軍の幕僚司令官！戦いの幕を引いたのは確かに我々ですが、これは負けではありません」

「負けておっただろう！戯け！」

魔導拳銃は発射され、燃烧した魔石の硝煙が宮殿の天井へと流れていく。命中したのは、後ろに控えていた秘書官だった。どこかの貴族の次男坊か三男坊か分からない。斃れて呻き声を出しているが、皇帝ルディアスは気にも留めず玉座に腰を下ろす。

神に愛された男皇帝ルディアス。その実態は怒り狂えば手に負えない若者であった。銃を与えれば気に食わない者を撃ちまくり、指揮権を与えれば部隊の半数を死なせても目標を達成する。その傍若無人な態度はあまりにも酷いものだが、その一方で皇族の脈々と続いていた帝王学や政治決定能力、そして皇国史上最も美形で国民に愛された皇帝としての地位に立っていた。本人もその事を理解しているためか、無茶な行動をしても問題にはならず、バフラム中將を下がらせ、外務会議を進めていった。

「アルタラス王国は現在どうなっておる………バフラムは良い、お前は休め」

「しかし陛下！」

「お前は戦場帰りで疲れている。既にカイオスの国家監査軍に引き渡したのであろう？ならばお前の行くところは妻子の所だ。処遇は追って知らせるが、彼奴等相手に良くやった。今日は帰れ」

「……ありがとうございます陛下」

冷徹な独裁者であるが、アメとムチを使い分け、優しさを表に出したルディアスは歴戦の將軍であっても、男色の気のない人間でさえも惚れ惚れする。そうしたカリスマ性と失敗した部下への気遣いは冷酷さを併せ持つて、絶妙なバランスを保っていた。

「してカイオスよ。説明せよ」

「はい、身に余る光栄。」

文明圏外国家への外交を司るカイオス第三外務局長はお辞儀をし

た後に、バフラムから引き継いだと思われる書類と地図を覗み、説明を始める。

「アルタラス王国首都、ル・ブリアスについてですが、ミリシアル帝国の試作爆弾の影響から多数の被害が出ています。末端の兵士が略奪行為を行おうとして汚染。彼らに付着した毒が他の兵にも移らないよう滅菌しております。経済的損失はさることながら、ル・ブリアス周辺は全く使い物になりません」

「あの肥沃な農耕地帯はだめか」

「ええ、放棄された農作物は全滅です。今回手に入ったのはシルウトラス鉱山一帯だけ。正直申し上げますと、大陸軍の栄光に泥を塗る行為としか思えません」

「カイオス！貴様が言える立場か！」

大陸軍総司令官、アルデ上級中將は叫び、近くの参謀もヤジ紛いの非難を浴びせる。大將は皇帝、皇帝を除く最高位の階級は上級中將。皇帝を除けば一番上の階級なのだが、アルデの非難も物ともせずカイオスは止まらなかつた。第三外務局という僻地に飛ばされたが、その眼光は衰えず猛獣の如く鋭かつた。

「物申せる立場なのは皆さんも理解している筈です。そもそも、今回の計画は毒散弾による国家機能の喪失だけのはず。なのに、大陸軍のお偉い皆様はなぜ試作コア魔法の兵器を使用為されたのか」

「お前が言うことではない！そもそもアルタラス王国に攻め入ったのも、第三のごく潰し共が無理難題を吹っかけて奴らを怒らせたからであらう！」

「確かにそれはそれでしよう。だが、国家監査軍だけで事は済んだ。ジオンが居るからとミリシアル帝国から兵器を借り受け、防衛条約を結んで『地球連邦』という訳の分からん輩と協力し、結局かれらはどこに行ったのです？勝てた戦争を尻尾撒いて逃げてきたのに、敗者の台詞とは思えませんな」

「貴様、バフラムの苦勞を知つてのことか！大陸軍を侮辱するつもりなら表へ出る！」

アルデ上級中將はプルプル手を震わせ、劍の柄を握りしめ、今にも

襲い掛かりそうになっていた。カイオスの古巣は大陸軍。国家監査軍を擁する第三外務局に入ったのは閑職に左遷されたからでもあるが、それ以前に実戦経験豊富な第三外務局に行きたいという本人の意思もあった。力不足な官僚共が犇めきあう中で唯一長所としてあるのが第三外務局に属する国家監査軍。その規模は大陸軍に劣らず、練度も高い。

国策として大陸軍が勇猛果敢な精鋭ぞろいと宣伝するが、実際のところ張り子の虎に等しい。パレードと軍事演習、標的用の奴隷や標的をいたぶるのが仕事であり、戦闘の経験は監査軍に軍配が挙がる。大陸軍は装備と指揮官が優秀であり、バフラムの指揮する戦闘団以外は腑抜けに等しい。場末のチンピラの方が良く戦えるのではと考えてしまいう有様だった。

アルデ上級中將のような保守的で貴族的価値観に溺れた指揮官は目先と見た目しか考えない。優れた装備をしても、中身が弱兵であれば直ぐに勝敗は決してしまうのだ。

アルデの剣が抜かれようとし、カイオスも胸元のホルスターから魔導銃を抜こうか迷っている中、皇帝の挙手によって場は静まり返った。

「貴様らの確執はわしも知っておる。双方とも武器を収めよ。今回のアルタラスに関しては双方の落ち度がある。カイオスよ、今後は部下をしつかり統率せよ」

「はっ」

「アルデよ、バフラムにも申ししたが、練度の差が部隊によって開きがある。直ぐに、再訓練を行い、部隊の平均化に務めよ」

「はっ！」

「それでカイオス。お前の大陸軍への攻撃は見事であった。話を進めよ」

カイオスの古巣嫌いは既に皇帝が知るところ。元々、大陸軍に属し、政治的保身と政争によって大陸軍を辞めたことはパーパルディア皇国では有名な話だった。皇帝の意に反した行為による左遷が表向き、軍の政治的圧力に負けたカイオスが大陸軍の負債を全て背負い、

引責左遷させられたことは周知の事実。ルディアスもそれを知っているため、カイオスの第三外務局入りを許し、外務局長の地位を預けたのだ。

「はい、ジオンとのアルタラス王国の国境線策定と非武装地帯の区域創りのため、外交官を派遣。実務者会議を行い、両国間の衝突が起きないようにしています。今後のジオンとの交渉は我々第三外務局で行いますが、陛下よろしいですか?」

「ふむ、その点に関しては第三に一任する。研究地区と遺跡はどうだった?」

「研究所を幾つか押さえました。遺跡に関してはミリシアル帝国と共同になりますが、既に兵研による検証が進んでいます。」

「ジオンの鉄の巨人は?」

「腕の破片を回収、一部砲弾を回収しましたが、バフラム配下の砲兵隊の対策が功を奏したようです。」

「今後はバフラム閣下式の砲兵隊と兵研により、対ジオン鋼鉄巨人の対策と防衛兵器の開発に全力を注ぎます。」

兵研の魔導士は頷き、既にザクの対策マニュアルを策定している。砲兵隊の魔導砲。高出力の魔光砲であれば、高出力プラズマを以て駆動系を破壊する。それでも敵は戦闘能力を有するが、足がない分行動も狭まり、鹵獲を恐れて敵の動きも愚鈍化する。

「今後、第三にはアルタラス王国を任せる。下手なことするなよ」
「はっ!」

外務局の本領は、こうした人と人との外交にある。恫喝外交も一つであるが、今回の一件を第三がしたのは訳があった。

「第三は時間を掛けてじっくりと行え。問題ないな」
「はっ!」

第三外務局はアルタラスにて時間の引き延ばしを行う。現場判断も必要であるが、本国から出たくない第一外務局に配慮しての事だった。縁故採用や皇族の遠縁もさることながら、内部での押し付け合いもあり、一番の原因である第三外務局が尻拭いをするようになった。

ルディアスは少し沈黙し、周囲の家臣を見やる。それぞれルディア

スがどのような言動をするか、緊張した面持ちで注目する。一種の人心掌握術であり、人の注目を得るためにわざと沈黙する。そうすることで通常よりも集中して聞くことが出来る。

「フェン王国……あの蛮族の対処は何処にさせるか」

その一言に「やはり」と皆の顔は硬直する。御前会議であり、この場にいるのは国家中枢を担う官僚や軍人、皇族に占められる。その全員が全て視線を落とし、誰を生贄にするかと思案する。ジオン公国という超文明を持ち、鋼鉄の巨人に対応できる軍隊はいるか。パーパルディアのどこを探しても見つかるはずもない。

アルタラス王国でバフラムが善戦し、ザクを一機行動不能に出来たのは、不意打ちと不慣れな防衛戦、連携能力を高めていない連合軍であったが故に起きた奇跡。ザクの行動やパイロットの事など気にも留めない歩兵が縦横無尽に地上で歩き回る様は、シャアの指揮下にいたデニムやスレンダーと言った熟練パイロットでも神経を擦り減すことになる。

だが、この場で「我が皇国にフェン王国とジオンを懲罰攻撃できる部隊は居ません」と答えられる者はいない。いたとしても、それは自殺願望者。既に皇帝の痲癩や見せしめ目的でバフラムの秘書官が撃ち殺されている現状。誰も指摘する者等いない。国を憂いて反逆の意思を見せようものなら、臣民統治機構の捜査官が反逆の匂いを嗅ぎつけて、部隊を送り込む。それは嘗てのナチスの秘密警察ゲシュタポや親衛隊、東ドイツのシュタージに近い。そうした恐怖政治は皇帝の名によって強化され、その御前会議で異を唱えるものはいなくなった。

静まりかえった会議室で手が上がる。その主は御前会議でも一際目立つ軍服、パーパルディア大陸軍が着用する赤を基調とする軍服に身を纏った彼女、外務局監査室のレミールという、皇族に名を連ねる女性だった。整えられた金髪のロールや皇族のみが許される国章を首に下げ、容姿端麗なその顔は過酷な軍務や政務があっても衰えず、寧ろ輝いて見える程。そんな彼女が右手を上げ、皇帝の問いに答えた。

「国家監査軍は適任ではないでしょう」

「その訳は？」

「既にフェン海域で醜態を晒しております。そうでなくとも、彼らには力不足かと思われれます」

その一言にカイオスの眉がピクリと動く。心の中では憤怒の炎が燃え上がるが如く、今にも魔導銃に手を掛けたかったが、一秒もしないうちに素手で細い首をへし折る事はカイオスにとって容易い。だが、皇族を殺す事自体不可能、皇帝のお気に入り（……）となれば、下手に反論することも躊躇われた。

「以前、アルデ上級中将閣下が仰られておられました『統合計画』も視野に入れて、今回の外征は大陸軍にお任せしていただきたい」

「……何!？」

流石のカイオスも黙ってはいなかった。パーパルディア皇国の『統合計画』。それはパーパルディア皇国の軍組織を全て統合し、皇帝の意のままに操れるよう、指揮権を統一化する計画の一つである。大陸の覇者として存在するパーパルディア大陸軍と植民地統治と侵略の要である国家監査軍。それらは長年、対立しており、ときには内部紛争も起きていた。

そのため、すべての軍を一度『皇軍』として統合、再編成するとともに偏りのある資源や兵員、指揮官に平均化した教育を施すなど、ある程度の規格化を目指した計画。本来であれば、国家監査軍の大反対によって白紙になっていた計画だったが、第三外務局の度重なる失態から、再び計画が浮上。

更に悪いことに、国家監査軍の完全解体も視野に入れている事から、正気の沙汰ではないとカイオスは声を張り上げた。

「陛下！国家監査軍は大陸軍と比べれば、兵器も古く、粗忽者も多い……ですが、あのアルデの提案した統合計画は全くの暴論もいいたるところですぞ！」

「カイオスよ、貴様も海軍魂とやらが身に付いたか？大陸軍の赤い軍服はもう似合わんからな」

アルデ上級中将の嘲笑に我慢の限界であったカイオスは掴みかかりたいところだったが、秘書官がそれを押さえ、それを見ないか

のようにレミールは話を続けた。

「大陸軍の兵力や戦闘能力は国家監査軍とは一線を画します。我が国に泥を塗ったフェンは陛下に頭を垂れるでしょう……いえ、陛下は彼らの頭など不要でしょう」

「分っているな。……そうだ、あの蛮族は皆殺しでいい。レミール、外務局監査室から一度、第一外務局長補佐として、フェンについての裁量権を与える。」

「ありがたき幸せ！」

「ただし、レミールよ。貴様は軍事よりも文官寄りだ。指揮官は別の人間にやらせる。アルデ中将、人選と部隊には任せる。」

「はっ、精鋭を派遣いたします」

「うむ、好きにしてよい。そうだな……フェン王国については、戦後の国土や民の扱いまでアルデの好きにして良いぞ」

一同に衝撃が走った。

文明圏外の野蛮な国家であっても、1国の領土と民を国家機関の一つが好きにして良いというのは想像もできない。だが、恐怖政治によって締め上げられ、鞭を打たれすぎれば反感を買う。鞭以上に飴を多く与えることが必要になる。指揮官の貴族に領土と奴隷を与えれば、近年大陸軍に見られがちな士気の低下も抑えられ、軍の士気はとてつもなく上がる事だろう。

アルデは陛下に平伏する。

「あ……あ……あ……ありがたき幸せ!!!」

フェン王国と広大な土地が手に入る。部下に切り分けたとしても、自分の領地はそれ以上。恐怖政治の影響によって強力な貴族は数少ない。アルデは貴族で中の下に位置する。フェンを手に入れば、やや本国から離れるものの、一国一城の主になれる。アルデは皇帝への忠誠をいっそう強くしたのであった。

だが、それに危機感を抱く者が一人。

「不味い……このままでは監査軍どころか外務局すら危うい……」

御前会議の後、カイオスは執務室に入って考えていた。カイオス自

身、国家を憂う者の一人。フェンやアルタラス王国侵攻に関しては諸手を挙げて賛成しないが、偽善者として反対することはない。国家の繁栄を望むものとしては、国土の拡大は願っている事だ。しかし、植民地統治や駐屯軍としての役割がある国家監査軍の軽視は国家衰退に関わる。

加えて、第三外務局の存在意義も揺らぐだろう。

国家監査軍は元々、パールネウス共和国所属の海軍ではなく、共和国に雇われた海賊の系譜を持つ。大陸軍に比べると、海上の過酷な環境からか高給取りの水兵には比較的貧民層が入隊しやすい。海賊の流れは殆ど形骸化しているが、海軍魂と称される誇りは大陸軍からしてみれば侮蔑の対象だった。国家監査軍の海軍魂は武士道の無常観に近く、懐古主義なのか古いものを好む。逆に大陸軍は最新型を好み、古き良き時代を捨て去り、啓蒙思想が根付いていた。

「閣下、このままでは監査軍は……」

ポクトアールの後釜として、東洋艦隊臨時司令になったマシウルペはオーバーホール中の数隻と除籍寸前の老朽艦を臨時で編成した形だけのものだが、それでも外洋への作戦や物資輸送のためには必要な繰り上げ昇進だった。とは言え、ポクトアールのような懐古主義の権化のような、古い船を崇める体制を変えるべく、カイオスはポクトアールを引退させ、新式装備の導入を進めるマシウルペを推していた。ここに来て、老朽艦隊ごとポクトアールが居なくなつて清々したカイオスであるが、ポクトアールの元には熟練の水兵も居たため、東洋艦隊の損失はポクトアールの戦死以上に大きなものであった。

「分っている……第三の使えそうな若手外交官をクワ・トイネに派遣して、旧ロウリア領だったな。現在はジオン統治領か？」

『『ジオン自治領』です。たしか、向こうのロウリアの民に自治を与えて、軍港と主要工場地帯の半分をジオン国营工場にしています。工場地帯の開拓はジオンなのに、その半分をロウリア民に与えるなんてかなり優しい国であることはうかがい知れます」

「いや、そうじゃない」

カイオスは机に肘をつき、頭を抱える。

「ジオンからしてロウリアや周辺国そして我が国のような国家は全て格下だろう。『優しい』なんて言葉で表現するのは阿呆のすることだ」
「すると、我々（阿呆）は侵略され、略取されるかもしれないませんか」
「いや、現時点で帝国主義的侵略政策は行っていない。そもそも、諜報員がもたらした条約内容はほぼ対等の……関税自主権については配慮したものが多い」

カイオスの机に広がっていたのは、ジオンと文明圏外国家が結ぶ技術供与条約と国家戦略顧問団と呼ばれる、国の文明レベルや地勢に合わせた支援を行い、その土地に合わせた技術支援を行う写真やそれらの活動が詳細に記されたレポート。パーパルディア皇国やその他列強の価値観からすれば考えられない、全く持つて不可解な行動である。

更に関税自主権などは文明圏外国家のレベルや産業に合わせて変化する。そもそも、経済システムが整っていない、其れこそ物々交換レベルの未開地域では、工業化された低価格加工品により産業が破壊されることもある。それがキツカケで文明国によって侵略・併合されることもあるから、寧ろ一番双方譲りにくいポイントだろう。

それを見たマシユルペは置かれた資料をみて眉を顰める。

「確かに……第三外務局だと、関税自主権辺りで揉めてました。それこそ、戦争を行っていた事もありませんから」

パーパルディア皇国は第三外務局を先兵として、文明圏外国家の搾取を行っていた。その軍事力を背景に強硬姿勢を貫き、更に文明や政治体制、経済政策の違いからうまく金品を奪う算段を整えていた。カイオスのような武官上がりの行政長官であっても、ジオンの行う外交姿勢が大国と言う立場からして生温く、内部から批判を浴びるようになるだろう。

マシユルペにはジオンがどうしても、魔導放送や機械文明の電波通信技術によって宣伝するような、技術を持ち得ているのか理解できない。理解しがたいものをオカルトとして無い物として扱う。それはジオンやスペースノイド、地球連邦の人々が考える「魔法」「魔術」の類として理解しがたいと言っておびえるように、マシユルペには彼の

技術を信じ切れず、迷信やありもしない作り話、ジオン政府によるプロパガンダ（情報操作）と断じる方が理解しやすい。

マシユルペがそうであるように、パーパルディア皇国の国民の殆どが。これまで列強として誉れとしていた人々は、ジオンの実力を過小評価していた。

「私にはどうしても信じられません。ジオン公国が本当にそうした実力を秘めているのでしょうか？」

彼の言葉はまるで皇国の国民を代表しているかのようで、まるで三大列強の人々の疑問からその言葉を発したのか。マシユルペには目の前にある外務省の情報を疑い、判断する立場にいるだけに、ジオンの実力を疑問視していた。

カイオスも彼の疑問には一理あると感じていた。ルディアスの指揮下にある臣民統治機構はソ連の内務人民委員部のような粛清を行わないが、秘密警察ゲシュタポのような狡猾さは兼ね備えており、厳しい情報統制によってジオンの実力は公表されず、ジオン側の放送はプロパガンダであると通達が出されており、比較的情報統制の緩いムーや神聖ミリシアル帝国は今後の動向に注目していた。

カイオスは彼の疑問を聞き、一つの機密ファイルを広げる。其処には大陸軍の戦闘記録や砲兵隊のMS対策マニュアル、先のアルタラス攻撃作戦の報告が詳細に記されていた書類だった。

「これは大陸軍の戦闘詳報ですか？閣下……?!」

「なに、まだわしにも大陸軍のコネを持ち合わせておるよ」

大陸軍内の皇族軍人や支持派が居れば、情報漏洩罪で捕縛され、更迭されてもおかしくない。先の御前会議で提出された報告書は皇帝にお伝えする部分を強調した簡略化したものである。御前会議を要請した行政長官が書類の委細を判断しているため、あの会議に提出されたのは不都合な真実が記されず、抽象的な被害と数字の羅列のみ。それ故に、戦ってきた大陸軍の戦闘詳報を手にしたマシユルペの衝撃は強く、目を見開いていた。だが、彼の驚きはこれからだった。置かれた機密ファイルには詳細な記録が記され、ジオン側の戦闘能力は大

陸軍を凌ぐ。

みるみる彼の表情は強張り、顔色は青ざめていく。最後にMSの脅威報告書を記した書類を見て、真っ白に近い肌色になったマシウルペはカイオスの顔を見て、パーパルディア皇国の直面する問題を理解した。

「……いや、しかし……陛下がこれを理解しても……」

「いや、理解せずに終わるだろう。誰かがこれを握りつぶす」

パーパルディア皇国の政治体制は皇帝を元首とした欽定憲法による統治体制を築いている。三大文明圏では神聖ミリシアル帝国とムーの次、3番目の巨大帝国であるが、皇族を主とする臣民統治機構による恐怖政治が跋扈する体制となっている。

彼らの監視対象は一般市民にまで広がっており、スパイ撲滅を名目に皇帝反対勢力の摘発を行っていた。ジオンの情報を真実として皇帝に見せても、其れがサボタージュ（破壊工作）として捉えられ、欺瞞情報を持ち込んだスパイ容疑でも掛けられる可能性もある。また私利私欲のために情報の公開を渋っている可能性もある事からマシウルペとカイオスは頭を抱えていた。

「仮に第一外務局長のエルトが自分の持つ資料に疑問を持っていないければ、皇帝陛下の見る資料は改竄されているだろうな」

「軍需複合魔術連合や各政界の有力権力者、そして皇族の仕業ですか？」

「パールネウス共和国時代からも議会政治があるが、汚職と既存権益にどっぶり。先代の皇族の方々が肅清をしても人の性というものは止められはせんよ……」

パールネウス共和国が衰退した原因。それは貴族による既存権益や汚職にどっぶりつかり、共和国自体が硬直化。行政や軍が動かなくなり、そこから侵略を受けて多くの国々に資産が流出した。大部分は戻ってきているが、未だ流出した国宝がどこかにあると噂される。これらの汚職や権益にしがみついた貴族や役人を肅清して、パーパルディア皇国として建国させたのは先代の皇族の方々だった。しかし、今では皇帝の若年化に伴い、再び汚職と権益の守護を行う貴族と役人が生

まれ始めた。それに加えて皇族までもがそれに加担している事を考えると、肅清してからはこうした汚職、既存権益の確保に向かう輩が先鋭化、地下に潜ってしまい、その存在は公にされてこなかった。

闇の内 シャドー・キャピタル 閣、陰のホワイトハウスなど嘗ての地球で語られていた陰謀説。大国を支配する軍需産業と大統領を裏で操る組織の存在。らりるれる的なものでないが、皇国内で渦巻く権謀術数の政治劇は軍需魔術連合や各業界の大物によって操られているとみて良い。

「国家の二極化、若しくは意思決定の二分化は非常に不味い。片方が利益追求を行い、片方は国家を守ろうと指揮を下す。王棋で王の役が二人も居れば、どうなるかわかるだろう？」

パーパルディア皇国でチェスや将棋の意味合いを持つゲーム盤の王棋。その打ち手が二人いれば、打つ駒の意思が二分され、滅茶苦茶な動きをすることは予想出来る。片方は国のために指導するが、もう片方は自分達の財布の財を増やすために、国民を犠牲にして兵器を買わせる。肥大化した軍需産業やその他の業界の人間は様々な手を駆使して、より大きな戦争を行わせようとするだろう。

ジオンが何であれ、それが自分達の兵器を壊し、国が補填するため兵器を買う。その流れが出来ていけば、相手が誰であろうと知った事ではない。

「大陸軍は陛下の意思以外にも何らかの形で介入されている事を知っているのでしょうか？」

「知っていても、自分達の財布が重くなることに比べたら、手駒の一つや二つ減ったとしても、屁とも思わん。それよりも、陛下のお気に入り気がかりだ」

「レミール一局補佐のことですか」

彼女の美貌や先見の明は良く知られている。ルディアス帝のお気に入りだとされ、美男美女の二人である事は周知の事実。レミール自身皇族の一人であるが、近親者との婚姻は政治的にも普通であるため、わざわざリスクを冒してまで他国の血を入れる必要はない。

「彼女がどのような判断でフェンを強襲する算段をしたのか。誰の意図で何のためにやったのかは分からない」

「あれがルディアス帝に対してのものだけであるならば……彼女の質だとジオンとの関係を悪くしますね。それが何であれ、ジオン公国は我が国にとって、いやこの世界の脅威になりかねません」

「かの国が古の魔法帝国との噂もあるぞ」

カイオスの台詞にマシユルペは固まるが、直ぐに表情を変えた。

「いやいや、それは……」

「以前、大陸軍時代に知り合った神聖ミリシアル帝国の外交官に知り合いがいてな、その手紙だ。読んでみてくれ」

それは丁寧最先端の魔導呪文によって宛先の本人以外が読むと、盗み読んだ人物の周囲10mが爆散するという、かなり危険な物であったが、宛先の本人によって無力化されたそれは丁寧な書式と外交文書のような細工がなされた高級品の手紙だった。マシユルペはどんな知り合いだよとツツコみを入れたのだが、文面を読んでいくうちにやや恋文に近いことが明らかになってきた。

—あれ、このひと妻帯者じゃなかったっけ？

二十過ぎの若い監査軍士官の女と30年差の結婚し、子供二人いたよね。というか離婚前にも成人男子二人の息子いたはず。恋文……うん？

マシユルペはカイオスの私生活に踏み込んでしまったが、二ページ目に入ると更に目を白黒させる。そこには神聖ミリシアル帝国の魔導研究員の記すレポートの写しが入っており、ジオンの分析評価が記されていた。そこにあった技術・文化面に関する分析、そこには『古の魔法帝国に似た文化形式と技術面がある』と記載があった。

「どういうことです。もしかして、本当に古の魔法帝国ですか？」

「いや、言語や人種の可能性からしてまずないとある。それはないだろうし、彼らは我々のような人種だ。」

この世界にいる様々な種族。人以外にも亜人と区別するエルフやホビット、オークなど無数にある。獣人族もあることからその種類は様々だ。だが、人種とは特性のない種族であり、その繁殖能力の高さ故に数を倍増させた。ほぼすべての国家で共通する人種の国家。一部エルフ族やホビット、ドワーフと言った種が国家運営に携わるが、

列強の多くは数で物を言い、民族を併合。文化を奪い、長所となる物は全て収奪した。現在、皇国内にいる少数民族は全て皇国に併合された時、皇国側に付いた者達。エルフに至ってはパールネウス共和国時代に皇族側についたエルフ王家である。そうしたことから人族の皇帝を頂点とするパーパルディア皇国が誕生した。

「古の魔法帝国は有翼人……彼らは進化の途上で翼を自らの手で無くしたが、語り継がれる容姿とは異なる。」

「……そういえば閣下、古の魔法帝国についての昔話を覚えておいでですか？」

「儂はそこまで衰えたつもりはないぞ」

「いえいえ、そういう訳ではなく」

カイオスは顎髭を摩りながら、嘗て子供の頃の思い出や子育ての頃に乳母の真似事で昔話を息子に話したこともあって、ぽつぽつと題名を話す。

「そうだな『クワイネ戦記』『竜戦争』……あとは『月の光』だったか」
最初の一つは第三文明圏でも遠い大陸、ロデニウス大陸での話であるが、魔王率いる軍隊が攻め入った時に太陽神の使いが古の魔法帝国が裏で操る魔王を撃退。彼らの亡骸がクワイネに眠るという内容。そして、次の竜戦争は嘗てのインフィドラグーン。現エモール王国と古の魔法帝国の全面戦争。そして最後が月に残された古の魔法帝国残党の創作小説。パーパルディア皇国以外にも多くの文化圏で月の話がある事から、何らかの影響で物語が分散した可能性があるとして知られる最古の創作物語だった。

マシユルペは持つてきていた革製の書類鞆から、皇国魔導研究所の天文研究会が発行する書類を取り出した。

「ジオンが星間国家であることはお伝えしましたよね」

「ああ、奴らの放送でも、天文観測でもあり得ない天体軌道を描くものがあつたと聞いたが、それがどうした？」

「月で何らかの爆発と幾つかの閃光を観測したと報告がありました。彼らの話ではジオンが先の連邦軍と戦闘を行ったとのこと……しかし、地形が変わる程の攻撃と、月から離脱した物体が西方のブラン

く設計された組み立て式宿舍が立ち並ぶ。仮設拠点の数十キロ先には、宇宙攻撃軍の基地が建設され、『ガガーリン基地』という名前が付けられ、モビルワーカーや工兵隊が建設を行っていた。ムーンIIの重力は0.8Gとコロニーの重力と比べると、やや軽い。月生まれ（ルナリアン）からすれば重い、重い分運動による筋肉量の維持をしなくても済む。

また、艦隊には鉱物資源調査のための地質学者、生物学の権威を載せており、何らかの形で未知の生物に関わった場合、病原菌や未知のウイルスに晒され、人類滅亡の危機が起こり得るかもしれない。接触した兵士や何らかの形で彼らの施設の空気を吸った兵員は72時間の待機と全身のスキャンが行われる。その対象は上陸尖兵として投入された特殊部隊、「サイクロプス隊」も含まれ、空気を吸ったバーニーやシュタイナー、そして人型機動兵器によって負傷したアンディー少尉などで、その他未知の生命体に遭遇し、空気接触した人員は隔離され、非常に徹底した防疫体制が築かれていた。某日系科学者は未知の病原体に関して異常なまでの警戒心を持っており、それは熟練の兵士までも辟易させた。

その人物曰く「褐色のエンジニアのイケメンには要注意」とか意味が分からない。

しかし、ミーシャと愛称で呼ばれるミハイル・カミンスキー中尉は宇宙空間や特殊な環境下での戦闘など慣れた物。頻繁に飲む割には酒に溺れることもなく、シュタイナー以外の士官に見られないようなアルコールを煽る事に使っていた。この光景ならば煽るのも仕方がない。ミーシャの親指で指さすそれを見たシュタイナーは溜息をついた。

其処は所謂、尋問部屋。

作られたばかりの真新しい白い尋問部屋だったが、尋問官と捕虜の様子は全くもって緊張感がない。

「だーかーらー！ 何度も言わせんなー！ あれはザクIIっていう、モビルスーツM Sと
いう兵器だ」

「いいえ！ あれは貴方達が我が皇国のテクノロジーを盗んだコピー品

でしょ！第一、カツコ悪……失礼、あまりにも不格好で醜い一つ目巨人なんて」

「あの無骨なカツコいいデザインが分からないとは！」

「なんで言葉通じてるんでしょ？」

「……はあ……」

「……やっぱり、人選を間違えたか……」

シユタイナーは数十分前に決定を下した自分を恨みたくなった。それはバーニイが拘束した女兵士についての尋問を誰に任せるかであった。ミーシャは酒を飲み過ぎていたため、匂いで尋問官がアルコールを摂取している事がバレてしまう。部隊の特殊任務上、多少の便宜や融通が利くが、公的記録映像に隊員がウオツカを飲んでいたりを捕虜に告発されれば問題になるだろう。バーニイに任せてしまえば、それなりの経験になるだろうと思っただが、痴話喧嘩に見えるそれには後悔しか感じない。

ミーシャの疑問に反してシユタイナーは自分の決断を呪いたかったが、仕方がない。尋問部屋の窓を叩き、自身が怒っている事を伝えようと、吠えていた犬が怒る飼い主を見てしぼんでいくように、バーニイはおびえた様子で尋問を続ける。頬にシユタイナーの鉄拳を受けたためだろうか。頬の傷を覆っている絆創膏が目立つ彼は頭を掻きむしる。

攻撃時に待っているように言ったにも関わらず、突出してしまった。あれだけ彼らの空気を吸うなど警告していたにも関わらず、ヘルメットを脱いだことなどがシユタイナーの逆鱗に触れた。

怒りの鉄拳を受けた後、捕虜を憲兵隊に引き渡さなければならなかったが、細菌やウイルス汚染を懸念した憲兵はサイクロプス隊に尋問を任せることにした。

「はあ……確認するぞ。あんたはアニユンリール皇国月面派遣部隊、『ルナディアン』月面駐屯地所属の空間騎兵団所属のパイロット……いや搭乗兵だな」

「……いえ、私は違うわ」

「いや、あんたの所属は空間騎兵団所属の騎士だ。その搭乗服は空間騎兵の所属を表す、月面鳥つていう神話に出てくる鳥をモチーフとしているんだろ。それに月面市民ではなく、ブランシエル大陸民……それもエリートだ」

「なんでそれを?!」

「既に口を割った貴族がいたんだ。ペラペラと喋ってくれたよ。そろそろ名前が聞きたいんだけど」

「……アレツタ・ザグルル」

「バーニイ、一点先制ですな」

「いや、まだだな」

やっとバーニイが尋問相手の名前を聞きだした。だが、まだまだ尋問としては最初の段階。この後は任務内容や彼らが使用する二足歩行兵器の戦術運用を把握する必要がある。ジオンはMSが戦場の主役と考え、戦略運用や戦術に組み込んでいるものの、未だ黎明期。言わば、戦場の主役が主力戦車や航空母艦へと変わり、レーザー誘導の火器管制、戦闘指揮所によるシステムティックな戦闘統制技術が磨かれるWWⅡと同様に、まだまだ発展途上の段階にある。

既にアニュンリール皇国はMS相当の人型機動兵器の配備を完了している。今回の戦いでは、全くの損害もなく倒すことが出来たが、戦いの最中に多くの皇国艦艇が月面を脱出し、戦闘データが彼らの本国へ伝わった可能性もある。技術の根幹が魔術と言う全く未知の科学技術で為すために、未だに解明されていない謎もある事から、早急に対応策を練らねばならない。今後は国家間の対立を生まないように外交による解決が為されるだろうが、国家間での決着がつく前に、最悪の事態「全面戦争」を想定して、捕虜となった人物に聴取しなければならなかった。

「ザクルル、君の軍の階級は?」

「軍の階級は海軍少尉、一応貴中二位の貴族章がある。」

「き……貴族章?」

「お前はさつき他の捕虜と話したと言ったじやないか。我が皇国軍では軍の階級の他に貴族だと貴族章の装着が義務付けられてる。あなたは兵卒？」

「俺の事はいい……ザクルル少尉、君の任務は何？」

「私の任務は月面航空部隊の後援部隊として配備している、ケライノンDeを運用して、航空部隊でも落とすきれなかった隕石の破壊。若しくは阻止限界を超えた敵性勢力の制圧。」

「つまりはスクランブル発進要員の搭乗員というわけか……」

領空侵犯時に置ける航空隊の緊急発進と、続いて動き出す基地の防空火器。彼女の任務は航空隊が阻止できなかった敵の阻止任務だった。今回は敵の展開が早すぎたためにこんなことになったが、本来ならば圧倒的軍事力を持つアニユンリール皇国は他を退け、惑星全体を制圧することも出来よう。だが、本土である古の魔法帝国の転移はアニユンリールを孤立させ、ある一定の技術力を大幅に衰退させた。

それは空間転移能力を研究する機関や研究所、その他の者達は本国と共に消え去り、後に残った飛び地のアニユンリールは限られた技術力を持つて勢力を伸ばしていたようだ。だが彼らにも事情があった。古の魔法帝国の遺された政府要人や軍人はこの困難をどうするか考えた。兵力や武器は周辺の野蛮な国家よりも格段に進んでいる。敵を石器時代に戻しながら制圧したとしても、歴史が物語るように反乱や抵抗運動が活発化する。アニユンリールに残された当時の帝国民は限られた人材を浪費することなく、裏で政治操作や暗躍をするようになった。

だがジオンが真に知りたい情報はそれではない。自分たちが知り得ない別世界へ行く方法である。

「君達にはああした宇宙空間における兵器を保有してるが……ええつと……なんだこれ……空間飛翔……じゃない……」

「空間飛翔？ああ、テレザ・スペル（テレポーターション）の事？」

「なんでマザー・テレサが出てくるの？」

「うーん、新米にはまだ早いのでは？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

その後、バーニイの台詞はその尋問映像を見る高官たちの目にも留まる。「だれがこれをやらせた!」「惜しい、もう一押し」など評論家紛いの感想を話し出す。機密映像ではあるものの、その映像は突撃機動軍だけでなく、宇宙攻撃軍や親衛隊機関へ流れていた。他にも別の貴族将校らしき人物に尋問している映像や情報分析官らしき者が含まれる。サイクロプス隊の他にも様々な特殊部隊やMS部隊が投入し、空気感染を恐れて隔離していた。

既にクワ・トイネやロウリア王国に存在していたと思われる病原体、チフスやコレラ・エボラ出血熱に類似したものがジオン本国の検査チームによつて水際で食い止められていた。だが、研究機関曰く兵士の持ち込む戦利品がブラックマーケットに流れていると推測。そこから漏れ出た疫病が蔓延し、貧困層の間で広まることを考え、ジオン軍疾病対策部隊が蔓延する菌に対して治療法を研究していた。

だが、考えるのは、総帥府やジオン本国の疾病対策センターと言つた研究対策機関の役目。

尋問映像を流していた宇宙要塞ソロモンの中枢にある重要区画ブロック、A1区画と呼ばれる指揮官クラスの集まる区域の会議室に宇宙攻撃軍の要職が勢揃いしていた。

会議室の中心にいる人物、宇宙攻撃軍司令官、ドズル・ザビ中將は視線を会議室にいる腹心の部下に向けた。

「さて、諸君の意見をきこう」

一部の戦闘では宇宙攻撃軍も参加しており、それなりの情報が集まっていたが、ドズルの欲しい情報は無かった。これまでは宇宙攻撃軍は宇宙という、ジオン優勢の立場から、いかに連邦軍やティターンズと呼ばれる選抜された特殊部隊に対処するかと、議論がされていた。一方、ムーンIIのような惑星の延長線上に位置するような、敵の

勢力に関して言えば、宇宙攻撃軍の専門外。いかに連邦を叩きのめすか考える彼らの立場からすると、「なんか面倒な勢力が現れたな」という感想を抱く。

だが、MSに酷似する兵器があると聞けば、黙ってはいられない。ドズルの台詞に反応した情報将校の一人が立ち上がり、説明を始めた。

「地上に降下した連絡将校によると、分析ではあの兵器の性能から、惑星内の文明技術では難しく、惑星内でも覇権国家である神聖ミリシアル帝国の技術力を凌駕。彼の国ではまだ難しく、一方名の上がつているアンニユンリール皇国の国際的地位は低く、突撃機動軍の担当部署からは要分析待ちとのことです」

「技術部からの報告ではMSに酷似していますが、シユミレーションによると旧ザクでも十分に対処が可能であり、数値的に言えば、連邦軍の旧タイプのMSよりも統合戦闘能力は低いと見積もられています」

「やはりな」

「あの惑星の文明はそこまでか」

「警戒するほどのものではありませんまい」

会議に出席する将校の台詞はやはり侮るものばかり。これに関してはドズルも思うところがあり、突撃機動軍が出した報告書を読めば、惑星の文明レベルがジオンを下回ることがよくわかる。ドズル自身、敵ながら天晴れと言えるような強敵の方がましだったと思っている。

このところ、連邦との戦いも落ち着き、参謀本部では既にルナII攻略のための作戦立案が為されている。連戦連勝を重ねるジオン軍は敵を過小評価し、自軍に関して過大評価している傾向にある。「MS万能論」まで出ているほど、その慢心ぶりは日増しに高まっていた。

これなら今ムーンIIで被害が大きい方が、自軍の気を引き締め、過去に惨敗した軍隊の過ちである「慢心」を修正する事が出来よう。だが、事が上手く行きすぎ、歯止めがきいていない。

ドズルは子供なら逃げだしそうな険しい顔をしつつも、その場にい
ないがテレビ会議のように小さい画面に映し出された人物は慢心す
る将校たちに対して声を上げていた。

「いえ、待っていただけだ。確かに彼らの文明は我々よりも下回る。
だが、この基地は我々の技術力を凌駕している部分も確かにありま
す」

そう答えたのは、今回ムーンIIに上陸し、前線基地構築し、一段階
着いた人物。

突撃機動軍所属、フォン・ヘルシング准将。

ムーンII派遣艦隊司令官として采配を振るい、人類外の生命体とコ
ンタクトを取る時に必要な政治判断が取れる人物。既にムーンIIを
占領した功績から少将の席が用意されていると噂されていた。

「彼らの歩兵ライフルは我が軍では使用していない光線兵器を使用し
ており、これらの技術体系は我が方とは一線を画します。加えてMS
に似た兵器や戦車・航空機に至るまで、我々のテクノロジーに酷似し
ていても、内部システムは異なるのです」

「准将、よくわからないがわが方と敵方のテクノロジーの差は如何程
のものなのか聞きたい」

会議室の椅子に腰かけていたコンスコン少将はひげを摩りながら、
彼の台詞に疑問符を浮かべるように彼の移る画面を注視する。

「私も惑星に降りていないのですべて理解したとは言えません。です
が、私の理解できる範囲でお答えしましょう」

ヘルシング准将は画面越しながらも非常に苦悶の表情を浮かべて
いた。それは過労のせいではない。むしろ、どのようにして話すのか
悩んでいるかのようにだった。

「我々は火を使うとき、マッチやライター、時には火打ち石を使いま
す。若しくは電氣的なものもあり得るでしょう。一方で大量の電気
を使用した場合は神々の炎原子力を用いる。テクノロジーの進歩、我々の
テクノロジーは概念的な意味合いで理解できるでしょう」

ホモ・サピエンスが火を用い、文明を作り、様々なものに代用。そ

して、原子力のような神々の火と揶揄されるテクノロジーにまで発展してきた人類。だが、ヘルシング准将の言いたいのは別の文明。つまり惑星の文明についてである。

「彼らの文明は違います。自分たちの魔力を用いてエネルギー供給を行い、火を使います。エネルギー物質を直接供給元にした機械や我々が想像しえないものを作り出すことができます。それこそ、紙に魔方陣を書き、何も無い所から魔物を召喚するようにです。」

「それで、魔物は見たのかね？」

「いいえ、ですが彼らの話では紙に書いた魔方陣で人工の太陽を生成できると言っていました」

太陽。

それは人類においては非常に有用なエネルギー供給元である。ヘリウムによる核反応や核融合実験炉といった人類が太陽を真似る上で、様々な施設を運用しなければ作ることは不可能である。だが、彼らはそれを紙に魔方陣を描き、類似するものを作り上げることが可能と言っていた。

「ヘルシング准将、さすがに太陽は無理でしょう。放射線遮蔽能力や核物理学の研究はあの惑星ではされていないと、既に報告が上がっている。それに偵察衛星からも同様に核の熱は確認できなかった。彼らの欺瞞情報ではないのかね？」

「ファルケン大佐の言う通り。だが、准将の話が本当であれば、歩兵携帯核兵器なんてものが簡単にできることを意味する。……しかし、私の目の前にある惑星は荒廃していないように見えるが……」

ヘルシング准将は報告書に在った懸念事項の一つ「魔方陣による核分裂反応の有無」について書かれたものが、敵方につかまされた欺瞞情報だということは、指摘されていなくともわかっていた。

「確かに、大佐の言う通りです。現時点でその可能性は否定してよろしいかと……ただ……」

ヘルシング准将の映像が切り替わり、画面に映し出されたのは巨大な円筒の水槽に浮かぶ人影だった。

「これは……まさか……」

「……複製!？」

宇宙世紀0079において、複製人間は違法である。宇宙に進出した人類であっても、こうした人の複製は違法であり、国民感情や宗教的価値観、倫理観念に反するからだ。

技術的に言えば、複製やDNA配列を組み替えた強化人間は製造可能である。それこそ有精卵を移し替えて代理出産を行うことも、複製した人工子宮やそれらの環境に合わせた羊水を用意することで生命を誕生させることも難しくはない。

だが、地球連邦が誕生してから70年余りが過ぎても地球圏ではタブーとされ、忌避されてきた行為。だが、その価値観を持つスペースノイドの中にも、こうしたタブーを無視して複製しようとする者たちが存在した。非難を口にしてはいる宇宙攻撃軍の将官たちは知る由もない。身内が圧倒的な連邦を打ち倒すべく、非人道的な行いを政府中枢が命令しているなど知るはずもない。

ただ一人知っているのはドズルであるが、既に凍結に近い扱いを受けているのは知っていた。嘘をつくのが苦手なことを理解するドズルはその水槽に浮かぶ人影を注視する。それは人の他にも、エルフやドワーフ、ホビット、獣人が浮かんでいる。その光景は正に悪魔の所業であったが、彼らを管理する研究者と同じ有翼人。エルフの耳を持ち、羽をもつ人種がないことは理解できた。

「我々の技術でも生体工学、複製技術は可能です。ですが、彼らは既に行っている。やるとやらないでは明らかに差がある!閣下、今のところ突撃機動軍は惑星の重力戦線で手が離せません。キシリア閣下はドズル中将閣下にムーロンIIの全権を譲る方向で動いておいでです」

「……そうか……だが裏があるのだろうか?」

ザビ家において謀略をめぐらす者がいるとすれば、長男ギレンと長女キシリアの両名だ。家族間での駆け引きはなく、家族間は非常に良好だ。だが、国政にかかわるものとなると少々異なる。様々な派閥争いによってザビ家内であろうとも、不利益を被る策を取らねばならな

いことも多少ある。

今回のムーンIIの一件をドズルに譲るということは裏があることは間違いなかった。

「ええ、今回の転移において重要参考人である『ウォルター・ビショツプ博士』の行方を調査。願わくば、博士を生きたまま連行してほしいという要請です。」

地球連邦の歴史は長く、それこそアメリカ合衆国やソヴィエト連邦。果てはロマノフ王朝ロシア帝国まで遡る。シベリア・ツングースカの謎の大爆発や地球の各地に点在していたこの惑星の異物。

それを調査し、連邦軍主導の元調査していた博士は今回の転移事件の有力な手掛かりであり、容疑者にも匹敵する。アルタラス王国攻撃の際に地球連邦軍特殊部隊「テイターズ」の強襲によって奪われたが、転移技術の他にも、様々なテクノロジー開発に関わった研究者の一人である。転移技術による兵器や今までに見たこともない新技術の兵器使用が行われる恐れもある。

「果たして……彼の身柄を取り戻すことが我々にとって良いのか、疑問ですな」

コンスコン少将は手元のファイルを一瞥し、私物である新聞に手を置く。ジオニックポストや公国親衛隊機関紙「ダス・シユヴァルツェ・ゼイオン」もある。それらの社説の題は「ここに居るべきか帰るべきか」「住めば都」「新世界へ」等など。その内容は元の地球圏に戻ることを考えず、この星系に留まることを考え、帝国主義にも等しい覇権国家を形成すべきという論調が芽生えつつあった。

一方、左派系新聞やマスコミは帝国主義の発露と地球連邦と同じような経済的搾取、内政干渉、軍事的圧力を批判していた。また、地球への郷愁を語る社説はいたるところに存在する。

「愛憎」という、相反する言葉が正にジオンやスペースノイドに相応しい。長年搾取され続けた彼らは地球という存在を憎みながら、同時に故郷として愛している。最も憎いが同時に望郷の思いが残っている

ジオンは振り下ろす拳の先をどこに定めているか決めかねている癩癩持ちの子供にも等しい。

その愛国心を持つ愚人はマスコミに翻弄され、大衆意識が形成される。最早、ジオンが求めていた独立戦争は過ぎ去り、携えた軍事力を背景に覇権国家としての道のりを歩むのだろう。ドズルは小国から一気に大国に邁進してしまった事に戸惑いを覚えるが、自分の表情に表さないよう、慎重に会議を進めようと席を立つ。

「いいか、転移技術は我々の持たないテクノロジの一種だ。もし、連邦が手にすれば、一瞬でズムシテイの裏側に艦隊を配置させることが可能だ。そのことを忘れるな。」

近くの秘書へ合図し、映されたのはムーンIIの衛星写真を元にマツピングした地図だった。

「現在、突撃機動軍はガガーリン基地を建設中だ。彼らはサイドIIの守備艦隊と合流する戦隊、その他の部隊はロウリア駐屯軍部隊へ合流するため、基地にてザンジバル級巡洋艦を受領後惑星に降下。我々は数個艦隊と調査チーム、及び難民保護NGO団体とともに捕虜収容と難民のサポート。……実質的な月面都市の建設に着手する」

ドズルは背後のスクリーンに映された軌道上の地図に表示される突撃機動軍の部隊が二手に分かれる図を説明し、補佐官が派遣される艦名リストと兵員、民間事業団体、そしてコロニー公社を挙げていく。本来ならば、連邦に近いコロニー公社の人間を派遣するのは憚られるが、コロニーの建設と維持を長年していた彼らのノウハウは防諜上のリスクを上回る程、その存在は大きい。

そして難民保護のNGO団体。それは地球連邦以前の「国際連合」であったころから存在する、非政府の民間援助団体を指す。ガガーリン基地近くのアムニョンリアル皇国の民間施設や民間人居住区も多数存在する。惑星よりもコロニーよりな、しかもアクセスのしやすい場所に異星人がいるとなれば、NGO団体は軍の制止を振り切っても行くだろう。

それに、難民保護のノウハウは民間組織に委ねる方が、世論的にも都合がよかった。

屋前の広い草場で行われていた。双方抜身の刃を構え、僅かな筋肉の動きを見て判断する。それはまるで日本の巨匠とまで言われた名監督が収めた映画にも似ているが全く異なる。

人を殺めるための剣術。

人を魅了するための美しい剣捌きや撮影のために寸前で止めるようなものではない。フェンは国民が剣を持つ、まるでスパルタの文化を持ち、武士道のような無常観を併せ持つ。その場にいたのは、先の軍祭事変で活躍できず、政治紛争によって改易した豪族に使える戦士だったのだろう。

何故、殺し合いに発展したのか分らない。だが、これだけは言えた。

二人とも相手を殺す気であった。

お互いの挙動を見、そして見定めながらじりじりと動き、隙のある場所。相手の不得手とする場所へと誘導する。お互いに見つめあい、射貫くその間は一瞬か、それとも数分なのか。時間の感覚を失いそうになったその時、双方の剣が舞うようにして襲い掛かる。

昔のビデオカメラやフィルムでは見ることでききあはしないだろう。この剣捌きはスペースノイドにできる芸当ではない。名誉と魂、戦士としての命を乗せた一振りだった。剣は互いに交差する。互いに隙が無いことを確認し、後退り、そしてさらに攻める。片方は剣を掲げ、もう片方は剣を下に構える。

そして、その一瞬が双方の業の差が分かる瞬間だった。

下に構えていた戦士は振り下ろされた剣を自身の剣で受け止めようとした動作をし、現に剣を受け止めていた。だが、その剣は受け止めた彼の剣とは違う、いや全く異なる武器であった。

それが彼の剣を両断し、正中線を一気に斬る。それは人の業とは思えぬ剣捌き。

「あれは日本の……刀?!」

撮影者の口からでた言葉はある意味的を得ていた。ジオンの輸入品として贈られた逸品の中には、日系コロニーの鍛冶屋も存在し、宇

宙にあるアステロイドベルトにある鉱物で刀を作りたいという方が打ったアストロ産の刀だった。

その刀をベースに作り上げたのは、フェン刀。アステロイド製刀の刀身はそのままに、鍔の部分がなめした革で包まれているところを見るに、日本刀とは違うが、それでもテクノロジーは宇宙世紀の鉄鋼技術が含まれ、より高純度の鋼を何千回も打った名刀。模倣された刀擬きも多数あったが、カメラのデータには『MADE IN ZEON ASOU』という名前が刻まれているのがはつきりとえられていた。

斬られた男は血飛沫を飛ばして倒れていく。一方、勝利した戦士は喜んだ様子も見せず。刀を振って血を飛ばし、持っていたフェン紙と呼ばれる和紙に近い紙で拭き、一步下がって鞘に納めた。そして、ゆっくりと頭を下げてお辞儀をする。

死者への礼を忘れず、また死んだ戦士を尊ぶ精神。正に侍スピリットとコロニーの住民は狂喜乱舞していた。

「Earthnism」

ジオニズムやシオニズム・エレニズムといったものとは全く異なる。政治的な信念ではなく、地球崇拜者や地球優越主義とは違い、文化的側面を中心として、故郷の念を忘れないスペースノイドによる地球文化への懐古感情として名前が付けられた。何せ、地球産の嗜好品は失われ、輸入業界は大打撃。軍需産業の伸びは目まぐるしいが、地球に依存していた高級嗜好品などの業界は軒並み閉店状態。ブラックマーケットでは金以上の値打ちになっており、マ・クベの副官がブラックマーケットにうろついているとかいえないとか、正にひそかな地球ブームがあった矢先のフェンの決闘映像。人々は「Oh! ジャパニーズ!」と騒ぎ、「クロサワー!」と叫ぶ者も少なくない。

残酷な映像であるものの、優れた剣術使いの死闘はやはり目を見張るものであり、配信が停止されても何度もアップロードされ、ジオン当局やコロニー政府がいくら規制を掛けたところで止まるところは知らない。宣伝省の圧力で「フェンの文化を知らないと、無礼者と言

わかれて斬られるぞ！」と警告したが、既に非公式でフェン王国観光パンフレットが配られ、その内容はジオン軍派遣部隊に配られたフェン文化の詳細な報告書がそのまま掲載された。

マスコミまでもフェンへの渡航制限をやめよと叫んでいたところで、とうとうセツルメントは折れた。観光経済資源の重要性を理解していたセツルメントは直ちにロウリア宇宙港を拡張。ロウリアへの船旅や水面効果機といった前時代の航空機を使用した航路で到着した旅行者は我先にとフェンへと向かう。

そして、多くの文化やジオニズム系列の企業が参入するかと思っただがやはり状況は異なった。工場は基本的に国営であり、商人に関しては厳しい関税と王国管理官の立ち合いの元、商品を陳列する必要があった。例えば、腕時計やボールペンは売れたが、コロニーのブティック社の服はあまり売れることはなく、そのコロニーで生産される蚕から出される絹も王国市場に混乱をもたらすものとして没収されていく。

九月に作成され、十月に施工された府慈相互国土防衛条約は相互とは名ばかりの、ジオンによるフェンの保護国化に等しい条約。国土防衛にジオンが血を流す代わりに、軍の指揮系統をジオンに譲り渡せという一連の条約はフェン王国内部に軋轢を生じさせ、「攘夷派」が生まれたこともまた事実だった。

しかし、フェン元国王シハンは退位を挙行。『三十条の御誓文』を元に一大近代化を実施。大国、パーパルディア皇国に抵抗していたが、結局のところジオンという大国に吸収された形となる。

こうした剣王シハンの腹切りに対してジオン国内は同情的だった。徹底した情報統制の元、ジオンは『フェン王国は皇国によって攻撃を受けた被害者。そしてその被害を受け止め、近代化のため自ら王位を退位する』と報道され、セツルメント国家連合の構成コロニーも同様の感情を持った。

しかし、事実は異なる。剣王はジオンが皇国より優れたテクノロジーを有していることを事前に知っており、互いにぶつかり合うよう

に仕向けた戦犯である。例えるならば、第一次大戦の発端、「サラエボ事件」。オーストリア＝ハンガリー帝国大公を暗殺したガヴリロ・プリンツィプは、一千万人が戦争で死傷した第一次世界大戦を引き起こした張本人である。本人もあれ程の大戦争を望んでいたわけではない。自国の独立、支配の根絶を胸に引き金を引いた。だが、一発の銃弾がヨーロッパ中を塹壕で埋め尽くし、汚泥と死体に埋もれた総力戦へと引きずり込んだのだ。

もし、これがジオンでなければ、もしムーであったならば。もしかすればこの惑星内で『世界大戦』が勃発し、パーパルディア皇国と神聖ミリシアル帝国の同盟国とムーなどの機械化文明国による熾烈な大戦になった可能性もある。

ジオンはフェン王国を存続させ、発展させる条件として「剣王シハンの身柄を拘束。サイド3に幽閉するという人質的なものとなる。『府慈通商条約』『貿易推進協定』『進歩兵器配備条約』レンドリースによる武器の提供はフェンからすれば、喉から出るほど欲しく、国力を蓄え、独立国としての基盤を作れるよう支援する。いわば、シハンの身柄は人身御供ともいうべきだろう。

彼のお陰で、国定を守ることがどんなに重要か知らしめた剣王シハンにより、攘夷派は衰退。賢王シシヨウに国は委ねられた。これからは様々な文化や兵器が集まるものとなる。彼らからすれば、『文明開化』等しく、剣の道だけでなく、ほかの道も考えることができた。

『三十条の御誓文』の内容は三権分立する政府の樹立。「司法府」・「立法府」・「行政府」この政府の柱であり、国のシステムが記され、さらには身分制度や職業選択の自由も得られた。

これは剣を捨てても良いよいということを指し、剣術に秀でていない者にとつては都合がよく、そもそも剣の時代が早々と終りかけている今。崩壊しかけたこの国をまとめ上げる賢王シシヨウはアマノキ城の父から譲られた執務室で胡坐をかき、書状に目を通していた。

そこにあるのは、政権の代替わりと十数年単位で組まれた王国政治体制の再編。一番手っ取り早いのは、何処かの活動家に任せて革命を起こせばよい。そうすれば、数年単位の再編が可能になるかもしれない

い。しかし、そうなれば王族は城下で晒し首か幽閉。国民の多くが不幸に遭い、国力は半減するかもしれない。国家を守る以前に自分の命を犠牲にすることは若きシシヨウには無理なこと。

各藩の陳情書を読みつつも、秘書官が口頭で今日の予定を伝えていく。政治家よりも武官よりな思考の持ち主なためか、ややオーバークールな雰囲気だった。

凜々しい王子の顔はどこへ行ったのか。ジオニック社製のデスクトップ端末に映る彼の表情はやつれており、よく見ればクマが見えた。

「仮初の平和に仮初の経済成長……もう少しゆっくりでいいのに……」

秘書官が所用で退出し、数少ない一人の時間にぼやく彼は緑茶を飲みながら一息つく。アマノキやニシノミヤコ等の都市ではジオンやセツルメントからくる観光客により、多くの外貨を稼いでいた。その外貨からジオンの兵器や工場そのものを購入し、独立国としての体裁を整えていく。だが、外交手段がジオンに握られている以上、独立国ではないのではないか？

シシヨウは過去にムーへと留学し、かの国の王政から民主主義化。そして続く彼らの歴史。フェン出身の彼からすれば、信じられないことばかり。もし、自分たちが大国から支配を受けられないようにするには、彼らをモデルにすればいいと考えていた。だが、ジオンの推奨する改革計画は彼のような若い人間でも性急だとわかる。

順調に経済成長を続けているが、パーパルディアからの支配を脱する戦いが終われば、今の状況も変わるだろう。その時、今の状態がどうなるか分らない。

以前まで彼が考えたことのない、パーパルディア皇国のない世界。その世界ではジオン公国の意のままに進むのだろう。彼の父である先王シハンはジオンに対して大きな恩があり、彼らから見捨てられれば国際的に孤立する。如何に自国に何の資源がないのは理解している。

もし、ここでフェン王国がジオンやセツルメントの民に危害が及ぶ

ヴァルターの神経を逆なでする。

窓口の不愛想な若い職員がイライラしながら対応し、すぐに顔を青くしながら戻ってきて第三外務局長に面会するというのだ。とは言え、ジオン公国議会でも上席に位置する議員を待たせて未だに外務局長というのも変だと考えたが、秘書官が事前に説明していた独自の外務省庁のクラスからして、最上位に位置し、皇帝と直接謁見して助言できる立場にあることから、外務大臣や長官クラスだろうと考えていたのだ。

会議室らしき部屋に入ると一言

「ここで自己紹介をして下さい」

「ああ？？」

政治家の発した言葉とは思えないほど、不良のような声を出したとは、国の誰にも信じてはもらえないだろう。ムンゾ自治共和国から公国議会に大きいパイプを持ち、ギレンの派閥として親衛隊の一員として名誉少将の地位まで頂く人間である。そんな人間を捕まえて自己紹介しろという。

「馬鹿にするのもいい加減にしろ！」

文明国との外交。そのベースとなっているのは対等な関係であり、国家間に上下関係は存在しない。ウエストパリア体制以降から続く国際的な習わし。建前としてありつつも、相手に対しては相応の礼儀というものが必要なのだ。如何に格下の相手でさえも、ヴァルター・ヘーヴルは対等の関係を築く。相手を尊敬し合い、信頼した関係を築かねばならないのにこの有様である。

もはや、彼の我慢の限界だった。

「私の名前はヴァルター・ヘーヴル！ジオン公国親衛隊名誉少将及び派遣外交団長を務めている。公国議会議員でもあるのだ！一国の外交官をこうした対応は如何なものか？貴国は常に国家を蔑み、相手国と対等な関係すら持とうともしない。貴国の外交態度は国際的に問題があるぞ！」

神聖ミリシアル帝国やムーと異なり、第三文明や第四文明圏は文明として未発達段階。パーパルディア皇国やレイフォルは帝国主義的な覇権国家として成長を遂げていた。文化圏の形成は神聖ミリシアル帝国やムーとは異なる。失われたテクノロジーを追い求めて成長したのではなく、殆どが自前での国家成長。第三・第四文明はとりわけ自尊心が高いのはそのためであり、ミリシアルやムーが一位・二位の列強であるにも関わらず、腰が二国と比べて低いにはリバースエンジニアリングによる成果が大きいためだ。列強のプライドがあるものの、それは先人による財産からくるものであり、自分たちの手柄ではない。そのことから彼らは謙遜するのである。

ヴァルターの沸点はかなり高かったが、意外にも第三外務局長以外の部長クラスや課長クラス、係長などのお歴々の面々はまるでごみを見るかのような目線をしてくるではないか。

「文明圏外の雑魚が東洋艦隊を倒しただけでこの振る舞い……失礼、余りにも田舎者ですので口元が」

「やはり、文明圏外は野蛮ですな。これは如何に文明圏外の諸国が野蛮で知能指数の低いか物語りますな。どうでしょう、東部諸国の野蛮な蛮族共の一つや二つを諸侯の方々に分けて統治した方がずっとコストパフォーマンスも良いのでは？」

「確かに……ジオン公国の支配権ではやはり、東部セクター長の管轄ですか？ですが、国家監査軍の艦隊をほぼ仕留めたのですから、皇帝直轄でも良いのかと」

「貴様、またカードで負けた腹いせか？それとも出世を先んじられて嫉妬か？媚びを売るならもう少しましな方法があるだろう」

立腹した国家代表を前にした蚊帳の外に置かれた状況。如何にその傲慢さが鼻につくか自分たちの感覚では測りようもない。ヴァルター他、ジオン公国使節団のメンバーは怒りを通り越して唯、哀れに思うしかない。

幾分かは反面教師の面があるが、ただただ目の前にいる者たちが哀れに見え、腐敗しきった地球連邦の官僚と同じく、排除しなければならぬ敵であると認識していた。

あまりにも無礼な態度だったために、護身用の拳銃を抜いてしまいたくなくなったヴァルターであったが、思いとどまって殺意を頭の隅に追いやり、もつとも平和的な方法を選択する。つまり、席を立って帰ろうとした。

「我が国と貴国では相容れないということでしょう。……我が国の使節団は引き揚げさせていただきます。貴国での滞在は余りに危険。ムー国に連絡窓口を設置していただきました。今後はそちらで交渉を致します。我々にご連絡の際はムー大使館に連絡を。もつとも、我々はもう本国ですが」

ヴァルターは席を立ち上がり、腐った官僚を横目に見つつ背を向ける。サイド3に帰って数か月もすれば、彼らは軌道上からの隕石攻撃か戦術核で塵と灰になって消え去る。精々、軌道上から見るのが楽しみになった彼であったがふと中央の人物、第三外務局長カイオスが声をかける。

「待つていただきたい！貴方たちがジオン公国の使節団ならば何故フエン王国に肩入れする？貴国が放送する内容を考えてみても、資源の乏しいあの国を支配下に置いても意味はありませんまい。何用でかの国を保護国化したのか？我が国の鼻先で堂々と！貴国は対等な関係とおっしゃるが、貴国はこの文明圏の国際関係を理解していない。フエンとは長い間、国境紛争を繰り返していた。あの国は堂々と海賊行為を行い、我が国の商船は苦しめられてきた。貴国のいう大義は海賊にあるのですかな？」

フエン王国とパールディア皇国の関係は昔から悪い。対岸のガハラ神国とフエン王国の結びつきが強いため、皇国の戦略的に進出できないことをいいことに海賊行為を働いていた事実がある。それも水面下での低程度紛争であったが、無関係な商船の多くを沈められ、『自分たちの思想に合わないから』と労働資源の略奪に努めていた。この皇国の労働資源は所謂『奴隷』であるが、宇宙世紀に入るまで、西暦の殆どで奴隷は合法であり、現在の奴隷制度廃止の価値観は長い目

で見れば最近である。

パーパルディア皇国にはフェン王国に敵対する明確な大義があり、そもそもジオン公国に仇なすつもりはない。カイオスはそう考え行動していた。とは言え、既にアルタラス王国でのジオン軍の損失や連邦との間で秘密協定らしきものをしていたことは分り切っている。今後敵対する関係ではあるが、フェン王国に関してはジオンが大義を持っていないとはカイオスは思っておらず、当のジオン公国もそうは思っていない。

「確かに貴国がフェン王国との間に様々な問題を共有していることは存じ上げています。しかし、国際イベントにて多くの軍関係者や各国外交官がいる場で貴国が軍事行動を行ったことは正気を疑いますな」
カイオスの横にいた西部セクター課長は肥えた腹を震わせながら豚のような叫び声とともに叫びだす。

「正気だと？列強を敵に回して唯で済むと思っているのか!?フェン王国がやったことは蛆虫のような野蛮国家を集めて寺小屋の遊戯をやった程度だ。事前にムーや関係諸外国には通達している。」

「フェン王国と懇意の間柄の友好国の出した報告書にはムー以外の諸外国には連絡しておりませんか？」

凶星を突かれたのか、真っ赤な顔は青になり、やがては黄色になるという信号機にも似た顔色をしながら、すぐに官僚としての意地を見せた。

「彼らの通信機器は二線級だ！かれらのようなコピー商品しか変えぬ貧乏人には、我々の使う魔導通信と周波数帯が違っていた。現にミリアル帝国が主催した『魔導通信会議』の周波数を使用したと書かれる報告書が挙がっている。あちらの過失だろうが！」

ヴァルターは不敵な笑みを浮かべながら、さも冷静に的確な返しをする。

「おや、おかしいですか？我が国のレンドリースや資金援助でほとんどの国が貴国と同規格かそれ以上のミリシアル帝国規格の魔導通信機を使っておられますが？こちらにも国際周波数を使用した報告が挙がっていますよね？おやおや、そういう事はどちらがおかしいのかわ

かりませんね。そうになると貴国の通信機器の方が不調を起こしている可能性もありますかね。」

「我が国が二線級に劣る通信機器を使うものか！」

「違います。すべて新式の貴国かミリシアル帝国製です。もしかすると、貴国の通信機器が不良品だったのかもしれない。しっかりとアフターサービスしなければ信用にかかわりますよ?。」

「なん…だと……」

既に軍配はヴァルターに上がっている。そもそも謀略術数に優れた政治家相手の勝負なのだ。言い負かすなら断然、彼に軍配が挙がる。相手は文明圏外の落ち目の第三外務局。これが第一や第二外務局なら変わっていたかもしれないが、彼が相手にしているのは、いつも相手にいびり散らす豚のような木端官僚なのだから。負けて当然なのだろう。

そろそろ、ヴァルターは相手の脳が出血して倒れるのではと、怒れる豚官僚に心配してしまうのだが「いいぞ、もっとやれ」「豚を殺せ」と小声でヤジを入れる部下や自身と一緒に来た親衛隊将校がいるため、ほっとく訳にもいかない。彼らの耳は直接上司のギレンとつながっている。

『ここは養豚場ですか? 目の前でピーピー泣きわめく豚がおりますか?』

と彼の頭には相手を殺しかねない台詞が浮かんでおり、そもそも戦争の準備のあるジオンには何の遠慮も必要ないと考えるのをやめ、喉までその声が出かかった。

「双方、言葉遊びはやめて本題に入りましょう。全員退席したまえ」

カイオスは両手を机に乗せて某口ロボットアニメの司令のような立ち振る舞いでそうつぶやく。しかし、西部セクター課長はそれすらも食いつく。

「しかし、局長!。」

「これは命令だ……それとも、私に言いたいことがあるのか?。」

まるでここで屠殺せんばかりの殺意の籠った視線。それはヴァル

ターでさえも手札のないものだ。彼は政治家であり、軍人ではない。軍の階級をもらっているが『名誉少将』であり、軍務では何の役にも立たない行政職に等しい階級だ。

幾多の戦場を経た強者の視線。西部セクター課長はみるみるうちに再び青ざめた表情となり、彼を筆頭に離席して部屋を出る。

「使節団の方もヘーヴル名誉少将と情報を許された者のみ退席為されてください。それとも全員情報共有する将校ですか？」

「いえ、私と秘書官。あと護衛のみ残します。」

使節団と呼ばれた外務省と親衛隊の将校達は会議室を後にする。本当は使節団の護衛の特務MSや護衛の海兵隊含めて数百人にも上るが、MSまで持ち込む程のスペースはない。だがパーパルディア皇国のあまりにも無礼な態度は兵の士気を逆に高め、ヴァルターを守らなければと、上官や彼自身に志願してきた者は多かった。

名残惜しそうに退出する他の者達。

残ったのはカイオス含め、秘書官と国家監査軍警備部の精鋭。つまりSPにも似たカイオスの私兵。一方ジオン側もヴァルターと秘書官。そして親衛隊の精鋭部隊から引き抜いたSP達。ここに居るものは全て一級線に値する。

「さて、ヘーヴル親衛隊少将……でよろしかったでしょうか。軍務経験はないように思われるが？」

「ええ、カイオス局長殿。私は根っからの政治家でして、軍務についてことはありません。この階級は軍の指揮系統は一切関わりません。形だけのものになります」

「なるほど、合点がいきました。さて少し一息つきましよう。貴方も大変ですな。上官思いの部下を持つと手綱を保つのは相当でしょう」「ええ、血気盛んな優秀な若者です。そちらも優秀な護衛の方がいらっしやる。カイオス殿は元々軍関係者でしたね。大陸軍にお勤めでしたとか。護衛の方々も一緒に？」

「ええ、彼らはずっと共に戦ってきました。頼りになる者達です。」

互いに認め合う。これが一番有効な外交手段なのだろう。互いを知ることが難しくない。だが理解し合い、認め合うことは容易ではない。だが、カイオスとヴァルターの間には共通点があったことで、両国との間が非常に狭まった瞬間だった。

「さて、本題に入りましょう。我が国と貴国の間は非常に危うい。出来る事ならば争いなく国交を結ばせていただきたい。」

それはジオン公国指導部とギレン総帥の考えだった。出来る事であれば、連邦と今後の仮想敵国である神聖ミリシアル帝国との戦争に備えたいのが彼らの考えであり、自分たちの文化レベルが最も近いのが古の魔法帝国のテクノロジー。だが、彼らの存在が脅威になることは数値上、低いのが公国見解だった。

ヴァルターの言葉に頷きながら、秘書官から渡された紅茶を飲む。だが彼の口から発せられたのはヴァルターからしてみれば意外で、この世界共通のことだった。

「……それは無理でしょう。如何にあなた方が神に近い存在だとしても、我々は勇み足で突撃する」

カイオスは秘書官に頼み、極秘文書のファイルからジオン公国の国力分析書類を広げる。本来ならば、相手の政府要人に見せる代物ではない。だが、その内容は皇帝直轄の第一外務局の発行した報告書類だった。

そこに書かれていたのは正にジオン公国を中傷しているに等しい欺瞞に満ちた書類。至る所にジオンによる情報操作と情報戦に優れたところを強調しつつも、国力の精査はおろか敵兵器や国民の情報は一切触れずに文章にしていることだ。一番ありえないのはズムシテイクロニクルの発行する新聞の記載が丸ごと入ったものであり、何者かの意図が分からないようでは外交官としての真意を疑う。

そもそも、ジオン公国の国土を見たことがあっても、直にはない。遙か彼方の大気圏よりも遠く。月の軌道上よりも向こうにあるその

場所に行ったことはないにもかかわらず、明らかに辞書サイズの報告書を書き記されている。しかもこの形式で皇帝に提出される有様。如何に第一外務局のエルトが真実を伝えようとも、事実を伝える外務局発行文書が力を発揮する。

カイオスの第三外務局の方がまだましだった。

「これは……すごく大きいです」

どっかの漫画に出てきそうなセリフだったが、ありのままの気持ちを口に出したヴァルターだった。

「カイオス殿はどう考えているのです?」

「それはこつちが聞きたい……」

カイオスは敬語を忘れて、外交の場の形式的な言葉遣いを忘れて、思いのたけをぶつけていった。

「貴方達ジオン公国とは余りにも国力の差がある。テクノロジーの差も凄まじいし、何より戦いの歴史は明らかに貴国が上だ。一体、文明を築くのになぞれほどの人間が死んだと思う?」

カイオスは大陸を統一するという、パールネウス共和国時代から大陸軍で人生の大半を過ごした。正に彼の人生は戦場に有ったといつてもいい。汚泥に塗れ、剣を振るい、死屍累々の血反吐に塗れた大地を進軍する。普通の人間ならば死んでもおかしくない年月を大陸軍に費やしてきた。そう、彼は人種であるが、同時にエルフ種。ハーフェルフという長命の性を持つ。

そんな人生の大半を戦場で過ごし、泣き叫ぶ虜兵や現地住民の殺戮など日常茶飯事のように見る。大陸を統一するために莫大な人員を減らし、一体他国をいくつ減らせればいいのか。カイオスは実体験で知っていた。それこそ大陸を統一し、海洋国家に戦争を挑むなど何世代必要なのだろう。確実にカイオスは死に絶え、数百年かかっても達成できない大事業だ。

現在のパーパルディア皇国のテクノロジーなどジオン公国と比べれば子供の遊びに等しい。海洋は月が二つあるお陰で、長距離航海はおろか近海すらままならない。大洋は荒れて大航海時代を迎えることなど出来はしない。空中に大質量を運ぶことなど基本的に動物兵

器に頼る皇国には土台無理な話。

圧倒的な戦闘能力やその効率的な殺しの仕方。

15 m以上の巨体を自由に動かし、星間国家であること。

そんな国家になるために、どれだけの人命が犠牲となって文明が築かれたのか。考えるだけでも恐ろしい。

「貴国が数多の戦いを経てその文明をどう築いてきたのか、知りたいとは申しません。ですが、貴国ほどの国家がなぜここに来たか考えるべきです」

「考えるとは？」

ヴァルターは思わず、訊ねてしまう。あまりにも外交の場では話さない話。そもそも普通の人間はそこを思考しない。歴史を学ぶ上でどれほどの人間が犠牲になって、文明が築かれたのか。思いのほか、カイオスは軍人らしからぬ、哲学者思考の持ち主だった。

「貴国がその軍事力で何をしてきたか知りません。ですが、今後何が起るのか私のような軍人上りの者でも理解できる。大いなる破壊、ジオンと対なる大国が戦う。預言者でなくともあなた方が転移国家として自分の力で来たのなら私と話す必要はないはず。既に終末戦争として私は沢山の屍を越えていたでしょう」

もし、転移が自発的に可能なテクノロジが開発が出来ていれば、カイオスが想像する古の魔法帝国のように強大であれば列強など瞬殺なのかもしれない。だがそうはならなかった。ジオン公国は転移技術を持たないし、列強のテクノロジは彼らの残骸から十分な情報を収集していない。

「貴国は今後、格上の相手と戦うことになるでしょう。その時は私の言葉を思い出してください」

カイオスは一息開けて、まるでその時を楽しむような笑みを浮かべながら語る。

「貴国はなぜここに来たのか。そして何を為すべきかよろしいかと。もし、相手を読み間違え、敵を見誤るようであったなら……」

「この世界は滅ぶことになる」

第二十六話 エストシラントの屈辱

結論として、ジオン公国の使節団本部が窓口を引き払うことは無かった。逆にカイオスの私兵が使節団本部を武装親衛隊と共同警備し、カイオス経由で格安の両替商に引き合わせてもらい、低コストで外貨を得られることに成功する。

カイオス自身、腐敗した官僚や皇国民と同じく人間である。目の前の利益を目にすれば、もつと欲しいと思うにきまつている。加えてジオン公国の優れた機械文明の片鱗を味わえば抗うことは出来なかった。

戦争の可能性がなく、ジオンとの国交が成立すれば、皇国有数のカイオス中心の巨大資本ができる。目的のための手段が『金』であるが、手段と目的が混ざり合う者も少なくない中、カイオスは哲学的思考を持っているために、商人や資本家のような思考はなく、むしろ護衛の給与の面や国家監査軍再編のための装備調達、また予備役の雇用の確保のため、新たな事業の拡大など、人生の大半を軍人として生きてきた老体とは思えないほど生き生きしていた。「第二の人生を得た」というレベルの動きであり、その行動はジオンの製薬会社を作ったエナジードリンクが原因だとか。

関係修繕に向けて進み、もしかしたら戦争は起こらないかもしれないという考え方は使節団とカイオスの脳裏の隅から全体に広がっていく。だが、時代の流れに逆らうことは到底無理なことだった。

会談から二週間後。

フエン王国洋上には多くの艦艇が犇めき、敵岸に向けて航行する大艦隊の姿があった。

パーパルティア皇国大陸軍の部隊である。本来であれば、大陸軍の性質上ここまでの艦隊を運用することは無い。だが、国家監査軍の艦艇と水兵を借り、揚陸艦の数は非常に多い。護衛艦隊は国家監査軍が

使用する艦艇以上に整備された装甲艦が配備され、高出力魔導炉を使用する。そのため推進力は従来の機関と比べて早く、帆船に動力部品を取り付けた軍艦と比べれば最新鋭の軍艦だといえるだろう。

他にも、航空戦力であるワイバーンロードと呼ばれる非常に大きいワイバーンを配備し、攻撃力は一般的なワイバーンの30倍程。正に最新鋭の航空戦力を艦隊に有し、これに乗せる大型竜母艦は5隻を有する。

一度、国家監査軍の東洋艦隊が全滅している以上、これまで以上の戦力を投入することは定石。圧倒的な艦隊によって敵を撃滅し、敵の王都に自国の旗を翻す。將軍シウスは物量により敵を圧倒、皇国が敗北した事を挽回し、泥を塗ったことを後悔させなければならぬ。パールネウス共和国時代から、フェン王国は近海での海賊行為や暗殺など数々の妨害工作を行っていた。近隣のガハラ神国の支配地域もあるため、手出しがしにくく、舐められた態度をとっていた。だが、今回の首都への懲罰占領で馬鹿な真似などしなくなる。

現在のガハラ神国は政治家と神官との政治闘争が多く、今回の軍事行動には邪魔をすることはない。だが、第一外務局は『決して交戦してはならない』と厳命していた。神国の保有する航空戦力は強大であり、皇国のワイバーンロードや地竜は怯え、戦うことは出来ない。戦争における貴重な戦力が使えないともなれば、將軍シウスも高名目当てで手出しをしようとは思わなかった

『決してとらえたジオンの民は殺さずに拘束せよ。すべて魔導中継にして外交官たちの前で処刑映像を流す。』

第一外務局付のレミールの命令を思い出し、將軍シウスは参謀や佐官に対して命令する。

「警戒を厳とせよ」

將軍シウスの命令は伝わり、大陸軍の上陸部隊はフェンへと目指す。地球よりも巨大で、情報伝達技術の遅れた惑星ではフェンへの懲

罰攻撃を知るには多くの情報機関への投資と人員が必要であったが、その強大な資金力とテクノロロジーによって一部列強しか知らず、パールディア皇国とジオンの戦いには干渉しないよう、様子見を決め込んでいた。

だが、列強の潤沢な資金により作られた諜報ネットワークよりも、更に強力な諜報活動が存在する。

数百キロ上空の軌道上に設置されたジオン製の偵察衛星ズム工科大学のリヒャルト・ヴィーゼ教授の観測ポットの観測技術が使われており、連邦既得権益とした人工衛星技術や偵察衛星はセツルメントの旧連邦企業側の寝返りから、同等かそれ以上の物に仕上がっている。「KHZ-03アドラー」と命名された偵察衛星はレーザー通信リンクシステムにより、ジオン本国ヘリアルタイムで艦隊の様子を映像に送っていた。

本気を出せば水兵が暇を弄び、ラム酒を開けている姿も捉えることが出来る。その詳細なデータはレーザー通信の中継基地を通じてジオン本国ヘリアルタイムに流される。アメリカ合衆国の衛星監視ネットワークに派生した地球連邦軍の広域ネットワークはジオンでも採用され、既に国家偵察局なる組織により、情報は総帥府へと伝わっていた。

正確には国家偵察局の情報は様々な機関に枝分かれする。宇宙攻撃軍司令部や突撃機動軍司令部、首都防衛大隊や親衛隊司令部。未だに存在する二大軍統合基幹として、国防軍総司令部に送られ、更に総帥府直轄の統合参謀本部に送られるなど、様々な機関へと伝わった。連邦のスパイには既に伝わっていることをギレンは予期していたが、惑星への軍事行動が連邦への隙となるかは別問題だった。

宇宙攻撃軍はルウム攻撃戦やティアンム中将への海戦により、大なり小なりのダメージを受けた。しかし、惑星からの資源供給と予備役の兵士達を元の仕事場に戻したことで産業に潤いを戻し、転移によって激減した地球連邦軍の攻撃は予想よりも少なく、開戦時よりも一割増の戦力保有率になっていた。ギレンの予想として地球攻撃の段階

から、ルナIIに割く戦力もままならないと危惧していたが、今ならばルナIIを落とすことが出来る。だが、惑星への軍事行動や派遣部隊の護衛を考えれば、ルナIIへの攻撃は待たねばならない。

「委細は貴様に一任する。何、地球連邦を落とせと言っているわけではない。あの程度の国家など朝飯前だろう。」

「はっ！この私、ガルシア・ロメオ少将！パーパルディア皇国討伐の命令承りましたあ！」

パーパルディア皇国に対しての武力行使の指揮を任命された男、ガルシア・ロメオはもつともジオンに忠実な男の一人である。悪く言えば権力に靡く出世欲と権威に溺れた器の小さい男と言えるだろう。プライドが高く、直接の上官はキシリアの部下、今回は宿敵であるマクベを階級が高いのにも関わらず、軍務優先ということで、顎で使うこともできる。

彼の絶頂期は今と言っている。

だが、周囲からはなぜ将官に登ったのか理解できないと口々に言われている。出世欲が強いため、何かしら賄賂をしていたのではと噂されるが、真実は闇の中。しかし、この人事を参謀本部に務める参謀が聞けば「いや、うつそだろ！あんなのに任せるの!？」と驚かれるだろう。つまりそこまでの男なのだ。

「総帥閣下のご期待に添えられるよう、大戦果を挙げます！」

「うむ、期待しているぞ」

ギレンは心にもないことを言い、握手を交わし、報道陣に向かって作り笑いをする。相手のガルシアはもう嬉しくてしょうがない。攻撃の段階になれば第一報で報じられ、『パーパルディア皇国に宣戦布告』と同時に『ガルシア・ロメオ少将、皇国攻略部隊司令に命ぜられる』と報じられるだろう。だが、軍関係者からすればその人事は異常と言える。

会談の後、ギレンは親衛隊責任者のエギーユ・デラーズが近づき疑問を投げかけた。

「閣下、あのような粗忽者に任命するのはどうかと……」

「ああ、あれは良い駒になると思つてな。何、物は試しというだろう」
一国の攻略に物は試し……大胆な選択をしたギレンだが、難しい事情が存在する。

「使える人材にも限りがあるし、あの惑星に行きたがらない者も多い。全く地球ならどんなに良かったか」

知らないことは人間に恐怖を抱かせる。それは惑星の住民、しいてはジオンも例外ではない。なぜなら、惑星の生態系は未だに謎が多く、その地独自の発展を遂げたウイルスやバクテリアが多く発生している。既にジオン本国へ流入している病原体は数多く、更に治療法は七割近く特定されていない。そんな状況で地上に行き、治療法のまだない病気に罹りたくない。

忠誠よりも命を選ぶ将官がいるのは事実。嫌がる将官を無理やり連れて行って、敵対する陣営に取り込まれても困るギレンは数少ない志願者を派遣した。条件に合うのがガルシア・ロメロ少将だった。

キシリアの部下であるが、ギレンに忠実であり、権力に忠実。病についてこれ程無理解であれば戦線投入にも、罪悪感を抱かない。

「ここで使えなければ、マ・クベを後任に。それまでの男だったということさ」

「そうですか」

慢心と呼べるギレンの判断だが、知略を持つ將軍ほど単純明快な進撃作戦や電撃戦を行えないもの。常套手段でしか対処できない凡庸な指揮官ほど扱いやすいものはない。寧ろ、司令部に忠実な方が総司令官としては無駄に配慮しなくて済みやすい。マ・クベなどの知将の方がギレンの予想を超えたことをするため、何かと手に余る。寧ろ、キシリアのように任せっきりにした方が良い結果を招く。

ギレンにとって、不安材料が残る方が判断に困るというもの。

今回のパーパルディア皇国については、MSによる圧倒的な攻撃と地上と空、そして海による電撃作戦が求められる。多重攻撃により、司令部機能をマヒ。対応できないうちに敵首都陥落まで突き進む必要がある。

「作戦は参謀本部の人間が考えている。あとは実行する人形が必要なのだ」

「……軍は人の集まりです。」

理詰めで考えるギレンと軍人として誇りを持つデラーズ。住む世界が異なる彼らが一緒にいて、どうやってギレンに惚れ込むデラーズが生まれたのかは定かではない。だが、政党組織として躍進した陰にはデラーズによる親衛隊創設がある。

人と人のつながりによってデラーズという軍人が出来上がるが、戦略として捨て駒にする覚悟は当然ある。だが、総指揮官の台詞は許容できないものだ。

人の命を預かる以上、部下の命を最良な形で失わせる。願わくば、誰一人として欠けることがなければ尚良い。だが、現実はその簡単ではない。戦争をしている以上、不測の状況になり、部下の命を犠牲にして勝利を得なければならぬ。軍の指揮官とはそういうもので、なによりも信頼に重きを置く。理想に熱いデラーズであるが、人を駒として扱うのは仕方がないにしても、総司令官が人を「人形」扱いするのは、軍人として見過ごせなかった。

「分っている。今回の作戦は全てのピースを嵌めてこそ、成功に導ける。マ・クベのような柔軟性のある男、義憤に駆られて追撃するケラーネや貴様も適任ではない。寧ろ、愚かな者こそが適任の場合がある。それと……フェン王国に特務隊を。例の部隊を派遣するんだ。」

「あの部隊ですか？」

デラーズはギレンの言葉に驚きを隠せなかった。何故なら、設立してからまだ日は浅い。実戦投入は時期尚早と考えているからだ。しかし、ギレンは今回の投入に対して迷うつもりはない。

「ああ、フェンでの戦いでは、彼らのような特殊作戦のための部隊が必要だ。ルナIIでの技術資料の奪取、ビショップ博士の救助作戦にも従事している。彼らなら何とかかなるだろう」

―救出作戦は失敗したがな

とギレンは先の作戦の失敗を嘆く。転移事象を起こした研究に携

そこには入れるのは近衛兵でも女性限定。皇帝からお呼びが掛かった幸運な者か皇帝と婚約をした者しか許されない。

まるで、クイーンサイズのベッドを更に巨大化。10人は裕に入るのであろう巨大なベッドに男女が横になっていた。

掛けてあるシートで隠されているが、何も纏っていない全裸状態。そこで何があったのかは想像できよう。真夜中に熱い情交を結んだ男女は朝日が昇ってもなお、その体を起こそうとはしない。だが、女の方。皇帝の婚約者であるレミールは皇帝を起こさないよう、ゆつくりと寢床から起きだした。

その姿はまるで女神のようだと皇帝は情交の最中、彼女に言ったという。それは比喩的な表現やお世辞ではない。均整のとれた身体。乳房が程よく大きく、臀部の張りがよく、肌は絹のように滑らかで白い。その顔はまるで希代の画家が描く美女のようだ。

画家が美女を思い描くとすれば、まず彼女を描く。

もし、現代であったなら、通りすぎる十人のうち十人が振り返り、芸能界にいる人物であれば、声を掛けるほどの美貌の持ち主だ。それは本人も知るところ。彼女の欠点はその姿があることで、傲慢な性格になっている。もし、その地位から引きずり降ろそうとすれば、彼女は何が何でもその邪魔する者を蹴散らす筈だ。それが何人であろうとも。皇帝と自分の仲を引き裂こうものなら一族もろとも皆殺し。奴隷であっても、四肢を引き裂いた上で雄奴隷の慰み物にさせるつもりだ。それが自分の親類であれ、肉親であれ、容赦のない鉄槌を落とす。

現代でいう「ヤンデレ」に近く、嫉妬深い感情は皇帝のメイドにさえ向けられる。

「レミール様、お召し物になります」

「そこに置いていけ。お前らの世話は受けぬ」

—近衛兵から召し上げられた町民の女に触れてほしくない。

レミールの嫉妬のような黒い感情が言葉の節々から出ていた。服を持ってきたメイドは武術の訓練を受け、必要とあらば皇帝の寵愛を

受ける。レミールの生む子供が何らかの事情で皇位を継げなければ、メイドの子供をあたかも二人の子供として育てなければならぬ。既にレミールの知っている皇帝の隠し子は数名。既にこの城で教育を受けている。

将来は近衛兵か城お抱えの乳母になるのだろう。独占欲の強いレミールはそのことに対して嫌悪感を抱いていた。皇帝に躁を捧げ、皇妃として君臨する予定の彼女。誰かも知らぬメイドの子供を自分の子供として扱うのは何としても避けねばならない。若い今の自分はまだいいが、十数年経てば老いぼれ、皇帝は若い女を見つかるだろう。彼の全てを狂うほど愛している彼女の心はその時どうなるのか、彼女自身分らなかつた。歴史上、皇妃以外の女に寵愛を与えた皇帝など幾らでもいるし、その事に耐えられずに心を病み、遠い別邸に幽閉された皇妃が多く存在する。

二十代後半という、皇国でいう行き遅れにも関わらず、婚約したレミールには焦りの感情があり、それだけに女以上に政治家としての心配も必要であると感じていた。

メイドから服を受け取った彼女は彼女達の力を借りずに浴室へ直行し、身体を清める。寵愛を受けた痕やその名残を洗い流すのは不本意ではあつたが、何があつたのか悟る官僚の厭らしい目つきを想像して洗い流していく。本来なら、多くの召使に補助をさせるのだが、殆どのメイドは殆ど皇帝の寵愛を受けている。公務や仕事があるために、レミール毎夜皇帝と一緒にいるわけではない。寵愛を受けるのは彼女らの方が多い。如何に愛されてきたか、差を付けられているように、彼女の心にどす黒いものが溜まっていった。そんなメイドたちに補助されるつもりはないレミールは自身で身体を洗い流し、素早く公務へと向かつた。

皇城の中にある第一外務局は皇帝直轄の機関の一つであり、規模は国家監査軍を有する第三外務局より小さいが、権威は彼らの数十倍。出世の登竜門はここだと言わんばかりの豪華絢爛な装飾に囲まれた外務局の建物は、国の威信をかけたものだ。

その一室にはレミールの他、第1外務局長エルト、No2の次長ハンス、ほかの列強支配下の保護国や系列国との外交を任される下位列強担当部長シラスなど、外務局のお歴々が集まっていた。

そして、今回の主役である第三外務局長カイオスの登場により、会議室で糾弾が始まった。普段なら、頭ごなしに局長級のカイオスを非難することはない。基本的にそれは皇帝の仕事だ。しかし、非難し、叱咤するのは書類上同位の地位にあるエルトや下の階級のシラスとハンス、それにレミールだった。

「皇帝陛下命での、第1外務局からの呼び出しとは……。どういった御用件ですか？」

皇帝による命令書。皇帝の署名と印の押された書類であり、皇帝の命令書。神の運命をも曲げられるとも揶揄される公式書類の一つ。だが、実質的に皇帝の代理人である第1外務局長エルトが代理印を押し、皇帝の名を借りた行為を平然と行っているのが現状である。エルトとカイオスが対立していることや第1外務局が国家監査軍の取り上げを画策していること。国軍の再編をもくろみ、第三外務局の権力縮小をも視野に入れていることも考えれば対立しても仕方がないことだった。

「解らぬのか？身に覚えが無い訳ではなからう」

外務局監査室付及び外務局長付を兼任する、言わば皇帝の目となる人物だ。

カイオスは姿勢を正して、疑問符を浮かべた。

「して、いったい何の事でしょうか？」

「ジオン公国についてだ。あの国は第三外務局の管轄。皇帝は彼の蛮族について何と仰られていたか？」

彼女の手元にあったのは、正確に書き記された議事録だった。本来ならば、カイオスによる偽装書類が送られ、ジオン公国についての議事録は皇帝の納得する内容になって然るべき。その内容は三流劇のような様相のジオン公国使節がカイオスに屈する内容だったが、『機密』『局外持ち出し厳禁』の判子と共にあった書類はカイオスの立っている足元に叩き付けられた。

「あの国賓のような対応は一体何か？担当者だけでなく局長その他重役が首をそろえ、その内容が弱腰外交、いや、平伏外交というほかない。列強たる皇国の外交担当の長がここまで皇帝の意を汲めないとは失望したぞ」

カイオスは額に汗を浮かべる。ジオン公国使節団には様々な便宜を図っている。使節団施設の共同警備や商会への商会、為替を代わりに行うなど、文明圏外国家にそれほどの便宜を図ることは有り得ないことだ。議事録以外の情報が載っていた書類ならば、国家反逆罪の容疑で処刑されても文句は言えない。皇国のプライドは異常の一言に尽きるが、レミールの激情に任せた判断も皇帝の判断として、その場で斬殺されても文句は言えない。

だが、幸運なことに記されていたのは、『カイオス自らがジオン公国に対し説教。内容は不明だが、帰国予定だった公国はしばらくの間、滞在を伸ばすと回答』としか書かれておらず、皮一枚で生き延びたようなものだった。

だが、皇国の命運は尽いたも同然の決定が下される。

「カイオスよ、今後ジオンとの外交は第三外務局ではなく、第一外務局が行う事とする。また陛下の代理として、今後の外交担当は私が行う。本来であれば、任を解かれてもおかしくない身。今回の処遇についてありがたいかと思え。」

20代の若輩が60代のベテランに言うセリフとは到底思えず、カイオスは顔には出さないが、拳を握りしめてしまう。カイオスからしてみれば、世界を知らない小娘。『井の中の蛙大海を知らず』、あのジオン公国が嘘八百を並べ立てる欺瞞国家という皇国のプロパガンダを盲信している唯の独り善がり。

そんな小物が皇国の命運が掛っていることに不甲斐なさを覚えた。

「は……承知いたしました」

第一外務局の重役の前での屈辱的なこの仕打ち、まるで晒し者に等

しい。

だが、この決定により、カイオスからレミールに委ねられた外交判断はパーパルディア皇国の興廃を決定づけることになるとは誰も知らない。歴史家からは『カイオスが担当のままであれば、列強のままの皇国があつた』と可能性を論じられるが、机上の空論として言われることとなる。

だが、列強と名高いパーパルディア皇国が一月あまりの戦いで属領や植民地を全て失い、国土の二割を焼失。戦後はパールネウス共和国として第二次共和制に基づき、建前上民主主義を標榜。カイオス総統を中心とする軍の独走状態になり、後援としてジオンが軍事的安定の後ろ盾になる。そして、元属領における国際紛争、領土問題などの混乱を収めていく。

後の世に対立の種火を残す大戦、フィールアデス大陸解放戦争の前夜となる一連の出来事は『エストシラントの屈辱』として、歴史の分岐点として記録された。

第二十七話 フェン王国上陸戦（1）

かつてのフェン王国では東西に分かれた内戦があった。今でも東西の戦士は仲が悪いと評判ではあるが、想像してみても如何だろうか。かつての薩摩藩や長州藩など、長年の戦争で対立関係にあったものの、国外の勢力に対しては一致団結してきた歴史がある。フェンも同じく、西部の大都市「ニシノミヤコ」は嘗ての国内対立により建設された城塞都市。いや、城塞の面影を残している都市と表現できる。かつて濠のあつた場所は庶民の涼む場として利用され、軍用倉庫は民用の倉庫として活用。雑多な増築を繰り返した結果、軍事的な戦術的防御はもちろん、城壁の門が閉められない状況。更には内戦終結後、三割の防護壁が破壊された。表向きは通商にとつて邪魔という名目だったが、実際は反乱分子蜂起が起きた時に早急な鎮圧が出来るようにするため、防衛設備を破壊したのである。

フェン王国軍は既にニシノミヤコの防衛計画をあきらめ、周囲を囲む山陵地帯を防衛線とする構えを見せていた。だが、ニシノミヤコの民間人はそのことを伝えられない。戦訓として『悪戯に民を刺激してはならない』というものがあつた。嘗て城塞都市として機能した時代。敵の総攻撃に対して、当時の戦士長は避難命令を発令。しかし、住民の多くがパニックを起こし、一つの城門に群衆が押し寄せる事件が発生した。

結果、戦士や民間人など多数が圧死。民のすべてが戦士として鍛え上げられた現在では、パニックなど起きない。しかし、現在のニシノミヤコは多くのジオン公国人やセツルメントから来た観光客によつて賑わいを見せていた。それこそ、ニシノミヤコの全住民よりも多い。

どれほどの文明を持ち、テクノロジーを持ちえたとしても、人の根源にある精神について鍛えてなければ、雑兵との差に違いはない。恐怖から逃げのびようとする生存本能が刺激され、暴動となる。それを懸念したニシノミヤコ当局は皇国の侵攻が迫っているにも関わらず、

避難勧告は直前まで出すことが無かった。

十キロ先の山陵地帯の山陵線上に防衛線陣地として、『ニシノトリデ』前線基地が急遽設置。ムー情報機関『マンダ』の支援とジオン公国軍事顧問団による指導の元、あたかも西部戦線の塹壕陣地のごとく、防衛線陣地を構築し、機関銃陣地や観測陣地、砲兵陣地や野戦病院施設などムーの野戦戦闘兵器やジオンの復刻兵器が多用された。

それはあたかも、ムーとパーパルディア皇国、ジオン公国と皇国の代理戦争のようにも見える。嘗ての旧ソ連とアメリカによる東西冷戦。大国による軍事援助により、朝鮮戦争やベトナム戦争など数々の小国がパワーゲームに巻き込まれ、焦土と化した。その再現なのか、連邦による搾取から逃れるために、独立戦争を起こしたジオン公国が小国の戦争に介入し、兵器を輸出。顧問団を派遣して、皇国に対する牽制を行う。力による抑圧から逃れようとしていた国が逆に抑圧を、覇権国家になろうとしているのは、何とも皮肉なことか。

不幸なことに、そこに民間人の避難といったものは陣地構築の途中『国民皆兵』の思想の元切り捨てられ、来訪していたスペースノイドは体のいい、囷として利用されることとなる。

「敵さん来ねーかな……」

「馬鹿、不吉なこと言うな」

ニシノミヤコ市街地より十キロほど離れた港町にある、砲兵隊の観測陣地が存在した。近代化を求めすぎたあまり、練度はお世辞にも高いとは言えない。しかし、国民皆兵の思想のためか新兵以上の働きをするフェン王国兵。白兵戦にもなれば無敵とも言われるが、惑星の標準的な戦争は、魔導銃の撃ち合いや砲撃による敵防衛線崩壊を目的とし、歩兵の任務は敵陣地の掃討に充てられる。もはや、これまでの戦い方では勝つことが出来ないため、急激な近代化と武装化によって国力増強が図られていた。

「つい最近までは剣を振ってこそ男だったじゃんか。なんか、しつく

りこない」

「確かに……までお前は女だろ」

「何を！フェン王国に生まれたからには剣に生き、剣で死ぬのが常識だろう！」

パーパルディア皇国と同じく男尊女卑の概念のない国家であるフェン。生物学上、男性の方が肉体的にも頑丈であるときれるが、フェン国民の遺伝子はやや異なる。この惑星の基本的な能力である魔力がないかわりに、男女共々強靱な肉体を得ることに成功していた。そのため、魔力のないことをハンデにせず、前フェン国王により国民皆兵化。全ての国民が国に忠誠を誓うという軍事国家化を狙った。

『戦いは数だよ、兄貴！』とめぐりあい宇宙でMSを求めるドズルの思考と全く同じである。とはいえ、今回はフェンの戦士団の能力を超えた、皇国大陸軍の軍勢が押し寄せていた。

「だけど……やっぱり時代遅れなのかなー」

女性兵士は廃刀令に近い、決闘の禁止や街中での帯刀の禁止などの新法に対して反発を持っていた。だが、王国軍に創設された新しい部隊に配属されれば、嫌でも自分達の戦いが如何に時代遅れであったか分るのだ。

突撃する鎧を身に着けた戦士達は、騎馬隊を斬り込みとして敵陣に攻め込む。しかし、自動小銃で武装した敵の一斉射撃によって騎馬隊は壊滅し、更には機関銃陣地による十字砲火で歩兵戦力の大半を削がれてしまう。

更に砲兵隊による砲撃によって、フェン王国軍の後詰めの部隊は悉く壊滅する。更に、機械鳥と王国では呼び、『爆撃機』による攻撃で後方支援は壊滅的打撃を受ける。パーパルディア皇国は魔導文明が発達し、周辺諸国もそれに伴った文明を持つ。魔法を使わないフェンは時代に取り残された形で剣へ魂を注ぎ、武勲を誉としてきた。だが、国民を守れなければそれまで。守ってきた者は屠られ、家畜のように辱めを受けることとなる。

「そうだな……この前来てたジオンとムーの教官たちの言葉聞いたか？ムーとジオンの会話ってわかるか？」

女性兵士の話に頷く相棒の男兵士。支給されたムーのボルトアクシヨン式小銃を膝に抱え、片手で双眼鏡を掴み、海へと視線を向けていた。

「いや全然。というか、ムーの教官たちもジオンの教官が言っていることを理解しかねたみたいだよ」

ムー曰く、水際での防衛戦が最も有効である。従来の戦術ではこれが習わしであると説いて回った。しかし、ジオンの場合、水際防衛は砲撃のみしておき、浜辺に相当数誘導してから、砲撃で敵の勢いを削ぐ。そして敵が侵攻してからは、深部に突出した部隊を深部に引き寄せ、三方からの包囲に持ち込む。

若しくは相手が気を緩む瞬間を狙った奇襲攻撃も有効だろう。

フェン王国指揮官はムーと同じく、水際防衛を貫くつもりだったが、実際のジオンの主催する将棋盤のような机式演習では、敵損耗度は水際防衛よりも深部に誘き寄せてから攻撃する方が最も効果的であることが分かり、方針を転換した。

最終的な判断は両軍の最高指揮官の決定で為されるが、末端の兵士たちにとつてはそれが限界だった。何しろ『皇国による電撃作戦』『塹壕防御の危うさ』『機動戦術理論』など、フェン王国だけでなくムーですら追いつけなくなった。

何せ、塹壕戦術や機関銃と砲火による対処。それらの戦訓は日露戦争の旅順包囲戦からなり、第一次大戦中の塹壕戦。それらを突破するための戦車の投入。それらを経験した強固な防御を無効とする、陸と空からの同時攻撃。いわゆる電撃戦^{フリッツフリック}。

これらの陸空からの攻撃は第二次大戦時に、ヒトラー率いるナチス・ドイツの同時攻撃として、ヨーロッパを一気に占領。航空機による歩兵支援や主力戦車の概念^{バトルタンク}。これらを理解するには、一連の大戦を経験しなければ分らない。フェンはともかく、ムーは文献やりバースエンジニアリングのテクノロジーといった歴史を持つ。

失われた歴史や文化。そして、相対する国家が魔導文明だったこと

も考えると、塹壕を突破する兵器としての戦車の有効性を理解していても、ほぼ全ての砲を機甲化して、大陸を掛けるような機動戦術を行うなど、理論としてはあっても、第一次・第二次世界大戦を経てみなければ理解のしようがない。

「私にも分ないや」

それに戦術理論は末端の兵士たちには分らない。戦争そのものは数万や数百万の兵士たちがシステムチックに動くものであり、それを指揮するものが理解すればよく、末端の兵士が理解する必要はない。無駄な思考力に力を注ぐよりも、目の前の敵を打倒することを求めるのであり、兵士一人一人の理解はそこまで必要なかった。

(本部より各観測、状況知らせ)

(こちら観測点01、海上に変化なし)

(こちら観測点02、同じく変化なし)

(03、同様に変化なし)

通信手である女性兵士は支給された無線機から異常なしと報告を入れようとするが、マイクを抑えて通信できなくする相棒の姿があった。

「何すんのさ」

「待ってくれ、それを貸してくれ」

マイクを取り上げ、代わりに双眼鏡を渡して、見るように伝える。

「こちら観測点04、西の洋上に船舶多数。国籍不明艦多数あり、電探で確認されたし」

双眼鏡をのぞき込む彼女が見たのが、うつすらと赤い国旗を掲げた黒い装甲の貼った船。それは徐々に速度を上げてくる様子を捉えたが、その数は百を超えるのではないかという勢いだった。それはどう見ても、軍祭に遅れてきた軍艦などではない。

赤い双竜旗はまさしく、パーパルディア皇国のものだ。

(本部より全部隊！西の洋上20kmの海域にパーパルディア皇国の……大陸軍艦艇を認む。全砲撃観測点はこれよりビーバー作戦を開

とはいえ、大陸軍上級中將アルデがフェン全域の領土を獲得するとは皇帝との密約で定められており、シウスの奪えるものは、ニシノミヤコ周囲のエリア。「ニシグン」の支配地域だという。

フェンは長い間の内戦から、多くの砦や城が建設されている。ニシノミヤコもその一つである。内戦では結局現王国勢力に吸収されたが、いまだに王国への反抗心は残されているという。シウスはそのことを利用して、侵略の際も、感情に働きかけ、フェンの西部住民を懐柔する作戦を考えていた。

「シウス將軍、ニシノミヤコ周囲の小島に複数の砲兵陣地ありとの報。ワイバーンロードの攻撃隊を発進させますか？」

「まずは海岸堡を確保したい。後ろから上陸部隊を砲撃されても面倒だ。ムーの兵器がどれほどか見てみよう」

シウスは小回りの利く駆逐艦や木造快速艦を前面に押し、大陸軍の小島攻略部隊を揚陸船に乗せて進ませる。望遠鏡で確認している参謀は島から発射されたと思しき砲煙を捉えた。

「敵陣、発砲！」

「まだ射程外だろう！」

だが將軍の推測は外れる。前面に押し出していた駆逐艦の周囲に水柱は立ち上がり、やや遅れて砲撃音が響く。

「駆逐艦ヴェルペン、至近弾！」

「敵は練度もよく、おまけに砲撃精度も良い。……楽しめそうだ」

そこらの蛮族を殲滅するだけでは、国家監査軍と同じである。監査軍は遠方の田舎の野蛮な国を統治するために作られた尖兵。一方で大陸軍は栄えある大陸の軍というだけあって仮想敵は大陸の文明国に絞られる。だが、前皇帝による宥和政策によって安穏とした状況が続き、国家監査軍は実戦を。大陸軍は大陸文明国へのけん制として、日夜パレードや演習を行ってきた。戦わない軍隊はフラストレーションが溜まる。国家監査軍の縄張りを荒らして、国家監査軍と同等であると宣言してなければ、国家監査軍にすら吸収されてしまう。フェンの戦いぶりを見て、フラストレーションを吹き飛ばす絶好の

チャンスであるとやる気を漲らせた。

そして、先の砲撃で射角修正した第二射が行われる。砲弾は木造の駆逐艦ヴェルペンの魔導防御の施された上部装甲を貫通。前甲板が吹き飛んだ。

「駆逐艦ヴェルペン中破！」

「先遣隊より連絡、【ワレ後退ス】」

「そのまま進ませろ！敵の砲火に惑わされるな。長距離射程の砲艦とロケット艦は島に集中砲火。敵の砲兵陣地を黙らせるんだ！」

大陸軍艦隊には砲艦の他に魔導噴射式弾頭、所謂ロケット砲が積まれている。既に19世紀初期には既に存在したロケット砲。ロケット花火にも似た構造であるが、あれを巨大化させ、陣地攻略のための海上兵器として利用した。

火薬が湿って不発することもなく、術式と高密度の魔石があればしっかりと作動する。国家監査軍より兵器配備の進んだ大陸軍だからこそその芸当だった。

「目標、ニシノミヤコ手前の敵砲陣地！炸薬最大！放てえ！」

発射術式を込めた発射管制装置により、魔導噴射装置が作動。まるで、軍艦の弾薬庫に火が付いたように、発射炎が甲板上で光る。それが一隻だけならまだしも、十数隻ものロケット弾が空を舞う。噴射装置によってロケットは空高く上げられ、放物線を描きながら島周囲に着弾する。4割は海中に沈んだものの、残りのロケット弾が命中。直撃を受けた砲兵陣地の弾薬庫は誘爆。大きな花火を地上で咲かせた。

「ロケット弾命中、六割が島に到達。敵砲陣地が一つ沈黙！」

「一つだけか……仕方ない。先遣隊はそのまま前進。砲撃戦に移行。先遣隊の判断で歩兵部隊を上陸させよ」

「ワイバーンロード攻撃隊より入電。【ワレ、敵陣ヨリ後退スル敵影多数ミトム】」

「奴ら、驚いていきおったわ」

「こちらも驚きだな」

今のロケット弾攻撃の命中率は6割。非常に高い数値となった。訓練でさえ目標群に命中したのは4割。海上では2割も当たらない。更に言えば、海上で風が強い場合、先遣隊の駆逐艦に命中する恐れもあった。それでもなお使ったのはその攻撃力が並々ならぬ事と、ジョンやムーの支援があるためだった。

上空からの偵察情報によれば、海岸には貧相な木製の防壁が設置されているようだった。

「まずは、港近くの敵陣地に艦砲射撃を行い、これを破壊する。その後は歩兵部隊を投入。先の演習通りに行く。第一次上陸は第4歩兵大隊と第七騎兵大隊を投入。海岸堡を確保し、その後地竜や主力軍の陸戦兵器の揚陸を行う」

「はっ!!」

装甲艦十数隻を盾にして、数十隻の戦列艦や砲艦から砲撃をする様は火山の噴火と形容できる。現在の魔導技術や美術の巨匠が如何に描こうとも、実際見ることでしか味わえない現実感があった。

魔導技術によって発射される度に漂う独特の香り。魔素が散ることで匂う金属臭が艦隊の周囲に漂っていた。そのほか、フェン海域の潮の香りや負傷した戦友の血の匂いも交じり合う。そうした匂いは、絵画では表現できないものだ。

敵陣から放たれた砲弾が水柱を上げ、砲弾の命中によって空気が振動する衝撃を三半規管に受ける。幸運にも一時的な麻痺をしていない水兵は命令を下す甲板士官の叫び声を聞く。絵画では表現できないが、映画で表現できるかもしれない。だが、運によって鼓膜が破れ、爆風に煽られて鼓膜が破れる危険がない以上、本物ではない。

そして、眼前に見える艦砲射撃の一斉射。緑色の魔導炎や煙により、艦隊の周囲は緑色の霞んだ状態となる。やや汚いオーロラと形容

するのがいいかもしれない。発射炎と共に球体型の砲弾が飛来し、目標物に到達すると同時に魔導術式が作動。周囲に金属片を降らせ、爆炎を発生させた。

そして運が悪ければ船に穴が開く。敵の弾が徹甲弾であれば、船体を抉るだけ済む。しかし、これが榴弾や白燐弾であればこうはいかない。

運悪くも命中すれば、爆裂と共に金属片が飛び散り、砲兵の四肢を引き裂き、手足を挽ぎ取る。即死であれば良い方であり、白燐弾であれば、灼熱の炎が身を焦がしていく。生き残った兵士は手持ち無沙汰となった対空魔導機銃で味方兵士を楽にする事を選ぶ。火傷の致命傷はたとえ高名な医療魔術師でも治すことは出来ない。それが末端の水兵なら尚更だった。

港町は完全に火の海に包まれ、海岸手前に設置されたフェン王国の砲兵陣地は何百発もの砲弾が着弾。海上に弾除けとして廃止した装甲艦はその防御力の高さ故に艦隊を守り、運悪く上を通り過ぎた砲弾が砲艦に命中することもあったが、予想以下の損害に作戦参謀は胸をなでおろす。

「全員、揚陸艇に乗船！」

下士官の怒号と共に上陸艇に乗り込む歩兵。パーパルディア皇国大陸軍という、国家監査軍と比べると実戦経験は少ない。だが、最新鋭の魔導銃は正に文明国の武器に相応しく、機械文明のように水で濡れて壊れることはない。縄梯子で上陸艇に乗り、魔導エネルギーをもって稼働する魔導エンジン起動する。スクリューを用いた木造上陸船だが、20ノット近く出ることから、軍に重宝される逸品だった。

形状はWW2の米軍が使っていたLCVPヒギンズ・ボートによく似ていたが、それ以上に巨大な強襲揚陸艇が後ろに控え、地上最強戦力である地竜が載っている。正に巨大なトカゲ、地を這い、広範囲な火炎放射を行う。生半可な火力をぶつけてもびくともせず、地竜が皇国国旗に描かれていることから、地竜を飼いならず、重騎兵隊はワイバーンロードの竜騎士以上に誉としていた。

「パーパルディア皇国万歳！皇帝と大陸軍に神のご加護があらんことを」

「フェンの野蛮人共を皆殺しにしろ！」

「われらが大陸軍に栄光あれ！」

大陸軍所属の水兵や出向している国家監査軍の水兵は、上陸する歩兵部隊に歓声を送る。上陸戦で一番死傷率の高いのは彼ら第一陣。彼らが敵を掃討して確保しなければ、数万の歩兵部隊は海上で待機することとなる。

「浜辺まで3分だ！上陸後は急いで陸に上がる。フェン王国兵は最近になって火薬銃を使うが、恐れることは無い！奴らの訓練期間など我々の足元には及ばない。」

「奴らを近づけず、複数人で撃て。敵は白兵戦を好む。できる限り接触は避ける。銃撃で殺すんだ」

「敵には女戦士もいる。フェンの女どもは美人が多いかもしれない。だが、油断するなよ。てめえのナニを食いちぎるぞ」

小隊指揮官の大尉や少佐の言葉により、歩兵部隊は領く者や叫び声を挙げる者、内容によっては緊張をほぐす為笑い話をする。だが、上陸地点に近づくにつれて緊張からか無言になる。ある者は神に祈りを捧げ、震えた手でお守りを握りしめる。それは国に残した恋人か妻のくれた者かもしれない。新兵は震え、緊張のあまり朝食を足元にまき散らす。

古参兵は新兵を慰めながら、次に死ぬのは自分か彼かを考える。持っていたサーベルや銃剣、魔導弾の弾がしっかりと撃てるか確認するなど、反応は様々だった。

上陸艇の操舵手はせり上がった席から近づく上陸地点を見て、目測で叫ぶ。

「残り30秒！」

「いいか！上陸したら一気に前進する。上陸後は集結地点で指揮官を待て！全員で港町の酒場で飲んだくれるぞ」

第一陣は港町の廃墟で略奪の名誉にありつける。ただし、あるかどうかわからない賭けのようなものだ。完全に破壊され、酒瓶すら見つからないかもしれない。だが、その台詞は兵士たちの心を元気づけ、活力を与えていた。上陸が始まれば死屍累々の血の海を渡ることになるかもしれない。目の前の分厚い木造扉が開かれれば、戦友の死体や血の海面を掻き分け、集結地点へ走らねばならなかった。

国の色である真っ赤な軍服に身を包んだ戦列歩兵と連装型魔導銃は、パーパルディア皇国を列強と位置付けている。誇り高き大陸歩兵として辺境の蛮族に後れを取ってはならない。そんな感情が彼らを押し動かし、優れた兵装に身を包んだ兵士たちは死への恐怖を抑え込み、上陸の時を待った。

「上陸開始！」

座礁ギリギリの上陸地点に到着した上陸艇は木製の魔導装甲の扉を開き、皇国大陸兵はフェンの大地に上陸した。

第二十八話 戦争の狭間で

大陸軍が計画した上陸作戦実施から一週間。

フェン王国の抵抗は予想しており、それなりの被害になることは、皇帝直轄の第一外務局や大陸軍の参謀本部は理解していた。だが、気象条件が悪いのか、魔導通信の中継基地への定時連絡がここ六時間なくなっていた。フェンの近くに台風のようなものが観測され、通信状況が悪くなったためと考えられていた。

レミールは険しい顔をしながら、宛がわれていた執務室で待っていた。全外務局の内部調査を担当する部署、『外務局監査室』は皇族が貴族や官僚を監視する機関の一つである。パールネウス共和国が崩壊した原因が官僚の腐敗と貴族による汚職だった。皇族は武装蜂起により、これらの汚職を一斉摘発。粛清によって帝国を築き上げた。パールディア皇国の歴史は常に皇族という監視の目が至るところにあり、行政機関には必ず、皇族関係者が監査と称して強権を行使している。だが、近年は監査室の人間ですら、外務局員の賄賂を受けて取っている。国家への忠誠、皇帝への愛ゆえに不正に目をつぶらないレミールは水面下での粛清に乗り出した。多くの汚職官僚は証拠さえあれば摘発できるのだが、第三外務局の官僚は遠方であるため難しく、搦め手を用いる他ない。

証拠を証明することが困難な場合は濡れ衣を着せて処罰する。若しくは外交文書の偽造なども行って文明圏外国家の蛮族に対して挑発する姿勢を見せた。はつきり言って、これらの行動は問題になるのだが、彼女の部下や監査室長である彼女の叔父は、見て見ぬふりしていた。腐敗や不正を取り締まる彼らは、何時からか不正の行使者として動くようになっていた。

レミールは不正の取り締まりと皇国の拡大を願い、たとえ蛮族が割を食っても気にも留めない。寧ろ、滅ぼされる方が悪いと考えている節があった。私腹を肥やす木端役人とは違い、レミールの動機は彼等の処罰のため。彼らと動機が違うことで自分を正当化した彼女は、人事にも手を回していた。

アルタラス王国の一件は外交官を情緒不安定な者にやらせる事で、国家監査軍や外務局を私用する役人を免職することが出来た。加えて魔石鉱山やシルウトラスの古代文明をも手に入れられた。アルタラス王国が滅んでも、皇国の兵の多くが死んだとしても「戦争による犠牲は致し方無い」と判断していた。寧ろ、ジオン公国の力量を測ることが出来たのだから。多少の犠牲は必要だった。

フエン王国に関しては、むしろ皇国議会から勲章を貰っても良い働きをしたと言えよう。ガハラ神国の神官が酒池肉林の宴を毎夜開き、女性を多く侍らしているとリークさせた。更に神々への供物を不正に取得したと密告しただけで、政治的内乱劇に発展した。レミールはガハラ神国の様子を見て、あまりにもうまく行過ぎてしまったために大笑いして自分の今後を想像した。レミールが皇帝の妻になって皇妃になった暁には、その手腕で皇国の宿願である『大陸統一』が達成されるだろうと。

「レミール殿下！」

「さて、私はまだ殿下じゃない」

呼びに来た監査室職員の手紙に訂正を入れるレミールは、自分の執務机にあった書類を元の場所に戻す。

「要件は？」

「フエン王国派遣艦隊より報告。『上陸作戦成功セリ。ニシノミヤコニテ、ジオン公国ト公国トノ同盟国民ヲ拘束セリ』とのこと」

彼女は短い溜息を洩らした。最悪の場合はジオン公国による上陸阻止。若しくは派遣艦隊の全滅を想定していたが、ある程度の犠牲だけで済んでいた。通信障害が回復し、その報告を聞いた彼女は最悪の可能性が無くなったことを知り、溜息をついた。彼女によく仕えている監査官職員の彼は、彼女の気持ちを理解することはなく、提出した書類に何かあったのかと勘繰った。

「やっとか……映像の用意は？」

「フエン近海にあった嵐は消えたので、中継基地を経由して映像を受信できます」

「なんとか間に合いそうだな」

レミールは監査官として最後の仕事が控えていた。皇帝への結婚の土産として、『皇帝直轄の軍隊』を贈ろうと思っていた。大陸軍は皇帝という国家元首が指揮を執るが、皇国には議会が存在し、不信任決議案を提出する権限を持っていた。

歴史上、パーパルディア皇国で使われたことはない。だが、皇族である以上、それが目の上のたん瘤であることは承知していた。そのため、国家監査軍と大陸軍を吸収。加えて外務局の再編。皇帝の権力強化のために第三外務局長カイオスを反逆容疑で起訴しようと計画していた。既に第三外務局長カイオスが、ジオン公国に対して便宜を図っていたことは知っていた。何より、彼らに対して私兵を送り、使節団警護に当たらせるなど以ての外だった。加えて、為替の代理や仲介人の手配など、殆ど列強国の接待と変わりない。彼女の手元にあつたのは、偽書類だけでなく、会合の記録書類。加えてアルタラス王国での大陸軍の機密情報を入手していることも掴んでいる。

ジオン公国に便宜を図ることは非難されて然るべきであるが、処遇は更迭される位なため、第三外務局の今後の推移を決めるわけではない。だが、大陸軍の機密情報を不正に入手したことは完全な違法行為であり、国家反逆罪の適用も可能だ。

「ジオン公国の使節はどう答えるだろうな。国民を助けるために何かしてくれるだろうか？」

ジオン公国の情報については多くの商人や懇意のある外交官の話もあって、ほぼ確定していた。『ジオンのテクノロジーは皇国を軽く凌駕する』と……。

魔導通信網や機械文明の電波通信網など、どう考えてみてもかなりの資金力がなければ、海外への広報宣伝に予算を割かない。転移国家と言っている以上、それを鵜呑みにするしかない。とは言え、ジオン公国が自分達に牙を剥かない為にどうするべきか。自国のテクノロジーや国力に勝る国にどう対処すればいいのか。

答えは明白である。

『人質交渉』だった。

「数千人以上の国民と同盟国の人間を人質にしているのです。彼らも領くでしよう」

「あの国では人質外交などしない……むしろ忌むべき存在らしい。だが、同盟国なら話がかわる」

現代的な価値観からすれば、『人質外交』は忌むべき存在。強盗のように人から親しい人を取り上げ、取引として利用する。外交政策としては下策だが、ジオンへは打撃になる。もし、これが公国民であれば、外交対話を抑えて公国民を人質にしたとして非難され、宣戦布告も考えられるだろう。

しかし、彼らの言うセツルメント国家連合の国民も多く滞在していたことにより、ジオンも強硬策は取りにくくなる。ジオンが連邦という仮想敵国から身を守り、銃後を安全にするためには、同盟国であるセツルメントと協調姿勢を取らなければならない。もし、ここでジオンがセツルメントの国民を見捨てることがあればどうなるだろうか？

同盟関係に罅を作ったジオンは、連邦との戦争に関して不利な状況に置かれることになる。ジオンと共同歩調を取るクワ・トイネやクイラ、その他同調する国々はジオンに不信感を抱く。よって、強硬策を行うことは考えられない。

それにフェンは数々の海賊行為を行ってきた手前、懲罰攻撃されて然るべき。大義はパーパルディア皇国にこそあるのだ。

一方でジオンはとやかく言える立場にない。人質というのはオブラートに包み、『皇国大陸軍将兵がジオンとセツルメントの観光客を保護した。フェンやアルタラス王国と引き換えにお返ししよう。国交も正式に欲しい』と要求すればいい。現時点では、不穏分子として観光客を拘束しているが、通常の措置。然るべき時に民間人を逃がさない王国に非があり、不審な外国人がいれば、拘束するのが占領地域の常といえる。

ジオンの選択肢は『ひなんする』・『たたかう』・『だきようする』

の三つ。非難したところで時間稼ぎにしかならず、戦うことは同盟国民を見捨てる事と同義。外交的に軍事的に問題のあることは明白だ。この場合、妥協することが唯一の道となる。

「そういえば、連邦の友人に伝えておいた方がいいな。『イラン大使館人質事件』だったか？例える意味合いは異なるが、まあまあのアドバイスだったと伝えてくれ」

パーパルディア皇国は建前として『人質外交』はしない。当然の事だが、人命を軽んじる行為であり、それは受け入れられる問題ではない。だが、それは建前上の話。

もし、スパイ行動と容疑が出れば、拘束可能である。それが濡れ衣であれ、仕方がないことなのだ。ジオン公国にその件を非難されても人道的に拘束しているとすれば、世論は落ち着く。アルタラス王国とフエンに関わるなど言えば、セツルメントとジオンの世論はそちらに転ずる。また国交を樹立したいといえ、なんだそんな事と世論は落ち着く。

彼らからすれば、皇国は小さい国家。ならば逆手に取っておけばよい。

驕った価値観しか持たない世間知らずの少女だったら、また判断も異なるだろう。幼いころから政治の舞台に立ち、多くの政敵を葬り去ってきた手前、皇族として相手の力量を正しく測ることは何よりも重要だった。列強という地位に拘って喚く末端の外務局員とは違い、強かな外交を展開できる。

「はい、彼らには必ず」

「いくらか金子を。外貨は必要だろうか？」

「まるでカイオスのようだな？」

証拠を持って告発されれば、彼女の政治生命は危うい。しかし、カイオスのように懐の緩い人間ではないため、防諜面についてはしっかりと対策を講じてある。

部下にヴァルター・ヘーベル使節団長を呼ぶよう伝え、それなりの会議室を用意する。これまでの列強が文明外国家に対応するような物言いではなく、対等な列強として扱わねばならない。彼らはこの世

界の者ではないのだから。

気付けの蒸留酒を煽り、ヴァルターを待つ。

自分自身の判断が正しいことを信じて。

※※※※※※※※※※

ヴァルター・ヘーベル親衛隊名誉少将は最低限の人員を連れて、第一外務局の門を叩く。

カイオスとヴァルターの会談により、両者の理解が深まったことで使節団の護衛部隊の緊張も解け、教養のあるジオン軍人と会話したカイオス配下の私兵たちとの友情が深まった。言葉の壁はない以上、彼らの交流に壁はない。よく聞く「○○人は信用できない」「○○民族は人でなし」などは、所詮一個人の感情に過ぎない。個人の発言を全体の発言として、虚偽の事実を真実として理解するように。ジオン全てが地球人撲滅を考える差別主義者でもなければ、殺人に快樂を見出すサイコパスではない。

パーパルディア皇国でも同じことが言える。プライドや虚栄心が異様なほど高い民族として知られるとしても、それは運悪く「悪しき皇国人に遭った為に起きた感想」であり、全ての皇国人が極度なまでにプライドが高く、醜く虚栄心があるというのは虚像に過ぎない。限りなく一部の上流階級若しくは愛国心で着飾った阿呆ぐらいなものである。カイオスや彼の部下などは異常なまでのプライドや差別意識は持っていない。

至って普通の皇国人だった。とは言え、ヴァルター・ヘーベル自身、そのプライドが妙に高い「悪しき皇国人」に遭った人間の一人であり、第三外務局の官僚の酷さは身に染みている。某外務省職員曰く、「小惑星をぶち当ててやりましょう」と息巻く様子は皇国感情の悪いジオン世論を代表しているようで、非常に恐ろしいものだった。

ヴァルターは嘗てのジオン・ズム・ダイクンが病死した時の政変。市民による暴動はよく覚えており、更に地球連邦軍艦艇が農業生産施設にぶつかり、あの「暁の蜂起事件」の前にあつた市民たちの暴動を記憶していた。閉鎖的かつ孤立した環境下では、人の意識は先鋭化する。それこそ、政治家や官僚、ジャーナリストが気を付けていなければ、市民による暴動やテロ活動が起きかねない。ヴァルターは暴動の恐怖を知っているため、大衆特有の無知というものは恐ろしい限りだった。隕石攻撃をして、数十万の人間を殺戮すれば国際社会から怒りを買うだろう。外交面も鈍化していくし、なにより生き残ったパーパルディア皇国民からの憎しみは止められない。報復やテロ攻撃、所謂『憎しみの連鎖』が続くことになる。

戦争をするには、相手を根絶やしにするか。若しくは敵に暫定政権をぶち立て、旧政権側をエスケープゴートにし、外ではなく内側に国民の敵意を向ける必要があつた。その決定権や外交の委細を任せられているヴァルターの汗は止まらない。今回の会談の如何によつては、外務省経由で送られた公王デギン・ゾド・ザビの署名、および総帥ギレン・ザビの連名によつて記入された宣戦布告文書を渡せねばならないという、大役を仰せつかつていたからだ。

「第一外務局付のレミール様が会議室でお待ちです」

第一外務局の雑用を任されている役人なのだろうか。ヴァルターやほかの親衛隊の護衛隊員は、目を丸くして驚いていた。第三外務局の職員はまるでごみを見るような蔑んだ視線で見ているからか、例えば本心でなくとも、相応の扱いに安堵する。

何故ならジオン公国を対等かそれ以上の立場だと理解しているからだ。格下扱いならこうはならない。その丁寧な案内を受けて会議室へ向かう一行。皇城の中でも、関係者しか入れないエリアにヴァルター一行は足を踏み入れた。

皇城エストシラントは軍事的にも強固な作りであり、近衛師団区画や行政府区画、外務局の置かれる旧属領統治区画。そして中心に位置するのは皇帝の居城。天守閣にも似た魔導文明のテクノロジーがふんだんに使われ、自動エレベーターや無数の対空魔導銃、多数の火炮

によつて防衛され、政府中枢として機能していながら、軍事的に防衛が可能ないように建設されている。拠点防衛と政府指揮を両立させた施設は歴史上類を見ない。今日において政府中枢の施設を軍事化する事はコスト的にも機能的にも悪く、戦乱の多かつた時代と比べても、都市の中に政府がある以上、軍事施設と政府施設の切り離しは仕方のないことなのだ。だが、中世的な城が政府中枢として依然と使われている事は歴史的な物なのか、それとも開発が出来ずに立ち行かなくなっているのか。

ヴァルター一行はパーパルディア皇国が自ずとプライドを持つ理由が分かった。

「彼らは己の力がムーやミリシアルに及ばないことを知っているんだな。悲しい限りだ」

帝国主義。

欧米列強が拡大政策を続けたのか。それはフランス革命によりもたらされたナショナリズム。国民という概念だった。ナポレオンによる国民軍の結成とヨーロッパに拡大した王の打倒という風潮。これらを抑えるため、欧米は次々と拡大政策と自由運動を徐々に解禁し、ナショナリズムを熟成させていく。帝国主義は単純に国力増強のための拡大政策というだけではない。

諸外国の台頭や強大な国家と対抗するための手段として、文明圏外国未開国の吸収を選んだのだ。

過剰なプライドはムーや神聖ミリシアル帝国への嫉妬にも似た劣等感からくるもの。自国の威信とナショナリズム国民意識が混ざり合い、劣等感がプライドへと変化する。もし、ムーや神聖ミリシアル帝国がなければ、嘗ての七大陸を制覇した大英帝国のような強大な権力を手に入れることが出来たのかもしれない。

そのことが分かるだけに、ヴァルターの心にはこれまでの非礼な態度を取ってきた皇国の官僚に対して、怒りではなく憐れみが生まれていた。

「レミール様、ジオン公国の方々をお連れいたしました」

そこは自国の国力がどれほどであるか、顕される絶好の場。国家という集合体は威信にかけて相手国の外交官や大使、皇太子や国王を招く。会議室は贅という贅が尽くされ、まるで中世のフランス王朝を彷彿とさせる作りだった。皇族や貴族は盛大なパーティーや贅を尽くした生活をする。本来であれば、そうした貴族の行いはナシヨナリズムによって減少していき、中世のような豪華絢爛な様式からこじんまりとした様式に落ち着く。革命によって群衆が贅を尽くした貴族や王族を攻め立て、ギロチンや絞首刑にしていく様から、市民革命後の欧米貴族は落ち着いた質素な振る舞いを心掛けた。

そんな歴史を理解するヴァルターの目には、豪華絢爛な会議室と皇国の国家形態がどこか歪であることを悟った。

「本来であれば私が直接出向いて招待しなければならぬのだが、礼節を欠き申し訳ない。パーパルディア皇国、第一外務局のレミールと申します。今後は私や第一外務局が貴国との交渉に当たります」

初めてジオン公国とパーパルディア皇国が同等の立場であると、会談で語った瞬間だった。文明圏外国家に対して異例中の異例であるが、グラ・バルガス帝国の事やムーの事もあり、慣例など捨て、レミールは列強国と同じ扱いで話し始めた。

「はじめてお目にかかります。ジオン公国親衛隊名誉少将ヴァルター・ヘーベルです。少将は行政上の地位にあたりまして、私は根っからの政治家。公国議会の議員も兼任しています」

「そうでしたか、我が国は貴国とまだ正式な情報共有を行っていないので、少しお茶を飲みながら話しませんか？」

何時もなら、茶くみの役人に怒鳴り声をあげそうな彼女だが、落ち着いた様子で合図を出し、会議室のベランダのテラスへと案内する。ジオンの護衛兵や皇国近衛兵は蚊帳の外に置かれ、二人と数名の護衛はともにテラスの椅子へと座る。

「これは中々、香りが良いですね」

「これはクーズ領のサイマ茶。私の直轄領で取れた茶葉を使っています。一般市場だと、同じ重さで金以上の値打ちだとか」

「私が前に務めていた貿易会社で似た味の茶葉を取り扱ってました。」

また、この味を楽しめるとは……」

ヴァルターは感心して、ティーカップに注がれていたお茶を飲む。ティーカップは欧米式に似ているが、お茶自体は紅茶ではなく、緑茶。しかも香りとしては某ドリンクメーカーのお茶にそっくりなのだ。地球の日本から輸入したドリンクを販売していたヴァルターだったが、湯飲みではなくティーカップで飲むとは思わなかった。

とは言え、あの懐かしの緑茶は転移後、非常に高値で販売されている。似た味にしようとジオンやセツルメント国家連合の企業は復刻しようと頑張っているが、日本の飲料メーカーによって編み出された工業的な緑茶は、均等化された同じ味を出すことが出来ず、非常に難航していた。緑茶をティーカップで飲むことに驚いたが、それ以上に久々の味で涙腺が弾けそうになるヴァルターだった。

「どうかされました？」

「……我が国の公共放送で転移国家と報道していますが、憎いと思っていた相手がいなくなっただとたん、郷愁の思いがよぎる。嬉しいと同時に喪失感が何とも堪えませぬ」

これは故郷が無くならなければ、感じるこのできないだろう。思想や政党が変わり、革命によって国家が様変わりしても、民族や文化は残っているもの。しかし、転移という天変地異では、まるつきり違う。根絶やしにすることを除いてありえないことだ。

パーパルディア王国も嘗て他国に対して『殲滅戦』を宣言し、幾つかの民族を滅ぼしてきた。しかし、その名残や文化は逃れた難民が再び築き上げている場合もある。アルタラスやクーズ、現在属領としてある国家は恩赦や同胞を裏切った対価に生き永らえて、古来からの文化を継承する。あらゆる文化は戦争によって滅亡の危機に瀕するもの、何らかの形で生き残り、発展を遂げる。今のジオン公国とセツルメント国家連合は転移という現象の中、文化再建を目指し、様々な文化復刻事業に取り組んでいた。

「レミール局付は皇帝陛下とご結婚なさるとお聞きしていますが、お祝いの品をご用意しました」

― 国交樹立すれば、重ねてお祝いするつもりですが

と前置きをしつつ、護衛兵から近衛兵に渡され、簡易チェックを受けた品が通る。

「これは？」

「我が国の特産品の一部です。これはコロニー近辺の鉱山小惑星より取れたネックレスです。貴国の宝石商にも依頼して、あまり見ない色の宝石がついてます。……私の妻の方が良く知っているんですが、今は本国にいて聞けなかったもので」

アステロイドベルトにある鉱山地帯。そこには宇宙に漂流していた未知の物質が存在し、ジオンの研究機関に送られる。ウラン鉱床やヘリウム鉱床、チタンやアルミと言ったものが採掘出来、その中でもダイヤモンドやルビーと言った鉱物も多く採掘出来た。惑星にも未知の元素やエネルギー供給源となりうる物質も多くあり、一方アステロイドベルトでしかない物質もあった。

「鉱物の名前はカーメルタザイト。カーメルルビーと呼ばれるこの惑星でもあまりない宝石です。他にも日用品や食品も用意しています。」

「大切に使用してもらおう。だが、私がこれを付けてしまうと、皇国内では貴国の宝石類が飛ぶように売れるだろうな。」

青く輝きのある宝石は数多の女性を魅了するだろうとレミールは考える。一見して、暗い印象のある宝石だが、よく見れば引き寄せられるような鉱石であり、皇国において珍しく、もし他の者がもっていればどこで買ったかしつこく問いまわすことになるかもしれない。

そうした社交辞令のような世間話も終わり、ジオン公国とパーパルディア皇国の外交は始まった。会議室に戻った二者は高級マホガン材にも似た艶のある机に書類を眺めて会談を始めた。

「昨今の我が国と貴国では、先の戦闘に対して憂慮する声が上がっている。フェン軍祭での軍事行動やアルタラス王国侵攻の際、核攻撃に対してはセツルメント構成国からも非難が出ている。貴国との国交は急務であると認識しているが、まずは貴国の主張を聞かせてもらい

たい」

「フェン軍祭における主張は一切変わらない。フェン王国は皇国経済に対して度重なる攻撃をしてきた。軍祭において、かの国への攻撃は至って問題ではない。通達も行っていた。貴国は王国政府から何も連絡されていなかったのでは？…これまで国交がなかった現状、通報義務を主張されても困ります」

「第三外務局から使節団へ連絡することも可能でしょう。フェン軍祭に關しての軍事行動については……」

「第三外務局の非礼についてはお詫び申し上げなければなりません。軍事行動を第三国に通告することは義務ではございません。国家監査軍に關しては至らぬところですが、貴国の部隊に被害が出たことについてはフェン王国に対して……いえ、旧フェン王国でしょうか」

「国交正常化も急務だが、フェン軍祭とアルタラス王国については何としても、皇国が非常識であることを公式文書として作らねばならない。しかし、ヴァルターの意思に反して、中々傲慢な素振りを見せないレミールは丁寧な口調で畳みかける。

「アルタラス王国への大規模魔導兵器の使用は神聖ミリシアル帝国との間で結ばれた条約に則り行われています。王国の大規模戦闘に關して、我が国と貴国の戦いについては偶然の産物ということができま

す」

「偶然ではないでしょう。貴国の諜報部が我が軍の顧問団を認識していないはずがない。」

「貴国の軍がどのような軍服であるか、知りようがありません」

ヴァルターは痛いところを突かれたと、顎を摩る。本当なら頭を抱えるほどののだが、外交の場はポーカーと同じく、表情や仕草を限りなく抑えなければならぬ。政治家はポーカーフェイスに努めなければならぬのだ。だが、残念なことにレミールの主張は正しい。軍顧問団は正式には民間軍事会社の人間。例え、ジオン正規軍の将校が混ざっていても、軍服を着用することはなかったのだ。

セツルメント側はジオン公国に対して、不必要な戦争の誘発や軍備増強を制限させたかった。というのも、嘗ての大国のパワーゲームに

よって齎された代理戦争を想起させるためだ。軍事顧問など、米ソがやったゲリラの育成と何ら変わらない。ジオンは連邦残党の警戒も怠らないために、ややセツルメント側には軟化姿勢で行っていた。ただ、実際にそれをやれば、惑星における影響力の低下にもつながる。そのため、名目上は民間軍事会社による軍事顧問団として。裏ではギレンやキシリアの私的機関を通じて、資金提供を行い、近代兵器の配備や抑止力を育成すべく準備をしていたのだ。

もし仮にジオン軍顧問団がいたことを認め、核兵器を使ったとすれば問題になる。だが、認知しておらず、不幸な事故として取り扱った皇国にとって軍服を着ていない民間軍事会社は『傭兵』。国家の命令ではなく、名目上は企業戦略として自らの意思で顧問として金を貰っている。指導するのは治安維持の方法や戦術教育、銃器を使用した訓練。表向き、国家が関わっていないため、追及されても「企業がやったこと」と言い訳が出来る。そんな不正規の軍事作戦を教えるわけにもいかず、文化を知らないと思ったヴァルターは口をひらく。

「他国ではどうか知りませんが、ですが、我が国の軍人や民間人が死亡した事実は変えられません」

「ジオン国民やセツルメント民の犠牲が出たことにはお悔やみ申し上げる。また、今回の戦闘に関しては、貴国の部隊も相応の被害が出たと聞いている。それには皇帝陛下も憂慮しています。貴国との全面戦争はこの惑星全体を巻き込むもの。できれば、不慮の戦闘として幕引きを願いたいものです」

ヴァルターは内心、してやったりと思う。外交の場において、自ら幕引きを願うことは、こちらは譲歩できると言っているようなもの。アルタラス王国への非武装地帯設置やNGO団体の派遣など、進まない交渉にジオン外務省はいら立ちを隠せなかったが、エリートの中の第一外務局の後続の人間が譲歩すると言いつつ出たすれば、公国議会での株は上がり、政権内でも地位が向上するだろう。願ってもないチャンスだったが、レミールに近づく近衛兵が彼女に耳打ちをして、彼は悪い予感がした。

「……………うむ、よくやった。派遣部隊には勲章をやらねば

な。映像式の魔導通信機を持つてきてくれ」

一方、レミールは愛想笑いを浮かべながら、自分の計略がうまく言った事やこれからジオンの外交官が苦虫を噛み潰したような表情をうかべるとおもうと、気持ちを抑えきれず笑いそうになる。

皇国が譲歩するということは方に一つの確立。ジオンに対して譲歩することなどありえない。既にカードがある以上、使わない手はない。それに戦いで荒ぶる大陸軍がジオンやセツルメントの民間人に何をするか分らない。さつきと彼らに引き渡した方が安全であるし、その取引として「国交樹立」「フェンとアルタラス王国への無干渉」を引き出す。

別に難しいことではなく、子供のお使いみたいなもの。レミールなら朝飯前に行える政治判断だった。

「我が国はフェン王国に対して宣戦を布告したのはご存じですか？」

「……存じ上げています」

「貴国が何をしていたか、また信用ならない蛮族に多くの国民を観光させていると聞き及んでおりますが、間違いありませんか？」

「ええ、我が国とセツルメント連合の国民が観光していると聞いていますが」

「失礼ながら言わせてください。……貴国は馬鹿ですか？」

外交文書に記載する内容であるにも関わらず、まさかの馬鹿発言。もしかして某ゴスロリの亜神かもしれないが、おおよそ外交の場での発言とは思えなかった。

「今何と？」

まさかの台詞に驚きの声を上げるヴァルターであったが、レミールは溜息をつく。

「正直申し上げて文明圏外国家と外交するというのはどういう事か、分っていないようですね。文明圏外国家は基本的に野蛮国家であることを深く理解しなければなりません」

「レミール局付は他国に野蛮であると外交の場でも仰っているのか？」

「ええ、時と場合によりますが。これは貴国が文明国であるにも関わらず、杜撰な外交を行っているから申します。そもそも野蛮という表現がお好みでないのなら、人治国家と申しましょう」

レミールは椅子から立ち上がり、装飾で飾り付けられた地球儀を触る。この惑星の模型であるため、正確には『地球儀』ではないが、金細工の施されたそれは非常に高価であることがうかがえる。そして、パーパルディア皇国の領土は真つ赤に塗られ、非常に目立っていた。「我が国は正確に申し上げて、法によって統治されている。末端では違法行為が目立ちますが、些細な事。皇帝を中心とする法の元、皇国全土は平穩に保たれているのです。」

レミールは球体を手で回し、第三文明圏でも圏外と呼ばれる地域を指さした。

「この地域は未だに法律というものを分っていない。国家という存在自体理解できず、領主が立法し、国王がそれに追隨する。また、魔法文明がありながら、未だに妄信的なまでに神々を信仰し、こともあるうに生贄という野蛮な手段で仕えようとする。」

「私から見ると、貴国も人治国家です」

皇帝という国家元首がおり、憲法もなければ皇帝の権力を制限する法律はない。ジオンからすれば、暴力的な侵略や拡大政策を続けるパーパルディア皇国こそ野蛮である。

「それはどうだろうな？貴国はまるで文化や習慣など、気にも留めずに国民を旅行させるのか？我が国は違う。彼らの法は地域によって違い、無法者が牛耳る地域もある。そんな国家に国民を向かわせるなど、命が幾つあっても足りん。皇国は文明の覇者となっている以上、我々はこの文明化を成し遂げなければならない。例え、彼らが抗おうとも！貴国はそれが分かるはずだ。この大陸で文明化に成功した以上、それを普及させ拡大させなければならぬ責任がある！」

「まるで『白人の責務』ですな……」

代表的なのが、ランヤード・キプリングというイギリスの作家の詩集だろう。『ジャングル・ブック』など有名な童話やノーベル文学賞も受賞した。また、詩人でもある彼は『White Man's Burden』という詩を1899年に書いている。それには、白人の責務である奴隷の使役、国土の拡大について努力すべしという、一種の激励文に近いものである。だが、それは帝国主義として各地に植民地を作り、拡大を続けた大英帝国の思想そのものであり、白人至上主義の概念そのものと言える詩だった。

あらゆる土地に住む、黄色人種や黒色人種を蔑み、隷属させる。世界の頂点にあった白色人種が支配者であるとともに、被支配者人種であるアジア・アフリカ民は自分たちの文明の庇護を受ける栄光を授かったというような、覇権国家の驕りのような詩だ。ヴァルターも白人種の一人だが、宇宙世紀に入って半世紀が経過した宇宙移民者スペースノイドにそうした世迷い事を理解することはない。理解したとしても、彼がジオン公国人である以上、覇者が支配する論理を受け入れるはずがない。レミールはヴァルターの台詞に非難の感情が出ていることは理解していた。だが、文明が発達する以上、犠牲が伴うことは誰の目から見ても明らか。レミールは皇族という支配者層の中でも、更に支配する地位に上り詰めている。そのため、ヴァルターの気持ちを幾分か察することはできた。

「責務……確かに皇国やムー、神聖ミリシアル帝国が国土の拡大や文明の発展のために、犠牲を強いることは仕方のない事。だが、貴国は国民の犠牲を理由に戦争をするつもりだったのでは？」

「そんなことはない！我が国は決して！」

レミールの言葉に激しく否定したヴァルターだったが、近衛兵が持ってきた機材が設置されると、レミールはやや怪訝そうな顔をすする。彼女の横には一辺1mの立方体の水晶があり、その加工技術は非常に優れており、ヴァルターの近くにいた秘書官や護衛兵は目を丸くする。

「これは、音声通信だけでなく、映像付き魔導通信も行える。我が国と神聖ミリシアル帝国……そしてムー位しか使っていない。貴国も使

用しているのかな。さて……」

議官らしき魔術師が機器の調整を行い、やがて映像が映された。

「こ、これは……」

それは見るからに貧しい環境に置かれている宇宙移民者の映像だった。だが、それはコロニーの映像ではなく、風景で言えば、まるでフェンの街並みにそっくりだった。金属製の檻に入れられたジオン公国民やセツルメントの国民が動物のように入れられ、適切な医療もされないまま拘束されている光景。それは保護とは名ばかりの収容所にも見え、ヴァルターの表情は怒りの色に染まる。

「彼らは観光客だ。拘束している理由がない！」

「占領下での外国人は信用できない。身分証明は彼らの国で発行されたものだが、照会もままならない。既に何名かはわが軍の兵士に危害を加えたために、更に警戒度の高い施設に連行済みだ。」

「彼らの身分は私や公国が保証する」

「残念ながら、貴国の保証は安全保障の観点から難しいと外務局から聞いている。話によれば、貴国は宣戦布告と同時期に地球連邦軍に攻撃を仕掛けた。……正直、我が国から見て非常にモラルがない。布告なしの奇襲攻撃は戦争の慣わしから言って、少々反則でしょう」

レミールの言うことには一理ある。

残念ながら、宣戦布告と同時の攻撃。若しくは、宣戦無き戦争行為はタブーとされる。多くの場合は宣戦布告文書やそれに類似する最後通告書類が送られるか、大使が国家の代理としてこれを提出する。現代では国際連合における戦争行為は実質上禁じられ、宣戦なき戦争を禁止していた。それはルネサンス期における欧米でも同じであり、憲章による明文化がなくとも慣習法としてのルールがある。ナチス・ドイツや大日本帝国が行った奇襲攻撃は非難されることが屢々あるが、これまでの慣習に従えばルール違反であり、反則だった。

更にスパイ容疑で拘束されている観光客であるが、パーパルディア皇国内における囚人に対する環境と比べれば、非常にマシな環境と言える。犯罪者への人権が存在しない皇国は、彼らへの待遇は一段と厳しい。ジオンからすれば、これは非人道的行為と言わざるを得ないだ

ろう。ヴァルターは反論しようと口を開く。

「しかし！」

「いいえ、こればかりは許される事ではありません。安全上拘束しなければなりません。しかし、貴国が誠意を示すのであれば、こちらも迅速な対応と交渉に応じましょう」

レミールは内心、笑いを堪えるのに必死だった。国力の差がある両国において、自分が先制点を取れる事は何より嬉しいことだった。皇国指導部はこの決定に懐疑的な考えを抱くだろうが、それでも今後の皇国の将来を考えれば、列強の仲間入りを果たし、神聖ミリシアル帝国に喧嘩を売れるような同盟国を増やしておきたい。

将来的にも良い選択であったと、後世に評価されるものだったとレミールは考えた。ヴァルターは慌てふためく様子で視線を動かす仕草をする。明らかに動揺し、顎を摩る動作をする。レミールはそれが焦っている彼のサインであると見えていた。まるで、ポーカーでブタの手札になり、金を巻き上げられる素人の顔。対してレミールは政争の毎日を送る皇族。そもそも出自が違うのだ。

「誠意とはなんでしよう……」

「我が国は貴国と争うことはありません。我が国が求めることは国交樹立、そしてフエンとアルタラス王国への不干渉。その他、我が国の影響下にある保護国への不干渉」

更なる要求をすれば、相手は従うだろう。アルタラス王国に駐留するジオン軍の撤退も求めれば、一時的に応じる。だが、応じたとして禍根は残る。過度な要求は相手に敵愾心を齎し、最後には全面戦争になる恐れもある。それ故に、多くを求めず、最低レベルを求めるのが自然だった。彼女の計画通りに事が進む筈だったが、魔導通信の水晶に接続されたスピーカーから破裂音が響く。

（おい、何をやって……がっ！）

（味方に何やって！……敵っ！）

（お前、撮影機^{カメラ}を止めるな！）

シユカカカ！と独特な破裂音とスピーカーから響く大陸軍兵士の

叫び声。轟音や怒声が響き渡る中、魔導通信機材に異常があったのか、歪み撮影機が何かの拍子で倒れてしまう。そして移り込んだのは、大陸軍の軍服を着た兵士が同じ大陸軍兵を撃ち殺している映像。だが、兵士の手にはジオン製のサイレンサー付きスマルツァ・MP7短機関銃が握られていた。映像は途中で途切れてしまい、その後の様子は分らなかった。

「これは一体……」

あまりの予想外の出来事にレミールは声を震わせ動揺する。一方、先程まで動揺していたヴァルターの表情は嘲笑と言わんばかりの表情をしていた。ただ、彼の護衛兵は事前に知らされず、レミール同様驚いていたが、彼女以上に取り乱すことは無い。

「レミール局付は先程なんて仰ってましたか……」

とぼけたようにヴァルターは頭を指先で叩き、あたかも考えたような振りさえ見せた。

「そう……『モラルがない』でしたかな？ 私に言わせれば、自分達を棚に上げて良く言うよな」

「何いー」

もとより激情家であるレミールは激昂するが、女性の近衛兵に体で止められ、瞬時に政治家としての冷静さを取り戻す。しかし、ヴァルターは止まらずにしゃべり続けた。

「貴国はモラルと申したが、はつきり言ってわが国民やセツルメント国民を人質に取るような真似はモラルが低いと言っている。誰に入れ知恵されたかは聞きませんが、手段が少々姑息で卑怯だ」

「貴様らも卑怯だろう！」

レミールは外交という場を忘れ、罵るような口調で言い返す。

「卑怯とは誰が決めた。それは負けた側が言うセリフではなく、敗者が優れた働きをしたから得られる蔑みの言葉だ。確かに宣戦布告が外務省のアホ官僚が忖度して、わざと遅らせた。それに連邦の官僚共はあの混乱でまともに機能していないから、宣戦通告は指導部には届かなかっただろうな。そもそも、宣戦布告とは国家間の宣言に対して

行われるもの。我々がやったのは、ルールに則り国家擬きに対してしっかりと宣言しただけに過ぎない」

鼻で笑うようにヴァルターは秘書官から機密文書保管用のアタッシューケースを受け取り、大陸共通語で書かれた文章と分かりやすく皇国の公文書と同じ書式のものだった。ただ、筒状のケースから丸まった羊皮紙の書類を彼女の目の前に置く。

「先に言っておきますが、数か月前に我々は貴国のエストシラントの軍港から出るフェン王国派遣艦隊の動向を既に掴んでいました。あと蛇足ですが、我が国の巡洋艦が衛星軌道上で超高々度で飛行する超音速偵察機を捕捉しましたね。なんと、神聖ミリシアル帝国の機体でしたよ。彼の国は我々の想像以上にテクノロジーが発達している」

レミールの理解しがたい言葉。「衛星軌道上」「超高々度」「超音速偵察機」

それは難解な古代魔法の魔術式より難解な未知の言葉を発しているのではと啞然としていた。

「何を……」

「ああ、そうでしたね。この書類の意味を理解できないようなのでご説明させていただきます。U^{宇宙世紀}.C.0080、1月30日。こちらでは中央歴1640年ですかね。一週間前に発送された書類ですのでかいつまんで説明いたしましょうか？」

「ああ」

「ジオン公国は宇宙世紀0080、1月30日において公国議会満場一致で宣戦布告の法案が通過。公王陛下と総帥閣下が開戦文書に署名いたしました。こちらがその宣戦布告文書になります」

「……えっ……あっ……」

最早、何が起きているのか理解できず、彼女の後ろにあつた椅子を近衛兵が持つてきて、力なくレミールが凭れ掛かるさまは何とも惨めな姿だった。その光景にヴァルターはニコリともせず、書類を彼女の近くに置いていく。

「我が国は貴国へ宣戦を布告する。レミール局付ご自身で皇帝陛下に

お渡しください。あと、我が国が戦線に至った経緯については総帥の演説でお聞きになるでしょう。私はあなたの身を案じて、『馬鹿』なことをしないように老婆心ながらお伝えします。」

レミールがその言葉を理解する間もなく、ヴァルターは他を引き連れて、会談を後にする。レミールに渡された書類には、公国からの宣戦布告文書と公王から皇帝へ送られた覚書が含まれていた。

会談は国交樹立ではなく、宣戦布告となり、世界にその覚書の一部や総帥の演説が生放送で報道される。世界はその事実には驚愕した。

第二十九話 フェン王国上陸戦（2）

フェン王国西部、ニシノミヤコに近い浜辺では非常に長い沈黙が続いていた。上陸部隊への誤射を懸念して、軍艦からのロケット攻撃や艦砲射撃は行われていない。また、フェン王国軍からの砲撃もなく、気味の悪い沈黙が支配する。

「上陸開始！」

「ちんたらしていると、ぶった切るぞ！」

小隊の専任下士官の叫びが響き、皇国大陸軍の将兵は海水でブーツが鉛のように重くなっても、上陸艇に照準を合わせた砲弾が落ちるのではと思い、急いで浜辺へと上陸する。本来ならもつと速やかな上陸が出来ただろう。だが、地竜の上陸を阻むように、巨大な金属製のバリケードが設置され、周囲には木の杭や金属製のコイルのようなものが至る所に張り巡らされていた。

既に第一陣の半数以上が大した被害もなく、無傷のまま上陸している。上空を飛行するワイバーンロードの竜騎士でさえ、その様子を見るために高度を下げ、地上の敵陣地を見る。だが、それをよく見れば、人がいるように見せかけた偽陣地。藁の人形を立てて巧妙に偽装した張りぼてだった。

「なんだこれ、奴ら水際防衛で来ると思ったのに」

パーパルディア皇国大陸軍第七歩兵連隊所属のアルマ軍曹は不自然な程沈黙する敵陣地に対して、不安を募らせていた。港町へ上陸を果たした部隊と挟撃し、残存兵力をなぎ倒すという作戦は敵陣地の無反応という出迎えて出鼻を挫かれていた。配下の部下の尻を叩くように、罵声を浴びせて前進させる。国家監査軍よりも戦い慣れしていない分、予想外の行動に関しては柔軟に対応できない。敵は得意の近接戦で打って出るか、散発的な銃撃で足止めを食らわせ、浜辺を砲撃されると思っていた。しかし、アルマを含めた上陸部隊第一陣は勇み

足で来た分拍子抜けといったところだった。

「軍曹、本隊は集結地点につき次第、敵の最後の砲撃地点へと移動。これを殲滅する。君の分隊が先行しろ」

「了解、小隊長……くそつたれ」

小声で聞こえないよう悪態をつく。大陸軍は表向き最精鋭の部隊だが、実情はチンピラと同質と断言している。最早、皇国の歴史の栄華を飾った大陸軍はほぼなくなり、大半がチンピラまがいの雑兵だった。

「ステファン、レミー、ジュノが先頭！あの似非陣地を突破するぞ！」

先遣隊として向かわされた一行は慎重に前進し、ややせり上がった丘の上に設置された陣地にたどり着く。そこまでの道程に敵の攻撃を全く受けずに到着してからは、既に放棄されたエリアなのかと疑い始めていた。

「ここから本隊が良く見える。こりや観測陣地だな」

高地を取れば、敵を一掃できる。砲撃によって雨のように砲弾を降らせれば、確実に敵は壊滅する。だが、アルマのいる場所はどう見ても観測陣地ではなく、歩兵陣地。しかも、使った形跡が全くなかったのだ。

「どういうことだ、壕を掘っておきながら糞すら見当たらねえ」

「適当に服着せた案山子しかないでっせ、軍曹！」

塹壕という存在は、大陸軍の作戦として砲撃から身を守るために必要とされる。戦列歩兵を想起させる彼らの装備にはスコップもあり、敵の砲撃の際は穴を掘って身を潜めるといふ訓練もあった。だが、浜辺からの絶好の観測陣地を誰も使っていない事に驚きを隠せなかった。

「ここら辺のフェンの野郎どもはどこに行っちゃったんだ？」

「砲撃で大方逃げたんじゃ？」

アルマの頭の中に、敵が敗走したという情報が頭を過る。だが、浜辺を見ていた時、空に何かが浮いているのをはつきりとらえていた。彼は下士官しか支給されない望遠鏡を覗き、空中に浮く何らかの浮遊

物を目撃する。それはまるで空飛ぶ三角形。協会の尖塔ともいうべき代物で、動物でない動きを行っていた。浜辺一帯を旋回しているようで、アルマはその意図に気が付いた。

「くそーやつらーあれで観測してやがった」

アルマの気づくのが早ければもっと、少ない犠牲で済んだのかもしれない。彼の見た物体、ジオン公国製コーダ社ZDR-02『サイファー』は浜辺にいた大部隊の様子を事細かに収集すると、フェン王国内陸部へと姿を消す。旧曆に生まれたドローンと呼ばれる小型無人機であり、観測照準射撃とデータリンク可能な高精度なセンサーを搭載する。彼らが見たサイファーと同機種のドローンは他の上陸地点を観測し、虎視眈々と機会をうかがっていたのだ。

「通信兵！これは敵の作戦だ！急いで、集結地点から……………」

アルマの意思は本隊に届くことは無かった。彼らが搜索していた陣地にあつた爆薬が爆発し、彼らは爆風で吹き飛ばされ、運が悪かったものは四肢を吹き飛ばされ、痛みにもがき苦しむ運命となった。

だが、彼らを襲った攻撃以上に激しいものが降り注いだ。

サイファーの観測データは防衛司令部と砲兵司令部へダイレクトに伝わる。砲兵部隊は十キロ近く離れた場所で観測データを受け取り、砲撃の合図を出した。

「M453対人榴弾装填！」

「薬装よし！」

「目標、浜辺に展開中の敵部隊」

「諸元4563・3379！」

「復唱4563・3379！」

「発射用意……………てえ！」

巧妙に隠された砲兵陣地には105mm榴弾砲が15門設置され、掘り下げられて作られた砲兵陣地は巧妙な偽装を施されており、十五の

火砲から発射された砲弾は真つすぐ先遣隊へ進んでいった。
そして着弾。

頭上めがけて爆発させたそれらの砲弾は、対人榴弾と名付けられた時限信管タイプの特製弾だった。爆煙によつて周囲は灰色の煙に包まれ、嗅いだことのない煙に周囲のワイバーンロードは嫌がる素振りを見せる。

「敵の砲撃か……やはり待ち伏せ！ムーの奴ら！こんなところに自国の兵器を使うなんて」

文明圏外国家という外国に位置するフェン王国。騎士は自領土に土足で踏み込みこんだような、怒りの感情をあらわにする。彼にしてみれば、自分の庭を荒らしているに等しい。パーパルディア皇国が支配しようとする地域にムーが本格的な介入に乗り出したのだと勘違いした。竜騎士は被害状況を司令部に伝えるべく高度を下げる。だが、そこには信じられない光景が広がっていた。

「……魔術師！医療魔術師はいないか！」

「腕……俺の腕……」

「誰か！目が！前が見えない！」

歩兵部隊の半数が砲火に晒され、浜辺は死屍累々の殺戮場となった。あまりにも被害が大きく、竜騎士は目を背けたくなるものの、浜辺一面に見える散らばった何らかの矢らしき物体を捉えた。魔法で自分の視力を強化し、望遠鏡のようにその光景を見る。

「小型の矢がばら撒かれている?！」

砲弾は着弾すると貫通する徹甲弾。そして着弾と同時に爆発し、周囲に破片を飛び散らせる榴弾に分けられる。他にも様々な物が開発され焼夷榴弾や装弾筒付翼安定徹甲弾と言った主力戦車やザクマシンガンに使われる弾もある。だが、竜騎士が見たそれは、フレシエツト弾。爆発と共に無数の3cm程度の矢を一気に発射する、系譜としてはどう弾を辿っており、野砲の散弾銃バージョン、ともいえる。もろに直撃を受けた歩兵は体中にフレシエツトを浴び、全身に釘を打たれたような、無残な姿を晒していた。

「フェンの蛮族共が！皆殺しにしてやる！」

「後退自体が危険だとわからんのか！竜母リユクシオンへ通達。通信装備を充実させた偵察部隊を先行させ、敵砲撃陣地を特定。ロケットは使わず、ある程度精度の見込める砲艦を海岸に近づけよ。敵の砲陣地制圧後は第二上陸地点と第三上陸地点へ分割上陸を行え」

「ワイバーンロードの爆撃隊は？」

「第一目標は敵対空陣地！第二目標は敵砲兵陣地とする。竜騎士達にとって悪夢だろうが、ここで兵器評価するのも一興だ」

シウスの判断はすぐさま、魔導通信によつて竜母の航空戦闘指揮所へと送られる。対地攻撃隊の出撃が始まった。

「滑走カタパルト準備よし！」

「ワイバーンロードの準備よし、こちら発射管制室。発艦後は速やかに第二弾の発艦準備にかかれ。」

ワイバーンロードは通常のワイバーンと比べて体格は大きく、更に離陸するための滑走路は従来と比べて長くしなければならぬ。竜母もそれに合わせるべく巨大化したが、ワイバーンロードの離陸失敗は後を絶たなかった。そのため、嘗てパールネウス共和国が建国当初使用していた投石器やボウガンの要領から、ミスリル銀を編み込んだ弦によつてはじき出されるカタパルトを設置。ワイバーンロードはそれによつて滑走距離を縮めることに成功した。ワイバーンロードは地上での訓練を重ね、竜母に搭載可能な攻撃機へと進化を遂げた。そのため、艦艇の形は飛行甲板の上に特大のボウガンが設置されているように見える事だろう。

「ヴィオニエー離陸、テイクオフ発射！」

発射管制官の指示により、発射されるワイバーンロード。スキージャンプ台のような形の飛行甲板から飛び出す姿勢は正にスキージャンパーの如く、前傾姿勢で滑空する。やがて重力に引つ張られ、海面に叩き付けられようとするが、巨大な翼を広げ、羽ばたかせながら大海の空を舞い、ワイバーン種の頂点に立つ竜が咆哮する。

「ヴィオニエーより、スピリチュ3。敵対空陣地の位置を知らせよ」

(オマールポイント^{上陸地点}より南西5kmに敵対空陣地を捕捉。高度500m下では敵の砲火に晒される！既に分遣隊の半分が殺られた。一時帰艦する！)

先行した対空用装備に身を固めたスピリチュ3と呼ばれるワイバーンロードの竜騎士。ムーや魔導銃の銃弾から身を守るよう、鋼鉄と急所を守る魔導装甲の複合鎧を着た彼は疲労困憊のワイバーンロード攻撃隊を護衛し、帰艦の途につく。

「ヴァオニエー了解！ヴァオニエ全騎……奴らに特製の酒をお見舞いしてやるぞ」

対地攻撃装備のヴァオニエと呼ばれる、かつてパールネウス共和国時代の將軍から名を取った飛行隊は、報告を受けた対空陣地を発見。照準を合わせた。

「混ぜ酒を飲ませてやれ。攻撃開始！投下！」

8機の編隊で飛行するワイバーンロード一頭につき、十数個の瓶が投下される。総数は百以上あろうか。フェン王国軍の兵士はワイバーンロードの糞か竜騎士の落し物かと思っただろう。だが、地面に衝突し、中の液体が漏れ出すと一気に気化。その落着から数秒経った時、魔導式発火装置が起動する。帰化した可燃性ガスは発火装置によって一気に燃焼し、周囲の物を燃やし尽くしていく。それは砲兵陣地の砲兵や対空砲、準備していた弾薬庫に至るまで。熱によって爆発した対空砲弾は周囲の砲兵に直撃し、死という恐怖を感じさせないほど一瞬のうちに木っ端微塵となった。

パーパルディア皇国に対抗すべく、各国属領レジスタンスはムーやジオンの諜報員から有効性のある武器を使用した。暴徒がよく用いる火炎瓶といった武器。パーパルディア皇国もその有効性に気が付いてしまった。その名は「火炎瓶^{モトロフ・カクテル}」、アルコール度数の高い酒を使うことにより、浴びせた対象を燃やして攻撃する有効性は自分達の血で贖われ、自国の技術を駆使して何倍もの威力を持つ焼夷弾が完成した。

アルコール飲料よりも、更に揮発性や燃焼速度の速い可燃性液体を使用することでその効果を高め、着陸と同時に作動する着発信管もセットで組み込まれている。ムーでは着陸前に点火されるものが開発段階だが、魔導発火装置は不発率が非常に低いため、ここまでの被害は出ないだろう。

帝国主義に目覚め、拡大を続けるパーパルディア皇国は遂にムー以上の航空攻撃力を持つことが出来た。

「司令部へ連絡！ 酒屋は大繁盛！ 至急、地上軍へも酒を送られたし！」

対空陣地を壊滅できたことは皇国大陸軍にとって何よりの朗報だった。ムーの航空機の無い状態では、地上軍は裸に等しい。上空からの火炎瓶を遮る術はなく、唯一の対抗手段も射程外の上空から爆撃を受けて破壊された。

「全軍所管の奮闘を期待する！ 竜騎士の爆撃を持って敵の退路を断ち、根絶やしにしろ！」

後方を炎で遮られた事でフェン王国軍第一防衛線部隊は混乱。この機に乗じて、大陸軍の騎兵部隊が一点突破を仕掛け、防衛線をこじ開けた。戦意が高く、近接戦が得意と知られるフェン王国軍の兵士達は、「最早、生き残る術は無し」と悟り、第一防衛線を任されていた西部方面団の特設砲兵隊並びに歩兵隊およそ、500名が玉砕。

半分はジオンとムー、フェンの軍上層の意思が浸透していた事で西部方面団の7割が生き残った。玉砕した部隊はライフル銃に銃剣を取り付け、あたかも大日本帝国陸軍の突撃の如く、名誉の死を誇りとして、我先にと敵陣に殺到した。砲兵隊のフレシエット砲弾の攻撃と500名の玉砕突撃。この攻防戦の勝者であるパーパルディア皇国大陸軍も無傷ではなかった。先遣隊として上陸した大隊の壊滅とワイバーンロードの二個隊の全滅。

フェン王国上陸作戦の冒頭は辛勝という結果になった。

「キクチヨ中尉、現在のニシノミヤコ避難作戦はどうなっているのだ？」

「あんたらの観光客が俺たちも戦わせろと騒いでいるし、セツルメントは泣きわめくしで散々なんですわ」

その山賊にしか見えないその男。元々、学識がないために戦士から除外され、農民として暮らしていた。剣は振るうが、戦士として与えられたのは古い大太剣。実戦向きでないそれは、明らかに山賊にちかい風貌の彼に相応しいと、侮蔑の意味で戦士団から与えられていた。

だが、どうだろう。彼の腕つぶしは非常に強く、それこそ我流で大木をぶった斬る姿は少将でさえ、映画のセットかと疑った程だ。しかも、目の付け所が良く、フェンの中でも貧民層にあった部隊を鍛え上げる程であり、今回彼の部隊は避難民誘導に充てられていた。

「ジオンの避難民の中には予備役や退役の兵も交じっているのだろう。中尉、もし手が足りなければ私の名前を出して、君の隊に組み込みたまえ。君の部隊に担当官を付けよう。」

別の士官をワンクッションにして情報を共有する。この場合、『こんな者を司令部に』と言っていたフェン將軍たちもいたことから、スバルタのような戦士だけの国家というのはビッター少将から見ると、やはり異なっていた。

観光的資源の観点から、マスコミや宇宙航空産業各分野の資本は惑星の旅行ブームを演出するために、動画サイトで有名になったフェン王国を持ち上げた。曰く『古の戦士の国』、『侍の国』、『武士道精神』というものだ。確かに、それらはフェン王国の美点であり、無常観を元にした戦士としての思想信条は称賛に値する。

だが、一方で『戦士』になり切れない場合はどうなるのか？

既にフェンという国家は海洋民族的な側面を持っていながらも、拡大をすることは無く、むしろ鎖国に近い政策を行ってきた。国民統制のために全ての者が剣を持てるよう訓練し、有事には王国が一つになって戦わねばならないと思想教育を受ける。そうした国民皆兵、一億玉砕と表現するように民族主義・社会主義的な側面を持つ国家体制となった。

更に、戦士には戦いに優れた肉体や洞察力、戦術的思考と言ったものが求められるが、商人の気質があるものは基本的に、経済を回すための戦士の下での地位に立つ。衣食住は全て戦士の預かりとなり、地位はそこまで高くない。

そして、農民と言った『雑兵』の地位に近い者達は王国を統治するための食糧生産者としてこき使われる。

士農工商と言った日本の身分制度に近いフエンの身分制度が存在し、全てがすべて戦士であるが、戦士としての質が乏しい者は下層階級として位置づけられる。ビッター少将の目の前にいるキクチヨ中尉は農民の生まれでありながら、ジオン式練兵方と呼ばれる特務機関の小隊長として、カンベ將軍の目に留まり、志願する農民や町民などを組織した「奇兵隊」を組織した。未だに下層階級の人間に対して侮蔑の表情を浮かべる上層階級の戦士達だが、ビッター少将とカンベ將軍はこの混乱の中でもあっけらかんとしているキクチヨを見て笑顔になっていた。

「そうだろうな、キクチヨ！ジオンの自動荷車へ順番に乗せるんだぞ。暴れるようなものがいれば、外人であろうとも構わん、拘束しておけ」
「合点でさ、大將！」

まだ、戦術行動が出来る程の戦闘訓練は受けさせていない。だが、奇兵隊は指揮官の命令に絶対であるという、約束が作られている。単独行動や功を焦った先走り行為は法度と、口を酸っぱくしてカンベ將軍は訓練中に何度も叫んでいた。

礼儀を知らないキクチヨは崩れた敬礼をすると、すぐに奇兵隊へと戻っていく。周囲の戦士長から將軍として任命された者や古参の身分に分け隔てなく軍務を行う事から、抵抗を抱いている將軍も多い。空気は自然と悪くなっていったが、意外にもビッター少将とカンベ將軍の表情は明るかった。

「面白い部下をお持ちですな」

「彼は以前、私が小旅行で国内を巡邏していた時に、ついて回ってきた者なのです」

村から抜け出した農民。貧困に耐えられずに街に来ては力仕事や

日当をやって生活する傍ら、殆どを博打にあてて、犯罪行為に手を出す。カンベ將軍は一人流浪する戦士「浪人」……『浪士』として各地を転々としている時にであった。途中、何度か顔を突き合わせたものの「弟子にしてください」と言う事が出来ず、危うく斬られるのではと帯刀していたために、柄を取ろうとした瞬間もあったという。

「私は様々な貧困に喘いだ村々を見て参りました。そして、戦士をやめて盗賊に成り下がった者たちが略奪や凌辱を繰り返すところに遭遇し、私ともに彼も戦ったのです」

「それで彼を部下に……」

「まだ、農民癖が抜け切れていないが、奇兵隊を編成する上ではこれでもいいのですよ」

ただ、戦士が頭ごなしに指示しても、農民や町民はいう事を聞かない。逆に農民上がりのキクチョが言えば、すんなりと言うことを聞くし、ワンクツション置いた指導は非常に効果を発揮した。

「今後は階級社会がなくなり、全ての国民は自分の枷から解放され、自由に職を選ぶことが出来る。フェンの未来は明るいですな」

ビッター少将は晴れ晴れとした顔でいうものの、カンベ將軍は表情を曇らせる。

「それはどうでしょうな。戦士として生きてきた者達にとって、自由にしろといってもそれしか知り得ないものばかりだ」

「ゆっくりと変革が必要なのです」

「だが、そのあとは？ 全ての国民は数多ある仕事を選び、また職が自分に合うかどうかわからないのに決めなければならない。生きにくい時代になるのでしょうか」

身分があれば、身分相応の仕事をしなくてはならないし、やりたい仕事も出来ない。身分さえなくなれば、様々な仕事にチャレンジできる、だが、チャレンジしてもそれに適性がなかったら？

生まれ持って定められた者であれば家族のサポートや親類の援助、その他の支援によって行うことも可能だろう。だが、数多ある仕事を選んでも、何のサポートも得られず、そのままフラフラと彷徨う者や何もしないような輩が現れる。

職業の自由にすることで、国民に対して道を指し示すものがなく、混乱する事になるだろう。これまでであった王国軍とされてきたのは、戦士階級でも上位の者が戦士長と名乗り、王に忠誠を誓っていたが、今後は王国軍をジオンやムーの軍制に則って近代化する。この変化を良しとせず、反抗するものも出てくるだろう。

そうした反抗心のある者に対して向かわせるのは、嘗て農民や町民だったフェン王国軍の兵士達。今後、身分制度を無くしたことによる弊害が起き、火種となるのは目に見えていた。

「して、ビッター少将殿、ここを如何様に守られるおつもりか？」

「このニシノミヤコは元々城塞都市。ある程度穴をふさげば何とか耐えられます。わが軍のMSも使いますが、敵を蹴散らすには少々……」

ビッター少将は言いよどむ。何故なら、ビッター少将指揮下のフェン王国救援部隊は軌道上からの連邦軍艦隊の攻撃により、FLV降下艇2基が墜落、もう2基が中破したためにMSの多くを喪失してしまっていた。これはパーパルディア皇国に通じる連邦残党の者が手配したのであろう。

ビッター少将の手駒にあるのは、機動軽歩兵2個大隊、マゼラアタック戦車を要する機甲小隊。作業用MSとしてザクII J型とザクI型及びザクII F後期型が一機ずつ存在した。MSは合計で3機。あまりにも手駒は少なく、ドムやゲルググと言った次期主力モデルは被弾したFLVの損害をもろに受けたため、整備部隊が昼夜問わず働き尽くめで作業に当たっている。もしかすると、ザクの余剰部品で作られた、両肩にザクの棘やシールドを備え付けたドム改修型が出てくるかもしれない。

「ほう、あの穴をふさぐと？」

「ザクというあの巨人の系譜をたどれば工業機械……何と言いますか、鉾山労働のために作られた機械なのですよ」

「なるほど、あの腕ならば大岩も持ち上げそうだな」

カンベ将軍はひげを撫で上げ、頷いた。それなら確かに敵の攻撃か

のや弱き者を守るといった精神は称賛に値する。ただし、軍務や国家戦略など組織としてみれば、常軌を逸しているだろう。

組織としての判断は時として非情になりえる。多を救うために、少を犠牲にするのは仕方のない事とされるのが世の常。だが、時に非情の度が過ぎれば、その行動は許容を越えうるものだ。

「やはり野戦士の部隊は使えませんな」

「普通の鍛錬をしていれば、あんな貧村など捨ておくと判断も出来るだろうに」

「いやはや農村の下級戦士など所詮は雑兵に過ぎません」

過剰な軍事国家化と優秀な戦士を登用するフェン王国の身分体制。武を強調させ過ぎた事で優秀な戦死は権威に溺れ、美味な果実が時を経て腐っていくように、彼らもまた腐敗した官僚として組織を悪くさせていた。

圧倒的な敵戦力を惜しとどめるには、多少の犠牲がつきものである、末端を捨て駒にする戦術を取らざるを得ない王国の土地状況は、必然的に「戦いは非常である。故に戦士も非情であり、末端は犠牲になるべき」と王国上層部の思考は固定化され、やがて身分的なものと変質した。

「畜生、御上は何も分かってねえ」

「あの周辺は穀倉地帯、もし焦土戦術なんてやられてみる。もう、俺達には打つ手がない」

フェン王国はクワ・トイネ公国のような食料自給率200%越えという異常な環境下ではないため、食糧事情は江戸時代の日本とそう変わらない。産業も農業と僅かばかりの加工業のみ。いわば、国家を支えるのは一次産業の農業と言える。フェン王国西部は穀倉地帯が多く、ワイバーンロードから魔導枯れ葉剤など撒かれれば終わり。最早、為す術はない。食糧事情の悪化に伴い暴動が多発。今後はジオンに食料までも頼ることになり、更に保護国化が進むだろう。

他国に干渉された国家など良い試しはない。多くは戦乱や革命が多発し、王家が倒れる可能性すらある。少を犠牲にして、多を生き残らせる。指導者が居れば、フェン王国の再建は可能。大半の国民が飢

餓に苦しんでも、逆境を生き抜いた王国民は強靱な者として選抜される。

まるで獅子が弱い子供を崖から蹴落とし、逆境を生き抜いたものを後継者とする弱肉強食の世界。それを合理的に追い求めたのがフェン王国と言う社会だった。

「……この混乱に乗じて上層部を攻撃するか？」

「ジオン公国も我々が立ち上がる事を認めるだろう。何ていったって彼らも上層部地球に搾取されてきたのだから！」

フェン王国の社会構造はこの危機的状況に対して、外側にも内側にも変化の兆しを見せ始める。それが何を意味するか。近代化として受け入れるべきか、それとも同盟国の混乱として断固たる意志政府支持を示すか。それはギレンの手にかかっていた。

ギレン総帥は今回の作戦に対して大きなりソースを割くことが出来なかった。パーパルディア皇国攻略作戦に多くの資源と人員を必要とするため、主力兵器であるMSを多く割かなかった。ただし、今回戦うためにMS以上の数を有する既存兵器を投入した。

「P05の村落が敵の騎馬兵により攻撃を受けていると、フェン王国より報告が下っています！」

「フェン上層部は望み薄か？」

「やはり、防衛線維持のために兵を割く余裕はないのでしょうか」

そこは鋼鉄の装甲に守られた居城。複合装甲に守られ、堅牢な合金のそれらは惑星の兵器のほとんどを跳ね返す性能を持つ。MSと比べると狭く、モニター画面が視界の大部分を占める事を考えれば、彼らの居城の空間はやはり狭い。だが、最新式赤外線カメラとサーマルセンサー、光増幅型暗視装置、ミノフスキー粒子状況下で考慮されたレーザー通信リンクシステムと衛星通信式兵器リンクシステム。小队規模であれば、同一目標群に雨あられと砲弾を降らせることが可能な指揮システムを持ち、優秀なFCS発射管制システムを使用する。

戦闘機のように、パイロットの力量を重点に置いているMSと違って、彼らの戦術は隠蔽と数によって圧倒する。視界が狭い代わりに隠

蔽性に優れ、17 m強の巨体と比べれば、その姿は小さい。MSと戦えば、彼らの存在は酷く小さく見える。だが、歩兵にしてみれば、その鋼鉄製の60トンの巨体は地竜の如くインパクトを与えるだろう。「と言うことは俺たち^{戦車隊}の出番と言う事か」

デメジエール・ソンネン中佐は痙攣発作を止める錠剤を噛み、通信兵の部下へ微笑みかけた。

白髪交じりの壮年に入りかけの男が微笑みかけても、その男の妻でなければ気持ち悪がられるだけであろう。だが、会話の相手である部下は満面の笑みで答えた。彼らは互いがそういう関係ではないが、同じ境遇であった部下の男は、同意と言う意味を込めて拳を突き合わせる。

通信兵の彼以外にも運転手はもちろん、砲手も同じだろう。

開戦直前、ソンネン少佐はMS適性試験に落ち、戦争での活躍出来ないことから自堕落な生活を送っていた。しかし、彼はそこから一念発起し、新たな兵器開発計画に身を投じる。地球連邦陸軍最大の陸上戦艦「ビッグトレー級」の排除を考え、大口径陸上艦艇に対抗する兵器を開発。30 cm砲を装備したYMT-05『ヒルドルブ』はMSのようなマニピレーターシステムとモノアイ、巨大な戦車としてモビルタンクと呼称。ザクとキャタピラーを組み合わせた有り合わせの工作作業機ではない。戦闘を目的とした兵器を開発した。

しかし、ヒルドルブ計画は失敗に終わる。鹵獲されたザク六機や61式戦車との戦いはなく、YMT05は後世に名を遺すような、良い評価が挙げられなかった試作機となった。

もしかすれば、ヒルドルブの存在があったからこそ、ソンネンは自分の能力を存分に発揮して死ぬことが出来た。彼に機会がなかったら、そのまま酒や薬などに溺れ、軍籍をはく奪され、何処かの貧民街で野垂れ死んでいるかもしれない。

だが彼はそこで終わらなかった。歩兵随伴車両として中途半端な運用体制になった戦車を何としても地上軍として復帰させる。半ば、妬げに近い意地だったが、これに賛同する者が多かった。

何しろ、MSは宇宙的機動兵器。ミノフスキー粒子下や宇宙と言った距離感のつかめない環境下において、ここまで機動性に長けた兵器はない。地上においても、その機動力と攻撃性は優れているが、歴史は非常に短い。一方、既存兵器の存在がまだ健在であり、ジオン内部でも戦車による攻撃の重要性を説く者はかなりいた。そして、アルタラス王国戦では大陸軍砲兵隊により、関節への一斉砲撃が行われ、MSが中破もしくは大破してしまった。この攻撃において対歩兵戦闘の重要性と随伴車両と戦車に対する有効性を再確認。歩兵支援車両としてしか考えられなかった突撃機動軍は早急な対策が求められた。そのため、戦車部隊を主力として構成された装甲師団の創設。戦える主力戦車開発計画。ソンネン中佐はその中心となった。

まだ、ソンネン中佐はまだまだな部類なのかもしれない。中には機甲科から歩兵としての道を見いだせずに除隊した者。MS適性試験に合格できずに自決を図った者など多い。こうした戦車兵経験者やMS適性試験に落ちたものの、軍務に支障のない兵士らはこの機甲師団のプロジェクトに参画した。

だが、問題があった。

その主役たる戦車マゼラアタックにあつた。

「中佐、よくこの戦車が採用されましたね。先祖返りに近いのでは？」
「そうでもない。この戦車はミノフスキー粒子下でも正常に作動する。連邦の61式より上手く動くさ」

「確かに、奴らの戦車より使えるだろうさ」

彼らが戦車兵として指導を受けた戦車は61式戦車。それこそ、ムンゾ自治共和国に採用されたM1戦車と呼ばれる、劣化版に等しいものに乗る前の古参兵は連邦軍採用戦車を使用していた。それだけに、このマゼラアタックI戦車は古参兵から見れば、「お前、何考えてるの？」と言えるものだった。

マゼラアタックI戦車は車高が高く、一時的に航空機として使用可能なVTOL戦車という、新たな戦車戦術を導入した兵器である。ジオン公国技術者の多くは噴射推進エンジンの仕組みや整備を理解しており、マゼラアタック戦車は戦場でも使用可能であると「理論上」の

観点から採用された。

コロニーの荒れた地でも対応できた兵器である。そこで良いアイデアが出たのだから問題ない。

こうした憶測が公国軍内部で考えられ、正式採用にいたり、それまでであった120mm滑腔砲を搭載するM1主力戦車から、MSと歩兵を支援する火力支援を軸にしたマゼラアタック戦車へ置き換わった。パレードでマゼラアタック戦車の行進と合図と同時に、VTOL出發を行い、編隊飛行する砲塔の姿はジオン国民にとって新たな戦車戦闘を匂わせ、最新兵器MSと共にジオンの栄光に喜んだ……

ロウリア王国でのMS運用において、地上戦での不具合の発生。トラルブルがたびたび報告され、ロウリア王国を平定したのちに、ジオン総軍司令部技術本部はクワ・トイネ公国の砂漠地帯や岩石地帯、クワ・トイネ公国にあった森林地帯や沼地、ロウリアのジャングル地帯などで実地調査を行った。

殆どの歩兵兵器や通信機器、車両は問題なく、MSにおいてはある程度の粉塵防御を行った改修機『J型』『F1』『F2』へ繋がる改修案を提出。そして最後にモビルタンクのヒルドルブについては、30cm砲による艦砲射撃と中距離先頭におけるザクマシンガンの掃射など、性能としては非常に良いものの、大型実体滑腔弾による攻撃の必要性やビーム兵器を用いる論調もあることから、採用製造は行われなかった。

だが、唯一、多くの部隊に展開されている『マゼラアタック戦車』は想像よりも悪い結果になった。

まず粉塵によりジェット推進装置が詰まる。射出後のマゼラベースに着車出来ない。車高が高いがゆえに仮想敵であるムーの野砲に捕捉され、破壊されてしまう。空中機動を行う砲塔は発射すると、射撃装置がいかれてしまう。飛行バランスが取れずに墜落すると言った具合に駄目っ作機の烙印を押されることとなる。

開発した技術者を擁護すれば、マゼラアタック戦車は所謂「主力戦車」ではない。戦車と戦車で戦うことを想定しておらず、専らMSや

歩兵の火力支援としての役割を与えたのである。そのため、155mmという大きめの滑腔砲を装備しており、支援車両としては優れているが、砲塔はなぜ飛ぶように作ったのかと指摘されても反論はできそうにない。

このため、デメジエール・ソンネン中佐は先の戦車の改良版のM3（Ⅲ号）戦車を設計始めていた。そう、前のM1戦車の後継。つまり、マゼラアタック戦車の弟戦車とも呼べるかもしれない。

砲塔には155mm滑腔砲が一門あり、戦術によってザクⅡマシンガンと共通の弾薬を使用できるコンバーションキットや、35mm四連装機関砲など砲撃支援から対MS戦闘、対空攻撃に至るまで仕様変更可能であり、汎用性は非常に優れていた。地球連邦軍の61式戦車と比べれば、対戦車戦闘には劣るが、総合戦闘能力は主力戦車、自走高射砲、自走榴弾砲と変更可能であり、人的資源が限られるジオンには無くてはならない存在。作戦によっては戦場で換装可能であり、切り替え可能な戦力は融通が利き、転換訓練も少ない期間で行える。

こうした、何にでもなれる兵器の存在を作り上げた男は部下に告げる。

「諸君、この戦車の名前は『Tiger』と名付けられた。残念ながら三番目の戦車なため、Ⅲ号戦車と呼ばれるが、誰も三番手^{サード}だとは言わせない。何故ならこの戦車は幾世幾十と作られた戦車の中で最も優秀な兵器だからだ。この戦車はジオンの名と共に永遠に語り継がれることになる！」

HT-03A「^{ティ}Tigar^{ガー}」

訓練用の61式戦車や自治共和国時のM1戦車。そして、新規設計されたマゼラアタック戦車。61式を合わせれば四番目になるが、それは非公式のもの。ムンゾ自治共和国に設置された武装警察装備として非公式に導入された61式戦車は、表向き存在しない。トラクターという暗号名は戦車の隠語としてジオン兵によく使われるほどである。

地球上の戦車のどれを集めてみても、この戦車には到底及ばない。正に第二次大戦の伝説的戦車「ティガー重戦車」の名前を貰った風体。亡霊とさえ言ってもいい。状況によっては地球連邦軍最新型戦車『61式5型』と呼ばれた戦車さえも、数値的には上回る。惑星内において、この戦車に正面から挑むことは自殺行為に等しい。

陸の王者に天敵は存在しない。

しいて言えば、MSすらも圧倒できる代物であった。

「Meine Kameraden, Weitermarsch!」

ディーゼル八気筒エンジンとリチウムイオン電池を併用したハイブリッド戦車。エレカーが主力であるが、メンテナンス性や馬力を考えれば、エネルギー効率の低い電動自動車を軍用として使うには都合が悪い。巨大エンジンに火が点ると、無限軌道は唸りを挙げて動き出した。

支援車両や装甲人員輸送車などを含めれば40両ほどの大部隊は敵の進撃を惜しとどめるべく、その進路上にある貧相な村々を一つずつ開放する。

ジエール・ソンネン中佐率いる特務機甲大隊「Erwinabt」は快進撃を続けるパーパルディア皇国へ横やりを入れるべく、反撃を開始。地竜やワイバーンロードの攻撃を介さない部隊の登場によって、進軍は一時的に停止する。ニシノミヤコの民間人撤退作戦はこの反撃により、ほぼ完了することになる。